㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第213集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第40集

多比良追部野遺跡

第1分冊《本文編》

1997

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第213集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第40集

多比良追部野遺跡

第1分冊《本文編》

1997

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

多比良追部野遺跡全景（C区～F区）南より

多比良追部野遺跡全景（C区～F区）北より

土鈴出土状況（H－37号住《B区》）

H－140号住（D区）

序

関越自動車道の群馬県藤岡ジャンクションから西に分かれ、長野県佐久市を経由し、更埴市で中央道長野線に接続する上信越自動車道は、本県を横断して首都圏と長野県を直結する高速道路であり、平成７年には全線の供用が開始されました。この道路建設事業にともない昭和63年度より平成４年度まで、群馬県埋蔵文化財調査事業団によって組織的な発掘調査が行われ、平成元年度より８年計画で実施してきた調査報告書刊行事業も、平成７年度で所定の全冊が刊行される運びとなりました。

このうち、多野郡吉井町大字多比良に所在する多比良追部野遺跡の発掘調査は、平成元年から同３年まで群馬県埋蔵文化財調査事業団によって行われ、縄文時代早期の竪穴住居から中世の土坑に至る時代の遺構・遺物が発掘され、とくに、128軒に達する古墳時代後期（６世紀後半～７世紀前半）～奈良・平安時代の大規模な集落跡の調査結果は、古代からの歴史遺産を数多く伝える吉井町周辺地域の歴史を知る上で、より多くの知見を付け加えることが出来ました。

今回の報告書刊行に至るまでには、日本道路公団東京第二建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、沿線教育委員会、地元関係者の皆様から、格別の御理解と御協力を賜りました。銘記して、心から感謝申し上げます。本報告書が、広く基本的な歴史資料として活用されることを念願し、報告書の序といたします。

平成９年３月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　小寺弘之

抄　　録

ふりがな	たいらおっぺのいせき
書名	多比良追部野遺跡
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第213号 関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第40集
編集者名	石守　晃
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784番地―2
主要執筆者	石守　晃（縄文時代以降）・関口博幸（旧石器）
発行年月日	平成9年3月25日
所収遺跡	多比良追部野遺跡
調査原因	関越自動車道上越線（上信越自動車道）建設工事
所在地	群馬県多野郡吉井町大字多比良字東沢・諏訪山・追部野・壱ツ家・藤ノ木地内
所在位置	北緯　36°14′24″　　東経　189°0′21″
調査期間	平成元年（1989年）1月25日～平成3年（1991年）3月16日
コード	市町村コード　10363　　事業団コード　10005-00288
調査成果	本遺跡に於いては竪穴住居199軒、掘立柱建物26棟、溝19条以上、土坑162基以上、ピット多数、井戸遺構2基、集石遺構4、道路遺構1条、畠跡6面、水田面2面、溜池1カ所、竪穴状遺構4基、炭窯2基、埋没谷3カ所、風倒木44基などを調査した。各時代の概況は下表の通り。

旧石器時代	姶良・丹沢火山灰堆積層の下層より石器422点、礫3点出土。10ブロックを把握。
縄文時代	竪穴住居は早期末と前期のもの各1軒や、中期のものを含む土坑5基程、2カ所の遺物包含層を調査。多数の撚糸文土器片を含む早期～後期の土器片及び石器を出土した。
弥生時代～古墳時代中期	竪穴住居は赤井戸式の弥生土器を伴う5軒を含む7軒を調査。赤井戸式・樽式の弥生土片及び石田川式のものを含む古式土師器片等出土。
古墳時代後期	6世紀後半期から7世紀前半期を中心とする竪穴住居107軒、6世紀の溝1条の他、土坑5基程を調査。多数の土師器・須恵器、鉄製品、砥石やこも編み石等の石製品を出土。遺構では1辺8～10m超級の竪穴住居6軒や同時併存する複数のカマドを持つ竪穴住居6軒、遺物では7世紀前半期と推定される須恵製土鈴等が特記される。
奈良時代～平安時代	奈良時代の竪穴住居21軒、平安時代の竪穴住居23軒を調査。26棟ある掘立柱建物の殆どがこの時期のものと判断される。この他、As―B下の水田面1面、溝1条、土坑10基程、井戸1基を調査し、多数の須恵器・土師器等を出土した。
中世以降	調査された溝・土坑・集石遺構の多くや畠遺構は中世以降の所産であり、この他火葬土坑・井戸各2基、水田1面、炭窯2基などを調査。特筆すべき遺構に室町時代のものと推定される道路遺構1条や江戸時代築造の溜池が挙げられる。

例　言

1　本書は関越自動車道上越線（上信越道）建設に伴う、「多比良追部野遺跡（たいらおっぺのいせき）」の発掘調査報告書で、[1)]本文編、[2)]遺物一覧編、[3)]写真図版編の３分冊からなるものの本文編である。

2　多比良追部野遺跡は多野郡吉井町大字多比良字東沢・諏訪山・追部野・壱ツ家・藤ノ木地内に所在し、遺跡名は大字である多比良と小字のうち追部野を採用して命名している。

3　本遺跡の概要は抄録の通り。

4　本遺跡の発掘調査は日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」とする）に委託して実施されたものである。

5　本遺跡の発掘調査は事業団の関越自動車道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台所在、平成５年３月閉所）が担当し、整理事業は事務局本部（勢多郡北橘村下箱田所在）にて実施した。

6　調査期間及びスタッフ（右肩の数字は該当年度を示す）

(1)　発掘調査

調査期間　昭和63年１月１日 ～ 平成３年３月31日

調査担当　田口正美[63~2]、綿貫鋭二郎[63]、亀山幸弘[63~2]、石守 晃[1~2]、若林正人[2]、

事　　務　**事務局本部**　常務理事 白石保三郎[63]、邊見長雄[1~2]、事務局長 松本浩一[63~2]、

管理部長 田口紀雄[63~2]、調査研究部長 上原啓巳[63]、神保侑史[1~2]

上越線調査事務所　所長 井上 信[63]、高橋一夫[1~2]、次長 徳江 紀[63~2]、調査第２課長 鬼形芳夫[63~2]、

総務課　黒澤重樹[63]、宮川初太郎[1~2]、國定 均[63~1]、笠原秀樹[2]／山崎郁夫[1~2]、神戸市四郎[1~2]、町田康子[1~2]、本城美樹[1]、調査課 後閑玲子[1~2]、松井留男[1~2]、

発掘補助（順不同）　**〔昭和63年度（安坪遺跡班）〕**秋山いね子、浅香重作、浅香春三、新井英子、新井菊江、新井重雄、新井初五郎、新井種次、新井ミツ、新井美代、安藤セン、安藤ハツ江、飯塚静枝、飯塚なつ、飯塚豊作、飯塚りき、飯間操、井田松寿、井上静江、井野口久代、岩井英治、岩井幸雄、岩井みち子、上原一夫、浦辺重代、江原秋江、江原恵子、太田順子、小笠原直子、小柏きみ子、岡村クワ、笠原正五、清塚恵美子、大野かつ子、加藤あい子、金田エミ子、金田和子、金田キヨ子、金田匡子、金田すみ子、加部幸子、神山青示、川崎昇、工藤博子、久保みち子、熊井戸和子、熊崎ミト、黒澤利次、黒澤富久子、黒澤広、小林和子、小林忠男、小林延子、斎藤隆男、斎藤はつ江、斎藤リン、斎藤吉江、酒井八郎、左堀利政、設楽う志、設楽とめ、設楽弘子、設楽まつ江、設楽光子、篠崎かほる、篠原京子、清水きよ子、鈴木金雄、鈴木ふじ江、鈴木みや、砂賀守一、関口治郎、関口とみ子、関口正雄、清水道雄、神宮儀一、神宮政江、高木甚三郎、高木とり、谷川あさ子、高間幸子、高間まき、高橋栄子、高橋加市、田中富子、田村梅之祐、田村かめ、田村ふみ、登坂正、長岡あや子、長岡三郎、中野セツ、中野初次郎、中野利一、中野利太郎、中村奈津、中村保男、西カメ子、野口栄一、野口勝巳、野口たかね、野口初枝、橋本〆雄、福田亥十郎、福田一男、布瀬川千代松、布瀬川なつ子、保坂佳津美、堀口巖、真下昭、真下ちゑ、真下泰、増田道雄、牧野マサ江、松井晶子、松井昭子、松井シズ江、松井留男、松井洋子、丸澤君枝、宮崎ふく、宮田本春、宮前美恵子、森千代子、森平文男、森平鈴子、山崎章子、山崎和子、山崎丈輝、山崎甲子郎、山崎米子、山田けさ子、山田茂樹、山田タケ、山田長治、吉田篤、吉田さく、渡辺一女、渡辺武江

〔平成元・２年度〕新井浅男[1~2]、新井正枝[1~2]、飯島桃枝[1]、飯島実[1]、飯塚和好[1]、飯塚きよ[2]、池田平[1~2]、井上静江[1~2]、伊部嘉江[1~2]、岩佐つる江[1~2]、岩佐みさ江[1~2]、岩田ハヤ子[1~2]、植原武治[1~2]、江原恵子[1]、大岡文子[1~2]、岡田あい子[1~2]、折茂陽子[1]、柿田昭江[1~2]、金井 清[1~2]、金井シマ[1~2]、金井崇浩[1]、神山青示[1~2]、神部

等[1~2]、木村玉江[1~2]、久保てる子[2]、小池勝美[1~2]、小泉 貢[1]、小金沢金次[1~2]、後閑節子[1]、後藤恵子[1]、小林延子[1~2]、斉藤 明[1~2]、斉藤テル子[1]、宍戸昭次[1~2]、篠崎千代守[1~2]、島田儀一郎[1~2]、清水喜一郎[1~2]、清水弘経[1~2]、神宮ウメ[1~2]、神宮好子[1~2]、須藤富江[1~2]、砂賀守一[1~2]、関口福二[1~2]、関口正雄[1~2]、高橋栄子[1~2]、田中 實[1~2]、田端良作[1~2]、田村寛次郎[1]、田村春久[1~2]、田口匡四郎[1~2]、登坂 正[1~2]、富沢忠如[1~2]、富田トミ子[1]、中野大祐[1~2]、西山政雄[1~2]、萩原つぎ江[1~2]、細井ミキ[1~2]、堀越道男[1~2]、堀越律子[1~2]、真下昭[1]、町田英子[1~2]、町田玲子[1]、丸茂広政[1]、三木清子[1~2]、三木さと[1~2]、三木トミ子[1~2]、三木幹枝[1~2]、宮沢 耕[1]、宮田キク[1~2]、宮田清吉[1~2]、宮田正代[1~2]、宮前実[1~2]、望月登代子[1~2]、森政子[1]、横尾さか江[1~2]、吉井喜美代[1]、吉井ヨネ[1~2]、吉田一作[1~2]、吉田キクノ[1~2]、吉田澄江[1~2]、吉田道子[1~2]、若林シゲ[1~2]、綿貫君子[1]

(2) 整理事業

整理期間　平成6年2月1日～平成8年3月31日

整理担当　関口博幸5、石守 晃6～7

事　　務　**事務局本部**　常務理事 中村英一[5~7]、事務局長 近藤 功[5~6]、原田恒弘[7]、管理部長 佐藤勉[5]、蜂巣実[6~8]、調査研究部長 神保侑史[5~7]、総務課長 斉藤俊一[5~6]、小渕 淳[7]、調査研究第2課長 岸田治男[7]、総務課 國定 均[5~6]、笠原秀樹[5~6]、須田朋子[5~6]、吉田有光[6]、柳岡良宏[5~6]、船津茂[5]、高橋定義[5~6]／松下 登[5]、大澤友治[5~6]／吉田恵子[5~7]、松井美智代[5~7]、塩浦ひろみ[5~6]、角田みづほ[5]、内山佳子[6~7]、星野美智子[6~7]、羽鳥京子[6~7]、菅原淑子[7]／調査研究部 今井もと子[5~7]

上越線調査事務所　所長　吉田 肇[5]、庶務調査課長　依田治雄[5]、庶務課　吉田有光[5]、

整理補助 中野秀子[5]、霜田恵子[5]、関 正江[5]、田中精子[5]、小林恵美子[5]、高柳哲子[5]、金子加代[5]、大澤亜矢子[5]、高橋真樹子[6~7]、篠原富子[6~7]、南雲富子[6]、小久保ヒロミ[6]、岸トキ子[7]、本多琴恵[7]、半澤（貝瀬）真弓[6~7]、伊藤幸代[6~7]、大勝桂子[6~7]

写 真 室　佐藤元彦[6~7]

保存処理　関　邦一[5~7]／土橋まり子[5~7]／小材浩一[5~7]、小沼恵子[6~7]、

機械実測　長沼久美子[6~7]、伊藤淳子[6~7]、岩渕節子[6~7]、千代谷和子[6]、萩原光枝[6~7]、立川千栄子[6~7]、南雲富子[7]

(3) 報告書刊行

編集担当　石守　晃[8]

事　　務　常務理事 菅野　清[8]、事務局長 原田恒弘[8]、管理部長 蜂巣 実[8]、調査研究第1部長 赤山容造[8]、調査研究第2部長 神保侑史[8]、調査研究第1課長 平野進一[8]、総務課長 小渕 淳[8]、経理係長 國定 均[8]、経理係 吉田有光[8]、柳岡良宏[8]、調査研究部 今井もと子[8]

整理補助　篠原富子[8]、岸トキ子[8]、茂木良子[8]、本多琴恵[8]、萩原由美子[8]、伊藤幸代[8]、大勝桂子[8]

7　発掘調査・整理業務に於いては、下記のように自然科学分析や測量等の業務を委託した。

① 土壌分析（テフラ同定、花粉・プラントオパール分析等）・・・パリノ・サーヴェイ株式会社

② 出土炭化材同定及び須恵器甑の胎土分析・・・株式会社パレオ・ラボ

③ 一部を除く石器・石製品・礫の石材鑑定・・・陣内主一 氏

④ 遺構測量と遺構・遺物図のトレース業務の多く・・・株式会社測研

⑤ 航空写真撮影・・・K＆Mエンタプライズ株式会社

8　本書の執筆は以下の通り。

① 第3章第18節については関口博幸が行い、その一部について桜井美枝が加筆した。

② 第4章第1～5節は委託した自然科学分析結果の鑑定報告書を転載した。

③ 第5章第2節は大木紳一郎が執筆した。

④ 上記①・②・③以外については石守晃が行った。

9　出土遺物・遺構実測図・遺構写真は群馬県埋蔵文化財調査センター内に保管され、委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団管理部普及資料課によって管理される。

10　発掘調査及び整理事業の実施に当たっては下記の機関・個人の協力を賜った。記して謝意を表します。

吉井町教育委員会、陣内主一、緑川 順、川原 隆、茂木由行、高橋 茂、服部敬史、若林 晃　（敬称略）

凡　　例

1　遺構実測図の縮尺は下記を基準とするが、溝・耕作遺構等は各図を参照されたい。

住居跡・風倒木　1／80　　カマド　1／40　　土坑　1／60　全体図1／750（K区のみ1／600）

2　遺構図の断面基準線は海抜標高を示し、方位記号は座標軸（国家座標第Ⅳ系）を示す。

3　遺物実測図の縮尺は下記を基準としている。

坏・高坏・蓋等及び拓本　1／4　　小型甕　1／4または1／8　　甕・甑・羽釜等　1／8

土錘・土鈴　1／2　　石鏃　4／5　　磨石・敲石・こも編み石　1／5　　旧石器　1／2

旧石器の敲石　1／3　　左記以外の石器・石製品　1／4　　臼玉・紡錘車　1／2

銅銭　1／2　　鉄製品　1／4

4　図中のスクリーントーン（網掛け）は下記のことを示す。

- 遺構位置・土器煤付着範囲
- 遺構範囲
- 遺構内焼土範囲
- 遺構内粘土範囲
- 遺構内灰範囲・土器摺面
- 遺構内硬化面
- 遺構内炭範囲・土器墨書
- 土器黒色処理（吸炭）
- 土器黒色処理（漆）
- 灰粘土器
- 陶器
- セクションスライス範囲

5　土層の色調、粒径については一部「農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用しているが、多くは調査担当個々の概念に基づいている。

6　本書に於けるテフラ（火山噴出物）の略号は以下の通り。

As—A：浅間軽石／天明3年（1783）　　As—BP：浅間板鼻褐色軽石群／1.7～2.1万年前

As—B：浅間テフラ／天仁元年（1108）　　AT：姶良Tn火山灰／2.1～2.5万年前

As—YP：浅間板鼻黄色軽石／1.3～1.4万年前

7　本書中の時期表記は直列的な認識に基づく時間軸（1 2 3 4）ではなく、重なりを有する時間軸（1 2 3 4）認識に基づくものである。また、7世紀後半期については当該地域の地域性に鑑み、本文中に於いては古墳時代後期の中に含めた。

目　　次

序
抄録
例言
凡例
目次
遺構別所載頁・図・図版一覧
地区別遺構一覧
遺物一覧編・写真図版編目次

第１章　発掘調査に至る経過及び発掘調査経過……1
　第１節　発掘調査に至る経過……1
　第２節　発掘調査の方法と経過……3
第２章　遺跡をとりまく環境……7
　第１節　地理的・地質的環境……7
　第２節　歴史的環境……9
　第３節　基本土層……12
第３章　発見された遺構と遺物……13
　第１節　Ｂ区の概要……13
　第２節　Ｂ区遺構と遺物……15
　第３節　Ｃ区の概要……265
　第４節　Ｃ区の遺構と遺物……266
　第５節　Ｄ区の概要……335
　第６節　Ｄ区の遺構と遺物……336
　第７節　Ｅ区の概要……453
　第８節　Ｅ区の遺構と遺物……454
　第９節　Ｆ区の概要……553
　第10節　Ｆ区南部の調査……554
　第11節　Ｆ区の遺構と遺物……557
　第12節　Ｇ区の概要……679
　第13節　Ｇ区の北部の試掘調査……680
　第14節　Ｇ区の遺構と遺物……682
　第15節　Ｈ区の調査……691
　第16節　Ｋ区の概要……693
　第17節　Ｋ区の遺構と遺物……693
　第18節　旧石器……722
第４章　科学的分析……823
　第１節　土壌分析―１……823
　第２節　土壌分析―２……829
　第３節　土壌分析―３……836
　第４節　炭化材樹種同定……842
　第５節　胎土分析……848
　第６節　出土人骨……851
第５章　まとめ……854
　第１節　竪穴住居及び掘立柱建物について……854
　第２節　弥生後期～古墳時代初頭の土器について……859
　第３節　土鈴について……861
　第４節　おわりに……862

遺構別所載頁・図・図版一覧

遺構番号	本文編	図番号	遺物一覧編	図版番号
J-1号竪穴住居	557頁～	510～512	249頁～	215・222
J-2号竪穴住居	561頁	513～514	250頁	215・222
Y-1号竪穴住居	561頁～	515～517	250頁～	213・223
Y-2号竪穴住居	564頁	518～519	252頁～	213・223～・250
Y-3号竪穴住居	567頁～	520～523	253頁～	214・224～・250
Y-4号竪穴住居	571頁～	524～527	257頁～	214・227～・250
Y-5号竪穴住居	575頁～	528～530	260頁～	214～・228・229
H－1号住居	15頁～	10～12	1頁～	5・50
H－2号住居	17頁～	13～14	2頁	5・50
H－3号住居	19頁～	15～16	2頁～	6・50・51・89
H－4号住居	22頁～	17～19	4頁～	6・51・89
H－5号住居	25頁～	20～21	5頁～	6・7・52・89
H－6号住居	27頁～	22～24	6頁～	7・52・89
H－7号住居	30頁～	25～26	7頁～	7・52・53・89
H－8号住居	32頁～	27～28	8頁～	8・53・89
H－9号住居	34頁～	29～30	10頁～	8・53・54・90
H－10号住居	36頁	31～32	11頁～	8・54・89
H－11号住居	37頁～	33～34	12頁～	9・54
H－12号住居	39頁	35	13頁	9・10・54
H－13号住居	40頁～	36～37	13頁～	10・54・55・90
H－14号住居	42頁～	38～40	14頁～	10・55・90
H－15号住居	45頁～	41	16頁	10・11・55
H－16号住居	47頁	42～43	16頁～	11・55
H－17号住居	48頁～	44～45	17頁～	11・55・56
H－18号住居	50頁～	46～47	18頁	11・56・90
H－19号住居	52頁～	48～49	19頁～	11～・56・57・90
H－20号住居	267頁	251～252	128頁	100・116・122
H－21号住居	53頁～	50～53	21頁～	12・52・57・90
H－22号住居	57頁	54	22頁～	12・13・57・90
H－23号住居	58頁～	55～56	23頁	13・14・57・90
H－24号住居	61頁	57～58	23頁～	14・57
H－25号住居	62頁～	59～60	24頁～	14・15・57・58・90
H－26号住居	64頁～	61～62	25頁	15・58
H－27号住居	66頁～	63～66	25頁～	15・16・58・59・91
H－28号住居	72頁～	67～70	27頁～	16・59・91
H－29号住居	74頁～	71～72	30頁～	16・17・59・60・91
H－30号住居	268頁～	253～254	129頁	100～・116・122
H－31号住居	77頁～	73～74	31頁～	17・60・91
H－32号住居	78頁～	75～77	32頁～	18・60・61・91
H－33号住居	80頁～	78～79	33頁～	18・61
H－34号住居	82頁～	80～81	34頁～	18・19・61・62
H－35号住居	84頁～	82～83	36頁	19・62
H－36号住居	693頁～	633	313頁	256・262・266
H－37号住居	87頁～	84～85	36頁	19・62
H－38号住居	89頁～	86～88	37頁～	19～・62～・91～
H－39号住居	92頁～	89～90	38頁～	20・63・91・92
H－40号住居	93頁～	91	39頁～	20・91
H－41号住居	94頁～	92～93	40頁～	20・63・92
H－42号住居	97頁～	94～95	41頁	21・63・64
H－43号住居	99頁～	96～97	42頁	21・64・92
H－44号住居	695頁～	634～635	313頁～	256～・262・266
H－45号住居	101頁～	99～102	43頁～	21・64・65・92
H－46号住居	104頁～	103～105	44頁～	22・65・92
H－47号住居	108頁～	106～109	45頁～	22・65・66・67・92
H－48号住居	697頁～	636～638	314頁～	258・262・266
H－49号住居	700頁～	639～641	315頁～	257～・262～・266
H－50号住居	702頁～	642	317頁	258・263
H－51号住居	114頁～	110～114	48頁～	23・67・92

遺構番号	本文編	図番号	遺物一覧編	図版番号
H－52号住居	117頁～	115～117	50頁～	23・24・68・92・93
H－53号住居	703頁～	643	317頁	258・263・266
H－54号住居	120頁～	118～119	52頁	24・68・93
H－55号住居	121頁～	120～121	52頁～	24・68
H－56号住居	124頁～	122～124	53頁～	24・25・68・69・93
H－57号住居	126頁～	125～127	56頁～	25・69・70・93
H－58号住居	130頁～	128～130	57頁～	25・26・70・71・93
H－59号住居	133頁～	131～132	59頁～	26・71
H－60号住居	135頁～	133～134	60頁	27・71・93
H－61号住居	136頁～	135	60頁～	27・72
H－62号住居	138頁	136	61頁	27・72
H－63号住居	138頁～	137～138	61頁～	27・72・93
H－64号住居	140頁～	139	62頁～	27・72
H－65号住居	141頁～	140～142	63頁～	27・28・72・93・94
H－66号住居	145頁～	143～145	65頁～	28・72・73・74・94
H－67号住居	705頁～	644～645	317頁～	259・263・266
H－68号住居	706頁～	646～647	318頁～	259・263・266
H－69号住居	708頁～	648～649	319頁～	259・263・266
H－70号住居	711頁	650	321頁	260・263
H－71号住居	712頁	651	321頁	260・263
H－72号住居	713頁～	652～654	321頁～	260・263～・266
H－73号住居	714頁～	655	323頁	260～・264～・266
H－74号住居	717頁～	656～657	324頁	261・265・266
H－75号住居	148頁～	146～148	67頁～	28・74・94
H－76号住居	150頁～	149～150	69頁	29・74
H－77号住居	152頁～	151～153	69頁～	29・74・75・94
H－78号住居	155頁～	154～157	71頁～	29・30・75・94
H－79号住居	155頁～	154～157	72頁～	29・30・75・94
H－80号住居	160頁～	158～160	73頁～	30・75・76・94・95
H－81号住居	164頁～	161～163	74頁～	30・31・76・95
H－82号住居	166頁～	164	75頁	31・76
H－83号住居	168頁～	165～167	76頁～	31・76・77・95
H－84号住居	170頁～	168～169	78頁～	31・32・77・95
H－85号住居	172頁～	170～173	79頁～	32・77・78・95
H－86号住居	177頁～	174～175	82頁	32・78・96
H－87号住居	179頁～	176～177	83頁	33・78・96
H－88号住居	181頁～	178～179	83頁～	33・78・96
H－89号住居	182頁～	180～181	84頁	33・79・96
H－90号住居	130頁～	128～130	84頁～	25・96
H－91号住居	184頁～	182	85頁	34・79
H－92号住居	186頁～	184	85頁	34・79
H－93号住居	188頁～	185～188	86頁～	34・35・79・80・96
H－94号住居	191頁～	189～190	88頁～	36・80・96
H－95号住居	194頁～	191～194	89頁～	36・37・80・96
H－96号住居	197頁～	195～197	90頁～	37・38・81・97
H－97号住居	201頁～	198～201	92頁～	38・81・97
H－98号住居	204頁～	202～204	93頁～	38・39・82・97
H－99号住居	207頁～	205～207	94頁～	39・82・83・97
H-100号住居	271頁	255～256	129頁	101・116
H-101号住居	272頁～	257～259	130頁	101・116・122
H-102号住居	274頁～	260～261	130頁～	102・116・117
H-103号住居	276頁～	262～264	131頁～	102・117
H-104号住居	279頁～	265～268	132頁～	102～・117～・122
H-105号住居	283頁～	269～270	135頁	103・118
H-106号住居	285頁～	271～272	135頁	103・118・119
H-107号住居	211頁～	208～210	96頁～	39・40・83
H-108号住居	213頁～	211	97頁	40・83・98
H-109号住居	287頁～	273～274	136頁	104・119・122

遺構番号	本文編	図番号	遺物一覧編	図版番号
H-110号住居	289頁	275		104
H-111号住居	290頁～	276～277	136頁～	104・119・122～
H-112号住居	292頁～	278～279	137頁～	105・119
H-113号住居	336頁～	309～310	148頁～	124・140・162
H-114号住居	215頁～	212～214	97頁～	40・41・83・84・97
H-115号住居	218頁～	215～216	100頁	41・84
H-116号住居	294頁～	280～283	138頁～	105・119～・123
H-117号住居	338頁～	311～313	149頁～	124～・140・162
H-118号住居	340頁～	314～315	150頁～	125・141・162
H-119号住居	342頁～	316～317	151頁～	125・141・162
H-120号住居	345頁～	318～320	152頁～	125～・141～・163
H-121号住居	348頁～	321～325	153頁～	126・141～・163
H-122号住居	352頁～	326～330	158頁～	127・143～・163
H-123号住居	454頁～	414～417	207頁～	166・183～・201
H-124号住居	458頁～	418～422	210頁～	166～・184～・201
H-125号住居	463頁～	423～427	212頁～	167・186・202
H-126号住居	468頁～	428～429	214頁	167・168・186
H-127号住居	470頁～	430～431	214頁～	168・186～・201
H-128号住居	472頁～	432～435	215頁～	168・187～・202
H-129号住居	476頁～	436～437	218頁～	168・169・188
H-130号住居	478頁～	438～439	219頁～	169・188～・202
H-131号住居	481頁～	440～443	220頁～	169～・189～・202
H-132号住居	483頁～	444～446	222頁～	170・190～・202
H-133号住居	357頁～	331	163頁	127・145
H-134号住居	359頁～	332～340	163頁～	127～・145～・164
H-135号住居	368頁～	341～344	170頁～	128・149～・164
H-136号住居	371頁～	345～346	172頁	128～・150・164
H-137号住居	371頁～	345～346	172頁	128・129
H-138号住居	371頁～	345～346	172頁	128・129
H-139号住居	374頁～	347～348	172頁～	129・150～・164
H-140号住居	377頁～	349～355	174頁～	129～・151～・164
H-141号住居	383頁～	356～358	179頁～	130・153・164
H-142号住居	385頁～	359～363	180頁～	130～・153～・165
H-143号住居	392頁～	364～365	184頁～	131・155・165
H-144号住居	393頁～	366	185頁	131・155
H-145号住居	395頁～	367～369	185頁～	132・155～・165
H-146号住居	397頁	370	187頁	132・156
H-147号住居	398頁～	371～376	188頁～	132～・156～・165
H-148号住居	406頁～	377～378	192頁	133・158・159
H-149号住居	407頁～	379～380	192頁～	133・159・165
H-150号住居	486頁～	447～449	223頁～	170～・191～・202
H-151号住居	489頁～	450～452	225頁～	171・192～・202
H-152号住居	492頁～	453～456	226頁～	171～・193・202
H-153号住居	496頁～	457～458	227頁～	172・173・193
H-154号住居	498頁～	459～460	228頁	173・193・194
H-155号住居	500頁～	461～463	229頁	173・194・202
H-156号住居	504頁～	464～465	229頁～	173・174・194
H-157号住居	505頁～	466～470	230頁～	174・195～・203
H-158号住居	510頁～	471～472	232頁	174・196
H-159号住居	512頁～	473～474	232頁～	174～・196・202
H-160号住居	514頁～	475～478	233頁～	175・197・198
H-161号住居	519頁～	479～480	235頁～	175・198
H-162号住居	409頁～	381～382	194頁～	133・159・165
H-163号住居	409頁～	381～382	194頁～	133・159・165
H-164号住居	520頁～	481	236頁	175・198
H-165号住居	521頁～	482	236頁	176・198
H-167号住居	514頁～	475～478	233頁～	175・196・197
H-168号住居	412頁～	383～384	195頁～	133～・159・160
H-169号住居	522頁～	483～484	236頁～	176・198～・203
H-170号住居	527頁～	485～487	283頁～	176・199～・203
H-171号住居	579頁	531～532	262頁	204・229

遺構番号	本文編	図番号	遺物一覧編	図版番号
H-172号住居	580頁～	533～537	263頁～	204・230～・50
H-173号住居	584頁～	538～540	265頁～	204・205・231
H-174号住居	588頁～	541～543	266頁～	205・231～・250
H-175号住居	592頁～	544～547	267頁～	205～・232～・250
H-176号住居	595頁	548～551	269頁～	206・233～・250
H-177号住居	596頁～	552～553	271頁～	206～・234・235
H-178号住居	602頁～	554～555	272頁～	207・235
H-179号住居	604頁～	556～560	273頁～	207・235～・250
H-180号住居	610頁	561～562	275頁～	207・208・236
H-181号住居	610頁～	563～564	276頁	208・237
H-182号住居	612頁	565	276頁	208
H-183号住居	612頁～	566～567	276頁～	208・209・237
H-184号住居	616頁	568～569	277頁～	209・237・238
H-185号住居	616頁～	570～573	278頁～	209～・238・239
H-186号住居	627頁	574～578	280頁～	210・239・240
H-187号住居	629頁	579～580	283頁～	210・240・241
H-188号住居	630頁～	581～583	284頁～	210～・241・242
H-189号住居	634頁	584～585	286頁～	211・242
H-190号住居	635頁～	586～591	287頁～	211～・242～・251
H-191号住居	641頁～	592～597	290頁～	212・243～・251
H-192号住居	642頁	592～597	290頁～	212・243～・251
H-193号住居	648頁	598	295頁	212・213・247
1号掘立柱建物	220頁	217	100頁	41
2号掘立柱建物	221頁	218	100頁	41・84
3号掘立柱建物	222頁	219	100頁	41
4号掘立柱建物	297頁	284		42
5号掘立柱建物	298頁～	285	140頁	106
6号掘立柱建物	299頁～	286	140頁	106
7号掘立柱建物	414頁	385		134
8号掘立柱建物	300頁	287		106
9号掘立柱建物	415頁	386		134
10号掘立柱建物	416頁～	387	196頁	134・160
11号掘立柱建物	417頁～	388		
12号掘立柱建物	418頁～	389	196頁～	134・160
13号掘立柱建物	419頁～	390	197頁	134・160
14号掘立柱建物	421頁～	391	197頁	134・160・165
15号掘立柱建物	423頁～	392	197頁	134・160
16号掘立柱建物	423頁～	392	198頁	135・160
17号掘立柱建物	301頁～	288		106
18号掘立柱建物	425頁	393	198頁	135・161
19号掘立柱建物	426頁	394	198頁	135
20号掘立柱建物	426頁～	395	198頁	135・161
21号掘立柱建物	427頁～	396	198頁	135
22号掘立柱建物	428頁～	397	198頁	135
23号掘立柱建物	429頁～	398	199頁	135・161
25号掘立柱建物	431頁	399		
26号掘立柱建物	432頁	400		135
27号掘立柱建物	433頁	401		135
1号溝	223頁～	220	101頁	84
2号溝	223頁～	220		
4号溝	224頁	221	101頁	46・84
5号溝	227頁	222		
6号溝	227頁	222	101頁	
8号溝	223頁～	220	101頁	
9号溝	302頁	289	140頁	106
10号溝	528頁	488	239頁	176・200・203
11号溝	434頁	402	199頁	136
12号溝	309頁	292		106
13号溝	305頁	290	140頁	120
14号溝	528頁	488	240頁	177・203
15号溝	528頁	488		177

遺構番号	本文編	図番号	遺物一覧編	図版番号
16号溝	531頁～	489～490	240頁～	177・200・203
17号溝	306頁	291	140頁～	106・120
18号溝	532頁～	491～492	241頁	177・200・203
20号溝	534頁	491		177
21号溝	534頁～	493～494	242頁	177・200・203
22号溝	537頁	493～494	242頁	178・200
23号溝	537頁	493	243頁	
24号溝	537頁	493	243頁	
25号溝	649頁	599	295頁	219
26号溝	651頁	600	295頁～	219・247
27号溝	649頁～	599		219
その他溝(B区)	228頁～	223～224	102頁	
1号土坑	231頁	225		42
2号土坑	231頁	225	102頁	42・84
3号土坑(井戸)	252頁	235～236	102頁	46・85・98
4号土坑	231頁	225	102頁～	42・84
5号土坑	231頁	225	103頁	42・84・85
6号土坑	232頁	225		42
7号土坑	232頁	225		
8号土坑	234頁	226	103頁	42・85・98
9号土坑	234頁	227	104頁	42
10号土坑	234頁	226	103頁	42
11号土坑	234頁	227	104頁	42
12号土坑	718頁～	658		
13号土坑	235頁	227	104頁	98
15号土坑	236頁	228	104頁	42・98
16号土坑	236頁	228		
17号土坑	236頁	228		
18号土坑	239頁	229		
19号土坑	239頁	229		42
20号土坑	239頁	229		43
21号土坑	241頁	230	104頁～	43・85・98
22号土坑	236頁	227		43
23号土坑	241頁	230	105頁	43・85
24号土坑	241頁	230	105頁	43
25号土坑	232頁	225	105頁～	85
26号土坑	232頁	225	106頁	98
27・28号土坑他	246頁～	233		
29号土坑	239頁	229		43
30号土坑	241頁	230	106頁	43・98
31号土坑	721頁	658		261
32号土坑	239頁	229		43
33号土坑	241頁	229	106頁～	44・85
35号土坑	236頁～	228	107頁	44
36号土坑	310頁	294		107
37号土坑	310頁～	294		108
38号土坑	311頁～	294		108
39号土坑	312頁	294		108
40号土坑	243頁	231	107頁	44
41号土坑	243頁	231	107頁	44・85
42号土坑	243頁	231	107頁	44・85
43号土坑	312頁	294		108
44号土坑	312頁	295	142頁	108
45号土坑	312頁	295		108
46号土坑	312頁～	295		108
47号土坑	313頁	295		108
48号土坑	314頁	295		109
49号土坑	314頁	295		109
50号土坑	243頁	231		44
51号土坑	314頁	295		109
52号土坑	314頁	295		109

遺構番号	本文編	図番号	遺物一覧編	図版番号
53号土坑	314頁	296		109
54号土坑	314頁～	296		109
55号土坑	315頁～	296		109
56号土坑	316頁	296	142頁	109・121
57号土坑	243頁	231	108頁	45・85
58号土坑	245頁	232		45
59号土坑	245頁	232		45
60号土坑	245頁	232		45
62号土坑	245頁	232	108頁	45・98
63号土坑	246頁	232		45
64号土坑	246頁	232		45
65号土坑	246頁	232	108頁	45
66号土坑	316頁	296		110
67号土坑	316頁	296		
68号土坑	316頁	297		110
69号土坑	316頁	297		110
70号土坑	317頁	297		110
71号土坑	317頁～	297		110
72号土坑	538頁	495		
73号土坑	318頁	297		110
74号土坑	318頁	297		110
75号土坑	318頁	297		110
76号土坑	434頁	403		136
77号土坑	434頁	403		136
78号土坑	434頁	403	199頁	136・161
79号土坑	434頁	403		136
82号土坑	539頁	495		178
83号土坑	437頁～	403	199頁	136・161
85号土坑	318頁	298		111
86号土坑	539頁	495	243頁	
87号土坑	539頁	495	243頁	200・201
88号土坑	539頁	495	243頁～	
89号土坑	438頁	403		136
90号土坑	438頁	403	199頁～	136・161
91号土坑	438頁	404	200頁	137・161
92号土坑	438頁～	404	200頁～	137・161・165
93号土坑	440頁	405		137
94号土坑	440頁	405		
95号土坑	539頁	495		178
96号土坑	539頁	495		178
97号土坑	440頁	405	201頁	137
99号土坑	318頁	298		111
100号土坑	319頁	298		111
102号土坑	319頁～	298		111
104号土坑	440頁	405		137
105号土坑	440頁～	405	201頁	137・161
106号土坑	442頁	405		137
107号土坑	442頁	405		137
108号土坑	442頁	406		138
112号土坑	540頁	496	244頁	178
113号土坑	541頁	496		178
114号土坑	541頁	496		178
118号土坑	442頁	406		138
119号土坑	442頁～	406		138
121号土坑	541頁	496	244頁	179
122号土坑	541頁	496		179
123号土坑	541頁	496		179
124号土坑	541頁	496		179
125号土坑	543頁	497		179
126号土坑	543頁	497		179
127号土坑	543頁	497	244頁	179・201

遺構番号	本文編	図番号	遺物一覧編	図版番号
128号土坑	534頁	497		179
129号土坑	543頁	497	244頁	180
130号土坑	534頁	497	244頁	180
131号土坑	544頁～	498	244頁	180
132号土坑	545頁	498	244頁	180
133号土坑	545頁	498		180
134号土坑	545頁	498		180
135号土坑	320頁	298		111
136号土坑	320頁	298		111
137号土坑	320頁	298		111
138号土坑	820頁	747		111
139号土坑	545頁～	498	244頁	180
140号土坑	546頁	498		180
141号土坑	546頁	498	245頁	181
143号土坑	546頁	498		181
144号土坑	546頁	498		181
145号土坑	546頁	499		181
146号土坑	546頁	499		181
147号土坑	651頁	601	296頁	216
148号土坑	651頁～	601		216
149号土坑	651頁～	601	296頁	216・247
150号土坑	651頁～	601	296頁	216
151号土坑	651頁～	601	296頁	
152号土坑	651頁～	601	296頁	216
153号土坑	653頁	602	297頁	216
154号土坑	653頁	602	297頁	216
155号土坑	655頁	602	297頁	217
156号土坑	655頁	602		217
157号土坑	653頁	603		217
158号土坑	655頁	602	297頁	217
159号土坑	651頁～	601		216
160号土坑	655頁	603		217
161号土坑	655頁	603	297頁	217・247
162号土坑	655頁	602	297頁	217
163号土坑	655頁	603		217
164号土坑	657頁	603		
165号土坑	657頁	604	297頁	217
166号土坑	657頁	604	297頁	217
168号土坑	660頁	605	298頁	218・247
169号土坑	661頁	605	298頁	218
170号土坑	662頁	607	298頁	218・247
171号土坑	662頁	607		218
172号土坑	657頁	603	298頁	218
173号土坑	659頁	606		
174号土坑	661頁～	605	298頁	
175号土坑	659頁	604		
176号土坑	665頁	608	298頁	218・247
177号土坑	659頁	606		
178号土坑	659頁	606		
179号土坑	665頁	608	299頁	218
180号土坑	689頁	628		218
181号土坑	657頁～	604	299頁	219・247
182号土坑	662頁	607		219
183号土坑	665頁	608		219
184号土坑	665頁	607	299頁	219
その他の土坑	443頁	406		
１号火葬土坑	320頁	299		114
Ｂ区ピット群	249頁～	234	108頁～	85・98
Ｃ区ピット群	320頁～	299	143頁	107
Ｄ区ピット群	444頁～	407～408		139
Ｆ区ピット群	666頁	609		

遺構番号	本文編	図番号	遺物一覧編	図版番号
１号井戸	252頁	235～236	109頁～	46・85・86・98
１号集石遺構	253頁	237	111頁	46・98
２号集石遺構	254頁～	238～239	111頁	47・98
３号集石遺構	546頁	500	245頁	181・203
４号集石遺構	667頁～	610	299頁	220・247
１号風倒木	256頁	240	111頁	48
２号風倒木	256頁	240		
３号風倒木	257頁～	240	112頁	48
４号風倒木	822頁	749		
５号風倒木	258頁	241	112頁	48
８号風倒木	258頁	241		48・49
９号風倒木	258頁	241	112頁	49
10号風倒木	447頁	409		138
11号風倒木	447頁	409	201頁	138
12号風倒木	447頁	409	201頁	
13号風倒木	322頁	300		112
14号風倒木	322頁	300		112
15号風倒木	447頁	410		
16号風倒木	322頁	300	143頁	112・121
19号風倒木	322頁	300		112
20号風倒木	323頁～	300		112
21号風倒木	324頁	300		112
22号風倒木	324頁	301		112
23号風倒木	447頁	410		139
24号風倒木	449頁	410		139
25号風倒木	449頁	410		139
26号風倒木	324頁	301		112
27号風倒木	324頁	301		113
28号風倒木	324頁～	301		113
29号風倒木	326頁	301		113
30号風倒木	326頁	302		113
31号風倒木	326頁	301		113
32号風倒木	326頁	301		113
33号風倒木	449頁	410		139
34号風倒木	449頁	410		139
35号風倒木	326頁	302		113
36号風倒木	326頁	302		113
37号風倒木	326頁～	302		113
38号風倒木	328頁	302		
39号風倒木	328頁	303		114
40号風倒木	329頁	303		114
42号風倒木	547頁	500	245頁	181
43号風倒木	329頁	303		114
44号風倒木	548頁	500		181
45号風倒木	451頁	411		139
46号風倒木	451頁	411	202頁	139・162
47号風倒木	451頁	383		
48号風倒木	451頁	411	202頁	139
50号風倒木	668頁	610	299頁	221・248
H-158内風倒木	548頁	500		
１号道	309頁	292～293	141頁～	107・115・121
１号畠	258頁～	242	112頁	47・48
２号畠	309頁	292～293	141頁	107・123
３号畠	668頁	611		220
４号畠	668頁	612		220
５号畠	668頁	613		220
６号畠	668頁	614		220
７号畠	721頁	659		
近世削平面	260頁	243	112頁	47・86・99
１号竪穴状遺構	548頁	501	245頁	182・201
２号竪穴状遺構	329頁	304		114

遺構番号	本文編	図番号	遺物一覧編	図版番号
3号竪穴状遺構	329頁	304	143頁	114・121
4号竪穴状遺構	668頁	610		220
1号炭窯	549頁～	502～503		182
2号炭窯	673頁	615～616	300頁	221
西農道	551頁	504		
水田	682頁～	624～625		252・254
溜池	684頁～	626～627		253・254
H区矢田川西	691頁～	630		255
1号谷	330頁～	305～306	144頁	114・121
2号谷	261頁	244	113頁	86
3号谷	721頁	659	324頁～	261・265
B区縄文包含層	262頁	245～246	113頁～	48・86・87・98
F区縄文包含層	675頁～	617～618	300頁	221・248

遺構番号	本文編	図番号	遺物一覧編	図版番号
B区遺構外	263頁	247～249	114頁～	87～89・98・99
C区遺構外	334頁	307	144頁～	121・122・123
D区遺構外	452頁	412	202頁～	162・165
E区遺構外	552頁	505	245頁～	201・203
F区遺構外	676頁	619～620	301頁～	221・248～・254
G区遺構外	690頁	629		254
K区遺構外	721頁	660	325頁～	265
F区南部の調査	554頁～	507～509		
G区北部の調査	680頁	622～623		
石器	722頁～	661～693		267～291
ブロック	760頁～	694～715		
石材・母岩別資料	778頁～	716～746		
盛土状堆積層	821頁	748		

地区別遺構一覧

B区

H－1号住居
H－2号住居
H－3号住居
H－4号住居
H－5号住居
H－6号住居
H－7号住居
H－8号住居
H－9号住居
H－10号住居
H－11号住居
H－12号住居
H－13号住居
H－14号住居
H－15号住居
H－16号住居
H－17号住居
H－18号住居
H－19号住居
H－21号住居
H－22号住居
H－23号住居
H－24号住居
H－25号住居
H－26号住居
H－27号住居

H－28号住居
H－29号住居
H－31号住居
H－32号住居
H－33号住居
H－34号住居
H－35号住居
H－37号住居
H－38号住居
H－39号住居
H－40号住居
H－41号住居
H－42号住居
H－43号住居
H－45号住居
H－46号住居
H－47号住居
H－51号住居
H－52号住居
H－54号住居
H－55号住居
H－56号住居
H－57号住居
H－58号住居
H－59号住居
H－60号住居

H－61号住居
H－62号住居
H－63号住居
H－64号住居
H－65号住居
H－66号住居
H－75号住居
H－76号住居
H－77号住居
H－78号住居
H－79号住居
H－80号住居
H－81号住居
H－82号住居
H－83号住居
H－84号住居
H－85号住居
H－86号住居
H－87号住居
H－88号住居
H－89号住居
H－90号住居
H－91号住居
H－92号住居
H－93号住居
H－94号住居

H－95号住居
H－96号住居
H－97号住居
H－98号住居
H－99号住居
H－107号住居
H－108号住居
H－114号住居
H－115号住居
1号掘立柱建物
2号掘立柱建物
1号溝
2号溝
4号溝
5号溝
6号溝
8号溝
その他の溝
1号土坑
2号土坑
3号土坑(井戸)
4号土坑
5号土坑
6号土坑
7号土坑
8号土坑

9号土坑
10号土坑
11号土坑
13号土坑
15号土坑
16号土坑
17号土坑
18号土坑
19号土坑
20号土坑
21号土坑
23号土坑
24号土坑
25号土坑
26号土坑
27・28号土坑他
29号土坑
30号土坑
32号土坑
33号土坑
35号土坑
40号土坑
41号土坑
42号土坑
50号土坑
57号土坑

58号土坑
59号土坑
60号土坑
62号土坑
63号土坑
64号土坑
65号土坑
ピット群
1号井戸
1号集石遺構
2号集石遺構
1号風倒木
2号風倒木
3号風倒木
4号風倒木
5号風倒木
8号風倒木
9号風倒木
1号畠
近世削平面
2号谷
縄文包含層
B区遺構外

C区

H－20号住居
H－30号住居
H－100号住居
H－101号住居
H－102号住居
H－103号住居
H－104号住居
H－105号住居
H－106号住居
H－109号住居
H－110号住居
H－111号住居
H－112号住居
H－116号住居

3号掘立柱建物
4号掘立柱建物
5号掘立柱建物
6号掘立柱建物
8号掘立柱建物
17号掘立柱建物
9号溝
12号溝
13号溝
17号溝
1号道
2号畠
36号土坑
37号土坑

38号土坑
39号土坑
43号土坑
44号土坑
45号土坑
46号土坑
47号土坑
48号土坑
49号土坑
51号土坑
52号土坑
53号土坑
54号土坑
56号土坑

66号土坑
67号土坑
68号土坑
69号土坑
70号土坑
71号土坑
73号土坑
75号土坑
85号土坑
99号土坑
100号土坑
102号土坑
135号土坑
136号土坑

137号土坑
1号火葬土坑
ピット群
13号風倒木
14号風倒木
16号風倒木
19号風倒木
20号風倒木
21号風倒木
22号風倒木
26号風倒木
27号風倒木
28号風倒木
29号風倒木

30号風倒木
31号風倒木
32号風倒木
35号風倒木
36号風倒木
37号風倒木
38号風倒木
39号風倒木
40号風倒木
43号風倒木
2号竪穴状遺構
3号竪穴状遺構
1号谷
C区遺構外

D区

H—113号住居
H—117号住居
H—118号住居
H—119号住居
H—120号住居
H—121号住居
H—122号住居
H—133号住居
H—134号住居
H—135号住居
H—136号住居
H—137号住居
H—138号住居
H—139号住居

H—140号住居
H—141号住居
H—142号住居
H—143号住居
H—144号住居
H—145号住居
H—146号住居
H—147号住居
H—148号住居
H—149号住居
H—162号住居
H—163号住居
H—168号住居
7号掘立柱建物

9号掘立柱建物
10号掘立柱建物
11号掘立柱建物
12号掘立柱建物
13号掘立柱建物
14号掘立柱建物
15号掘立柱建物
16号掘立柱建物
18号掘立柱建物
19号掘立柱建物
20号掘立柱建物
21号掘立柱建物
22号掘立柱建物
23号掘立柱建物

24号掘立柱建物
25号掘立柱建物
26号掘立柱建物
27号掘立柱建物
11号溝
76号土坑
77号土坑
78号土坑
79号土坑
83号土坑
89号土坑
90号土坑
91号土坑
92号土坑

93号土坑
94号土坑
97号土坑
104号土坑
105号土坑
106号土坑
107号土坑
108号土坑
118号土坑
119号土坑
その他の土坑
ピット群
10号風倒木
11号風倒木

12号風倒木
15号風倒木
23号風倒木
24号風倒木
25号風倒木
33号風倒木
34号風倒木
45号風倒木
46号風倒木
47号風倒木
48号風倒木
D区遺構外

E区

H—123号住居
H—124号住居
H—125号住居
H—126号住居
H—127号住居
H—128号住居
H—129号住居
H—130号住居
H—131号住居
H—132号住居
H—150号住居
H—151号住居
H—152号住居

H—153号住居
H—154号住居
H—155号住居
H—156号住居
H—157号住居
H—158号住居
H—159号住居
H—160号住居
H—161号住居
H—164号住居
H—165号住居
H—167号住居
H—169号住居

H—170号住居
10号溝
14号溝
15号溝
16号溝
18号溝
20号溝
21号溝
22号溝
23号溝
24号溝
72号土坑
82号土坑

86号土坑
87号土坑
88号土坑
95号土坑
96号土坑
112号土坑
113号土坑
114号土坑
121号土坑
122号土坑
123号土坑
124号土坑
125号土坑

126号土坑
127号土坑
128号土坑
129号土坑
130号土坑
131号土坑
132号土坑
133号土坑
134号土坑
139号土坑
140号土坑
141号土坑
143号土坑

144号土坑
145号土坑
146号土坑
3号集石
42号風倒木
44号風倒木
H-158内風倒木
1号竪穴状遺構
1号炭窯
西農道
E区遺構外

F区

F区南部の調査
J-1号竪穴住居
J-2号竪穴住居
Y-1号竪穴住居
Y-2号竪穴住居
Y-3号竪穴住居
Y-4号竪穴住居
Y-5号竪穴住居
H—171号住居
H—172号住居
H—173号住居
H—174号住居
H—175号住居
H—176号住居

H—177号住居
H—178号住居
H—179号住居
H—180号住居
H—181号住居
H—182号住居
H—183号住居
H—184号住居
H—185号住居
H—186号住居
H—187号住居
H—188号住居
H—189号住居
H—190号住居

H—191号住居
H—192号住居
H—193号住居
25号溝
26号溝
27号溝
147号土坑
148号土坑
149号土坑
150号土坑
151号土坑
152号土坑
153号土坑
154号土坑

155号土坑
156号土坑
157号土坑
158号土坑
159号土坑
160号土坑
161号土坑
162号土坑
163号土坑
164号土坑
165号土坑
166号土坑
168号土坑
169号土坑

170号土坑
171号土坑
172号土坑
173号土坑
174号土坑
175号土坑
176号土坑
177号土坑
178号土坑
179号土坑
181号土坑
182号土坑
183号土坑
184号土坑

F区ピット群
4号集石
50号風倒木
4号竪穴状遺構
3号畠
4号畠
5号畠
6号畠
2号炭窯
縄文包含層
F区遺構外

G区

G区北試掘トレンチ
水田
溜池
180号土坑
G区遺構外

H区

矢田川西

K区

H—36号住居
H—44号住居
H—48号住居
H—49号住居
H—50号住居
H—53号住居
H—67号住居

H—68号住居
H—69号住居
H—70号住居
H—71号住居
H—72号住居
H—73号住居
H—74号住居

12号土坑
31号土坑
7号畠
3号谷
K区遺構外

旧石器

石器
ブロック
石材・母岩別資料
盛土状堆積層

遺物一覧編　目次

凡例

目次

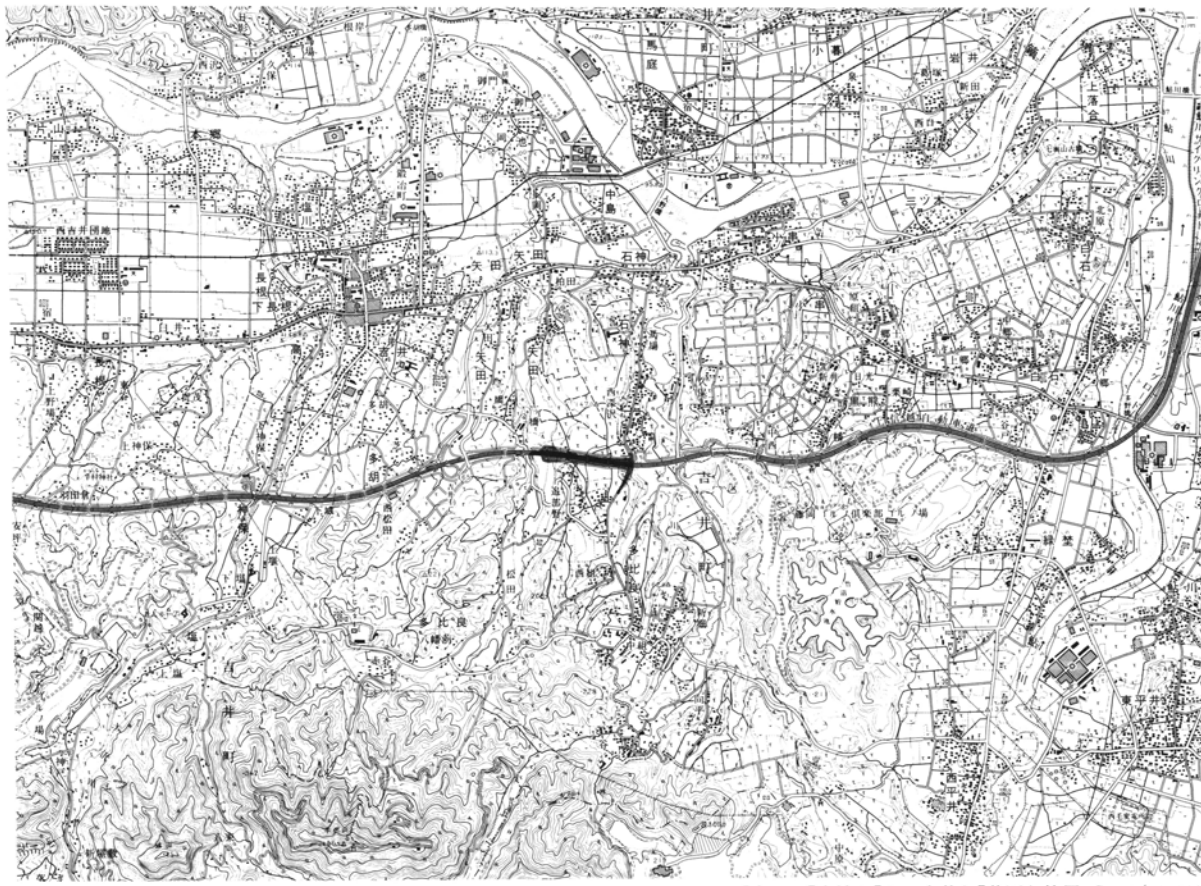
Ｂ区遺物一覧……1
Ｃ区遺物一覧……128
Ｄ区遺物一覧……148
Ｅ区遺物一覧……207
Ｆ区遺物一覧……249
Ｇ区遺物一覧……310
Ｈ区遺物一覧……313
Ｋ区遺物一覧……314
多比良全体……327
旧石器報告書・管理番号一覧……328

写真図版編　目次

目次

遺跡全景……1～3
調査風景……4
Ｂ区の遺構……5～49
Ｂ区の遺物……50～99
Ｃ区の遺構……100～115
Ｃ区の遺物……116～123
Ｄ区の遺構……124～139
Ｄ区の遺物……140～165
Ｅ区の遺構……166～182
Ｅ区の遺物……183～203
Ｆ区の遺構……204～221
Ｆ区の遺物……222～250
Ｆ区の遺構と遺物……251
Ｇ区の遺構……252～253
Ｇ区の遺物……254
Ｈ区の遺構……255
Ｋ区の遺構……256～261
Ｋ区の遺物……262～266
旧石器の遺構……267～268
旧石器の遺物……269～291
科学分析写真ネガ説明……
科学分析……292～301
出土人骨……302
竣工後の写真……303

第１章　発掘調査に至る経過及び発掘調査経過



（国土地理院発行「富岡」「高崎」「上野吉井」「藤岡」使用　S＝1/50,000）

第１図　遺跡位置図

第１節　発掘調査に至る経過

１　関越自動車道上越線の建設計画

多比良追部野遺跡（以下「多比良遺跡」）に於ける埋蔵文化財調査の発端は『上信越自動車道』の建設計画時に遡る。『上信越自動車道』は昭和41年７月１日の「国土開発縦貫幹線自動車道建設法」（昭和32年法律第68号の改定（昭和41年法律第107号）、この改定で「国土開発幹線自動車建設法」となる）によって公式に表れる道路で、この改定で廃止された「関越自動車道建設法」（昭和38年法律第158号）によって計画されていた『関越自動車道（新潟線）』と併せて『関越自動車道直江津線』として同法の別表に示されている。

この道路の名称は何回か変更され、「高速自動車国道の路線を指定する政令」を見ると昭和47年６月30日（昭和47年政令第257号）の改定時から更に改定される昭和53年11月６日（昭和53年政令第364号）までの間は『関越自動車道長野線』。また昭和46年４月には終点の新潟県直江津市が同県高田市との合併で上越市となったが、やがて昭和53年からは『関越自動車道上越線』と呼ばれるようになった。また群馬県内からは「関越」という文字が上越国境（群馬と新潟の県境）へ向かう道路を連想させることから名称変更への要望が出て、平成２～３年頃からは『上信越自動車道』と呼称されるようになっている。

さて昭和47年６月30日、関越自動車道上越線（以下「上越線」）と呼称されるようになったこの道路は、

国土開発幹線自動車建設法第５条第１項による基本計画が策定されて本県藤岡市から長野県長野市に至る４車線道路として公示された。更に、昭和54年３月２日には上越線のうち本県藤岡から長野県佐久までの間について高速自動車国道法第５条第１項・第２項に基づく第８次整備計画が策定され、これに伴い道路整備特別措置法第２条の３による施工命令が日本道路公団（以下「公団」とする）に下された。公団では同年11月１日に高崎工事事務所内に調査課を設置。更に昭和56年２月１日には藤岡・佐久間を所掌する富岡工事事務所を設置し、同年５月８日に藤岡・松井田間の路線発表を行った。

翌昭和57年７月16日から本遺跡の所在する多野郡吉井町地域の中心杭打設が行われ、昭和59年11月15日からは上越線で最も早い巾杭打設が行われて、後の多比良遺跡の調査区域となる位置と範囲が現地に於いて確定することとなる。

昭和60年７月１日、吉井地区に対する公団の所掌事務は高崎工事事務所に移され、同年吉井町地区の建設用地取得について吉井町地権者会と群馬県土地開発公社との間で交渉が進められ、昭和61年３月９日妥結に至っている。

2　関越自動車道上越線建設と埋蔵文化財の調査

昭和47年、群馬県教育委員会文化財保護室は上越線の建設計画に対応するため、同年５月から翌昭和48年３月にかけて広域の分布調査を実施した。この調査で高崎・藤岡・富岡・吉井・甘楽・下仁田・妙義・松井田・南牧の３市５町１村で948地点の遺跡が把握されている。このうち本遺跡は、№565の登録番号で示された多野郡吉井町大字多比良字追部野に所在する、少量の土器片の確認された縄文時代の包蔵地の一部に該当する。

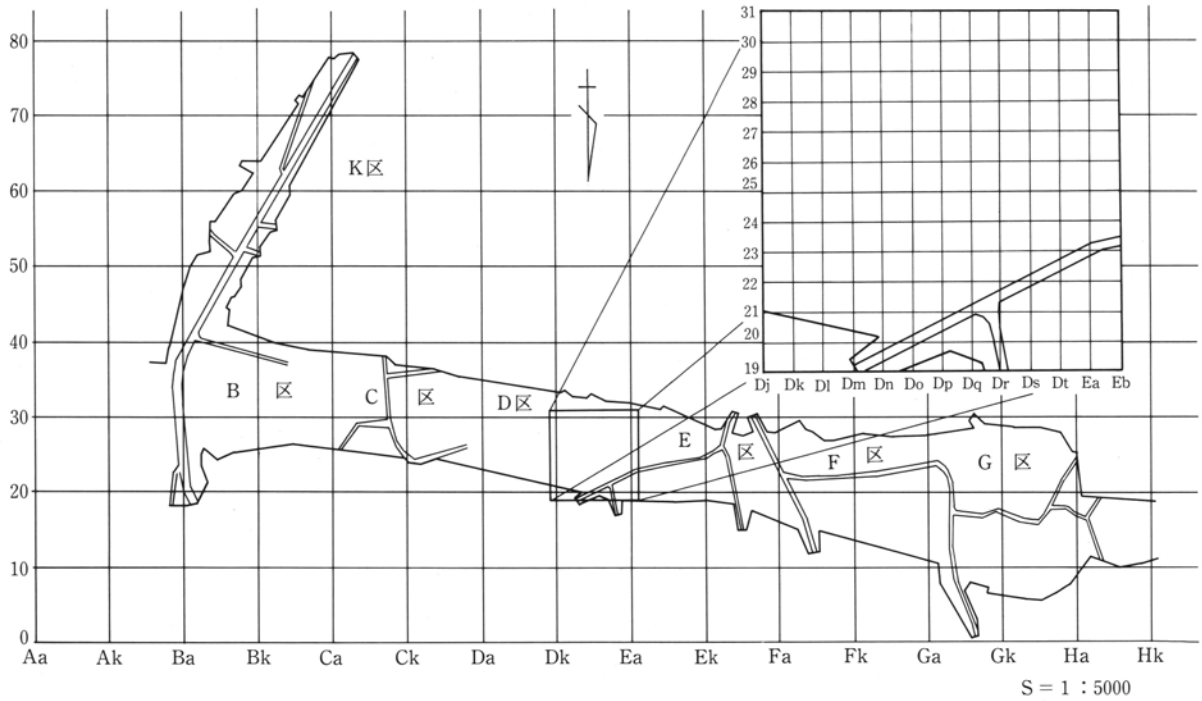
昭和49年、前年に文化財保護室から改組された文化財保護課（以下「保護課」とする）は群馬県企画部幹線対策課に対し、上越線建設事業に当たっての文化財保護の遵守と指定文化財の保存、保護課との協議等の考え方を示し、昭和53年３月には藤岡・下仁田間の路線通過地周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査結果を「関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書」（群馬県企画部交通対策課）に報告したということである。

昭和59年、保護課は公団の依頼に基づき詳細の分布調査を実施。その調査結果は上越線の中心杭番号（ＳＴation №）に従って報告され、19地域50地点が遺跡地として挙げられている。本遺跡は№4としてＳＴＡ №99.20～104.50の範囲に遺跡地が認定され、遺物の濃分布域31,500㎡、淡分布域5,000㎡と記載されている。尚、再調査によって昭和61年７月段階で55地点（後の試掘により52地点に減少）がリストアップされることになるが、本遺跡は№8、事業名「多比良遺跡」で包蔵地域46,100㎡、発掘調査対象面積32,770㎡として記載されている。

さて上越線の建設計画が具体化する中、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」）はその対応のため昭和61年４月１日、関越道上越線調査事務所（以下「事務所」）を設置している。また、この日公団は文化庁に発掘調査の実施について協議を行い同５月１日付けで回答を受ける一方、群馬県教育委員会（以下「県教委」）に対しては52カ所、985,490㎡の地域に対する埋蔵文化財の発掘調査を委託した。県教委はこれを調整。約78％程を事業団の担当として、事務所に於ける矢田遺跡他３遺跡の発掘調査が開始された。

昭和63年１月18日から保護課は多比良遺跡を含む未着手地域に対する試掘調査を開始した。この結果、多比良遺跡では遺構の存在が確認されたため本調査着手の運びとなり、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が受託して発掘調査を実施することとなったのである。

尚、本遺跡の事業名称は『多比良遺跡』であるが、「多比良」は大字名称であり、また東に近接して『多比良平野遺跡』が在るため、『多比良追部野遺跡』を遺跡名称として使用することとした。



第２図　区及びグリッドの設定

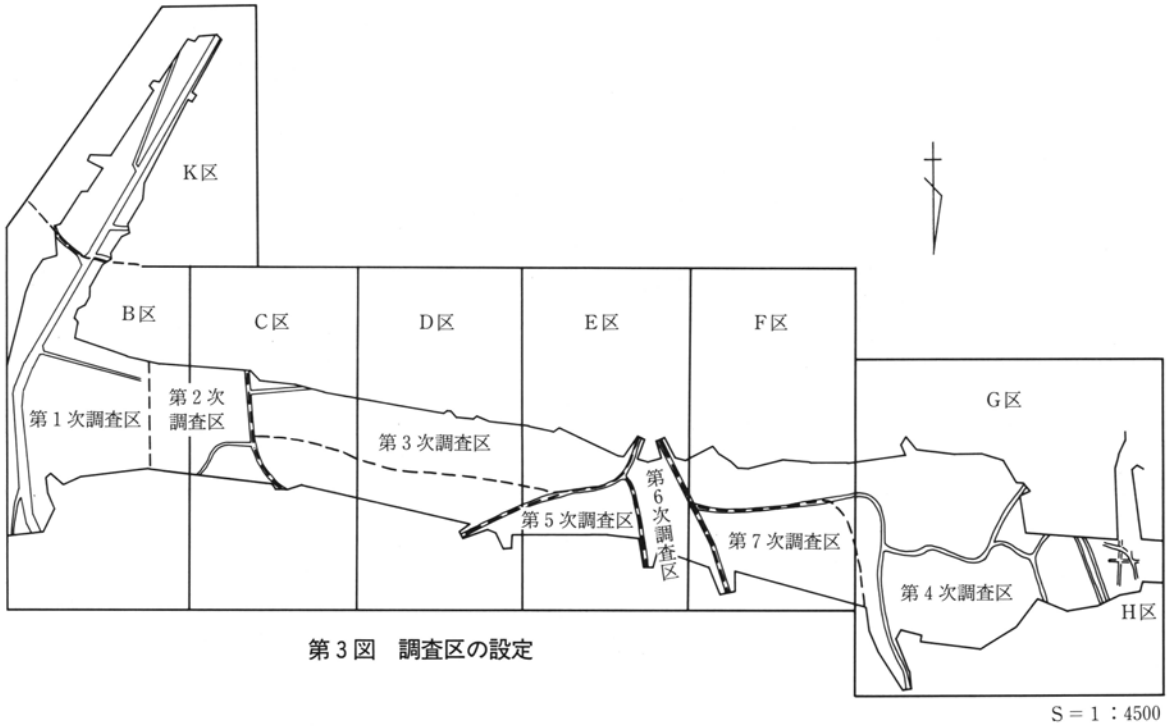
第２節　発掘調査の方法と経過

１　地区・グリッドの設定（静的区域設定）

遺跡の調査対象地域は土合川と矢田川に挟まれた台地上と、矢田川両岸の低地部に設定された。この調査対象地域に対する平面的区域分割は、調査対象地域全体を５ｍ方眼に網をかけたグリッドに基づいて行われた。グリッドの呼称は、大文字のアルファベット･小文字のアルファベット、「―」記号、２桁以下の算用数字で構成され、基点は「Aa―０」と表記した。尚、大小のアルファベットがＹ軸を、算用数字がＸ軸を表している。

グリッドの基点は東から西にＳＴＡtion №が増える関係からか南を天とする公団の測量図に従い、北東部に設定することとし、調査区全体をカバーし国家座標に基づくメートルの区切りの良い地点として、路線外の国家座標第系、Ｘ＝＋27,100m、Ｙ＝―74,000mに設定した。この基点から西側に100m迄毎に区を設定し、Ａ区・Ｂ区・Ｃ区・・・とした。グリッド呼称に於ける大文字のアルファベットがこれを示す。尚、関越自動車道上越線（上信越自動車道）の本線部分から外れる調査区南東部に在って、後述する東沢遺跡に隣接してこれに含まれると想定される町道石神・多比良線拡幅部は当初「拡幅部」と呼称したが、本調査途中からＢ区・Ｃ区との識別を行うため「Ｋ区」と呼称することとした。Ｋ区の範囲は第２図に示したように県道両側の農道を以てＢ区との境とし、この農道以南の地域とした。また西端のＨ区は、調査範囲が矢田川の西にあったため調査段階では「矢田川西区」等と通称した。

さて各区の個々のグリッド・ポイントの名称は、「―」記号の前後に付される小文字のアルファベットと算用数字によって示される。Ｋ区を除く各区の基点は区の記号（Ａ，Ｂなど）に続き「ａ―０」を以て表記される。このａ―０ポイントから５ｍ毎に、西に向かってｂ・ｃ・ｄ～ｑ・ｒ・ｓの順に小文字のアルファベットが、南に向かって１・２・３・・の算用数字が順次付されていく。各ポイントの南西５ｍ四方が１単位のグリッドであり、各グリッドの名称は北東隅のポイントに求められる。尚、Ｋ区のグリッド番号はＢ・Ｃ区のそれを準用した。



第３図　調査区の設定

2　調査区の設定（動的区域設定）

上述の区とは別に、多比良遺跡では工事側への引き渡し順序、調査区内を通る道路によって区画される区域等によって以下の７つの調査区を設定した。

第１次調査区：Ｋ区全域と本線部分のＳＴＡ№100杭以東のＢ区中・東部。

第２次調査区：第１次調査区の西、Ｃ区を南北に横切る通称「学校道」以東のＢ区西部及びＣ区東半部。

第３次調査区：学校道以西、Ｄ区北からＥ区南に抜ける道路までの間のＣ・Ｄ・Ｅ区。北半は平成元年秋口まで廃土置き場として使用。

第４次調査区：Ｆ区を東西に抜ける道路の南側と矢田川沿いのＧ・Ｈ区。

第５次調査区：東・南を第３次調査区に接し、Ｅ区西寄りで北に抜ける道で第６次に接する。Ｄ区の一部とＥ区北半の中・東部。

第６次調査区：東を第３・５次調査区に接し、西をＥ・Ｆ区境付近を南北に横切る道路に接する。Ｅ区西部とＦ区北東隅部。

第７次調査区：東を第６次調査区、南及び西を第４次調査区に接する。Ｆ区中・北とＧ区東端部の一部。

3　調査経過

以下、発掘調査（本調査）の経過概要を記す。

〔昭和63年度〕

平成元年（1989年）

１月25日～２月２日　安坪遺跡の調査チームより先発隊入り事務所設置。

２月13・14日　安坪遺跡からスタッフ・機材移動。

２月20日　調査区設定。

〃　21日　第１次・第２次調査区表土掘削開始。

３月９日　Ｋ区の表土掘削・遺構確認作業開始。

〃　24日　遺構確認成果、概念図として作成。

〃　29日　昭和63年度の屋外作業終了。安坪遺跡からの作業員総引き上げへ。

〔平成元年度〕

４月10日　担当１名交替。作業員は初心者中心の新規編成で再開。第１次調査区（Ｂ区分）の竪穴住居跡から調査着手。

〃 26日　第２次調査区の調査に着手。

５月１日　第１次調査区のうちＫ区の竪穴住居等の調査着手。

７月５日　Ｋ区全景写真撮影。

〃 12日　航空写真撮影。

〃 27日　第１次調査区旧石器時代層への試掘調査開始。

８月30日　ＳＴＡ.100ライン以東、日本道路公団側（以下「公団」）へ引き渡し。

９月１日　第２次調査区（ＳＴＡ.100）ライン以西の住居跡調査開始。

〃 19日　第３次調査区（学校道以西）南半部の表土剝ぎ開始。順次遺構確認へ。

10月５日　第３次調査区北半部掘削開始。

〃 12日　第３次調査区遺構確認作業終了。

〃 13日　航空写真撮影。第３次調査区遺構調査開始。

〃 25日　第２次調査区旧石器時代層への試掘調査開始。

11月13日　24日まで別働隊で寺前遺跡を応援。

平成２年（1990年）

１月29日　Ｆ区南半部、面的調査開始。

２月28日　航空写真撮影。

３月１日　Ｃ・Ｄ区全景写真撮影。

〃 ６日　８日まで別働隊で光厳寺裏遺跡・中高瀬観音山遺跡を応援。

〃 12日　第４次調査区表土剝ぎ開始。

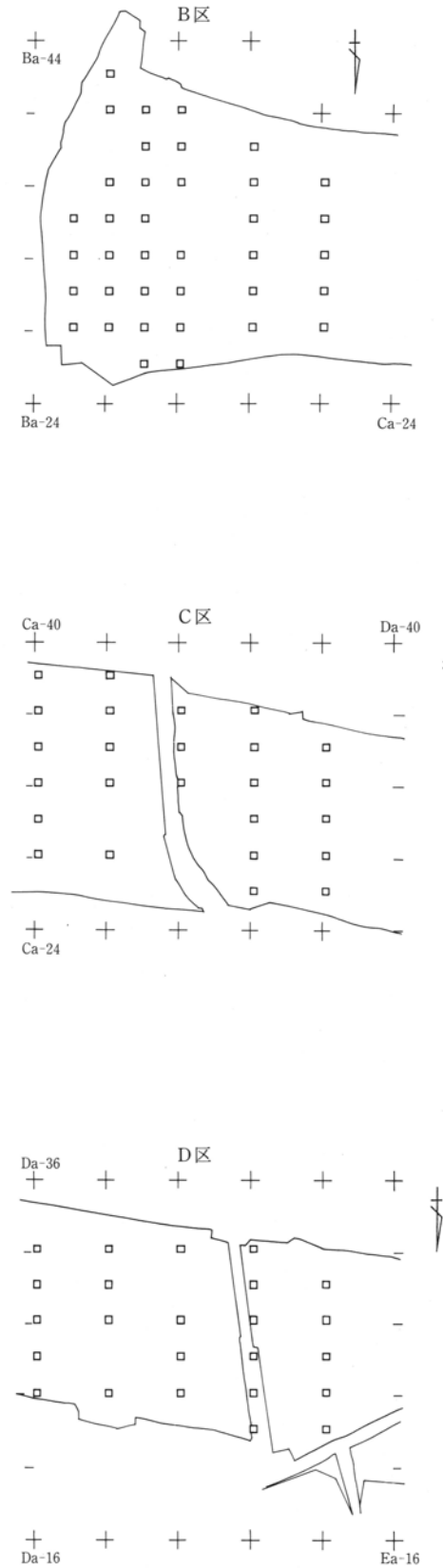
〃 20日　第３次調査区旧石器時代層への試掘調査開始。

〃 26日　平成元年度、屋外作業終了。

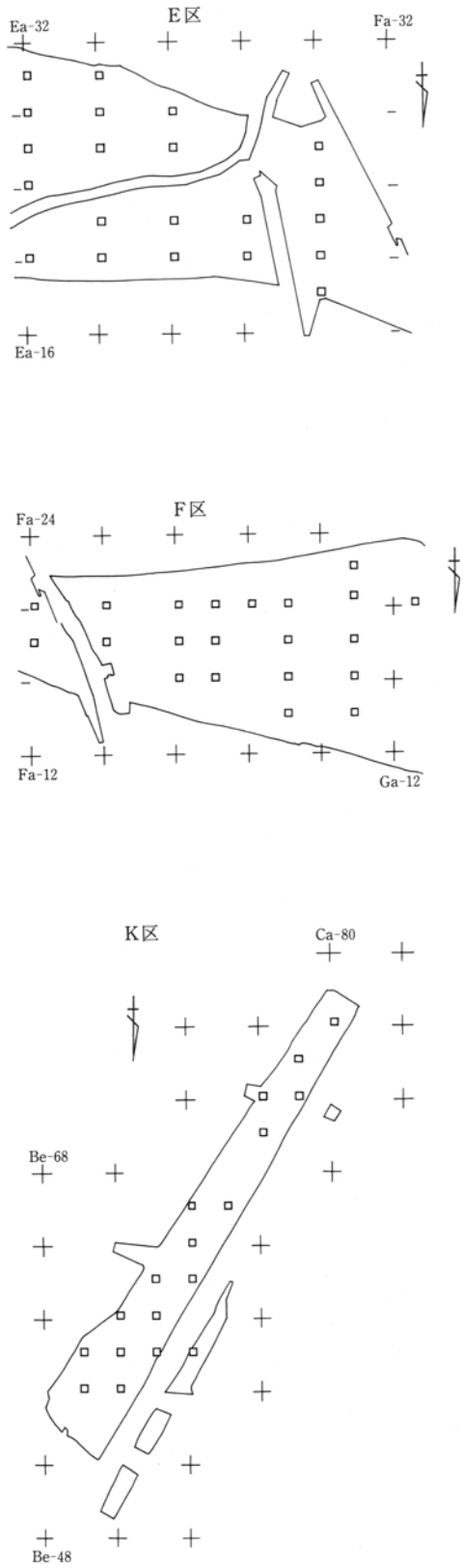
〔平成２年度〕

４月９日　担当１名交替。第５次調査区調査着手。

〃 13日　月末頃にかけて断続的に内匠下高瀬遺跡を応援。



第４図　旧石器試掘位置（１）



第５図　旧石器試掘位置（２）

５月12・13日　現地説明会開催。（見学者617名）
〃 16日　航空写真撮影。
〃 23日　第６次調査区表土剝ぎ開始。（本日より６月９日まで原東遺跡を応援）
〃 29日　第７次調査区表土剝ぎ開始。
６月５日　第３次調査区旧石器時代層の試掘調査。
〃 ７日　第６次調査区遺構確認作業開始。順次遺構調査に入る。
７月２日　第４次調査区埋め戻し開始。
〃 17日　Ｈ区調査開始。（トレンチ調査）
〃 18日　航空写真撮影。
〃 23日　Ｈ区調査完了。
〃 31日　第３次調査区南部・Ｆ区南半部・Ｇ区溜池部分、公団へ引き渡し。
８月20日　第３次調査区埋め戻し開始。
〃 21日　第７次調査区調査開始。
９月25日　10月13日まで別働隊で原東遺跡・天引狐崎遺跡を応援。
10月15日　10月30日まで別働隊で原西遺跡・白倉下原遺跡を応援。
11月６日　Ｆ区縄文時代包含層試掘調査。
〃 16日　多比良遺跡整理方針会議開催。
12月５日　第５次調査区旧石器層試掘調査開始。
〃 11日　航空写真撮影。

平成３年（1991）

１月９日頃　第７次調査区旧石器層試掘調査開始。
〃 25日　１月28日まで別働隊で栗崎八幡遺跡中西地区を応援。
〃 29・30日　中山遺跡・多胡蛇黒遺跡を応援。
２月１日　試掘調査にて旧石器出土。
〃 ７日　第５次･第６次調査区公団へ引き渡し。
〃 13日　試掘調査に引き続き、旧石器時代文化層への本調査開始。
〃 18日　21日まで原西遺跡班より応援を受ける。
３月１日　Ｆ区旧石器遺物取り上げ完了。
〃 ８日　第７次調査区調査終了。
〃 12日　事務所撤収作業開始。
〃 16日　発掘調査完了。

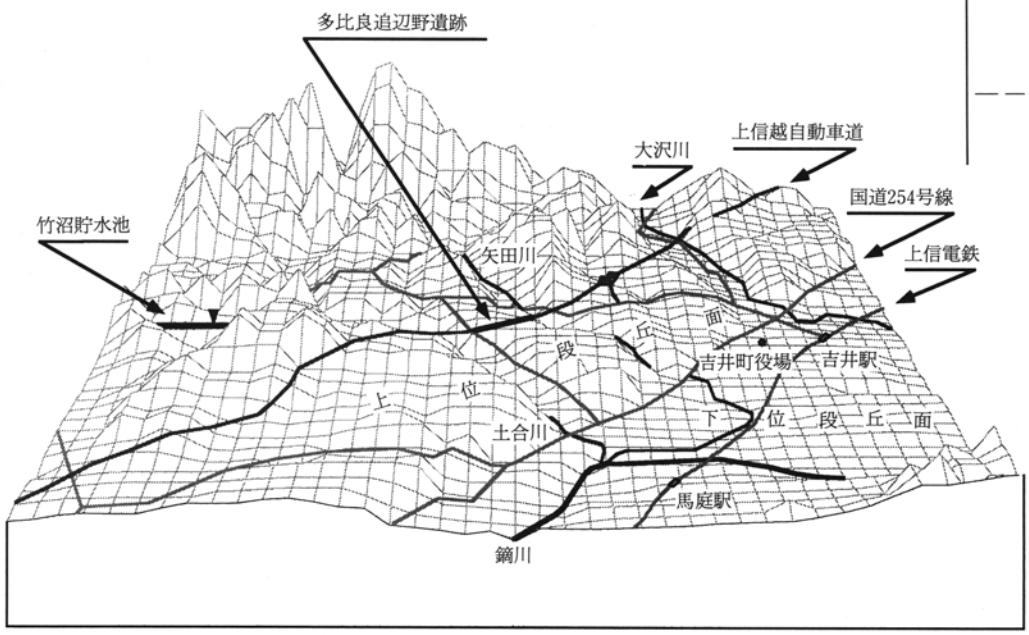
第２章　遺跡をとりまく環境

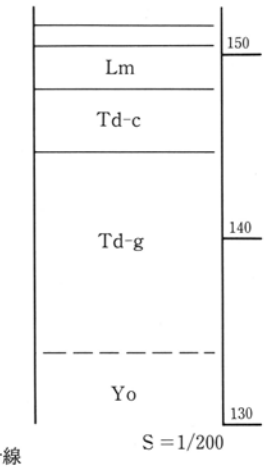
第１節　地理的・地質的環境

多比良追部野遺跡は群馬県に於いて西毛と呼ばれる群馬県西部地域の東南寄り、多野郡吉井町大字多比良に在る。その位置は群馬県庁の南南西約17.2km、吉井町役場の南東約1.5kmの地点である。尚、遺跡地は現在、上信越道の本線及び側道と、町道石神多比良線とその迂回路の跡地となっているが、これは矢田インターチェンジの直ぐ東側の部分に当たる。

本遺跡の周囲は所謂農村地帯で、河川添いの沖積地に水田が造られ、段丘面上は畑作が行われている。また遺跡の南には追部野、北東には西深沢の集落が近接し、北西凡そ1.6kmには吉井の市街地が在る。近隣の主要道路には本遺跡の1.2km程の地点を東西に横切って藤岡方面から長野県佐久方面に抜ける国道245号線、上信電鉄吉井駅から本遺跡の西端を通って南南東1.25km程の新堀の集落を抜けて藤岡市街地北部の神田（じんだ）に抜ける県道神田吉井停車場線がある。また、本遺跡の1.6～1.8km程の位置には上信電鉄の軌道が概ね東西に横切り、本遺跡の北北東2.1kmの地点に馬庭駅、北西2.0km程の地点に吉井駅が位置している。

地質的に見ると、本遺跡の基盤となるものは新生代第三紀中新世の層である吉井層である。「関越自動車道吉井～甘楽地区構造物基礎調査報告書」（日本道路公団東京第二建設局高崎工事事務所・基礎地盤コンサルタンツ株式会社　1987）によると吉井層（Yo）は泥岩を主とし砂岩・凝灰岩も確認されている。また、同報告書によると、吉井層の上には新生代第四期洪積世（更新世）の段丘堆積物が乗るということであるが、段丘堆積物は大きくは上位の粘性土（Td-c）部分と下位の礫質土（Td-g）部分とに分かれ、粘性土は凝灰質粘土から成って礫混じり粘土や砂質粘土も分布するものであり、一方礫質土は全体に粘土分が多く、礫はチャート・片岩起源の亜角～角礫が多いと報告されてい





第６図　多比良追部野遺跡周辺鳥瞰図及び遺跡地の地質的土層堆積状況

る。本遺跡での段丘堆積物の層厚は粘性土は3.5～4.0m、礫質土は10m以上と推定されている。この段丘堆積物の上にはローム（Lm）が2.0mの層厚で堆積しているということであるが、ローム層より上の土層堆積については第３節「標準土層」の項に於いて後述する。

このような地層の上に形成される本遺跡は、大きく見ると本遺跡の北方1,160m程を東流する鏑川右岸に形成される河岸段丘のうちの上位段丘面（本遺跡付近に於いては「多胡段丘面」と呼ばれる）上に立地している。上位段丘面の南には牛伏砂岩を産出するので知られる牛伏山地が在り、北には下位段丘面（多胡段丘面に対応する部分は「吉井段丘面」と呼ばれる）が在って鏑川に至るが、本遺跡のＣ・Ｄ区付近と鏑川とでは55m程の比高差を測り、下位段丘面とでは35m程の比高差を測る。また、鏑川の北側（鏑川左岸部）には富岡丘陵が東西に延びている。さて、鏑川の上位段丘面は北に向かって緩やかな傾斜面を見せており、幾つかの河川が深い解析谷を造り乍ら北流しているが、本遺跡付近に於いても東側に土合川、西側に矢田川が北流して解析谷を形成し、これに区切られる形で本遺跡の殆どを占める台地状の部分（以下「台地部分」とする）が造り出されている。この台地部分には後述する１～３号谷に見られるような小規模河川等によって造られる小型の谷地形も幾つか見られる。尚、本遺跡からは富岡丘陵越しに前橋台地や赤城山、榛名山が見られ、西北西には浅間山も遠望することができる。

第２節　歴史的環境

全体的に本遺跡周辺の遺跡分布は牛伏山地周辺に希薄で、鏑川の段丘面や沖積地に集中して見られた。

以下、各時代の概要について述べてみたい。

旧石器時代（第７図一左上の分布図参照）

旧石器時代の遺跡分布はあまり顕著ではないが、本遺跡南東の新堀城（20）、神保植松遺跡（10）付近に若干の遺物が見られていた。しかし上信越道の発掘調査に伴ってユニット等の確認もなされ、西接する多湖蛇黒遺跡（11）や矢田遺跡（12）に於いてＡＴに絡まる遺物が確認されてきている。

縄文時代（第７図一左上の分布図参照）

縄文時代の遺跡分布は比較的濃い状況を示している。このうち草創期・早期の遺跡は少なく、本遺跡以外では入野遺跡（７）に見られる程度である。

一方、前期の遺跡は入野遺跡（７）・黒熊遺跡群（８）・神保植松遺跡（10）・黒熊八幡遺跡（16）・白石根岸遺跡（18）など鏑川の上下位段丘面上などに広く分布している。

中期のものは鏑川の段丘面上で更に広がりを見せ、川内遺跡（４）・椿谷戸遺跡（５）・黒熊遺跡群（８）・神保植松遺跡（10）・矢田遺跡（12）などがある。　後期の遺跡分布は前・中期のそれに比べて減少してくるが、椿谷戸遺跡（５）・多胡蛇黒遺跡（11）などで確認されており、やはり鏑川の段丘面上に分布が見られる。

これに対し晩期の遺跡は少なく、僅かに祝神遺跡（21）が見られるに過ぎなかった。

弥生時代（第７図一中上の分布図参照）

弥生時代の遺跡は上位段丘面を中心として分布が見られる。

このうち中期の遺跡は神保植松城遺跡（６）などが挙げられるが、集落として認められるものではなかった。

これに対し後期の遺跡は川内遺跡（１）・入野遺跡（２）・神保植松遺跡（６）などがあり、集落遺跡としても認められるが、何れも樽式土器を伴なうものである。

古墳時代（第７図―右上の分布図参照）

古墳時代の遺跡は、鏑川の段丘面や沖積地の広い範囲に亘って分布が見られた。

このうち前期の集落遺跡としては川内遺跡（６）・入野遺跡（９）・黒熊遺跡群（10）・神保植松遺跡（12）・矢田遺跡（15）などがある。

中期の遺跡は相対的に少なく図示した範囲には確認されていないが、吉井町西部の折茂東遺跡や藤岡市の緑野遺跡群に調査例がある。

一方県指定史跡入野遺跡（９）を初めとする後期の集落遺跡については、その遺跡数は大きく増加し、且つ広い範囲に分布して遺構の調査例数も多い。

さて、本遺跡の周辺の古墳の分布状況についてみると、図示した範囲からははずれるが本遺跡の北西4.2km程の吉井町西部の鏑川右岸には中期初頭の片山１号墳が在り、本遺跡の北東４km程に藤岡市西部の鮎川と鏑川の合流点に近い白石古墳郡の中には５世紀代の大型の前方後円墳が見られる。しかし、本遺跡周辺の古墳は概ね６世紀中葉以降の群集墳で、本遺跡周辺では鏑川の上下位段丘面上を中心に多く見られる。また、本遺跡南方に単独で所在する多比良古墳（70）は、終末期古墳に見られる截石切組積石室を有する古墳として知られている。

奈良・平安時代（第７図―左下の分布図参照）

周辺地域に著名な遺跡としては本遺跡の北約2.3kmの吉井町大字池字御門に所在する和銅４年（711）の多湖郡建郡の記念碑である多胡碑がある。本遺跡もこの多湖郡に含まれるが、郷については大家郷に属するものと伝えられているが、武美郷とする伝承もある。一方、西接する矢田遺跡からは「八田郷」の線刻のある石製紡錘車の出土が見られ、該地が八田郷として比定されている。

さて本遺跡周辺の奈良・平安時代の集落遺跡は古墳時代の遺跡と多くは重なって、段丘面や沖積地等の広い範囲に分布しているが、全体的遺構量は古墳時代後期のそれに比べると減少している。

生産遺構としては黒熊八幡遺跡（19）・白石根岸（21）では天仁元年（1108）降下のAs-B下の水田が発見されている。

また、吉井町東南部から藤岡市西部にかけては藤岡・吉井窯址群と呼ばれる窯跡群があり、本遺跡に近い地域にも幾つかの窯跡（28～32他）が散見されるが、その分布域は集落遺跡のそれとは区分され、山地やこれに近い地域に集まっている。ここで焼かれた土器の胎土は片岩質の礫片が含まれるのが特徴で、付近の遺跡への供給が見られる。尚、藤岡・吉井窯址群の中には古墳時代の窯跡も含まれるものと思慮される。

中世城郭（第７図―右下の分布図参照）

中世以降の時期の遺構は少なくない遺跡に見られるが、集落として把握されるのは矢田遺跡だけであるため、ここでは城館について見てみたい。

本遺跡周辺の城館址の立地には崖端に築かれるもの(2,3,6～9,17,20,23)、丘陵上に築かれるもの(10,11,15,18,19,21)、平地に築かれるもの(1,2,4,5,13,14,16,22）に概ね分類される。

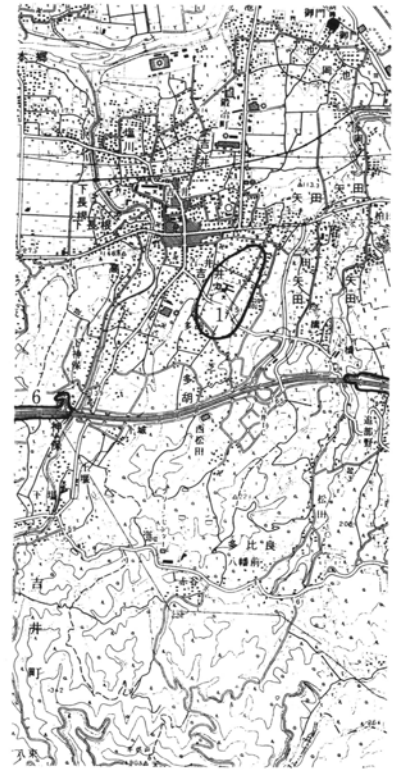
また、築城・使用年代についてみると、鎌倉時代以前のものは12世紀と推定される多湖館（12）と築城が12世紀に想定され16世紀まで続く小串城（６）の２城だけで、南北朝期に比定されるものは見られない。これに対して16世紀に絡むと想定されるものは馬庭城（３）等７城館（1,6,10,17,20,23）と多い。

一方築城者や城主が想定されるものは16城館（２～4,6,7,9,10,12,13,15,17～21,23)であり、平井城（23）の山内上杉氏と、城主について伝承等のある多湖館（12）の源義賢、天久沢陣城（15）の武田信玄以外は、関東幕注文に見られる小串館（６）の小串氏、白旗一揆で知られる植松城（17）の神保氏など地域の者が多い。

個々の遺構については触れないが、平井城（23）と本遺跡の南西に近接する多比良氏の居城で平井城の支城である新堀城（20）は総社長尾氏の築城技法とされる河川を堰止めて氾濫状態を造り出す堰止が施されていたと推定されている。

旧石器時代・縄文時代の遺跡

１．腰巻遺跡　２．砂井戸遺跡　３．馬庭東遺跡　４．川内遺跡　５．椿谷戸遺跡　６．千保原遺跡　７．入野遺跡　８．黒熊遺跡群　９．塚原遺跡　10．神保植松遺跡　11．多胡蛇黒遺跡　12．矢田遺跡　13．多比良追部野遺跡　14．多比良平野遺跡　15．黒熊中西遺跡　16．黒熊八幡遺跡　17．黒熊栗崎遺跡　18．白石根岸遺跡　19．竹沼遺跡　20．新堀城　21．祝神遺跡



弥生時代の遺跡

１．川内遺跡　２．入野遺跡　３．祝神遺跡　４．塚原遺跡　５．黒熊遺跡群遺跡　６．神保植松遺跡　７．多比良追部野遺跡　８．竹沼遺跡

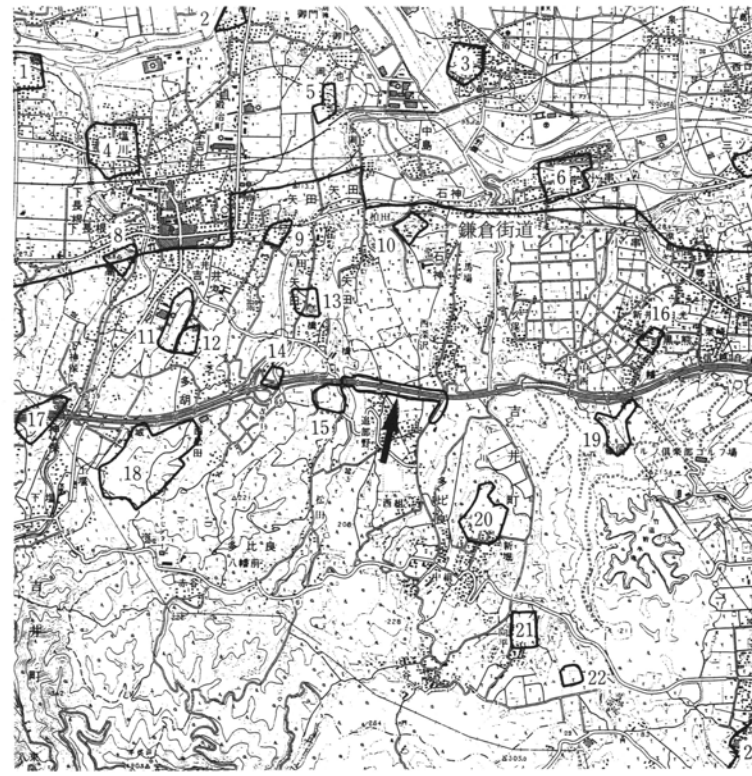
奈良・平安時代の集落及び窯跡

１．雑木味遺跡　２．砂井戸遺跡　３．岡遺跡　４．馬庭東遺跡　５．塚原遺跡　６．川内遺跡　７．椿谷戸遺跡　８．千保原遺跡　９．入野遺跡　10．黒熊遺跡群　11．南高原遺跡　12．神保植松遺跡　13．神保下城遺跡　14．多胡蛇黒遺跡　15．矢田遺跡　16．多比良追部野遺跡　17．多比良平野遺跡　18．黒熊中西遺跡　19．黒熊八幡遺跡　20．黒熊栗崎遺跡　21．白石根岸遺跡　22．柳田遺跡　23．東沢遺跡　24．塔之谷遺跡　25．不動沢遺跡　26．上の場遺跡　27．竹沼遺跡　28．下五反田窯跡　29．滝の前窯　30．未沢Ⅰ窯跡　31．未沢Ⅱ窯跡　32．下日野金井窯跡群

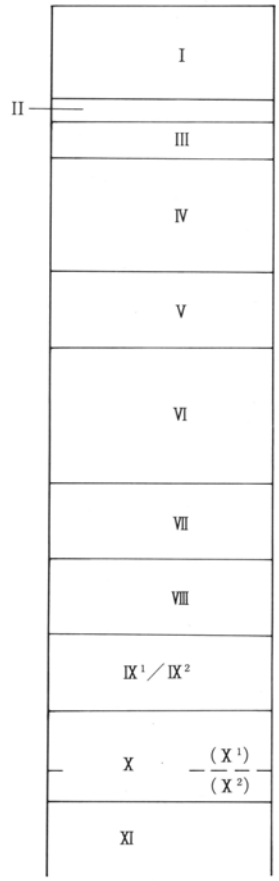
第７図　多比良追部野遺跡周辺の遺跡分布状況（左上：旧石器・縄文時代.

古墳時代の集落　古墳・古墳群（２～27は奈良・平安時代の遺跡と同じ）
50．岩崎古墳群　51．本郷古墳群　52．下池古墳群　53．塩川古墳群　54．下涼古墳群　55．高木古墳群　56．御穴塚古墳　57．松木瀬古墳群　58．西浦古墳群　59．塚原古墳群　60．小串古墳群　61．山王山古墳群　62．石神祝神古墳群　63．稲荷塚古墳　64．中天水古墳群　65．多胡古墳群　66．多胡薬師塚古墳　67．境塚古墳　68．神保古墳群　69．山ノ神古墳群　70．多比良古墳　71．南坂古墳群

中世の城館及び鎌倉街道
1．本郷城　2．上池館　3．馬庭城　4．塩川の砦　5．池城　6．小串館　7．三ツ木城　8．高の砦　9．河内の砦　10．峯山城　11．多胡城　12．多胡館　13．矢田城　14．天王原屋敷　15．天久沢陣城　16．深沢の砦　17．植松城　18．多胡下の城　19．中城　20．新堀城　21．瀬戸の城　22．中ノ原城　23．平井城



中上：弥生時代．　右上：古墳時代．　左下：奈良・平安時代．　右下：中世．）



Ⅰ：灰褐色土、現耕作土。

Ⅱ：灰褐色土層（As-A含む）。
Ⅲ：黒褐色土層。

Ⅳ：ローム漸移層。

Ⅴ：黄褐色ローム、As-Yp少量混入。

Ⅵ：褐色ローム。

Ⅶ：黄褐色ローム層、As-Bp微量に混入。

Ⅷ：黄褐色ローム層、As-Bpベース。

Ⅸ¹：暗黒褐色ローム層。
Ⅸ²：暗茶褐色ローム層。

Ⅹ：As-Bp層（Ⅹ¹：上位粒子粗い）
（Ⅹ²：下位粒子細い）

Ⅺ：暗黒褐色粘質土層。

第８図　基本土層

第３節　基本土層

第１節に述べたように本遺跡の土層は新生代第３紀の吉井層を基盤に、その上に新生代第４紀の段丘堆積層が乗り、更にローム等が堆積して成り立っているのであるが、このうち発掘調査に当たって対象となったのはローム以上の堆積層であった。

本遺跡は、段丘面に在る台地部分と、矢田川等によって形成された沖積地部分とに分かれるが、ここでは前者について述べることとし、後者については第３章第10節「Ｆ区南部の調査」及び第13節「Ｇ区北部の試掘調査」を参照されたい。

本遺跡の（台地部分の）基本土層は第８図の通りであるが、Ⅰ層は現代、Ⅱ層は近世後期以降の層であり、共にAs-Aを含んでいる。Ⅲ層は所謂黒ボク土で縄文時代以降の層であるが、Ⅱ・Ⅲ層の間にはAs-Bを含む層のあったことも想定される。尚、Ⅲ層については風倒木の観察所見からは現況以上に厚く且つ黒色のものが堆積していたことが推定される。Ⅳ層はローム層への漸移層であり、Ⅴ～Ⅸ層はローム層で、遺構確認面としたのはⅣ～Ⅴ層である。Ⅸ層は粘質土で段丘堆積層と思われるものであるが、旧石器時代の石器類はこの層から出土してきている。尚、それぞれの土層の色調は位置により若干異なる。

テフラについては、本遺跡に於いては何れも浅間山噴出のAs-A（1783）・As-B（1108）・As-YP（1.3～1.4万年前）・As-BP（1.7～2.1万年前）と南九州の姶良カルデラ噴出のAT（2.1～2.5万年前）が見られたが、明瞭且つプライマリーな層として確認されたのはAs-BP（Ⅹ層）のみであった。

第３章　発見された遺構と遺物

第１節　Ｂ区の概要

Ｂ区は、本遺跡の上信越自動車道本線部分の最も東側に位置しており、Ｆ区と共に多くの遺構が認められた地区であった。Ｂ区の中央部分は概ね平坦であるが、東側には土合川或いは２号谷に向かう斜面が広がっており、南側はＫ区の３号谷、及び３号谷の上流部に当たる谷地形に面した斜面、北側はＣ区の１号谷、及び１号谷の下流部に当たる谷地形に面した斜面が広がっており、大きく見ると鞍状の地形を呈している。また、Ｂ区の西側は地形的にも遺構の分布状態に於いても連続するＣ区と接しており、南東端部では３号谷を挟んで南に延びるＫ区と接している。Ｂ区は他の区と異なって馬入れを除く道路等が地区内を横切っていなかったために、ほぼ全面を調査することができている。

第９図　Ｂ区全体図

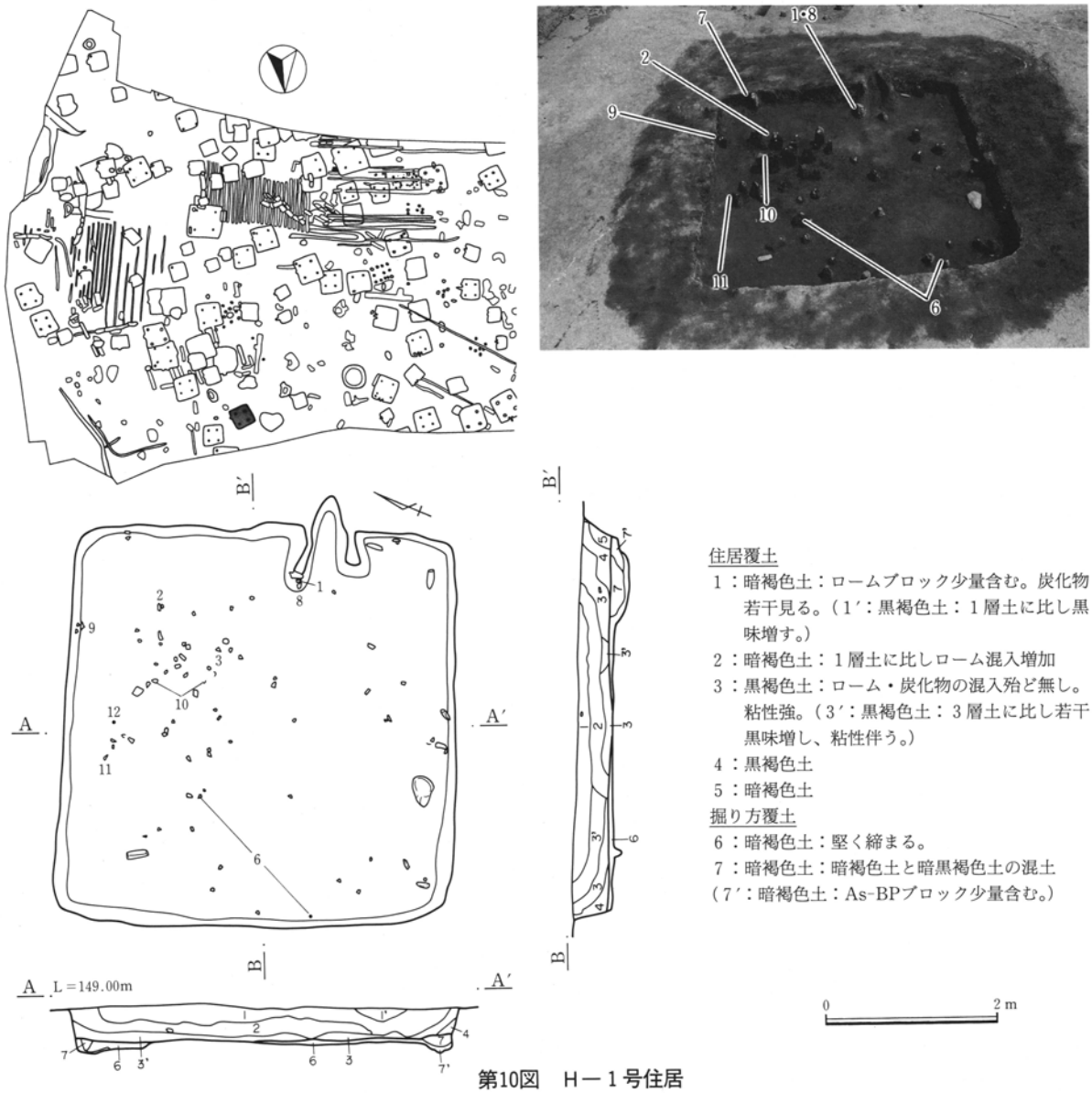
しかし乍らＢ区に於ける遺構の遺存状況は全体的には決して良好と言えるものではなかった。その原因としては、上述の斜面部に位置する遺構の上位部分への削平が小さくなかったことが挙げられる。また、Ｂ区東部の中央付近には近世の削平面が入ってそれ以前の遺構を壊しており、西部においては近現代を中心とする時期の耕作に伴うピットや溝が多く入っていて遺構へ影響を与えていたこともあった。

さて、遺構は竪穴住居を中心に各種のものが見られたが、このうち竪穴住居は本遺跡の４割を越える87軒が発見・調査された。これらは全て古墳時代後期から平安時代にかけてのものであり、このうち或る程度の時期を想定できたものは66軒で、その内訳は６世紀前半期１軒、同後半期13軒、西暦600年を前後する時期のもの21軒、７世紀前半期７軒、７世紀中葉頃４軒、７世紀後半期３軒、西暦700年を前後する時期のもの４軒、８世紀前半期のもの６軒、８世紀中葉頃１軒、８世紀後半期２軒、西暦800年を前後する時期のもの１軒、９世紀前半期のもの２軒、10世紀前半期のもの１軒であった。このように竪穴住居は６世紀後半から７世紀前半にかけてのものを中心としており、この他にも古墳時代後期のもの13軒が数えられているように古墳時代後期に比定されるものがその主体を占めている。

他の遺構も多く見られたが、その主体となすものは溝と土坑・ピットであった。このうち溝遺構は古墳時代後期以前のもの１条を含んでいるが、その中心は江戸時代後期以降のものであり、多くは耕作によるサク遺構であると判断されたが、一部道路に伴うものもあった。土坑やピットも多く発見・調査されたが、このうち江戸時代中期以前の土坑・ピットは123基以上を数え、この中で時期の特定できたものには縄文時代のもの２基と、室町時代から江戸時代前期にかけてのもの２基があった。一方、As-A 降下後の18世紀後葉以降の多数の土坑・ピットも確認されたが、これらの多くは耕作によると思われるものを主体としている。

この他、特異な遺構として２基の集石遺構があり、このうち室町時代から江戸時代前期の所産と判断された１基にはヒトの埋葬が見られた。また、古代以前の掘立柱建物２棟や平安時代のものと中世以降の各１基が確認された井戸遺構、サクに As-A を充填した畠遺構１枚を確認している他、新しくない時期の風倒木６基などを確認・調査している。

第２節　Ｂ区の遺構と遺物



第10図　Ｈ－１号住居

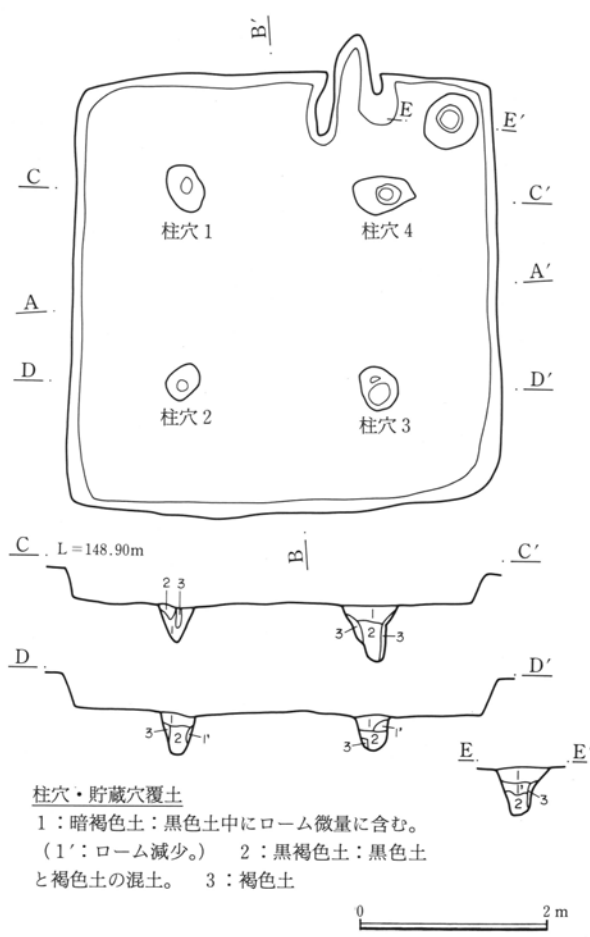
Ｈ－１号住居（古墳時代後期．第10～12図．図版５・50）

概要　本住居はＢ区北部中央に位置し、Ｂ・Ｃ区に於いては中位の規模を呈する竪穴住居跡である。

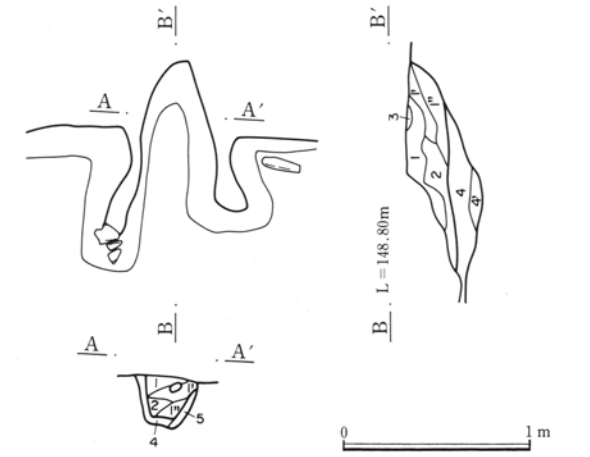
出土遺物は多くなく、覆土北側を中心に出土した。このうち本住居に伴うと判断される遺物には古墳時代後期の土師器の甑（1）や小型鉢（2）、手捏ね土器（3）があり、覆土中からは土師器を中心に縄文土器（4,5）、７世紀代の土師器の坏（6,8、7）や甕（9）、古墳時代後期の土師器甕（10,11）が出土し、こも編み石（12）も見られた。

本住居の時期特定難しいが、古墳時代後期に属し、７世紀中葉頃には窪地となっていたことが窺えることから、７世紀前半以前の所産と判断される。

規模　長軸：467cm　短軸：464cm　深さ：45cm　カマド　幅：102cm　奥行き：111cm　　左袖　幅：32cm　長さ：77cm　高さ：29cm　　右袖　幅：47cm　長さ：50cm　高さ：23cm　　燃焼部　径：23×92cm

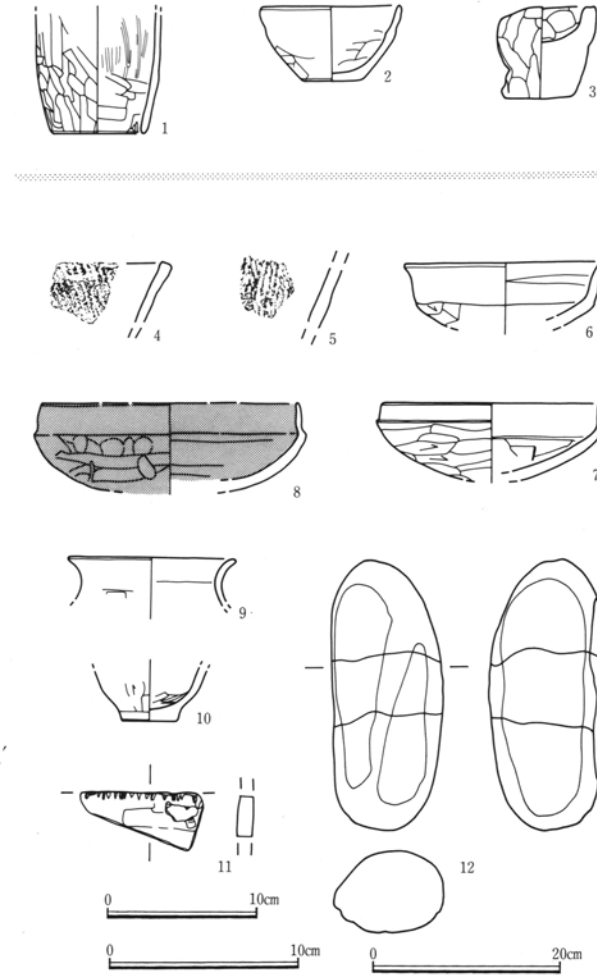


柱穴・貯蔵穴覆土
１：暗褐色土：黒色土中にローム微量に含む。（１′：ローム減少。）　２：黒褐色土：黒色土と褐色土の混土。　３：褐色土



カマド覆土
１：赤褐色土：炭化物･焼土ブロック少量含む。（１′：赤味減少し混入物微量。　１″：焼土ブロック多）　２：暗褐色土：微量の焼土混入。　３：暗赤褐色土：焼土主体。堅く締まる。
カマド掘り方覆土
４：暗赤褐色土：焼土中ブロック少量含む。（４′：焼土主体）
５：暗赤褐色土：褐色土と赤褐色土の混土。

第11図　Ｈ－１号住居及び出土遺物

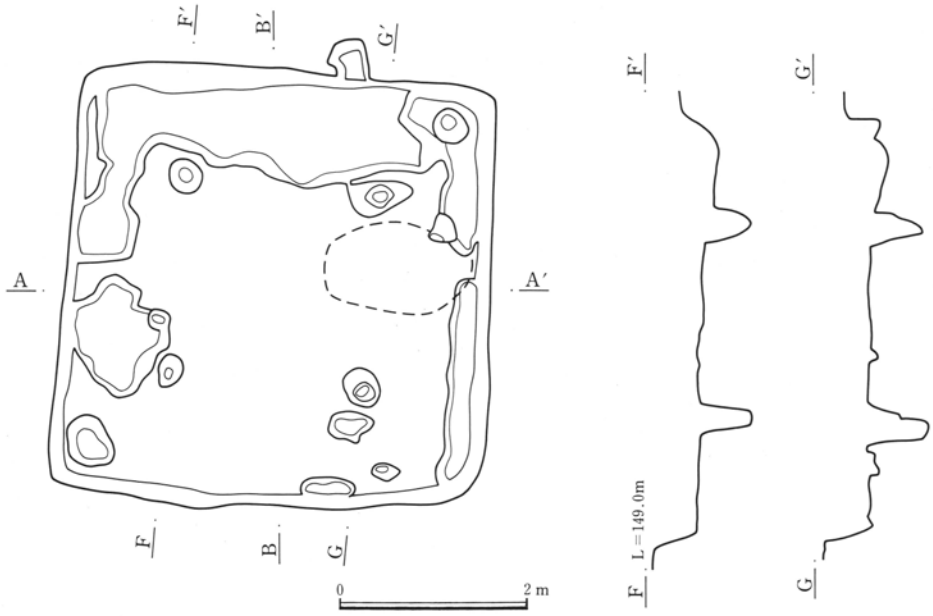


煙道　幅：33cm　長さ：23cm
柱穴１　径：54×36cm　深さ：47cm　　柱穴２　径41×31cm　深さ：53cm　　柱穴３　径：47×40cm　深さ：60cm　　柱穴４　径：60×42cm　深さ：57cm
貯蔵穴　径：60×58cm　深さ：54cm

構造　本住居は方形のプランを呈する。掘り方は東壁と南北壁の一部に幅約１m、深さ10～15cmの周溝状の掘り込みを持ち、160×96cmの床下粘土坑を持つ。これを暗褐色土を中心とする土で埋戻して床面を造り出している。

カマドは東を向き、浅い掘り方を埋め戻して造る。

柱穴は４カ所あり、何れも楕円形のプランを呈する。断面観察から柱の径は柱穴２では10cm、柱穴４では25cm程を測る。貯蔵穴はカマド右側に造られ、円形プランで摺鉢状を呈する。



第12図　Ｈ－１号住居掘り方

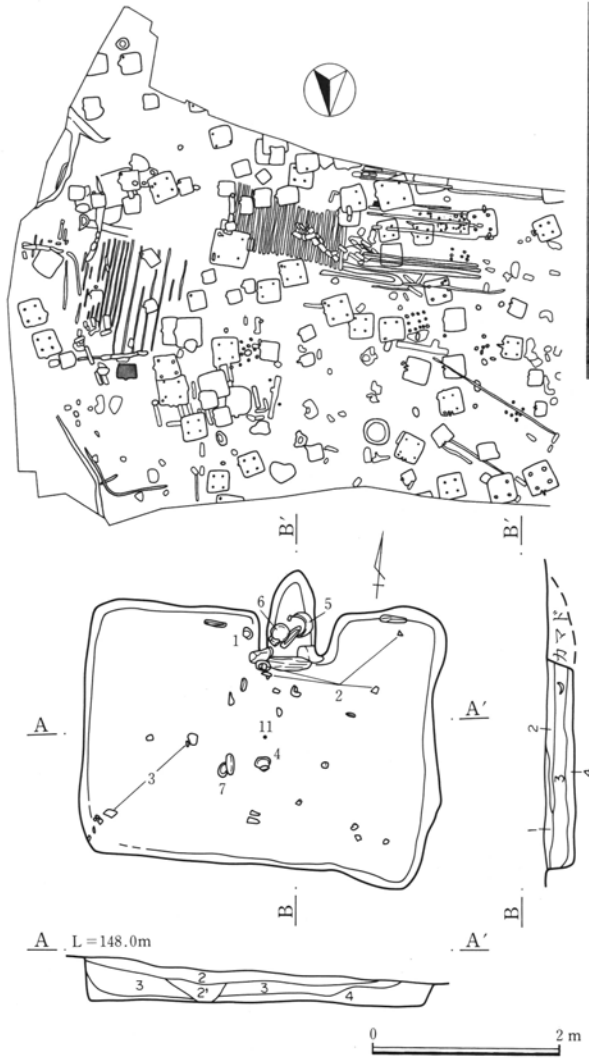
Ｈ－２号住居（古墳時代後期．第13～14図．図版５・50）

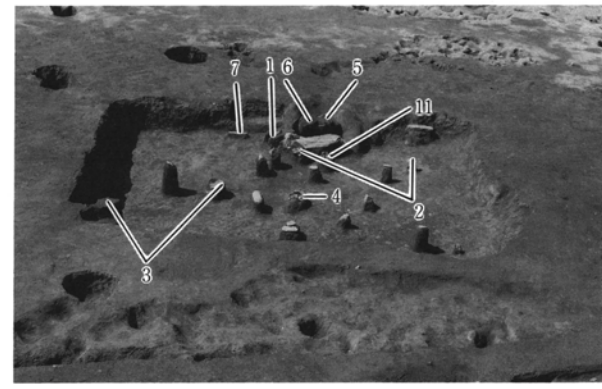
概要　本住居はＢ区東部に位置する小型の竪穴住居跡である。

出土遺物は多くなかったが、本住居に伴うものと判断される遺物には６世紀後半期の特徴を持つ土師器坏（3）、土師器甕（5）、６世紀後半から７世紀前半期の特徴を示す土師器甕（6）、７世紀前半期の特徴を示す土師器坏（2）のほか磨石からの転用品であるこも編み石（7）がある。また、覆土中からは７世紀代の土師器の坏・甕を中心に７世紀前半期の特徴を持つ土師器坏（11）の他、土錘（8）や縄文時代のフレーク（9）、磨石（10）などの石器などが出土している。

これらの遺物の状況から本住居はA.D.600年前後の所産と判断される。

規模　長軸：382cm　短軸：297cm　深さ：42cm
カマド　幅：96cm　奥行き：93cm　左袖　幅：18cm



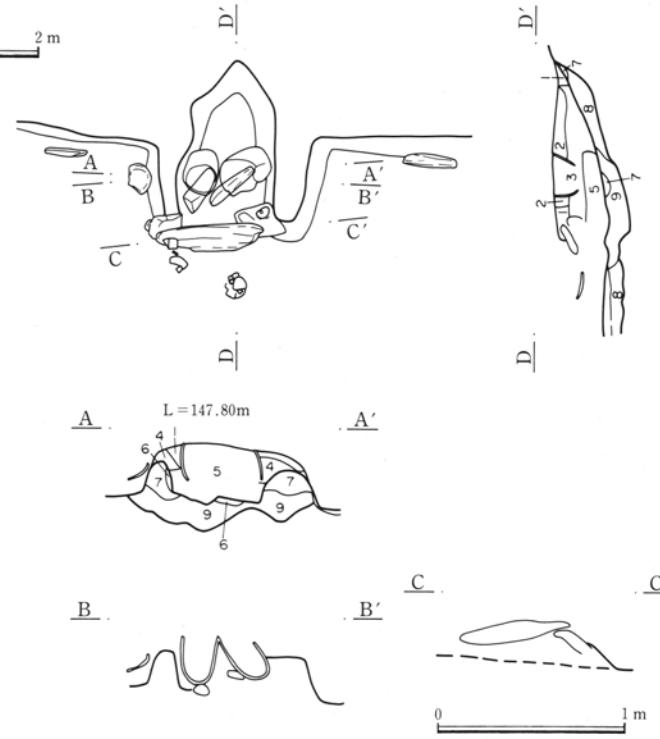


住居覆土（良く締まり、粘性やや有り）
１：暗褐色土：As-A僅かに入る。　２：暗褐色土：ローム粒極く僅か。（２′：２層に比しローム粒やや多い。）　３：暗褐色土：ローム粒等僅かに含む。　４：暗黄褐色土：ローム主体。粘性有り。

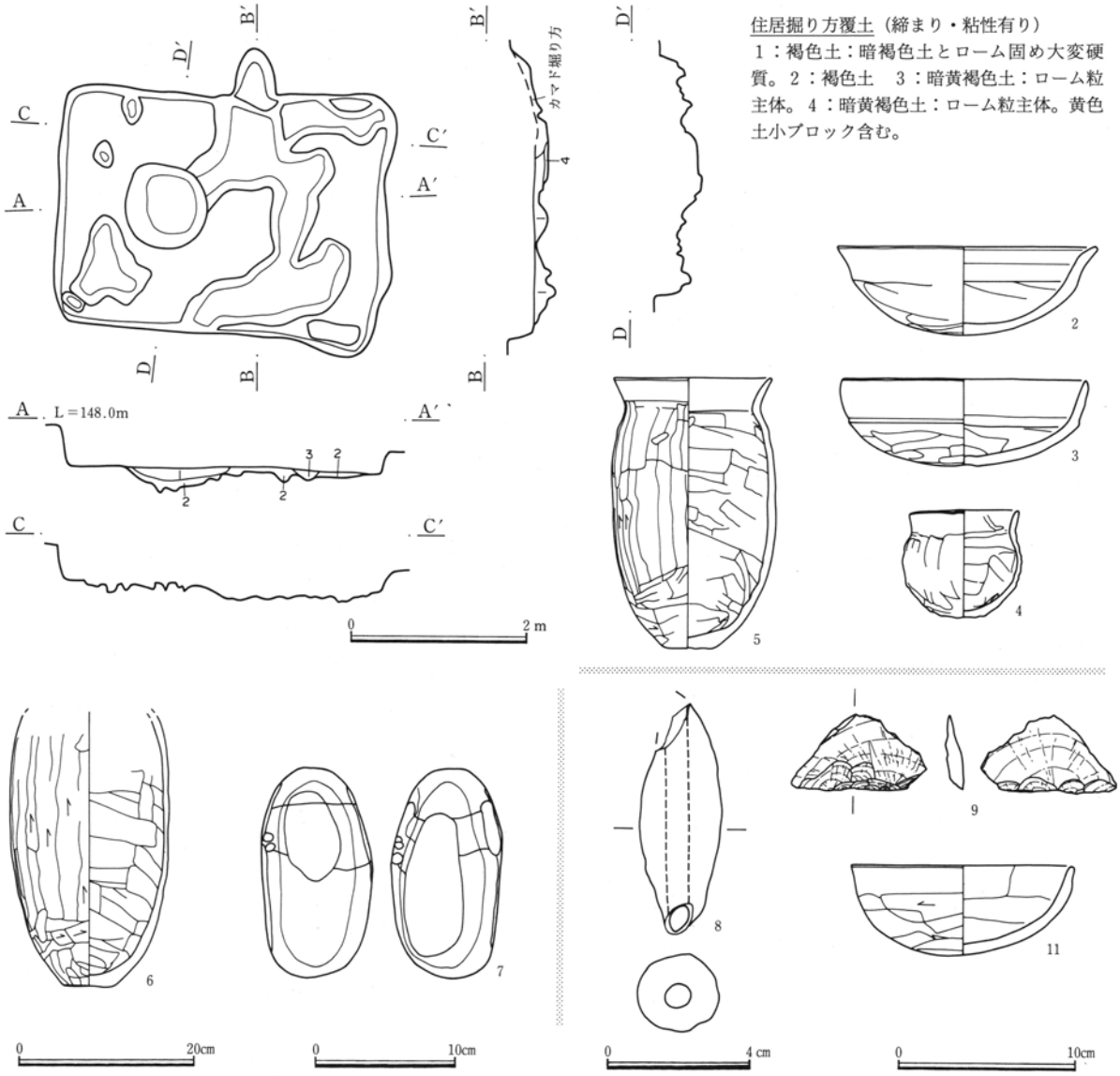
カマド覆土（締まり・粘性有り）
１：暗褐色土：僅かなローム粒等含む。　２：暗茶褐色土：赤味帯び、ローム粒やや多く含む。　３：暗赤褐色土：赤味帯びる。焼土粒やや多く含む。　４：暗黄褐色土：袖の崩落層。僅かな焼土等含む。　５：暗赤褐色土：赤味帯びる。焼土粒多量に含む。
袖構築材
６：暗茶褐色土：赤味帯びる。ローム粒と焼土粒の細粒の混土。やや締まり悪いが粘性やや有り。　７：暗茶褐色土：やや汚れたローム粒を硬く締めた層。焼土粒等僅かに含む。粘性有り。
カマド掘り方覆土
８：暗黄褐色土：ローム粒多量に含み赤味がかる粒子混入。締まりと粘性有り。　９：暗褐色土：暗黒褐色粒と僅かなローム粒等混入。

長さ：50cm　高さ：20cm　　右袖幅29cm　長さ：56cm　高さ：29cm　燃焼部　径：47×92cm　煙道幅：21cm　長さ：16cm
床下土坑　径：95×94cm　深さ：12cm
構造　本住居は横長の隅丸方形のプランを呈し、床下土坑を持つ掘り方を黄褐色～褐色の土で埋め戻して床を造る。

カマドは浅い掘り方を埋め、焼土を含む暗茶褐色土で袖を造っている。左右両袖の先端に袖石を持ち、天井石が設置される。カマドには甕が２個並列に設置されている。



第13図　Ｈ－２号住居及びカマド



第14図　Ｈ－２号住居掘り方及び出土遺物

尚、柱穴・貯蔵穴等の施設を確認することはできなかった。

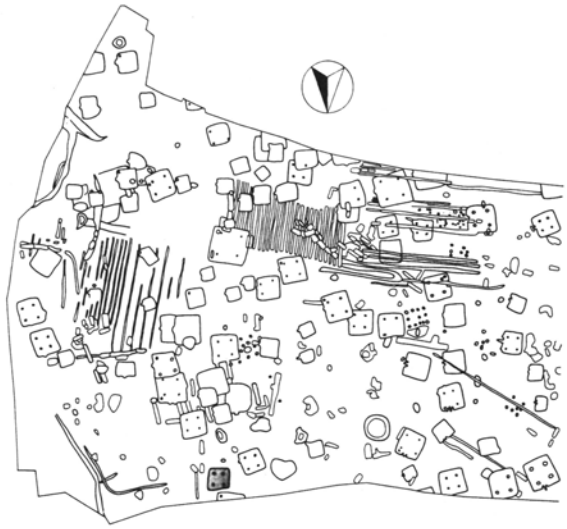
Ｈ－３号住居（古墳時代後期．第15～16図．図版６・50・51・89）

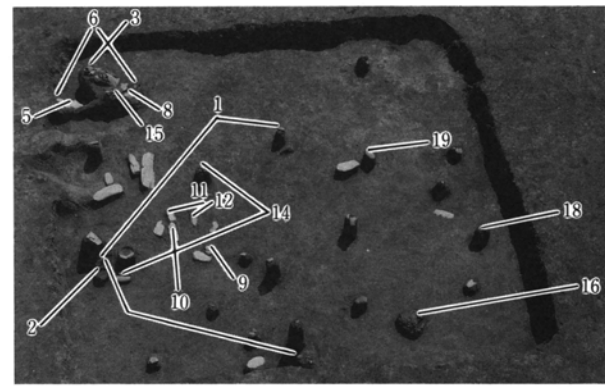
概要　本住居はＢ区北部に位置する中型の竪穴住居跡である。カマドの右袖には攪乱が入り込んで遺構を痛めていた。

出土遺物のうち本住居に伴うと判断されるものには６世紀後半の土師器の甕（5）・甑（8）、西暦700年前後の土師器坏（2）、７世紀前半の土師器の坏（1）高坏（3）や甕(4,6)、小型甕（7）があり、覆土中からは土師器の甕を中心に６世紀代（15）と７世紀代の土師器甕、７世紀後半の土師器坏(14)、石皿(18)、磨石（20）、敲石からの転用のもの（17）を含むこも編み石（19）などが出土している。

従って本住居は６世紀末～７世紀初頭の所産と判断される。

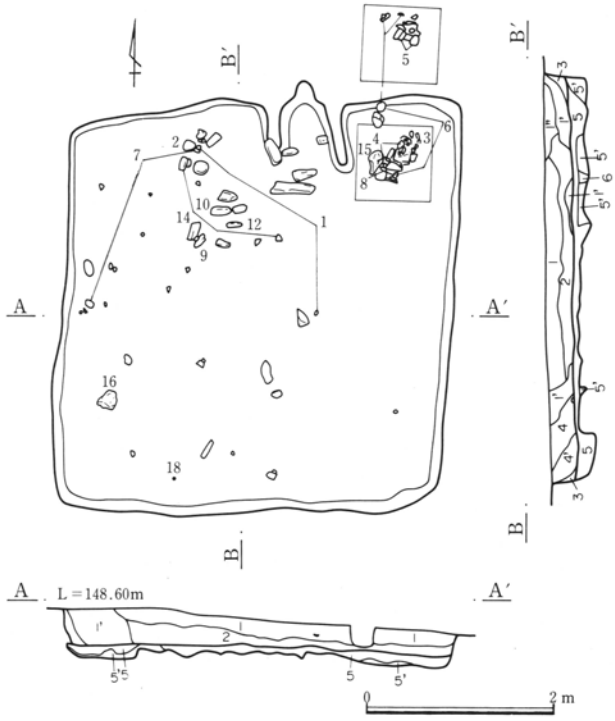
規模　長軸：444cm　短軸：417cm　深さ：38cm　カマド　幅：94cm　奥行き：99cm　　左袖　幅：33cm　長さ：56cm　高さ：11cm　　右袖　幅：27cm　長さ：68cm　高さ：12cm　燃焼部　径：39×(45)cm　煙道　幅：21cm　長さ：30cm

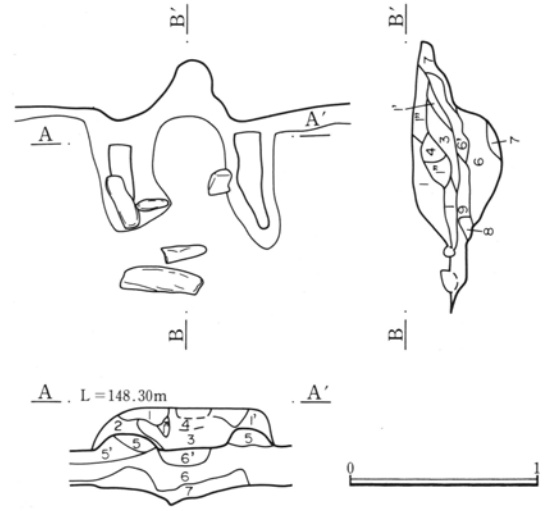




住居覆土
１：黒褐色砂質土：褐色土粒少量。（1′：ぼやけた茶褐色土入。1″：褐色土の粒径大きく多量。）　２：黒褐色土：褐色土若干混入。　３：黒褐色土主体。４：黒褐色土：黒色土と褐色土の混土主体。（4′：暗褐色土：褐色土増加。焼土粒混入も多。）
住居掘り方覆土
５：暗褐色土：黒色土と褐色土の混土。ロームブロック混入。（5′：褐色土粒中に黒色土混入。）　６：褐色土

カマド覆土
１：暗黄褐色土：暗褐色土と焼土粒の混土。焼土極く少量含む。（1′：焼土の減少。　1″：焼土の増加。）　２：暗褐色土：暗褐色土とロームの混土。　３：赤黒褐色土：焼土主体。最も火を強く受けた層。４：淡灰褐色粘質土：焼土の混入皆無。
袖構築材
５：褐色土：黒色土を微量に含む。（5′：黒色土混入。）
カマド掘り方覆土
６：黒色土：淡褐色土・焼土含む構築時の第２次客土。（6′：焼土微量。）　７：暗褐色土：褐色土と黒色土の混土。構築時の第１次客土。　８：褐色土：ローム。９：暗黒褐色土





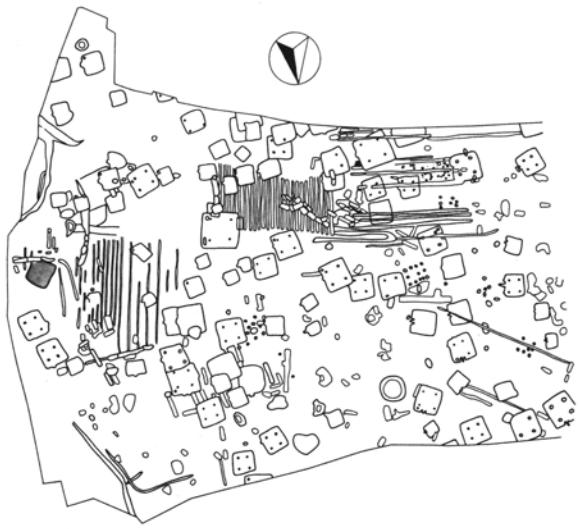
第15図　Ｈ－３号住居及びカマド

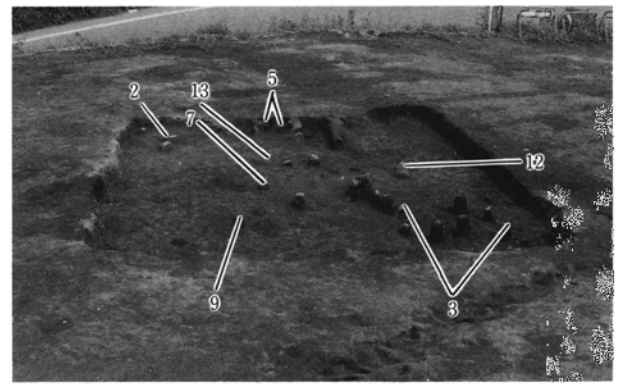
構造　本住居はやや菱形に近い方形のプランを呈する。床面は、掘り方を暗褐色土を中心とする土で埋め戻して作り出している。

カマドは浅い掘り方を持ち、暗褐色土、更に黒色土で埋めて燃焼部を造りだし、黒色土の入る褐色土で袖を造っている。カマド左袖を中心に多量の片岩系の石が出土しているが、これらの石は袖・天井構築材への混入が考えられる。

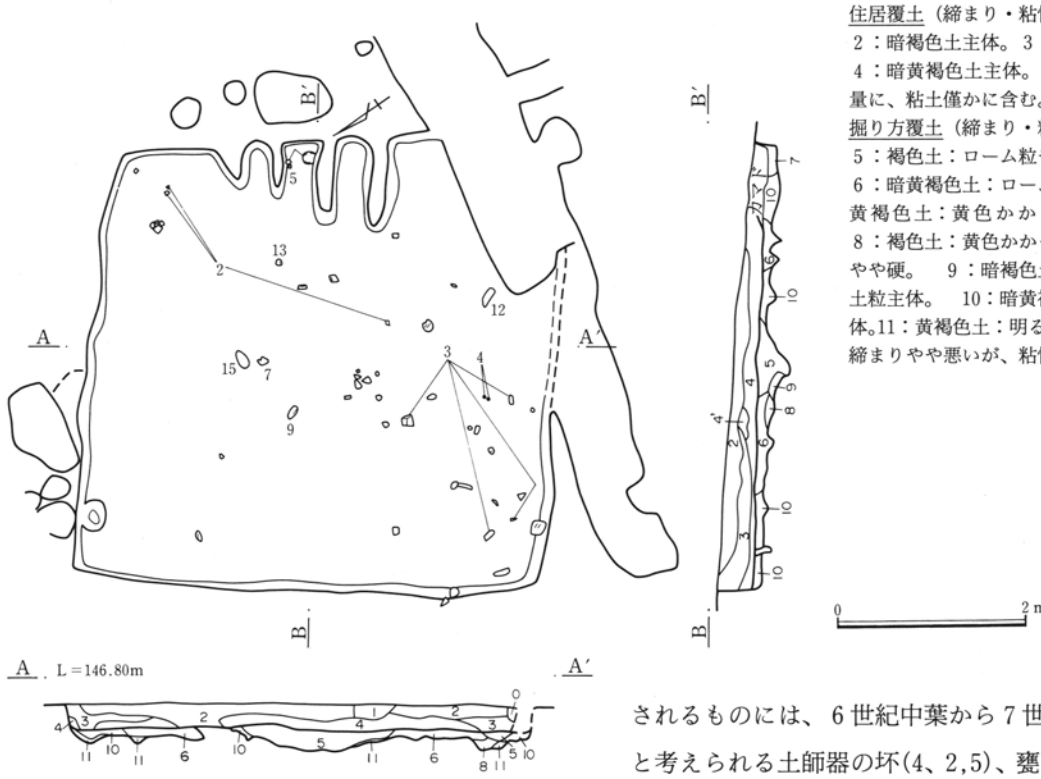
尚、本住居には柱穴・貯蔵穴等の施設は確認されなかった。

第16図　Ｈ－３号住居掘り方及び出土遺物





耕作土
１：暗褐色土：As-A僅かに混入。
住居覆土（締まり・粘性有り）
２：暗褐色土主体。３：暗褐色土主体。
４：暗黄褐色土主体。（4′：ローム粒多量に、粘土僅かに含む。）
掘り方覆土（締まり・粘性有り）
５：褐色土：ローム粒やや多く含む。
６：暗黄褐色土：ローム主体。　７：暗黄褐色土：黄色かかる褐色土主体。
８：褐色土：黄色かかった褐色土主体。やや硬。　９：暗褐色土：細かい暗褐色土粒主体。　10：暗黄褐色土：ローム主体。11：黄褐色土：明るいローム粒主体。締まりやや悪いが、粘性やや強。



第17図　Ｈ－４号住居

Ｈ－４号住居（古墳時代後期．第17～19図．図版６・51・89）

概要　本住居は併設する２基のカマドを持つ特徴的な竪穴住居跡で、Ｂ区東端の土合川に至る傾斜面の肩部に位置するものの１軒である。その規模はＢ・Ｃ区に於いては中型である。

出土遺物は多いが、このうち本住居に伴うと判断されるものには、６世紀中葉から７世紀前半の所産と考えられる土師器の坏(4、2,5)、甕(3,6)・甑(7)、須恵器蓋（1）があり、磨石からの転用品（9）を含むこも編み石（8）も出土している。また、覆土中からは土師器の坏・甕を中心に６世紀後半の土師器甕（10）のほか、磨石・砥石（11,12)、敲石（14）やこも編み石への転用品（15）を含む凹石（13）も見られる。

従って本住居は概ね６世紀から７世紀への以降期の所産と判断される。

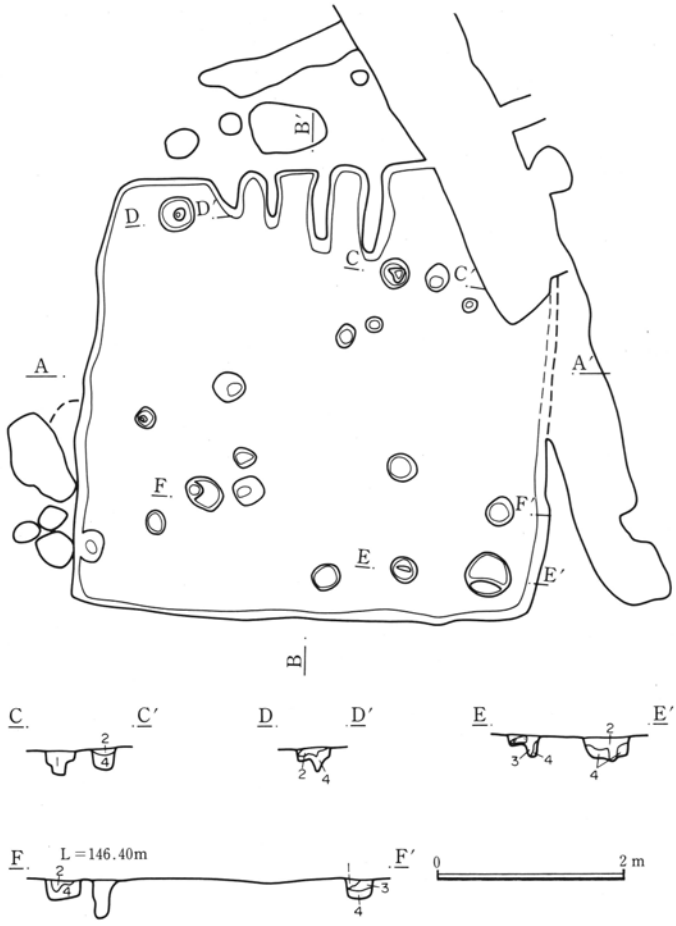
規模　長軸：505cm　短軸：492cm　深さ：42cm
左カマド　幅：80cm　奥行き：60cm　　左袖　幅：

35cm　長さ：46cm　高さ：12cm　　右袖
幅：24cm　長さ：55cm　高さ：11cm　　燃
焼部　径：23×(47)cm
右カマド　幅：93cm　奥行き：100cm
左袖　幅：29cm　長さ：87cm　高さ：20cm
右袖　幅：35cm　長さ：96cm　高さ：17cm
燃焼部　径：30×(87)cm

構造　本住居は僅かに横長の方形のプランを呈し、掘り方を黄褐色土～暗褐色土の多様な土で埋め戻して床を作り出している。

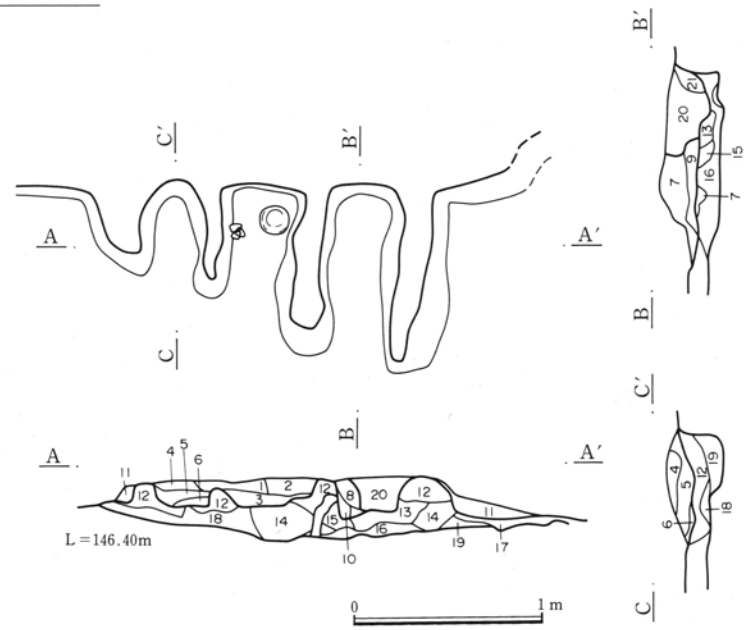
カマドは東壁に２基を並べるが遺存状況から同時併存と判断される。築造は左カマドが先であり浅い掘り方を暗黄褐色土で埋め戻し焼土をやや多く含む暗黄褐色土で袖を造り出している。右カマドは左カマドの掘り方を切って浅い掘り方を造り、これを褐色・暗褐色・暗黄褐色土で埋め、左カマドど同様の土で袖を造っている。

住居床面には多くのピットが認められるが、周辺を含めたピット群の中にあり、本住居の柱穴・貯蔵穴を特定することはできなかった。

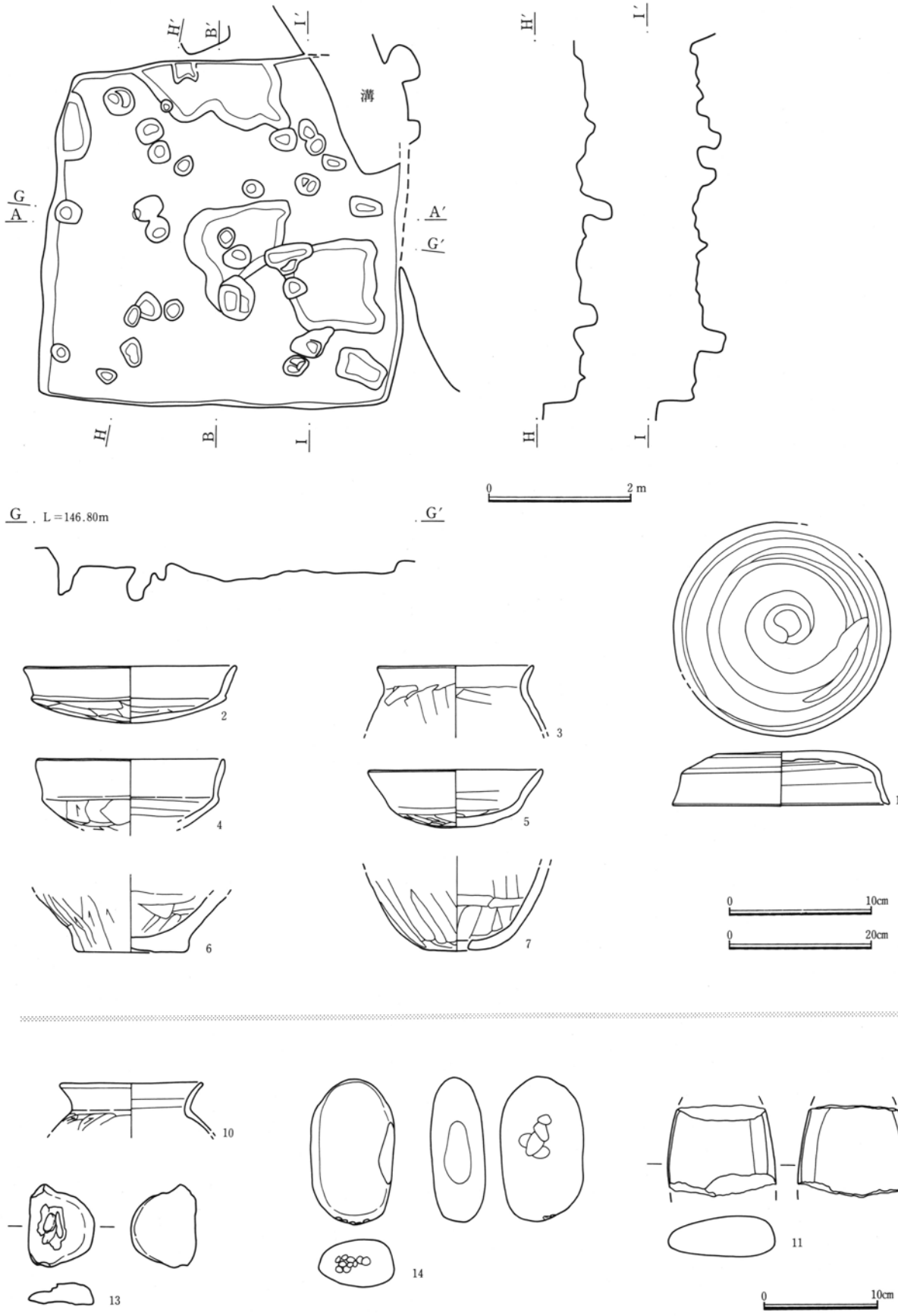


柱穴・ピット覆土
1：暗褐色土主体。　2：暗茶褐色土主体。　3：やわらかく汚れたローム粒の集合体。　4：黄褐色土：やわらかくきれいなローム粒の集合体。

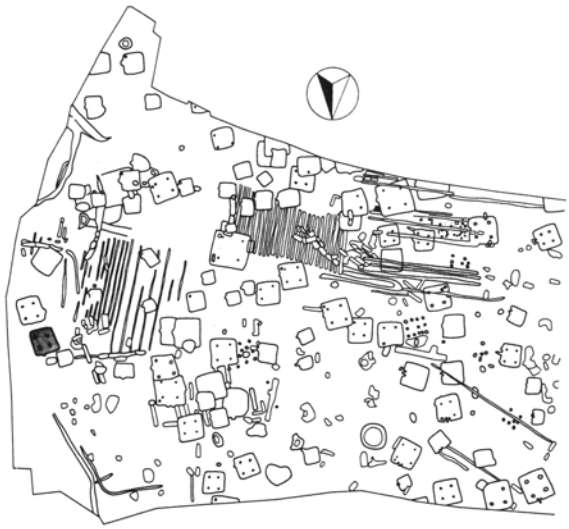
カマド覆土
1：暗褐色土：攪乱層。　2・5：僅かに赤みを帯びる褐色土主体。　3：暗褐色土：ローム粒やや多。　4：褐色土：ローム粒やや多。　6：暗褐色土：ローム粒やや多。　7：やや赤味を帯びる褐色土主体。　8：暗茶褐色土：９層に似るが焼土粒僅か。　9：暗茶褐色土：赤味を帯び焼土細粒多量に含。　10：暗褐色土：13層に似るがローム粒やや多。　11：赤褐色土：焼土粒やや多。
袖構築材
12：暗黄褐色土：ローム粒を固く締めた層。焼土粒やや多。硬い。
カマド掘り方覆土
13：暗褐色土：ローム粒やや多。　14：暗褐色土：灰色がかったローム粒主体。15：褐色土：ローム粒多量に含。　16：暗黄褐色土：ローム粒主体。17：褐色土：ローム粒多量に含。18：暗黄褐色土　19：黄褐色土：ローム粒主体。
住居廃棄後のピット覆土
20：暗褐色土：僅かのローム等含。　21：暗黒褐色土：ローム粒やや多く含。

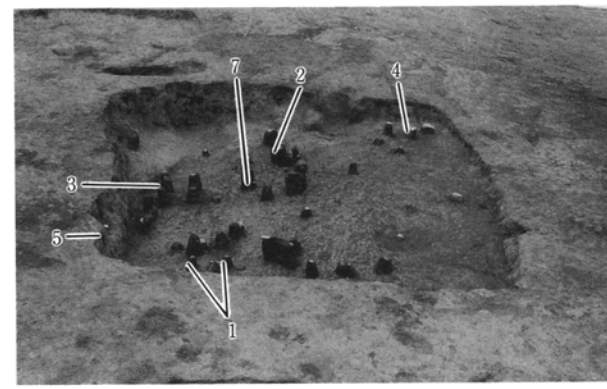


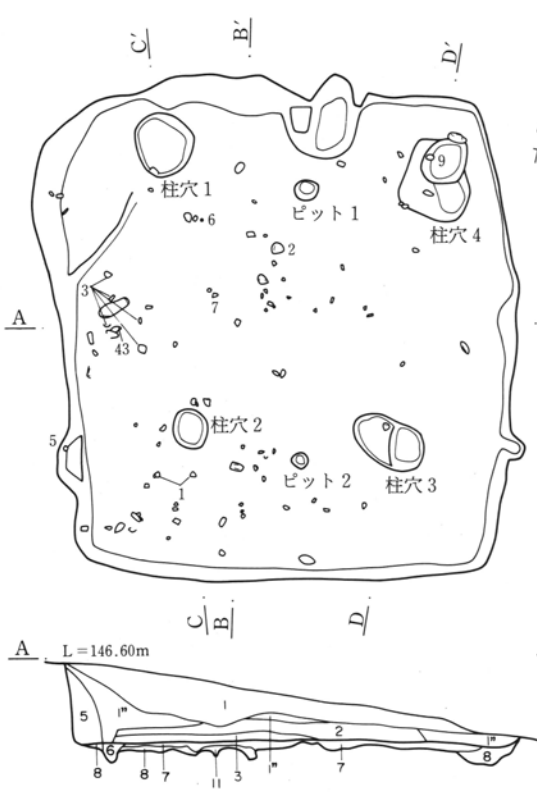
第18図　Ｈ－４号住居及びカマド



第19図　Ｈ－４号住居掘り方及び出土遺物







住居覆土（締・粘性有り）
１：暗褐色土：暗褐色土主体。（1′：焼土細粒多。1″：１・２層の漸移層）。２：暗黄褐色土：ローム多量。３：黒褐色土：黒褐色土主体。　４：暗黄褐色土。（4′：焼土粒僅かに含。）５：暗黄褐色ローム粒主体。

掘り方覆土（締・粘性有り）
６：褐色土層：ローム・炭化物僅か。　７：褐色土層：ロームと褐色土の混土主体。固く締まる。　８：褐色土：７層に比しローム多。９：暗黄褐色土：ローム多くやや締まり悪。10：黄褐色土ローム粒主体。　11：黄褐色ローム粒の集合体。

柱穴覆土（As-BP含むローム多。全体にやや締まり悪）。１：黒褐色粘質土小ブロック層。　２：暗黄褐色土。３：黄褐色土ロームブロック層。　４：暗褐色土主体。５：褐色土。　６：暗黄褐色土／７：黄褐色土：汚れたローム粒主体。７層は締まり有り。

第20図　Ｈ－５号住居

Ｈ－５号住居（古墳時代後期．第20～21図．図版６～７・52・89）

概要　本住居はＢ区東端の斜面に位置するカマドを有する竪穴住居で、東側に大きく削られる。

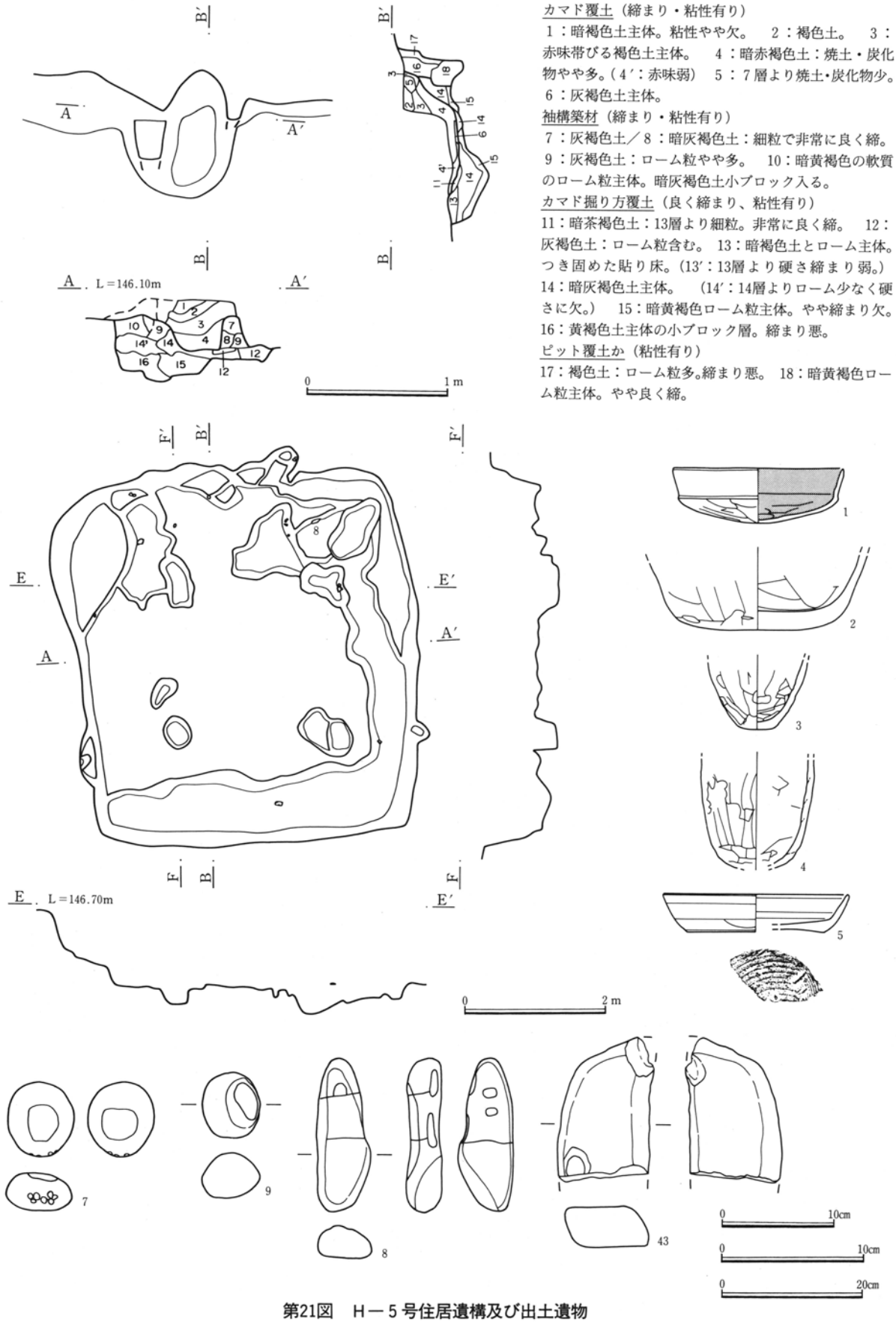
本住居に伴う遺物は特定できなかったが、覆土中から６・７世紀の土師器甕（4,16、3,17）を中心に７世紀代の土師器坏・椀（1,10,27,28,2）等が多く出土するため、６世紀後半代の所産の可能性がある。また８世紀後半の須恵器坏(5)、敲石(7)、磨石(9)とこも編み石（6,8）なども出土している。

規模　長軸：532cm　短軸：488cm　深さ：89cm

カマド　幅：92cm　奥行き：90cm　　左袖　幅：40cm　長さ：59cm　高さ：24cm　　燃焼部　径：29×60cm

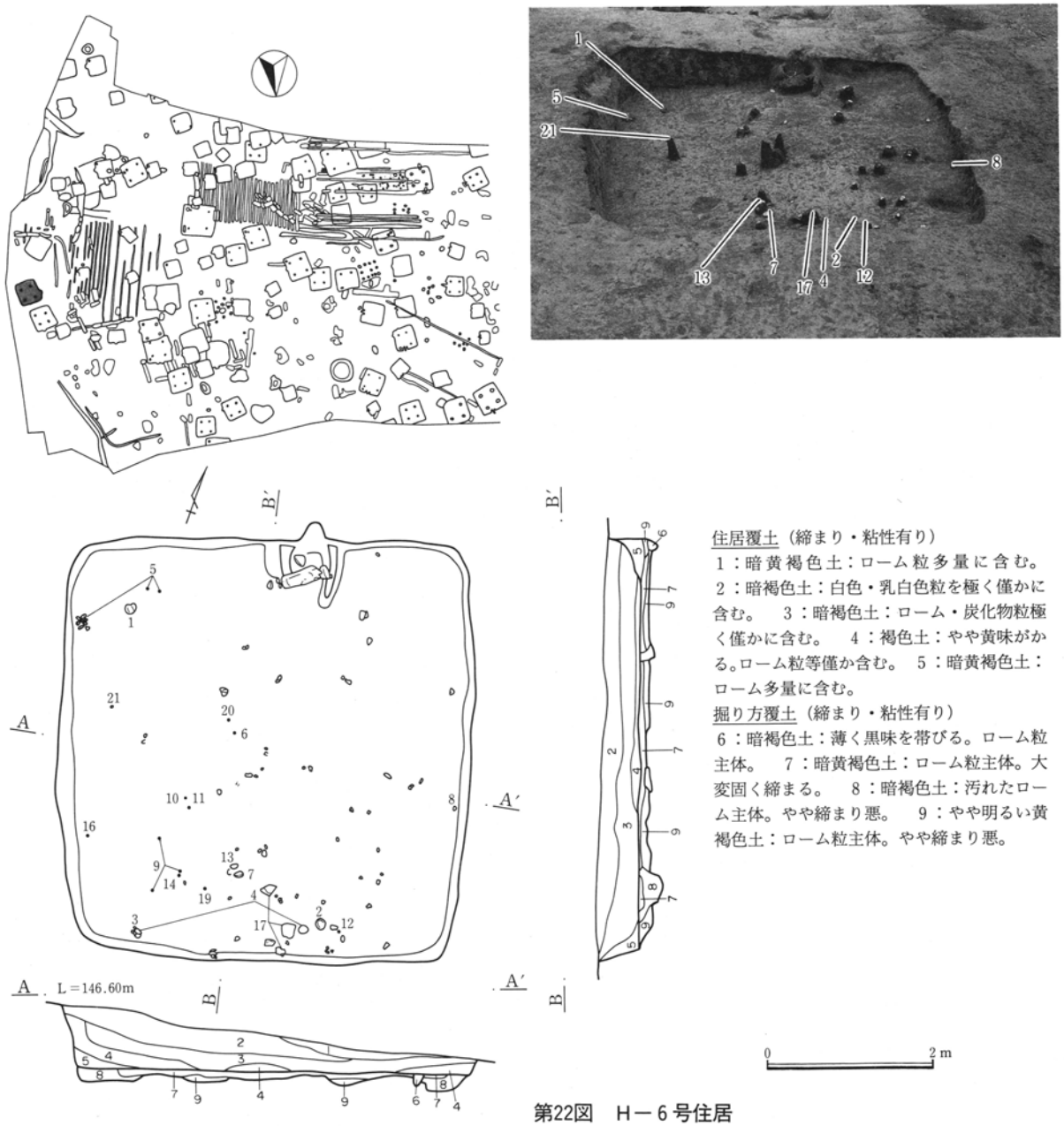
煙道　幅：45cm　長さ：24cm

柱穴１　径：68×61cm　深さ：22cm　　柱穴２　径：45×37cm　深さ：35cm　　柱穴３　径：80×51cm(本体径：50×38cm)　深さ：45cm　　柱穴４　径：88×74cm(本体径：48×46cm)　深さ：39cm



カマド覆土（締まり・粘性有り）
１：暗褐色土主体。粘性やや欠。　２：褐色土。　３：赤味帯びる褐色土主体。　４：暗赤褐色土：焼土・炭化物やや多。（４′：赤味弱）　５：７層より焼土・炭化物少。　６：灰褐色土主体。
袖構築材（締まり・粘性有り）
７：灰褐色土／８：暗灰褐色土：細粒で非常に良く締。　９：灰褐色土：ローム粒やや多。　10：暗黄褐色の軟質のローム粒主体。暗灰褐色土小ブロック入る。
カマド掘り方覆土（良く締まり、粘性有り）
11：暗茶褐色土：13層より細粒。非常に良く締。　12：灰褐色土：ローム粒含む。　13：暗褐色土とローム主体。つき固めた貼り床。（13′：13層より硬さ締まり弱。）　14：暗灰褐色土主体。　（14′：14層よりローム少なく硬さに欠。）　15：暗黄褐色ローム粒主体。やや締まり欠。　16：黄褐色土主体の小ブロック層。締まり悪。
ピット覆土か（粘性有り）
17：褐色土：ローム粒多。締まり悪。　18：暗黄褐色ローム粒主体。やや良く締。

第21図　Ｈ－５号住居遺構及び出土遺物



第22図　Ｈ－６号住居

小ピット１（北）　径：25×22cm　深さ：22cm

小ピット２（南）　径：17×17cm　深さ：13cm

構造　南壁沿いに南壁と東壁際に溝状の浅い掘り込みを伴う掘り方を、褐色土～暗黄褐色土で埋め、褐色土で貼床を施す。

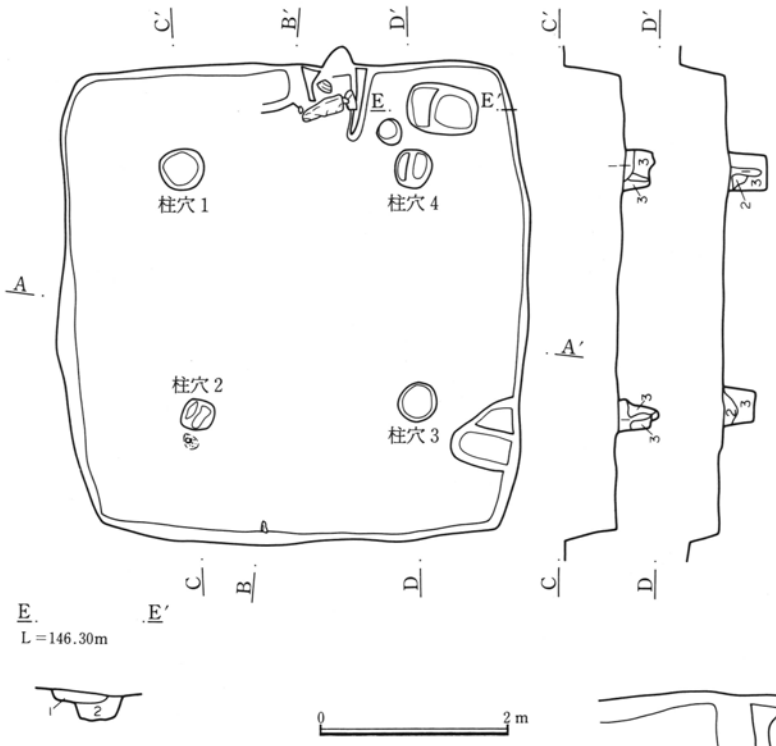
カマドは浅い掘り方を暗灰褐色土・暗黄褐色土で埋め戻し、灰褐色土・暗灰褐色土で袖を造り出す。

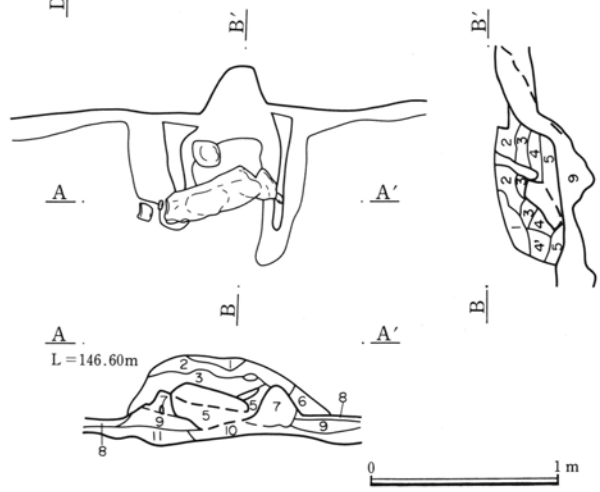
主柱穴は４基で、柱穴３・４には抜き痕と思われる広がりを見る。貯蔵穴は特定できず、中軸に沿う小ピット２基は本住居との拘わりを特定できない。

Ｈ－６号住居（古墳時代後期．第22～24図．図版７・52・89）

概要　本住居はＨ－５号住居と同様Ｂ区東端の斜面に位置する中型の竪穴住居跡である。

出土遺物のうち本住居に伴うと判断されるものには６世紀後半（1,2,5、4）から７世紀前半（3）にかけての土師器坏と、敲石からの転用品（7）を含むこも編み石（6,8）があり、本住居は西暦600年前後の





第23図　Ｈ－６号住居及びカマド

時期の所産であると判断される。また、柱穴２の南の床面には粘土が置かれていた。

覆土中からの出土遺物は若干７世紀後半期のものも含まれるが、多くは本住居と同時期の土師器の坏（13,14、12）・小型甕（15）・鉢（16）や甕（17）であり、こも編み石（18,19,20,21）も出土する。この他縄文時代の無文の縄文土器（9）、スクレイパー（10）、剝片石器（11）なども見られる。

規模　長軸：510cm　短軸：494cm　深さ：83cm

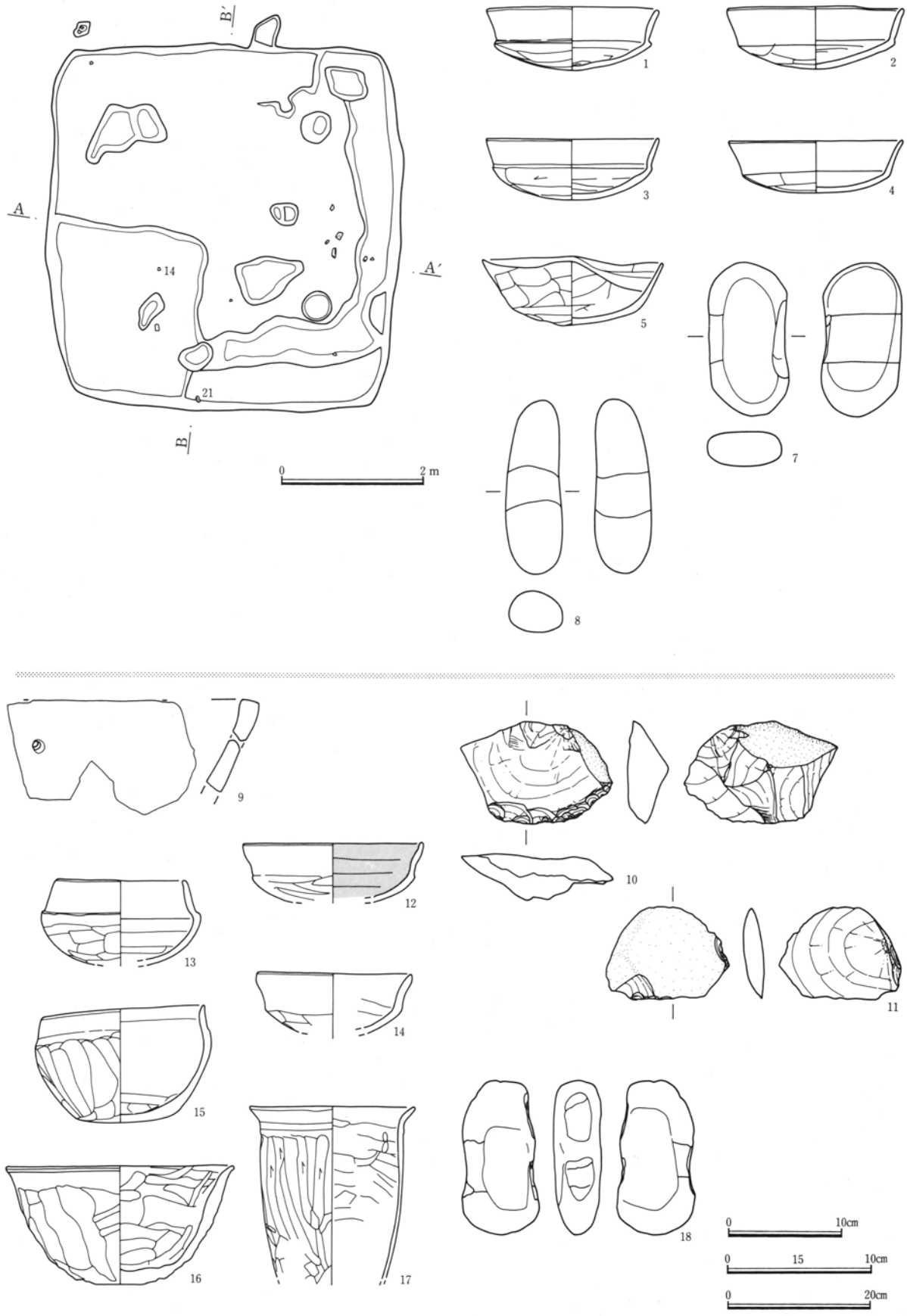
カマド　幅：95cm　奥行き：105cm　　左袖　幅：32cm　長さ：61cm　高さ：28cm　　右袖　幅：24cm　長さ：85cm　高さ：26cm　　燃焼部　径：37×67cm　煙道　幅：35cm　長さ：38cm

柱穴１　径：47×44cm　深さ：34cm　　柱穴２　径：34×32cm　深さ：44cm　　柱穴３　径：41×39cm　深さ：37cm　　柱穴４　径：40×39cm　深さ：46cm　貯蔵穴　径：76×33cm　深さ：25cm　　小ピット　径：26×26cm　深さ：22cm

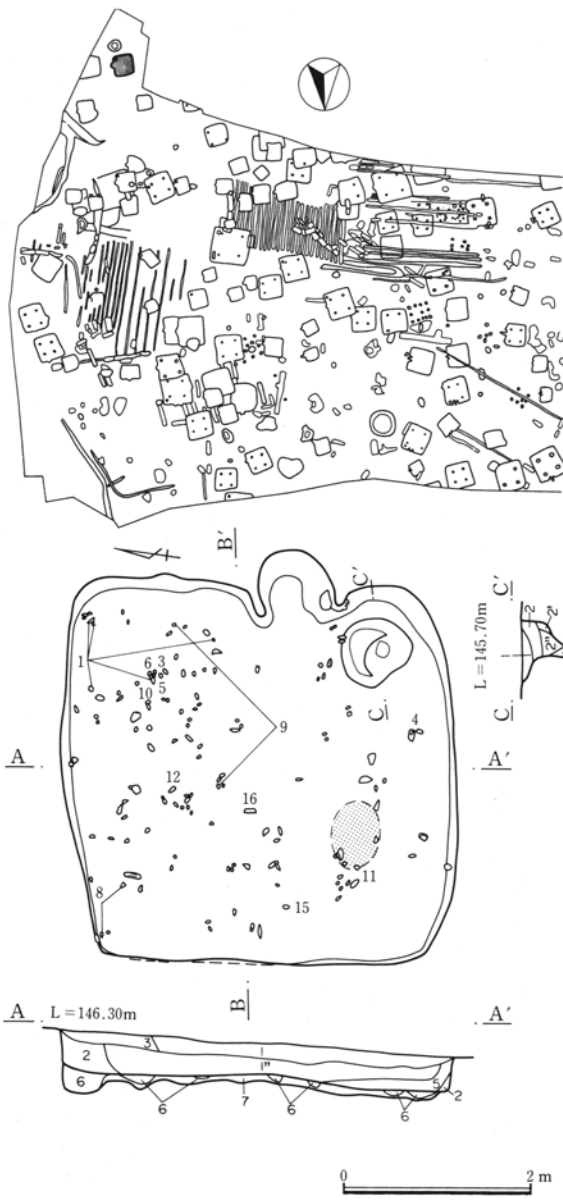
構造　本住居は凡そ隅丸方形のプランを呈し、東壁直下及び南壁から50cm程の位置に幅63cm以下、深さ７cm程の溝を伴う掘り方を、暗褐色土或は黄褐色土で埋め戻し、暗黄褐色土で貼床を施す。

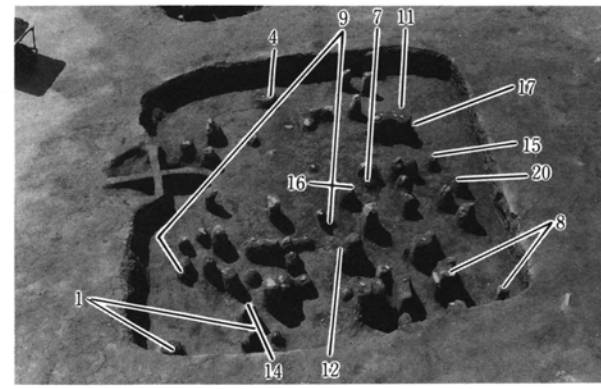
カマドは浅い掘り方を黄褐色・暗黄褐色土で埋め戻し、袖は袖石を両袖に１基づつ建てて暗褐色粘質土を用いて構築している。袖石上には天井石が載せられ、燃焼部左奥に支脚らしき礫が１ケ残されるため、甕は２個並列に設置されていたと判断される。

主柱穴はやや北寄りの位置に４基あり、カマド右側に隅丸方形プランでカマド側にテラスを持つ貯蔵穴が掘削される。カマドと貯蔵穴・柱穴４の間に見られる小ピットは本住居に伴うかどうか特定できなかった。また、東壁南部には幅78cm、長さ65cm、深さ14cmを測る三角様の落ち込みが確認されている。



第24図　Ｈ－６号住居掘り方及び出土遺物

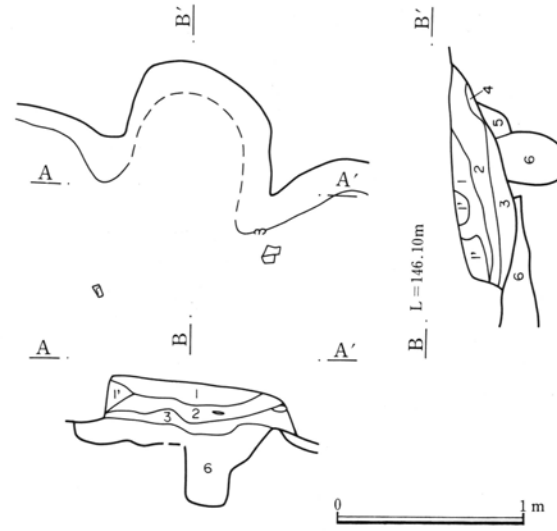




住居覆土
１・２：黒褐色土主体。（ローム　１′：大形化。１″：増。）　３：黒色土主体。　４：暗褐色土：ローム・焼土多量。　５：緻密質の暗褐色土主体。
掘り方覆土
６：暗褐色土主体。　７：黒色土主体。　８：暗茶褐色土主体。９：灰暗褐色粘質土主体。

貯蔵穴覆土
１：暗赤褐色土主体。　２：暗赤褐色土：焼土・灰多く入。（２′：焼土減、炭化物入。２″：焼土増。）　３：暗赤褐色土：焼土多く入。

カマド覆土
１・１′・２：暗茶褐色土。３：灰暗茶褐色土。４：暗茶褐色土。（１・３層少量、１′層微量、２層多量に焼土含む。）
カマド掘り方覆土
５：暗赤褐色土：焼土主体。　６：暗黒褐色土：暗褐色土と黒色土の混土。焼土極く微量。



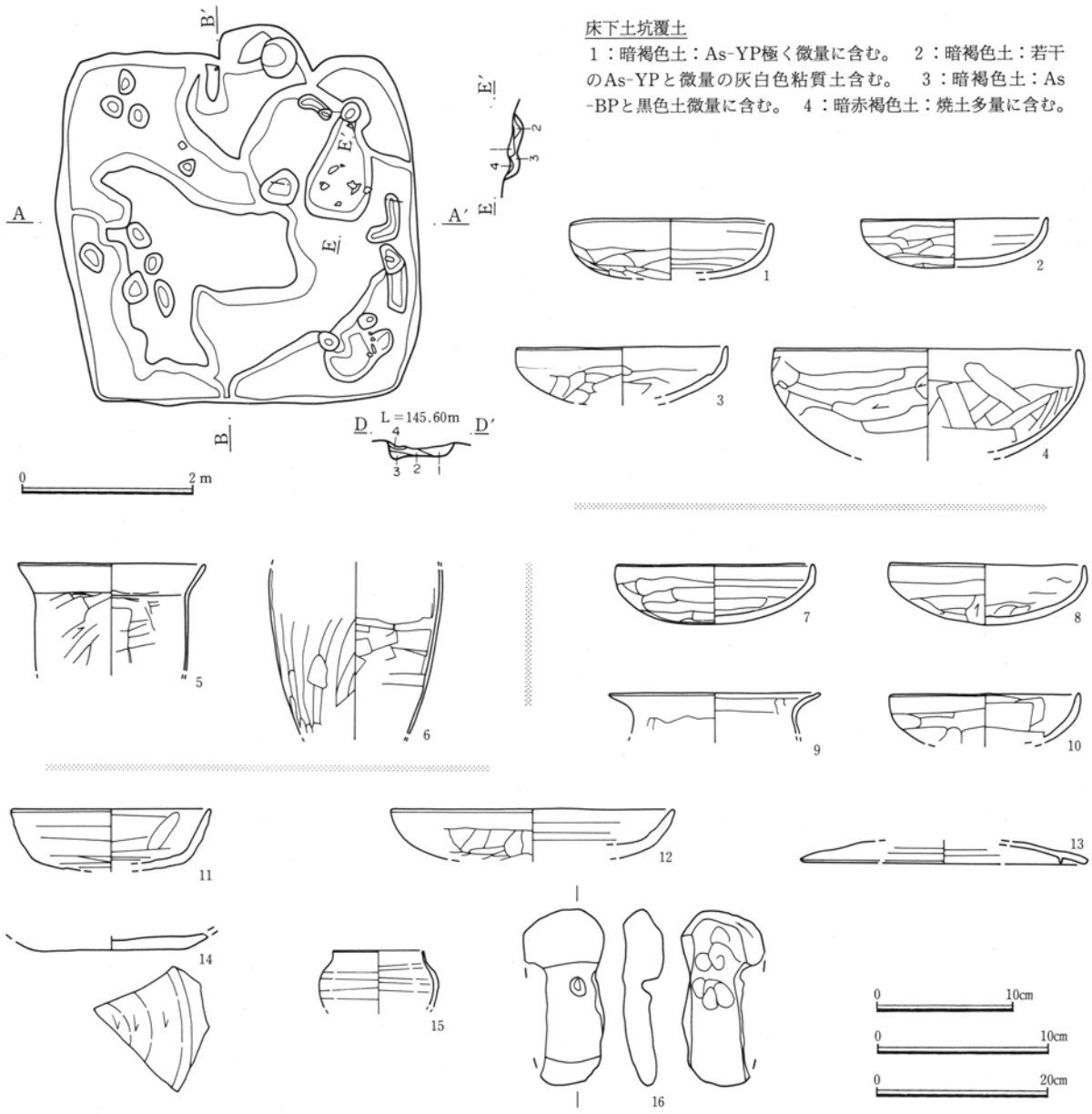
第25図　Ｈ－７号住居及びカマド

Ｈ－７号住居（奈良時代．第25～26図．図版７・52～53・89）

概要　本住居はＢ区南東部、１号谷へ向かう緩斜面に位置する中型の竪穴住居跡である。南西中央付近に焼土化する部分が見られた。

本住居に伴うと判断される出土遺物には７世紀後半のもの（5,6）を中心とする土師器甕と、８世紀前半の特徴を示す土師器坏（1,2,3）がある。また床下土坑内からは土師器甕片の出土も見ている。

覆土中からは土師器の坏・甕を中心に８世紀前半期の須恵器坏（11,14、12）、短頸壷（15）、７世紀後半期の土師器坏（7,8,10）と須恵器蓋（13）、８世紀後半の特徴を持つ土師器甕（9）などが出土し、こも編み石（17,18,19,20）と石皿（16）も見られた。



第26図　Ｈ－７号住居掘り方及び出土遺物

従って本住居は８世紀初頭の所産と考えられ、８世紀後半頃までは窪地として残っていた可能性が考えられる。

規模　長軸：424cm　短軸：408cm　深さ：61cm

カマド　幅：148cm　奥行き：77cm　　左袖　幅：34cm　長さ：31cm　高さ：25cm　　右袖　幅：54cm　長さ：53cm　高さ：25cm　　燃焼部　径：60×(61)cm

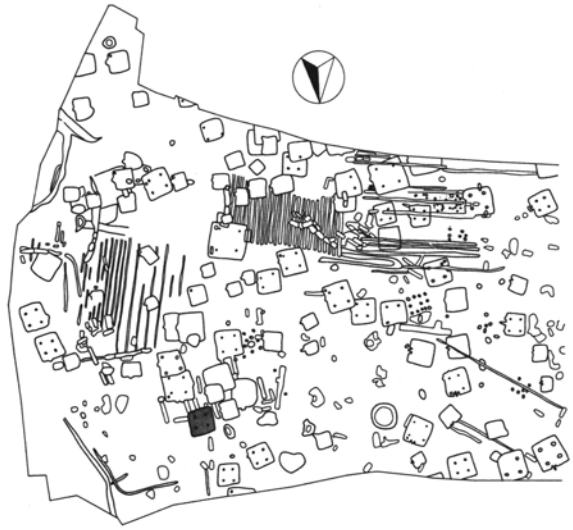
貯蔵穴　径：76×67cm　深さ：48cm

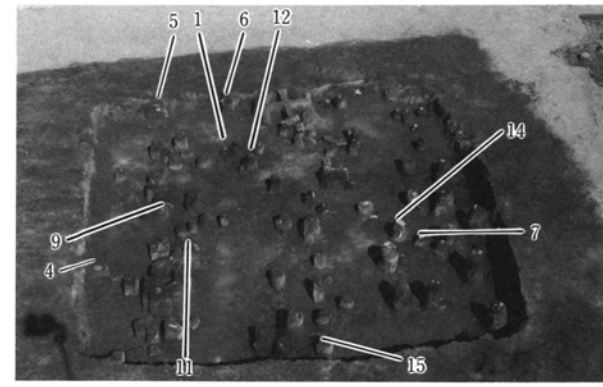
床下土坑　径：120cm以上×76cm　深さ：18cm

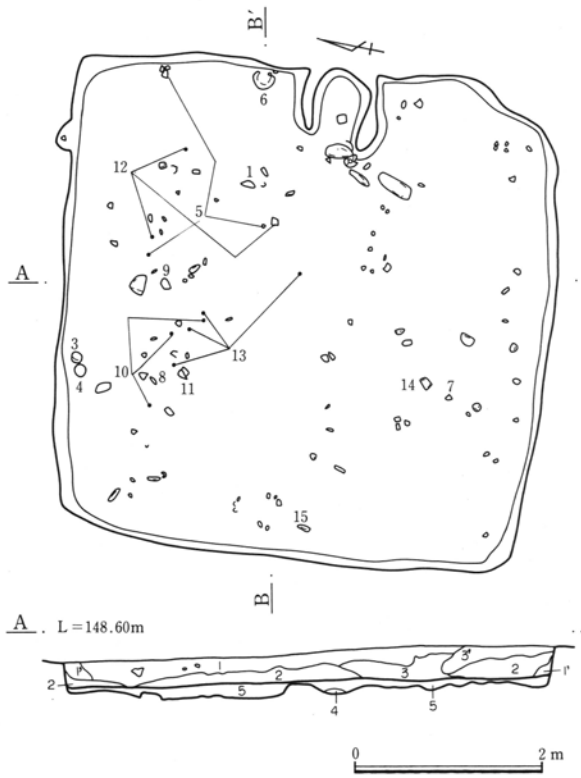
構造　本住居は隅丸方形のプランを呈し、暗褐色土中心の土で覆われたとっくり形の床下土坑を伴う掘り方を、黒褐色土・暗茶褐色土・灰暗褐色土で埋め戻して床を造り出している。

カマドは暗黒褐色土の浅い窪みを燃焼面とし、袖は僅かに右側を残すのみであるが、その構築には粘土が使用されている。

柱穴は確認できなかったが、貯蔵穴はテラスを伴い断面観察所見と併せて容器の設置も想定される。

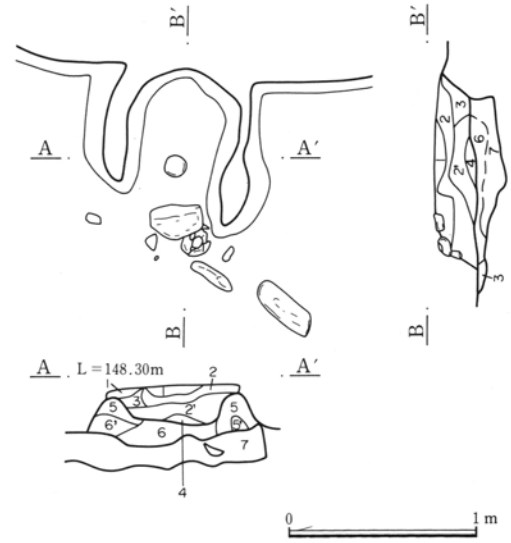






住居覆土
１：黒褐色土：白色軽石・淡褐色粒多量に含む。（1′：１層より白色軽石少なく粒径小）　２：暗褐色土：殆ど夾雑物無。　３：暗褐色土：白色軽石粒とローム粒少量。（3′：３層よりローム多。）
掘り方覆土
４：黒色土：褐色土ブロック少量含む。　５：褐色土：褐色土中に黒色土少量混入。

カマド覆土
１：暗褐色土：褐色土・焼土粒若干混入。　２：赤暗褐色土：１層に比し焼土増加。（2′：２層に比し更に焼土増加。）　３：赤褐色土：焼土微量。
４：赤黒褐色土：黒褐色土中に焼土粒微量に含。
袖構築材
５：淡黄褐色土。（5′：５層が被熱。）
カマド掘り方覆土
６：暗黒褐色土：黄褐色土ブロック等を含む。（6′：６層に似るが黄褐色土殆ど含まれない。）
７：暗黒褐色土：黒色土と褐色土の混土。

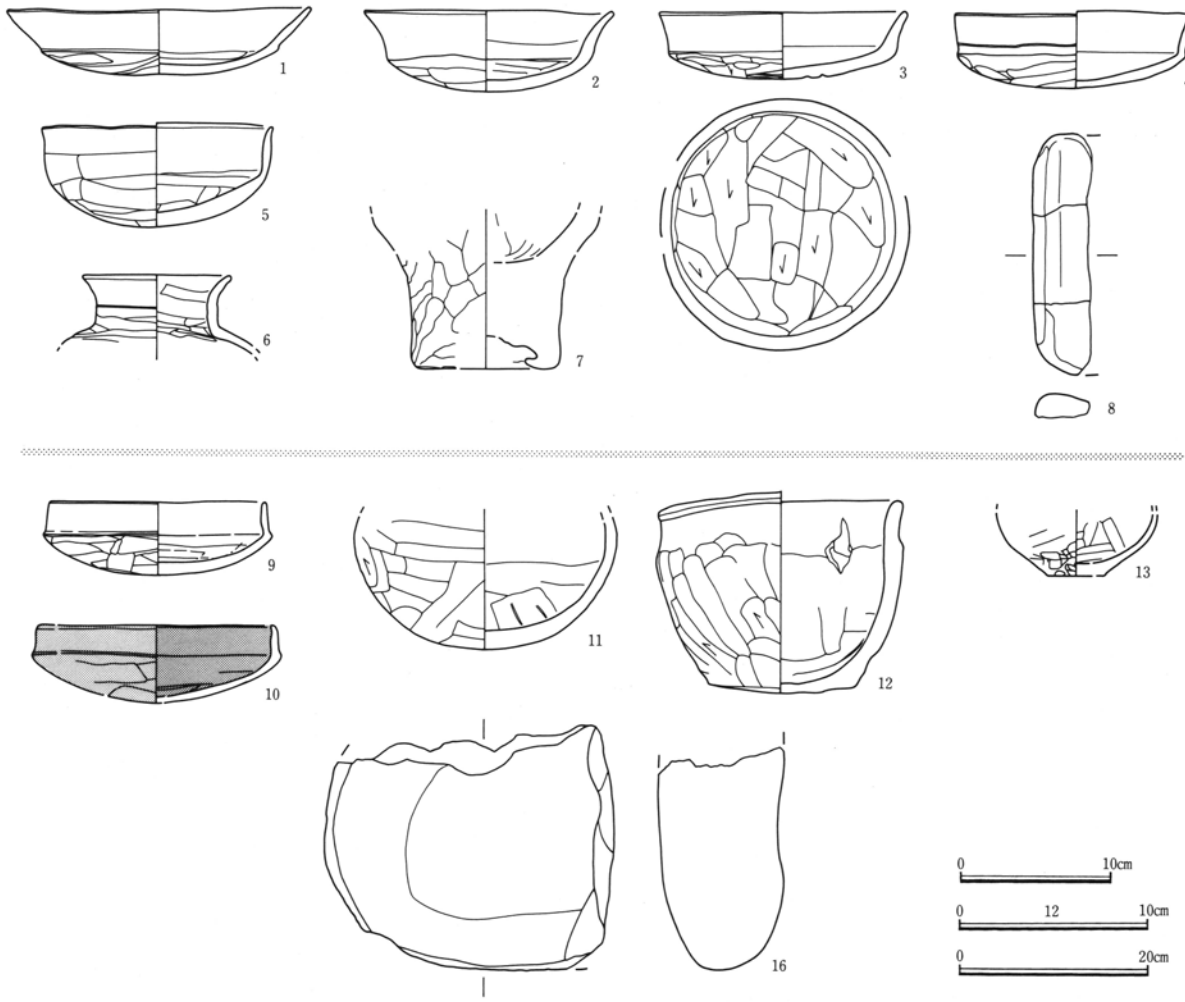


第27図　Ｈ－８号住居及びカマド

Ｈ－８号住居（古墳時代後期．第27～28図．図版８・53・89）

概要　本住居はＢ区に於いては中型の竪穴住居跡である。Ｂ区北東部の土合川へ落ちる傾斜面に近い、台地の縁辺部に所在し、Ｈ－45・55号住居等の竪穴住居跡が集中して確認された地域の一角に在る。

出土遺物は覆土中のものを中心に比較的多く出土しているが、本住居に伴うものと判断されたものは６世紀後半～７世紀前半期の特徴を示す土器等で、



第28図　Ｈ－８号住居出土遺物

土師器坏（1～5）、土師器胴張甕（6）の他、異形の土器である土師器短脚甕（7）、こも編み石が出土している。一方、覆土中からは土師器の坏・甕を中心とした６～７世紀の土師器の坏（9,10）、椀（11）、小型甕(12,13)の他、こも編み石(14,15)、台石(16)などが出土している。

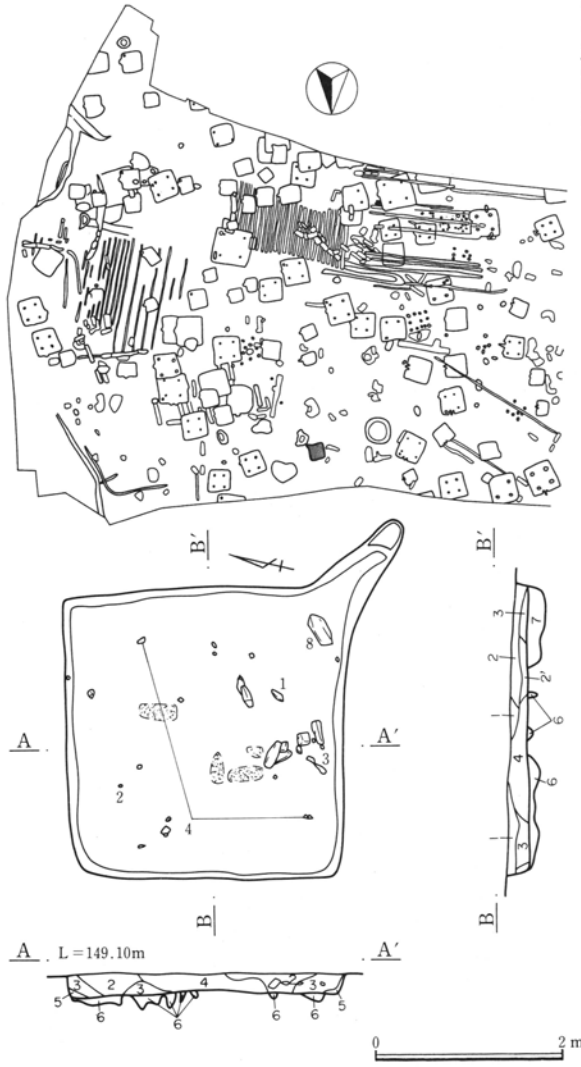
以上の点から本住居は概ね西暦600年前後の時期の所産と考えられ、比較的早い段階で埋没していったことが推定される。

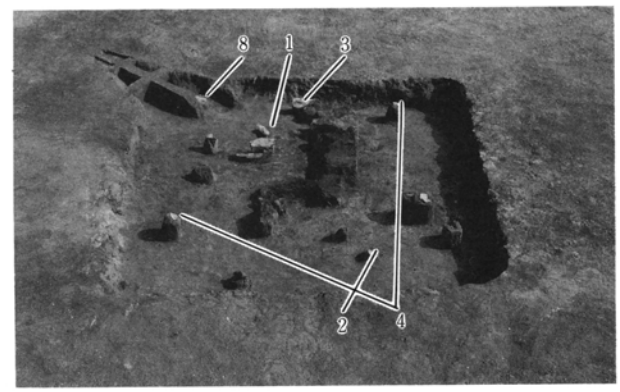
規模　長軸：530cm　短軸：517cm　深さ：45cm　カマド　幅：101cm　奥行き：76cm　　左袖　幅：31cm　長さ：69cm　高さ：22cm　　右袖　幅：32cm　長さ：80cm　高さ：21cm　　燃焼部　径：43×73cm

構造　本住居は方形のプランを呈し、掘り方を黒色土及び褐色土で埋め戻して床を造り出している。

カマドは浅い掘り方を持ち、暗黒褐色土で埋め戻して燃焼面を造り出している。袖については袖材等は確認されなかったためこうしたものを用いずに淡黄褐色土を使用して造り出しているが、カマド前面の床上15cm程の高さの覆土中から出土した石材は、天井石である可能性を示している。また、カマド掘り方の下位層にも暗赤褐色土が含まれていることから、少なくとも一回の作り替えのあったことが推定されている。

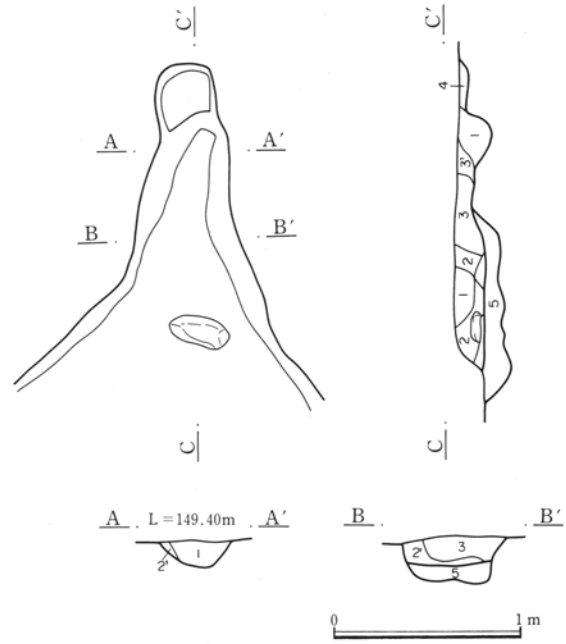
尚、カマド以外の柱穴・貯蔵穴等の構造物は確認されなかった。





住居覆土
１：暗褐色土：ローム、ブロック状に混入。２：暗褐色土：ローム・As-YP少量。（２′：ローム混入減少。）　３：暗褐色土：ローム中ブロック多量に混入。　４：黒褐色土：炭化物多量、ロームも多く混入。　５：暗褐色土：暗褐色土と褐色土の混土。締まり弱。
掘り方覆土
６：暗茶褐色土：若干の黒褐色土とAs-BP含。７：暗黒褐色土：少量の灰褐色土ブロック含。

カマド覆土
１：黒色土：少量のロームと炭化物混入。２：暗褐色土主体。（２′：２層に比し黒味増す。）　３：暗褐色土：少量の焼土、ブロック状に入る。（３′：焼土の混入多。）　４：暗褐色土：黒色土とロームの混土。
カマド掘り方覆土
５：暗褐色土：炭化物微量に混入。



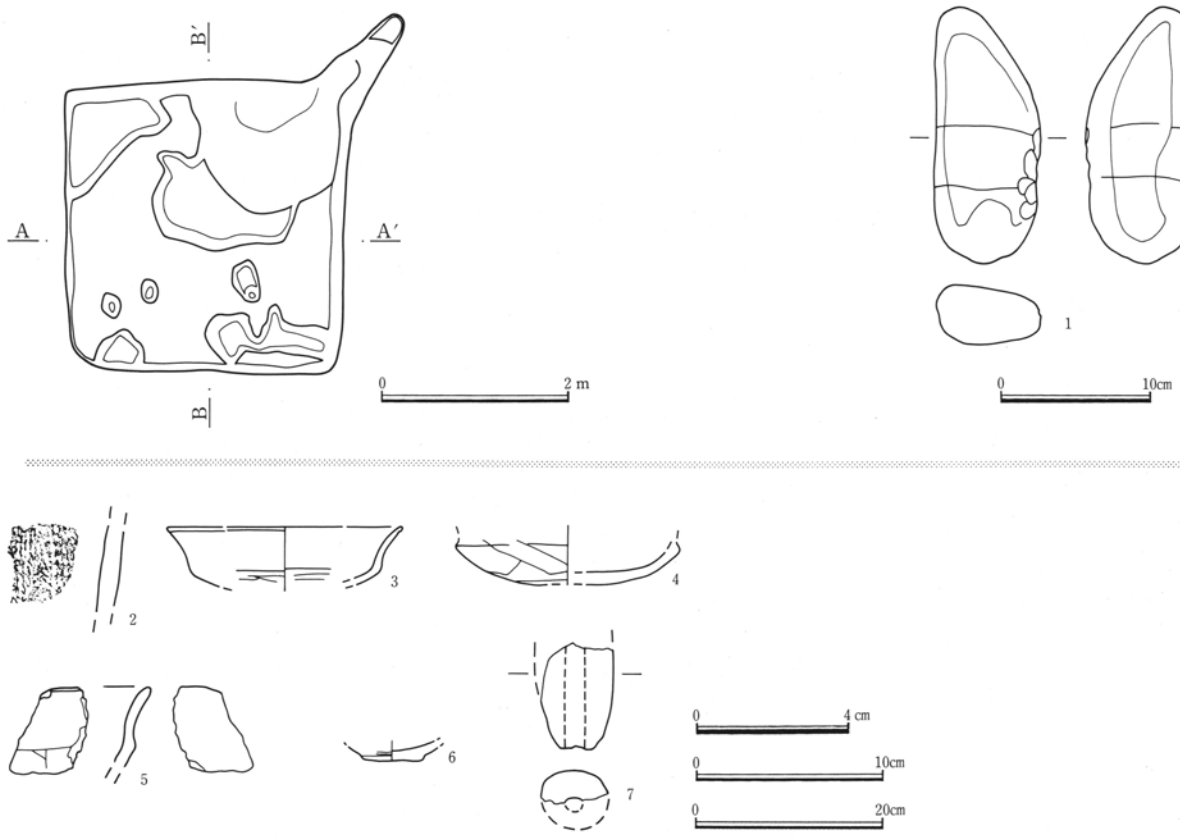
第29図　Ｈ－９号住居及びカマド

Ｈ－９号住居（古墳時代後期．第29～30図．図版８・53～54・90）

概要　本住居はＢ区中北部に位置する小型の竪穴住居跡である。カマドを住居南東隅部に持つ珍しい例であり、所謂焼失家屋であった。

尚、カマド付近の土壌はロームの汚れが目立つため、掘り方南東部の落ち込みは縄文の土坑、或は風倒木痕の可能性を持つ。

出土遺物は多くなく、本住居に伴うものとしてはこも編み石（1）が確認できたに過ぎなかったが、覆土中からは縄文時代早期の土器片（2）のほか、６世紀後半から７世紀前半にかけて時期の特徴を示す土師器坏（3～5）、土師器甕（6）が出土。その他、土錘（7）、砥石（8）なども出土してきている。



第30図　Ｈ－９号住居掘り方及び出土遺物

従って本住居の時期は特定できないのであるが、覆土中の土師器から本遺構は６世紀代の所産と推定される。

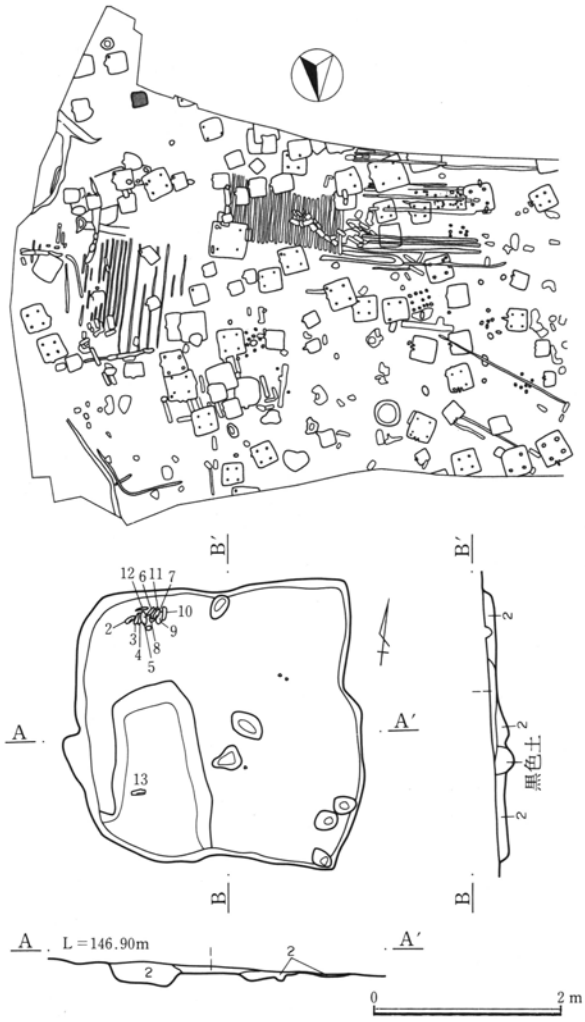
また、住居中央付近を中心に棟材及び垂木材と判断される炭化材が出土してきているが、個々の炭化材の遺存状況は良好ではなく、想定される建築材が部分的に焼け残っているに過ぎない。また住居全体から見た炭化材の出土状況は本住居の屋根構造が土葺き屋根であったことを示しているが、それは土葺きの範囲は凡そ周堤帯から梁・桁材の位置までであって、中心部の炭化材の燃焼状況は棟部分に土葺きが施されなかったことにより燃焼の進行したことを示している。

規模　長軸：310cm　短軸：299cm　深さ：28cm
カマド　幅：64cm　奥行き：(140)cm　　煙道　幅：50cm　長さ：120cm

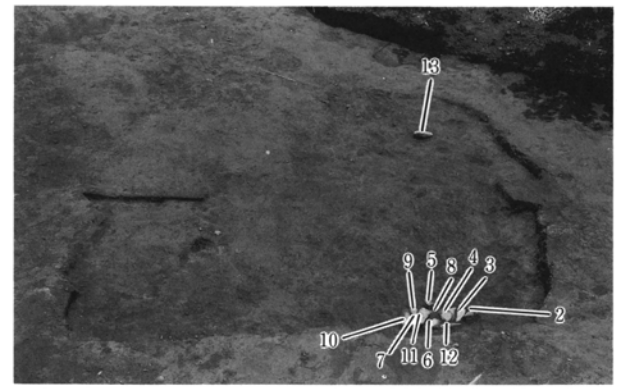
構造　本住居は方形のプランを呈している。その床構造には掘り方を暗茶褐色土や暗黒褐色土などで埋め戻して床を造り出している部分のものと、地床の部分のものとがある。

カマドは住居南東隅から住居の対角線上に壁面を掘削して造っているが、その規模は住居の規模に対して大きい。掘り方の形態は確認できず、その規模も幅については測定できなかったが奥行きは102cm程を測り、深さは15cm以下である。この平面的には大きいが浅い掘り方を暗褐色土で埋め戻して燃焼面を造り出している。しかし乍ら左右両側の袖は壊されていたため、全体的な形態や規模を特定する事はできなかった。

尚、カマド以外の柱穴や貯蔵穴といった構造物を確認することはできなかったが、上述のように炭化材の状況から周堤帯から梁・桁材等のレベルまでは土葺きが施された屋根構造を持っていたことが想定される。また棟材と推定される炭化材の出土状況から、棟方向は東西に向いていたことが想定されるのである。



第31図　Ｈ－10号住居



住居掘り方覆土
１：茶褐色土：褐色土主体。黒褐色土・ロームブロック混入。
２：黒褐色土：ローム・ローム漸移層土ブロック混入。

Ｈ－10号住居（古墳時代後期．第31～32図．図版８・54・89）

概要　本住居はＢ区南東の緩斜面部に位置する小型の竪穴住居跡で、耕作等による削平が著しく、遺存状況は不良である。特に南東部は床面まで削平されていた。

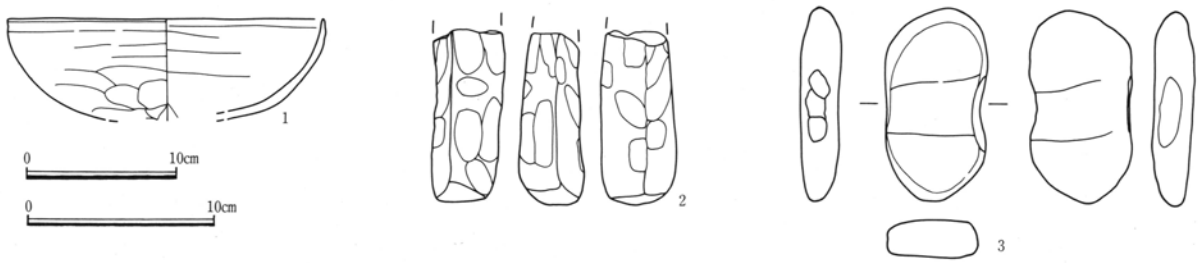
出土遺物も極めて少なかったが、本住居に伴うものには本住居の時期を示唆する７世紀後半期の土師器坏の破片（1）と集中して出土するこも編み石（2～12）があり、南西部にもこも編み石１個（13）が出土している。また、覆土中からは熱変成岩や弥生土器、土師器の坏・甕の出土が見られた。

規模　長軸：推定306cm　短軸：推定274cm　深さ：17cm以下

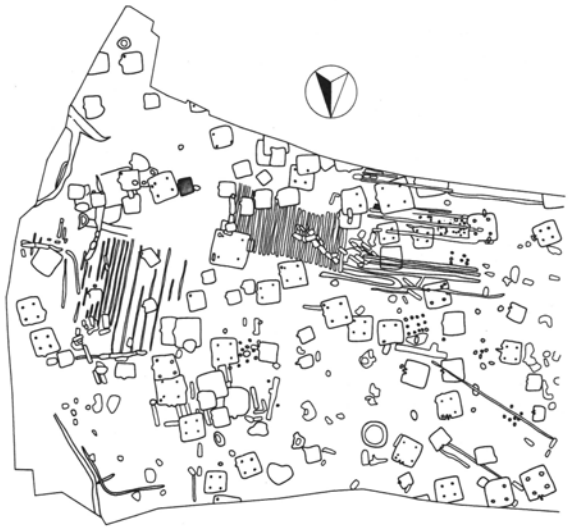
カマド　燃焼部　径：90×84cm

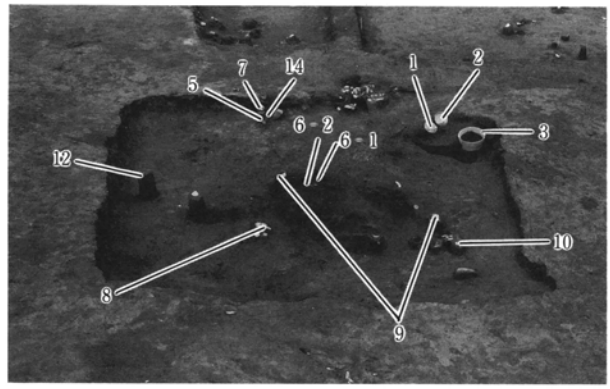
構造　本住居は隅丸方形様のプランを呈し、掘り方の南西部に長さ180cm、幅104cm、深さ17cmを測る長方形プランの土坑様の掘り込みがあり、床はこれを黒褐色土で埋め戻して造っている。

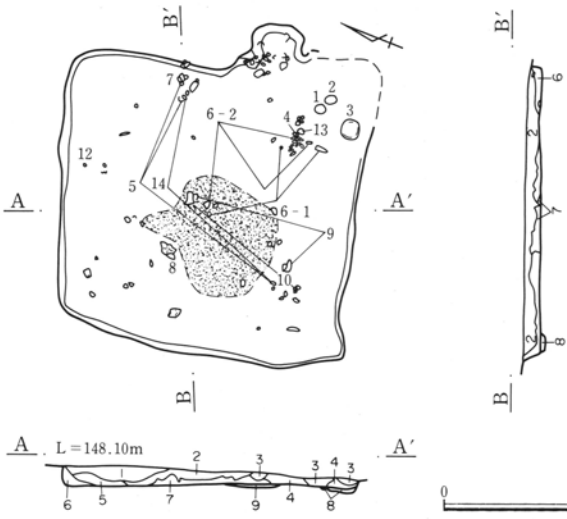
カマドは東に造られるが、規模・構造は不明であり、また、柱穴、貯蔵穴等カマド以外の構造物も確認されなかった。



第32図　Ｈ－10号住居出土遺物







住居覆土

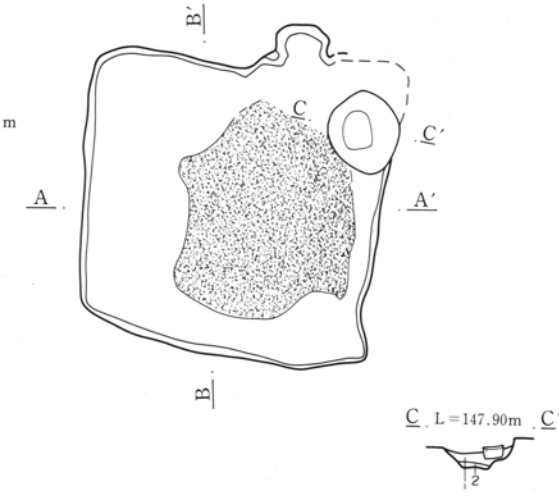
１：明褐色土：ローム漸移層土中心のブロック層。　２：暗褐色土：１層に黒褐色土ブロック混入。炭化物含む。　３：明褐色土：１層にロームブロック含む。　４：暗褐色土：ローム漸移層下層土ブロック中心。炭化物粒含む。　５：褐色土：４層に似るがやや粘性に富む。　６：黄褐色土：ロームとローム漸移層土ブロックの混土。７：黒褐色土：ローム・ローム漸移層土含み、炭化物多量に混入。

掘り方覆土

８：茶褐色土：ローム粒含むローム漸移層土ブロック層。　９：明茶褐色土：焼土粒含むローム漸移層土とロームの混土。

貯蔵穴覆土

１：茶褐色土：ローム漸移層土中心。ローム粒・炭化物含む。　２：褐色土：ローム漸移層土と淡黄灰色シルト質土のブロックの混土。



第33図　Ｈ－11号住居

Ｈ－11号住居（奈良時代．第33～34図．図版９・54）

概要　Ｂ区南東部に在る小型の竪穴住居跡である本住居は、Ｈ－21・28号住居等９軒の重複住居群の１軒で、Ｈ－21号住居を切る。尚、貯蔵穴西側と南北壁の壁端を掘り過ぎてしまった。

住居中央には長さ10cm以下の炭化物が不規則に多く出土した。出土遺物はやや多く、本住居に伴うものには８世紀前半期の須恵器の坏（1,2）・甑（3）、土師器の椀（5）・甕（4,6）が、覆土中からは７世紀から９世紀にかけての土師器椀（7）・杯（13,14）・甕（8～10）、須恵器坏（11～12）などが出土した。

これらの点から本遺構は８世紀前半代のもので、９世紀後半まで窪地が残っていたと判断される。

規模　長軸：331cm　短軸：327cm　深さ：21cm

カマド　幅：76cm　奥行き：66cm　　左袖　幅：30cm　長さ：19cm　高さ：16cm　　右袖　幅：22cm　長さ：20cm　高さ：11cm　　燃焼部　径：36×51cm

貯蔵穴径：87×74cm　深さ：26cm

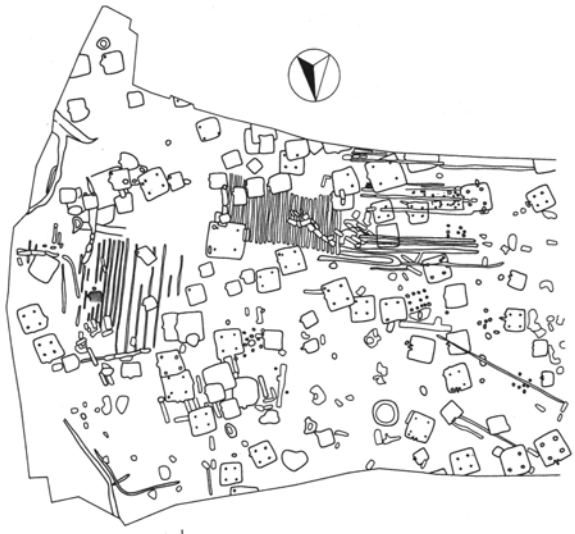
床下粘土坑　径：110cm以上×100cm　深さ：60cm

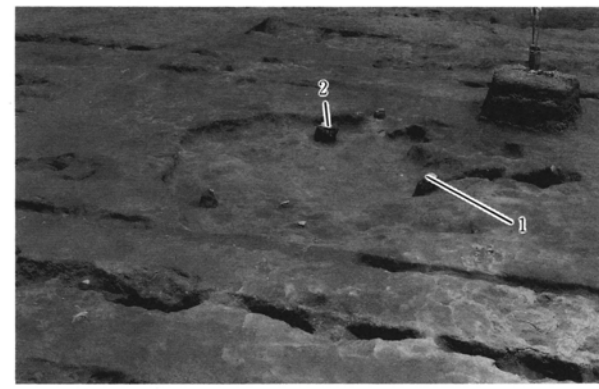
第34図　Ｈ－11号住居遺構及び出土遺物

構造　本住居はやや台形に近い隅丸方形のプランを呈し、掘り方のカマドの前面には床下粘土坑が造られ、南及び西の壁際には幅32cm、深さ９cm以下の周溝状の掘り込みが残る。この掘り方を茶褐色系統の土で埋め戻し、地床と併せて床を作り出している。

カマドは壊されていたが、浅い掘り方を黒色土とローム漸移層土で埋め戻して燃焼面を造り、袖は焼土を含むローム漸移層下層土で造っている。

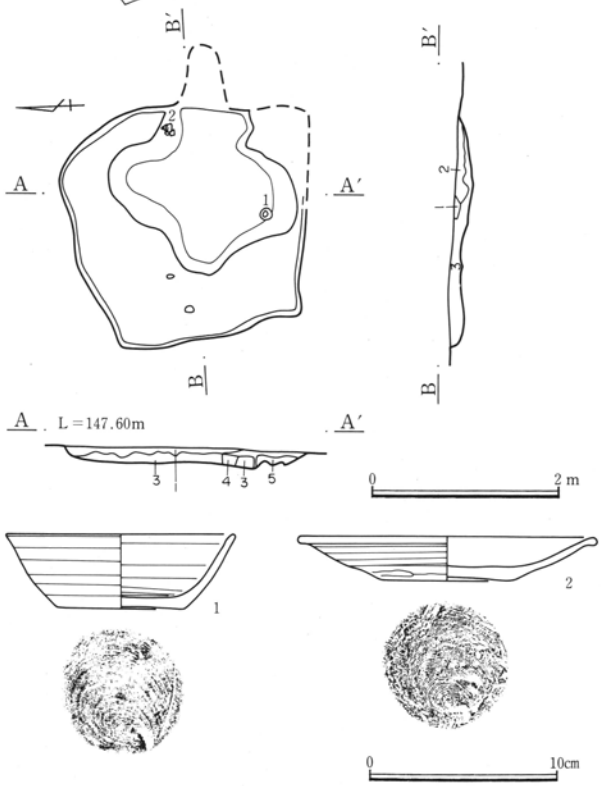
柱穴は見られなかったが、底を抜いた須恵器甑を設置した貯蔵穴がカマド右側手前の南壁際に残る。

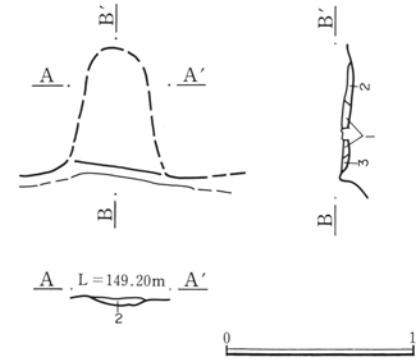




近・現代覆土
１：現耕作土に同じ。
住居掘り方覆土
２：茶褐色土：１層に比し良く締まり粘性有り。須恵器坏･皿出土。
３：淡黄褐色土：ローム漸移層土とロームのブロック層。　４：暗褐色土：黒色土・ローム漸移層土のブロック層。ローム粒混入。
５：褐色土層：３層土に黒色土ブロック混入。

カマド掘り方覆土
１：淡赤褐色土：As-BPの多量に混ざるローム漸移層土ブロック層。焼土粒混入。　２：赤褐色土：焼土化したローム・ローム漸移層土のブロック層。　３：茶褐色土：As-BPの混ざるローム漸移層土。





第35図　Ｈ－12号住居及び出土遺物

Ｈ－12号住居（古墳時代後期．第35図．図版９～10・54）

概要　本住居はＢ区東部に在る小型の竪穴住居跡であるが遺存状況悪く、床面もほとんど削平される。

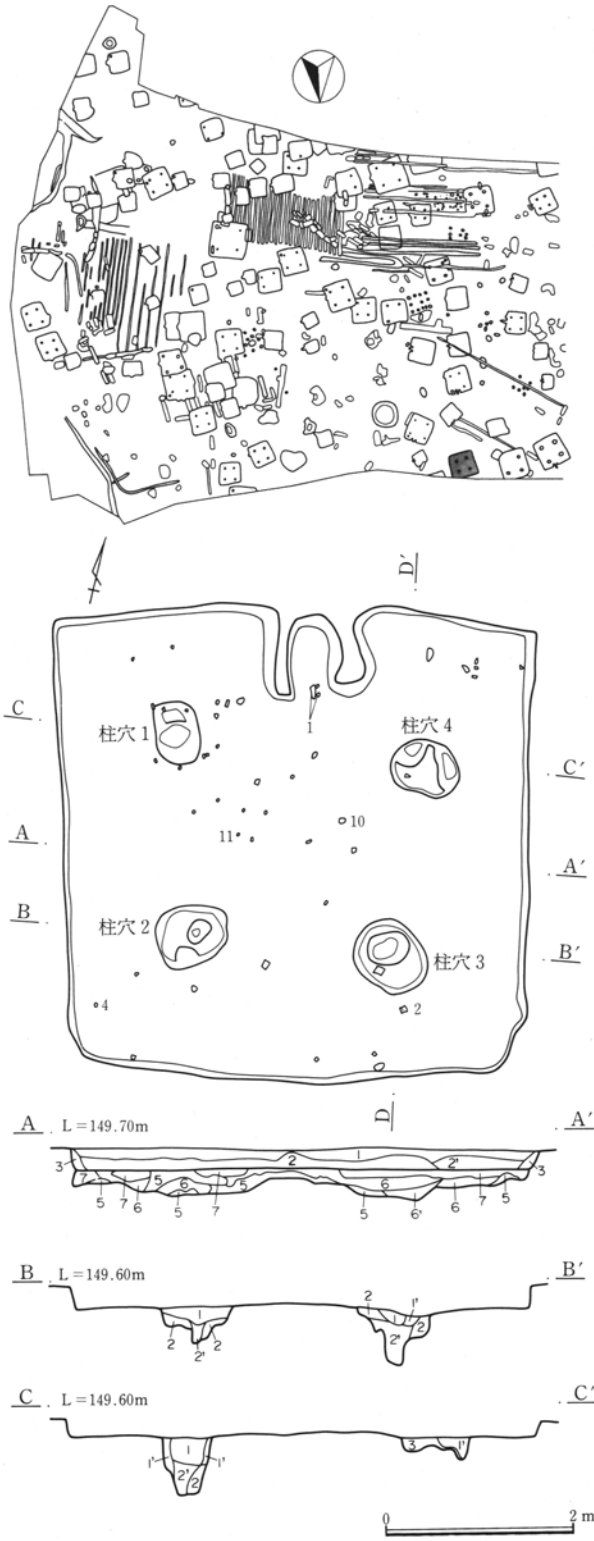
出土遺物は少ないが、本住居に伴うものには須恵器坏（1）と須恵器皿（2）があり、本住居は７世紀中葉の遺構と判断される。また覆土中からは土師器甕と須恵器の皿・甕が１点づつ出土してる。

規模　長軸：260cm以上　短軸：256cm　深さ：０cm
カマド　幅：50cm　奥行き：68cm

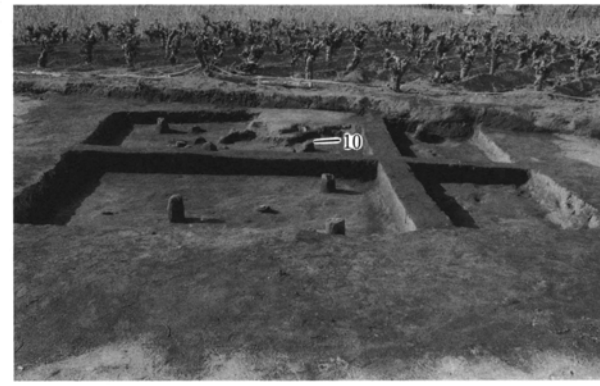
構造　本住居遺存状況が悪く、その構造はつまびらかではないが、台形に近い隅丸方形のプランを呈すると推定される。住居東半中央の広い範囲に深さ10cm以下の浅い掘り込みを持つ掘り方を黒色土・ローム漸移層土・ロームで埋め戻している。

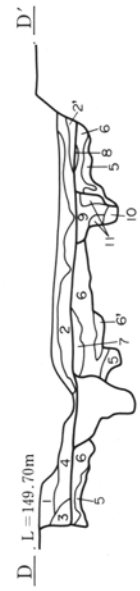
カマドは東壁に造られ、浅い掘り方を持ち、ローム漸移層土とロームで埋め戻している。

柱穴・貯蔵穴等の構造物は認められなかった。



第36図　Ｈ－13号住居





住居覆土
１：暗褐色土：ロームがブロック状に混入。
２：暗褐色土：１層に比し多量のロームブロック含む。（２′：２層に比しロームブロック大形化。）　３：暗褐色土：暗褐色土と黒色土の混土。　４：黒褐色土：暗褐色土中に黒色土多量に混入。ローム部分的に混入。
掘り方覆土
５：褐色土：２次的堆積層。　６：暗黒褐色土：ロームブロック微量。（６′：ロームブロック増え大形化）。　７：暗褐色土：ローム少量混入。　８：赤褐色土：焼土多量に含む。
柱穴覆土（住居セクション部分）
９：黒色土：黒色土と暗黒褐色土の混土。
10：暗黒褐色土：黒色土微量に混入。
11：暗茶褐色土：ロームブロック少量混入。

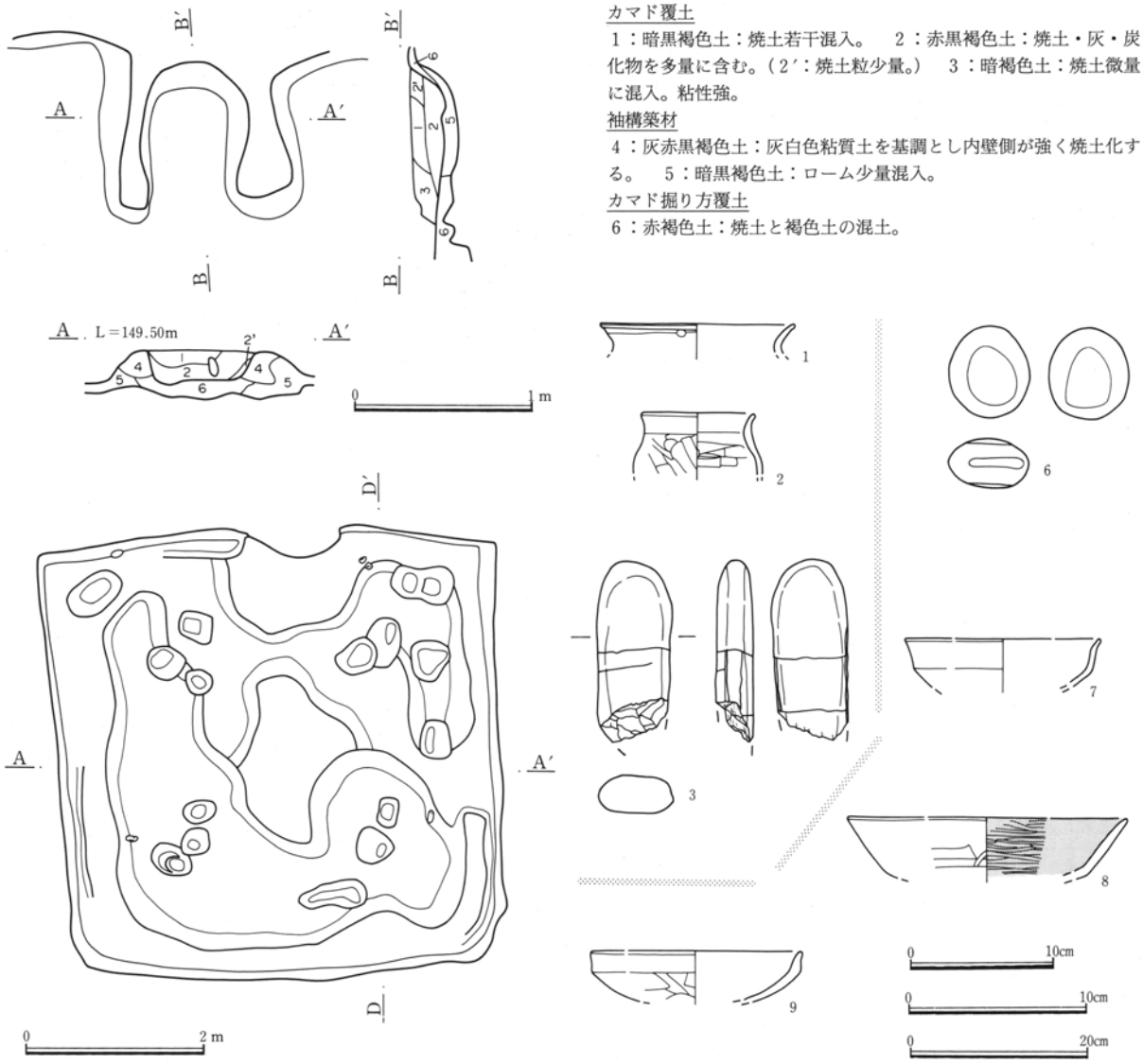
柱穴覆土
１：黒褐色土：黒色土・ロームブロック多量に含む。（１′：黒色土の混入減少。）　２：暗褐色土：黒色土・As-BP微量に混入。（２′：黒味増す。）　３：暗褐色土：褐色土少量混入。

概要　Ｈ－13号住居はＢ区北西隅、１号谷から続く谷地形に面した台地縁辺部に位置する。Ｂ区に於いてはやや大型のものに属する竪穴住居跡である。

出土遺物のうち本住居に伴うと判断されるものには６世紀後半～７世紀前半期の特徴を持つ土師器甕（1）、土師器小型甕（2）、こも編み石（3,4）があり、このことから、本住居は西暦600年前後の所産と判断される。

一方、覆土中からは７世紀後半～８世紀の土師器甕を中心に、縄文土器（5）や磨石（6）、６世紀～７世紀にかけての土師器坏（7～9）とこも編み石（10～11）などが出土している。

Ｈ－13号住居（古墳時代後期．第36～37図．図版10・54～55・90）



第37図　Ｈ－13号住居遺構及び出土遺物

規模　長軸：507cm　短軸：498cm　深さ：32cm　カマド　幅：114cm　奥行き：89cm　左袖　幅：30cm　長さ：96cm　高さ：20cm　右袖　幅：45cm　長さ：78cm　高さ：20cm　燃焼部　径：43×75cm　柱穴１　径：70×47cm　深さ：63cm　柱穴２　径：77×67cm　深さ：54cm　柱穴３　径：85×70cm　深さ：64cm　柱穴４　径：75×59cm　深さ：23cm

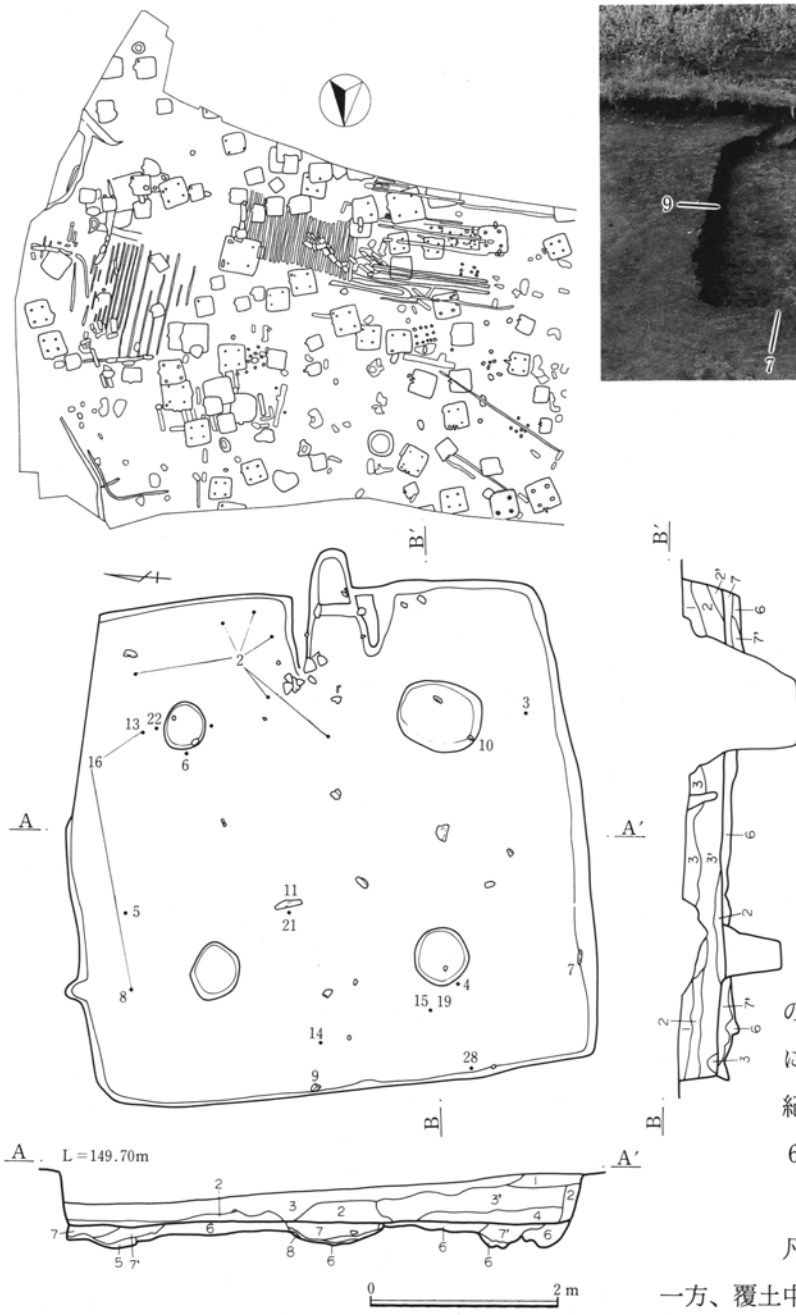
構造　本住居は方形のプランを呈する。

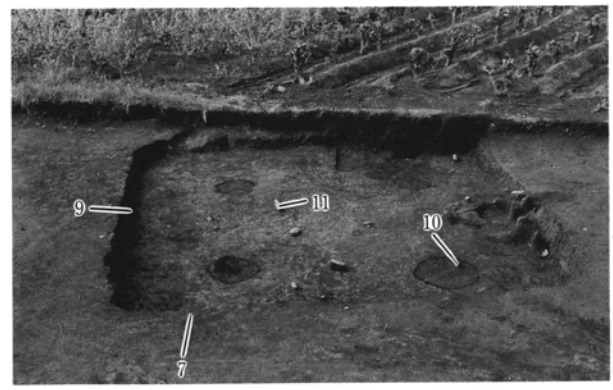
掘り方には壁下に全周する幅74cm以下のテラス状態の掘り残しと、中央に142cm×132cm程を測る掘り残しが見られる。こうした掘り残しを見せる掘り方を褐色～暗黒褐色の土で埋め戻して床面を造り出している。

カマドは北カマドであり、浅い掘り方を持ち、これを赤褐色土で埋め戻して燃焼面を造り出しているが、その範囲は壁のラインの内側に止どまっている。袖は灰白色粘質土で造られていたが、袖材等は確認されなかった。また、煙道は確認されなかった。

柱穴は４基あり、何れも大きな掘り方を持っており、尚、柱穴断面の観察から柱材は径15～20cm程あったことが推定される。

尚、貯蔵穴は確認できなかった。





住居覆土
１：暗茶褐色土主体。　２：黒褐色土：黒色土と暗黒褐色土の混土。多量のローム混入。（２′：黒色土の比率減少。）　３：暗茶褐色土：多量のローム・黒褐色土混入。（３′：ローム混入減少。）　４：暗黒褐色土：黒色土・暗茶褐色土・ロームブロックの混土。
掘り方覆土
５：茶褐色土：ローム中に黒色土若干入る。締まり有り。　６：褐色土：黒色土少量混入。
７：暗黒褐色土：ロームブロック微量混入。（７′：７層に比しロームブロック増加。）
床下粘土坑覆土
８：暗黒褐色土：暗黒褐色土・ロームブロックの混土中に灰白色粘質土少量混入。

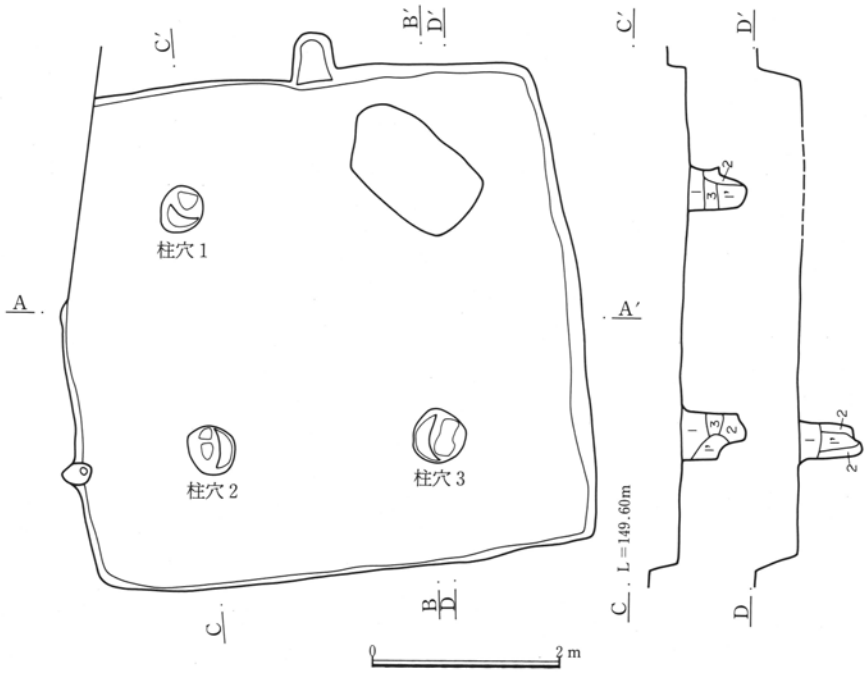
第38図　Ｈ－14号住居

Ｈ－14号住居（古墳時代後期．第38～40図．図版10・55・90）

概要　本住居は調査区北壁際、Ｂ区とＣ区の境に当たる位置に在り、カマドの所在する位置からＢ区に含めたが、その過半はＣ区に含まれている。Ｂ・Ｃ区に於いてはやや大型の竪穴住居跡である。住居の北東コーナーは調査区外に在り、一方、南東隅部は耕作による攪乱によって荒らされている。出土遺物のうち本住居に伴う可能性を持つ遺物には、こも編み石（3～10）の他、７世紀中葉頃の特徴を持つ土師器坏（1）と６世紀後半期の特徴を持つ土師器甑（2）があり、時期の特定は難しいが、凡そ７世紀前半頃と判断した。

一方、覆土中からは７～８世紀の土師器甕片を中心に６世紀中葉から７世紀中葉にかけての土師器の坏（16～18）・小型椀（19）・甕（21）と須恵器の（20）があり、こも編み石（24～27）が出土するほか、砥石（28）や巡方状の石製品（29）、スクレイパー・磨石等の縄文時代の石器類（11～15）や耕作溝との関連から近世・近代瓦（22～23）なども出土している。しかし、覆土中出土の遺物の傾向から、本住居が少なくも７世紀後半～８世紀前半の頃までは窪地として遺存していたことが伺われる。

規模　長軸：553cm　短軸：529cm　深さ：55cm



柱穴覆土
１：暗茶褐色土：暗茶褐色土と黒色土の混土。軟質。（１′：１層土と２層土の中間の土。）　２：暗茶褐色土：暗茶褐色土主体。黒色土少量混入。軟質。　３：暗茶褐色土：ロームブロック少量混入。

カマド覆土
１：暗茶褐色土：灰白色土・淡褐色土・焼土粒少量含む。　２：暗黒褐色土：焼土微量に含む。（２′：焼土無し。）　３：暗黒褐色土：ローム等若干含む。　４：暗黒褐色土：焼土ブロックを多量に含む。　５：暗赤黒褐色土：焼土を多量に含む。粘性有り。　６：暗赤黒褐色土：焼土粒主体。粘性弱。

袖構築材
７：黒褐色粘質土。

カマド掘り方覆土
８：暗黒褐色土：ローム少量含む。（８′：ロームの混入減少。）

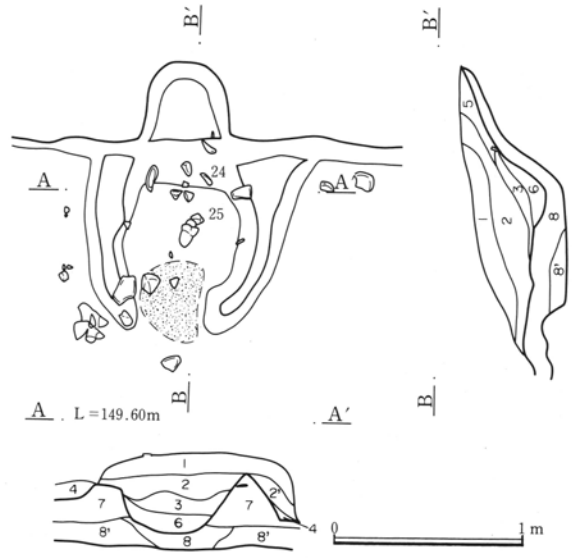
カマド　幅：122cm　奥行き：148cm　　左袖　幅：28cm　長さ：102cm　高さ：19cm　　右袖　幅：26cm　長さ：91cm　高さ：19cm　　燃焼部　径：61×82cm　煙道　幅：47cm　長さ：41cm

柱穴１　径：52×44cm　深さ：63cm　　柱穴２　径：53×50cm　深さ：71cm　　柱穴３　径：56×55cm　深さ：69cm

構造　本住居は調査範囲の状況から方形のプランを呈するものと判断される。

掘り方は中央に、褐色土と灰白色粘質土を含む暗黒褐色土とロームが壁面に張り付いている床下粘土坑が造られいる。また、北壁下には幅20cm程、深さ５cm以下の浅い溝が掘られ、その内側と東壁・南壁下には20cm前後のテラスを残し乍ら、その内側には幅90cm程、深さ20cm以下の落ち込みが廻っている。床は、これらの構造を有する掘り方を褐色土・暗黒褐色土で埋め戻して造られている。

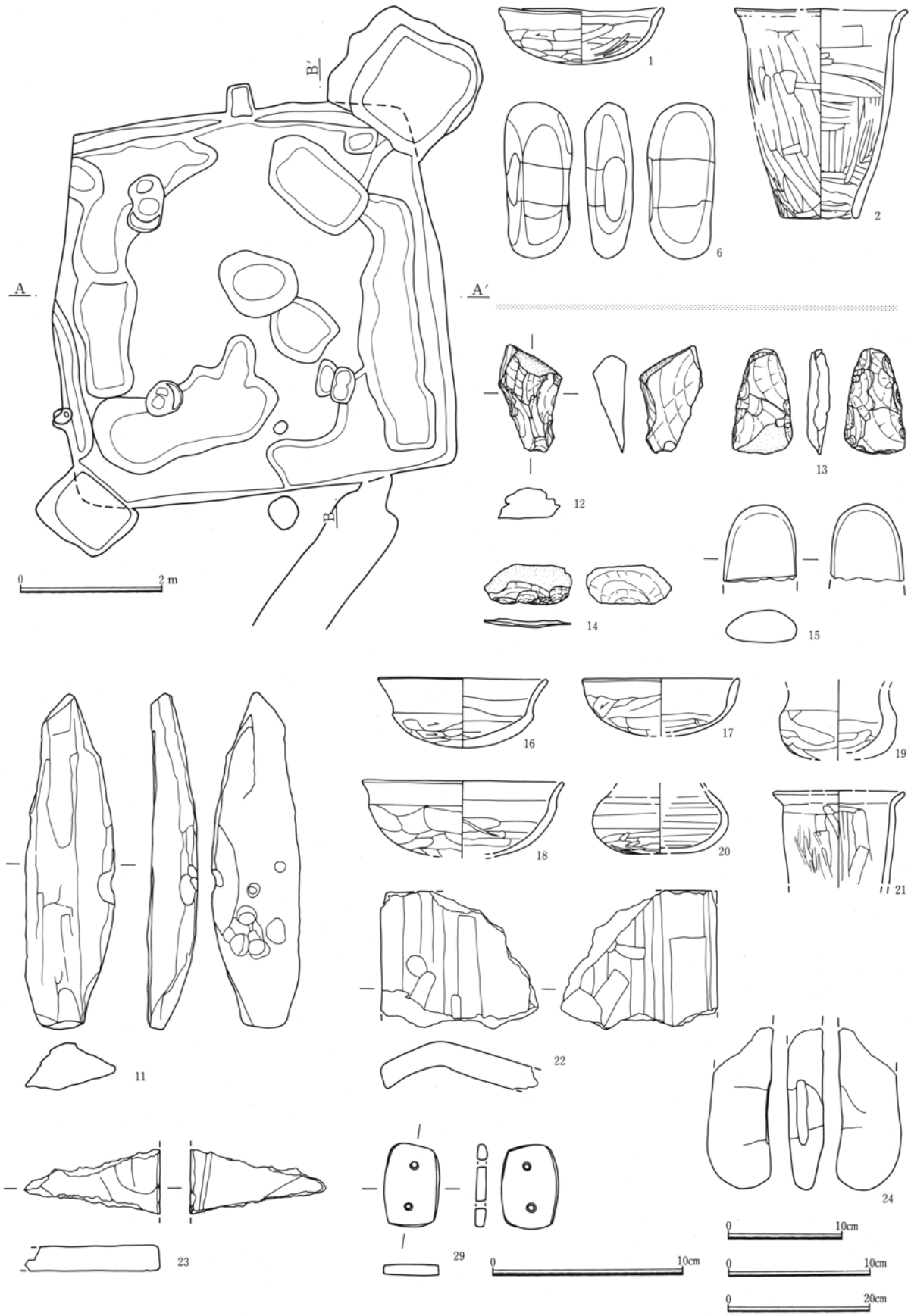
カマドは東カマドであり、東壁中央付近に設けられる。浅い掘り方を持ち、これを暗黒褐色土で埋め戻して燃焼面を造る。袖には特に袖材等は確認されなかったが、暗褐色の粘質土を使って造られている。



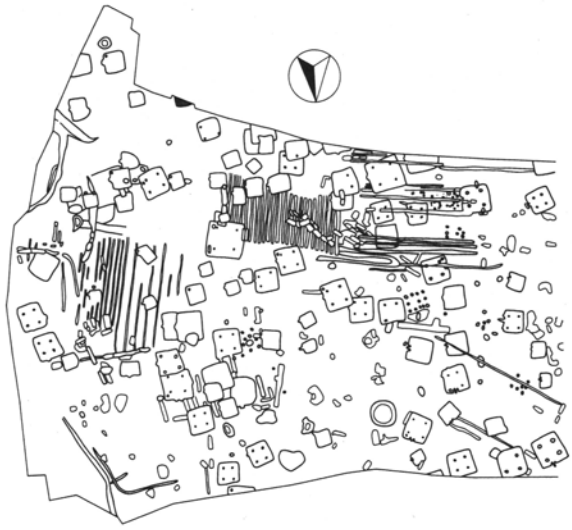
第39図　Ｈ－14号住居及びカマド

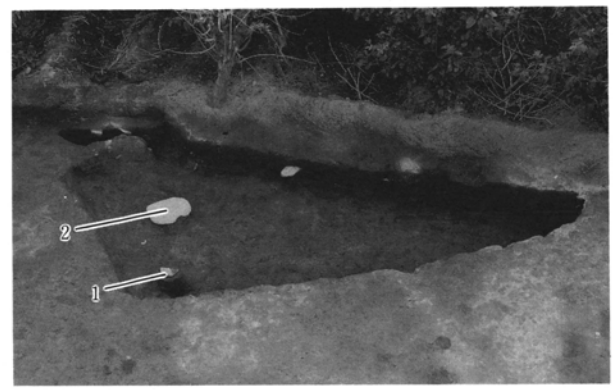
柱穴は北東・北西・南西の３カ所のものが発見・調査されているが、何れもしっかりした掘り方である。南東のものは確認できなかったが攪乱で滅失したと思われる。尚、柱痕の径は床面調査の段階では22cm程、断面観察時点では18cm程で認められており、かなり太い柱材を持っていたことが推定される。

尚、貯蔵穴は確認できなかった。

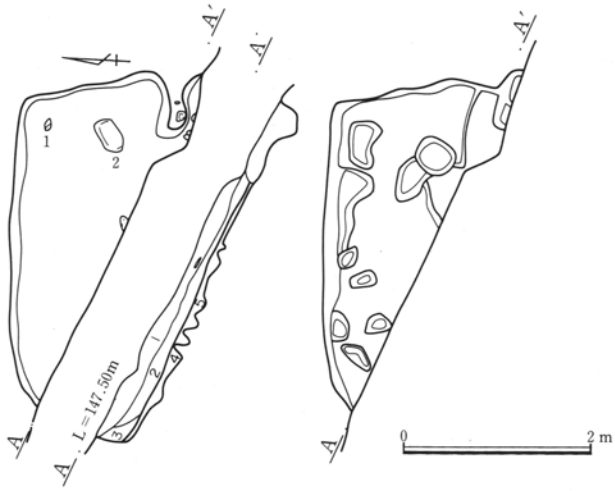


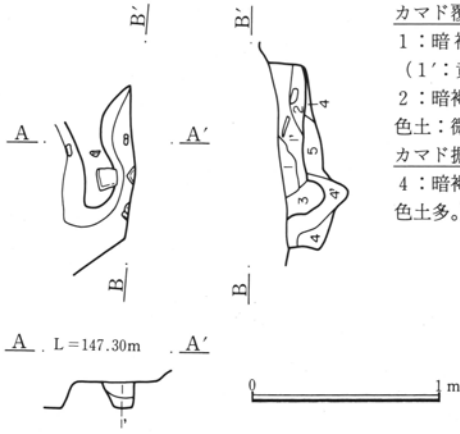
第40図　Ｈ－14号住居掘り方及び出土遺物



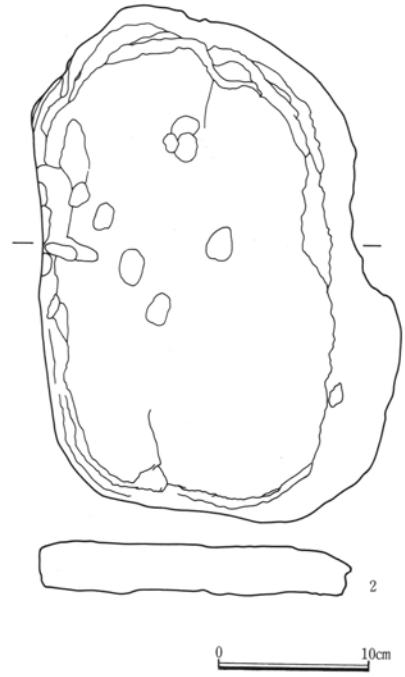


住居覆土（１・２層：軟質）
１：黒色土：暗褐色土若干含。　２：黒褐色土：黒色土と暗褐色土の混土。　３：黒褐色土：ローム多量に含。
掘り方覆土
４：暗茶褐色：黒色土微量に含む。　５：黒色土：ロームブロック（径１cm程度）若干含む。





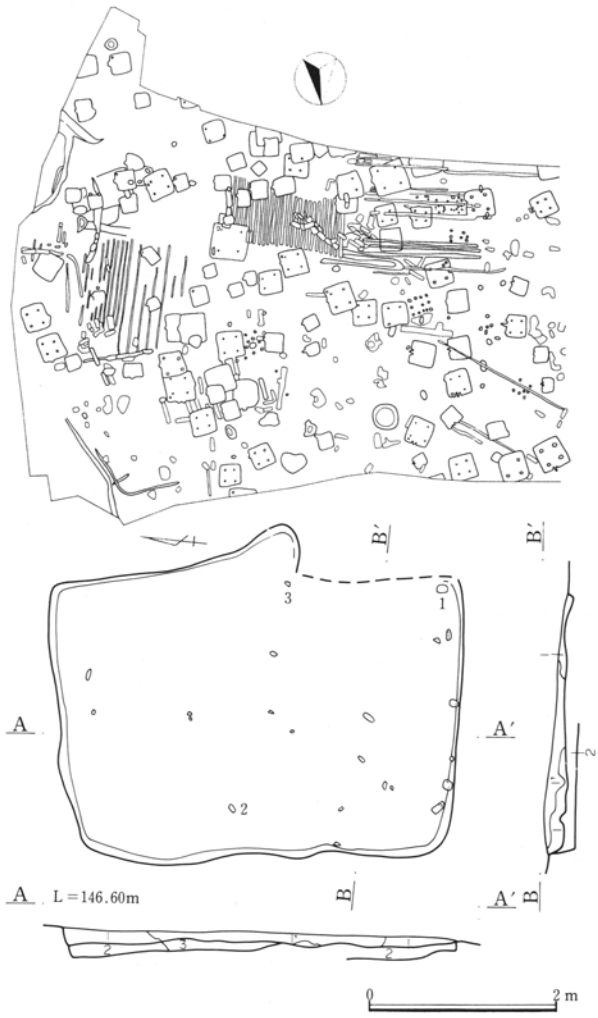
カマド覆土
１：暗褐色土：焼土ブロック若干含む。（１′：黄色味増し、更に多量の焼土含む。）
２：暗褐色土：粘土・灰少量含む。　３：黒色土：微量のローム混入。
カマド掘り方覆土
４：暗褐色土：黒色・褐色土の混土。（４′：黒色土多。）　５：赤褐色土：焼土主体。



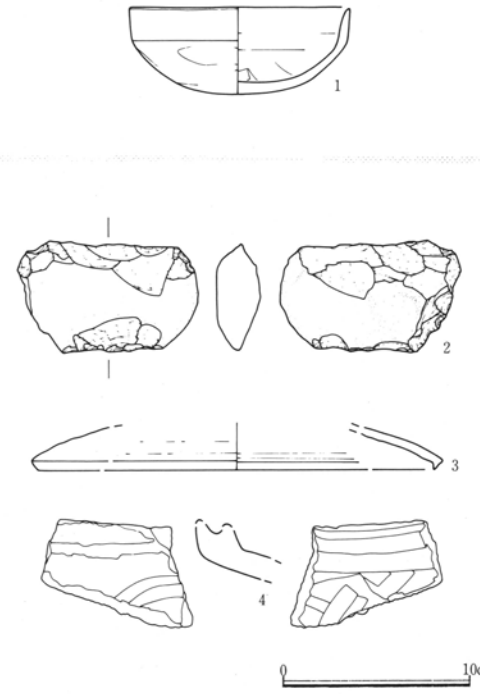
Ｈ－15号住居（古墳時代後期．第41図．図版10～11・55）

概要　本住居はＢ区南東部に位置するやや小型と推定される竪穴住居跡である。カマドと北西隅部を結ぶラインから南の部分は路線外に出ていて調査する

第41図　Ｈ－15号住居及び出土遺物



住居覆土
１：暗褐色土：淡褐色土粒・炭化物・焼土粒少量含む。（1′：焼土粒に変わりロームをブロック状に少量含む。）
掘り方覆土
２：暗黄褐色土：黒色土含む。　３：暗褐色土：ローム若干含。



第42図　Ｈ－16号住居及び出土遺物

ることができなかった。

出土遺物は少なく、僅かに７世紀前半期所産である可能性を持つ土師器坏（1）、及び縁辺部に敲打痕を持つことから小鍛冶に使用されたと思慮される台石（2）が出土しているに過ぎないが、何れも本住居に付随するものと判断される。

以上の点から本住居は７世紀前半頃所産のものとして把握したい。また、鍛冶仕事を行った住居である可能性も検討される。

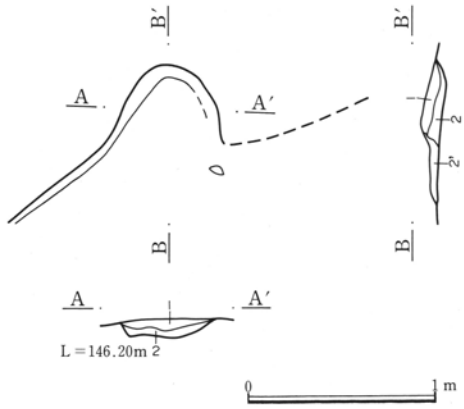
規模　長軸：328cm以上　短軸：192cm以上　深さ：22cm

カマド　幅：50cm以上　奥行き：71cm以上　　左袖幅：34cm　長さ：69cm　高さ：15cm　　燃焼部　径：70cm×14cm以上

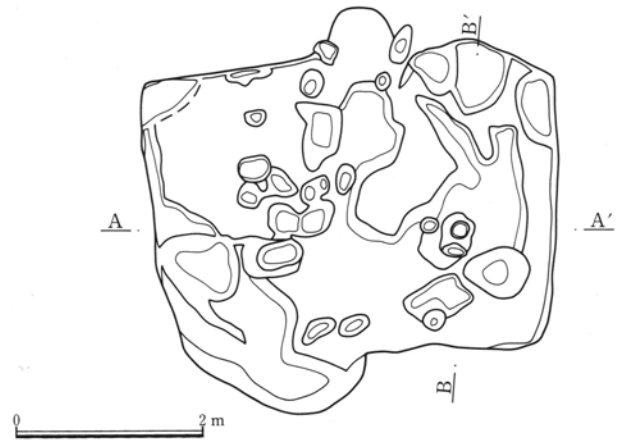
構造　住居の3/4以上の部分が路線外にあるため全体像はつまびらかではないが、確認された範囲での所見から本住居は方形プランを呈するものと推定される。掘り方を持ち、暗茶褐色土で埋め戻して床を造り出している。

カマドは浅い掘り方を持ち、暗褐色土で埋めて燃焼面を造る。袖構造の記録化は行えなかった。

また、柱穴・貯蔵穴等は確認できなかった。



カマド覆土
1：暗黄褐色土：ローム多量に入り、灰が少量ブロックで混入。
2：暗黒褐色土：焼土微量に混入。（2′：２層に比し更に多量の焼土ブロック混入。）



第43図　Ｈ－16号住居カマド及び掘り方

Ｈ－16号住居（古墳時代後期．第42～43図．図版11・55）

概要　本住居はＢ区南東の緩斜面部に位置し、単独に依存していた竪穴住居跡で、Ｂ区に於いてはやや小型の部類に属する。

本住居付近は東に向かって削平が進行しており、本住居も東壁がほとんど滅失するなど遺存状況は決して良好ではなかったが、特に筆者の指示ミスからベルトと南東の1/4を除く部分の床面を掘り過ぎてしまったため、充分な観察や記録化を行うことができなかった。

出土遺物は多くはなかったのであるが、このうち本住居に伴うと判断されたものには７世紀前半期の特徴を持つ土師器坏（1）があり、本住居の時期を示している。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器坏を中心とした幾つかの遺物の出土が見られたが、これらの中には縄文時代の石器（2）、古墳時代後期以降の時期の須恵器の蓋（3）や須恵器壷（4）などが含まれている。

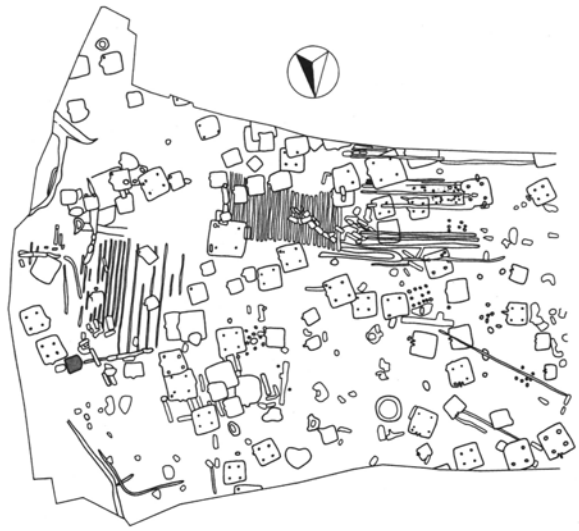
規模　長軸：443cm　短軸：316cm　深さ：24cm
カマド　幅：105cm　奥行き：60cm

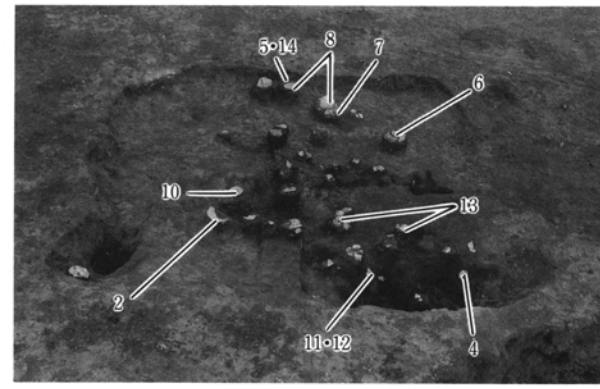
構造　本住居は逆台形に近い隅丸方形のプランを呈している。

掘り方を見るとカマド右前部に掘り残しがあり、南壁下にも幅26cm程の掘り残しが見られるが、北壁下では幅18cm、深さ５cm程の浅い溝が掘られている。このような掘り残しや掘り込みといった構造を持つ掘り方は、暗褐色土や暗黄褐色土で埋め戻して床を造り出している。

カマドは削平が著しいため、その構造の多くを知ることはできなかったが以下のような若干の所見を得ることはできた。本住居のカマドは東カマドであり、浅い掘り方を有する。この掘り方を暗黄褐色土と暗黒褐色土で埋め戻して燃焼面を造り出している。カマドの左右には、左側に径25×24cm、深さ17cm、右側に径43×20cm、深さ34cmの小ピットが掘られているが、これらは石材の抜き痕と考えられ、袖石を備えた袖の構造が想定される。

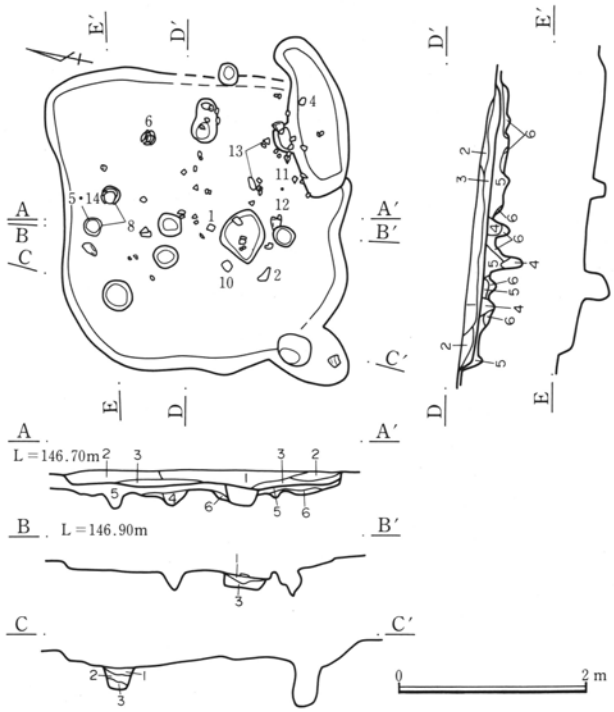
ところで本住居の概要で述べたように、本住居では調査上の失敗があったため、床面に見られる構造物の検出は3/4の範囲でしか行い得なかったのであるが、カマドを除くピット等の構造物を確認することはできなかった。尚、南東部に確認できた床の状況から柱穴及び貯蔵穴は造られなかったものと認識している。





住居覆土（やや締まり良く、粘性有り）
１：黒褐色土：淡色ロームブロック僅かに含む。　２：暗褐色土：やや黄味帯びる。ローム粒僅かに含む。　３：暗黄褐色土：ローム粒主体。締まり良く、粘性強。
掘り方覆土（やや締まり悪く粘性有り）
４：暗黄褐色土：ローム・褐色土等含。　５：暗黄褐色ローム粒主体。　６：黄褐色ローム粒層。やや締まり良。粘性やや強。

柱穴覆土
１：褐色土：黒褐色土粒とローム粒の混土層。やや締まり良。粘性有。　２：褐色土：１層よりローム粒の割合高。やや締まり良。粘性やや強。　３：黄褐色ローム粒層。粘性やや強い。



第44図　Ｈ－17号住居

Ｈ－17号住居（平安時代中期．第44～45図．図版11・55～56）

概要　本住居はＢ区東端の土合川に落ちる斜面に面する台地縁辺部の中央付近に位置し、Ｂ区にあっても小型のものに属する竪穴住居跡である。遺存状況は良好とは言えず、住居付近は東側に向かって削平が進行していて、本住居に於いても特に東壁付近の削平が著しい。加えて、住居の南東壁には柱穴と思われるピットが掛かり、南東隅部は攪乱土坑等によって壊されている。

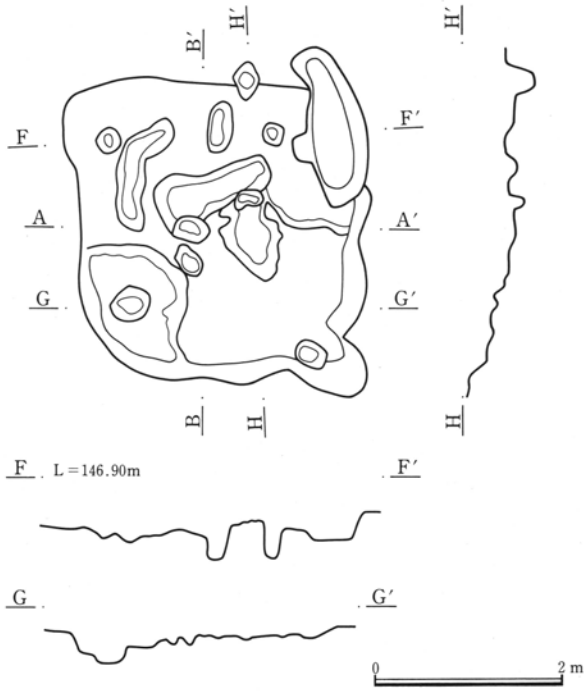
出土遺物は住居の遺存状況に比べれば多くを取り上げることができたが、このうち本住居に伴うと判断された遺物はわずかに10世紀前半期の特徴を有する須恵器坏（1）と羽釜（2）の２点である。

一方、覆土中からは10世紀後半の高台付椀(6～8)、８世紀代の土師器坏（9）や須恵器坏（11）、10世代の土師器椀のほか、土錘（10）や須恵器甕（12）、縄文時代の石器類（3,4）などの遺物が出土している。

これらのことから本住居は10世紀前半の所産と考えられ、少なくも10世紀後半までは窪地としてその痕跡が残されていたものと推定される。

規模　長軸：340cm　短軸：313cm　深さ：19cm

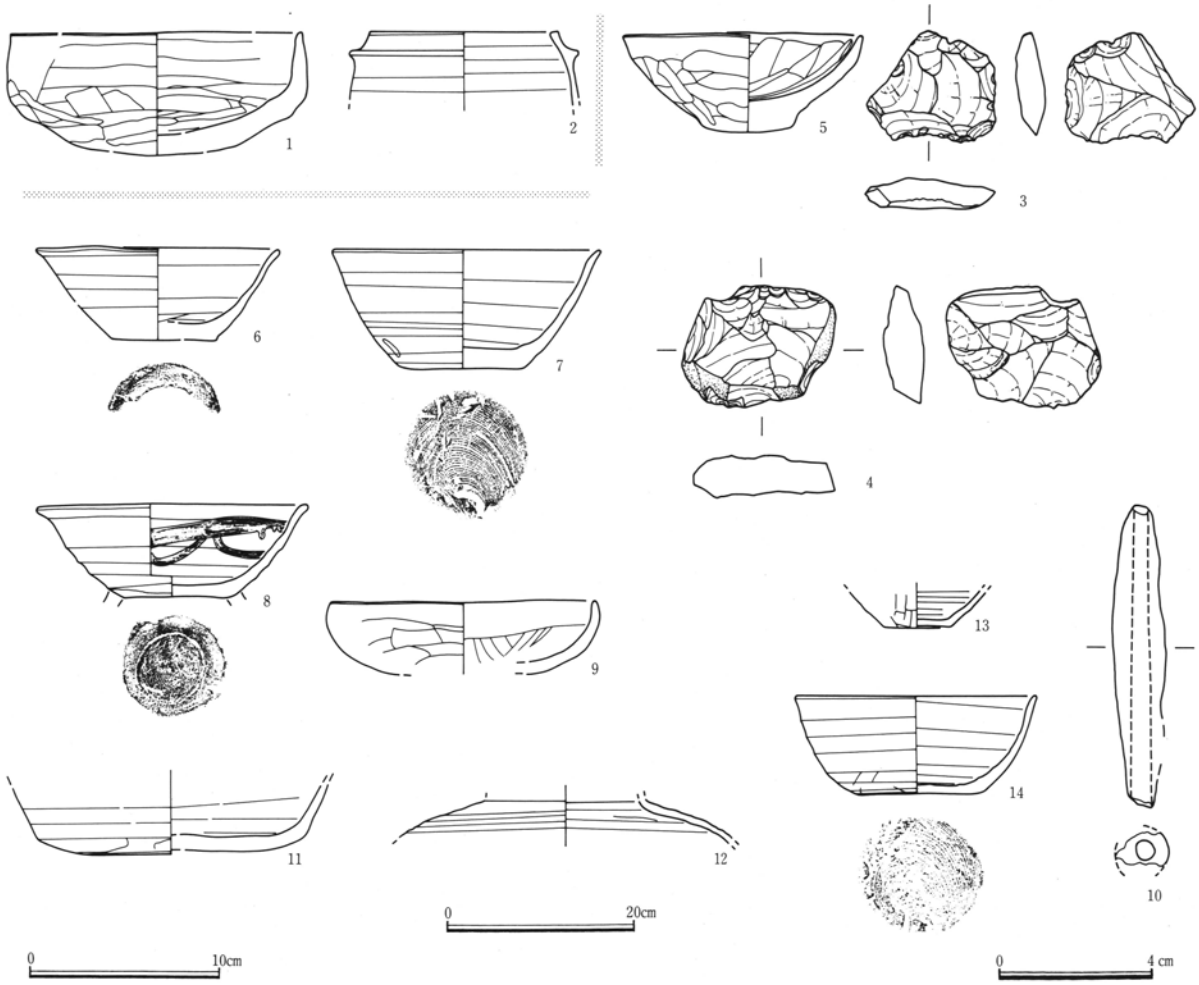
構造　本住居は一部壊されているが、全体としては不整形な隅丸方形のプランを呈しているようであり、掘り方を有している。掘り方に於いては土坑・ピット様の小型の掘り込みが見られた。このうち



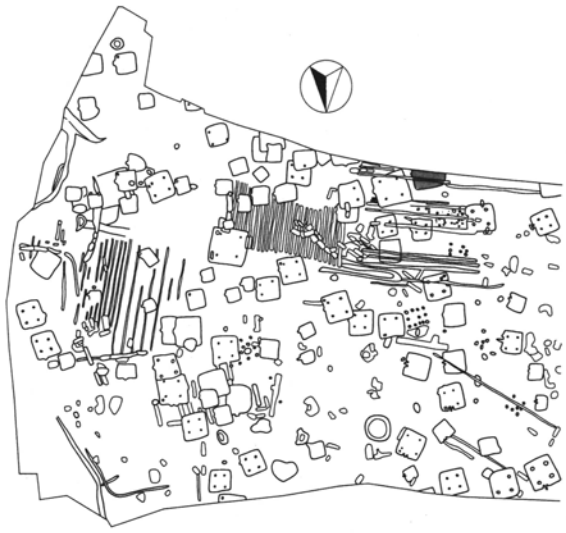
ピットは柱穴と考えられ、径20～30cm程のものを中心とし、深さ16～43cm程のもので９基程を確認しているが、本住居に伴うものかどうかは特定できなかった。このような構造物の見られる掘り方を黄褐色土・暗黄褐色土等の土壌で埋め戻して床を造り出しているが、床面はやや東に向かって傾斜している。

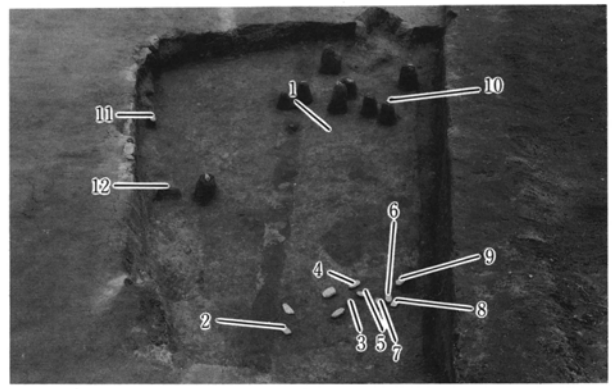
カマドは認められなかったが、本遺跡に於ける同時期の竪穴住居のカマドが東向きであることを勘案すれば、(既に削平されていたため確認できなかったものの）東壁南半部に造られていたものと推察される。

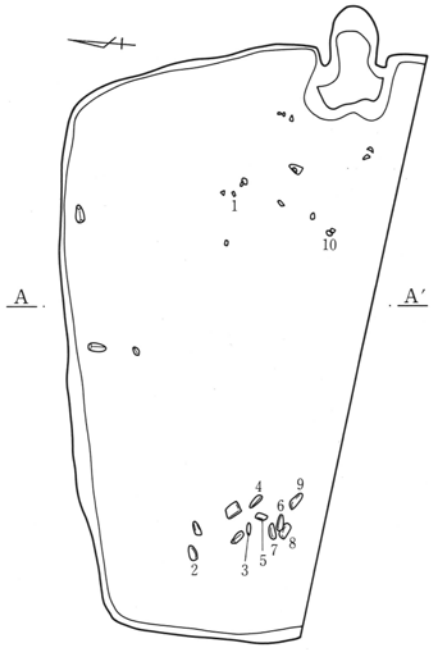
尚、柱穴は上述の掘り方で見られたピットが相当する可能性はあるが、住居規模から推察すれば柱穴或いは柱材そのものの使用も無かったものと思われる。また、貯蔵穴は確認されなかった。



第45図　Ｈ－17号住居掘り方及び出土遺物

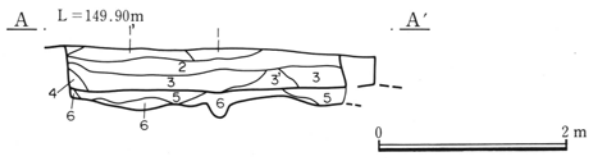


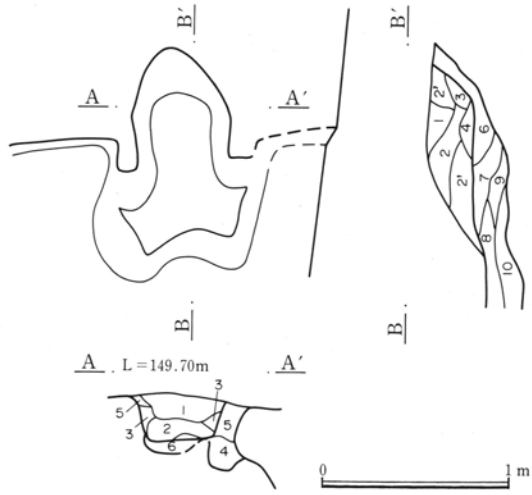




近世以降の土層
１：暗黒褐色土：As-A多量に含み、堅く締まる。（1′：１層に比し更に多量のAs-A含む。）
住居覆土
２：暗黒褐色土：褐色土・白色土粒を非常に多量に含む。　３：暗黒褐色土：褐色土粒・炭化物を多量に含む。締まり欠。（3′：褐色土の混入減少。）　４：暗褐色土：暗褐色土と褐色土の混土。
掘り方覆土
５：暗黒褐色土：黒色土・暗灰褐色土とロームブロックの混土。
６：茶褐色土：黒色土微量に入る。

カマド掘り方
１：暗赤黒褐色土：焼土をブロック状に多量に含む。　２：暗赤黒褐色土：１層に比し焼土減少し、炭化物混入。（2′：暗赤褐色土：焼土・炭化物微量に含む。）　３：暗赤黒褐色土：１～３層中、最も焼土ブロック多量に含む。　４：暗黒褐色土：若干の灰含む。
５：暗黒褐色土：微量の焼土混入。
カマド掘り方覆土
６：暗黒褐色土：焼土小ブロック少量含む。　７：暗黒褐色土。
８：暗黒褐色土：焼土・灰極く少量含む。　９：暗黄褐色土：ローム大ブロックと焼土少量含む。　10：暗黄褐色土：黒色土若干混入。



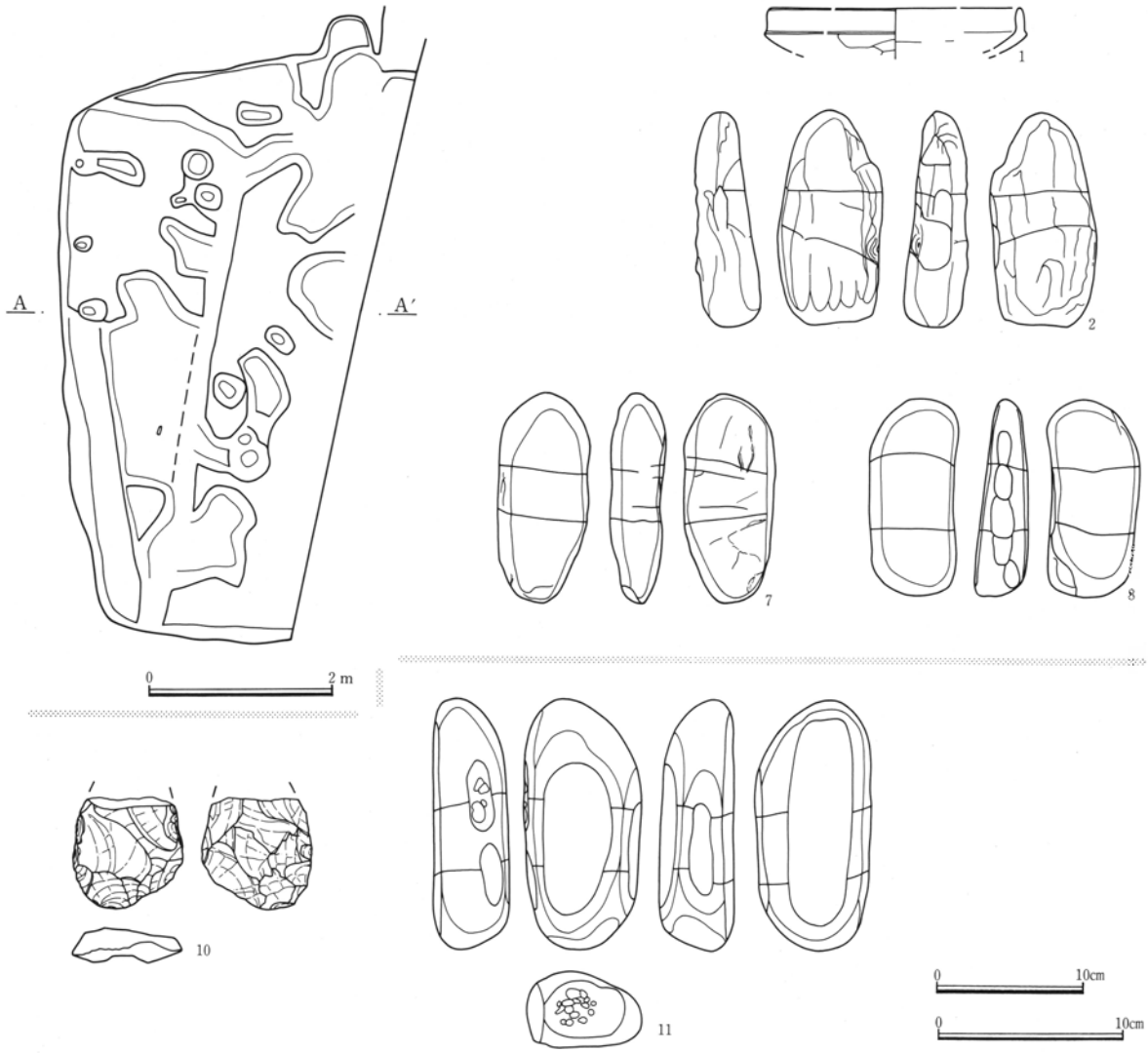


第46図　Ｈ－18号住居及びカマド

Ｈ－18号住居（古墳時代後期．第46～47図．図版11・56・90）

概要　本住居はＢ区中南部に位置する、Ｂ区に於いては中型に属する竪穴住居跡であるが、その南半は路線外に出て全体を調査することはできなかった。

本住居の出土遺物は多くないが、本住居に伴う遺物としては７世紀中頃の土師器坏（1）及び一括の資料である、こも編み石（2～9）が出土している。



第47図　Ｈ－18号住居掘り方及び出土遺物

また、覆土中からは古墳時代後期の土師器の坏や甕を中心に出土し、不定形石器（10）や転用のこも編み石（11,12）なども出土している。

出土遺物が多くないので断定はできないが、本住居は凡そ７世紀中葉の所産として把握されるものと思われる。

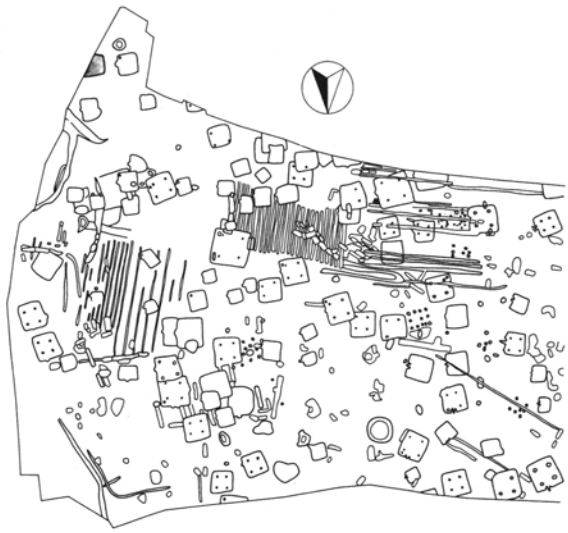
規模　長軸：624cm　短軸：406cm以上　深さ：40cm　カマド　幅：100cm　奥行き：120cm　　左袖　幅：25cm　長さ：33cm　高さ：22cm　　右袖　幅：33cm　長さ：26cm　高さ：30cm　　燃焼部　径：33×65cm

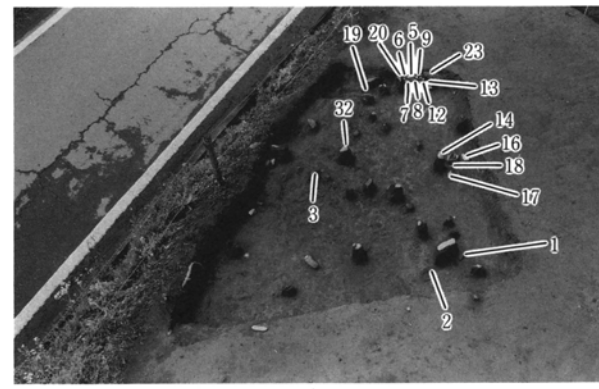
構造　上述のように本住居の半ばの部分が調査区外に在るため全容は明らかでないが、本住居は隅丸方形のプランを持つものと推定される。

本住居は東壁下に幅76cm程、深さ10cm程、北壁下に幅34cm程、深さ20数cmを測るテラス状の低い掘り残しを持つ掘り方を有し、これを黒色土・茶褐色土・暗灰褐色土で埋め戻して床を造り出している。

カマドは東カマドである。浅い掘り方を持つが、掘り方の（左）袖部分は数cmの高さで掘り残しが行われているようである。この掘り方を暗黒褐色土で埋め戻して燃焼面を造っているが、燃焼面は床面より５cm程高くなっている。袖は床面に於いては失われていたために、その構造はつまびらかでないが、袖石等の材を用いずに造っているようである。

尚、カマド以外の柱穴・貯蔵穴等の構造物は確認されなかった。

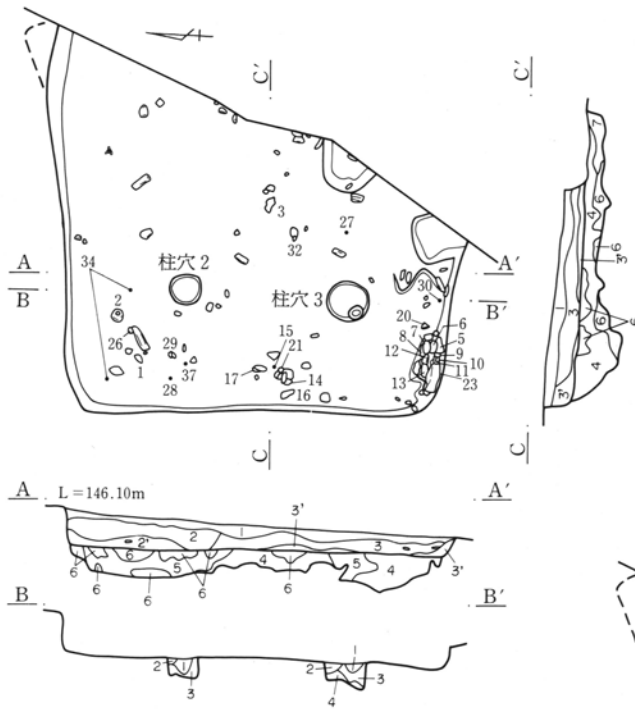




概要　本住居はＢ区南東の緩斜面部に位置するＢ区に於いては中型のものに属すると推定される竪穴住居跡である。しかし住居の東半部は町道石神・多比良線によって切られ、滅失してしまっていた。

本住居からの遺物の出土は少なくなかったが、このうち本住居に伴う遺物には８世紀後半期のものの特徴を示す土師器坏（1・2）や土師器甕（3）があり、他に鉄製品（4）や一群のこも編み石（5～21）の出土が見られた。

一方、覆土中からは古墳時代後期から奈良時代にかけての時期の土師器甕を中心に、縄文時代の石器（22,23,25）、８世紀前半の須恵器蓋（28）、甕(29)、８世紀後半の土師器坏(26,27)



住居覆土

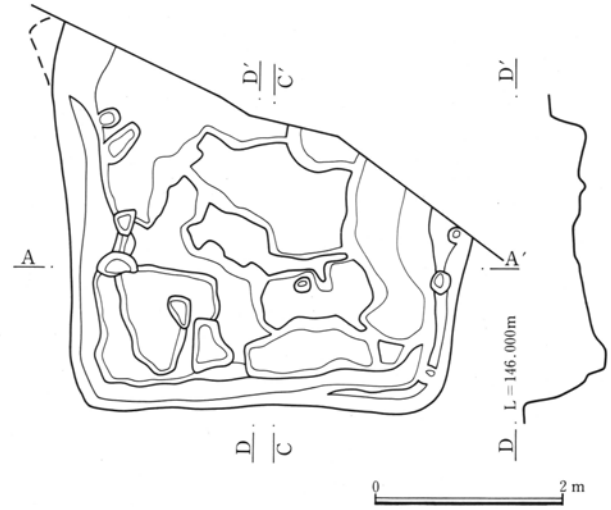
１：暗褐色土主体。　２：黒褐色土：炭化物・淡褐色土粒多く含み堅く締まる。（２′：２層土に焼土粒少量混入。）　３：淡褐色土：若干の淡褐色土粒含む。（３′：少量の淡褐色土ブロック含み堅く締。）

掘り方覆土

４：暗茶褐色土：黒色土・暗褐色土・褐色土の混土。　５：暗黒褐色土：暗黒褐色土基調に褐色土少量混入。　６：暗黄褐色土：若干黒色土混入。　７：暗黒褐色土：黒色土を縞状に含む。

柱穴覆土

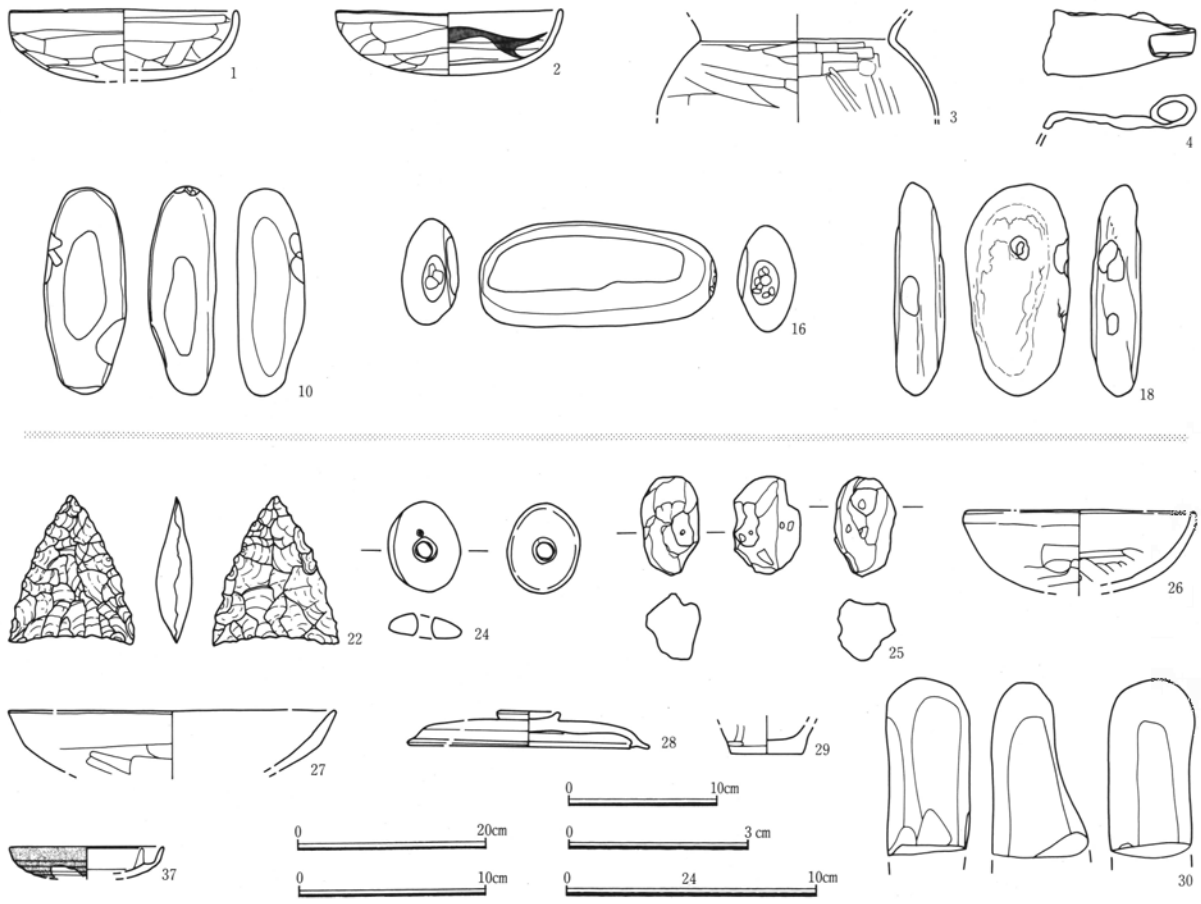
１：暗褐色土：くすんだ褐色土ブロック状に少量混入。　２：褐色土主体。　３：黒褐色土：夾雑物殆ど認められず。　４：褐色土。



第48図　Ｈ－19号住居

Ｈ－19号住居（奈良時代．第48～49図．図版11～12・56～57・90）

のほか、砥石（30）、こも編み石（31～36）、有孔の石製品（24）や近世後期の燈火皿（37）などが出土



第49図　Ｈ－19号住居出土遺物

している。

これらの出土遺物の状況から、本住居は８世紀後半（或は中葉）の所産であると判断され、また住居廃絶後、比較的早い時期に埋没が始まったものと推定される。

規模　長軸：404cm以上　短軸：442cm以上　深さ：38cm

柱穴２　径：34×31cm　深さ：22cm　　柱穴３　径：45×42cm　深さ：28cm

構造　本住居はその東半部が滅失しているため全体の形状は不明だが、概ね逆台形に近い隅丸方形のプランを呈すと推定される。

掘り方を有し、掘り方には南・西・北壁下を幅37cm以下の幅で掘り残しが巡っている。床面はこうした構造を持つ掘り方を、暗黄褐色土・暗茶褐色土・暗黒褐色土で埋め戻して造り出しているが、貼り床等の構造は特に設けられていない。

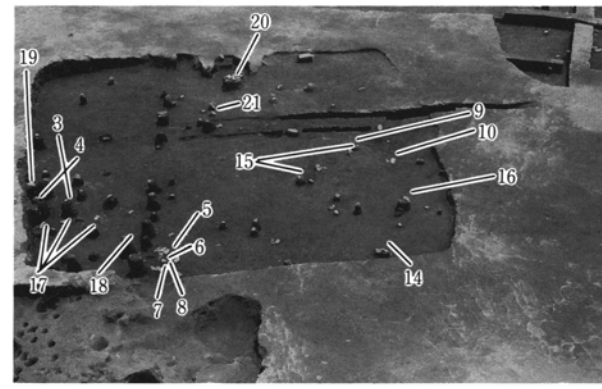
カマドは確認することができなかったが、東カマドであったものと推定される。

柱穴は西側の２基が確認されたが、円形プランであまり大きくない。断面観察から柱の径は30cm弱と推定される。

Ｈ－21号住居（古墳時代後期．第50～53図．図版12・52・57・90）

概要　本住居はＢ区南東部のＨ－28号住居等の９軒の重複住居群の１軒で、やや大型の規模を呈する竪穴住居跡である。本住居は西側のＨ－11号住居に切られ、南東側のＨ－22号住居を切っている。

本住居に伴うと判断される遺物には７世紀後半の何れも土師器の小型甕（1）と坏（2）があり、このほかこも編み石（3～11）、砥石（12）、有孔の石製品（13）があり、覆土中からは古墳時代後期の土師器



住居覆土
（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）
１：暗茶褐色土：漸移層土に焼土・炭化物・淡茶褐色シルト含。　２：暗褐色土：漸移層上層土にローム等入るブロック層。　３：明茶褐色土：１層に似る。淡茶褐色シルト多く入る。　４：茶褐色土：漸移層下層土にローム入るブロック層。炭化物入。　５：黒褐色土：黒色土と漸移層上層土に同下層土とローム入るブロック層。炭化物混入。
貼り床
６：茶褐色土：漸移層土とロームブロックの混土。炭化物僅かに含み、硬質。
掘り方覆土
７：淡茶褐色土：漸移層下層土ブロック層。８：明黄褐色土：漸移層下層土とロームの小ブロック層。　９：明茶褐色土：６層に似るがブロック径大きく、硬質でない。　10：暗褐色土：漸移層上層土ブロック層。　11：明褐色土：漸移層土にローム等入るブロック層。　12：明茶褐色土：９層に黒色土ブロック混入。　13：明黄褐色土：ローム主体。自然堆積か。14：灰茶褐色土：ロームに焼土・黒色土粒・シルト多く混入。床下粘土坑。15：明褐色土：ロームに漸移層土入るブロック層。16：明茶褐色土：漸移層土ブロックに黒色土・ローム・焼土・シルト等混入。　17：明褐色土：暗色及び黄色ロームと漸移層土入るブロック層。18：暗褐色土：暗色及び黄色ロームと黒色土入るブロック層。　19：暗黄褐色土：ロームブロック層。

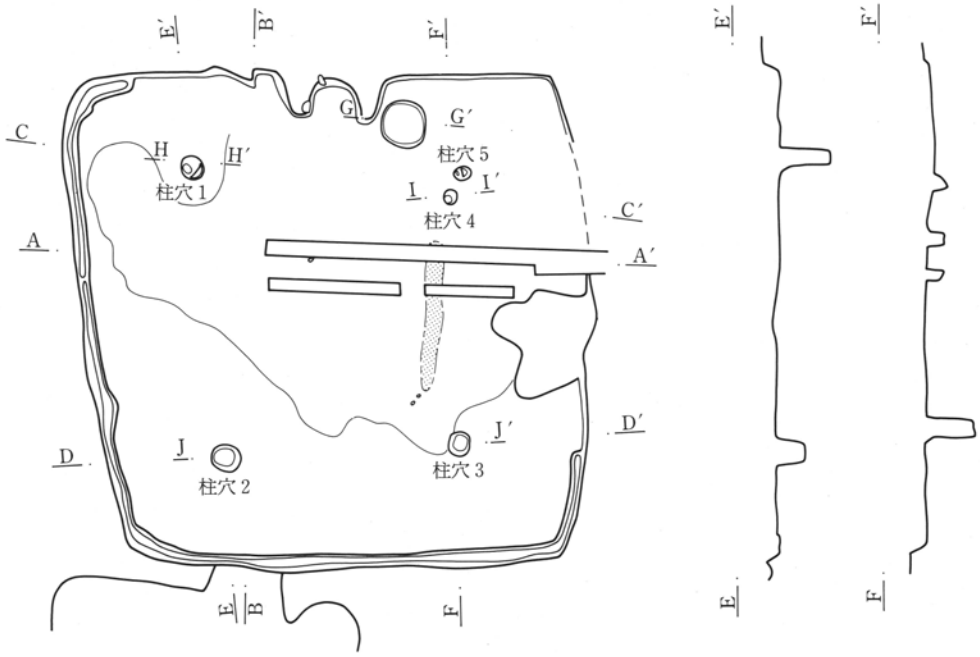
第50図　Ｈ―21号住居

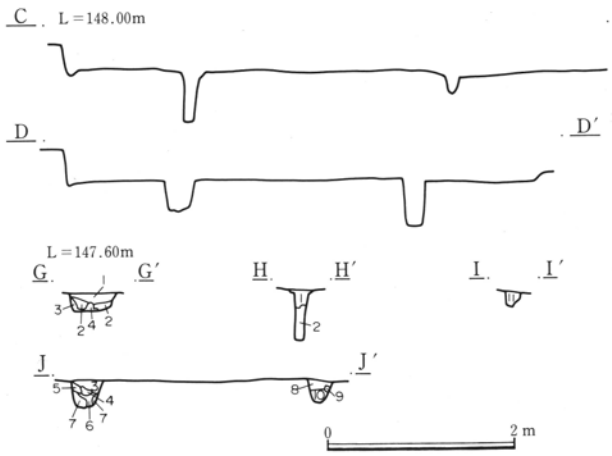
甕を中心に７世紀後半の土師器の坏（14～15）と高坏（17）、平安期頃の須恵器椀（16）が出土し、土錘（18）やこも編み石（19,20）や縄文時代の石器（21）などが出土している。

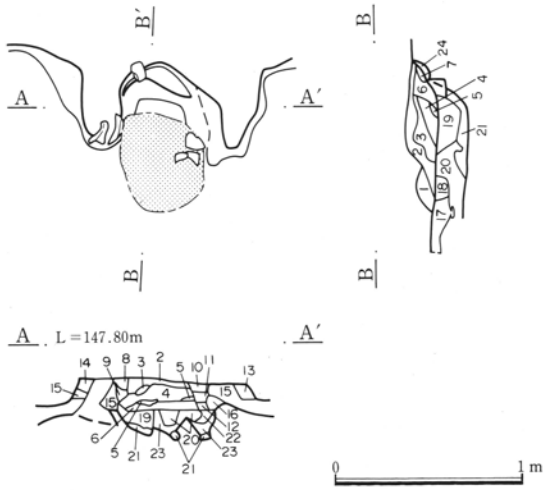
規模　長軸：518cm　短軸：518cm　深さ：34cm　カマド　幅：125cm　奥行き：78cm　　左袖　幅：120cm　長さ：40cm　高さ：26cm　　右袖　幅：83cm　長さ：41cm　高さ：17cm　　燃焼部　径：45×59cm　煙道　幅：40cm　長さ：18cm

柱穴１　径：25×24cm　深さ：55cm　　柱穴２　径：33×30cm　深さ：33cm　　柱穴３　径：27×23cm　深さ：50cm　　柱穴４　径：16×14cm　深さ：20cm　　柱穴５　径：17×14cm　深さ：14cm　　貯蔵穴　径：51×49cm　深さ：21cm

構造　本住居は方形のプランを呈する。プランは特定できなかったが住居掘り方東部には焼土とシルト







貯蔵穴覆土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）
１：淡赤茶褐色土：弱く焼土化する漸移層土ブロックと焼土粒の混土にシルト混入。　２：淡茶褐色土：漸移層下層土にシルトと焼土粒混入。　３：明黄褐色土：ロームに漸移層土入るブロック層。　４：明黄褐色土：ロームブロック基本。

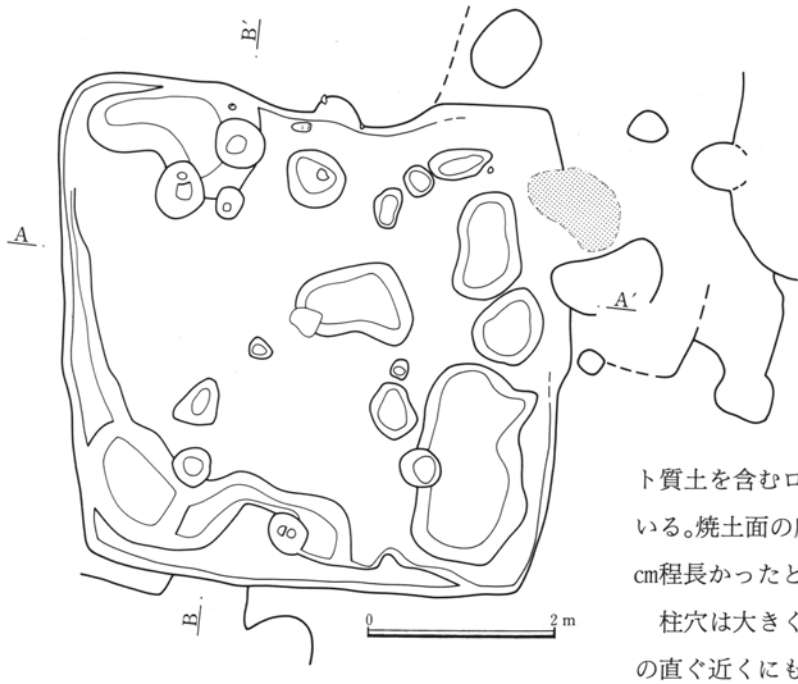
柱穴覆土
１：黒褐色土：黒色土と漸移層下層土・ロームブロックの混土。２：暗黄褐色土：漸移層下層土ブロック主体の混土。　３：茶褐色土：漸移層土主体のブロック層。　４：暗褐色土：漸移層上層土ブロック基調。５：明褐色土：ロームに漸移層土混入のブロック層。　６：明褐色土：ロームと漸移層下層土ブロックの混土。　７：暗褐色土：４層に似締まりに欠。８：茶褐色土：４層に似るがロームほぼ無。　９：明黄褐色土：ロームに漸移層上層土入るブロック層。　10：黒褐色土：黒色土に漸移層上層土ブロック混入。　11：明褐色土：５層に似焼土粒混入。

カマド覆土（２・４・６：弱く焼土化）
１：淡茶褐色土：ローム漸移層（以下「漸移層土」）下層土と淡黄色シルト等の混土。　２：淡赤茶褐色土：漸移層土中心。　３：暗赤褐色土：焼土化。漸移層土中心。　４：暗褐色土：漸移層土中心。　５：赤褐色土：焼土に漸移層土入。６：暗褐色土：漸移層上層土。　７：暗黄褐色土：ローム・漸移層土・焼土中心。　８：赤褐色土：漸移層土と焼土の混土。９：暗黄褐色土：漸移層土中心。10：明黄褐色土：僅かに焼土化。ローム・漸移層下層土小の中心。　11：黄褐色土：弱い焼土化。漸移層下層土の混土主体。　12：暗黄褐色土：漸移層土の混土。

袖構築材
13：淡灰褐色土：漸移層土層。シルト等多く入る。14：暗赤褐色土：焼土化進む漸移層土にシルト等やや多く入る。　15：褐色土：漸移層土とロームの混土主体。　16：暗褐色土：上層中心の漸移層土層。

カマド掘り方覆土
17：明茶褐色土：漸移層土中心。　18：茶褐色土：漸移層土中心。　19：淡赤茶褐色土：やや焼土化。漸移層土主体。　20：暗赤褐色土：14層に同。　21：明褐色土：ローム粒とシルトの混土。　22：褐色土：15層に似、ローム粒多くシルト入。　23：黄褐色土：ローム主体。　24：淡赤褐色土：焼土化見るロームと漸移層下層土の混土。

第51図　Ｈ―21号住居及びカマド

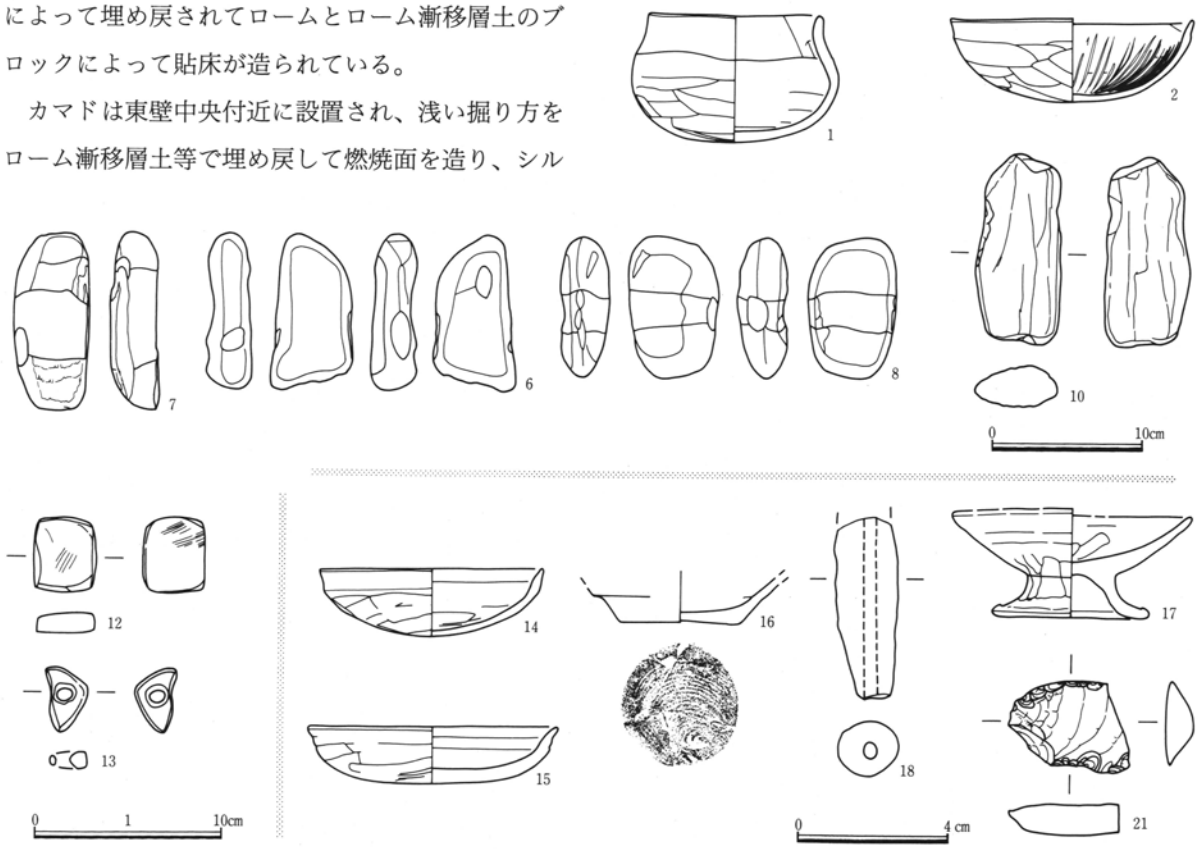


第52図　Ｈ―21号住居掘り方

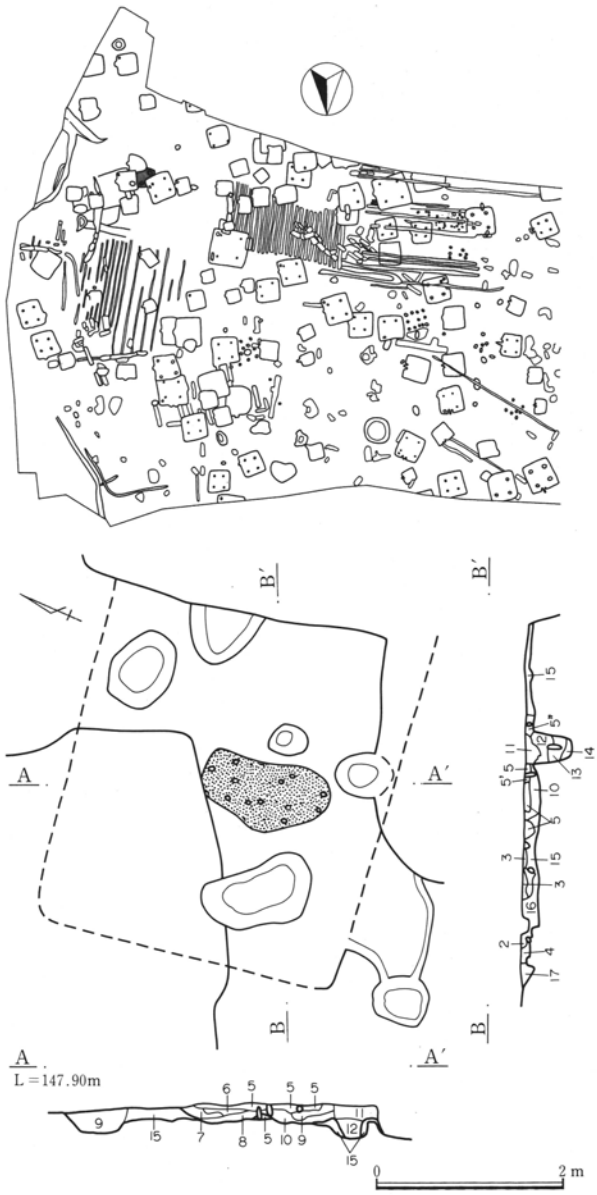
質土を多く含むロームの層があり、床下粘土坑の存在が想定される。掘り方はロームやローム漸移層土によって埋め戻されてロームとローム漸移層土のブロックによって貼床が造られている。

カマドは東壁中央付近に設置され、浅い掘り方をローム漸移層土等で埋め戻して燃焼面を造り、シルト質土を含むロームとローム漸移層土で袖を造っている。焼土面の広がりから、袖は確認状況より20～35cm程長かったと推定される。

柱穴は大きくはないが４基確認され、南東のものの直ぐ近くにもう一つ（柱穴５）掘削されている。円形に近いプランを呈する貯蔵穴はカマド右袖の直ぐ外側に掘削されている。貯蔵穴はあまり深くなく、底面はフラットである。



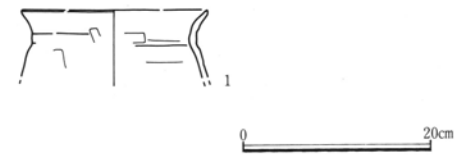
第53図　Ｈ―21号住居出土遺物



第54図　Ｈ－22号住居及び出土遺物

住居掘り方覆土

１：明茶褐色：Ｈ－21号住居－１層に似る。　２：黄茶褐色土：ローム漸移層土（以下「漸移層土」）とローム層土のブロック層。As-BP多く含む。　３：暗褐色土：漸移層上層土ブロック基本にAs-BP・ローム粒含む。　４：茶褐色土：３層に似るが粒径大きい。　５：明褐色土：Ｈ－21号住居－11層に似るが粒径小さい。焼土粒混入。（５′：５層に似るがローム粒含まない。　５″：５層に似るがローム粒多い。）　６：明茶褐色土：Ｈ－21号住居－９層に似る。　７：明褐色土：Ｈ－21号住居－11層に似る。　８：灰褐色土：７層土と青灰色シルトブロックの混土。　９：暗茶褐色土：漸移層上層土の細かいブロックにローム粒混入。　10：明茶褐色土：漸移層土にローム・青灰色シルトの混入するブロック層。　11：茶褐色土：漸移層上層土に黒色土とローム粒混入。　12：黒褐色土：黒色土にロームと漸移層上層土のブロック混入。　13：黒色土：ブロック層。　14：明茶褐色土：10層に似るがシルトブロック含まない。　15：明褐色土：漸移層下層土とローム・パミスの混土。　16：茶褐色土：漸移層上層土ブロック。　17：茶褐色土：漸移層上層土にロームと黒色土の入る細かいブロック層。



Ｈ－22号住居（古墳時代後期．第54図．図版12～13・57・90）

概要　本住居もＨ－21号住居と同様、Ｂ区南東部の９軒の重複住居群のうちの１軒である。遺存状況は極めて悪く、床面も削平されて掘り方部分が確認されたに過ぎない。Ｈ－22号住居は切り合い関係にあるＨ－21・Ｈ－23号住居に対して古く、Ｈ－87号住居に対しても本住居の方が古いものと判断される。

本住居に伴う出土遺物には６世紀後半の土師器甕（1）やこも編み石（2,3）があり、覆土中からは古墳時代後期から平安時代にかけての土師器甕を中心とする遺物が出土している。

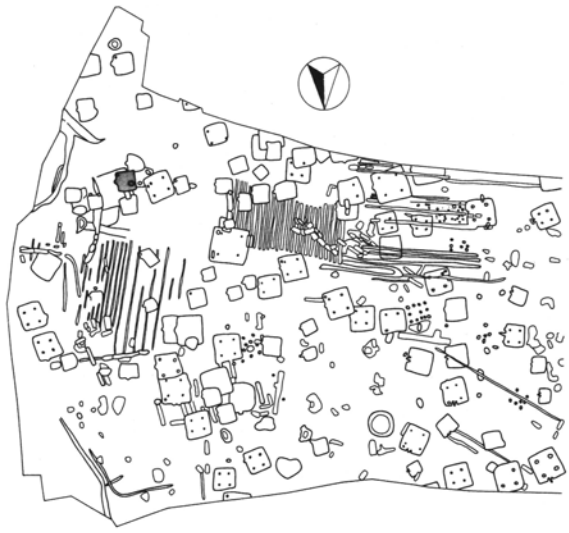
規模　長軸：370cm以上　短軸：推定323cm　深さ：０cm

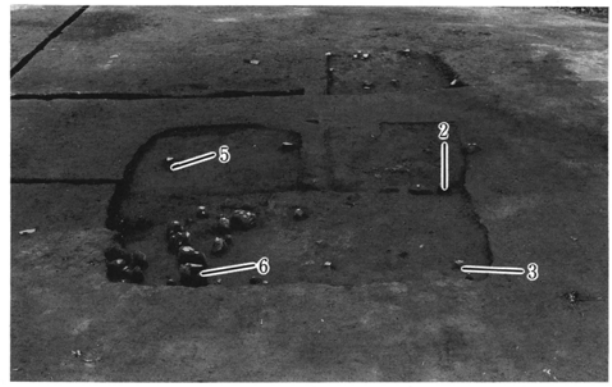
構造　本住居は遺存状況が悪く、僅かに掘り方が残るのみで、住居の範囲も特定できず殆どその状況を知ることは出来なかった。そのプランは縦長の方形または隅丸方形を呈するものと推定される。

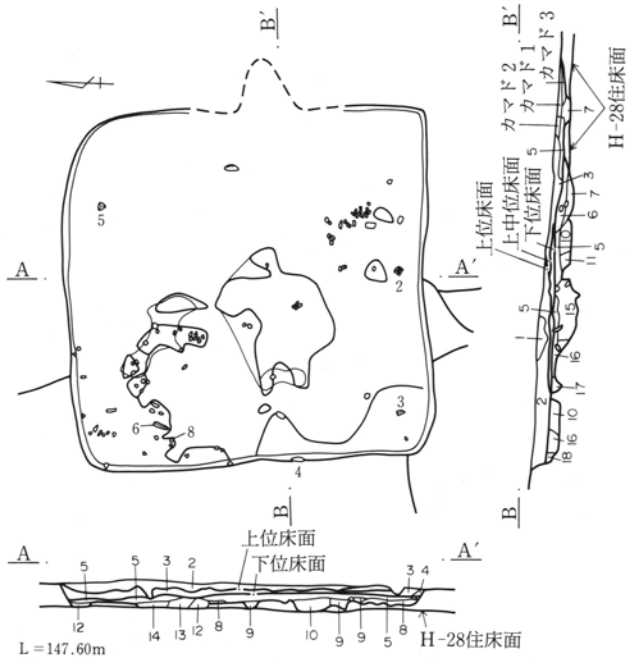
掘り方について見ると、南部中央付近には138×76cmの範囲で青灰色シルトの面的分布が認められたため床下粘土坑の存在が想定される。掘り方はローム漸移層土等で埋め戻されるが、３・５層は貼床の可能性を持つ。

カマドは特定できなかったがＨ－23号住居との境にカマド掘り方の可能性を持つ落ち込みがある。

尚、柱穴・貯蔵穴は確認されなかった。







住居覆土及び床

１：茶褐色土：ローム漸移層土（以下「漸移層土」）中心。　２：明褐色土：床第１・２面を成す硬化面あり。漸移層土・ローム中心。　３：褐色土：漸移層上層土中心。　４：暗褐色土：漸移層上層土。

貼床

５：暗褐色土：黒色土・漸移層土・ロームのブロック層。

掘り方覆土

６：淡赤褐色土：弱い焼土化見る漸移層土に焼土等混入。　７：灰白色土：シルトにローム・焼土多く混入。　８：茶褐色土／９：淡茶褐色土：漸移層土にローム等混入。H―23号住居―５層に似る。　10：淡茶褐色土：漸移層土とロームの混土。　11：茶褐色土：漸移層上層土ブロックにローム・漸移層下層土混入。　12：暗褐色土：漸移層上層土にローム混入。　13：黄褐色土：漸移層土とローム層土中心の混土。　14：黄褐色土：黒色土・漸移層土・ローム層土の混土。　15：暗褐色土：漸移層上層土層。　16：淡茶褐色土：H―23号住居―11層に似るが、黒色土混入。　17：明黄褐色土：ローム中心。　18：明褐色土：漸移層下層土とローム層土中心。

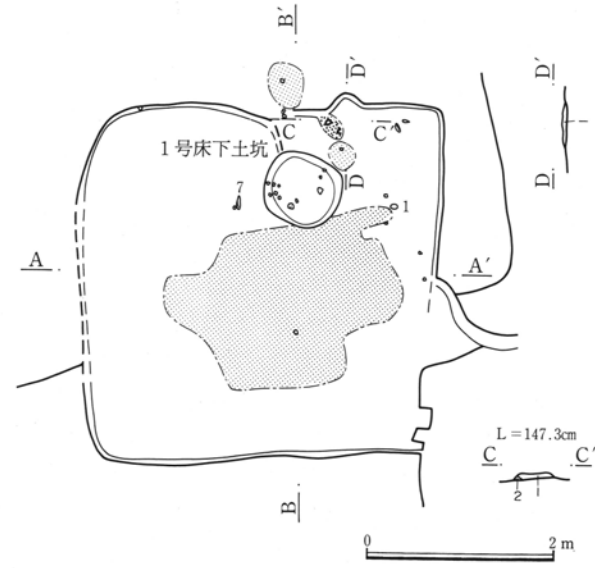
旧カマド覆土

１：明茶褐色土：ローム漸移層土・焼土・白色・淡黄色シルトの小ブロック層。粘性大。　２：茶褐色土：ローム漸移層土中心。

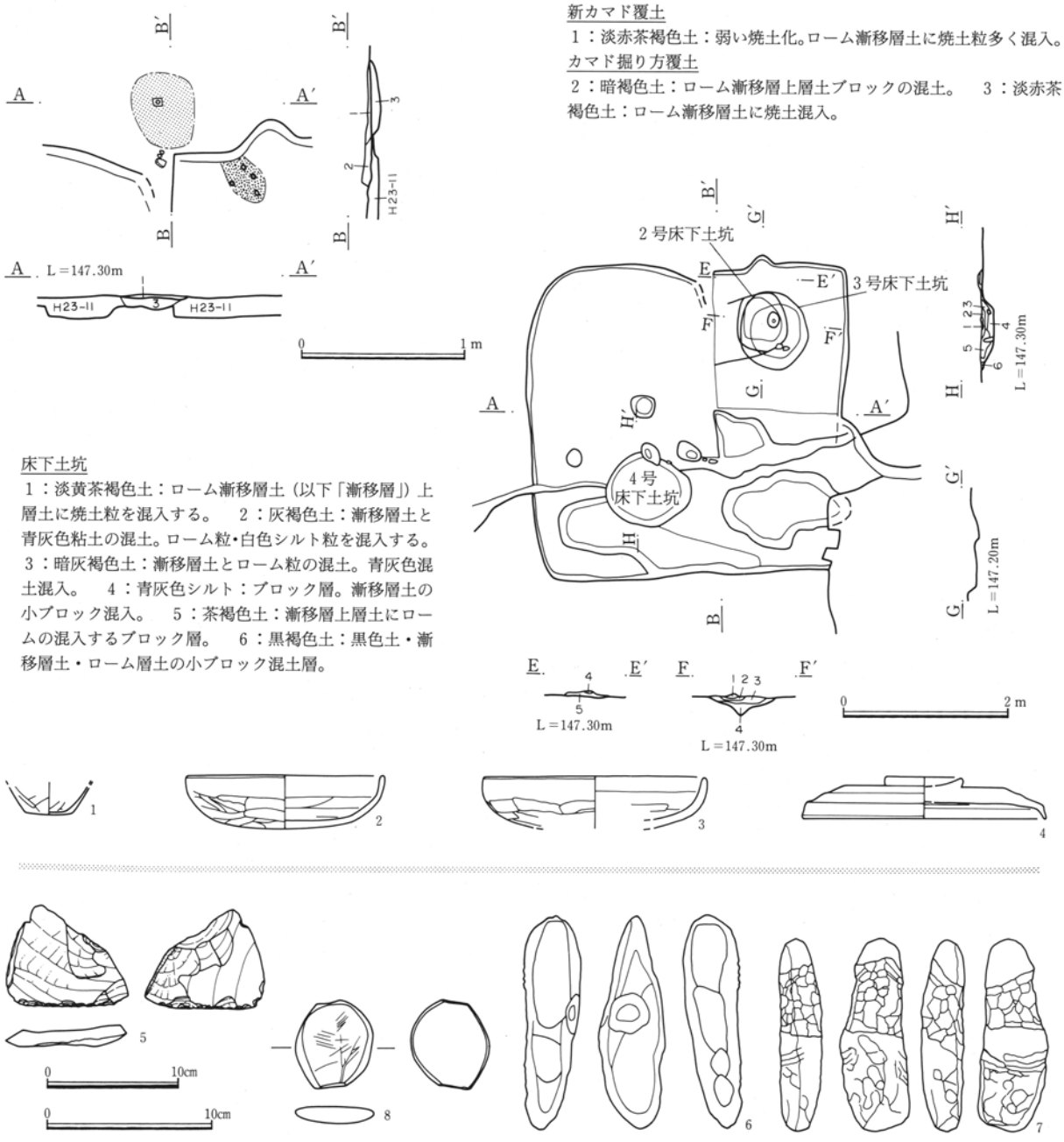
Ｈ－23号住居（奈良時代．第55～56図．図版13～14・57・90）

概要　Ｈ－23号住居はＢ区南東部に所在する小型の竪穴住居跡で、Ｈ－21・28号住居などとの９軒の重複住居群のうちの１軒である。本住居はＨ－22・28・87号住居と切り合い関係にあり、何れの住居に対しても新しい。本住居の東半はＨ－28号住居の覆土中に造られ、且つ東に向かって削平されるため東側壁は浅く、カマドはほとんど遺存しない。

本住居に伴う遺物には何れも８世紀前半期の特徴を持つ土師器甕（1）と同じく後半期の土師器坏（2,



第55図　Ｈ―23号住居



第56図　Ｈ―23号住居遺構及び出土遺物

3)、同じく中葉の須恵器蓋（4）があり、覆土中からは奈良・平安期時代頃の土師器甕を中心にスクレイパー（5）やこも編み石（7）などが出土している。

出土遺物から本住居は８世紀中頃の所産で、平安期頃まで窪地として痕跡を残したと推察される。

規模　長軸：397cm　短軸：374cm　深さ：25cm

新カマド　掘込みの幅：推定65cm　掘込みの奥行き：推定56cm　　燃焼部　径：47×37cm

旧カマド　掘込みの幅：40cm　掘込みの奥行き：13cm　左袖　幅：22cm　長さ：35cm　高さ：０cm

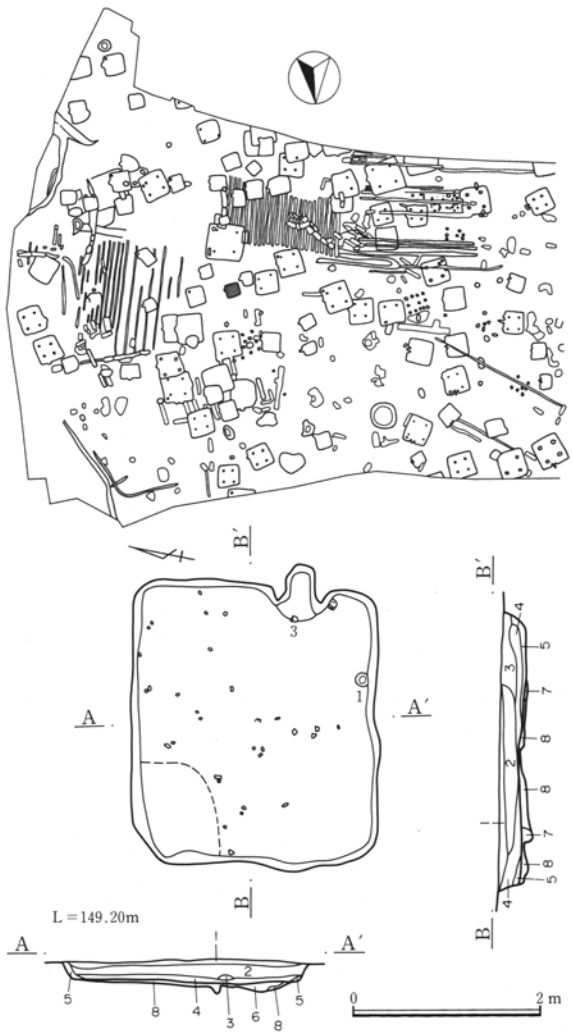
１号床下土坑　径：82×76cm　深さ：12cm

２号床下土坑　径：70×61cm　深さ：６cm

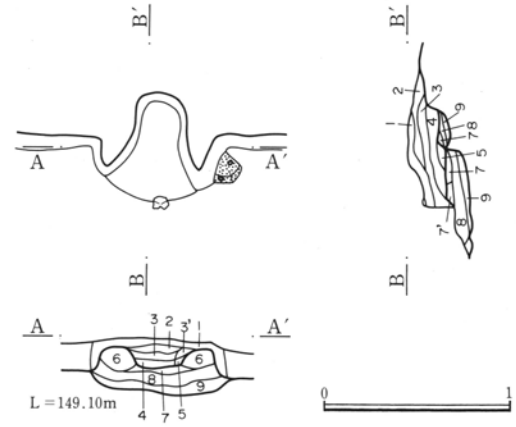
３号床下土坑　径：94×82cm　深さ：15cm

４号床下土坑　径：104×88cm　深さ：10cm

構造　本住居は方形のプランを呈し、カマド前に重複するように１・２・３号、西寄りに４号とした床



住居覆土（良く締まり、粘性有り）
１：暗褐色土主体。　２：暗褐色土：１層土ブロック等僅かに含む。
３：灰褐色土：ローム・炭化物粒と白色粘土僅かに含む。大変良く締まり、粘性強い。　４：暗褐色土：ローム僅かに含む。　５：暗黄褐色土：ロームを主体とする。やや良く締まり、粘性有り。
住居掘り方覆土
６：暗黄褐色土：ロームやや多く混入。良く締まり、粘性有り。
７：暗黄褐色土：汚れたローム粒主体。良く締まり、粘性有り。
８：明るい黄褐色土：明るいローム粒層。



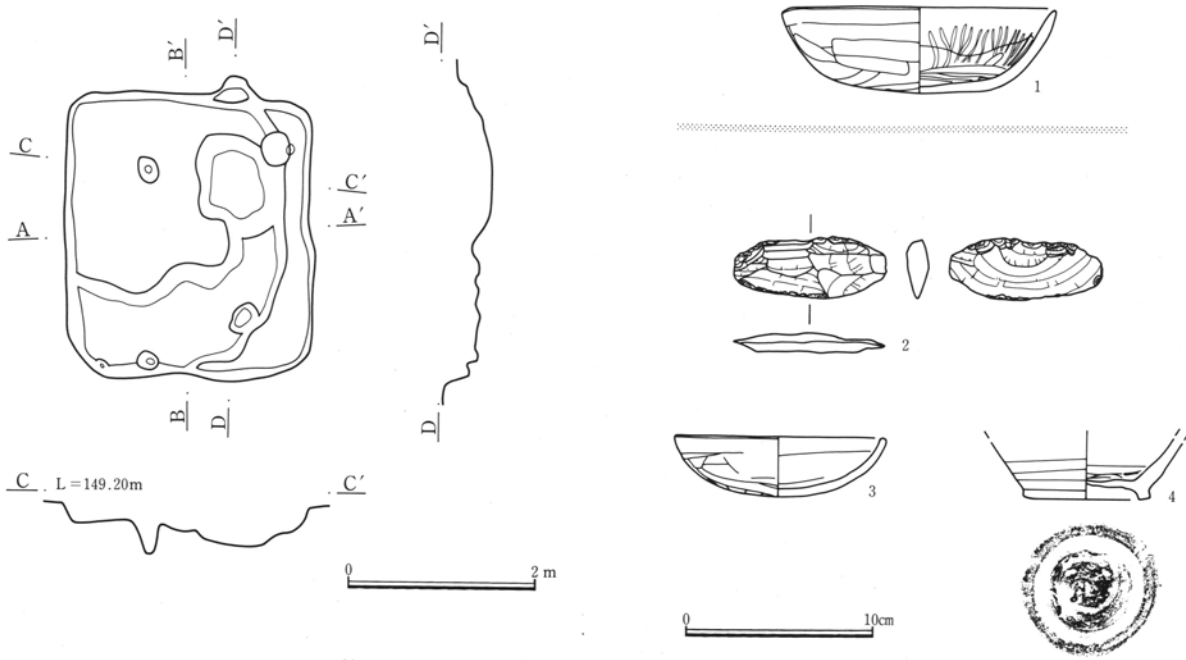
カマド覆土
１：暗褐色土：白色粒多く、大変締まり良く粘性有り。　２：暗褐色土：白色粘土粒等僅かに含む。大変締まり良く粘性有り。　３：暗褐色土：赤味帯びる。白色粘土等僅かに含む。締まり良く粘性有り。（３′：炭化物粒多い。）　４：暗赤褐色土：非常に細粒で赤味を帯びる。やや締まり良く粘性有り。　５：明赤褐色土：４層に似る。焼土粒目立ち、炭化物含む。やや締まり良く粘性有り。
袖構築材
６：にぶい赤橙色土：ロームブロック多量、白色粘質土僅かに含む。大変良く締まり、粘性有り。
カマド掘り方覆土
７：にぶい赤橙色土：ロームブロックやや多く含む。大変良く締まり、粘性有り。（７′：８層への漸移層的層。）　８：明赤灰色土：焼土等僅かに含む。大変良く締まり、粘性有り。　９：明るい黄褐色土：ローム粒が堅く締められた層。粘性有り。

第57図　Ｈ―24号住居及びカマド

下土坑がある。このうち１号床下土坑は床面調査時に既に確認されていて新カマドに属するもの、２～３号床下土坑は旧カマドに属すると判断される。特に３号床下土坑の壁面には青灰色シルトが面的に付着していた。掘り方はローム漸移層土等で埋め戻され、茶褐色のローム漸移層土によって、硬質で上・中・下位の３面が確認された床面が造られている。

カマドは東壁に作られ、新旧２ケ所あるが遺存状況は何れも良くない。新カマドは東壁中程に在るが燃焼部が確認されたに過ぎない。燃焼部は住居壁面の外に設けられ、燃焼面は浅い掘り方を暗褐色土で埋め戻して作っている。旧カマドは東壁南寄りに造られ、左袖の痕跡らしい粘土が見られた。燃焼部は東壁の内側に設けられている。

尚、柱穴・貯蔵穴は確認されなかった。



第58図　Ｈ－24号住居掘り方及び出土遺物

Ｈ－24号住居（奈良時代．第57～58図．図版14・57）

概要　本住居はＢ区の中央付近のフラットな地形を呈する区域に所在する小型の竪穴住居跡で、重複等はなく単独で遺存していた。削平は進むものの遺存状況は悪くなかったが、掘削時のミスで北西コーナー付近の床面を少し掘り過ぎてしまっている。

出土遺物は多くなく、本住居に伴うと判断された遺物には８世紀前半の特徴を持つ土師器坏（1）があるのみであるが、カマド右袖の外側には粘土塊の出土が見られた。

一方、覆土中からは土師器の坏・甕を中心とする遺物が出土し、スクレイパー（2）や８世紀前半の特徴を持つ土師器坏（3）、９世紀代の所産と考えられる須恵器高台付碗（4）などが出土している。

これらの出土遺物から、本住居は８世紀前半期頃の所産と判断され、９世紀頃までは窪地としてその痕跡を残していたものと思慮される。

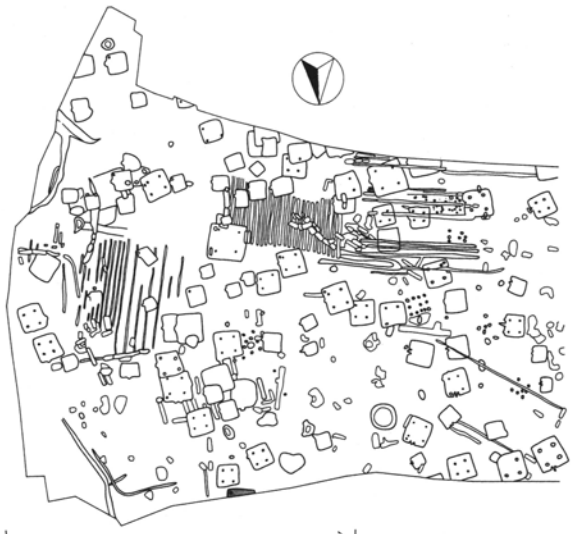
規模　長軸：298cm　短軸：265cm　深さ：24cm
カマド　幅：73cm　奥行き：58cm　　左袖　幅：25cm　長さ：19cm　高さ：17cm　　右袖　幅：26cm　長さ：30cm　高さ：15cm　　燃焼部　径：50×52cm
床下土坑　長軸：108cm　短軸：91cm　深さ：16cm

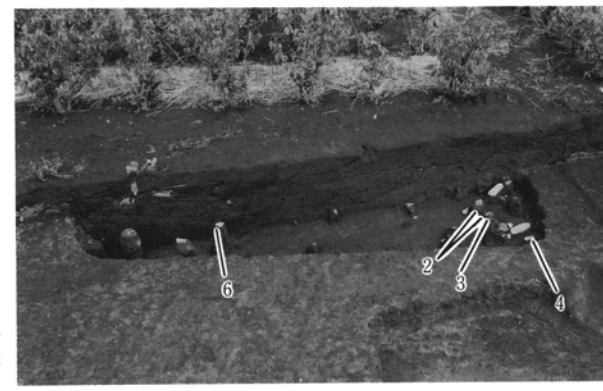
構造　本住居は隅丸方形のプランを呈する。

掘り方は浅いものであり、カマド前の部分に隅丸方形のプランを持つ丸底の床下土坑を有する。また、床下土坑の他幾つかのピット様の掘り込みも見られたが、本住居との関連は特定できなかった。この掘り方を暗黄褐色粘質土で埋め戻して床面を造り出しているが、床は特に貼り床等の施工は行われず、また床の硬化等は認められなかった。

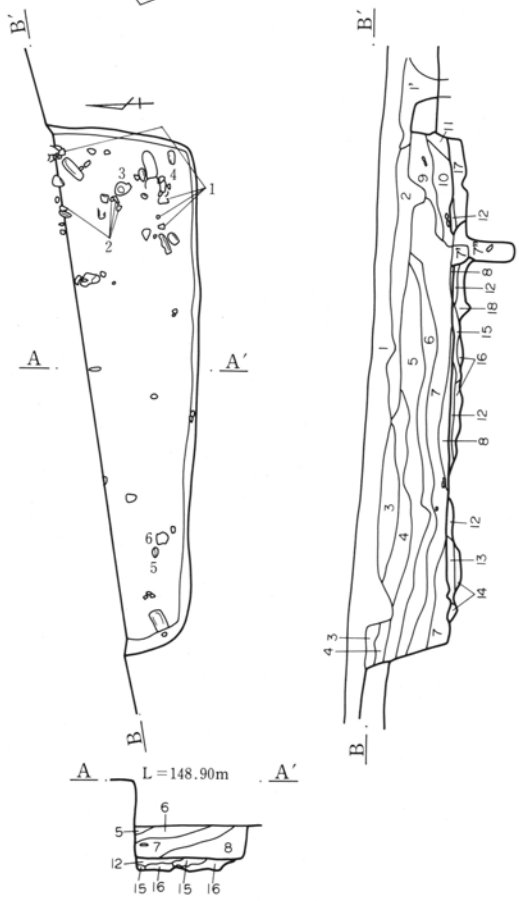
カマドは東カマドで、東壁のやや南に寄った位置に造られる。浅い掘り方を持ち、これを明赤灰色土・黄褐色土等で埋め戻し、更にロームをやや多く含む土壌を重ねて燃焼面を作り出している。燃焼部は壁のより内側の位置に設けられる。また多量のロームを含む土壌を用いて袖を造っているが、袖材等は使用されていない。煙道は明瞭ではないが壁面に入った位置に段差を持っている。

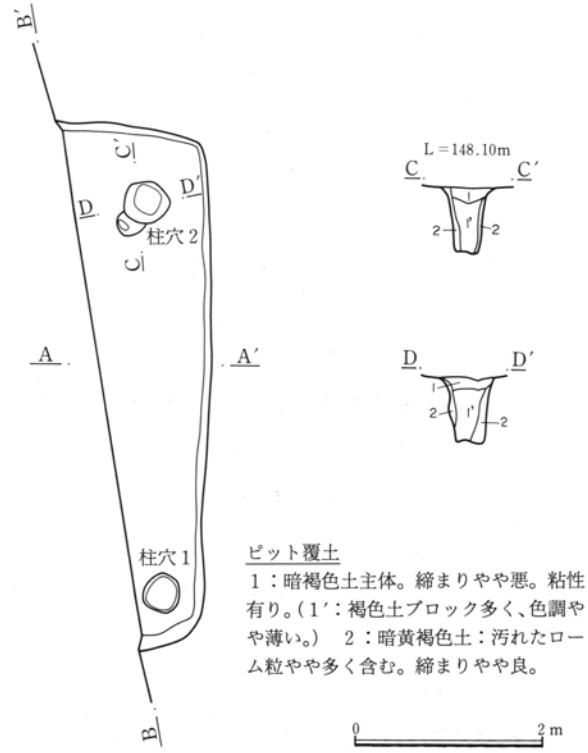
貯蔵穴は確認されなかった。柱穴については掘り方に見られた小ピットについて（特に北東のものは位置的に見ても）その可能性を考慮することができるが、一方で住居の規模から押して柱の無かったことも考慮される。





近世以降の埋土
１：灰白色土層：表土層。As-Aを多量に含む。（１′：灰白色土層：サク状遺構の耕作土。As-A多い。）　２：暗褐色土主体。
住居覆土
３：暗褐色土主体。　４：暗褐色土主体。　５・７：暗褐色土：ローム粒多め。　６・８：黒褐色土主体。　９：褐色土主体。　10：暗茶褐色土：ローム多。　11：暗黄褐色土：ローム粒固まる。
ピット覆土（締まりに欠ける）
７′：暗褐色土：７層にほぼ同じ。　７″：暗褐色土：７層に似る。
貼り床
12：暗黄褐色土：ローム主体。大変良く締まる。　13：黄褐色土：淡色のローム主体。大変良く締まる。
掘り方覆土
14：褐色土主体。　15：黒褐色粘質土主体。　16：褐色土：ロームを多量に含む。
地山層
17：暗褐色土：ローム等を僅か。　18：褐色土：16層に似る。

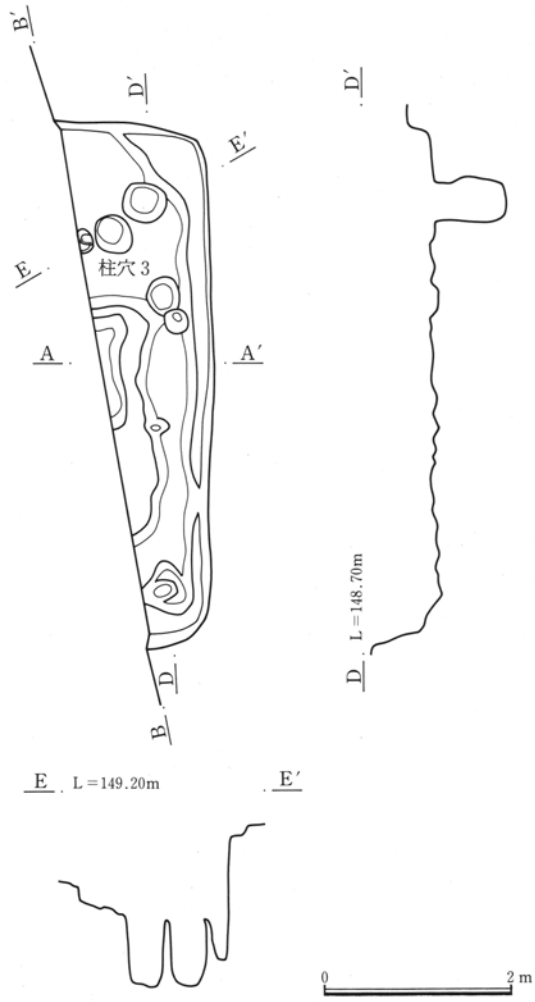




第59図　Ｈ－25号住居

Ｈ－25号住居（古墳時代後期．第59～60図．図版14～15・57～58・90）

概要　本住居はＢ区北東部の斜面手前に在る中型の竪穴住居跡である。ただし、遺構の殆どの部分は路線外（南側）に出ているため調査することができなかった。



一方、覆土中からは土師器甕を中心に、６世紀後半の特徴を示す須恵器坏（6）などの遺物が出土して来ている。

尚、このような出土遺物の状況から、本住居については６世紀後半の所産のものと判断され、廃絶後早い段階から埋没していった状況が伺われる。

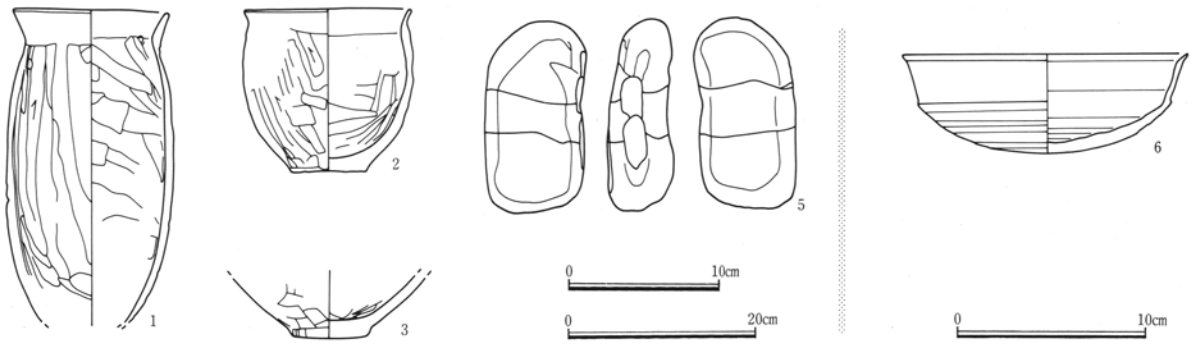
規模　長軸：557cm　短軸：157cm以上　深さ：58cm　柱穴１　径：41×39cm　深さ：30cm　柱穴２　径：48×46cm　深さ：76cm　柱穴３　径：40×39cm　深さ：83cm

構造　本住居の構造は、上述したようにその大半が路線外にあるため全体の状況はつまびらかではないが、そのプランは方形を呈するものと推定される。

掘り方には、南壁下に幅50cmのテラス状の掘り残しがあり、その内側には幅35cm以上の周溝状の掘り込みが廻るようである。このような凹凸面を持つ掘り方を、黄褐色土等の種々の土で埋め戻しており、その上で厚さ６cm程にローム主体の暗黄褐色土を重ねて固め、しっかりした貼床を造っている。

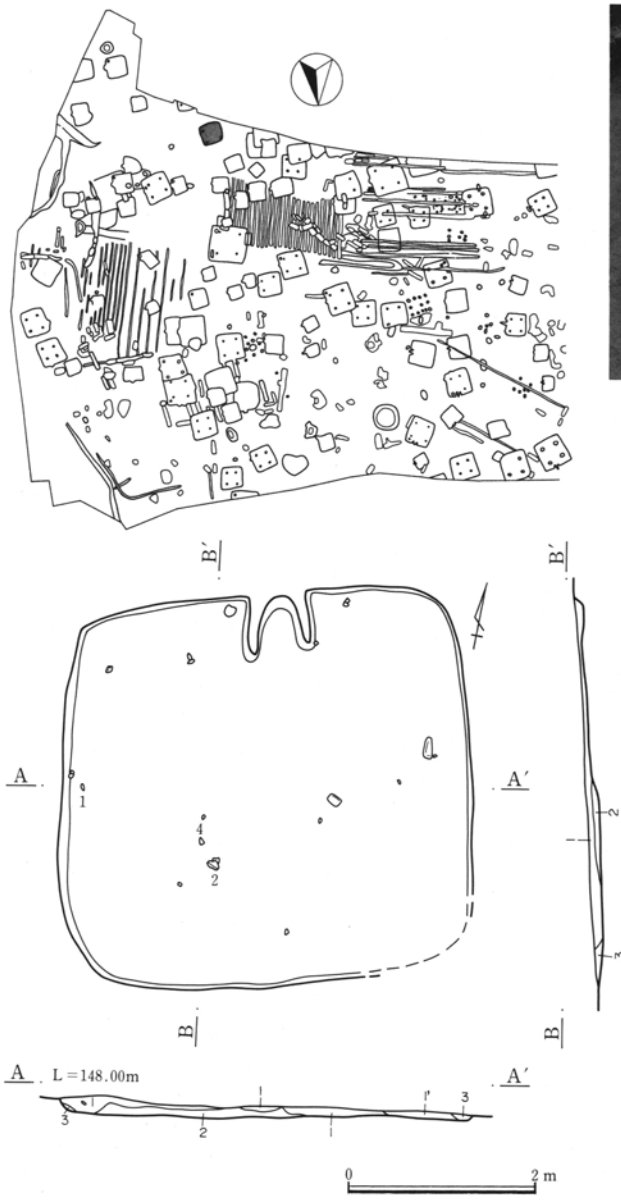
柱穴は２カ所を確認することができたが、何れもしっかりした掘り込みを持つもので主柱穴となるものと推定される。このうち東側の柱穴２は断面観察から径25cm程の柱の設置されたことが推定される。また柱穴２の北西に隣接して、柱穴らしい掘り込み（柱穴３））が住居掘り方面で確認された。建て替えの可能性が考えられる。

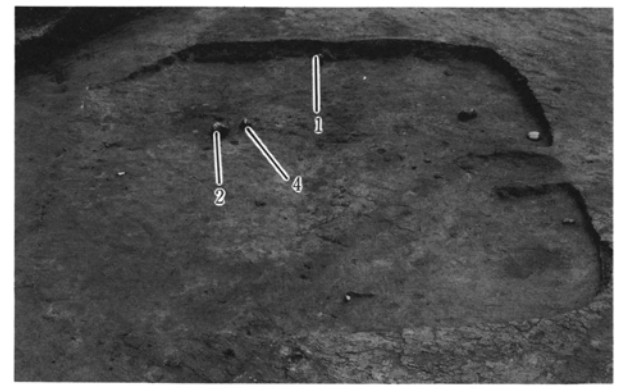
尚、カマド、貯蔵穴等の構造物は調査区外にあるようで確認できなかった。



第60図　Ｈ―25号住居掘り方及び出土遺物

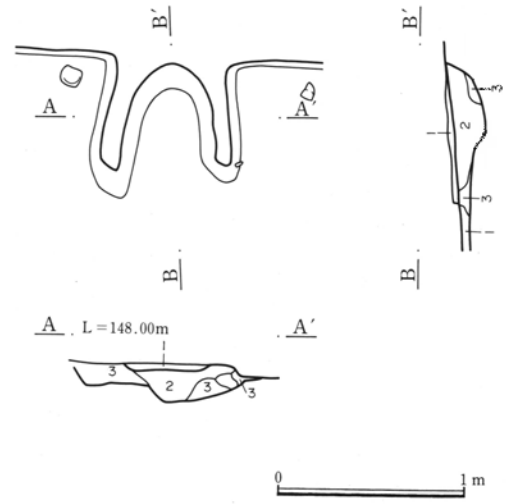
出土遺物は多くはなかったが、北西隅の壁近くから出土するものが多かった。この中で、住居に伴うと判断された遺物には６世紀後半期の特徴を持つ土師器の甕（1）や小型甕（2）があり、この他に古墳時代後期の土師器胴張甕（3）や、こも編み石（4•5）が見られた。





住居覆土
1：暗褐色土：黒色土少量含む。（1′：１層に比し締まり強い。）
2：暗黒褐色土：炭化物微量に含む。締まり強。
3：暗黒褐色土：炭化物を含まない。

カマド覆土
1：暗赤褐色土：焼土極く少量含む。
カマド掘り方覆土
2：暗赤褐色土：焼土の中ブロック少量含む。
3：暗黒褐色土：黒色土若干混入。



第61図　Ｈ－26号住居及びカマド

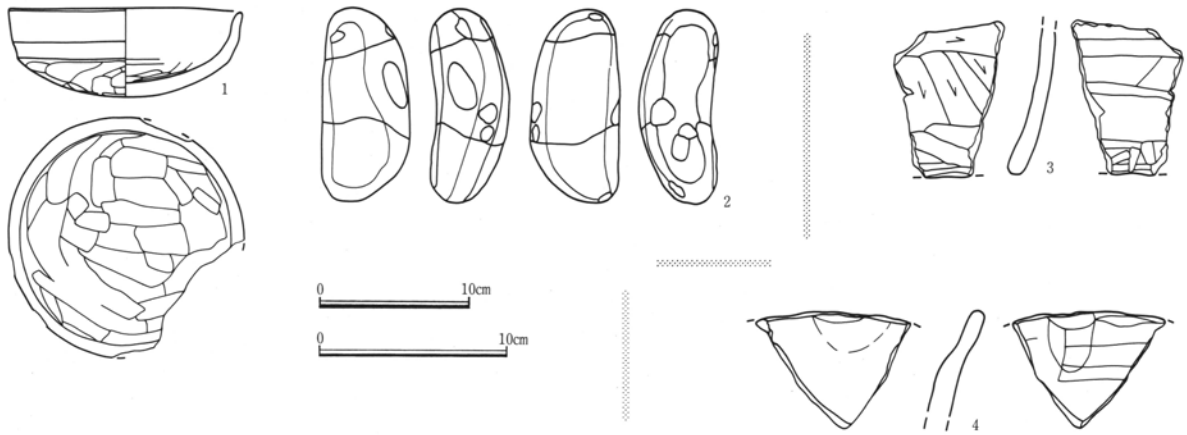
Ｈ－26号住居（古墳時代後期．第61～62図．図版15・58）

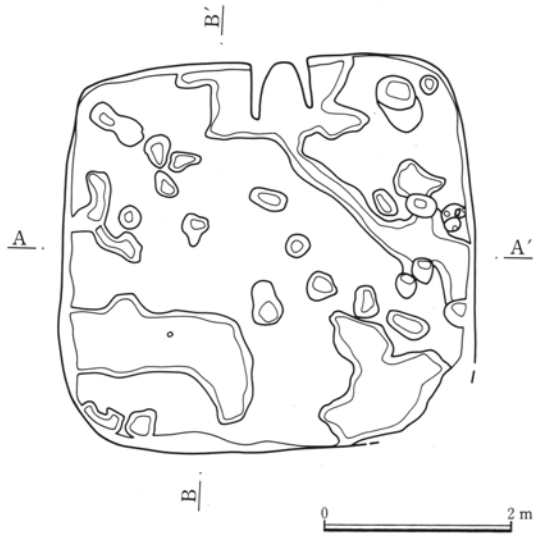
概要　本住居は、Ｂ区中南部の調査区南際近くに所在するＢ区に於いては中型のものに属する竪穴住居跡で、単独で遺存している。

さて、本住居の床面の遺存状況は幸い南東隅の一部を除いて良好であったが、本住居の所在する付近は元来３号谷に向かう緩斜面に在って地山が南東に向かって傾斜し、更に耕作等による削平が南東方向に向かって進行して、本住居も削平に見舞われている。従って全体的遺存状況は不良で、特に南壁東部の遺存状況は良くなかった。

本遺構の遺存状況が不良であることもあってか遺物の出土は少なかったが、この中で本住居に付随すると判断された遺物には、カマド左袖の外側部分から出土した６世紀後半期の特徴を示す土師器坏（1）があり、他に単体ではあるがこも編み石（2）が出土している。

一方、覆土中からは土師器の甕を中心とする遺物





第62図　Ｈ―26号住居掘り方及び出土遺物

が出土して来ており、この中には土師器甑（3）や軟質陶器の鉢（４）などが含まれている。

このように出土遺物が少なかったため断定はできないが、本住居時期は土師器坏から得られる６世紀後半を与えたい。

規模　長軸：439cm　短軸：415cm　深さ：15cm
カマド　幅：80cm　奥行き：72cm　　左袖　幅：25cm　長さ：73cm　高さ：５cm　　右袖　幅：21cm　長さ：61cm　高さ：５cm　　燃焼部　径：35×55cm

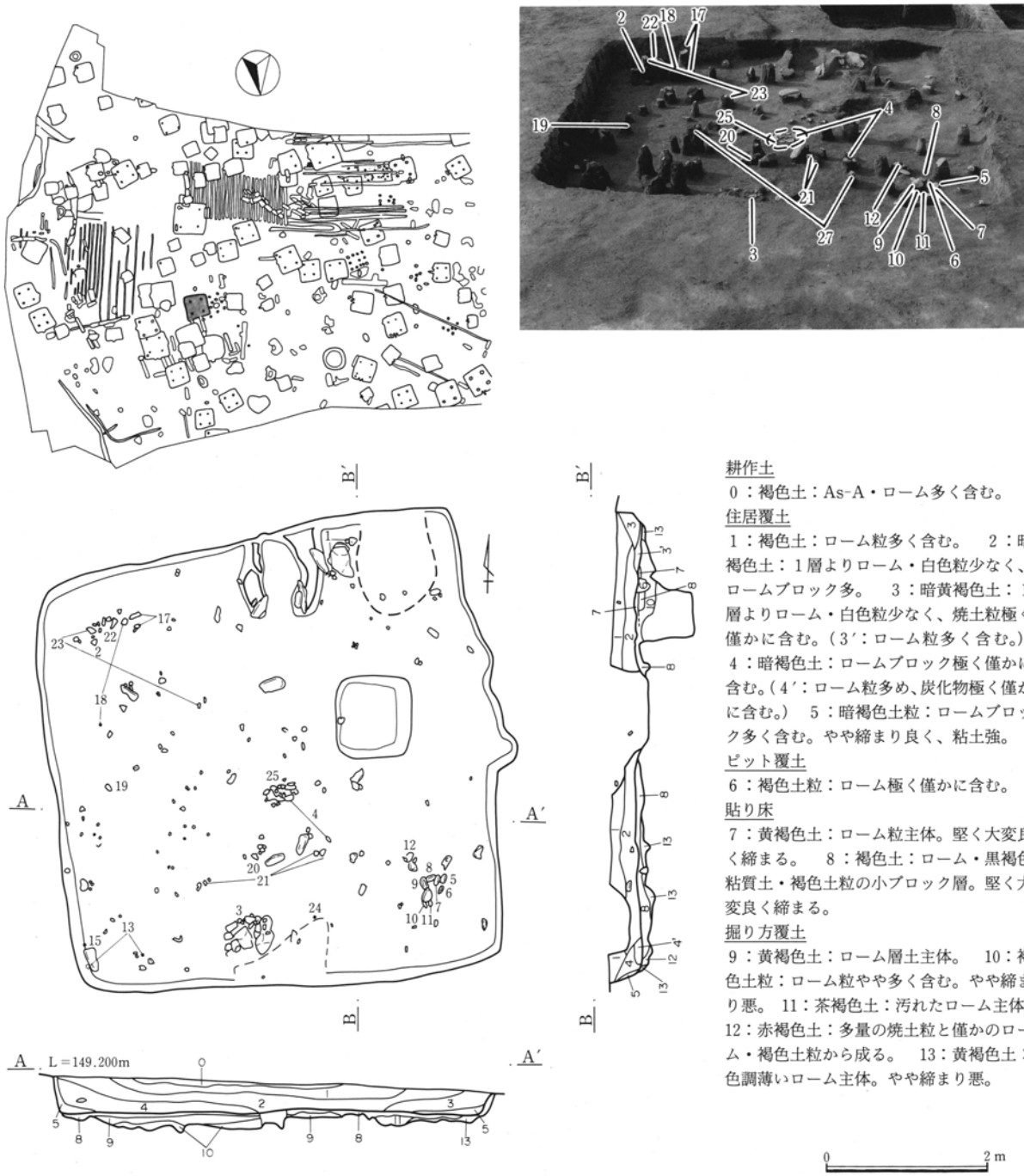
構造　本住居は隅丸方形のプランを呈する。

本住居の床面には過半を占める地床の部分と、掘り方を埋め戻して造り出された部分とがある。掘り方として認められるものには、東・北中央と西壁南寄り、及び南東隅に近い位置に掘り込まれていた深さ10cm程の不整形な面的掘り込みがあり、他に深さ９～62cmを測り、径20～30cmのものを中心とした柱穴様のピットが多く残されていた。ただし後者のピット群については本住居に伴うものか否かを特定することはできなかった。

カマドは本遺跡では少ない北カマドであり、北壁の中央付近に設けられている。本住居のカマドは深さ12cm程の丸底の形状を呈する浅い掘り方を有しており、これを暗黒褐色土と焼土を含む暗赤褐色土で埋め戻して燃焼面を造っている。燃焼部は壁のラインより内側に設けられ、そのプランは袖に挟まれて奥壁が丸みを持つ∩字形を呈している。さて、カマド付近は高さ５cm程が残されているだけであり、煙道部は確認できず、袖についてもその基底部を調査できたに過ぎなかった。従って袖全体の構造を知ることはできなかったのであるが、その基底部は掘り方と一体のものとして、焼土を含む暗赤褐色土を盛り上げることで造られていた。

柱穴は確認されなかったが、住居規模から考えて柱穴が掘削された可能性は考慮される。掘り方調査時に確認されたピット群のうちには位置的に適当なものもあり、或いはそうしたものにその可能性を求めることができるかも知れないが、特定は行い得なかった。

尚、貯蔵穴等その他の構造物を確認することはできなかった。

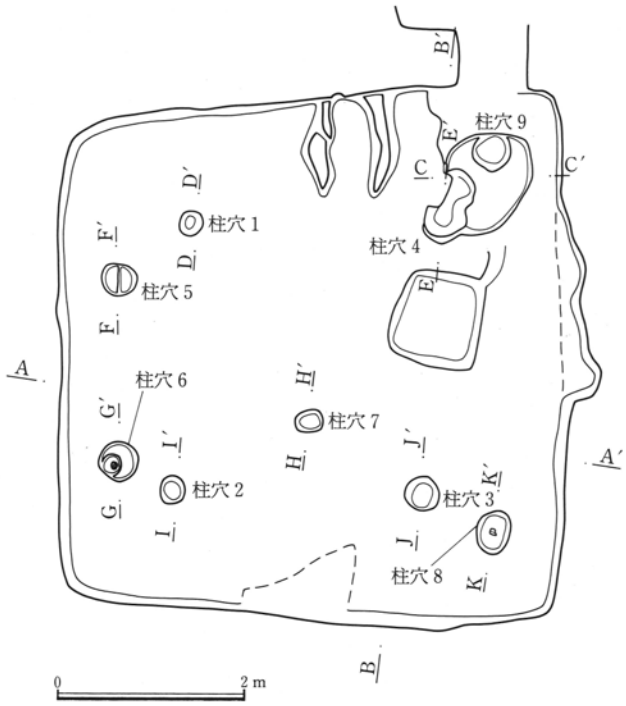


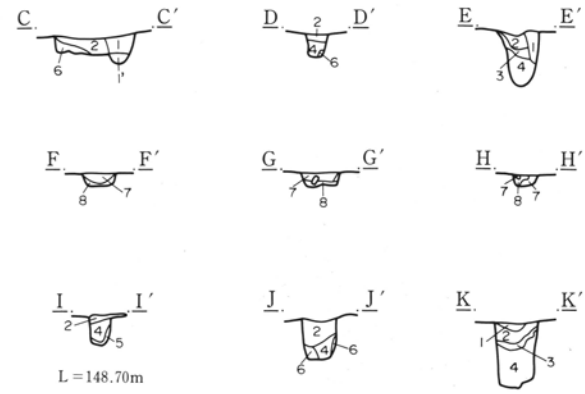
第63図　Ｈ－27号住居

Ｈ－27号住居（古墳時代後期．第63～66図．図版15～16・58～59・91）

概要　本住居はＢ区中部、Ｂ区東部の緩斜面に面する平坦部の東端付近に位置する、Ｂ区に於いては中型のものに属する竪穴住居跡である。本住居は１号掘立柱建物と切り合い関係にあるが、１号掘立柱建物跡との新旧関係を特定することはできなかった。また、住居北東のカマド右側の上位部分は撹乱により壊されていた。

出土遺物は比較的多かったが、このうち本住居に伴うと判断されたものには、６世紀後半を中心とする時期の特徴を持つ土師器坏（1、2）や土師器胴張甕（3,4）があり、こも編み石（5～12）の出土も見られた。





柱穴・ピット覆土

１：暗褐色土：ローム粒等含む。（1′：やや色調暗い）　２：暗黄褐色土：ローム粒やや多く含む。　３：黄褐色土：明るいローム多く含む。やや締まり悪。　４：褐色土：ローム粒極く僅かに含む。　５：暗黄褐色土：汚れたローム粒主体。　６：黄褐色土：ローム粒の集合体。７：暗褐色土：ローム粒やや多く含む。　８：黄褐色土：ローム粒の集合体。

カマド覆土

１：黄褐色土：ローム粒の集合体主体。　２：暗赤褐色土：焼土粒を１～３層中最も多量に含む。　３：暗赤褐色土：焼土粒やや多く含む。（3′：３層に比しローム粒の割合やや高い。）４：褐色土：Ｈ―27号住居―８層（貼り床）に同じ。

袖構築材

５：暗赤褐色土：全体に薄い赤味を帯びる。細粒で焼土やや多く含む。良く締まり、粘性有り。

カマド掘り方覆土

６：暗茶褐色土：黄色粘質土主体。やや良く締まり、粘性有り。

住居掘り方覆土

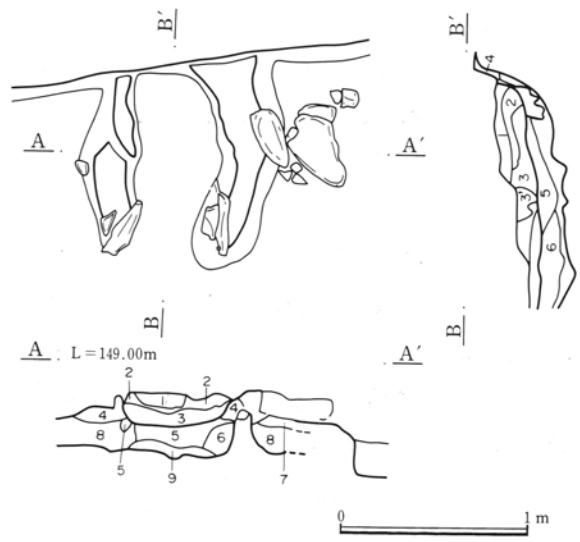
７：黄褐色土：Ｈ―27号住居―７層（貼り床）に同じ。　８：褐色土：多量のロームと僅かの褐色土・黒褐色粘質土等の混土。大変良く締まる。　９：暗黄褐色土：黄色粘質土主体。

一方覆土からは、６世紀後半～７世紀の時期の特徴を持つ土師器坏や土師器甕を中心に種々の遺物が出土して来ているが、掘り方からは６世紀後半期の特徴を持つ土師器小型甕（13）の出土が見られた他、鉄製の鋤・鍬先（14）や、こも編み石（15）、台石（16）の出土も見られた。また、床上レベルの覆土中からは７世紀前半期を中心とする時期の土師器坏（17～22）や、６世紀後半期の特徴を持つ土師器甕（23）の他、須恵器甕（24）や異形の土師器短脚甕（25）、こも編み石（27）、砥石（28,29）、転用砥石（26）の出土も見られ、また、縄文土器の破片（30）なども出土している。

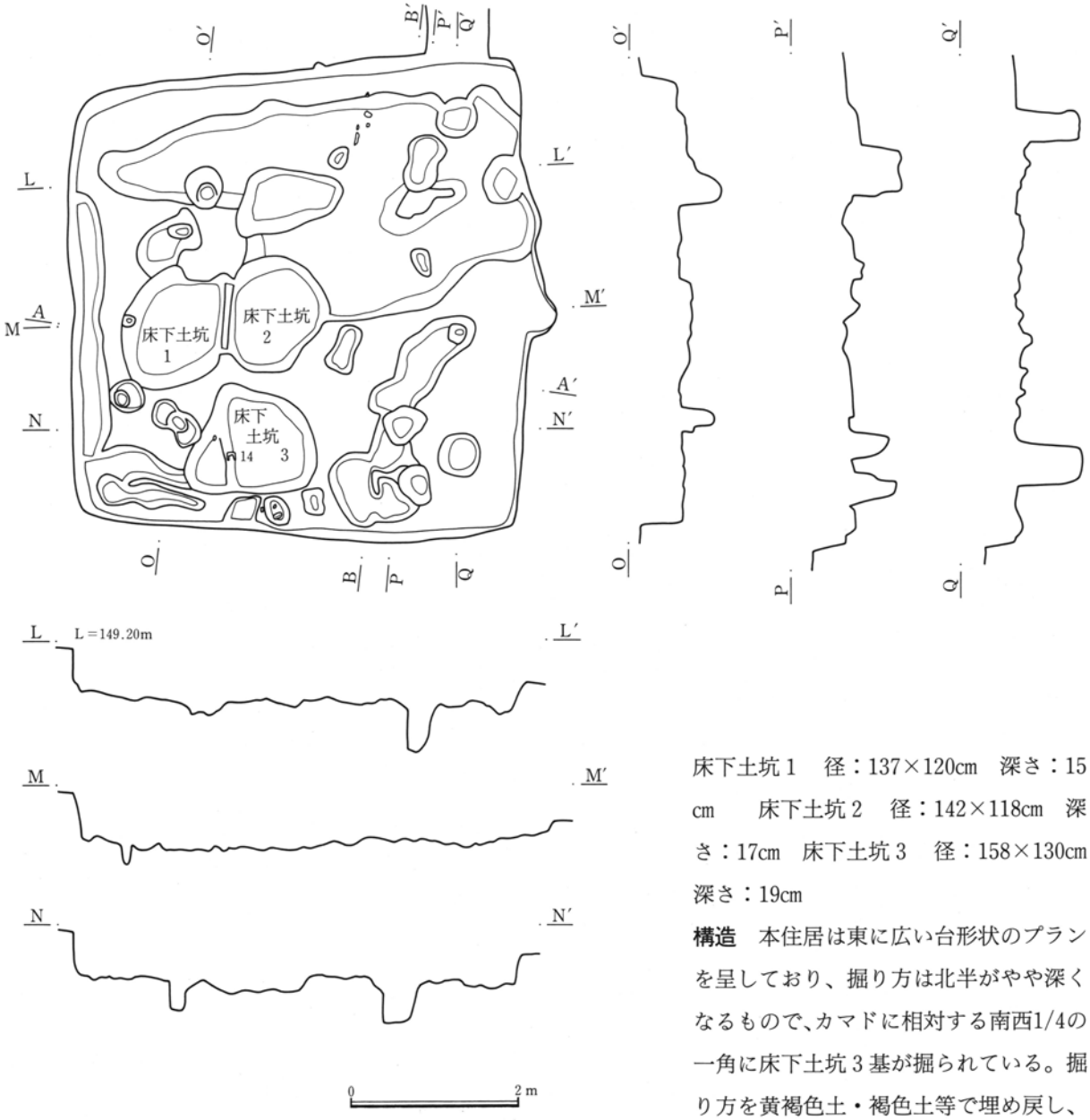
以上のような、出土遺物の状況から本住居は６世紀後葉の所産として把握され、少なくも７世紀前半期までは、窪地としてその痕跡が遺されていたものと推定されるのである。

規模　長軸：540cm　短軸：573cm　深さ：49cm

カマド　幅：112cm　奥行き：110cm　　左袖　幅：34cm　長さ：96cm以下　高さ：12cm　　右袖　幅：37cm　長さ：110cm　高さ：12cm　　燃焼部　径：48×100cm　　柱穴１　径：25×24cm　深さ：35cm



第64図　Ｈ―27号住居及びカマド



第65図　Ｈ―27号住居掘り方

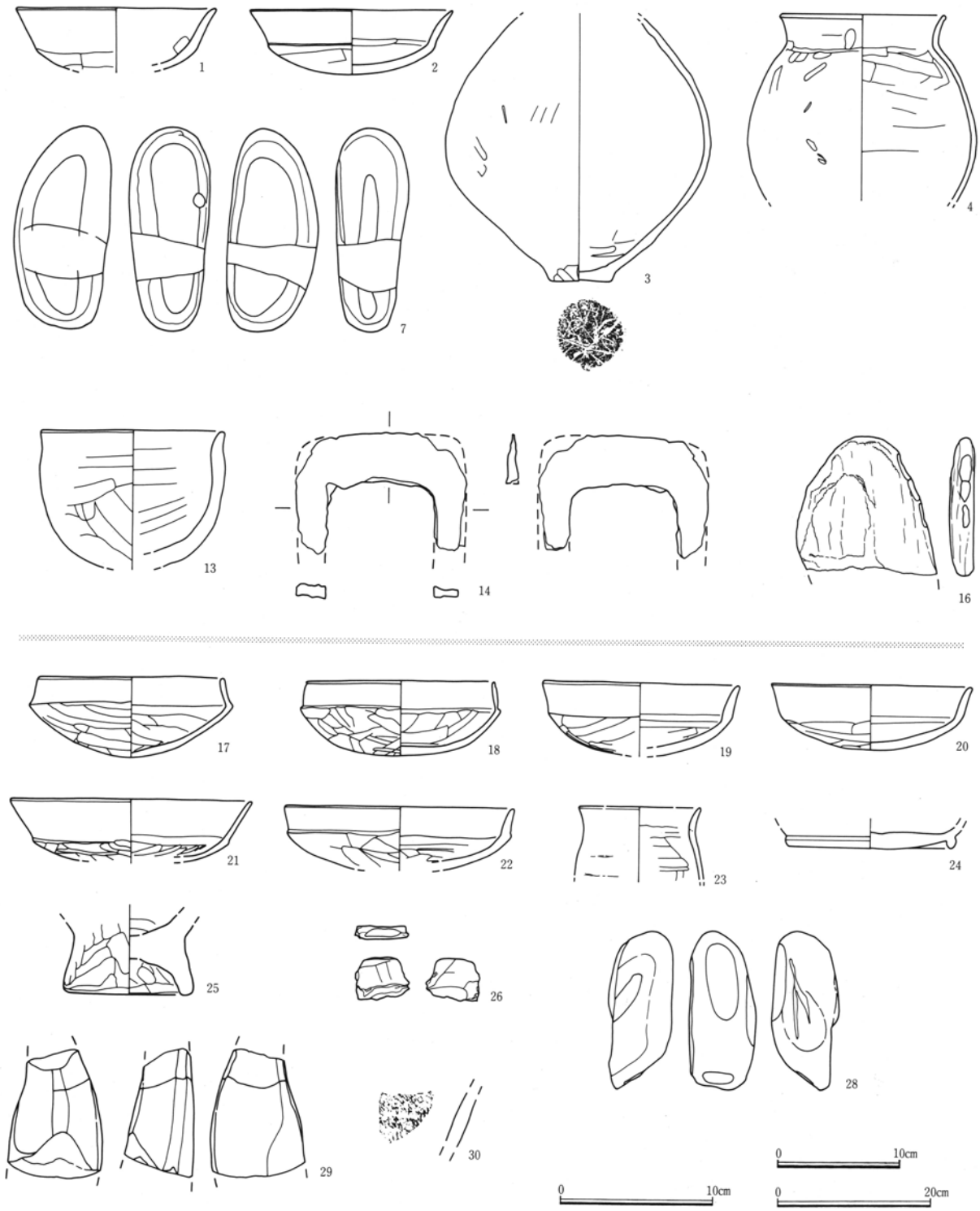
柱穴２　径：29×27cm　深さ：31cm　　柱穴３　径：37×36cm　深さ：62cm　　柱穴４　径：44×40cm以上　深さ：77cm　　柱穴５　径：38×33cm　深さ：９cm　　柱穴６　径：42×40cm　深さ：34cm　柱穴７　径：30×24cm　深さ：11cm　　柱穴８　径：45×35cm　深さ：81cm　　柱穴９　径：40×38cm以上　深さ：72cm

貯蔵穴　径：40×39cm　深さ：79cm

床下土坑１　径：137×120cm　深さ：15cm　　床下土坑２　径：142×118cm　深さ：17cm　床下土坑３　径：158×130cm　深さ：19cm

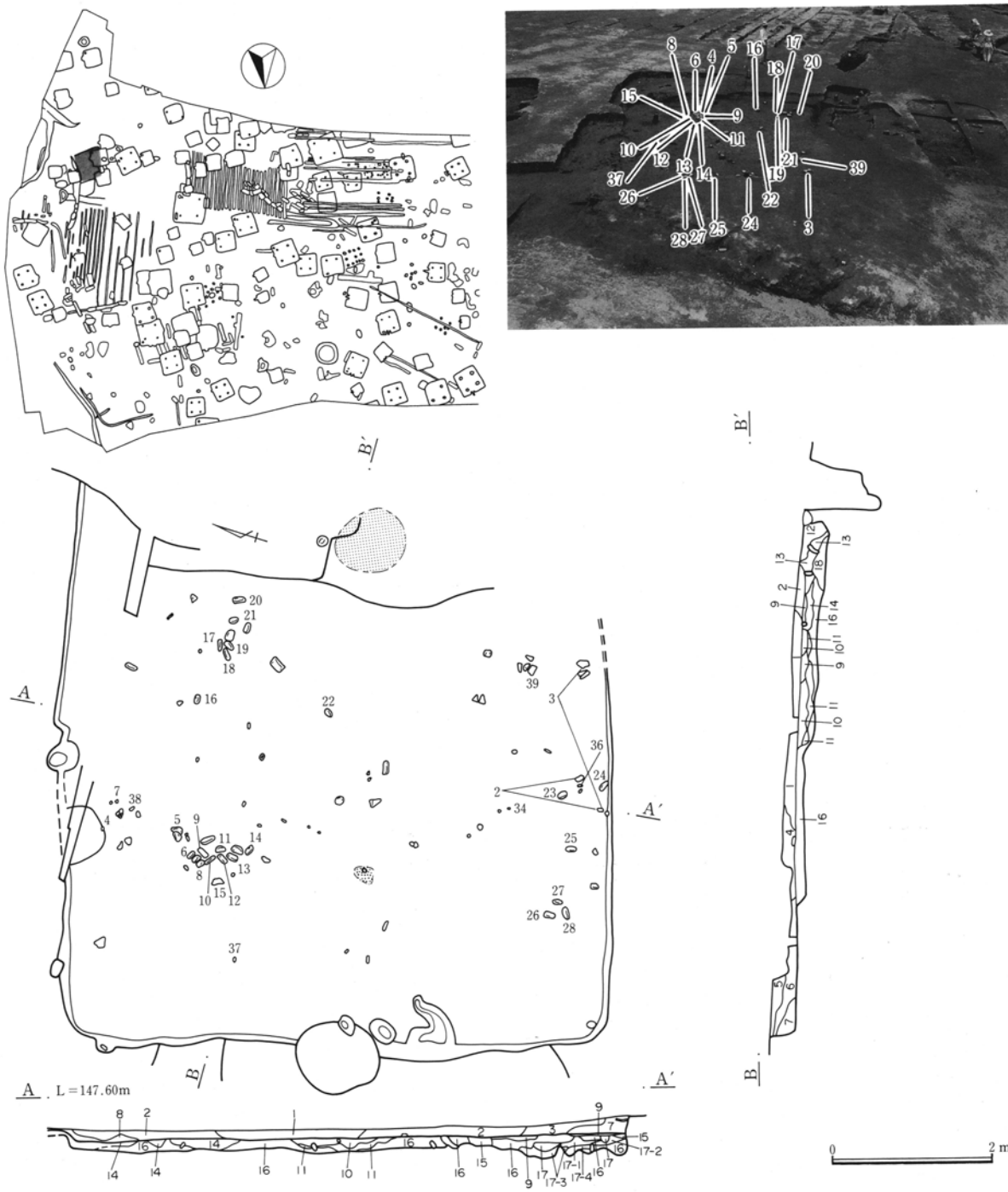
構造　本住居は東に広い台形状のプランを呈しており、掘り方は北半がやや深くなるもので、カマドに相対する南西1/4の一角に床下土坑３基が掘られている。掘り方を黄褐色土・褐色土等で埋め戻し、その上に黄褐色土・褐色土を載せて固め、貼床を造っている。

カマドは浅い掘り方を持ち、暗茶褐色土で埋め戻して燃焼面を造り出しているが、燃焼部は袖に囲まれた楕円形のプランを呈しており、その範囲は壁のラインより内側に設定されている。燃焼部の左右両側には袖が造られるが、左右袖共その先端に礫を立てて袖材とし、焼土をやや多く含む暗赤褐色土を積んで袖を造り出している。煙道は壁面にその手前側の部分が見られるだけで、形態等は不明である。また天井部の構造等は不明であった。



第66図　Ｈ－27号住居出土遺物

柱穴・ピットは床面で９基確認されている。このうち主柱穴は柱穴１～４の４基と判断される。柱穴４と柱穴９は重複して掘削されるが、新旧関係は特定できなかった。また柱穴６は１号掘立柱建物のライン上に乗り、柱穴７は同じくコーナーであるので、これらは１号掘立柱建物のものである可能性を持つ。貯蔵穴と判断されるものは柱穴状を呈していて深い。また貯蔵穴と柱穴４・９付近は20cmほど掘削されているが、住居に伴うものかどうかは特定できなかった。



住居覆土

１：暗褐色土：ローム漸移層（以下「漸移層土」）上層土ブロックの混土。　２：明茶褐色土：漸移層土とローム層土ブロックの混土。３：明褐色土：漸移層下層土とローム層土の細かいブロックの混土。４：茶褐色土：５層に似るがローム粒混入。　５：茶褐色土：漸移層上層土中心に漸移層下層土ブロック混入。　６：明褐色土：漸移層下層土中心にロームブロック混入。　７：黒褐色土：黒色土と漸移層土ブロックの混土。ローム層土混入。　８：明黄褐色土：漸移層下層土とロームブロックの混土。

貼り床

９：明黄褐色土：漸移層下層土・ローム層土ブロックの混土。

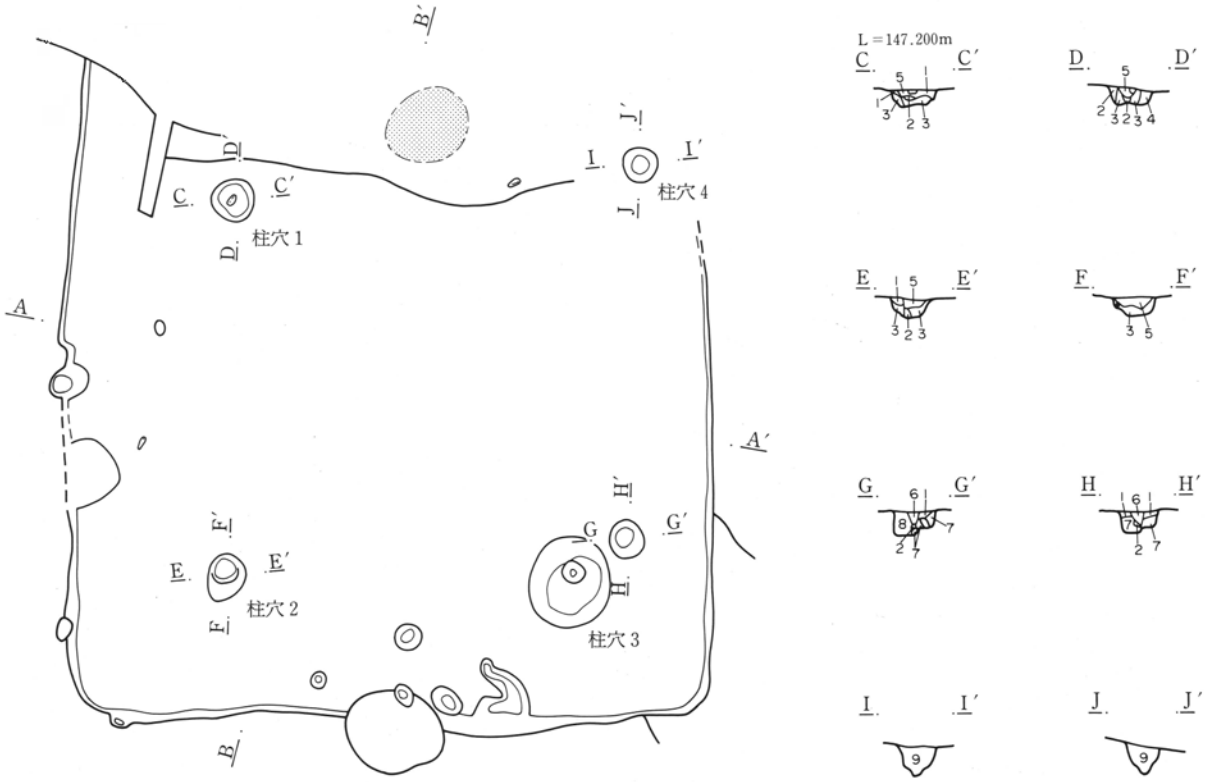
床下粘土坑覆土

10：明褐色土：ロームブロックに漸移層土・青灰色シルトブロック混入。　11：青灰色シルト：ロームブロック混入。

掘り方覆土

12：暗茶褐色土：漸移層上層土ブロック主体。　13：明褐色土：ロームに漸移層土混入。　14：明褐色土：暗黄色ロームに黒色土・灰褐色シルト混入。　15：暗茶褐色土：暗黄色ローム主体。　16：明褐色土：暗黄色ロームと黄色ローム主体の混土。　17：褐色土：ロームに漸移層土等混入。（17^1：細かい水平堆積が認む。　17^2：ロームブロック多。　17^3：ロームブロック少。　17^4：黒色土多。）18：黒褐色土：黒色土と漸移層上層土の混土。ローム粒混入。

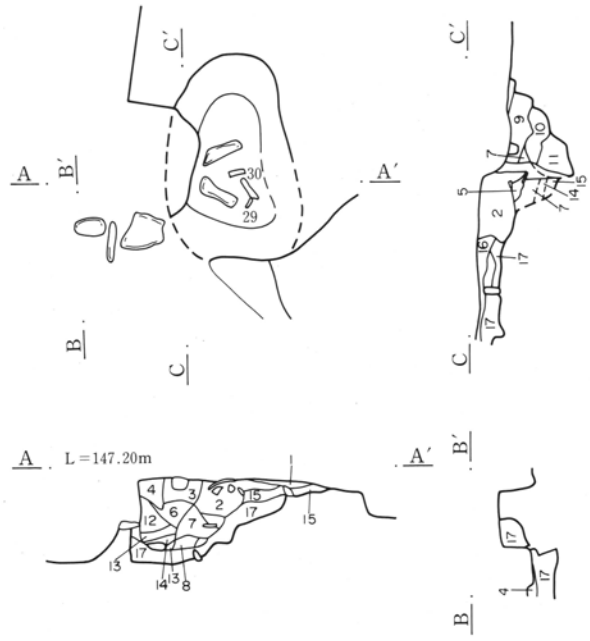
第67図　Ｈ－28号住居



柱穴覆土

１：茶褐色土：ローム漸移層土（以下「漸移層土」）にロームの入る細かいブロック層。　２：黒褐色土：漸移層土ブロック主体。　３：暗黄褐色土：漸移層土主体　４：明褐色土：黒色土とロームの細かいブロック層。漸移層土混入。　５：暗褐色土：漸移層上層土ブロック主体。　６：褐色土：漸移層上層土にローム粒混入。　７：黄褐色土：ロームに漸移層土入るブロック層。（地山の可能性有り）　８：明褐色土：漸移層土とロームのブロック層。　９：茶褐色土：漸移層上層土にローム粒混入。

0　2 m

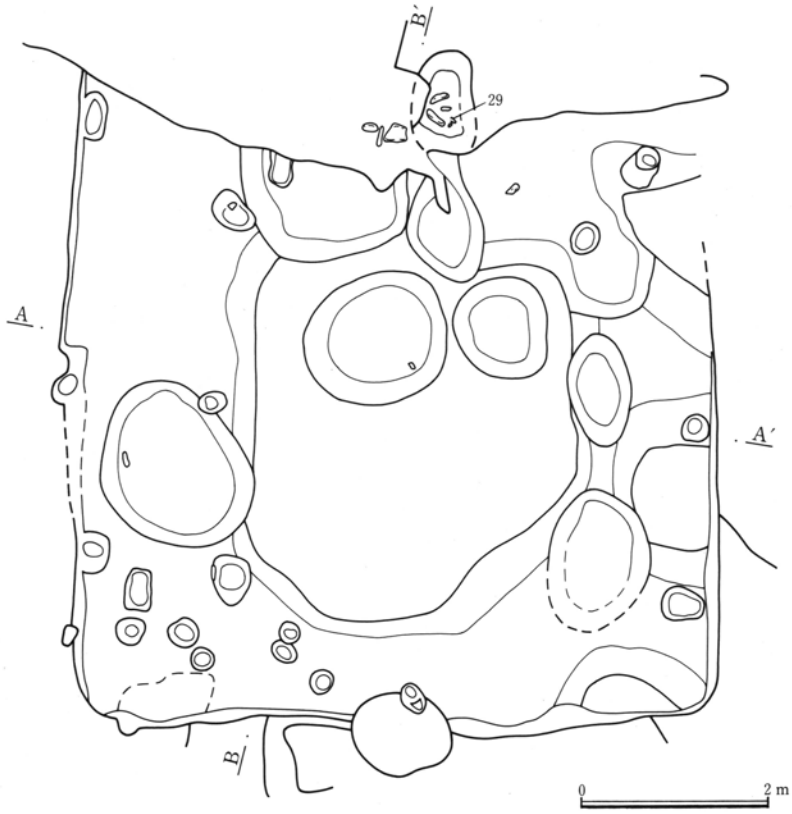


カマド（掘り方）覆土

１：淡赤茶褐色土：弱く焼土化するローム漸移層（以下「漸移層」）下層土ブロック層。青灰色シルト粒等混入。　２：淡赤茶褐色土：部分的に弱く焼土化する漸移層下層土に焼土・ローム粒多く混入。　３：淡赤茶褐色土：２層に似るが、焼土ブロック混入。　４：褐色土：２層に似るが焼土化部分少なく、焼土粒殆ど含まない。　５：赤褐色土：焼土化した漸移層土主体。　６：赤褐色土：焼土ブロックに漸移層土混入。　７：淡赤褐色土：２層に似るが、２層に比し焼土粒多く焼土化も強い。灰含む。　８：赤褐色土：７層に似るが、焼土粒・灰がかなり多い。　９：褐色土：２層に似るが焼土粒含まず、４層に比し均質で良く締まる。　10：淡赤褐色土：９層に似るが、下位（11層）に向かって著しく焼土化。　11：赤褐色土：９層土が焼土化したと思われる焼土層。西に向かって焼土化強。　12：明褐色土：暗色ロームに漸移層土等入る。弱い焼土化見られる。　13：黄褐色土：ロームに漸移層土混入するブロック層。14層と併せ水平的堆積示す。　14：淡赤暗褐色土：弱い焼土化見られる漸移層土に焼土・ローム粒混入。　15：明褐色土：弱い焼土化見られ漸移層土とロームブロックの混土。　16：黒褐色土：黒色土ブロック基本に漸移層土ブロック・ローム粒混入。　17：明黄褐色土：水平堆積するロームブロックに漸移層土ブロック若干混入。

0　1 m

第68図　Ｈ―28号住居及びカマド



第69図　Ｈ―28号住居掘り方

編み石（4～28）が住居北東部と北西部の２カ所の床面上にまとまって、また南壁沿にの一角にもややまとまりを以て出土している。

カマド掘り方からは７世紀前半期の土師器の坏(29)と甕（30）が出土している。また覆土中からは古墳時代後期～平安時代の土師器甕を中心として、縄文土器（31～37）、８世紀後半期の土師器坏(38)、８世紀後半の須恵器蓋（39）のほか、須恵器甕(40)、そして掘り方から火打ち石（41）が出土している。

これらの遺物から本住居は西暦600年前後の時期の所産と判断され、最終的なカマドの作り替えの時期は７世紀前半期と考えられる。また、住居外寄り部分は後世の住居の建設等によって壊されているが、恐らくは内側付近を中心として、８世紀頃までは窪地としてその痕跡が残されていたことが窺われる。

Ｈ－28号住居（古墳時代後期．第67～70図．図版16・59・91）

概要　本住居はＨ－21・23号住居などＢ区南東部に於ける９軒の重複住居群の中核をなすもので、Ｂ区に於ける大型の竪穴住居跡のうちの１軒である。本住居は４号溝の覆土を切っているが、覆土中にＨ－23及びＨ－29号住居が造られ、一部床面が壊されており、また13号土坑が掘り込まれている。また、Ｈ－89号住居にも切られている。

本住居付近は土合川に落ちる斜面に近い台地上の縁辺の区域に位置しているため、削平面及び確認面は東に向かって緩やかに傾斜しているが、本住居にも削平は及んでおり、特に東壁付近はカマドの掘り方を残すのみでほとんど調査する事ができなかった。従って全容は明らかではない。

出土遺物のうち本住居に伴うと判断されたものには６世紀後半～西暦600年前後の時期の特徴を示す土師器坏（1、2）の他、土師器甑（3）があり、こも

規模　長軸：690cm　短軸：648cm以上　深さ：29cm　カマド　幅：70cm以上　奥行き：110cm以上　カマド掘り方　径：70×110cm

柱穴１　径：46×44cm　深さ：30cm　　柱穴２　径：50×41cm　深さ：24cm　　柱穴３　径：41×37cm　深さ：18cm　　柱穴４　径：37×34cm　深さ：36cm

構造　上述のように遺構の東部が削平されていたため、住居全体を確認できなかったのであるが、本住居は方形のプランを呈していたものと推定される。

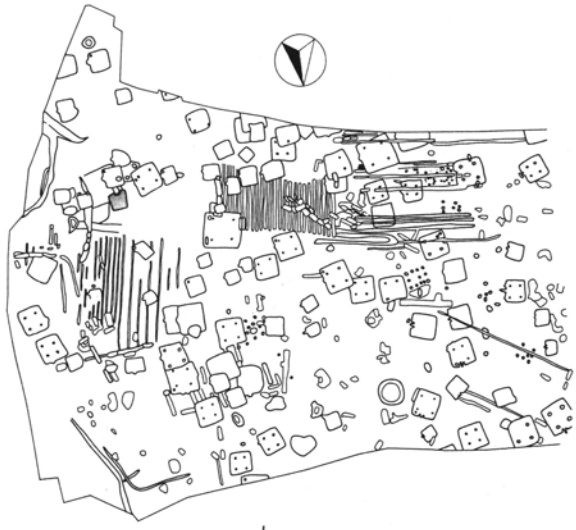
掘り方には東・西・北壁下に幅98～196cm、深さ10cm程を測る周溝状の掘り込みを廻らせている他、カマド左手前の径154×134cm、深さ10cmの隅丸方形様のプランを呈するものを含む５基程の床下土坑らしい掘り込みも認められた。こうした掘削痕を残す掘

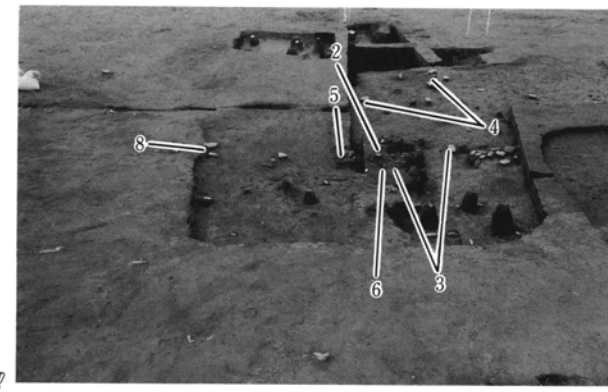
第70図　Ｈ－28号住居出土遺物

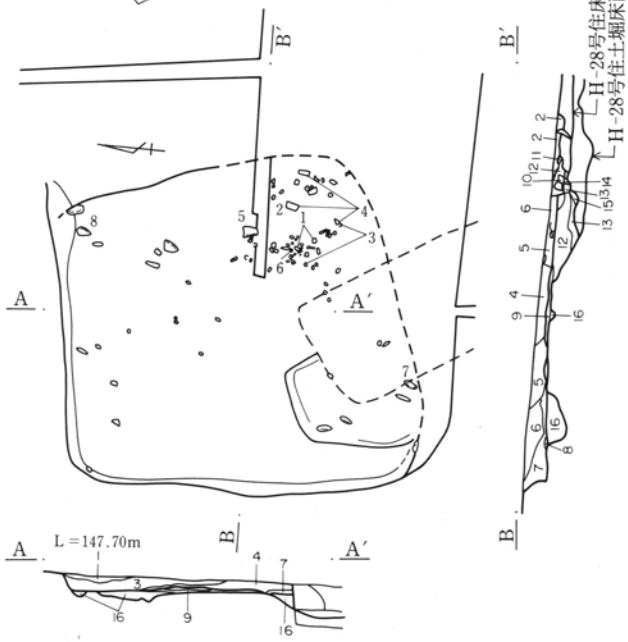
り方をローム漸移層土・ローム層土で埋め戻し、その上にローム及びローム漸移層下層土のブロックを使用して固めた貼り床を施している。床面はきれいで良好な状態であった。

カマドは東壁中央付近にあり、４号溝の覆土を掘り下げて、縦長で長円状の浅い掘り方を有する。この掘り方を明黄褐色ロームで埋め戻しているが、カマド部分は削平が著しく、壁に対する燃焼部の位置や、袖等の構造を確認することはできなかった。一部にＨ－23号住居掘り方等に伴う掘り込みが入るが、床面に４カ所の柱穴が確認された。柱穴の規模は径35～45cm程度で、深さも20数cmと浅い。柱穴の位置は、住居のプランに対しやや南に偏っている。また、柱穴断面の観察では柱材の径は10cm内外と推定され、これも住居の規模に比べて小さい。

尚、貯蔵穴等他の構造物は確認されなかった。

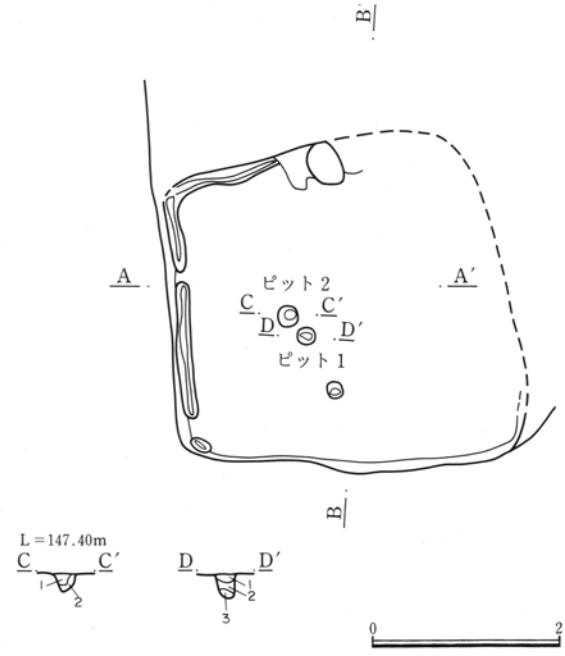






住居廃棄後の埋土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」）
1：現耕土　2：淡灰褐色土：漸移層土に焼土・シルト混入。
住居覆土
3：暗褐色土：漸移層上層土中心。　4：茶褐色土：漸移層上層土主体。　5：明茶褐色土：漸移層土とローム主体。　6：明褐色土・7：茶褐色土：漸移層土主体。　8：明褐色土：漸移層下層土層。
貼り床
9：明黄褐色土：ローム中心。硬質。　10：褐色土：漸移層土主体。焼土化僅か。　11：暗赤褐色土：漸移層土中心。
床下土坑覆土
12：淡赤黄褐色土：弱い焼土化。漸移層土中心。　13：灰茶褐色土・15：暗褐色土：漸移層土とシルト主体。　14：淡い赤褐色土：弱く焼土化。漸移層上層土とシルト塊中心。
掘り方覆土
16：茶褐色土：漸移層上層土ブロック中心。

柱穴覆土
1：茶褐色土：漸移層上層土塊基本。　2：暗褐色土：漸移層上層土と黒色土塊混土。　3：黒色土：黒色土基本。

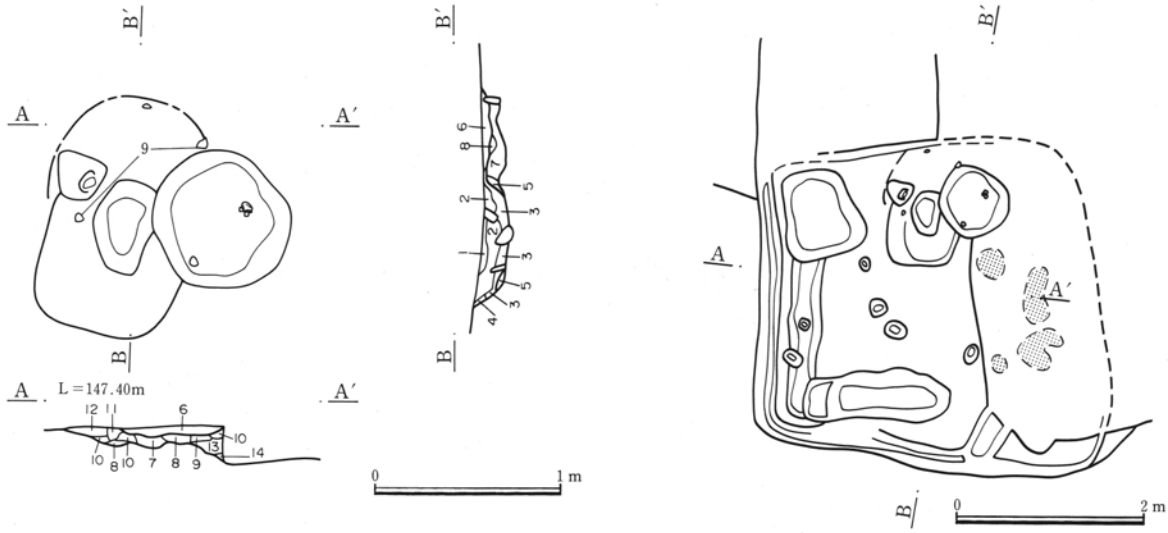


第71図　Ｈ－29号住居

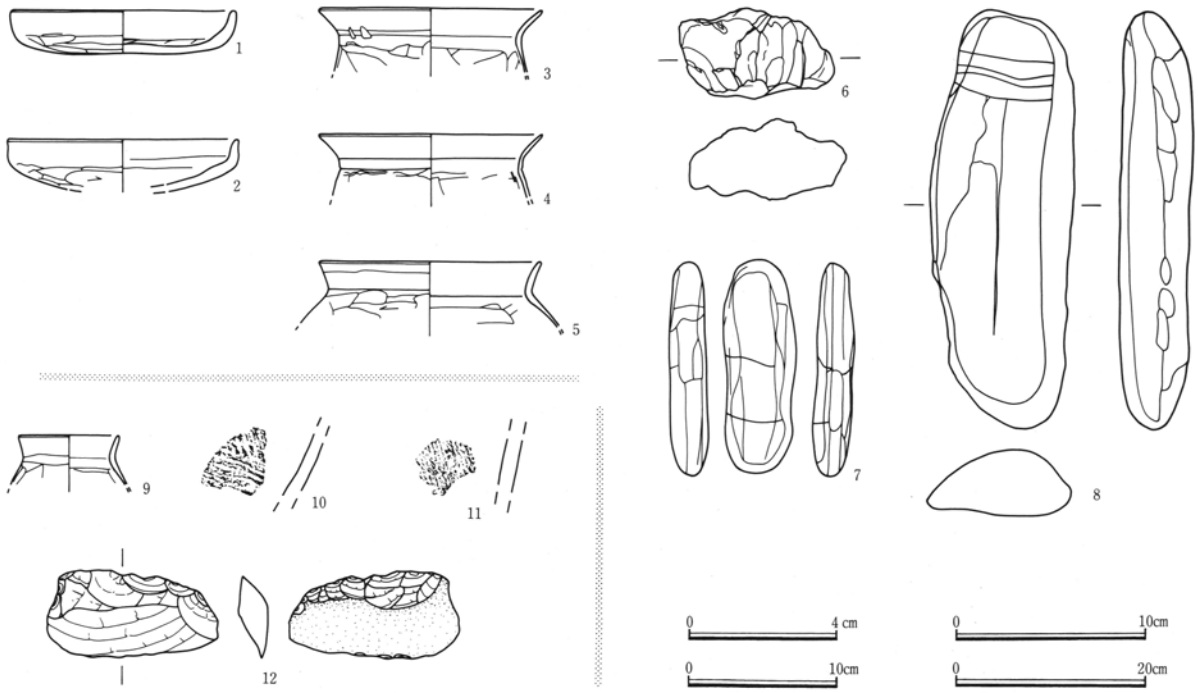
Ｈ－29号住居（奈良時代．第71～72図．図版16～17・59～60・91）

概要　本住居はＨ－28号住居を中心とするＢ区南東部の９軒の重複住居群の１軒であり、小型の竪穴住居跡である。南部はＨ－28号住居の覆土を切って造っている。本住居の遺存状況は良好ではなく、特に住居東部は削平がひどく東の壁面を確認することはできなかった。カマドはその痕跡が認められただけで、ほとんどその構造を知ることはできなかった。

本住居の範囲或はＨ－28号住居との切り合い関係についてはＨ－23・28・29号住居を通したサブトレンチによって確認を試みたのであるが、Ｈ－28号住



床下粘土坑覆土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）
１：暗褐色土：漸移層上層土にローム混入。　２：淡赤茶褐色土：弱い焼土化。漸移層土にローム・青灰色シルト・焼土混入。　３：淡赤茶褐色土：２層に似るが青灰色シルト多く、焼土粒無。　４：明褐色土：漸移層下層土にローム混入。　５：青灰色シルト主体。
カマド掘り方覆土
６：茶褐色土：弱い焼土化。漸移層上層土にローム混入。７：明茶褐色土：漸移層土ブロックとロームの混土。　８：暗灰褐色土：弱い焼土見る漸移層下層土と青灰色シルトブロック主体。　９：明黄褐色土：漸移層土とロームに青灰色シルト混入。　10：茶褐色土：漸移層土小ブロック層。　11：明褐色土：７層に似るが粒径揃う。　12：褐色土：漸移層下層土にロームの入るブロック層。　13：淡赤褐色土：弱い焼土化見られる漸移層土にローム、焼土、白色・赤灰色シルト粒混入。　14：茶褐色土：漸移層上層土にローム粒混入。

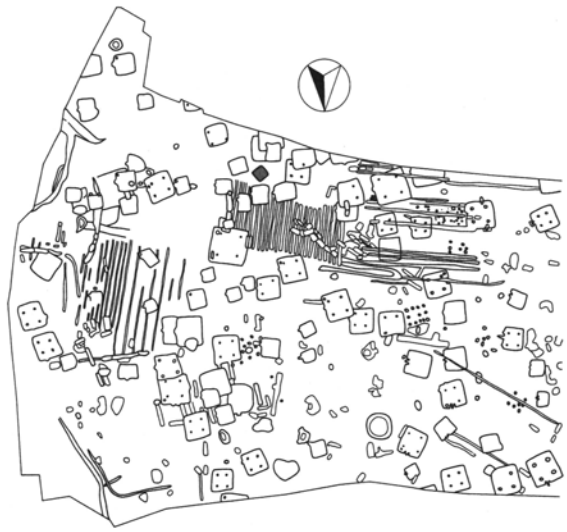


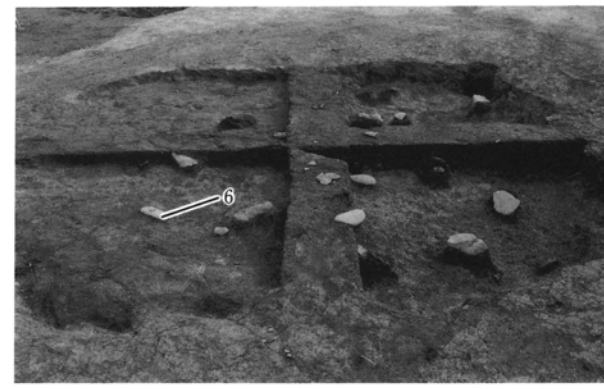
第72図　Ｈ－29号住居掘り方及び出土遺物

居の覆土中にあって本住居を切る13号土坑覆土をＨ－28号住居の覆土と誤認したため、当初Ｈ－28号住居が本住居を切るものと判断して、この重複部分の大半を掘削してしまうというミスを犯した。

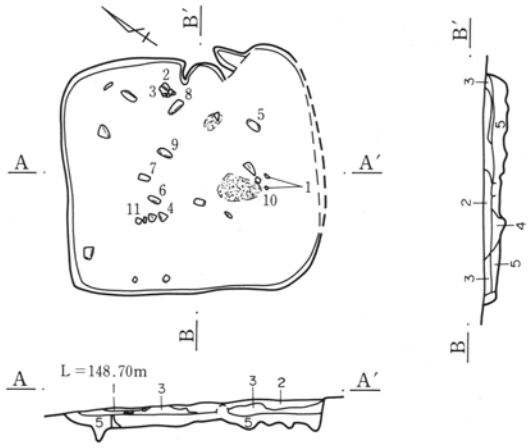
出土遺物のうち、本住居に直接伴うと判断されたものには、８世紀前半期の特徴を持つ土師器坏（1，2）・土師器甕（3～5）があり、こも編み石（7）と錘と考えられる大型の礫（8）、そしてカマド構築材と考えられる焼けた土塊（6）も見られた。

一方、覆土中からは古墳時代後期～平安時代の土

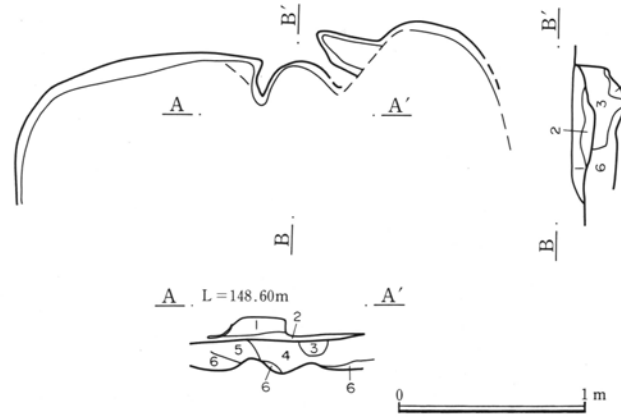


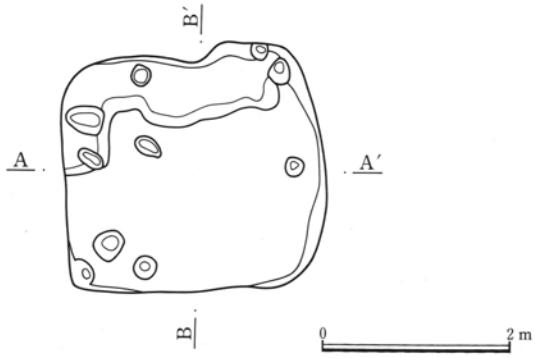


カマド覆土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）
1：黒褐色土：漸移層上層土小ブロック層。As-BP・焼土粒混入。
2：茶褐色土：漸移層土の混土。焼土粒やや多く含む。
カマド掘り方覆土
3：淡赤褐色土：焼土化見られる漸移層上層土ブロックにローム・焼土粒若干混入。
4：暗褐色土：黒色土・漸移層土・ロームブロックの混土。
5：明褐色土：ロームに若干の漸移層土入るブロック層。
6：明黄褐色土：ロームブロック層。若干の黒色土粒混入。



近世以降の埋土
1：黒褐色土：As-A若干含まれる。
住居覆土
2：黒褐色土：褐色土粒少量含む。粒子緻密。
3：黒褐色土：褐色土ブロック若干含む。粒子緻密。
掘り方覆土
4：明褐色土：ロームブロックにローム漸移層土粒多く混入。
5：明黄褐色土：ロームブロックに若干の黒色土粒混入。





第73図　Ｈ―31号住居

師器甕を中心に、８世紀前半の土師器小型甕（9）や縄文土器（10,11）、スクレイパー（12）などが出土してきている。

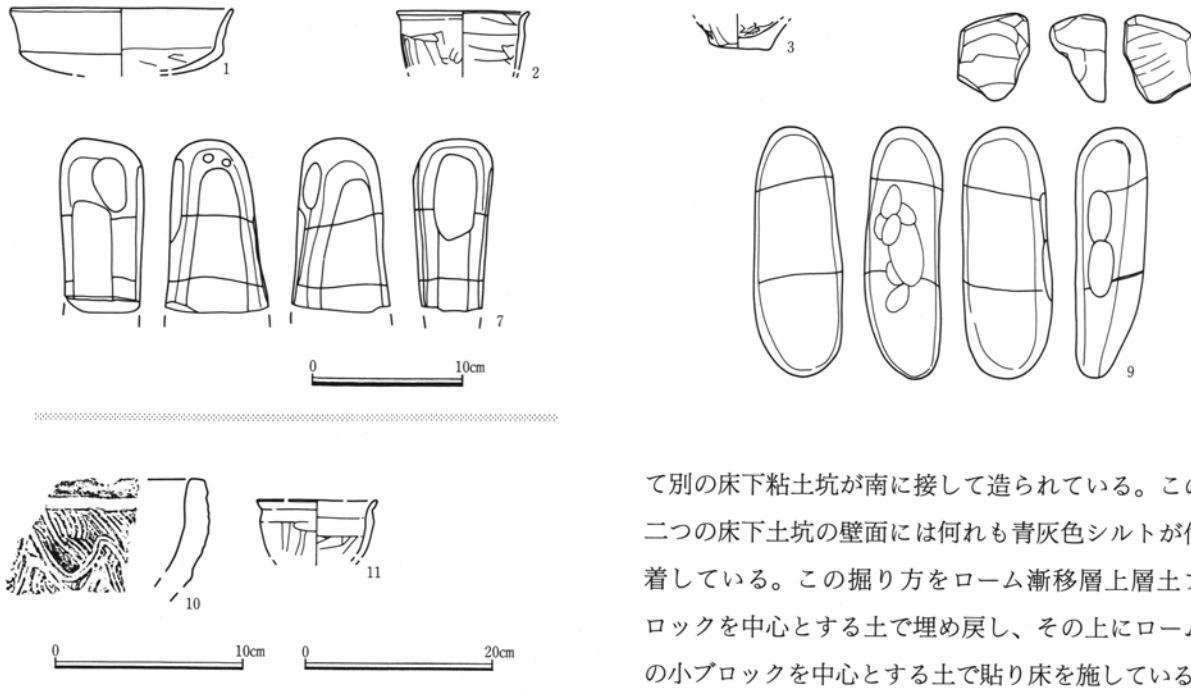
規模　長軸：370cm以上　短軸：368cm以上　深さ：20cm

カマド　幅：90cm以上　奥行き：46cm以上　左袖幅：推定19cm　長さ：45cm　高さ：0cm　右袖長さ：39cm　燃焼部　径：36×46cm

ピット１　径：19×19cm　深さ：26cm

ピット２　径：24×22cm　深さ：18cm

周溝　幅：16cm　深さ：６cm



第74図　Ｈ－31号住居出土遺物

床下粘土坑１　径：114×77cm　深さ：21cm

床下粘土坑２　径：76×70cm　深さ：９cm

構造　本住居は掘りすぎがあり不明の部分もあるが、南に開く台形に近い隅丸方形のプランを呈する。

少なくも北半部分には浅い掘り方が掘削され、カマド前面には床下粘土坑が設けられこの上位を切って別の床下粘土坑が南に接して造られている。この二つの床下土坑の壁面には何れも青灰色シルトが付着している。この掘り方をローム漸移層上層土ブロックを中心とする土で埋め戻し、その上にロームの小ブロックを中心とする土で貼り床を施している。

カマドは東カマドであるが、痕跡が残るだけで構造は明らかでない。尚、２基の床下粘土坑の存在からカマドの造り替えの行われたことが想定される。

床面に於いては東壁下から北壁下にかけて周溝が廻っている。柱穴・貯蔵穴は確認されなかった。また、小ピットが見られたが、本住居に伴うものであるかどうかは特定できなかった。

Ｈ－31号住居（古墳時代後期．第73～74図．図版17・60・91）

概要　本住居はＢ区中北部の竪穴住居跡の集まる一角の中心に位置する小型の竪穴住居跡である。遺存状態はさして良好とは言えず、確認面が南に傾斜しているため、南壁は滅失していた。

本住居の出土遺物はさして多くなかったが、本住居に伴う遺物には６世紀後半と判断される土師器の坏(1)、小型甕(2)、甕(3)、そしてこも編み石(4～9)が上げられる。

また、覆土中からは土師器甕を中心とした遺物が出土し、縄文土器（10）や７世紀後半の土師器鉢と思われるもの（11）などが見られた。

これらの遺物の所見から、本住居は６世紀後半の所産と判断され、７世紀後半頃までは窪地としてその痕跡が残されていたものと思われる。

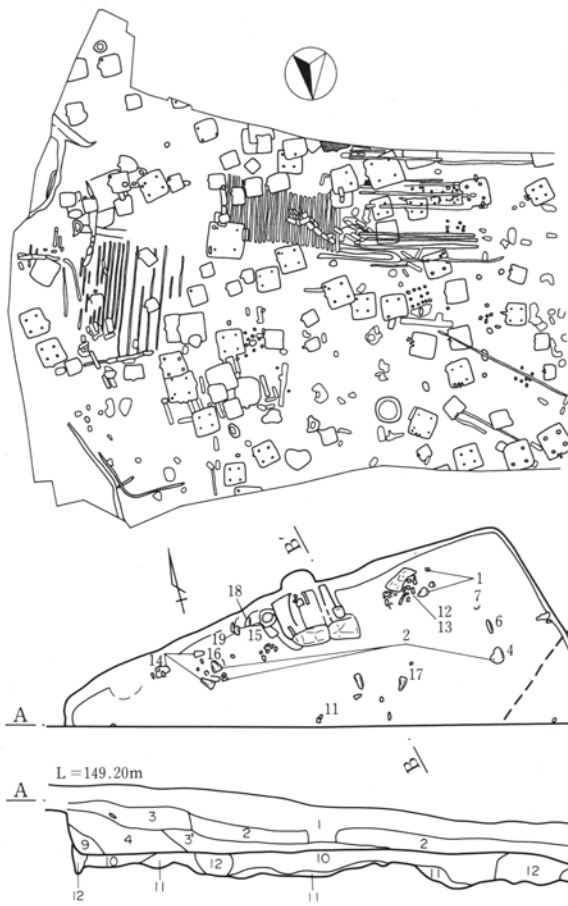
規模　長軸：270cm　短軸：250cm　深さ：18cm

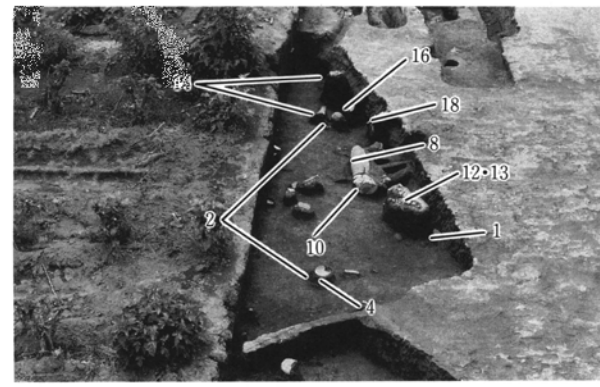
カマド　幅：60cm　奥行き：36cm　　左袖　幅：11cm　長さ：24cm　高さ：9cm　　右袖　幅：18cm　長さ：31cm　高さ：3cm　　燃焼部　径：40×18cm以上

構造　本住居のプランはやや横長の隅丸方形を呈する。東壁と北壁東半部に幅66cm以下、深さ６cm以下の周溝状の掘り込みを持つ掘り方をロームブロック主体の土で埋め戻して床面を造り出している。

カマドは東壁中央やや南よりに造られる。浅い掘り方を持ち、暗褐色土等で埋め戻して燃焼面を造る。袖は短く「ハ」字状に開き、煙道部は削平されて不祥である。

尚、柱穴・貯蔵穴は認められなかった。





現耕作土
１：暗黒褐色土
住居覆土
２：暗黒褐色土主体。粘性持つ。３：暗茶褐色土主体。（３′：３層より黒味増し、ローム減少）　４：暗黒褐色土主体。　５：暗黒褐色土：灰多量に含む。粘性強。（５′：５層に近似。微量の焼土含む）　６：暗黒褐色土主体。５′層に比し赤味増す。　７：暗黒褐色土主体。　８：暗黒褐色土：夾雑物無し。　９：黒色土：殆ど夾雑物無し。
掘り方覆土
10：暗褐色土：黒褐色土に褐色土混入。（10′：焼土少量含む。）　11：褐色土主体。
12：暗黒褐色土：黒色土と黒褐色土の混土主体。

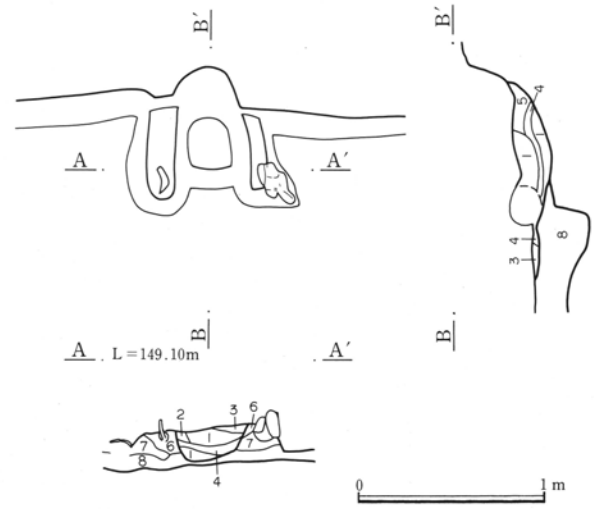
0　2 m

Ｈ－32号住居（古墳時代後期．第75～77図．図版18・60～61・91）

概要　本住居はＢ区中南の路線巾に近接した区域に見られた竪穴住居跡集中域の西端部に位置している。この集中域にはＨ－34号住居など重複関係を示す５軒の竪穴住居跡があるが本住居はその一軒である。本住居と重複関係にあるのは東接するＨ－35号住居一軒であり、本住居はこれを切っている。

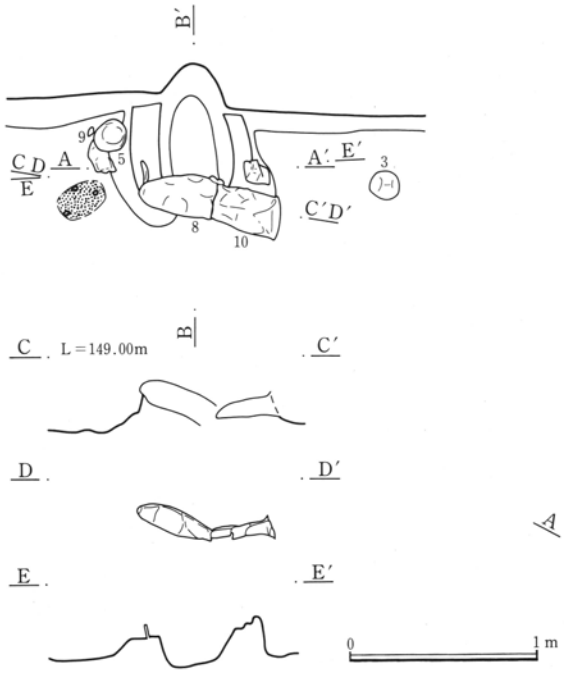
本住居はその北部が調査区内に在るのみで、ほとんどの部分は南側の路線外にあって住居全体とすれば一角を調査できたに過ぎなかった。しかし乍ら、本住居は北カマドであったため、カマド部分を調査することができた。また調査できた範囲の所見から、本住居はＢ区に於いては大型のものに属する竪穴住居ではないかと思われる。

出土遺物はさして多いとは言えなかったが、調査面積を考えれば充実している。この中で本住居に伴うものと判断できたものは６世紀後半期の特徴を示



カマド覆土
１：赤褐色土：灰暗褐色土に赤褐色土ブロック若干含む。　２：赤褐色土：焼土ブロック層。堅く締まる。　３：暗灰褐色土。　４：暗灰褐色土：焼土粒微量に含む。　５：暗灰褐色土：焼土・炭化物少量混入。
袖構築材
６：赤褐色土：焼土ブロック多量に含む。堅く締まる。　７：暗褐色土：焼土・黒褐色土若干含む。
カマド掘り方覆土
８：暗黄褐色土：褐色土と暗黒褐色土の混土。

第75図　Ｈ－32号住居及びカマド



すものを中心としており、土師器坏（1）、土師器鉢（2）、土師器甕（5）と須恵器短頸壷（3）があり、また古墳時代後期の土師器甕（4）とこも編み石（6,7）も出土している。この他、カマド材として6世紀後半期の土師器甕（8,10）と、古墳時代後期の所産ではあるが時期の特定できない土師器甕（9）が使用されていた。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器の甕を中心に出土が見られたが、スクレイパー（11）や6世紀後半の土師器の甕（12,15）・甑（13）・胴張甕（14）、8世紀前半頃の土師器甕（16）、そしてこも編み石（17〜19）などが出土している。

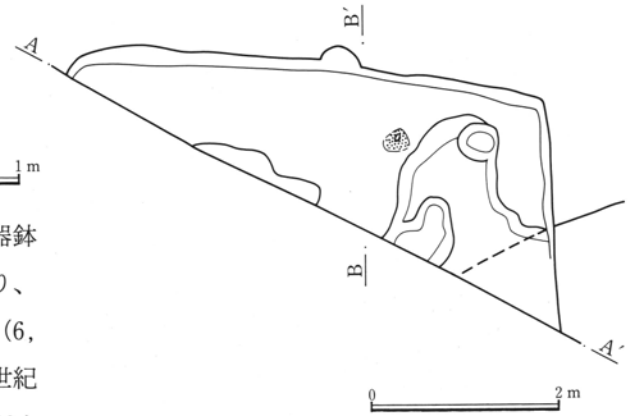
以上のような出土遺物の状況から、本住居は6世紀後半の所産と判断され、8世紀前半頃まで窪地としてその痕跡が残されていた可能性が考慮されるのである。

規模　長軸：508cm以上　短軸：240cm以上　深さ：45cm

カマド　幅：91cm　奥行き：77cm　　左袖　幅：33cm　長さ：64cm　高さ：12cm　　右袖　幅：35cm　長さ：56cm　高さ：18cm　　燃焼部　径：23×39cm　煙道　幅：36cm　長さ：26cm　　掘り方部ピット　径：43×41cm　深さ：47cm

構造　本住居は上述のように、その過半が路線外に在るため全容は不明であるが、本住居のプランは方形を呈するものと推定される。

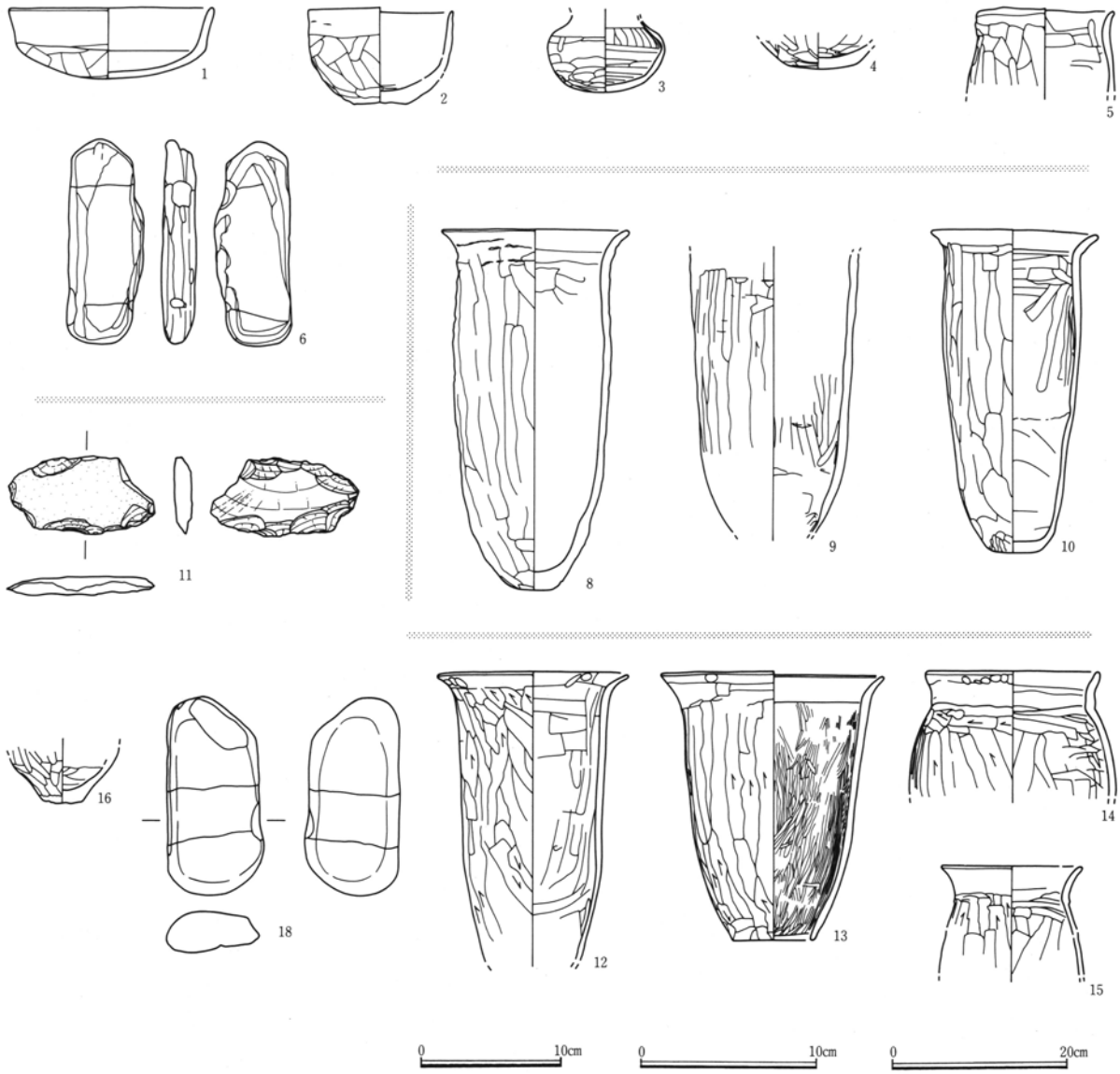
本住居は掘り方を有するが、全体的状況は把握できなかった。尚、掘り方の北東部には柱穴状のピットが見られた。またカマド手前右側には27×24cmの範囲で粘土が残されており、床下粘土坑の存在が想定される。この掘り方を暗黒褐色土主体の土で埋め戻して床面を造り出している。



第76図　H—32号住居カマド及び掘り方

カマドは上述したように北カマドであり、住居掘り方の埋土である暗黄褐色土を掘り窪め、縦長の楕円形の燃焼部を造っている。また、この燃焼部の両側には暗黄褐色土をベースに袖を造っているが、袖は右袖は礫、左袖には土師器甕（9）をそれぞれ袖の先端付近に袖材として立て、焼土を含む暗褐色土等固めて袖を造っている。特徴的なのは天井材で、縦に重ねた2ケの土師器甕（7•10）を使用して天井材としているが、袖からずり落ちるような状態で出土したが、その位置から推して袖材付近に乗せられていたものと推定される。

尚、床面に於いて柱穴・貯蔵穴を発見することはできなかったが、貯蔵穴については掘り方に見られたピットが、位置的に見て或いはある時点で貯蔵穴として使用されたものではないかと推定されるのである。



第77図　Ｈ－32号住居出土遺物

Ｈ－33号住居（古墳時代後期．第78～79図．図版18・61）

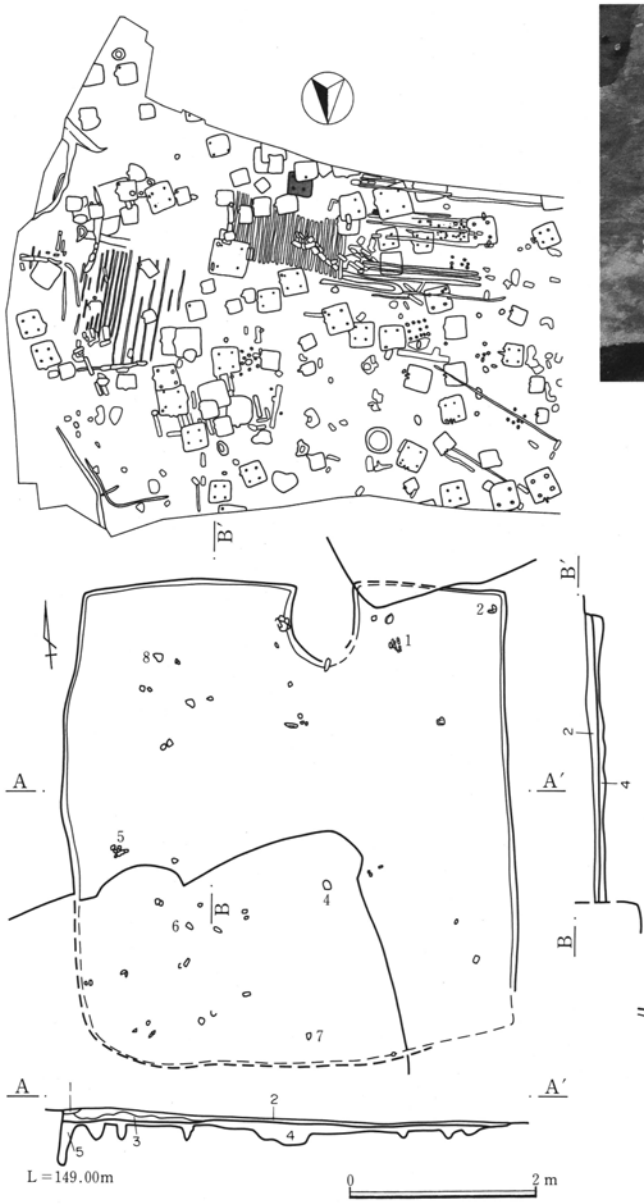
概要　本住居はＢ区中南部のＨ－32・34号住居等の重複関係を示す５軒の竪穴住居跡群の一軒であり、南側に34号住居、北側に41号住居と接して重複関係にあるが、本住居は34・41号双方の住居に切られている。遺存状況は全体としてあまり良くなかった。

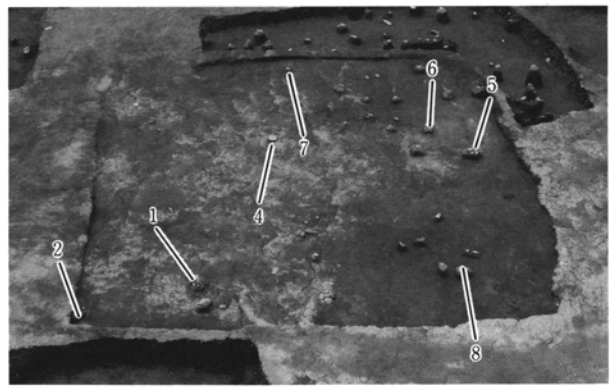
本住居の出土遺物はさして多くなかったが、本住居に伴うと判断される遺物には西暦600年前後の時期の特徴を示す土師器坏（1,2）、土師器甑（3）があり、須恵器甕の底部（4）も本住居に伴なうものと判断される。

一方覆土中からは、上述の遺物と同時期の土師器甕（8,9）、８世紀代の土師器甕（5,6）や須恵器高台付椀（7）が出土している。

以上の出土遺物の状況から本住居は西暦600年を前後する時期の所産と把握され、隣接する34号或いは41号住居の造られる８世紀後半～９世紀前半頃までは窪地として、その痕跡を留めていた可能性が考えられるのである。

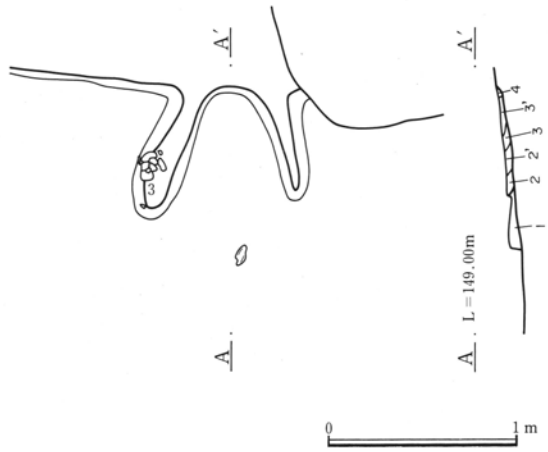
規模　長軸：510cm　短軸：474cm　深さ：10cm　カマド　幅：94cm　奥行き：65cm　　左袖　幅：25cm　長さ：72cm　高さ：4cm　　右袖　幅：16cm　長さ：54cm　高さ：４cm　　燃焼部　径：63×61cm





耕作土の可能性を持つ層
１：暗褐色土：若干のくすんだ褐色土混入。　２：黒褐色土：As-A微量に混入。良く締まる。
住居覆土
３：暗褐色土：１層に比し褐色土の混入多い。
住居掘り方覆土
４：暗褐色土：黒色土縞状に混入。As-BPも極く微量に見られる。　５：黒褐色土：ロームブロック少量含む。

カマド覆土
１：黒色土：白色軽石粒微量に含み、堅く締まる。
２：褐色土：焼土微量混入。(2′：褐色土中に黒色土が筋状に微量混入。)　３：暗褐色土：焼土少量入る。(３′：３層に比し焼土の混入多い。)　４：黒色土

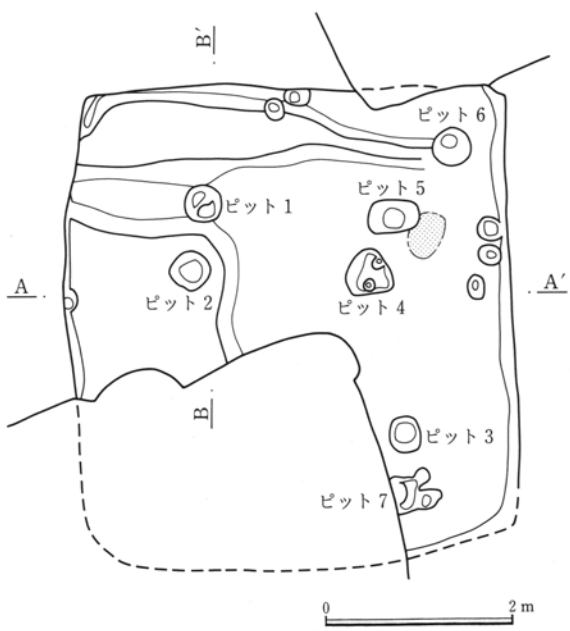


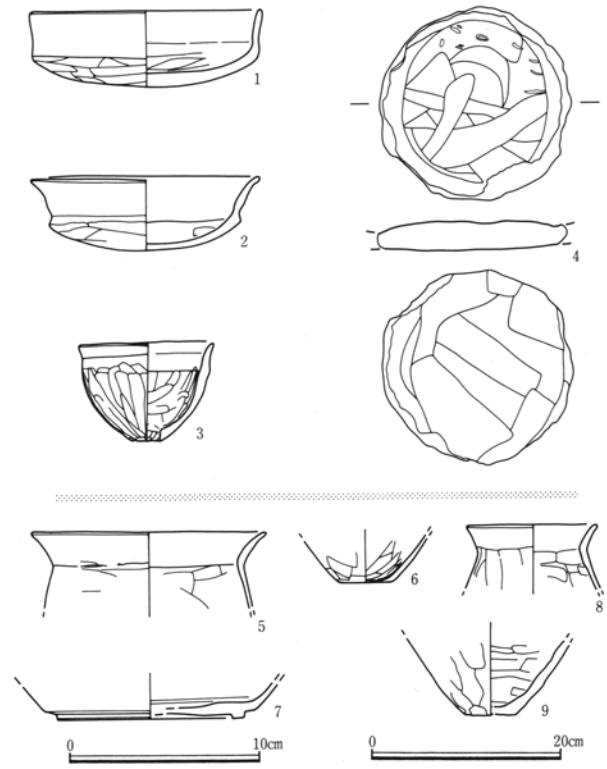
第78図　Ｈ―33号住居及びカマド

掘り方ピット　　ピット１　径：40×40cm　深さ：60cm　　ピット２　径：41×40cm　深さ：32cm　ピット３　径：40×34cm　深さ：55cm　　ピット４　径：53×53cm　深さ：55cm　　ピット５　径：55×36cm　深さ：61cm　ピット６　径：39×38cm　深さ：69cm　　ピット７　径：40×30cm　深さ：71cm

構造　掘り方は15cm以下の緩やかな凹凸を持ち、７基のピットと、径20～25cm、深さ20～25cm（ピット７に接するものは45cm）程の小ピット６基が確認されている。小ピットは壁際付近に見られ、ピットはその内側に位置している。この他、ピット５の南東に接して焼土が確認されている。

カマドは北カマドで極く浅い掘り方を持ち、焼土または黒色土を含む褐色土或いは暗褐色の土で埋め戻して燃焼部を造り出している。また、袖は左袖に土師器小型甕（3）を立てて袖材としているが全体としては、床面より上の部分の遺存状況が良くなく、カマドもその基部を残すだけでその構造はつまびらかでない。





第79図　Ｈ－33号住居掘り方及び出土遺物

床面に於いては柱穴・貯蔵穴等を確認することはできなかったが、或る期間のものとして、掘り方に見られたピットのうちピット１・３・５は位置的に見て主柱穴、ピット６は同じく貯蔵穴に比定される可能性を持ち、また小ピットは壁構造に拘わる遺構である可能性が考えられる。

Ｈ－34号住居（平安時代．第80～81図．図版18～19・61～62）

概要　本住居はＨ－33号住居と同様Ｂ区中南部の重複関係を示す５軒の竪穴住居跡群の一軒であり、Ｂ区に於いては中型の規模を呈する竪穴住居である。本住居は西側にＨ－35号住居、北にＨ－33号住居と重複関係にあり、何れの住居も本住居が切っている。

出土遺物は比較的多く見られたが、このうち本住居に伴うと判断されたものには９世紀前半期の特徴を持つ土師器坏（1,2）があり、この他、こも編み石（4）も出土している。

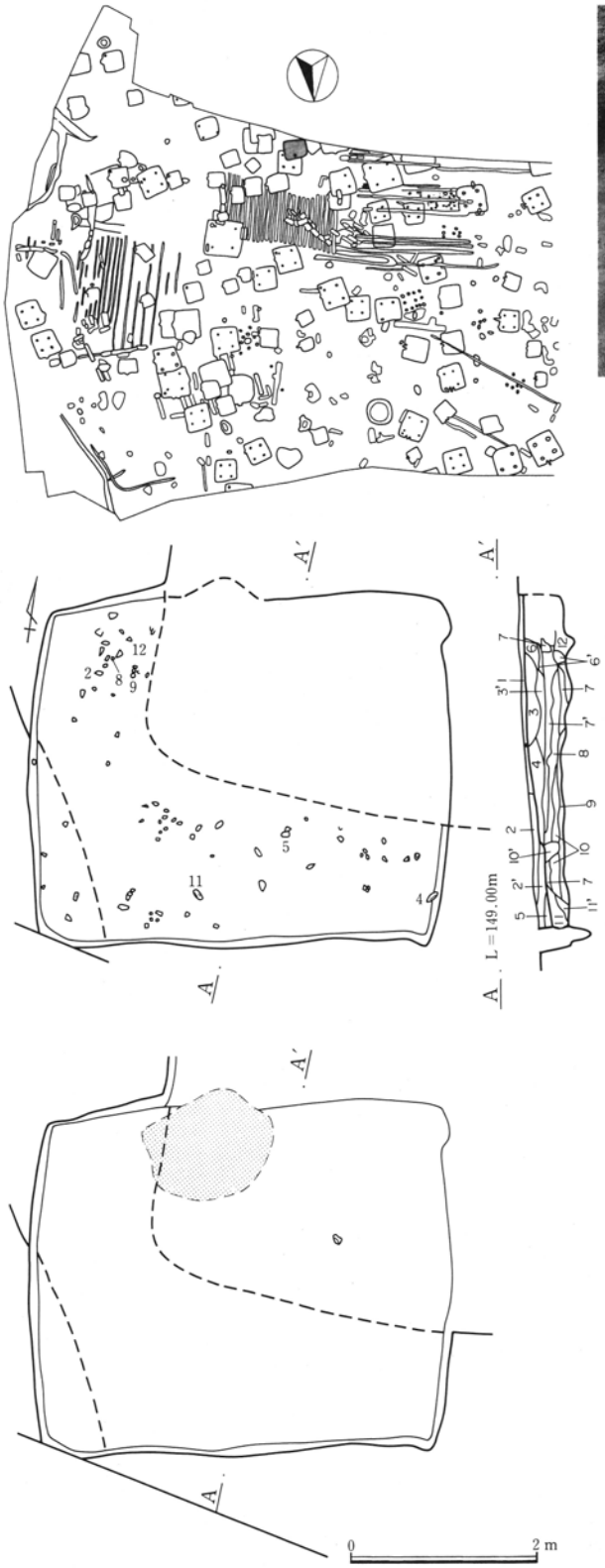
一方、覆土中からは７世紀代の土師器の坏（3）、高坏（6）、須恵器蓋（5）や手捏ね土器（7）、９世紀前半期の須恵器碗（8）などが出土している他、土錘（9）、縄文土器片（10）や該期の石器（11～13）も見られた。また、33・34号住居（注記は「33・35号住居」と誤記されている）の掘り方の遺物の中に見られる７世紀代の土師器の甑（33・34－3）や胴張甕（33・34－2）、８世紀前半代の須恵器坏（33・34－1）は本住居の範囲内に依存していた遺物と解釈される。

これらの遺物から、本住居は９世紀前半期の所産と判断される。また、覆土中に見られた７世紀代の特徴を持つ土師器高坏（6）や土師器甑（33・34－3）、土師器胴張甕（33・34－2）、須恵器蓋（5）、手捏ね土器（7）、或いは８世紀前半代の須恵器坏（33・34－1）といった遺物はＨ－33号住居かＨ－35号住居が埋没していく段階に投棄された遺物と考えられ、このうち前２者はＨ－33号住居またはＨ－35号住居に伴なうものである可能性も考えられる。

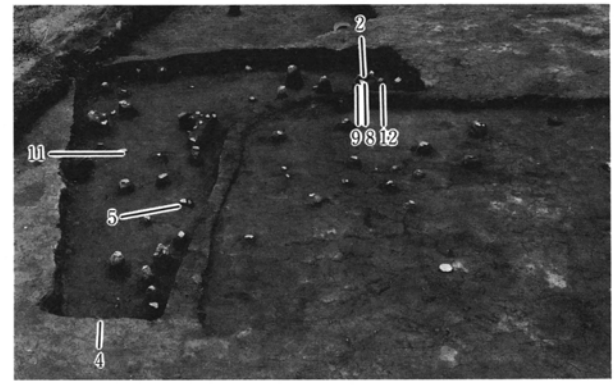
規模　長軸：454cm　短軸：368cm　深さ：21cm
床下粘土坑　径：150×150cm　深さ：14cm

構造　本住居は横長の方形のプランを呈する。

浅い掘り方を持ち、住居北東部分に床下粘土坑を有する。床下粘土坑には下層に暗黒褐色土、上層に灰白色粘質土が乗るが、何れも少量の焼土を含んで



第80図　Ｈ―34号住居

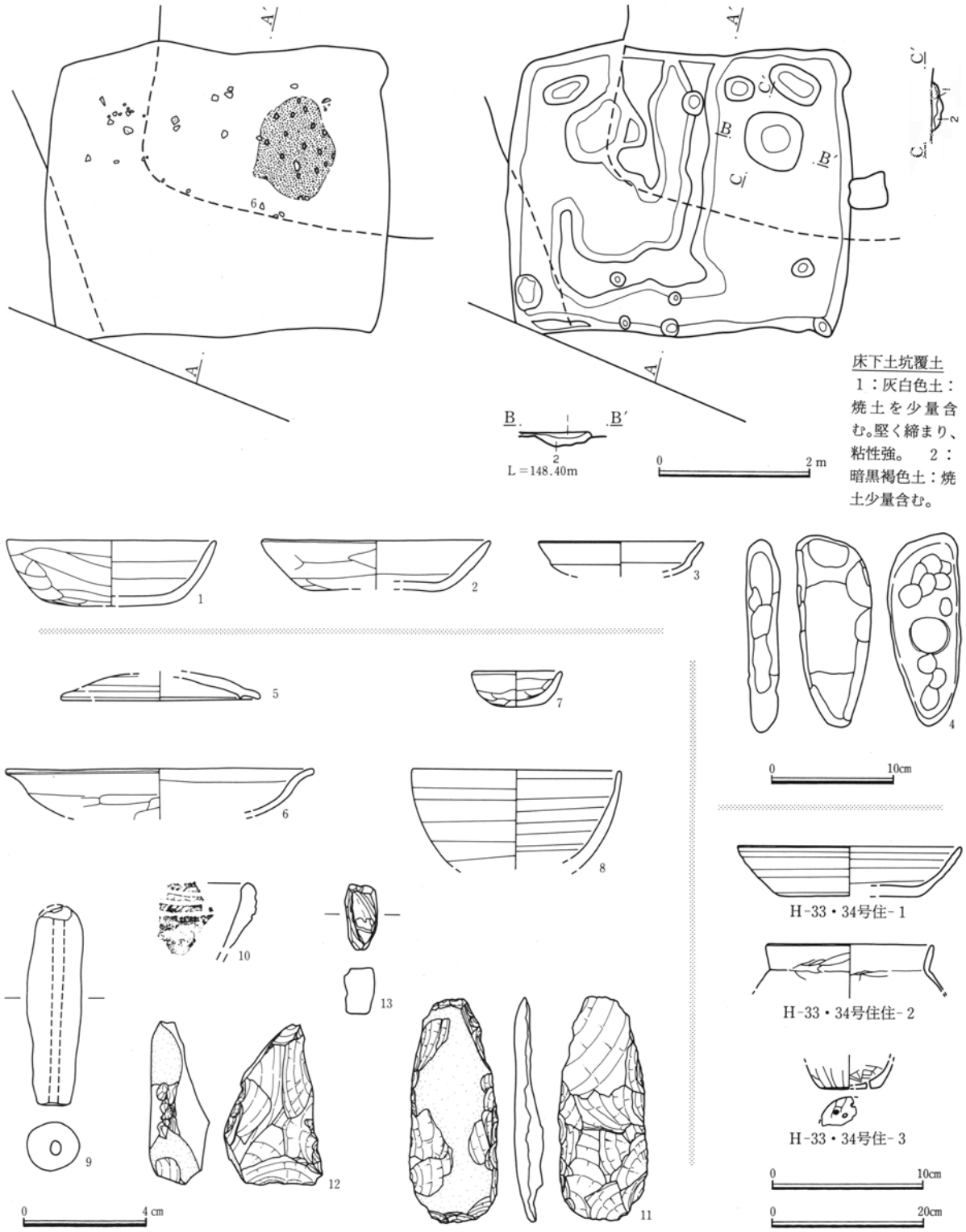


耕作土の可能性を持つ層
１：黒褐色土：As-A微量。良く締まる。
住居覆土
２：黒褐色土：白色土粒・淡褐色土粒少量含む。締まりに欠ける。（2′：２層に比し夾雑物の混入減少。）　３：暗黒褐色土：白色・褐色土粒、炭化物を比較的多量に含む。（3′：炭化物の混入認められない。）　４：黒褐色土：ローム多量に混入。締まりに欠ける。　５：黒色土：夾雑物殆ど無し。締まりに欠ける。
６：暗褐色土：粒子細かく、白色土粒少量含まれる。（6′：６層に比し色調明るく、焼土微量見られる。）
掘り方覆土
７：灰白色土：灰白色粘質土中心。粘性強。（7′：灰白色粘質土相当量含み、焼土・多量混入。）　８：暗黒褐色土：褐色土と焼土ブロック、炭化物基本。　９：褐色土：夾雑物無し。
10：褐色土：黒色土筋状に混入。（10′：褐色土と黒色土の混土。）　11：黒色土：褐色土ブロック微量に混入。（11′：11層に比し褐色土ブロックの混入多い。）　12：暗褐色土：粒子細かく、少量の白色土粒と微量の焼土粒含む。

いる。また掘り方調査時に床面を剝いで遺物の出土を見た段階で、この床下粘土坑の上位部分に138×100cmの範囲で粘土の分布が見られている。また床下粘土坑に対称するように住居西南部に径100×80cm、深さ17cm程の土坑様の落ち込みが見られ、また住居北東と北西の隅近くにそれぞれ径72×42cm、深さ６cm、径62×32cm、深さ９cmの掘り込みが対称するように見られた。この他幾つかのピット状の掘り込みも見られたが、本住居に伴うかどうかは特定できなかった。こうした掘り込みは見られるものの、掘り方全体に亘るようなはっきりした規格性は認められなかった。

カマドを特定することはできなかったが、調査時点に於いて住居の北部中央やや西寄り付近に140×120cmの範囲でその存在を認識している。

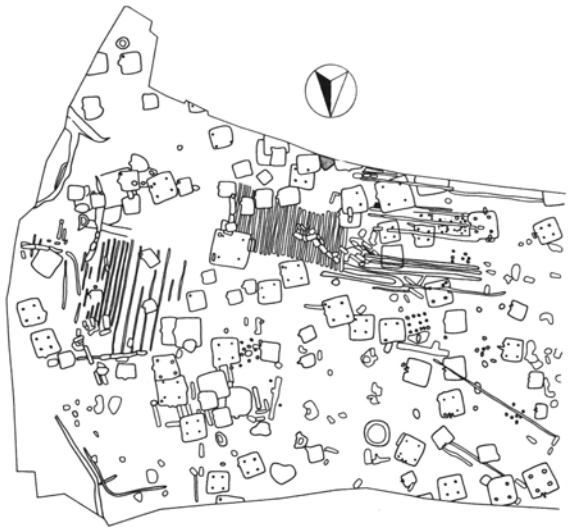
尚、床面に於いて柱穴や貯蔵穴等の施設を確認することはできなかったが、位置的に掘り方北東または北西隅付近に見られた落ち込みにその可能性を考慮することができる。



第81図　Ｈ－34号住居掘り方及び出土遺物

Ｈ－35号住居（古墳時代後期．第82～83図．図版19・62）

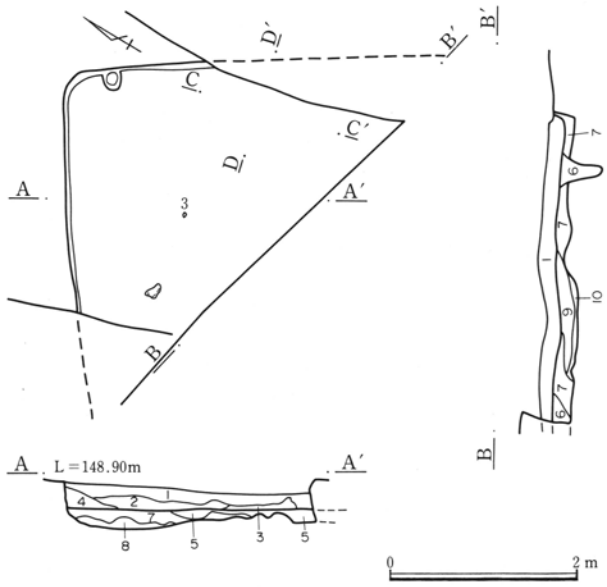
概要　本住居はＨ－33・34号住居などと共に重複関係を示す５軒の竪穴住居跡のうちの一軒であり、Ｂ区中部の調査区南壁際に位置していた。本住居の西側部分はＨ－33号住居に切られており、東側部分はＨ－34号住居に壊されている。また本住居の南側の部分は路線外にあって、調査することができなかっ

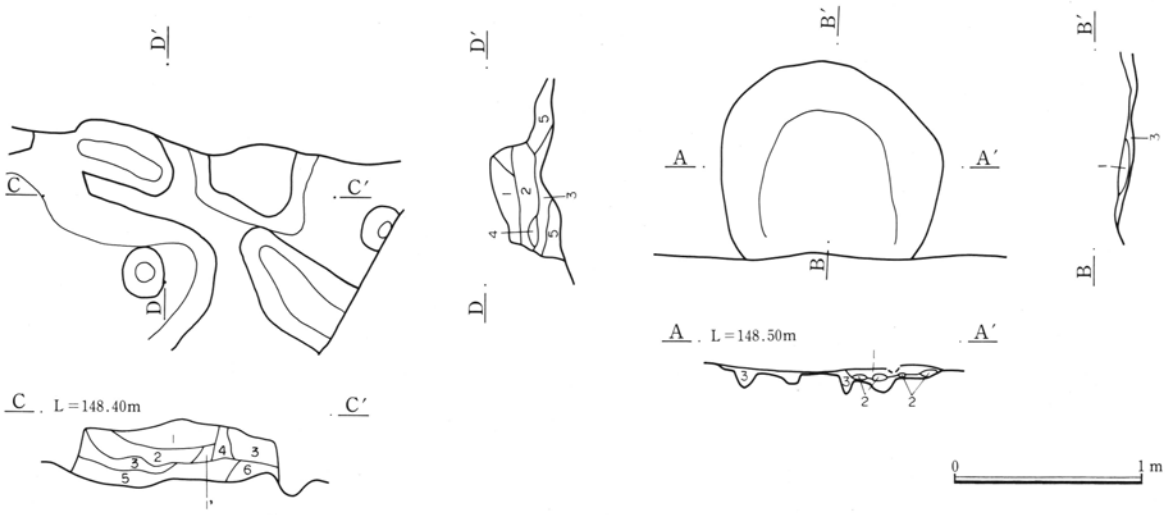


住居覆土
１：暗茶褐色土主体。
掘り方覆土
２：暗茶褐色土：黒色土若干混入。　３：灰茶褐色土：粘性のある灰と焼土を多量に含む。　４：暗黒褐色土：暗茶褐色土と黒色土の混土。５：暗褐色土：褐色土と黒褐色土または暗黄褐色土との混土。上面に緻密な貼り床形成。　６：黒褐色土：ロームブロック微量に混入。　７：暗黄褐色土：黒色土が斑点状に少量混入。　８：暗褐色土主体。　９：暗黒褐色土：暗黒褐色土を主体とする褐色土層。　10：灰白色粘質土：灰白色土と褐色土の混土で粘性強。

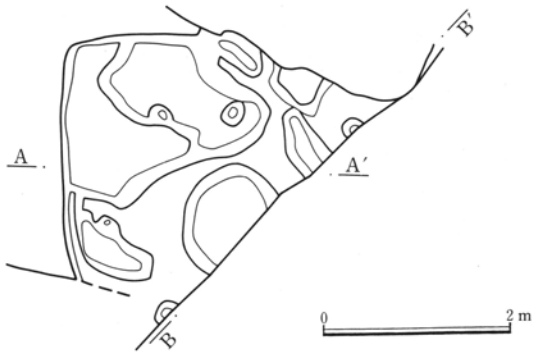
カマド覆土
１：暗赤褐色土：焼土粒・白色粘土ブロック相当量含む。（1′：１層に比べ焼土・白色粘土多く含む）　２：暗赤褐色土：堅く焼きしまった焼土ベース。
カマド掘り方・袖
３：暗黒褐色土：黒色土と暗褐色土の混土。　４：暗黄褐色土主体。　５・６：暗黒褐色土主体。

床下粘土坑覆土
１：暗褐色土：灰白色粘土微量混入。　２：灰白色粘質土。
３：暗褐色土：灰白色粘土少量混入。



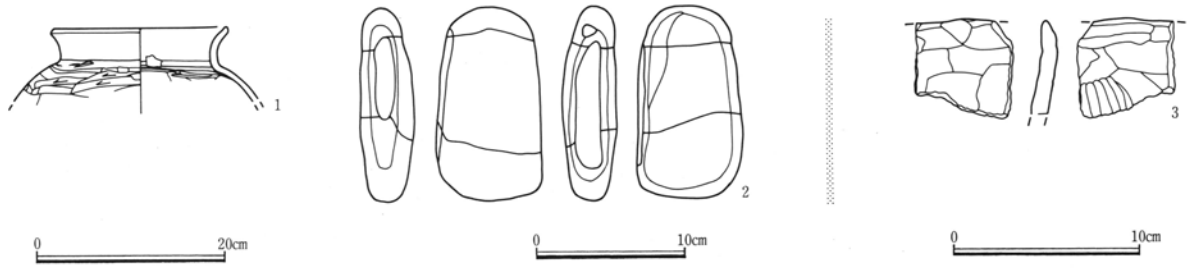


第82図　Ｈ―35号住居及びカマド



ことはできなかったのであるが、残存部の状況から方形のプランを呈するものと判断される。

本住居は比較的しっかりとした掘り方を有しているが、全体としては掘り方の凹凸に規則性などを認めることはできなかった。しかし乍らカマド手前に当たる本住居の調査範囲の東西方向の中程、調査範囲の南を画する壁際に大型の床下粘土坑が１基確認されている。この床下粘土坑の壁面及び底面には、



第83図　Ｈ－35号住居掘り方及び出土遺物

たため、住居の規模等の把握は行えなかった。従って、本住居のどの程度の範囲を調査することができたかは不明である。

本住居の出土遺物は少なかったのであるが、その中で本住居に伴うと判断された遺物には６世紀後半期の特徴を持つ土師器胴張甕（1）があり、他にこも編み石（2）の出土を見ている。

また覆土中からは土師器の坏や甕を中心として若干の遺物の出土を見ているが、土師器甑（3）などの遺物の出土も見られた。

以上のような遺物の状況から、本住居は凡そ６世紀後半の所産として捉えられるものと思慮され、住居の埋没は比較的早い段階から行われていったものと推測される。

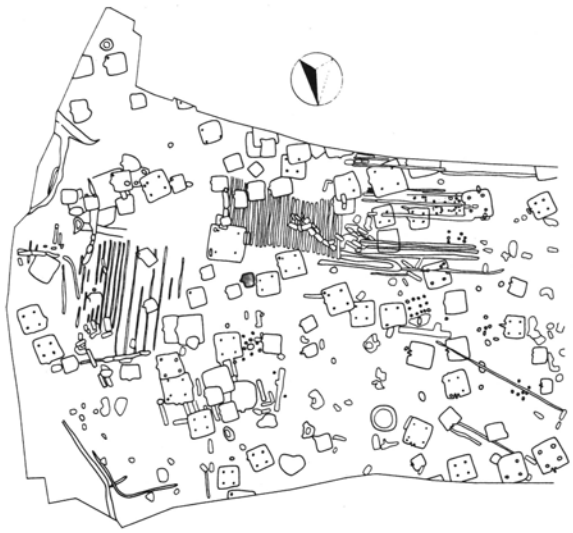
規模　残存長：360×284cm　深さ：27cm
カマド　幅：104cm以上　奥行き：55cm以上　　左袖　幅：32cm以上　　床下粘土坑　径：118×102cm以上　深さ：６cm

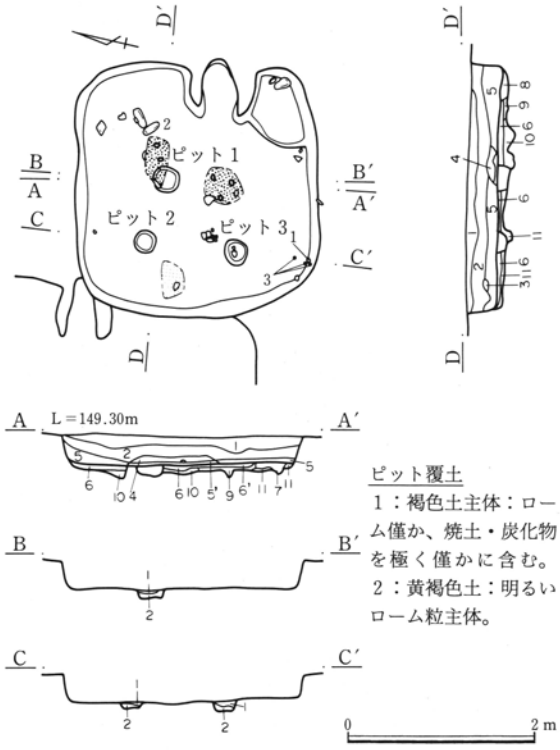
構造　本住居は上述のようにその東西の部分が他の住居の掘削によって壊されおり、南側の部分が調査区外に延びているためにその全体的状況を把握する

灰白色粘質土を乗せられ、或いは少量含む暗褐色土が貼り付いている。床はこのような床下粘土坑を持つ掘り方を暗黄褐色土や暗褐色土で埋め戻して造り出している。この床は特に別の土壌を投入するようなことはしていないものの、緻密な貼り床面が形成されている。

カマドは東カマドである。しかし、その検出は東壁付近がＨ－34号住居に切られている関係もあって難しかった。結果的にその形状や規模を含め、遺構の全体的状況を確認する事はできなかったのであるが、以下のような若干の所見を得ることができている。即ち、カマドは浅い掘り方を持ち、暗黒褐色土で埋め戻し燃焼面を造り出しているものの燃焼部の形状は不明であること。袖と認識されるものは左側のみを確認しているが、暗黒褐色土と暗黄褐色土で造り出していること。そして覆土中の１・２層は天井部の崩落土と考えられ、それが焼土粒を含む土で構成されているということである。

その他の柱穴・貯蔵穴等の構造物については床面に於いて確認することができず、掘り方に於いても想定することができなかった。





住居覆土

１：褐色土：ローム粒多く含む。　２：暗褐色土主体。　３：暗赤褐色土：ローム粒多量に含む。　４：白色粘土：やや弾力持つ。　５：褐色土：細かい炭化物を層下面に部分的に多量に含む。(5′：炭化物粒多量に含む。)

貼り床

６：暗褐色土：黒色土・ロームブロック多量に混入。堅く大変しっかり締まる。粘性有り。(6′：６層に比しロームの割合多い。)

掘り方覆土

７：黒褐色土：ローム粒やや多く含む。　８：暗褐色土：ローム・焼土粒やや多く含む。　９：暗褐色粘質土：ロームをやや多く含むブロック層。　10：暗黄褐色土：汚れたローム主体とし、褐色土ブロック入る。　11：黄褐色土：明るいローム粒主体。

カマド覆土

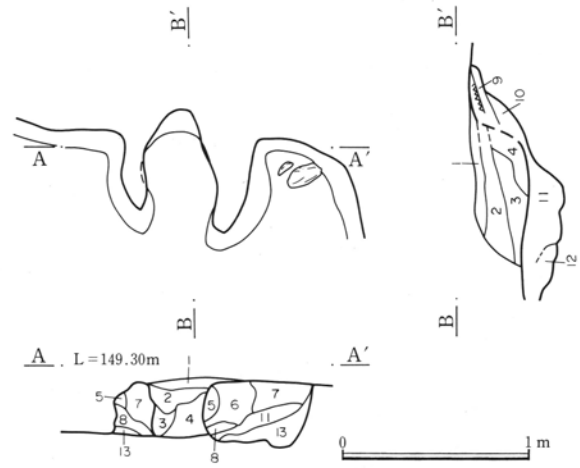
１：黄褐色粘質土主体。　２：褐色土：ローム・焼土・黒色土ブロックやや多く含む。　３：暗褐色土主体。　４：暗赤褐色土：ローム粒・白色粘土小ブロック・焼土ブロックやや多く含む。

袖構築材

５：赤褐色焼土層：６層土の焼土化したものと推定。　６：くすんだ灰白色土主体。　７：暗黄褐色土：ローム・焼土をやや多く含む。　８：灰褐色土主体。

カマド掘り方覆土

９：黄褐色土：焼土・ロームブロック多量に含む。上位良く焼ける。　10：暗黄褐色土：焼土粒やや多く含む。　11：黒褐色土：ローム多く含む。　12：黄褐色土：汚れたローム粒主体。明るいローム多く含む。　13：黄褐色土：ローム粒のしっかりした集合体。

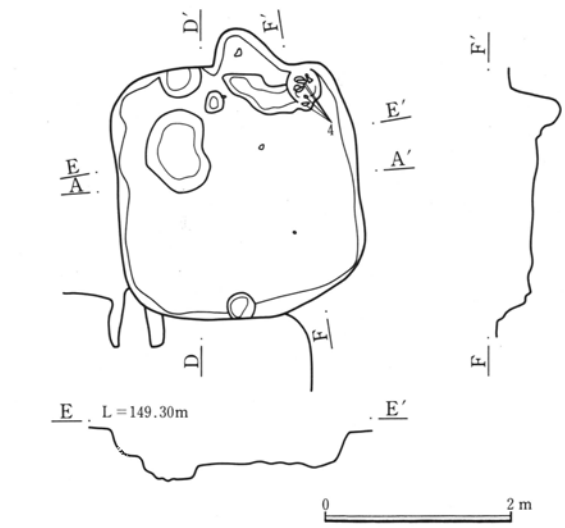


第84図　Ｈ－37号住居及びカマド

Ｈ－37号住居（古墳時代後期．第84～85図．図版19・62）

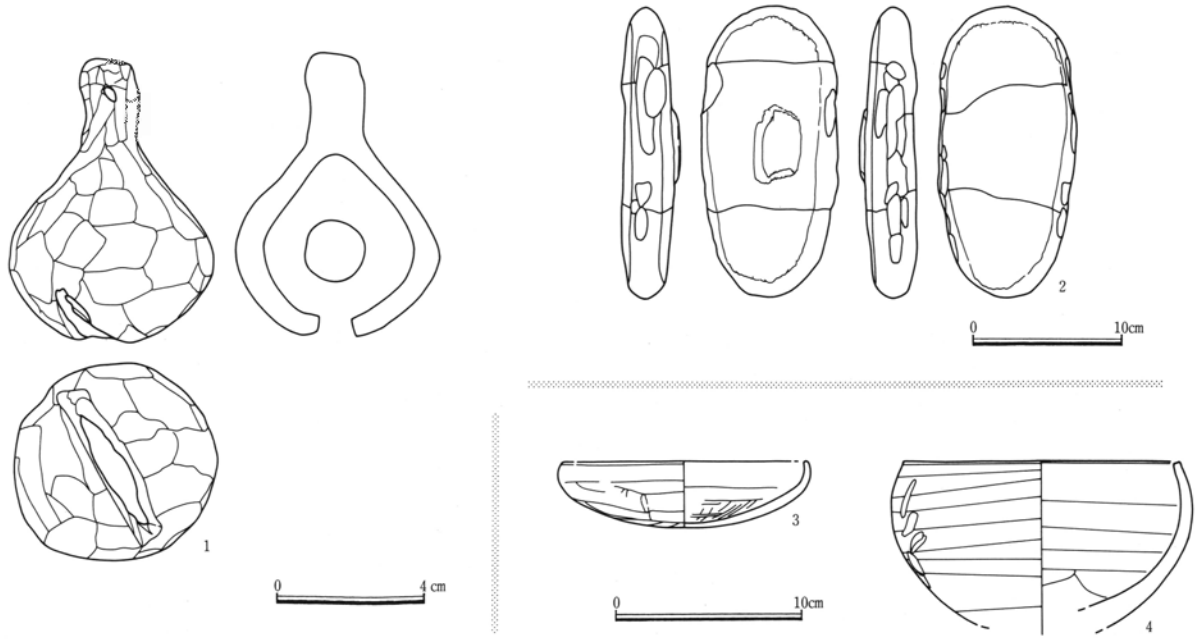
概要　本住居はＢ区中央付近に位置する小型の竪穴住居跡で、Ｈ－38号住居を切る。また床上８～12cmの位置には焼土と若干の炭化物を見ることから、所謂焼失家屋（焼却処分された住居跡）と判断される。

本住居の出土遺物は少なく、住居に伴うと判断される遺物は僅か２点に過ぎず、南壁際中央に須恵製の土鈴（1）が床面上に正位に置かれるように出土し



カマド　幅：97cm　奥行き：69cm　　左袖　幅：21cm　長さ：56cm　高さ：30cm　　右袖　幅：28cm　長さ：60cm　高さ：29cm　　燃焼部　径：38×57cm　ピット１　径：28×28cm　深さ：11cm　　ピット２　径：23×22cm　深さ：７cm　　ピット３　径：25×18cm　深さ：９cm　　貯蔵穴　径：36×36cm　深さ：36cm

構造　本住居は隅丸方形のプランを呈し、10cm以内の深さを持つ土坑様の掘り込みを東部に持つ掘り方を暗褐色土や暗黄褐色土等で埋め戻し、ロームや黒褐色土を多量に含む暗褐色土を堅く締めて貼り床を造り出している。



第85図　Ｈ－37号住居掘り方及び出土遺物

ており、この他こも編み石（2）が見られた。

一方覆土中からは土師器甕を中心に、７世紀後半期の特徴を持つ土師器坏(3)や鉄鉢形の須恵器鉢(4)などが出土している。

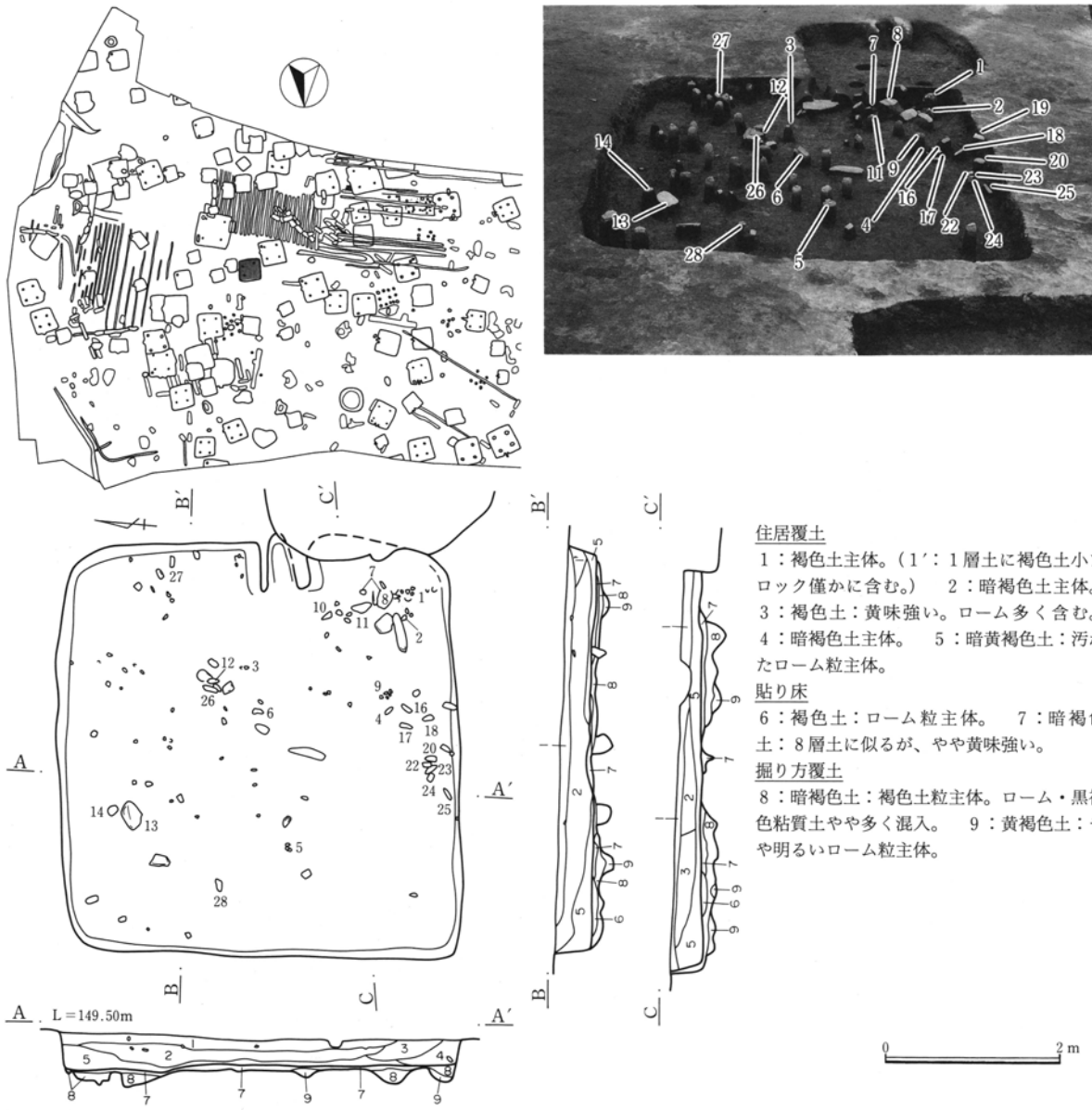
以上のような状況から、本住居の時期の特定は難しいが、覆土中の遺物とＨ－38号住居の時期から、本住居は７世紀中葉頃の所産として推測され、少なくも８～９世紀の頃までは住居の痕跡が窪地として残っていたものと想定されるのである。

規模　長軸：174cm　短軸：164cm　深さ：32cm

カマドは浅い掘り方を持ち、これを暗褐色土や黄褐色土で埋め戻して燃焼面を造っている。袖は袖材を使用せず灰白色土等を使用して造っているが、炭化物を含むのでスサ等を用いたものと思慮される。

ピットは３カ所程確認したが位置的に本住居に伴うものか否かは判断されなかった。床面では明瞭に確認されなかったが、貯蔵穴を有する。

尚、覆土中の焼土の状況から、本住居は土葺き屋根構造を持っていたことが想定される。



第86図　Ｈ－38号住居

Ｈ－38号住居（古墳時代後期．第86～88図．図版19～20・62～63・91～92）

概要　本住居はＢ区の中央の東に向かう緩斜面の手前、やや平坦な区域の東南寄りに位置する、Ｂ区に於いては中型～大型に属する竪穴住居跡である。Ｈ－37号住居との間に、その一部ではあるが切り合い関係を持ち、カマドから南にかけての東壁部分をＨ－37号住居に切られて壊されている。

出土遺物のうち本住居に伴なうものには７世紀前葉～中葉の時期の特徴を示す土師器坏(2,3,5、1,4)、６世紀後半期頃の特徴を示す土師器甑（7）や土師器小型甕(8)があり、これらの他にも土師器胴張甕(6)や土錘（9)、転用のものを含むこも編み石（10～14）の出土が見られた。

一方覆土中からは土師器の坏や甕、そしてこも編み石（16～28）を中心とした遺物の出土が見られているが、これらの中には７世紀中葉頃の特徴を示す土師器坏また磨石（15）などの出土も見られた。

以上のような出土遺物の所見から、本住居は西暦600年を前後する時期の所産として捕らえられるものとして把握したい。また、覆土中の出土遺物の多くは床上10～20cmの範囲から出土するものが多く、本

住居が埋没していく経過の中での比較的早い段階の一時期に本住居の痕跡である窪地を利用した投棄行為が行われていたのではないかと思慮されるのである。

規模　長軸：471cm　短軸：464cm　深さ：48cm

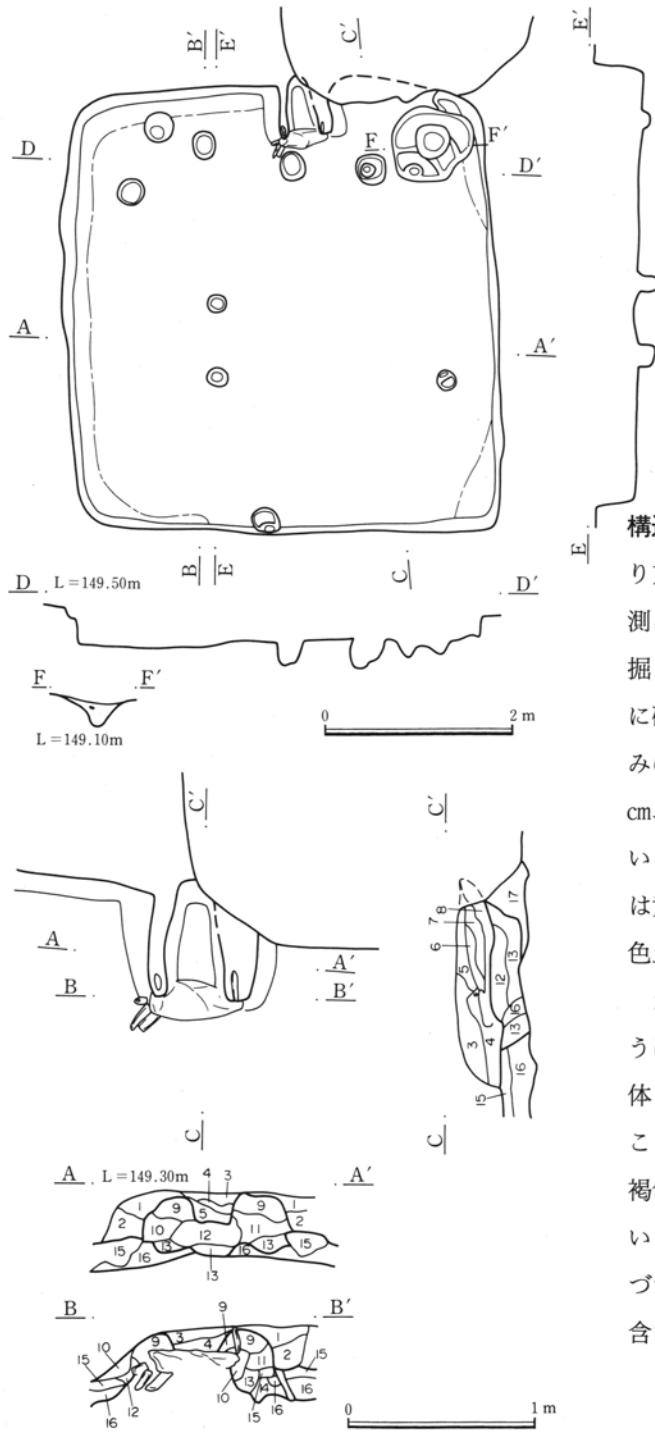
カマド　幅：81cm以上　奥行き：74cm

左袖　幅：34cm　長さ：60cm　高さ：19cm

右袖　幅：34cm　長さ：54cm以上　高さ：16cm　　燃焼部　径：19×53cm　　貯蔵穴　径：89×78cm　深さ：61cm

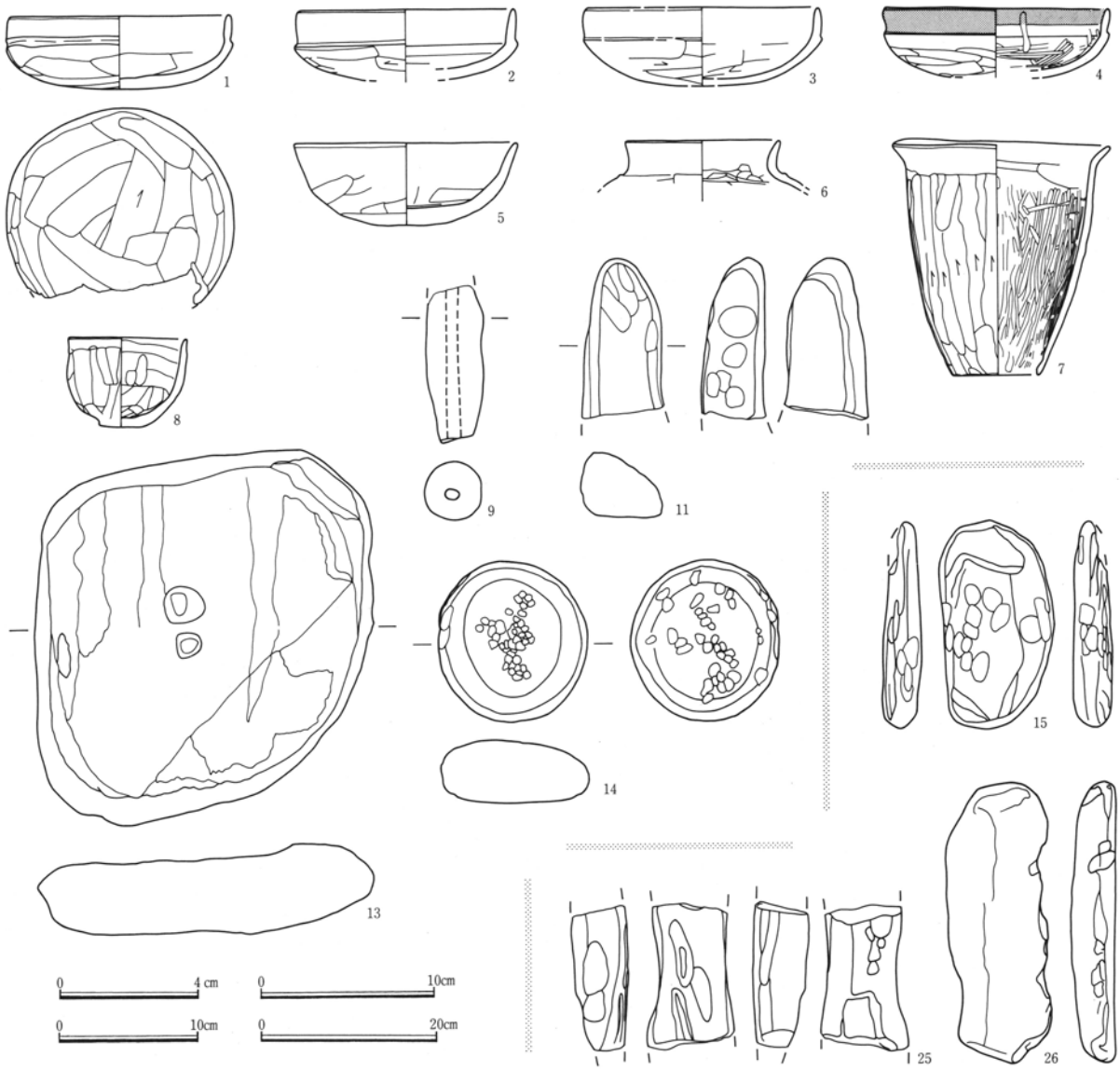
構造　本住居は凡そ隅丸方形のプランを呈する。掘り方には、幅95～129cm前後、深さ16～22cm前後程を測る周溝状の掘り込みが一周して、中央に方形様の掘り残し部を設けている。床下粘土坑等の施設を特に確認することはできなかったが、周溝状の落ち込みの中の北東・南東・南西・北西の各部に径30～40cm、深さ30～50cm程の柱穴状の落ち込みを確認している。このような構造を持つ掘り方を暗褐色土或いは黄褐色土等で埋め戻しているが、その上層に黄褐色土を使用して貼り床を造り出している。

カマドは東カマドであるが、その一部は上述のようにＨ－37号住居により壊されていた。しかし、全体としては遺存状況が良く、次のような所見を得ることができた。即ち、カマドは浅い掘り方を有し、褐色土や暗褐色土で埋め戻して燃焼面を造り出している。袖は左右双方共、その手前側に河床礫を１個づつ立てて袖材としているが、この袖材を焼土粒を含む褐色土・暗褐色土で包んで袖本体を造り上げて



カマド覆土
１：褐色土。　２：暗褐色土：ローム粒等僅かに含む。
３：暗褐色土：ローム粒やや多く含む。　４：灰褐色土：ローム粒やや多く含む。　５：褐色土：ローム粒やや多く含む。　６：褐色土主体。　７：黒褐色土：焼土やや多く含む。　８：暗茶褐色土：汚れたローム多量に、焼土粒やや多く含む。
袖構築材
９：褐色土主体。堅く大変良く締まる。粘性有り。　10：暗茶褐色土主体。　11：暗茶褐色土主体。
カマド掘り方覆土
12：暗赤褐色土：赤味を帯び、焼土粒やや多く含む。。　13：褐色土：くすんだロームの細粒多量に含む。　14：暗黄褐色土：くすんだ細かいローム粒主体。
住居貼床
15：暗褐色土：褐色土粒・ロームブロック・黒褐色土ブロックを堅く締める。粘性有り。
住居掘り方覆土
16：暗褐色土：ローム多く含む。　17：黄褐色土：やや明るいローム粒層。

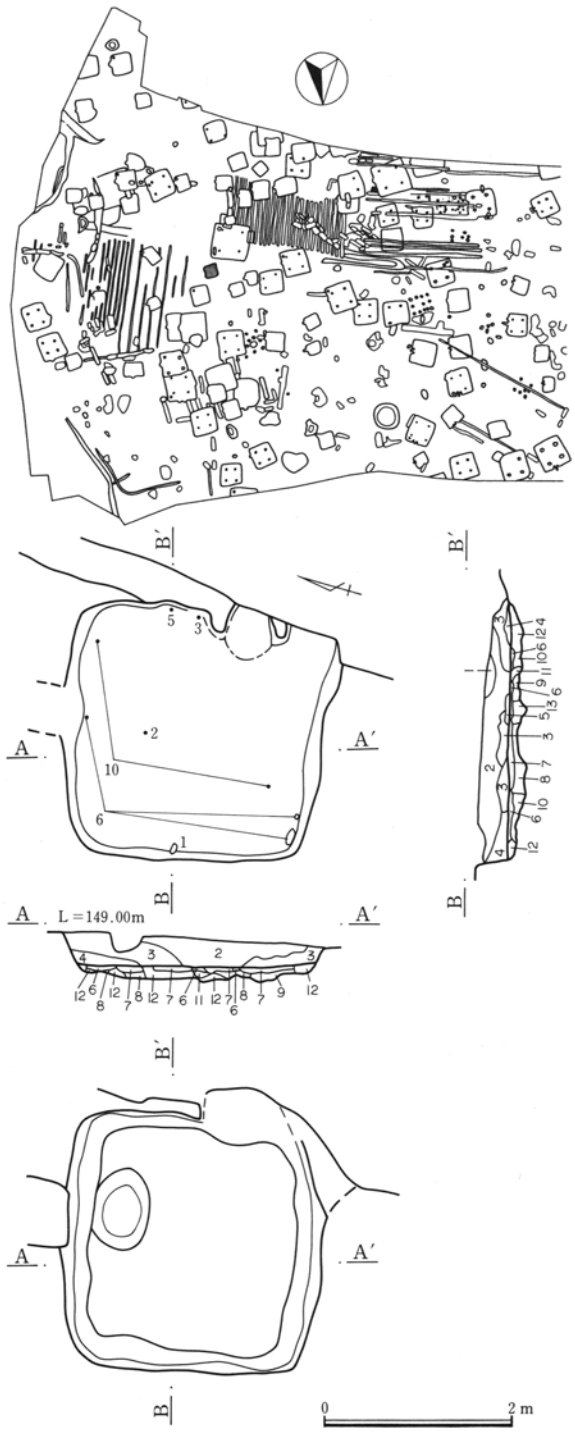
第87図　Ｈ－38号住居掘り方及びカマド

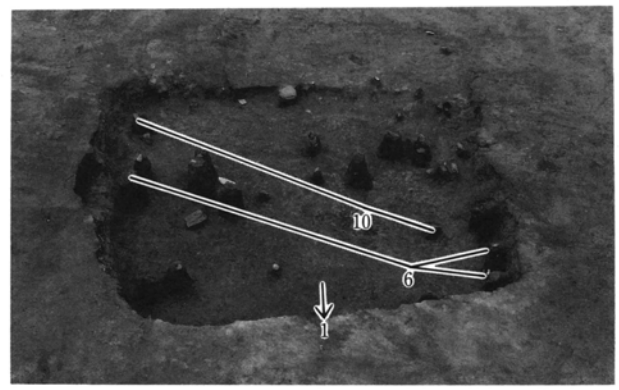


第88図　Ｈ―38号住居出土遺物

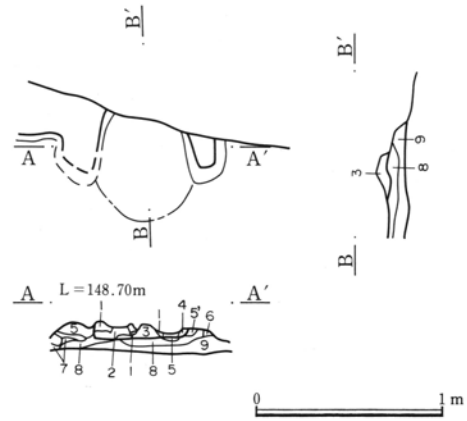
いる。尚、左袖手前には３個程の礫が手前に倒れるように遺されており、その上に天井石らしい石材が二折した状態ではあったが出土を見ているので、袖材の上に天井石を乗せ、左袖は礫で補強を施していたものと推定される。

柱穴については、床面に於いて径20～30cm、深さ20～30cm程を測るものを中心とするピット９基を確認・掘削しているのであるが、これらのほとんどのものについては、残念乍ら位置等の関係から柱穴と認定できるものを認めることはできず、更に本住居との関係を特定できるような要素も見出せなかった。柱穴については寧ろ掘り方に於いて認められた周溝状の掘り込みの中の４基のピットについて、住居使用時の或る段階の柱穴として取り上げることができると思われる。一方で貯蔵穴についてであるが、貯蔵穴はカマド右側手前、住居南東のコーナー付近に確認することができた。この貯蔵穴の縦断面形態はロウト様の形状を呈しており、中心となるピット部分と、緩斜面を呈し乍ら広がる外周部分とからなっている。このうち中心部分は径38×32cm程を測るもので、円形のプランを持っている。外周部分は床面から５～20cm程の高さで緩傾斜を呈し乍ら広がるもので、多少不整形ではあるが貯蔵穴の蓋等の存在が考慮されよう。





住居覆土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）
１：茶褐色土。　２：淡黄褐色土：漸移層土ブロック層。ローム粒含む。　３：暗褐色土：漸移層上層土中心のブロック層。ローム粒含む。　４：淡黄褐色土：漸移層下層土中心。ローム粒含む。
５：乳褐色シルト：漸移層褐色土の混入するブロック層。
貼り床
６：黄褐色土：ローム層土基本に漸移層下層土ブロック入る。良く締まる。　７：暗褐色土：黒色土に漸移層土・ローム層土混入。良く締まる。
掘り方覆土
８：暗褐色土：黒色土・漸移層土・ローム層土のブロック層。
９：暗褐色土：７層に似るが締まりに欠ける。　10：明褐色土：ロームに漸移層土•黒色土の入るブロック混土層。　11：暗褐色土：漸移層上層土にローム粒入る。　12：明黄褐色土：ロームブロック層。黒色土と漸移層土の小ブロック若干混入。　13：茶褐色土：漸移層土に黒色土・ロームの入る小ブロック層。

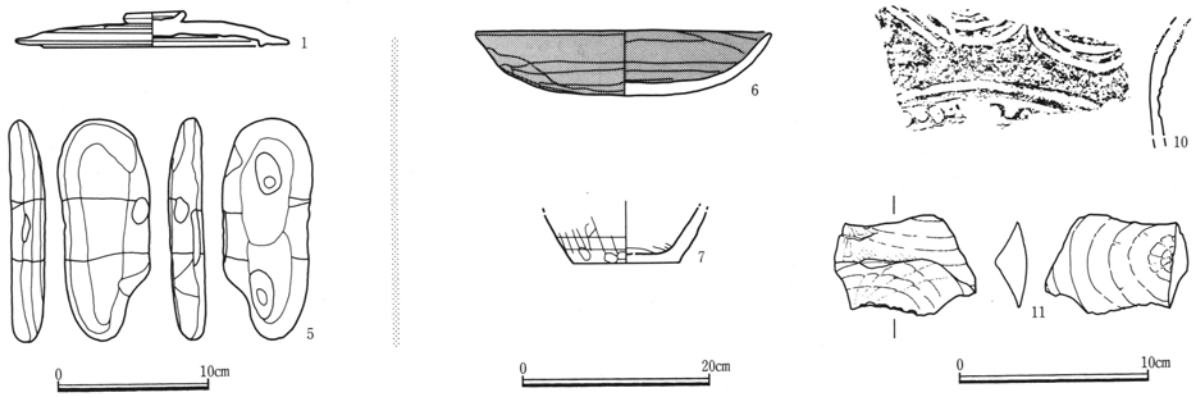


カマド覆土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）
１：淡赤褐色土：弱い焼土化見る漸移層土ブロック層。焼土粒含む。
２：黄褐色土：黒色土とロームの小ブロック層。　３：茶褐色土：漸移層下層土ブロック層。
袖構築材
４：暗褐色土：漸移層土の混土。　５：淡赤灰色土：弱い焼土化見る青灰色シルト層。灰白色シルト混入。（５′：５層土に漸移層土混入。）　６：褐色土：漸移層下層土小ブロックにローム•焼土粒等混入。　７：褐色土：黒色土・漸移層土・ロームブロック層。
カマド掘り方覆土
８：明褐色土：漸移層下層土ブロックにロームブロック混入。
９：黄褐色土：ロームに漸移層土混入するブロック層。

第89図　Ｈ－39号住居

Ｈ－39号住居（奈良時代．第89～90図．図版20•63•91～92）

概要　本住居はＢ区東部の緩傾斜直前の平坦部に位置する、小型の竪穴住居跡である。本住居の東部分は近世削平面に掛かってこれに若干削平されており、遺存状況は決して良好ではなかった。



第90図　Ｈ－39号住居出土遺物

出土遺物はさして多く無かったが、本住居に伴うと判断されたものには８世紀前半期の特徴を示す須恵器蓋（1）があり、この他、転用のものを含むこも編み石（2･3･5）や砥石（4）が見られた。

一方覆土中の遺物は土師器甕を中心に出土し、その出土位置は全体として擂鉢状を呈しており、本住居の埋没経過の中で窪地としてその痕跡を留めていたところへ投棄されたと考えられるものが多かったが、その中には７世紀前半期の土師器坏(6)を始め、須恵器甕（7）やこも編み石（8･9）、縄文時代の土器片（10）や石器（11）なども見られた。

以上のように本住居に伴うと判断される遺物は少なかったため、その時期を断定することはできないが、凡そ須恵器蓋から与えられる８世紀前半という時期を本住居の時期としたい。また、埋没の時間的経過を特定することはできなかった。

規模　長軸：290cm　短軸：270cm　深さ：46cm　カマド　幅：91cm　奥行き：60cm以上　左袖　幅：24cm　長さ：28cm　高さ：０cm　右袖　幅：22cm　長さ：29cm以上　高さ：２cm　燃焼部　径：50×56cm以上　深さ：３cm　床下土坑　径：85×60cm　深さ：４cm

構造　本住居は横長の隅丸方形のプランを呈する。

掘り方を有するが、掘り方は壁面に沿って幅７～26cmのテラス状の掘り残しを有し、中が低くなる構造で、北壁際に楕円形プランの浅い床下土坑を掘っている。このような構造を持つ掘り方を黒色土・ローム漸移層土・ローム層土で埋め戻し、ローム若しくは黒色土で貼り床を造り出している。

カマドは東カマドであるが、大きく削平されていて全体の状況はつまびらかでないが、カマドは浅い掘り方を有し、これをローム漸移層土で埋め戻して燃焼面を造っている。袖はローム漸移層土を中心に灰白色シルト等で造っている。

この他、貯蔵穴、柱穴等の構造を確認することはできなかった。

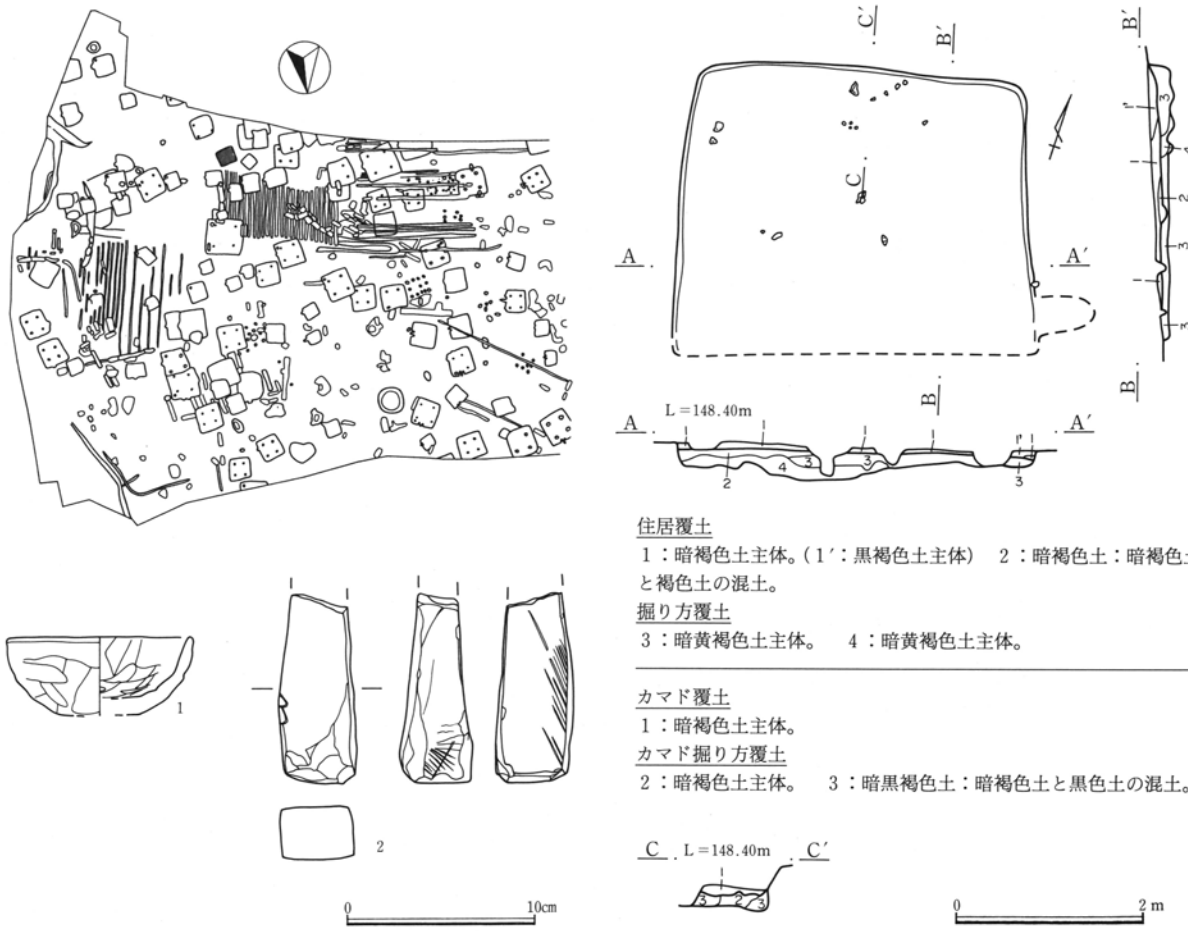
Ｈ－40号住居（古墳時代後期～平安時代．第91図．図版20・91）

概要　本住居はＢ区中南部東寄りの南東へ低くなる緩傾斜面に位置する、Ｂ区に於いては中型と推定される竪穴住居である。本住居の遺存状況は不良で、全体に上位は攪乱によって荒らされているが、特に南部は削平されて床面も喪失されてしまっている。

本住居の掘り方に於いては一部記録化に失敗し、またセクション・ラインの南西部を若干掘りすぎてしまっている。

本住居の出土遺物は少なく、更に本住居に伴うと特定できるものはなかった。出土遺物は古墳時代後期頃の土師器甕を中心に、床面から10cm前後内外のレベルに出土するものが多かった。これらの遺物の中には手捏ね土器（1）、砥石（2）、或いはこも編み石（3）なども含まれていた。

従って出土遺物から本住居の時期を特定することはできなかったが、カマドを有するらしいことから



第91図　Ｈ－40号住居及び出土遺物

古墳時代後期から平安時代の所産と考えられ、更に手捏ね土器が本遺跡の出土例に多い６世紀後半の所産であるとするならば、本住居の時期には６世紀代の時期を与えることができると思われる。

規模　長軸：384cm　短軸：300cm以上　深さ：13cm　北カマド　幅：不明cm　奥行き：42cmか

構造　本住居は方形のプランを呈している。

北壁中央やや東寄りに浅い土坑状の掘り込みを持ち、柱穴様のピットが何基か見られた掘り方を有し、これを暗黄褐色土で埋め戻して床を造っている。

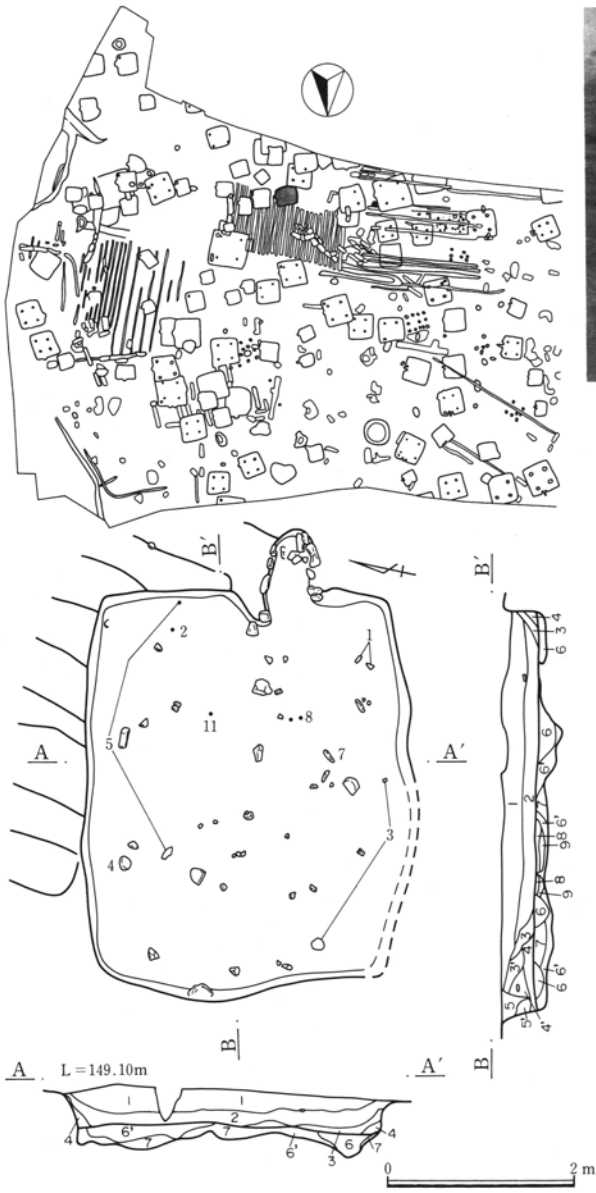
カマドは調査時点で、東壁やや南寄りと北壁中位に認識している。このうち北側のものは浅い掘り方を持ち、これを暗褐色土や暗黒褐色土で埋め戻して燃焼面を造っている。東側のものは明瞭に確認することはできなかったのであるが、後述の貯蔵穴と想定される掘り方のピットからも、その存在を想定している。

貯蔵穴や柱穴は床面に於いては確認できなかったのであるが、掘り方に見られた幾つかのピットにそれを求める可能性は残される。特に住居南東部に位置する円形プランのものは、位置的に見て東カマド使用時の貯蔵穴である可能性を有している。

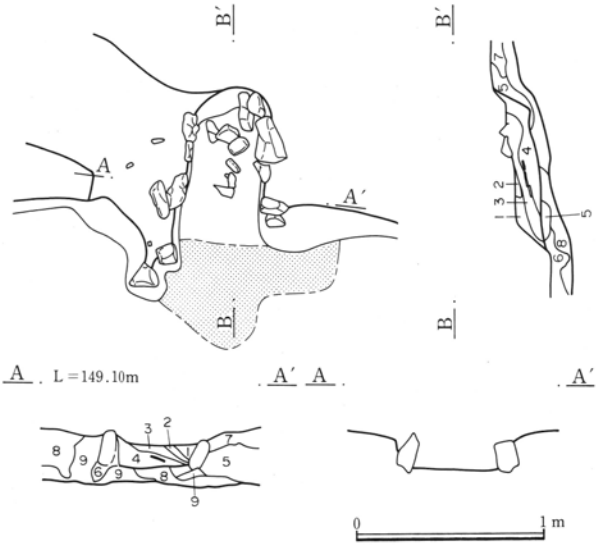
Ｈ－41号住居（奈良時代．第92～93図．図版20・63・92）

概要　本住居はＢ区中南部東寄りに位置するやや小型の竪穴住居跡で、Ｈ－32・34号住居等の重複関係を示す５軒のうちの１軒であり、南側にＨ－33号住居と接してこれを切っている。

本住居の出土遺物は比較的多かったが、この中で本住居に伴うと判断されたものには、８世紀後半



住居覆土
１：暗褐色土：粒子緻密。くすんだ褐色土小ブロック若干混入。
２：暗褐色土：１層とほぼ同様だが、夾雑物は１層に比し顕著ではない。　３：暗褐色土：褐色土少量混入。（３′：３・４層に対し、褐色土の混入増加。）　４：暗褐色土：暗褐色土と褐色土の混土。（４′：４層に比し軟質。）　５：黒褐色土：夾雑物殆ど見られない。（５′：５層土に褐色土少量含む。）
住居掘り方覆土
６：暗黒褐色土：淡褐色土と灰白色粘土若干量混入。（６′：灰白色粘土が見られない。）　７：茶褐色土：黒色土微量に混入。
８：黒褐色土：黒褐色土ブロック少量混入。　９：灰白色土：灰白色粘土と暗褐色土の混土。



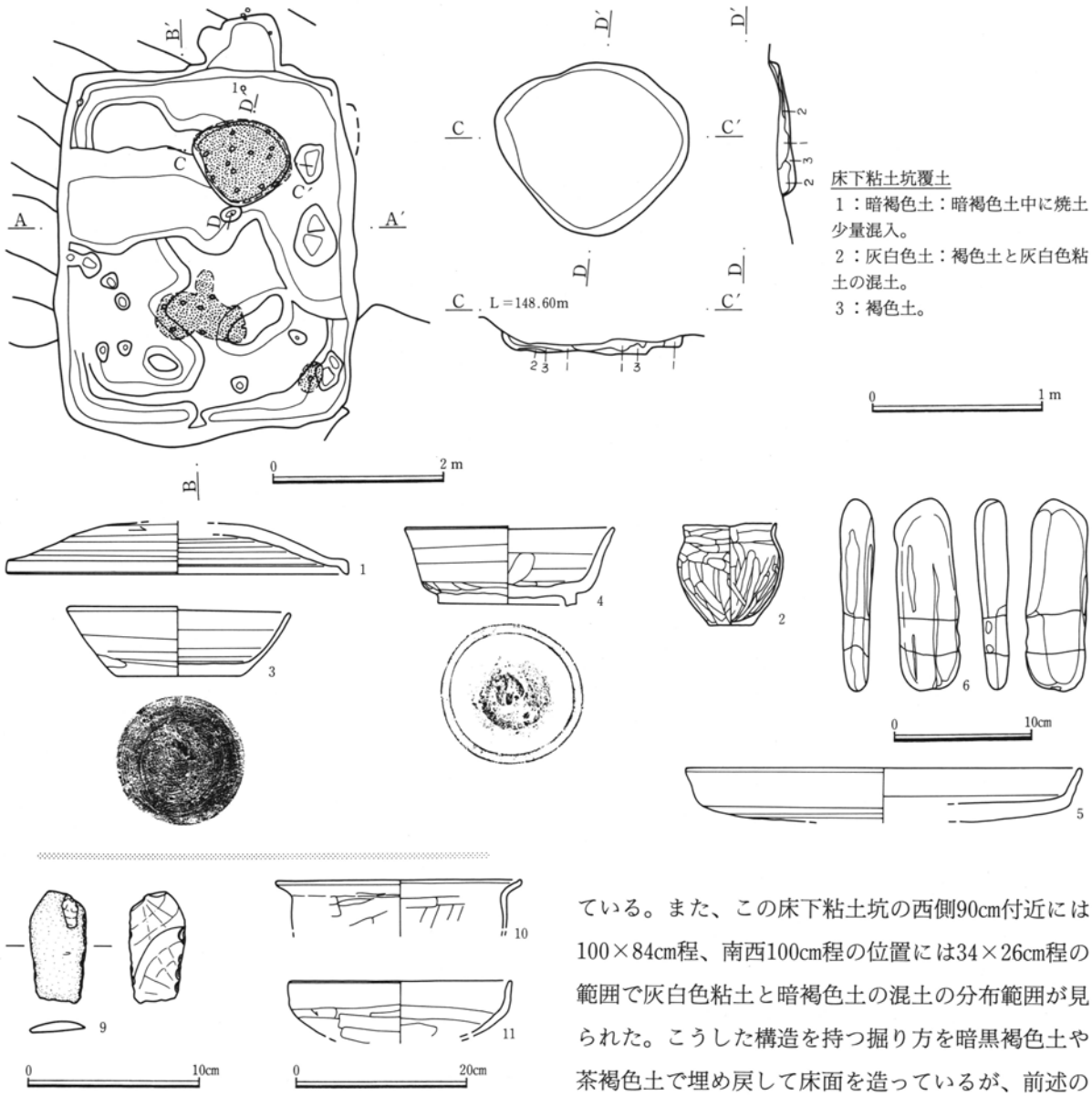
カマド覆土
１：暗褐色土：汚れた焼土微量に含む。　２：黒褐色土：白色土粒微量に含む。　３：暗褐色土：１層に比し多量の焼土含み、白色土粒若干入る。　４：暗赤褐色土：焼土主体。黒色土入る。
カマド掘り方覆土
５：暗赤褐色土：焼土と褐色土の混土。堅く締まる。　６：暗赤褐色土：黒色土に焼土ブロック微量混入。
住居覆土及び住居廃絶後の埋土
７：暗褐色土：As-A若干含む。　８：暗褐色土：黒色土と褐色土の混土。　９：褐色土

第92図　Ｈ―41号住居及びカマド

～９世紀前半期のものの特徴を示す須恵器の蓋（1）、坏（3）、高台付坏（4）や盤（5）、そして土師器小型甕（2）があり、その他こも編み石（6•7）も見られた。これらの遺物から本住居は、西暦800年前後の所産と判断されるのである。

一方、覆土中からは土師器甕を中心とした遺物の出土が見られ、この中には凹石(8)や不定形石器(9)といった縄文時代の遺物や、７世紀～８世紀前半期の特徴を持つ土師器の坏（11）や甕（10）なども含まれていた。

規模　長軸：434cm　短軸：344cm　深さ：54cm



第93図　Ｈ－41号住居掘り方及び出土遺物

カマド　幅：140cm　奥行き：139cm　　左袖　幅：27cm　長さ：55cm　高さ：23cm　　燃焼部　径：41×128cm　深さ：３cm

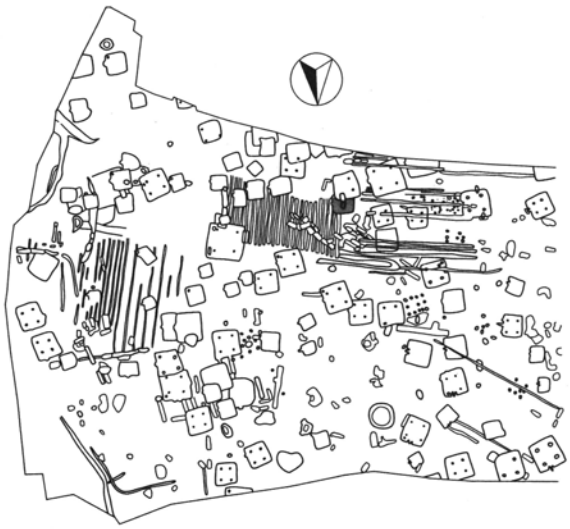
床下粘土坑　径：102×99cm　深さ：27cm

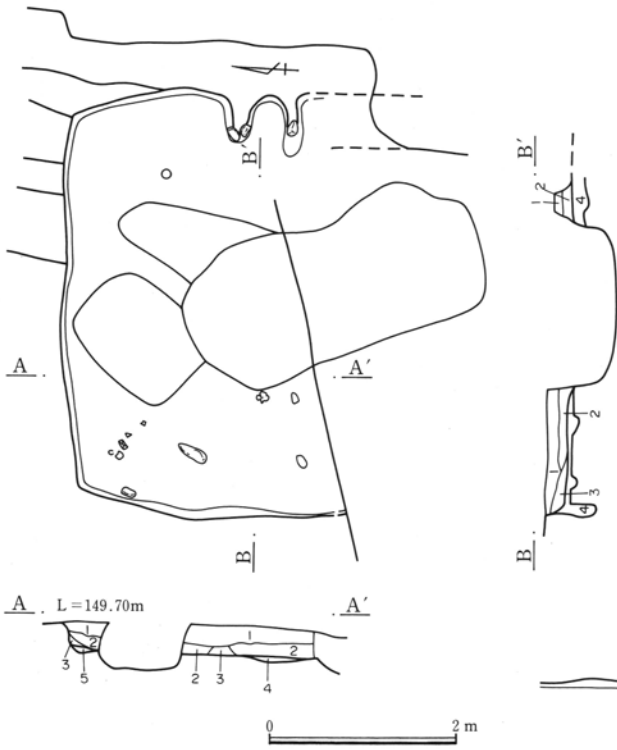
構造　本住居は縦長の隅丸方形のプランを呈する。

本住居は北東～北～南西にかけての壁下に幅26～50cm、深さ数cm程の溝状のものと、南東～北西にかけて深さ10cm以下の大きな掘り込みを有する掘り方を持つ。この掘り方にはピット様の掘り込みも見られるが、カマド前付近には底面及び壁面に褐色土及び灰白色粘土の混土が付着する床下粘土坑が造られている。また、この床下粘土坑の西側90cm付近には100×84cm程、南西100cm程の位置には34×26cm程の範囲で灰白色粘土と暗褐色土の混土の分布範囲が見られた。こうした構造を持つ掘り方を暗黒褐色土や茶褐色土で埋め戻して床面を造っているが、前述の粘土分布域の付近では黒褐色土で貼り床を造っている。

カマドは東カマドで、浅い掘り方を暗褐色土・暗赤褐色土等で埋め戻して燃焼面を造り出している。燃焼部は大きく壁面ラインを越えて造られており、燃焼部の左右には礫が縦に並べて立てられて、これを褐色土等の土で包んで袖を造っている。また、袖の燃焼部側の面には礫が貼られるように立てられており、広く礫が使用されていたものと推定される。

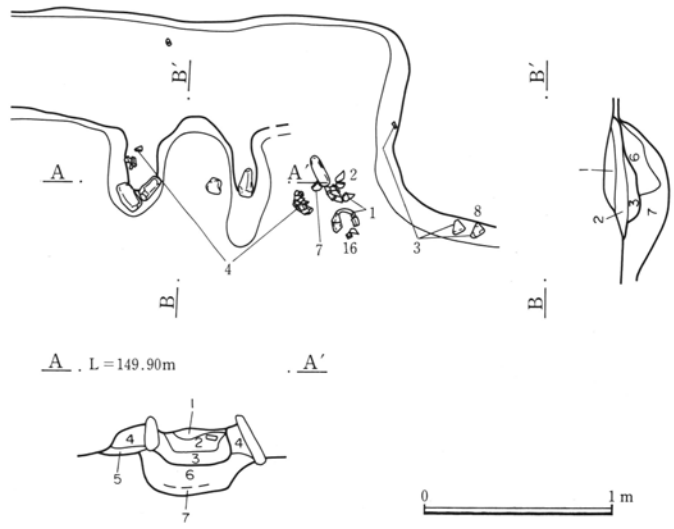
尚、床面に於いては貯蔵穴や柱穴等を確認することはできず、掘り方に於いてもそれらを示唆する遺構は確認されなかった。





住居覆土
１：暗茶褐色土：少量の淡褐色土粒と微量のAs-A含む。
２：暗茶褐色土：淡褐色土粒微量に含む。
３：褐色土：黒色土とロームの混土。
掘り方覆土
４：黒褐色粘質土：粒子緻密。白色土粒若干含む。
５：茶褐色土：黒色土極く微量に混入。

カマド覆土
１：赤褐色土：暗褐色土中に焼土小ブロック少量含む。
２：赤褐色土：焼土粒・焼土ブロック基本。
３：暗褐色土：夾雑物無し。
袖構築材
４：暗褐色土：白色土粒少量含む。粘性欠ける。
５：暗褐色土。
カマド掘り方覆土
６：黒色土：淡褐色土ブロック少量含む。
７：暗茶褐色土：黒色土と褐色土のブロック層。As-BP少量混入する。



第94図　Ｈ－42号住居及びカマド

Ｈ－42号住居（古墳時代後期．第94～95図．図版21・63～64）

概要　本住居はＢ区中南部に位置し、As-A下のサク状遺構調査後にその下面に於いて発見調査された小型の竪穴住居跡である。本住居は南部分をＨ－43号住居に切られており、中央部付近も５号・６号土坑等によって壊されていた。

本住居の出土遺物は比較的多かったのであるが、本住居に伴うと判断しうる遺物に

ついては確認できなかった。

一方覆土中からは、古墳時代後期所産と考えられる土師器甕を中心に、７世紀前半から中葉にかけての時期の特徴を示す土師器坏（3,5、1,2,4,6）、６世紀後半（8）と７世紀後半（7）の特徴を持つ須恵器坏や、奈良・平安時代の土師器甕などの出土を見ている。

以上に述べたように本住居に伴うと判断される出土遺物が無かったために、その時期を明確に特定することはできなかったが、後述する覆土中の遺物の出土状況と、切り合い関係にあるＨ－33号住居の出土遺物の状況から、凡そ６世紀後半前後の時期が想定されよう。また覆土中の出土遺物の状況から、本住居は少なくも７世紀前半の段階には埋没が始まっており、７世紀の前～中葉頃に量的な投棄のあったこと、奈良～平安時代までは住居の痕跡が窪地として遺存していたことが想定されるのである。

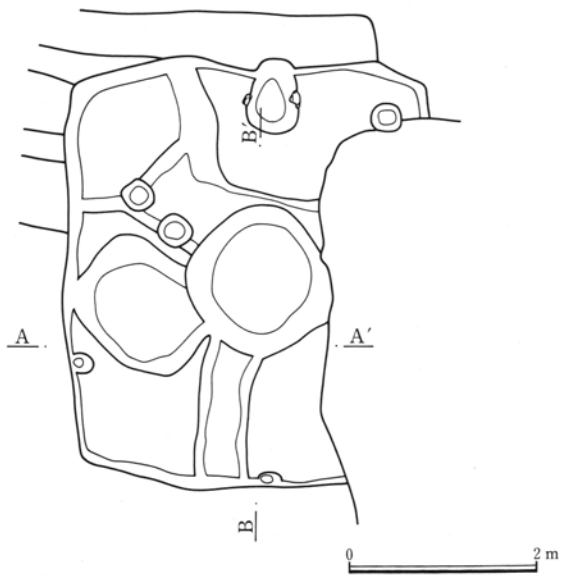
規模　長軸：454cm　短軸：386cm以上　深さ：22cm　カマド　幅：90cm　奥行き：60cm　　掘り方　径：59×76cm　深さ：16cm　　左袖　幅：30cm　長さ：44cm　高さ：11cm　　右袖　幅：21cm　長さ：62cm　高さ：13cm　　燃焼部　径：37×61cm　深さ：４cm

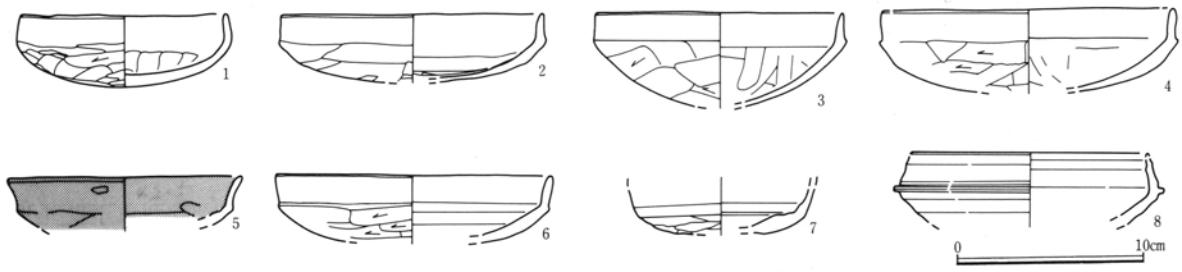
構造　上述したように本住居の中央及び南部は掘り抜かれているので、全ての構造をつまびらかにすることはできなかったが、調査により以下のような所見を得ることができた。

本住居はやや縦長の方形のプランを呈している。掘り方を有しているが、掘り方は東部中央のカマド前の一角を高く掘り残し、これを除く部分を掘り下げて、更に中央を掘り窪めた状態に掘削している。また掘り方には径28～34cm、深さ32～44cmを測る３基の柱穴様のものを含むピットの掘削も見られたが、これらが本住居に伴うものか否かは特定できなかった。本住居の床面は、このような構造を有する掘り方を黒褐色粘質土や茶褐色土で埋め戻して造り出している。

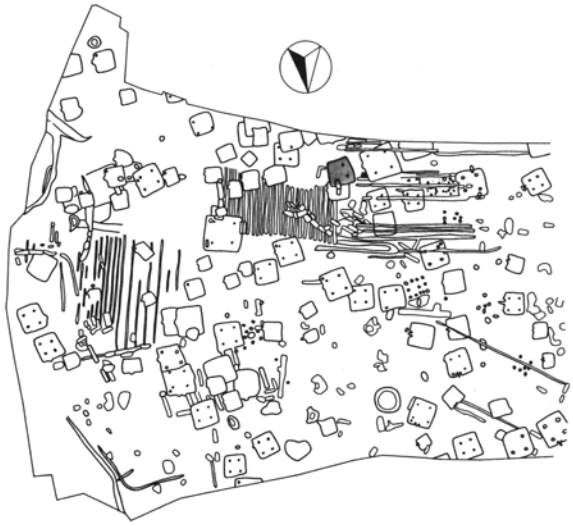
カマドは東壁中央付近に設けられている。このカマドは丸底様の掘り方を有し、これを黒色土等の土で埋め戻して燃焼部を造り出している。燃焼部は概ね東壁ラインの内側に設定されている。この燃焼部の中央付近の左右両側に河床礫を立てて袖材とし、それを包み込むように暗褐色土等を積んで袖を造り上げている。

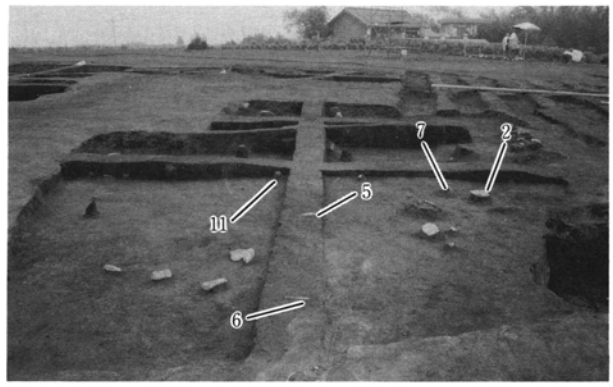
尚、床面に於いてカマド以外の貯蔵穴・柱穴等を確認することはできなかったが、貯蔵穴については位置的に住居南東部の掘り方面に見られたピットにその可能性を求めることができるものと思われる。

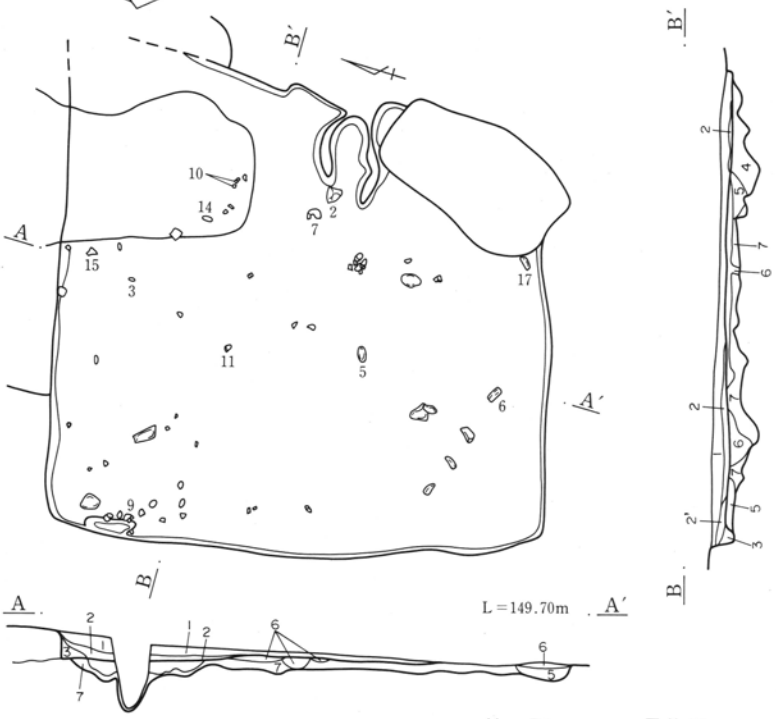




第95図　Ｈ－42号住居掘り方及び出土遺物







住居覆土
１：暗黒褐色土：黒色土･淡褐色土粒多量に、炭化物微量に含む。　２：暗黒褐色土：淡褐色土粒少量含む。（２′：暗褐色土：２層に比し淡褐色土粒の混入減少。）　３：暗黒褐色土：黒色土にローム少量含む。
掘り方覆土
４：黒褐色土：暗黒褐色土とロームブロックの混土。焼土微量に混入。　５：暗茶褐色土：灰暗茶褐色土とロームブロックの混土。焼土微量に混入。　６：黒褐色粘質土：粒子緻密。白色土粒若干含む。　７：茶褐色土：黒色土極く微量に混入。

0　2 m

第96図　Ｈ－43号住居

Ｈ－43号住居（古墳時代後期．第96～97図．図版21・64・92）

概要　本住居はＢ区中南部に位置する竪穴住居跡で、北側にＨ－42号住居を切るが、住居南東隅部は撹乱土坑により壊されている。

出土遺物のうち本住居に伴うものには７世紀前半期の土師器坏(1)があり、この他土師器胴張甕(2)やこも編み石（3,4,5）も見られた。

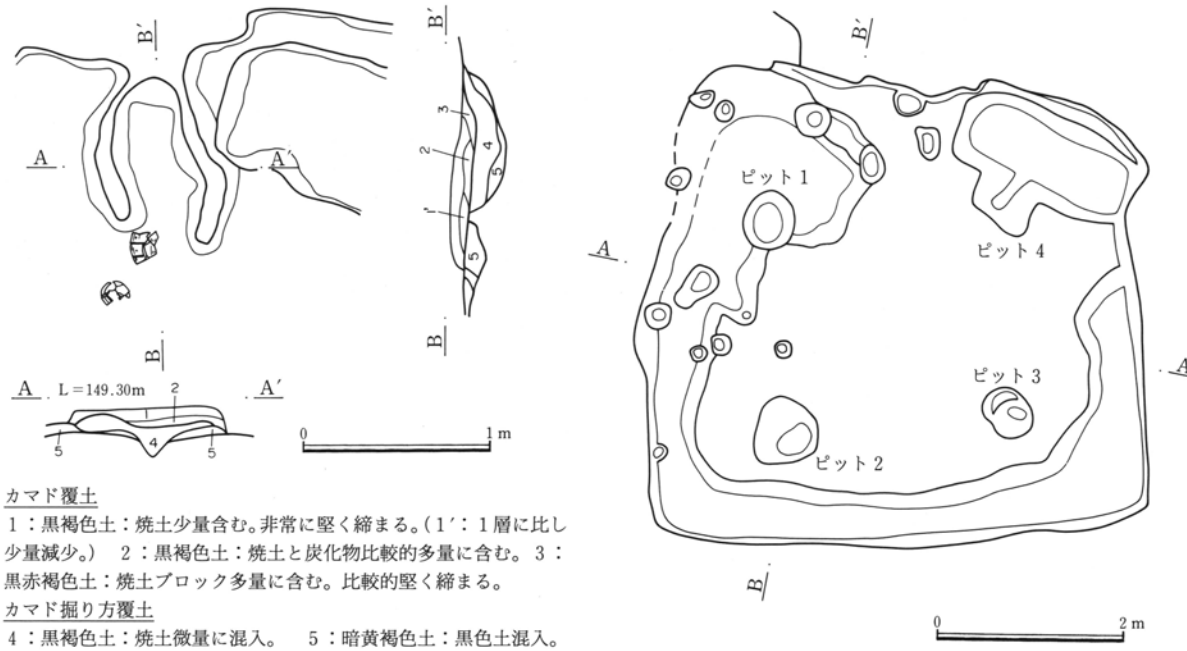
一方覆土中からは土師器甕を中心に、７世紀代の土師器坏（8,14）や土師器甕（10）、６世紀後半期の土師器甑（9）、そしてこも編み石（11,12）や、縄文期のスクレイパー（13）なども見られた。

以上の点から本住居は７世紀前半期で、少なくも７世紀後半までは痕跡も利用されたと判断される。

規模　長軸：526cm　短軸：490cm　深さ：25cm

カマド　幅：84cm　奥行き：85cm　　左袖　幅：24cm　長さ：82cm　高さ：７cm　　右袖　幅：31cm　長さ：97cm　高さ：５cm　　燃焼部　径：24×70cm　深さ：５cm

掘り方　ピット１　径：60×35cm　深さ：61cm



カマド覆土
１：黒褐色土：焼土少量含む。非常に堅く締まる。（１′：１層に比し少量減少。）　２：黒褐色土：焼土と炭化物比較的多量に含む。３：黒赤褐色土：焼土ブロック多量に含む。比較的堅く締まる。
カマド掘り方覆土
４：黒褐色土：焼土微量に混入。　５：暗黄褐色土：黒色土混入。

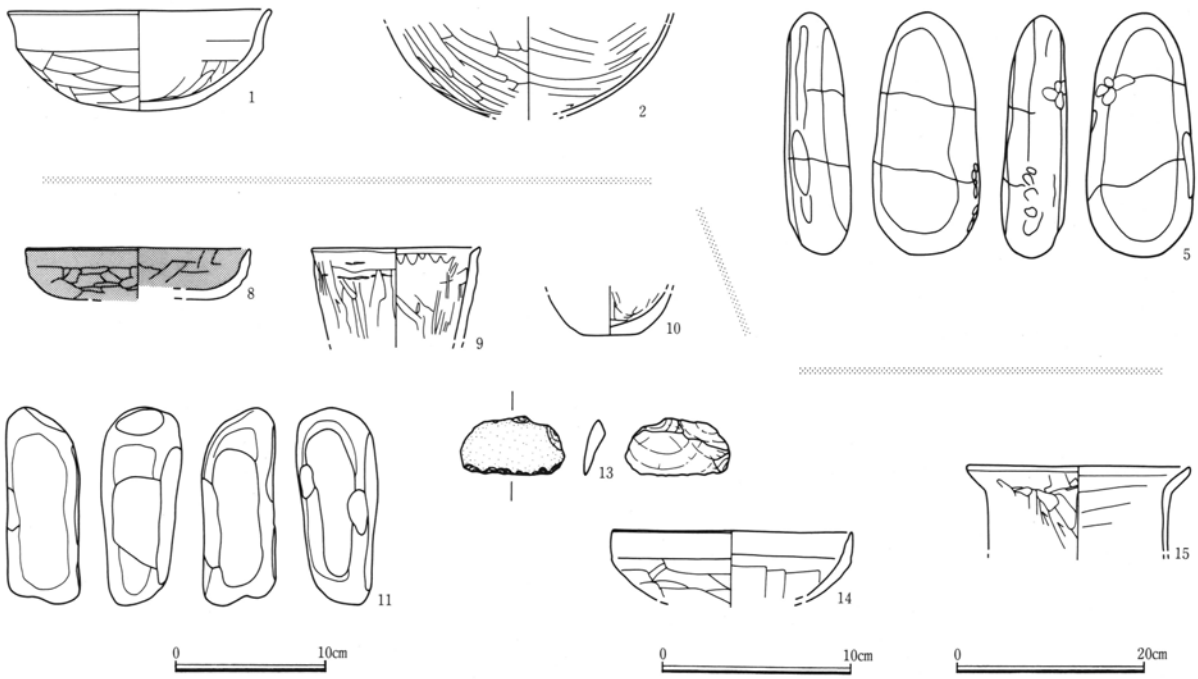
第97図　Ｈ―43号住居カマド及び掘り方

ピット２　径：72×66cm　深さ：18cm　　ピット３　径：57×44cm　深さ：46cm　　ピット４　径：68×42cm以上　深さ：57cm

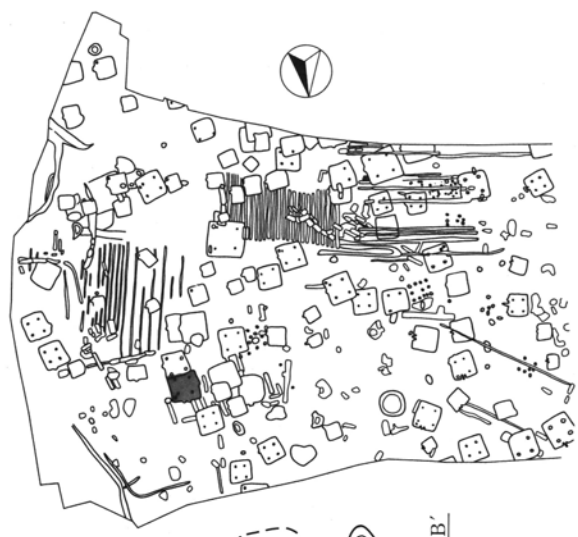
構造　本住居は方形のプランを呈し、幅43～94cm、深さ10～18cmを測る周溝状の掘り込みと所々にピット状の掘り込みを残す掘り方を有する。床はこれを黒褐色粘質土等で埋め戻して造り出している。

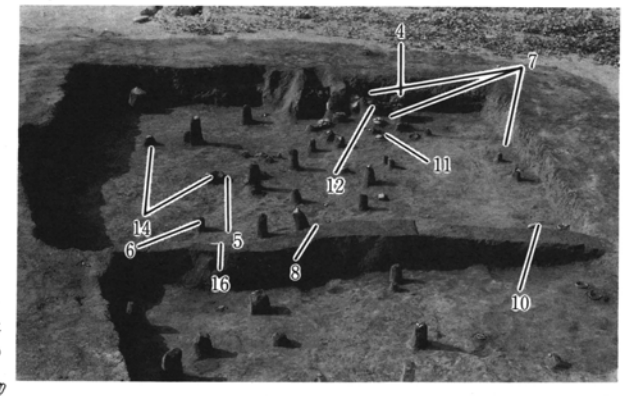
カマドは浅い掘り方を持ち、黒褐色土と暗褐色土でこれを埋め戻し、袖を造っている。

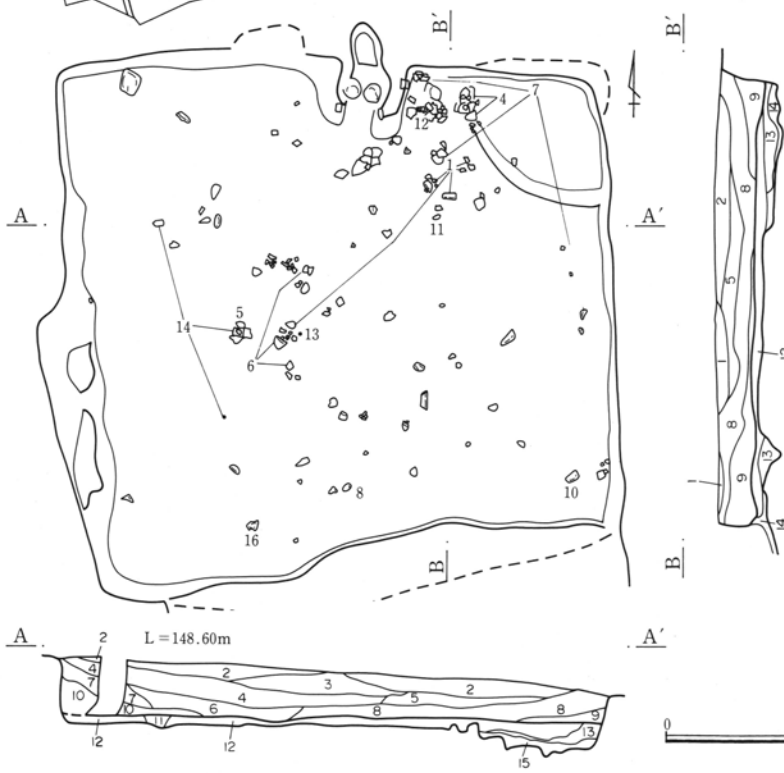
また床面では貯蔵穴・柱穴は確認されなかったが、掘り方のピット１～４が、位置的に見て或る時期の柱穴であった可能性を持っている。



第98図　Ｈ―43号住居出土遺物







住居覆土
1：褐色土主体。　2：暗褐色土主体。　3：暗褐色土主体。黒味強い。　4：暗褐色土主体。　5：暗褐色土主体。　6：暗褐色土：ローム粒、ローム・黒色土ブロック多く含む。　7：褐色土主体。　8：褐色土：ローム粒多く含む。　9：暗黄褐色土：ローム粒多量に含む。　10：暗黄褐色土：ローム粒多く含む。
貼り床
11：褐色土：ローム・黒色土ブロックやや多く含む。やや良く締まる。　12：暗黄褐色土：ローム主体。褐色土やや多く含む。大変堅く良く締まる。
住居掘り方覆土
13：褐色土：ローム多量に含む。　14：暗黄褐色土：くすんだローム粒主体。　15：黄褐色土：明るいローム粒層。地山に似るが、締まり悪い。

第99図　Ｈ－45号住居

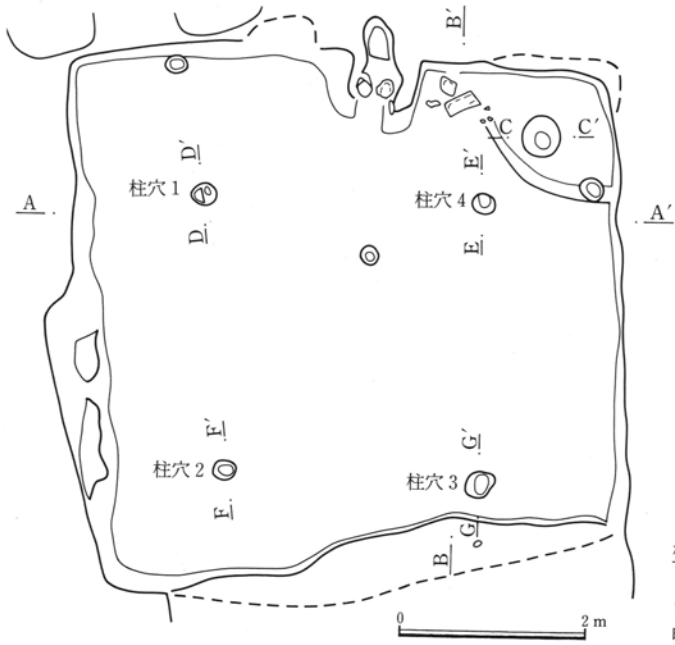
Ｈ－45号住居（古墳時代後期．第99～102図．図版21・64～65・92）

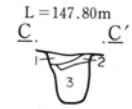
概要　本住居はＢ区北東部の土合川に落ちる斜面手前の区域に位置する、Ｂ区に於いては大型に属する竪穴住居跡である。上位には耕作溝等が入り、南側は南接するＨ－46号住居に切られて壊されている。

本住居の出土遺物は比較的多かったが、このうち本住居に伴うと判断されるものには、６世紀後半期の特徴を示すものを中心とする６世紀代の土師器の甕（5、3,4,6,7,2）と胴張甕（1）の他、手捏ね土器（8）やこも編み石（9～11）も見られた。

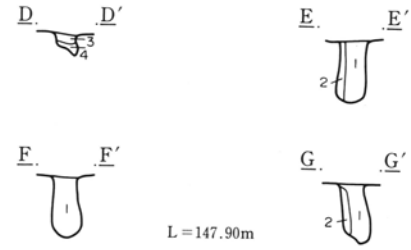
一方、覆土中の遺物は古墳時代後期の土師器甕を中心に該期の土師器の甑(12)や坏(13)、胴張甕(14)の他、こも編み石（15）や、奈良・平安時代の土師器甕や縄文時代の石器（16）なども見られた。

以上の出土遺物の所見から、本住居は６世紀後半の所産と判断される。また覆土中の遺物から、本住居は廃棄後比較的早い段階から埋没が始まり、かなり長期の間その痕跡が窪地として残されて、遺物の投棄に利用されていたことが窺えるのである。





貯蔵穴覆土（やや締まり悪い。）
１：暗黄褐色土：ローム粒やや多く含む。　２：暗黄褐色土：ローム粒、明るいロームブロック多く含む。　３：暗黄褐色土：汚れたローム粒主体。黒色土等僅かに混入。



柱穴覆土
１：褐色土：ローム粒多く含む。　２：暗黄褐色土：明るいローム粒主体。　３：暗黄褐色土：ロームやや多く含む。　４：明黄褐色土：明るいやや砂質のローム粒主体。

カマド覆土
１：暗黄褐色土：ローム粒等僅かに含む。良く締まる。（１′：１層に比し締まり僅かに劣る。）　２：暗褐色土主体。３：暗褐色土主体。（３′：色調やや黄味を帯びる。　３″：焼土粒の混入多く、やや赤味帯びる。）　４：暗黄褐色土：ローム粒多量含む。良く締まる。５：赤褐色土：焼土中ブロック主体。（５′：５層に比し、やや焼土ブロックの粒径小。）　６：暗赤褐色土：焼土粒主体。（６′：６層に比し焼土粒の割合低く、代わりにローム粒含む。）
カマド掘り方覆土
７：赤褐色土：焼土粒主体。　８：暗赤褐色土：焼土ブロック多く含む。　９：褐色土：褐色土粒と灰褐色土粒の混土主体。　10：暗褐色土：ローム粒と暗褐色土粒主体の混土。　11：灰褐色土：夾雑物僅か。
住居貼り床
12：Ｈ―45号住居掘り方覆土―12層に似るが、褐色土の割合高く、焼土・炭化物粒僅かに含む。
住居掘り方等覆土
13：褐色土：ロームやや多く含む。　14：暗黄褐色土：明るいローム粒層主体。　15：Ｈ―45号住居掘り方覆土―13層に同じ。

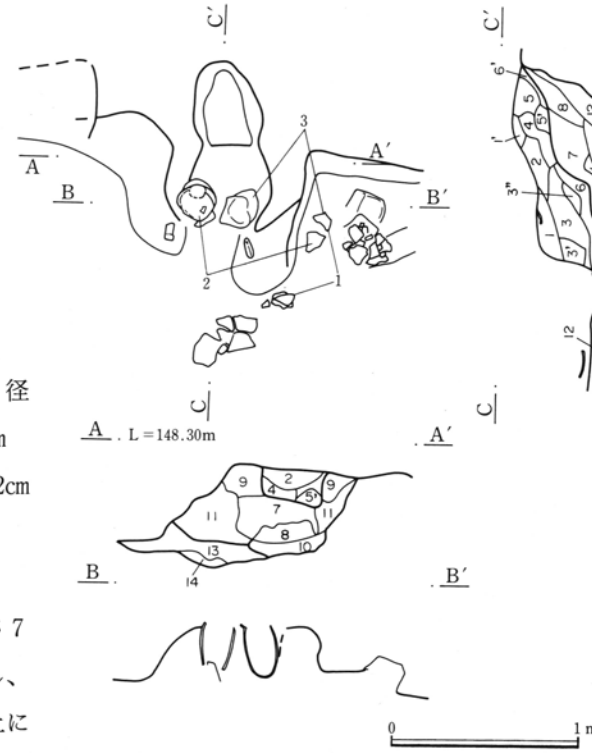
規模　長軸：616cm　短軸：578cm以上　深さ：64cm　カマド　幅：101cm　奥行き：122cm　左袖幅：33cm　長さ：73cm　高さ：49cm　右袖幅：30cm　長さ：77cm　高さ：43cm　燃焼部　径：48×52cm　深さ：5cm　煙道　幅：35cm　長さ：44cm

柱穴１　径：24×23cm　深さ：24cm　柱穴２　径：23×21cm　深さ：67cm　柱穴３　径：29×28cm　深さ：89cm　柱穴４　径：25×22cm　深さ：62cm

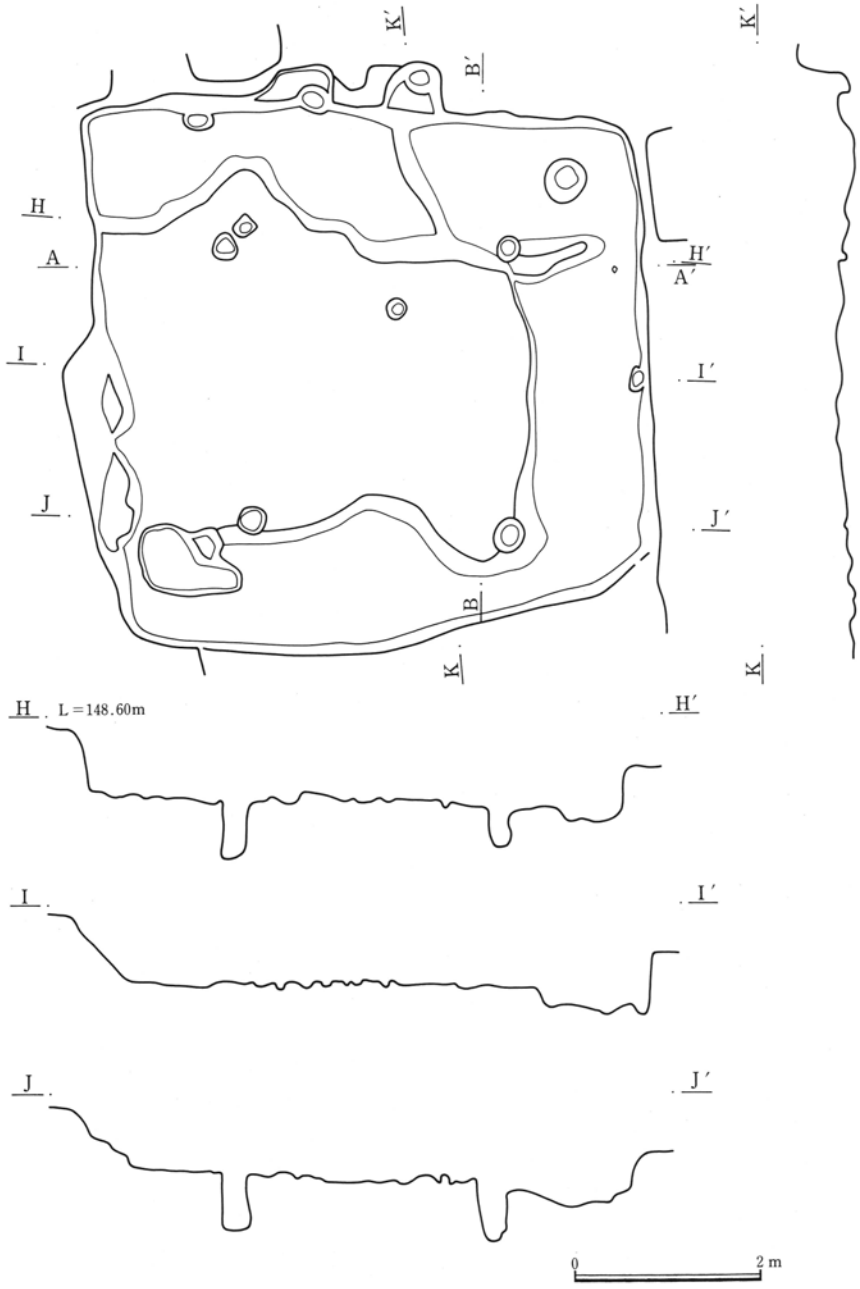
貯蔵穴　径：42×40cm　深さ：55cm

構造　本住居は方形のプランを呈する。

北－東－南にかけての壁下に幅53～142cm、深さ７～８cm程の周溝状の掘り込みを持つ掘り方を有し、これを暗黄褐色土と黄褐色土で埋め戻し、その上に褐色土或いはロームを主体とする土壌を締め堅めた



第100図　Ｈ―45号住居及びカマド

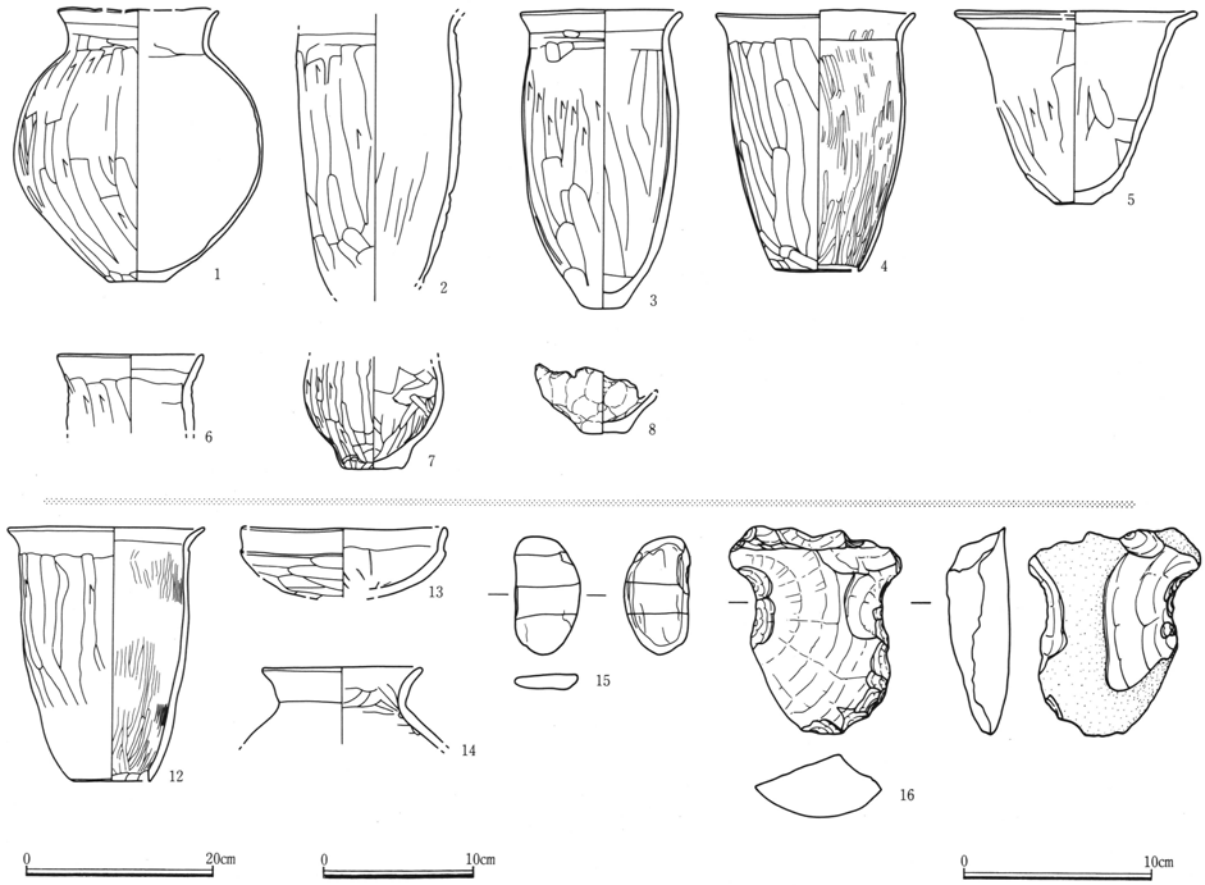


第101図　Ｈ－45号住居掘り方

貼り床を造って床面を整えている。

カマドは北カマドであり、北壁中央よりやや東寄りに造っている。このカマドは、しっかりした掘り方を有し、これを褐色土・灰褐色土等の土で埋め戻して燃焼部と煙道部を造り出している。燃焼部は北壁ラインの内側に限って設けられ、燃焼部の中位やや手前寄りの左右両側に礫を立てて袖材とし、ロームと暗褐色土の混土で袖を造り出している。天井材は確認できなかったが、カマド右側の床面上に見られる礫にその可能性を考えている。本住居のカマドは２つの甕を同時に掛けて使用するタイプのものであったようで、燃焼部の中程には横に並べた土師器の甕２個（2,3）が正位の状態で出土し、右側の甕の底部には支脚と思われる礫が立てて置かれていた。さて、煙道は燃焼部の奥壁に、燃焼面より15cm程高い位置から水平よりやや上向き方向に30cm程掘り進めてから角度を増して掘り進めている。

床面に於いては貯蔵穴・柱穴・ピット等が確認されている。このうち貯蔵穴はカマド右側の住居北東コーナー付近に設けられている。住居北東コーナーの付近は三角形のプランで床面より10cm程掘り下げられており、その中に掘削されている。さて、柱穴は４基確認されたが、何れもそれぞれの壁から140～150cmの位置に設置される。断面観察によると柱穴はほぼ柱痕の太さを示していると判断される。この他、北壁西部の壁面近く、カマド手前の住居中央やや北寄り付近、上述の北東コーナーの落ち込みの南東へり部分に径20cm程、深さ14～30cmのピットが３基見られたが本住居との関係は特定できなかった。



第102図　Ｈ－45号住居出土遺物

Ｈ－46号住居（奈良時代．第103～105図．図版22・65・92）

概要　本住居はＢ区北東部の土合川へ落ちる斜面手前の平坦部に位置する、Ｂ区に於いては中型のものに属する竪穴住居跡である。Ｈ－45号住居と北側で接しこれを切っている。

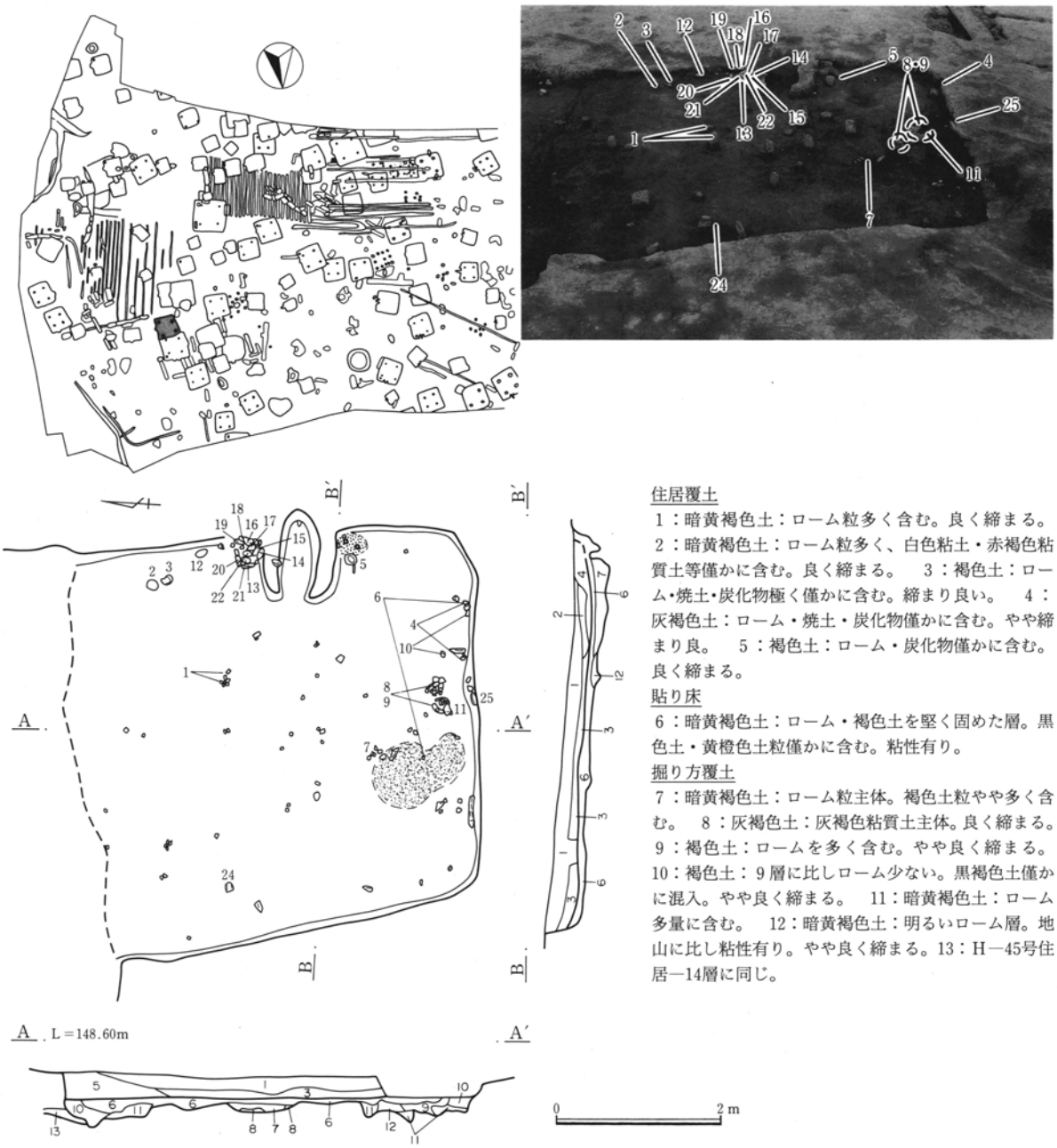
本住居の出土遺物はさして多くなかったが、本住居に伴うと判断されたものには、８世紀前半期の特徴を示す土師器坏（1～7）、西暦800年前後の所産と思われる土師器甕（8）、７世紀後半の所産と判断される土師器の小型甕（9）と鉢（10）がある。

一方、覆土中からは土師器坏・甕を中心に、６世紀後半期の土師器椀（11,23）、或いは砥石（24）やこも編み石（12～22、25・26）などの出土が見られたが、この内こも編み石の多くは壁面に近いカマド左袖外側に掛かるように覆土中からまとまって出土してきているので、本住居に伴うものである可能性がある。また、カマド右袖の外側壁寄りの覆土中には粘土の分布が見られたが、或いは土葺き材である可能性もあるものと思われる。

こうした出土遺物の所見から、本住居は西暦800年前後の所産と判断されるのである。

尚、本住居は炭化材を出土しており所謂焼失家屋と考えられるが、それぞれの炭化材に対する建築材の種別を特定することはできなかった。また炭化材の出土は少なかったことについては、燃焼が良好であったものか、或いは不良であったためなのかは特定できなかった。

規模　長軸：505cm　短軸：490cm　深さ：32cm
カマド　幅：105cm　奥行き：111cm　　左袖　幅：凡そ39cm　長さ：76cm　高さ：11cm　　右袖　幅：35cm　長さ：93cm　高さ：14cm　　燃焼部　径：37×100cm　深さ：３cm
柱穴１　径：71×56cm　深さ：85cm　　柱穴２



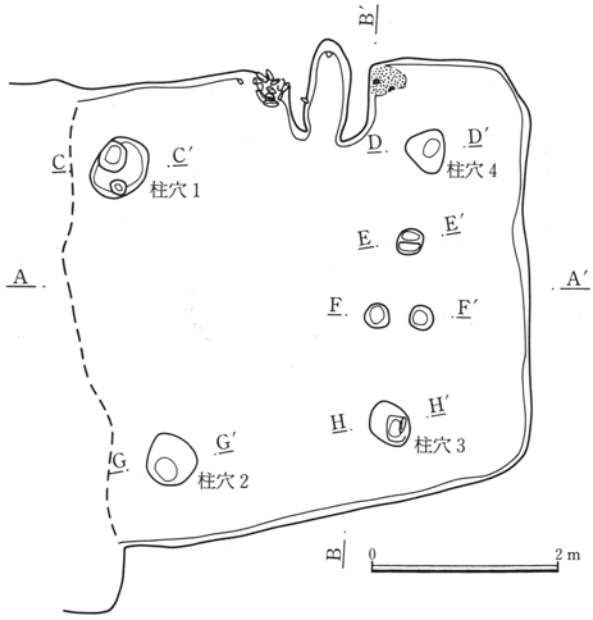
住居覆土
１：暗黄褐色土：ローム粒多く含む。良く締まる。２：暗黄褐色土：ローム粒多く、白色粘土・赤褐色粘質土等僅かに含む。良く締まる。　３：褐色土：ローム・焼土・炭化物極く僅かに含む。締まり良い。　４：灰褐色土：ローム・焼土・炭化物僅かに含む。やや締まり良。　５：褐色土：ローム・炭化物僅かに含む。良く締まる。
貼り床
６：暗黄褐色土：ローム・褐色土を堅く固めた層。黒色土・黄橙色土粒僅かに含む。粘性有り。
掘り方覆土
７：暗黄褐色土：ローム粒主体。褐色土粒やや多く含む。　８：灰褐色土：灰褐色粘質土主体。良く締まる。９：褐色土：ロームを多く含む。やや良く締まる。10：褐色土：９層に比しローム少ない。黒褐色土僅かに混入。やや良く締まる。　11：暗黄褐色土：ローム多量に含む。　12：暗黄褐色土：明るいローム層。地山に比し粘性有り。やや良く締まる。13：Ｈ―45号住居―14層に同じ。

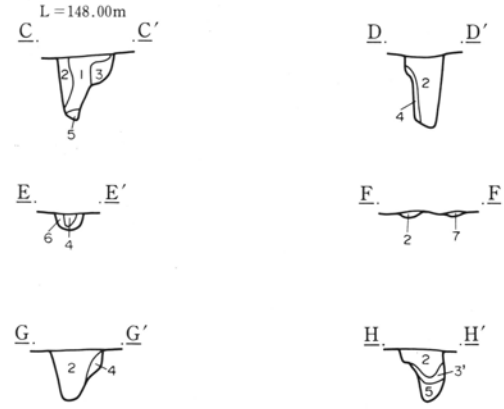
第103図　Ｈ―46号住居

径：54×52cm　深さ：70cm　　柱穴３　径：51×40cm　深さ：68cm　　柱穴４　径：47×44cm　深さ：86cm　床下土坑　径：112×85cm　深さ：13cm

構造　本住居はＨ－45号住居との切り合い関係にある北壁がやや乱れるため、その形状は多少不整形であるが、凡そそのプランは隅丸方形を呈するものと思われる。

掘り方を有し、掘り方には幅78～186cm、深さ10cm以下の周溝状の掘り込みがほぼ一周し、南壁際には幅40cm以下のテラス状の掘り残しを持ち、中央の掘り残し部には浅い床下土坑を持っている。この掘り方を灰褐色土・暗黄褐色土等で埋め戻し、その上面にロームと褐色土を堅く締めた貼り床を貼って床面を整えている。





柱穴・ピット覆土

１：褐色土主体。やや良く締まる。　２：褐色土主体。やや良く締まる。　３：褐色土：黄味帯びる。ローム粒多量に含む。やや締まり悪。（３′：３層に似るが、ロームブロック・黄橙色砂質粒僅かに混入。）　４：暗黄褐色土：汚れたローム主体。良く締まる。　５：黄褐色土：ローム主体。やや締まり悪。　６：黄褐色土：明るいローム粒主体。やや締まり悪。　７：暗褐色土主体。良く締まる。

カマド覆土

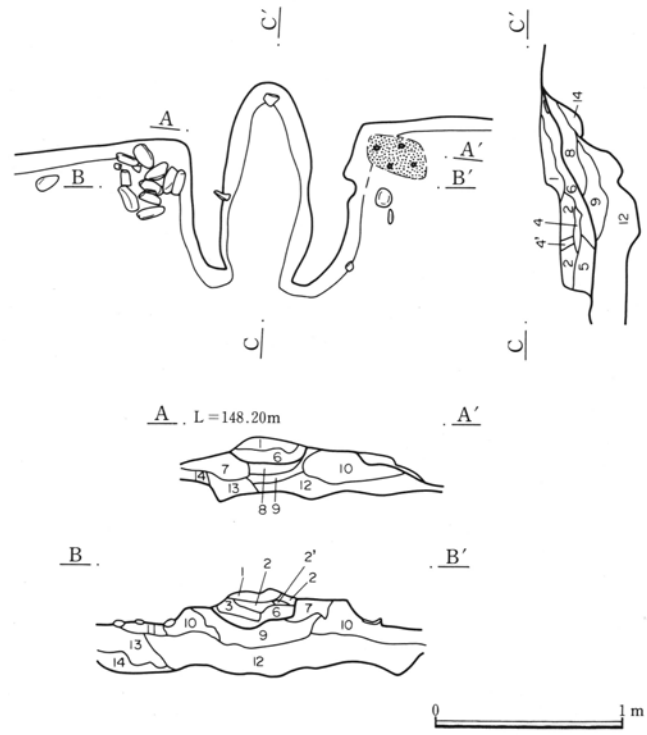
１：暗灰褐色土の細粒層主体。　２：暗黄褐色土の細粒主体。（２′：植物痕か。）　３：暗褐色土主体。　４：赤褐色土：焼土粒・ブロックやや多く含む。（４′：４層に似るがやや灰色がかる。）　５：暗黄褐色土主体。　６：暗赤褐色土：焼土粒やや多く含む。

カマド掘り方・住居掘り方覆土

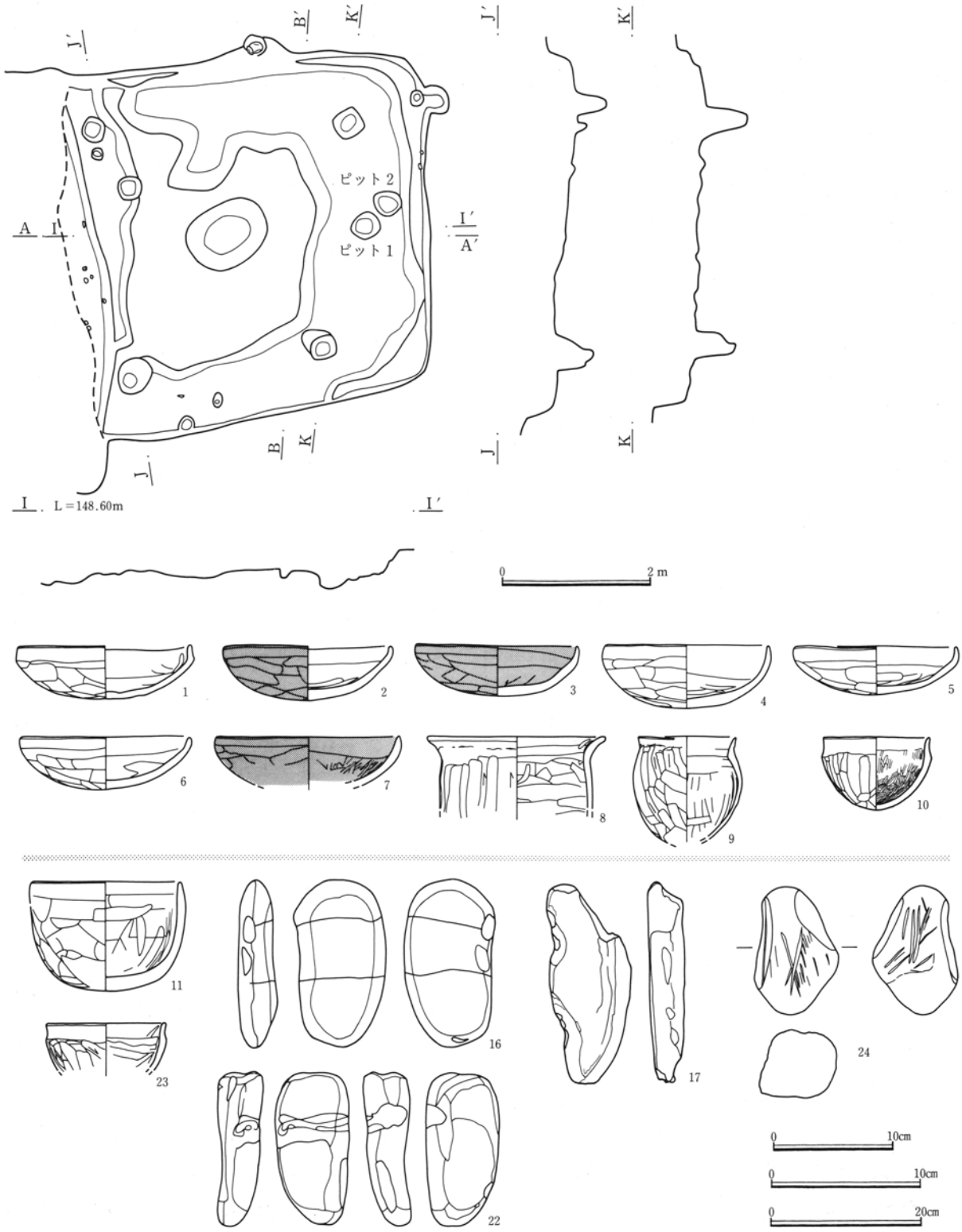
７：暗茶褐色土：黒褐色土粒・焼土粒やや多く含む。　８：暗赤褐色土主体。　９：赤褐色土：焼土粒ぎっしり詰まる。　10：灰褐色土主体。　11：褐色土主体。　12：暗褐色土：ロームやや多く含む。　13：褐色土主体。　14：暗黄褐色土：くすんだローム粒層。

カマドは東カマドで、掘り方を有し、赤褐色土や暗褐色土で埋め戻して燃焼面を造り出している。燃焼面は焚き口から35cm付近をピークに浅く窪み、それより奥は徐々に高くなって、煙道に至るようである。袖には特に袖材等は用いていないが、燃焼面構築の続きとして暗茶褐色土や灰褐色土で造っている。

床面に於いて柱穴４基を確認した。これらの柱穴は何れもしっかりした掘り方を持っていたが、断面観察から柱材の径は20cmと推定された。また南半部の柱穴３と柱穴４の間には径15cmで、南北に並ぶ深さ４cm程の窪み状のピット２基と、深さ27cm程のピット１基が認められた。特定はできないが、本住居に伴う何らかの構造物と思われる。尚、貯蔵穴は認められなかった。

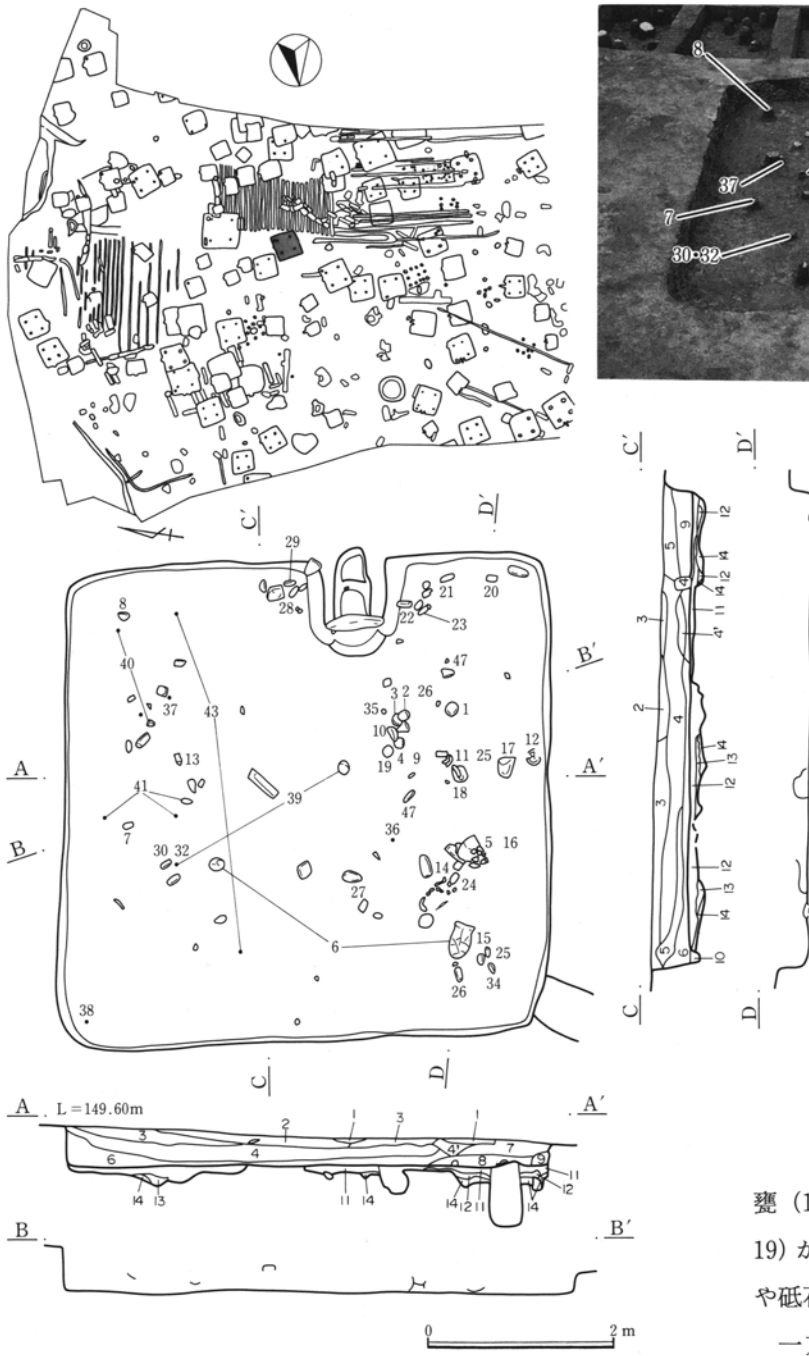


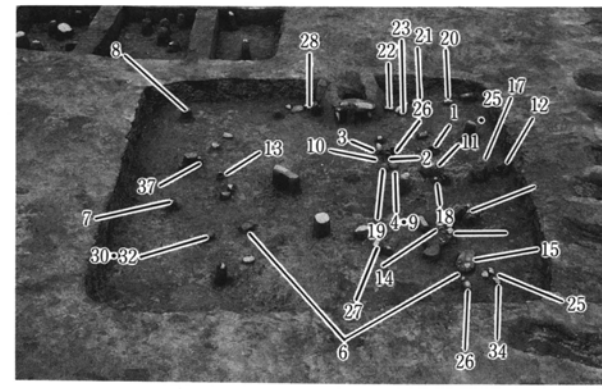
第104図　Ｈ―46号住居及びカマド



第105図　Ｈ―46号住居掘り方及び出土遺物

さて、前述したように本住居は焼失家屋であった。炭化材の遺存は少なかったが、これは燃焼の度合いが激しいか、焼却の早い段階で鎮火しているケースで見られる。しかし乍ら何れのケースでも、土葺き屋根に伴うものと判断されるので本住居の屋根構造は土葺き屋根であったと推定される。





撹乱土層
1：暗褐色土：As-A混入。
住居覆土（概ね良く締まる）
2：暗黄褐色土：ローム多く含む。
3：暗褐色土主体。　4：暗褐色土主体。
（4′：4層より褐色粘質土小ブロック多）5：暗褐色土：ローム粒やや多く含む。6：暗黄褐色土：ローム粒多量に含む。7：褐色土主体。　8：褐色土：7層に比しローム粒多く含む。9：暗黄褐色土：ローム粒主体。粘性強。10：褐色土：灰黄褐色土粒主体。締まり悪。
貼り床
11：暗黄褐色土：ロームを中心に褐色土粒等僅か。堅くしっかり締められる。
12：暗黄褐色土：ロームやや多く混入。良く締まる。
掘り方覆土
13：暗黄褐色土：灰色がかったローム粒主体。やや良く締まる。　14：黄褐色土：明るいローム粒主体。13層土粒やや多く含む。やや良く締まる。

第106図　Ｈ－47号住居

Ｈ－47号住居（古墳時代後期．第106～109図．図版22・65～67・92）

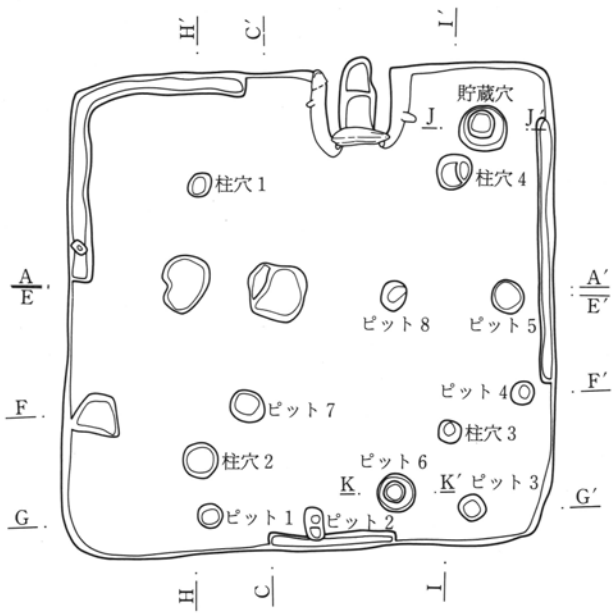
概要　本住居はＢ区中央やや南東よりに位置する遺存状況の比較的良好な中型の竪穴住居跡である。

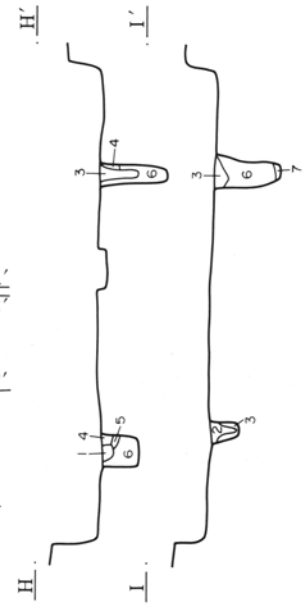
出土遺物のうち本住居に伴うと判断されたものには６世紀後半期から７世紀前半期の特徴を示す土師器の坏（1,2、5、6～9、3）、高坏（10,13、11,12）、甕（14,15）、甑（16、17）、小型甕（18,19）が見られる他、こも編み石（20～31）や砥石（32）も出土している。

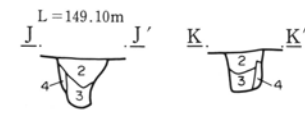
一方覆土中からは、縄文時代の土器（33）や石器（34,35,36,37）、北陸系らしい古式土師(46)、６世紀前半から７世紀後半の土師器坏（39、40，42、41，45、43，44）、こも編み石（47,48）。更に平安期の土器群などが見られた。

これらの出土遺物の状況から、本住居は概ね西暦600年前後の時期の所産と考えられ、７世紀後半期以降に行われ、凡そ平安期頃まで住居の痕跡が窪地として残っていたものと推察される。

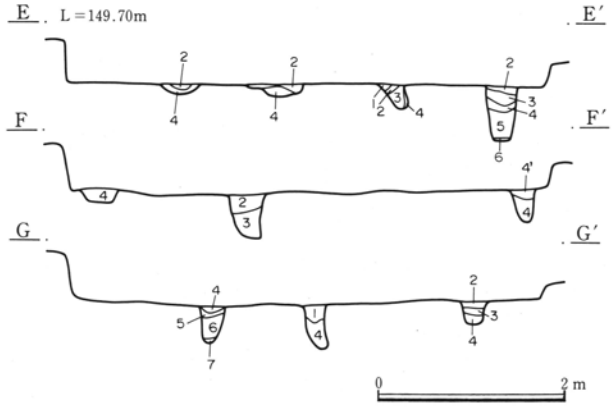
規模　長軸：518cm　短軸：508cm　深さ：48cm





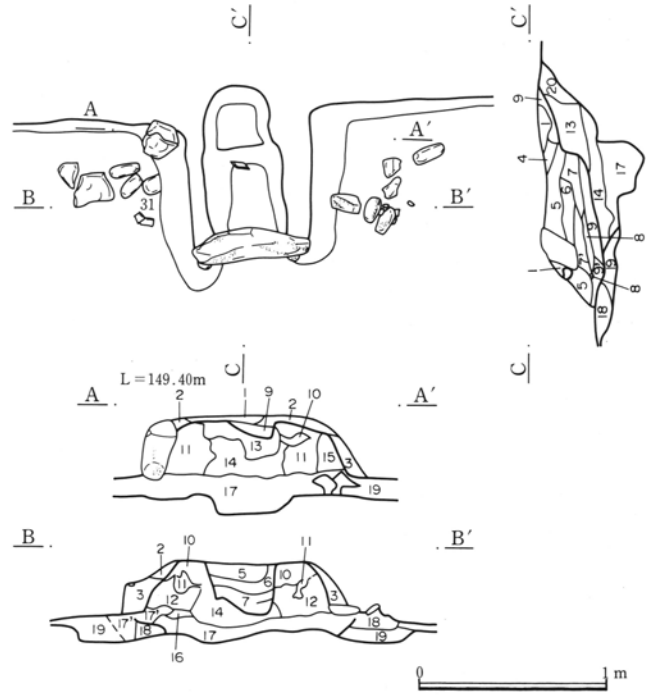


柱穴・貯蔵穴覆土（１～４：粘性有り、５・６：粘性僅か）
１：暗褐色土主体。やや良く締。２：暗褐色土：ローム粒やや多く、やや良く締。　３：褐色土：ローム粒やや多く、やや良く締。４：黄褐色土：明るいローム主体。良く締。　５：黄褐色土：暗いローム粒主体。As-BPやや多く混入。やや締まり悪。６：黄褐色土：暗いローム粒主体。やや締まり悪い。　７：明橙色土：やや粒子の大きいAs-BP層。締まり悪。粘性殆ど無。

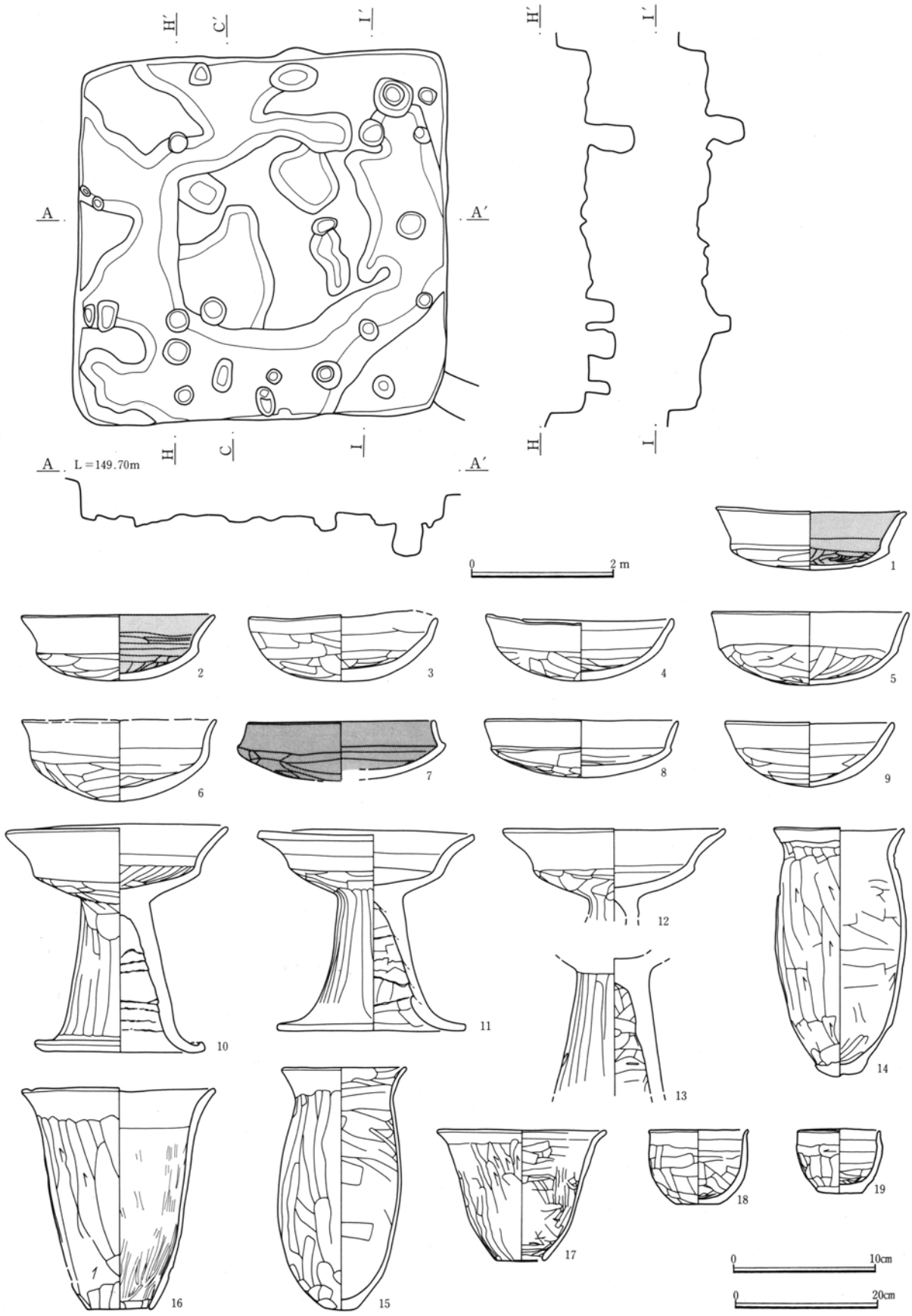


撹乱層土・住居覆土　１：黒色土：As-A混入。　２：褐色土主体。　３：暗黄褐色土主体。
カマド覆土　４：黄褐色ローム主体。　５：暗黄褐色土：ローム粒多し。　６・７：暗黄褐色土主体（７′：やや黒味）　８：赤褐色土／９：黒赤褐色土：焼土多し。（９′：焼土減少。）
袖構築材　10：暗黄褐色ローム粒主体。　11：黄褐色ローム粒主体。堅く締る。12：暗黄褐色ローム粒主体。
カマド掘り方覆土　13：赤褐色土：焼土・ローム粒の混土主体。14：暗赤褐色焼土粒主体。　15：暗黄褐色土／16・19：黄褐色土：ローム主体。　17：暗黒褐色土主体。（17′：17層にローム多量に入。）　18：黄褐色ローム粒層。堅く締まる。　20：黄褐色ローム粒主体。堅く締まる。

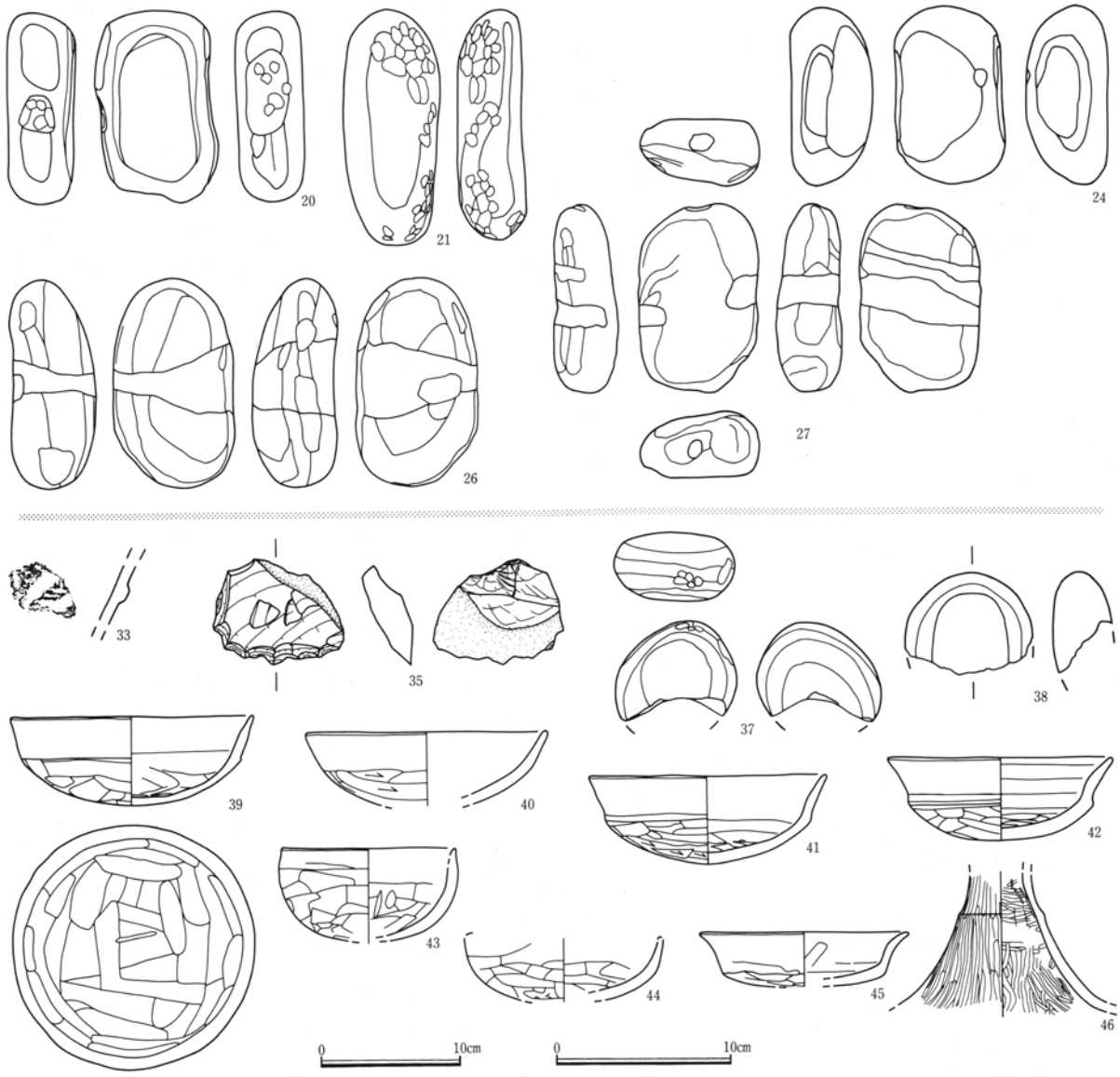
カマド　幅：110cm　奥行き：102cm
左袖　幅：39cm　長さ：84cm　高さ：26cm
右袖　幅：42cm　長さ：80cm　高さ：27cm
燃焼部　径：35×61cm　深さ：７cm
煙道　幅：35cm　長さ：33cm
柱穴１　径：28×24cm　深さ：74cm
柱穴２　径：39×38cm　深さ：45cm
柱穴３　径：25×24cm　深さ：47cm
柱穴４　径：37×36cm　深さ：72cm
貯蔵穴　径：51×49cm　深さ：64cm
ピット１　径：26×25cm　深さ：43cm
ピット２　径：36×22cm　深さ：45cm
ピット３　径：29×28cm　深さ：29cm
ピット４　径：24×24cm　深さ：41cm
ピット５　径：36×35cm　深さ：61cm



第107図　Ｈ－47号住居及びカマド



第108図　Ｈ―47号住居掘り方及び出土遺物



第109図　Ｈ―47号住居出土遺物

ピット６　径：41×40cm　深さ：62cm　　ピット７　径：36×35cm　深さ：57cm　　ピット８　径：31×28cm　深さ：27cm

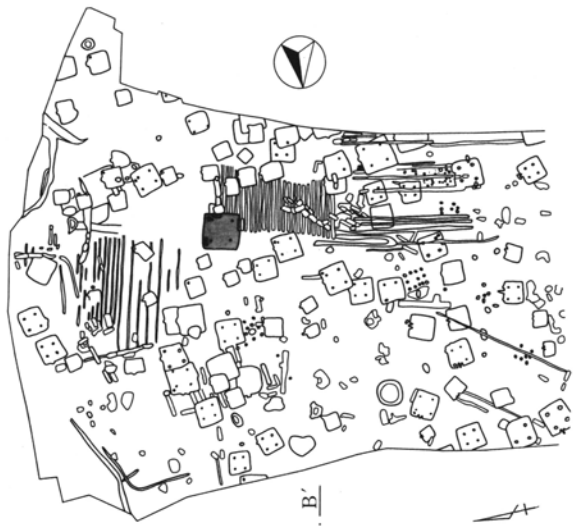
周溝　幅：21cm　深さ：７cm

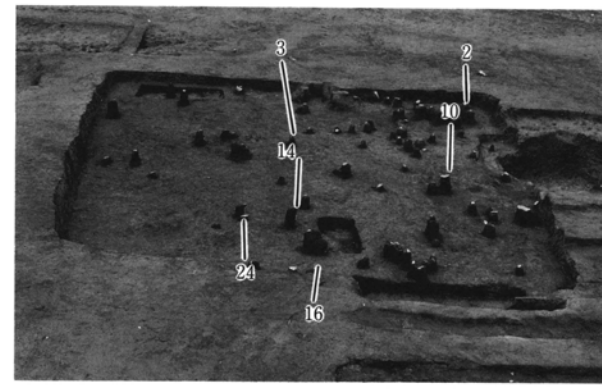
構造　本住居は方形に近いプランを呈している。

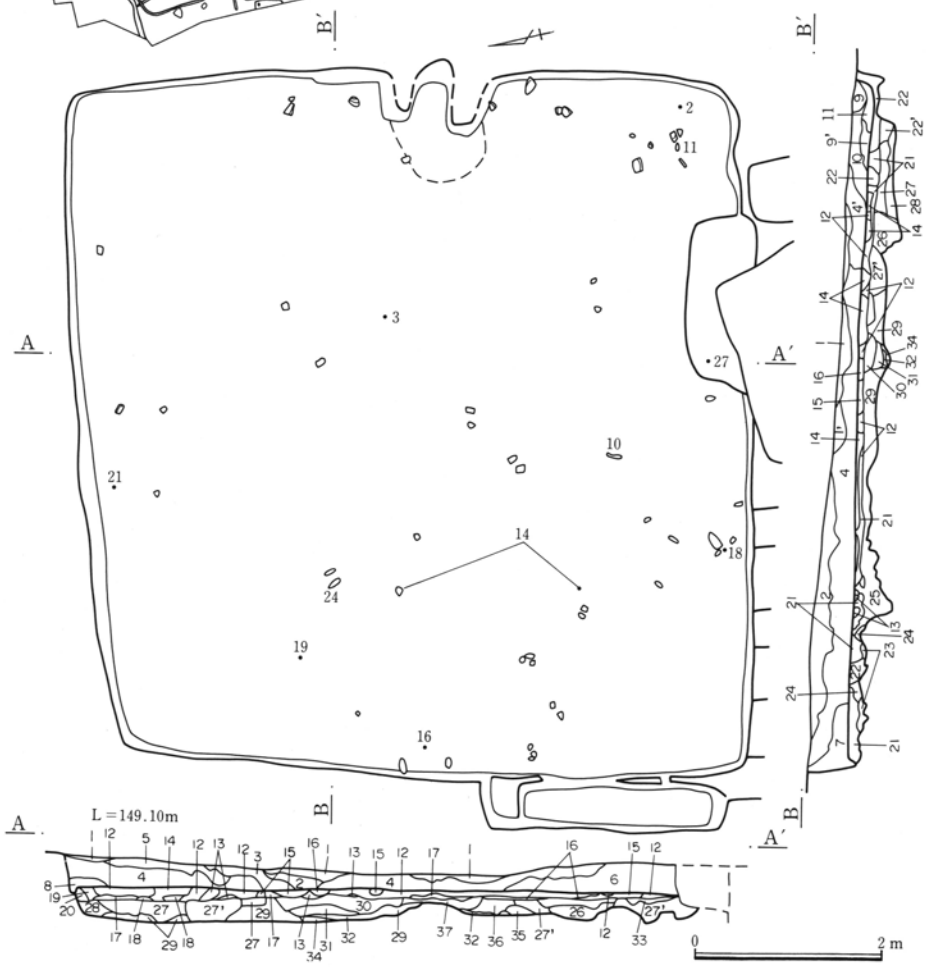
中央に方形様の掘り残しを持ち、周囲に幅116cm以下の溝状の浅い掘り込みを廻らせる掘り方を、黄褐色土・暗黄褐色土で埋め戻し、更にローム等の暗黄褐色土を用いて締めて貼り床を造り出している。

カマドは東カマドで掘り方を有し、ローム等で埋め戻して燃焼部と煙道を造っている。燃焼部は東壁ラインのかなり内側に設定され、その手前より両側に礫を立てて袖材とし、くすんだローム主体の土で袖を造り上げている。袖材の上には河床礫使用の天井石を乗せている。煙道は燃焼部奥壁の高さ10cm程の位置に設けられるが、確認範囲での傾斜は緩い。

主柱穴は４本確認され、その断面観察では柱痕は径10cm程を測る。カマド右側手前には貯蔵穴が掘られるが、基底近くは径30cm程で掘り込まれ、筒状の構造物の存在が想定される。この他、多数の土坑或いはピット状の掘り込みが見られたが、このうちピット１～５は壁際の構造物に伴うものと思われ、ピット６は貯蔵穴に似た構造を持つ。また、北東隅部、南壁東部、西壁中央部際に周溝が見られた。







住居覆土

1：茶褐色土：漸移層上層土。(1′：ローム混入)　2：暗褐色土：黒色土と漸移層上層土ブロックの混土。　3：明褐色土：漸移層ブロックにローム粒混入。　4：褐色土：漸移層中・上層土主体。(4′：ローム混入なし)　5：明褐色土：漸移層土にローム混入する細かいブロック層。　6：5層に似るがブロック径大きい。　7：黄褐色土：ロームに漸移層土混入するブロック層。　8：暗褐色土：黒色土と漸移層土の混土。　9：暗褐色土：漸移層土に黒色土混入するブロック層。(9′：9層にローム粒混入)　10：茶褐色土：4′層にローム・焼土粒混入。　11：黄褐色土：漸移層土主体。

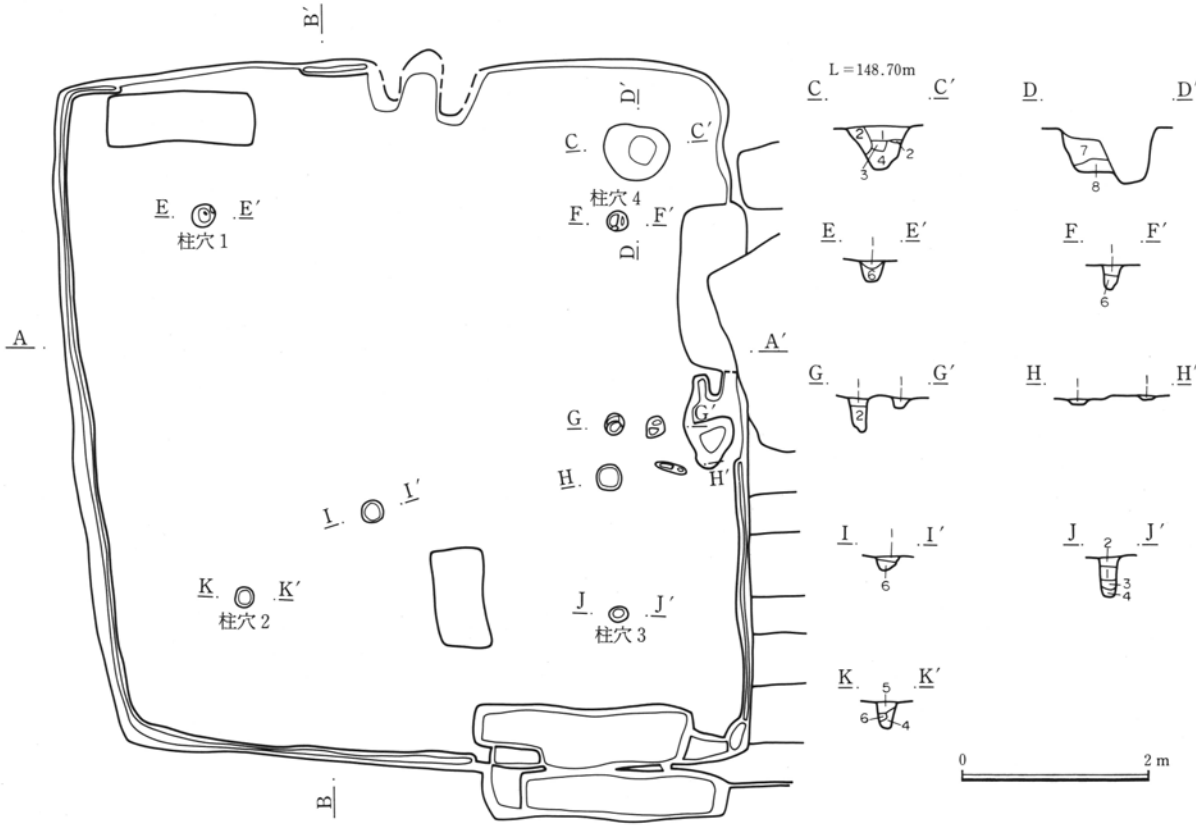
貼り床

12：明褐色土：ロームと漸移層下層土ブロックの混土。やや締まる。　13：暗褐色土：漸移層上層土ブロック。　14：褐色土：漸移層土とロームのブロック層。部分的に焼土粒混入。　15：褐色土：漸移層上層土とロームの混土。　16：茶褐色土：漸移層土ブロック層。17：褐色土：漸移層土にローム混入するブロック層。　18：褐色土：漸移層土ブロックに黒色土とロームブロック混入。

掘り方

19：淡赤褐色土：漸移層土ブロックに黒色土・ローム・焼土粒混入。　20：黒褐色土：黒色土に漸移層土・ロームブロック多く混入。　21：黄褐色土：ローム・漸移層下層土ブロックの混土。黒色土ブロック混入。　22・25：茶褐色土：漸移層土ブロックに黒色土・ロームブロック混入。(22′：黒色土・ロームの混入少ない)23：明褐色土：漸移層下層土ブロック層。　24：明黄褐色土：ロームブロック層。　26：褐色土：黒色土・漸移層土・ロームブロックの混土。　27：淡茶褐色土：26層に似るがローム・黒色土ブロック少量。(27′：黒色土殆ど含まない)　28：暗黄褐色土：暗黄色ロームに黄色ローム混入するブロック層。　29：暗黄褐色土：暗色のロームブロック層。　30：明褐色：黄色・暗黄色ロームブロック群。黒色土ブロック混入。　31：淡茶褐色シルト：淡茶褐色シルトブロックに黒色土・ロームブロック混入。　32：青灰色シルト：青灰色シルトのブロック層。ローム粒僅かに混入する。　33：黄色ロームブロック層。　34：暗黄褐色土：暗色ロームブロック層。若干の黒色土粒混入。　35：褐色土：26層に似るが粒径細かく漸移層上層土ブロック多し。　36：淡茶褐色土：暗色ロームブロックに黄色ロームブロックと若干の青灰色シルト混入。37：褐色土：ロームと漸移層土・黒色土の細かいブロック層。

第110図　H―51号住居



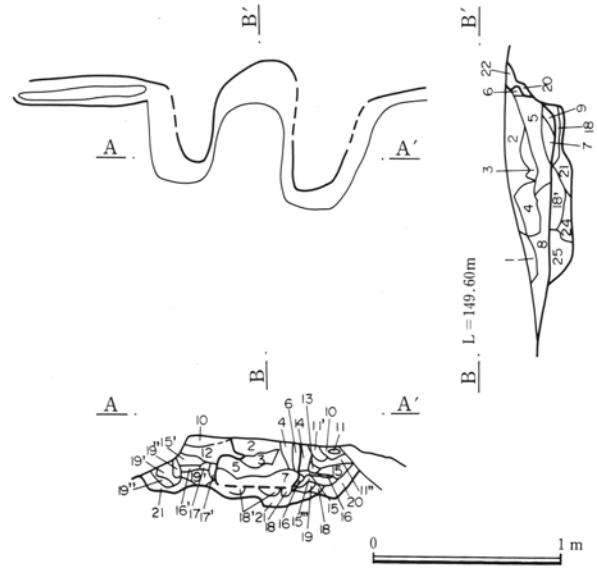
カマド覆土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）
1：暗黄褐色土：漸移層土下層土主体。　2：暗茶褐色土：漸移層土に黒色土・焼土混入。　3：暗灰褐色土：灰色シルトに漸移層土等混入。弱い焼土化。　4：暗黄褐色土：漸移層土にAs-BP・灰色シルト混入。弱い焼土化。　5：淡赤褐色土：焼土化見る漸移層土と焼土の混土。　7：暗灰色土：３層に似るが焼土無し。　8：淡赤茶褐色土：漸移層土に焼土・ローム混入。　9：暗黄褐色土：漸移層土とロームの混土。

袖構築材
6：赤褐色土：漸移層土の焼土層。カマド内壁。　10：暗褐色土：弱い焼土化見る漸移層上層土に焼土粒等混入。　11：淡赤明褐色土：漸移層土に焼土混入。弱い焼土化。(11′：青灰色シルト・黒色土混入。　11″：焼土含み焼土化弱。)　12：淡茶褐色土：漸移層下層土に焼土等混入。部分的に弱く焼土化。　13：淡赤褐色土：11′層の焼土化したもの。　14：暗茶褐色土：10層に似るがローム多く混入。　15：淡赤褐色：漸移層土に焼土・黒色土・青灰色シルト混入。弱い焼土化。(15′：焼土部分的に多く、焼土化進行。　15″：焼土化強い。　15‴：焼土多く、焼土化進行。)　16：明黄褐色土：ロームに焼土化見られる漸移層土・黒色土混入。(16′：明褐色土：ローム少量。)

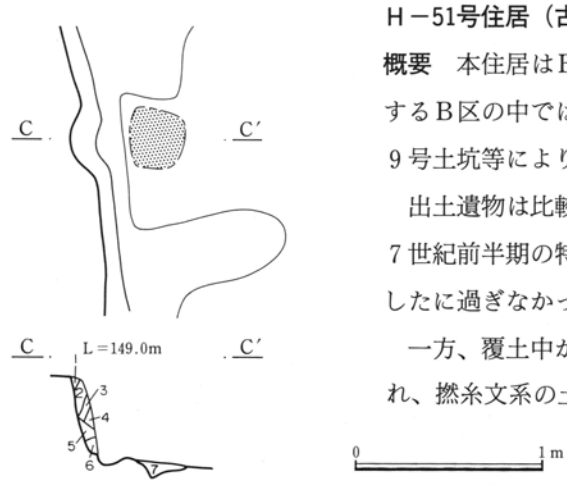
カマド掘り方
17：暗褐色土：弱い焼土化見る漸移層上層土に焼土混入。(17′焼土多し。)　18：淡赤褐色：焼土化見る漸移層土に焼土多く混入。(18′：ローム混入)　19：暗黄褐色土：漸移層土とロームの混土。極く弱い焼土化。(19′：焼土化見ず、黒色土混入。　19″：暗褐色土：漸移層上層土に黒色土・ローム混入。)　20：明褐色土：漸移層土とロームの混土。黒色土・焼土混入。　21：黄褐色土：漸移層土ベース。部分的に焼土ブロック含む。地山か。　22：淡赤茶褐色土：焼土化見る漸移層土。　24：暗褐色土：上層土中心の漸移層土に黒色土・焼土と多くのローム混入。　25：暗茶褐色土：漸移層土主体。

貯蔵穴覆土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）
1：淡茶褐色土：漸移層土に黒色シルト等混入。　2：茶褐色土：漸移層土に乳白色シルト等混入。　3：茶褐色土：漸移層土に焼土等混入。　4：茶褐色土：漸移層土にローム等混入。

柱穴・ピット覆土
1：淡茶褐色土：漸移層土主体。　2：黒褐色土：黒色土・漸移層土主体。　3：黒色土。　4：明褐色土：ローム・漸移層土。　5：暗褐色土：漸移層土ベース。　6：茶褐色土：漸移層土主体。　7：暗褐色土：10層土に更に黒色土混入。　8：暗茶褐色土：漸移層土にローム・黒色土多く混入。



第111図　Ｈ―51号住居及びカマド



旧カマド覆土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）
１：暗褐色土：漸移層上層土ブロックに焼土粒･白色シルト粒混入。弱い焼土化見られる。　２：茶褐色土：弱い焼土化見られる漸移層土に若干のローム・焼土粒混入。　３：明茶褐色土：１層土にロームブロック多く混入。　４：茶褐色土：１層土に暗色ロームブロック多く混入し、ローム粒混入。　５：ロームブロック層。　６：茶褐色土：４層土に似るが、ローム粒・暗色ローム少なく、締まりに欠ける。　７：淡赤茶褐色土：弱い焼土化見られる漸移層土に焼土粒混入。

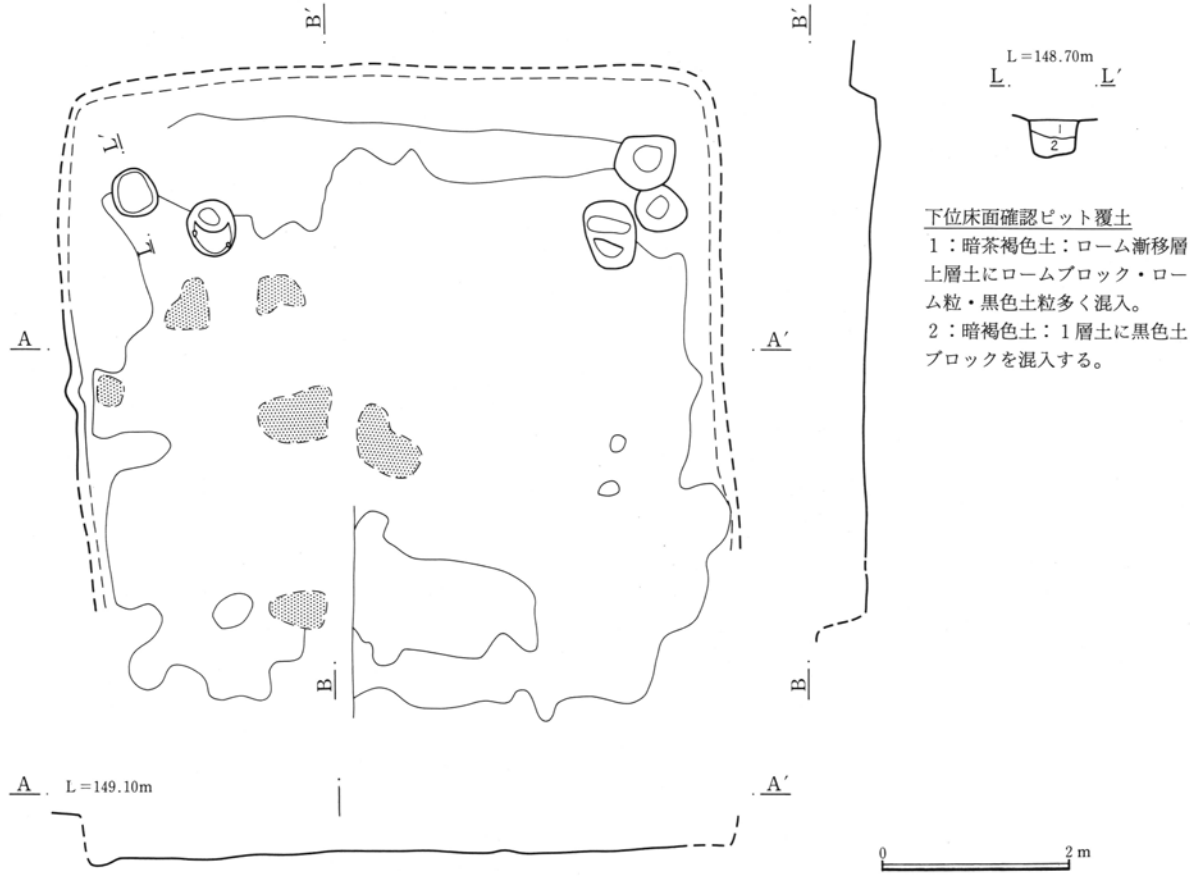
Ｈ－51号住居（古墳時代後期．第110～114図．図版23・67・92）

概要　本住居はＢ区中部の東南寄りＢ区東部の緩斜面手前の平坦部に位置するＢ区の中では大型に属する竪穴住居跡である。住居南部を中心に８・９号土坑等により切られ、一部は深く壊されている。

出土遺物は比較的多かったが、本住居に伴うと判断されたものは僅かに７世紀前半期の特徴を持つ土師器坏２点（1,2）と、土錘１点（3）を出土したに過ぎなかった。

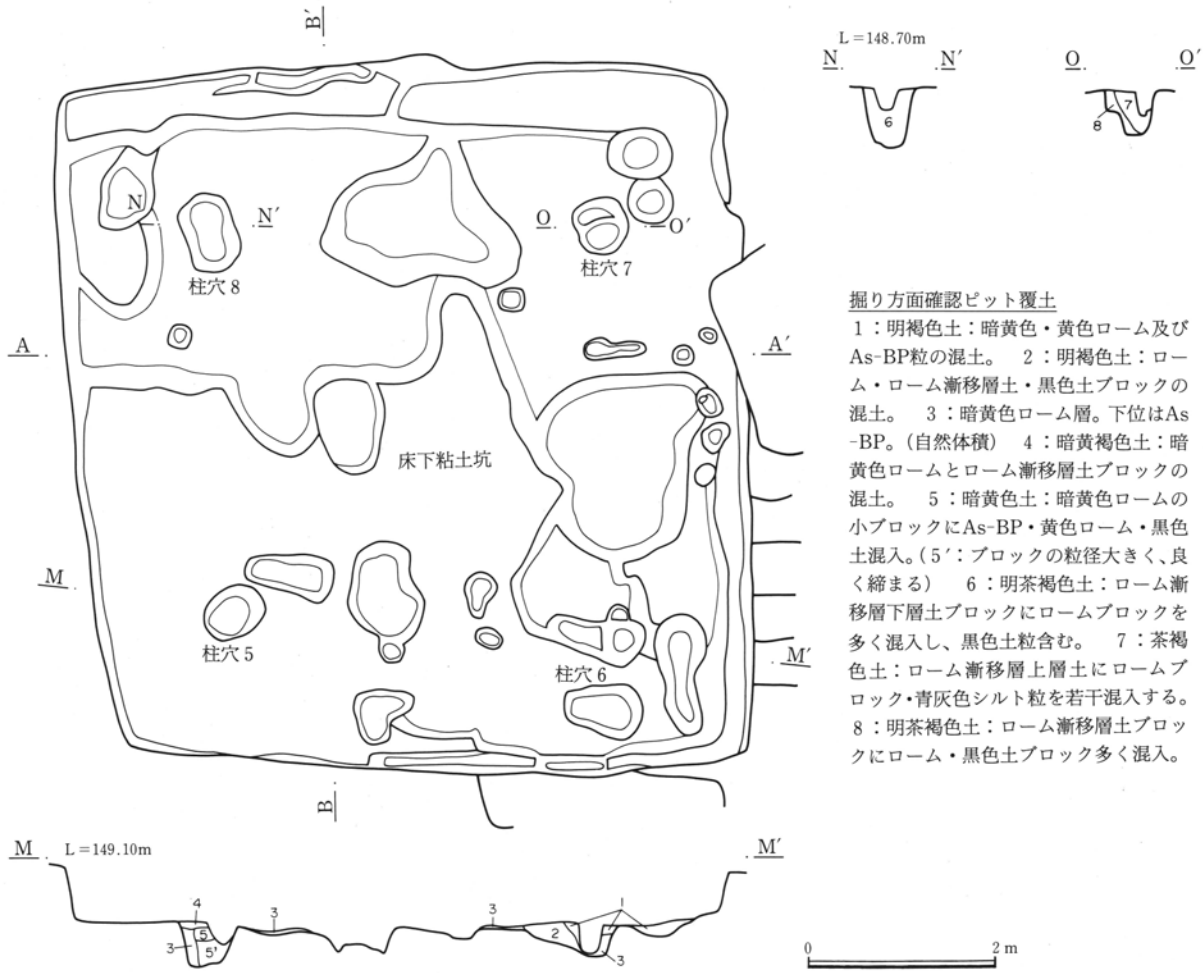
一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕を中心に遺物の出土が見られ、撚糸文系の土器片（4～9）や、磨石（10,12,22）、凹石（11）、打製石斧と思われる石器（27）など縄文時代の遺物や、６世紀後半から７世紀前半期にかけての土師器坏（15、14、13）、そして土師器の甕(16)や甑(17)、土錘（19～21）、こも編み石（23,24）、砥石（26）、火打ち石（25）などが見られ、奈良以降の遺物も見られた。

以上の遺物から本住居は７世紀前半の所産と判



下位床面確認ピット覆土
１：暗茶褐色土：ローム漸移層上層土にロームブロック・ローム粒・黒色土粒多く混入。
２：暗褐色土：１層土に黒色土ブロックを混入する。

第112図　Ｈ－51号住居旧床面



掘り方面確認ピット覆土
１：明褐色土：暗黄色・黄色ローム及びAs-BP粒の混土。　２：明褐色土：ローム・ローム漸移層土・黒色土ブロックの混土。　３：暗黄色ローム層。下位はAs-BP。（自然体積）　４：暗黄褐色土：暗黄色ロームとローム漸移層土ブロックの混土。　５：暗黄色土：暗黄色ロームの小ブロックにAs-BP・黄色ローム・黒色土混入。（５′：ブロックの粒径大きく、良く締まる）　６：明茶褐色土：ローム漸移層下層土ブロックにロームブロックを多く混入し、黒色土粒含む。　７：茶褐色土：ローム漸移層上層土にロームブロック・青灰色シルト粒を若干混入する。　８：明茶褐色土：ローム漸移層土ブロックにローム・黒色土ブロック多く混入。

第113図　Ｈ―51号住居掘り方

断され、奈良・平安期までは窪地としてその痕跡が残されていたことが窺われる。

規模　長軸：740cm　短軸：716cm　深さ：21cm

新カマド　幅：126cm　奥行き：74cm　左袖　幅：40cm　長さ：52cm　高さ：20cm　右袖　幅：48cm　長さ：60cm　高さ：20cm　燃焼部　径：37×50cm　上位床面　柱穴１　径：27×24cm　深さ：40cm　柱穴２　径：21×20cm　深さ：30cm

柱穴３　径：20×18cm　深さ：42cm　柱穴４　径：22×21cm　深さ：24cm　貯蔵穴　径：71×59cm　深さ：48cm

周溝　幅：12cm　深さ：10cm　旧カマド　幅：62cm以上　奥行き：32cm以上　燃焼部　径：31×28cm以上

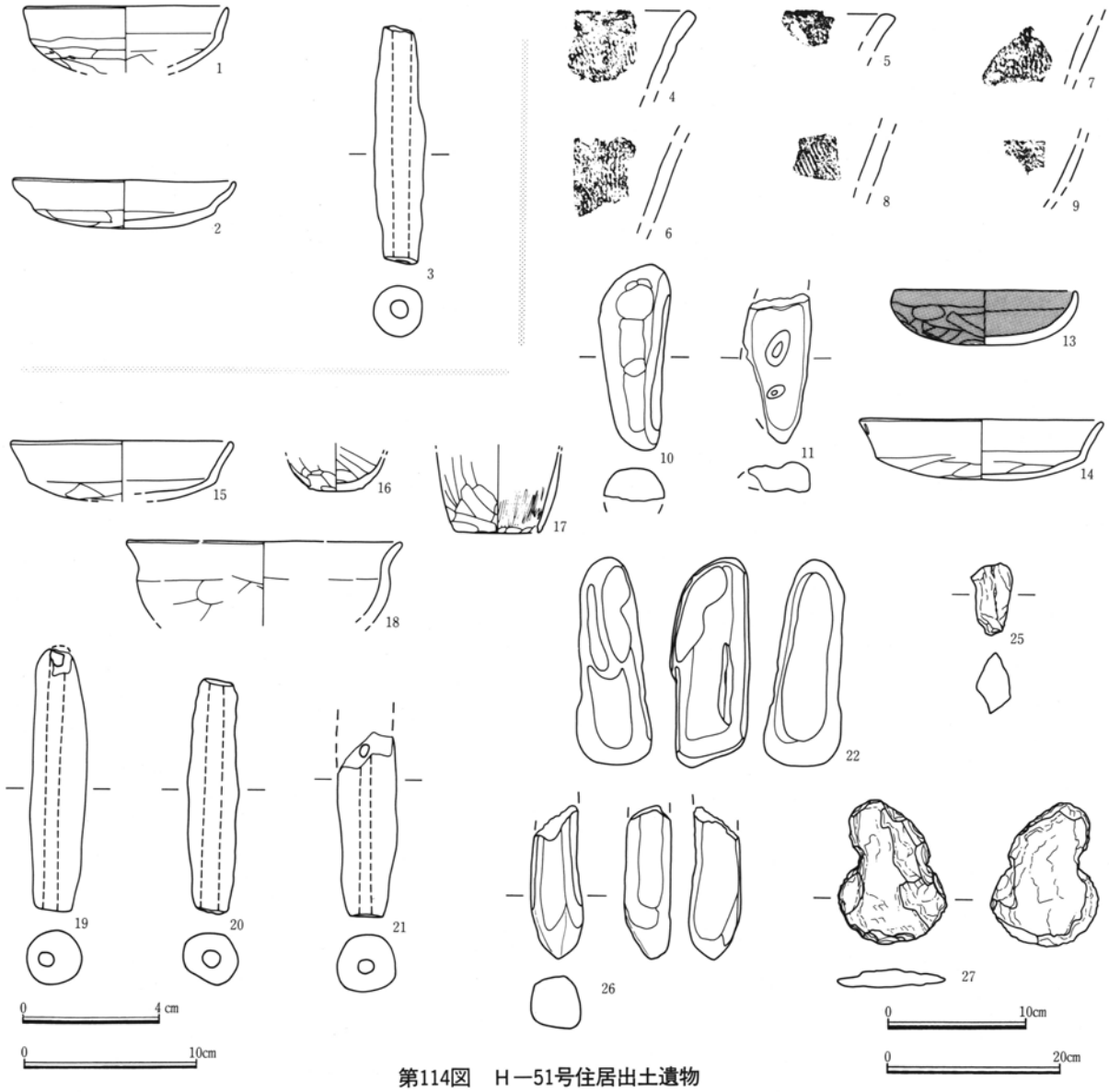
下位床面・掘り方面　柱穴５　径：68×53cm　深さ：49cm　柱穴６　径：51×48cm　深さ：41cm　柱穴７　径：62×56cm　深さ：42cm　柱穴８　径：59×50cm　深さ：49cm　旧貯蔵穴　径：51×46cm　深さ：44cm

床下粘土坑　径：102×65cm以上　深さ：８cm

構造　本住居は方形状のプランを呈している。

掘り方を持ち、全体的規格性は認められなかったが掘り方中央には青灰色シルトが径94×64cmの範囲で貼り付く床下粘土坑を有している。この掘り方をローム等の土壌で埋め戻し、ローム漸移層土等の土壌で貼り床（下位床面）を造っているが、後に下位床面の上にローム漸移層下層土とローム等で床面（上位床面）を貼り直している。

カマドは下位床面では北壁中央付近側に設置されているが、ほとんどの部分が壊されており、燃焼面を中心に北壁に痕跡を残すのみであるが、燃焼面は



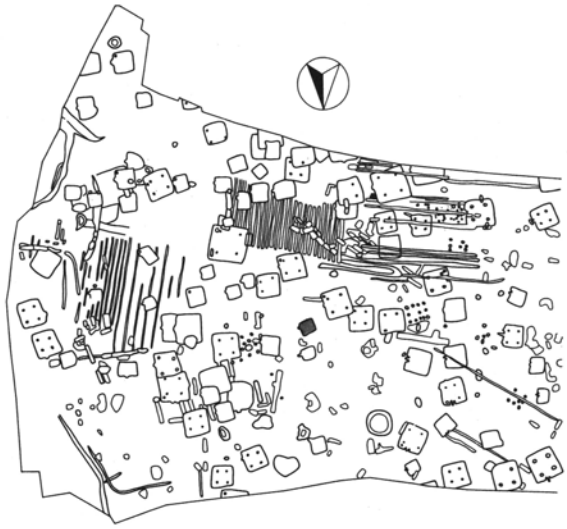
第114図　Ｈ－51号住居出土遺物

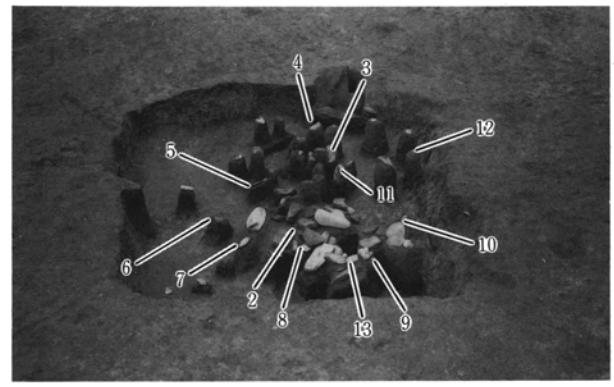
北壁ラインの内側に設置されている。上位床面のカマドは東壁中央に設置され、浅い掘り方を焼土を含むローム漸移層土等で埋め戻して東壁ラインの内側に燃焼面を造っている。燃焼面の両側には袖が造られるが、袖材等は用いず、ローム漸移層土やシルトなどを使って造り上げている。

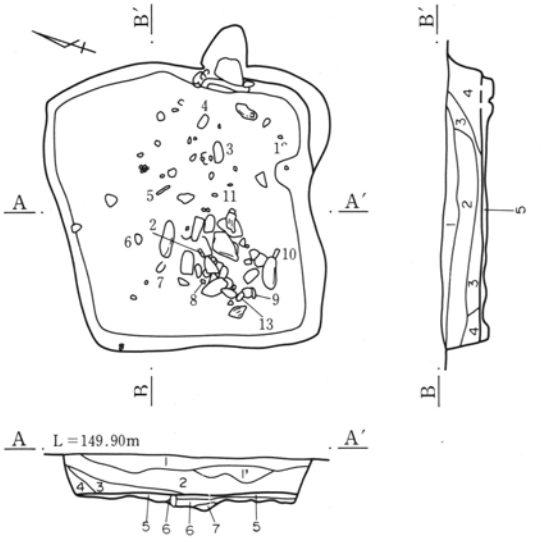
上位・下位床面にはそれぞれ貯蔵穴・柱穴等を確認している。このうち貯蔵穴は上位・下位床面共にそれぞれのカマド手前右側に設けられている。

柱穴については下位床面のものは東側の２基が確認されただけであったが、掘り方に於いては西側のものに相当するピット２基を確認している。柱材については断面観察から20～25cmの径を持っていたものと推定される。一方、上位床面では４基の柱穴を確認しているが、これらは柱痕様であり、柱穴３を除き下位床面の柱穴と重なっている。これらが柱痕であるとすれば、その径は下位床面で想定されたのと同様20cm程を測ることになる。尚、掘り方面に見られた柱穴やピットの状況から何回かの立て替えが行われたことが推定される。

この他、上位床面には幾つかのピットが見られたが、南側中央のものは入り口遺構である可能性を考慮している。また、上位床面の南壁西半～西壁～北東コーナーにかけては周溝が確認されている。

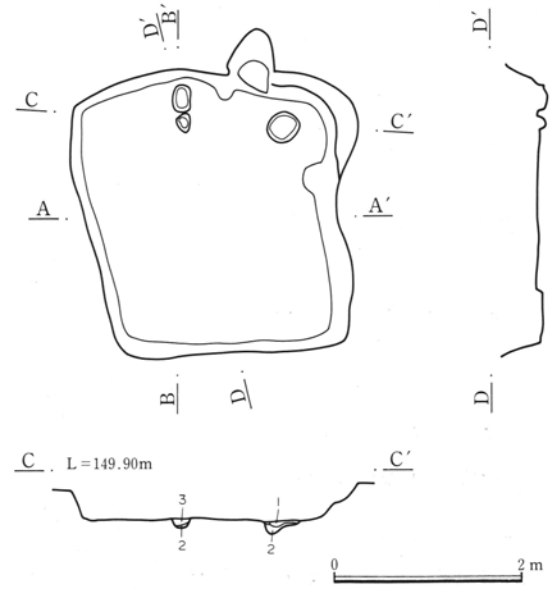






住居覆土（１～３層に向い粒子細かくなり、粘性増す。）
１：褐色土：２層に比し炭化物少量。（1′：色調やや暗い）やや良く締まる。　２：暗褐色土：炭化物極く僅か含む。やや良く締まる。
３：暗褐色土：褐色土小ブロック僅かに含む。やや良く締まる。
４：褐色土：ローム粒・軟らかいローム小ブロック極く僅かに含む。やや良く締まる。
貼り床
５：褐色土：薄く肌色掛かったロームブロックと褐色土の堅く締めた混土。ローム粒やや多く含む。
掘り方覆土
６：黄褐色土：ローム粒主体。僅かに灰褐色土小ブロック含む。やや良く締まる。　７：灰褐色土：ローム粒と灰色の粒子の混ざったものを主体とする。青灰色粘質土僅かに含む。良く締まる。

柱穴覆土
１：褐色土：焼土粒・炭化物粒・ローム粒・ローム小ブロックを僅かに含む。良く締まる。　２：黄褐色土：明るいローム粒主体とする。やや良く締まる。　３：褐色土：ローム粒・ロームブロックをやや多く含む。良く締まる。



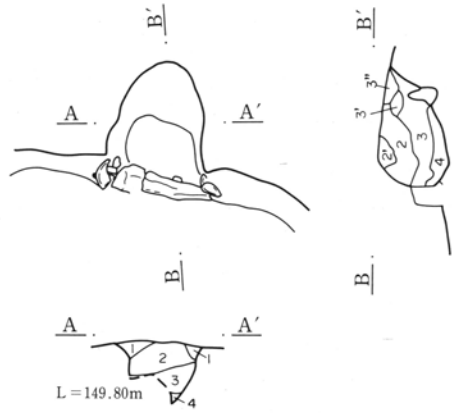
第115図　Ｈ－52号住居

Ｈ－52号住居（古墳時代後期か．第115～117図．図版23～24・68・92～93）

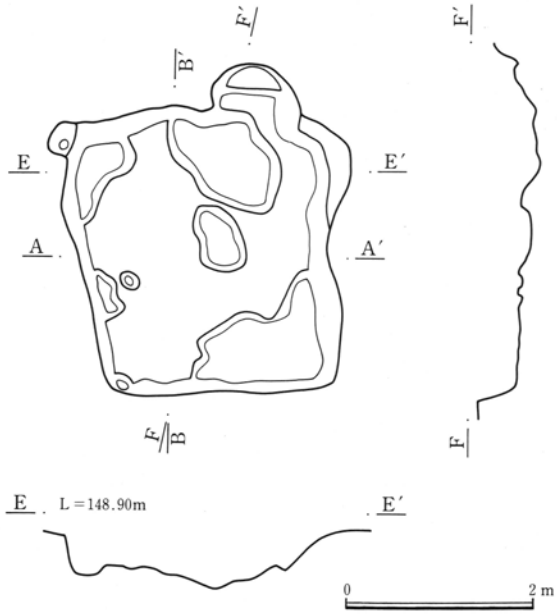
概要　本住居はＢ区中央に位置する小型の竪穴住居跡である。本住居は単独で所在し、遺存状況も比較的良好であったが、西壁際中央付近を掘りすぎてしまっている。

本住居の出土遺物のうち、本住居に伴うと判断されたものは認められなかった。

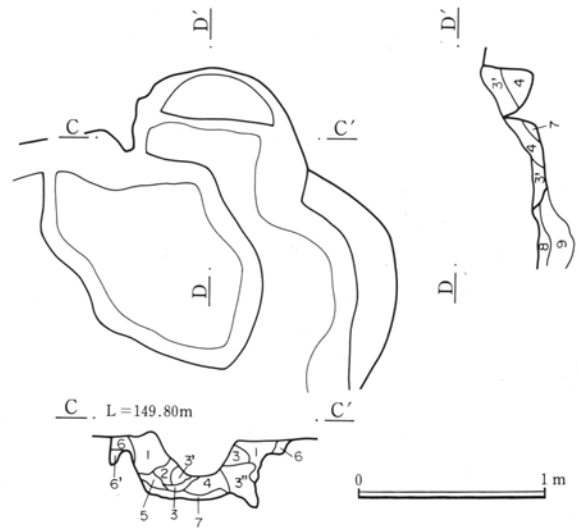
遺物等の出土状況で特徴的だったのは、覆土中からの遺物等の出土が床上20～30cm付近に集中的、且つ面的広がりを持って見られたことである。この集中的な遺物等の分布域には石製品や礫を中心として、古墳時代後期から奈良或いは平安期の土器片も見られ、転用品を含むこも編み石（2,4～13）や須恵



カマド覆土
１：褐色土：粒子細かく、夾雑物少ない。やや良く締まり、粘性やや有り。　２：暗褐色土：僅かの褐色土小ブロックと極く僅かの炭化物粒・ローム粒を含む。やや良く締まり、粘性やや有り。（２′：褐色土小ブロックの割合が高い）　３：暗赤褐色土：径5～8mmのものをはじめとして焼土・焼土粒多く含む。締まりやや悪く、粘性有り。（３′：ローム粒やや多く含む。　３″：３層に近く、やや赤味を強く帯びる。）　４：暗赤褐色土：基本の粒子大変細かく、極く僅かの焼土粒を除き夾雑物をほとんど含まない。締まりやや悪く、粘性強い。



第116図　Ｈ―52号住居カマド及び掘り方



カマド掘り方覆土
１：褐色土主体。　２：暗黄褐色土：ローム粒主体。　３：暗赤褐色土主体。（３′：色調に幾分紫色が強い。　３″：７層に比しローム粒多く軟らかい）　４：暗黄褐色土：やや軟らかいローム粒主体。　５：暗黄褐色土：汚れたローム粒主体。灰黄褐色粒やや多く含む。　６・６′：暗黄褐色土：ややパサつく褐色ローム粒主体。　７：黄褐色土：ベタッとしたローム層。粘性強いが色調やや暗い。
住居掘り方覆土
８：住居掘り方の５層と同様の貼り床。　９：暗黄褐色土：ローム粒主体。

器甕の破片（3）などが見られた。

このように本住居に伴う遺物が認められなかったため本住居の時期は特定し得ないのであるが、覆土中出土遺物を見ると、奈良時代以降と思われる遺物は上述の遺物等の集中域以下には見られず、比較的床面に近いレベルには７世紀前半期の遺物が見られ、カマドの覆土には古墳時代後期の遺物が見られる。従って住居廃棄後比較的早い埋没段階が古墳時代後期（恐らくは７世紀前半頃）であり、埋没が進行して窪地が浅くなった奈良・平安時代頃に集中的な遺物等の投棄が行われたことが窺われる。従って本住居は西暦600年前後以前の所産ではないかと推測されるのである。

規模　長軸：304cm　短軸：288cm　深さ：45cm

カマド　幅：71cm　奥行き：70cm　　燃焼部　径：37×39cm

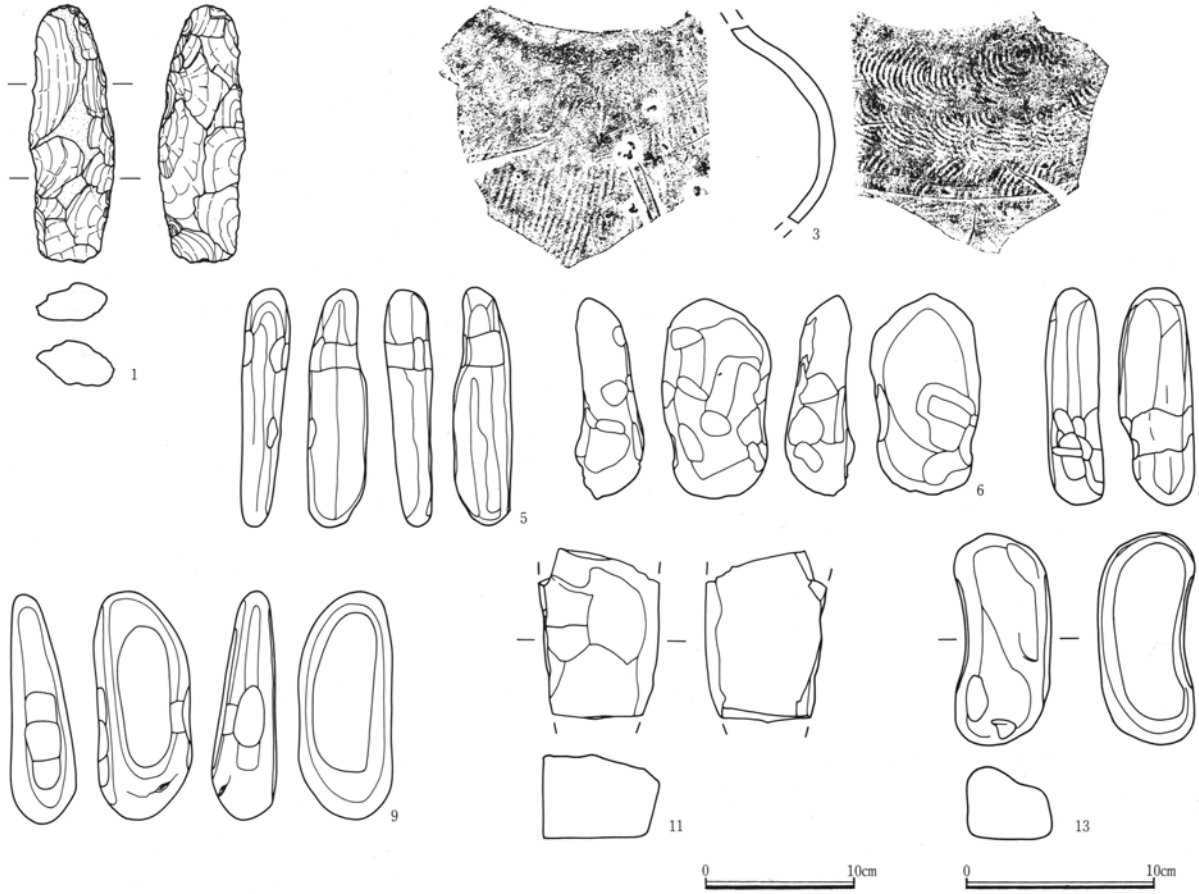
貯蔵穴か　径：34×31cm　深さ：10cm

床下粘土坑　径：66×50cm　深さ：13cm

カマド左側所在ピット　　東側ピット　径：30×20cm　深さ：14cm　　西側ピット　径：19×15cm　深さ：９cm

構造　本住居はやや縦長で上に開く隅丸方形のプランを呈する。

カマド前と北東及び南西隅、北壁中央に深さ10cm以下の掘り込みを持つ掘り方を有する。この掘り方の中央部には底面には灰色粘質土が薄く付着し、そ

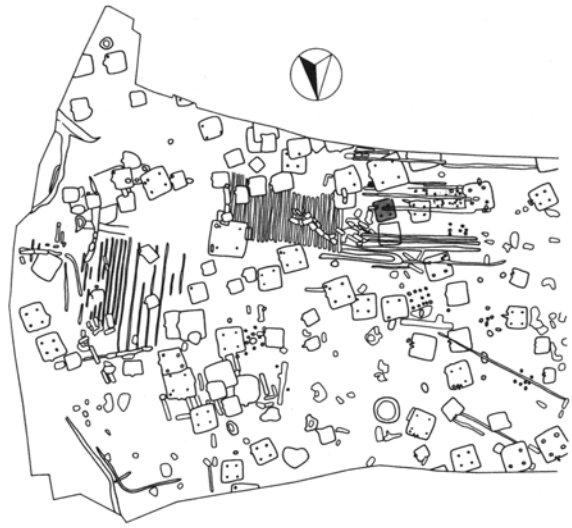


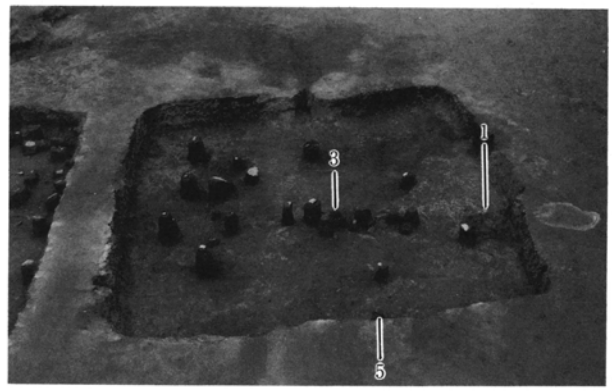
第117図　Ｈ－52号住居出土遺物

の上にロームと灰色粘質土の混土が堆積するやや不整形なプランの床下粘土坑が設けられている。床面はローム掘り方をローム等で埋め戻し、その上にロームと褐色土を用いて締め固めた貼り床として造られている。

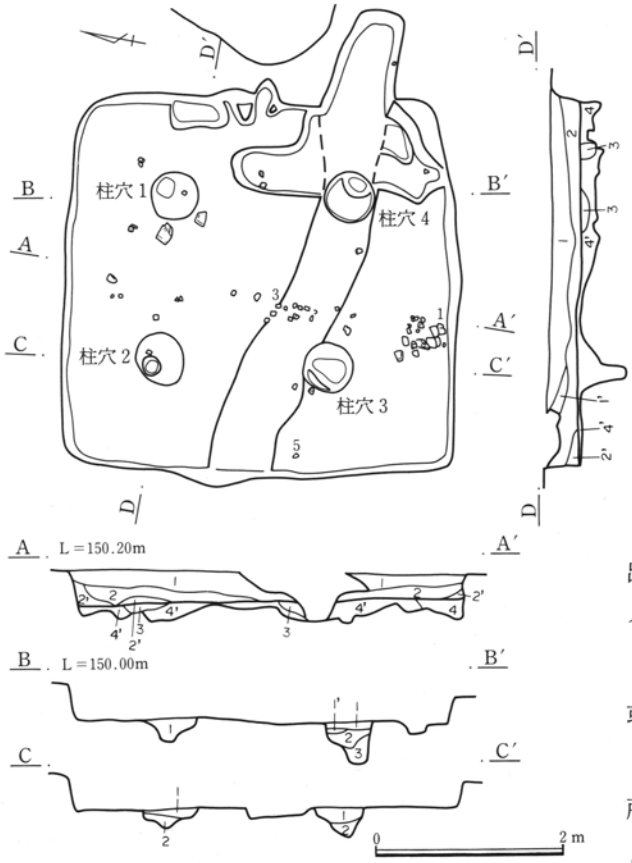
カマドは東カマドで壁面を掘り込んで造っている。カマドは掘り方を有し、ロームを主体とする土で埋め戻して燃焼面を造り出している。燃焼部は東壁ラインの外側に設定され、東壁際の燃焼部の両側に礫を立てて袖石とし、褐色土で非常に短い袖を造っている。また、カマド前面にはやや長めの礫が横位二折した状態で出土してきているが、付近の状況からこの礫は袖石の上に設置されていたものと想定され、土器片が甕とカマド（天井部）との隙間を塞ぐために使用されていたものと思慮される。尚、右側の袖石と地山（ローム層）との境には床下粘土坑の底面に見られたのと同質に見える灰色粘質土が確認されていたが、このことは少なくもカマドの当初の構築に際して、その材を床下粘土坑で練っていた可能性が思慮されるのである。

位置的にはややカマド側に寄り過ぎているが、貯蔵穴と推定される遺構がカマド手前、直ぐ右側に掘削されている。この遺構は隅丸方形のプランを呈し、その主軸は住居主軸に対し凡そ45°を向いている。掘り方は浅く、底面は北に向かって傾斜している。貯蔵穴本体は小型であるが、貯蔵穴周囲の壁のラインは貯蔵穴を包むように東西方向で90cm程を測れる方形状のプランで掘削が施されているようで、貯蔵穴に対する区域が設定されていたのではないかと思われる。一方、柱穴は確認されなかった。また、カマド左側には東壁際より、東壁に垂直に並ぶやや不整形な小型ピット２基が確認されているが、これらは東西ラインを意図したものと判断され、カマドに伴う何らかの施設ではないかと思われる。





住居覆土
１：黒褐色土：灰白色土粒・褐色土粒を多量に含み、炭化物も少量乍ら見る。（1′：暗褐色土：１層に比し灰白色土粒の混入極端に減少。）　２：黒褐色土：くすんだ褐色土がブロック状（径5～10cm）に多量に混入する。焼土も極く僅か混入する。（2′：２層に比し褐色土の混入減少。）
掘り方覆土
３：暗褐色土。　４：暗褐色土：褐色土に暗褐色土少量混入。（4′：４層に比し暗褐色土の混入減少）



第118図　Ｈ－54号住居

本住居の出土遺物は多くはなく、本住居に伴うものとしては僅かに古墳時代後期の所産と判断される土師器甕（1）があるに過ぎない。

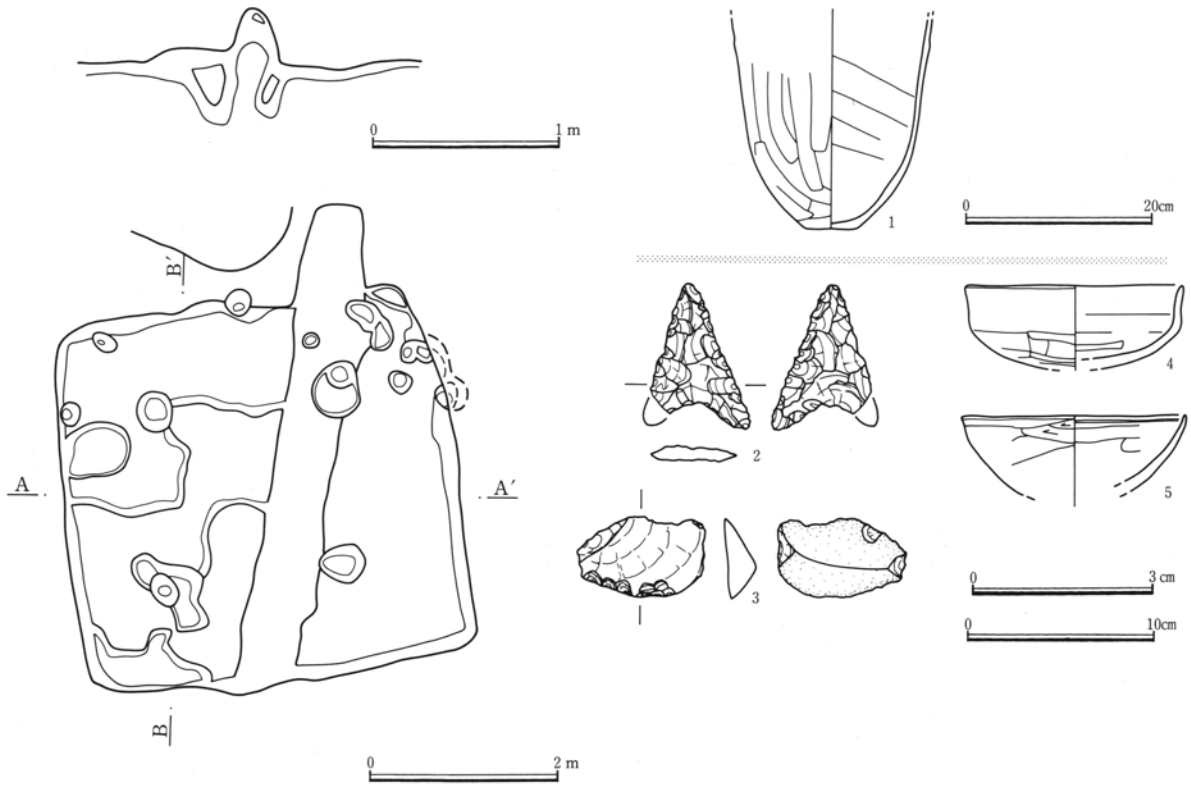
一方、覆土中からは土師器甕を中心とする遺物が出土してきているが、この中には石鏃（2）やスクレイパー（3）といった縄文時代の遺物や、土師器坏で７世紀前半期のもの（4）と８世紀前半期のもの（5）、或いはこも編み石（6）などが見られた。

このように出土遺物から本住居は古墳時代後期の所産と判断されるが、更に細かい時期を特定することはできなかった。また出土遺物が少なく断定することはできないが、覆土中の遺物の状況から本住居は７世紀前半頃には埋没が始まっており、少なくも８世紀前半頃までは本住居の痕跡が窪地として残されていたことが推定される。こうした状況から或いは本住居の時期は７世紀前半以前に求められるものと思慮される。

Ｈ－54号住居（古墳時代後期．第118～119図．図版24・68・93）

概要　本住居はＢ区中央南部に位置する小型の竪穴住居跡で、他の住居との切り合いは無く単独で遺存しているが、住居中央付近を現代のサクが東西に走り、南東部には撹乱が広く入って住居を壊している。

規模　長軸：423cm　短軸：393cm　深さ：40cm
カマド　幅：57cm　奥行き：64cm　　左袖　幅：26



第119図　Ｈ－54号住居掘り方及び出土遺物

cm　長さ：39cm　高さ：８cm　　右袖　幅：13cm　長さ：31cm　高さ：７cm　　燃焼部　径：17×43cm　深さ：２cm

柱穴１　径：50×50cm　深さ：45cm　　柱穴２　径：58×52cm　深さ：50cm　　柱穴３　径：54×54cm　深さ：38cm　　柱穴４　径：53×52cm　深さ：47cm

構造　本住居は方形または隅丸方形のプランを呈している。

本住居は掘り方を有する。掘り方には特段の規格性などは見出せなかったが、北東コーナー付近に径20～30cm、深さ14或いは17cmのピットが見られた。床は掘り方を褐色土や暗褐色土で埋め戻して造っているが、貼り床等の構造は認められなかった。

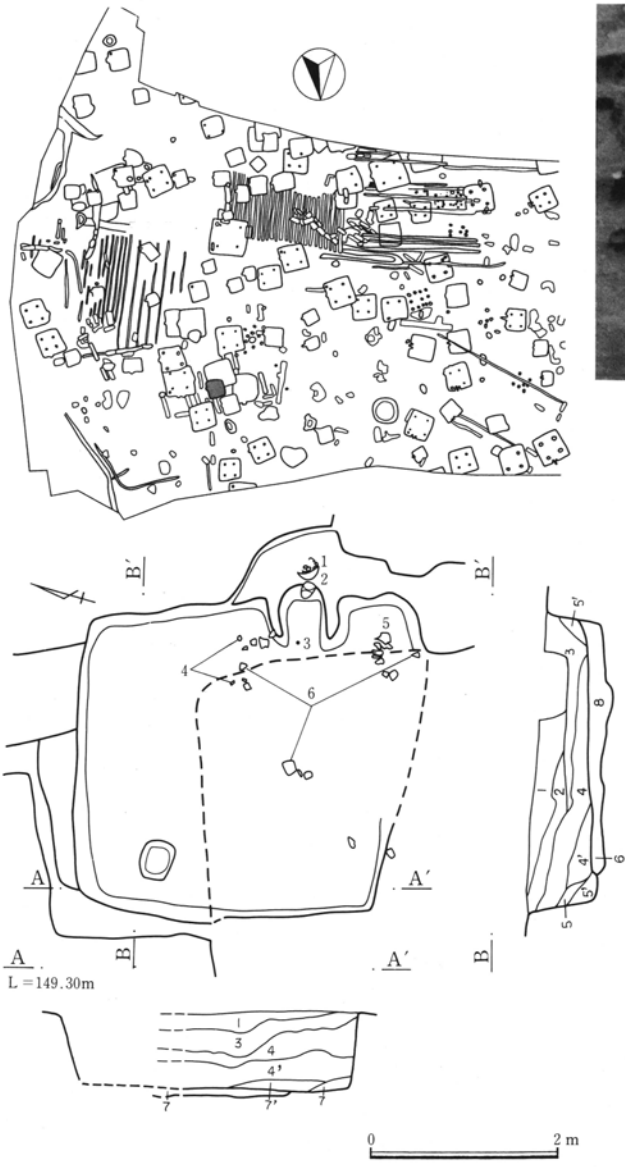
カマドは東カマドであるが、充分な記録化が行い得なかった。

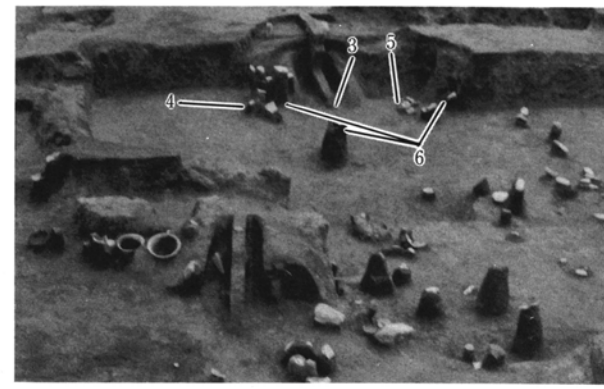
貯蔵穴は確認できなかったが、カマド左側壁際に壁面に貼り付くように見られた長さ62cm、幅30cm、深さ10cmを測る方形プランの掘り込みがあり、これが貯蔵穴に相当するものとも思われる。一方、柱穴は４基を確認しているが、何れもしっかりした掘り方を持っており、底面形態から柱材は径20cm程あったものと推定される。

Ｈ－55号住居（奈良時代．第120～121図．図版24・68）

概要　本住居はＢ区北東部の住居の集中する一角にある小型の竪穴住居跡で、Ｈ－55～58・90号の５軒の竪穴住居跡が切り合い関係にある住居群の１軒である。本住居は南にＨ－56号住居と接しこれを切っている。しかし本住居の過半はＨ－56号住居の覆土中にあって検出が難しく、南半部では壁面・床面等を確認することができず掘りすぎてしまっている。

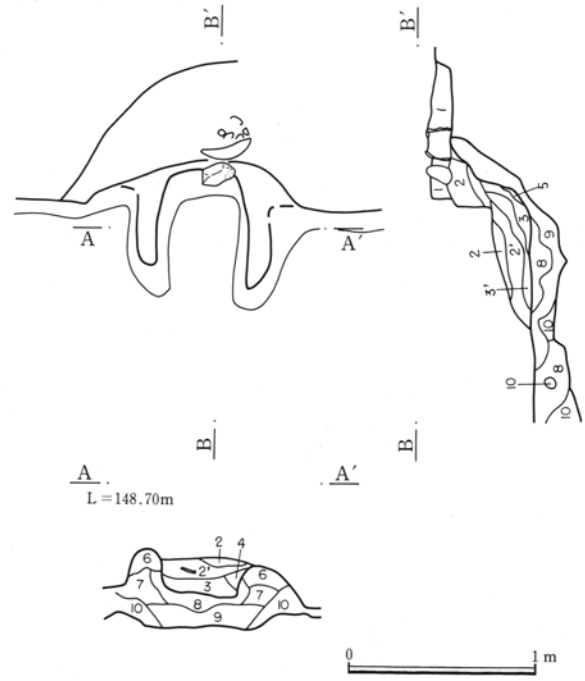
本住居の出土遺物は少なかったが、このうち本住居に伴うと判断されたものは８世紀前半期の特徴を示す土師器甕（1）と土師器胴張甕（2）の２点のみ





住居覆土
1：暗茶褐色土：夾雑物殆無し。　2：暗茶褐色土：白色土粒とロームブロック少量含む。　3：暗黒褐色土：くすんだ暗褐色土ブロック少量含む。　4：暗黒褐色土：夾雑物殆ど無し。（4′：ローム少量含む）　5：暗黒褐色土：ローム若干量含む。（5′：ローム多量に含む）
掘り方覆土
6：暗黒褐色土主体。　7・7′：暗褐色土：暗褐色土とロームブロックの混土。　8：黄褐色土：暗褐色土微量に混入。

カマド覆土
1：暗灰褐色土：黒色土少量含む。　2：黒褐色土。（2′：焼土粒微量に見る。）　3：暗赤褐色土：焼土ブロック多量に含む。粘質土・黒色土も散見。（3′：焼土の混入少ない）　4：暗褐色土主体。　5：赤褐色土：焼土ブロック層。
カマド掘り方
6：暗赤褐色土：焼土ブロック多量に含み、堅く締まる。7：暗黒褐色土：褐色土粒微量に含む。　8：暗赤褐色土：焼土ブロック少量混入。　9：暗赤褐色土：焼土微量に入る。　10：暗黄褐色土：暗黄褐色土と黒色土の混土。

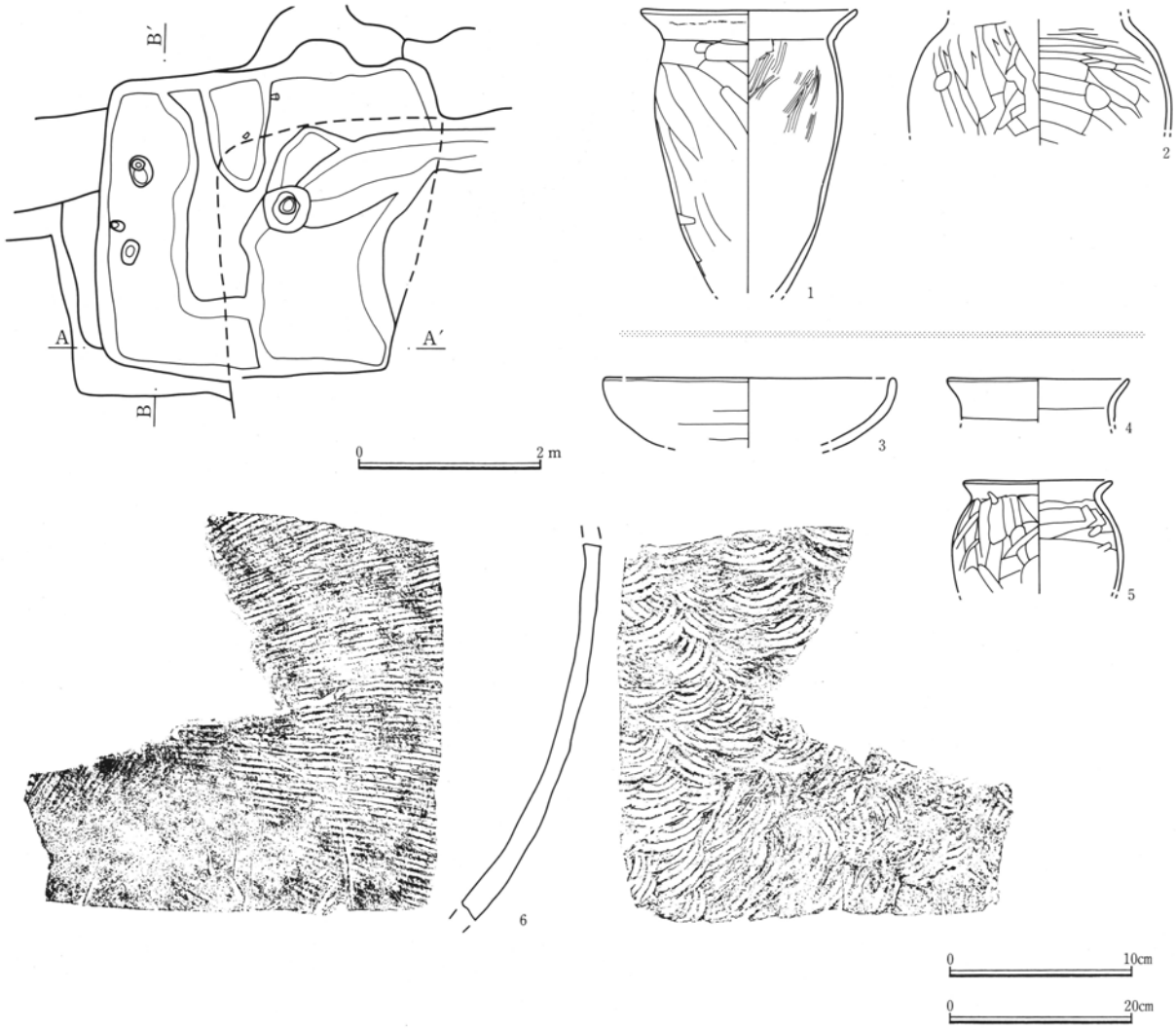


第120図　H―55号住居及びカマド

であった。

一方覆土中からは古墳時代後期から奈良・平安時代に至る時期の遺物が出土し、この中には7世紀後半期の土師器胴張甕（5）や8世紀前半期の土師器坏（3）、8世紀代の土師器甕（4）の他、須恵器甕（6）などの出土が見られた。　以上のように出土遺物が少ないため断定はできないが、本住居は8世紀前半を前後する時期の所産と考えられる。

規模　長軸：407cm以上　短軸：338cm　深さ：48cm
カマド　幅：93cm　奥行き：78cm　　左袖　幅：25cm　長さ：56cm　高さ：26cm　　右袖　幅：32cm



第121図　Ｈ－55号住居掘り方及び出土遺物

長さ：57cm　高さ：19cm　　燃焼部　径：39×71cm　煙道　幅：41cm　長さ：27cm　　ピット　径：43×37cm　深さ：７cm

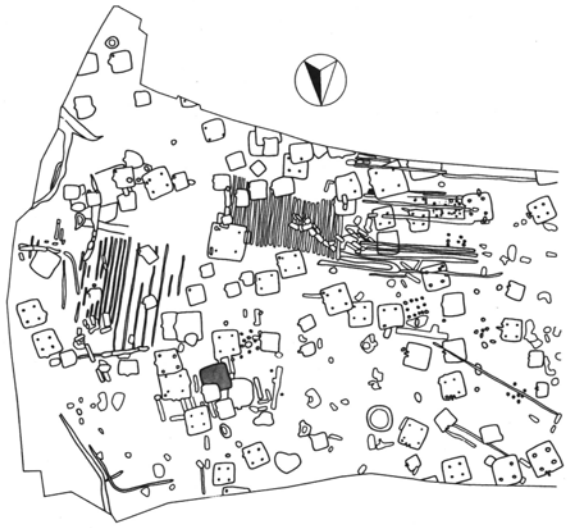
構造　本住居は前述のようにＨ－56号住居の覆土中にあった本住居の南半の中・西部を検出し得なかったので全体状況を知ることはできなかったのであるが、以下のような所見を得ている。

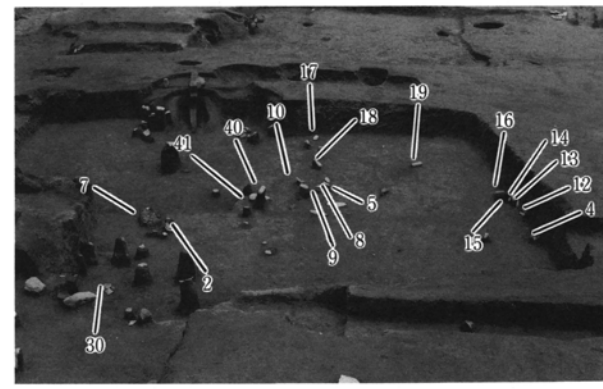
本住居のプランは隅丸方形を呈する。

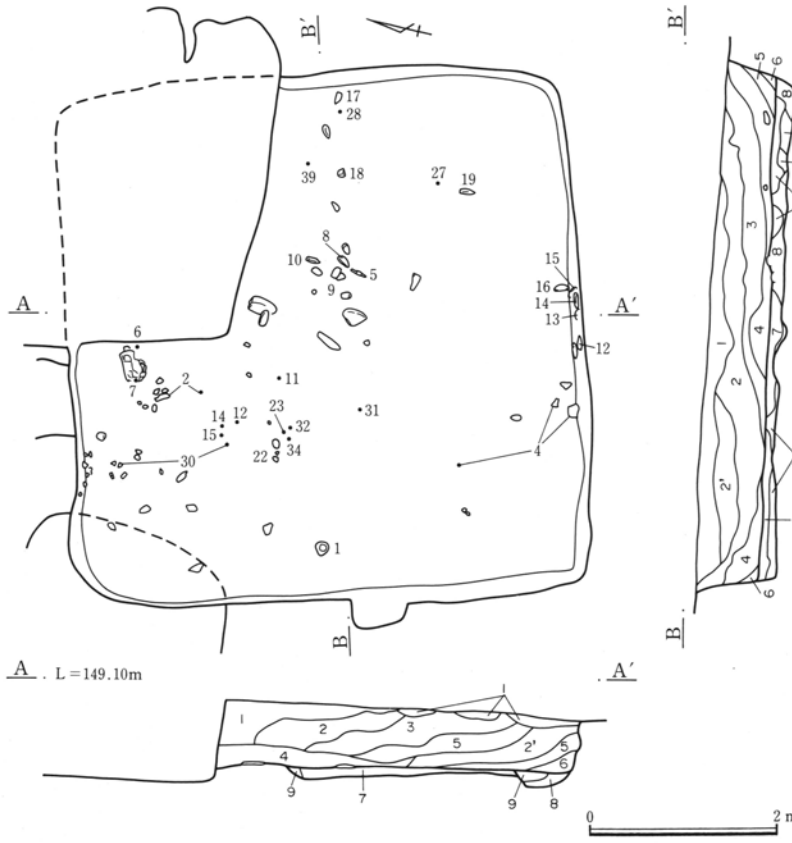
掘り方を有し、この掘り方のカマド左手前には幅80cm、奥行き119cm、深さ16cmの溝状の、北壁から西壁にかけての壁際には幅95cm、深さ10cmの周溝状の掘り込みを有している。床はこのような構造を持つ掘り方を暗黒褐色土やローム等、種々の土壌で埋め戻して造っている。

カマドは東カマドで、東壁やや南寄りに造られる。平底の掘り方を有し、焼土を含む暗赤褐色土で燃焼面と袖内壁を造っている。袖の外側部はやはり焼土を含む暗赤褐色土と暗黒褐色土で造っている。煙道は燃焼部より急角度で立ち上がるが、カマド奥側は床上テラスが在って、その煙道頂部の位置に土師器胴張甕の上半部（2）が正位で設置されていた。尚、袖材・天井材等は確認されなかった。

本住居に於いては、はっきりした柱穴・貯蔵穴を確認することはできなかった。床面に於いては住居南西部に浅いピットが１基見られたが、位置的に柱穴にはなり得ないものと思われる。







住居覆土
１：暗褐色土：As-Aと炭化物若干量含む。２：暗褐色土：多量の褐色土粒・ブロックを含む。(2′：２層に比し褐色土更に多量)　３：暗茶褐色土：As-BPがブロック状で少量混入。　４：暗茶褐色土：褐色土粒・ブロックの混入が２・2′に対して多い。　５：黒色土：黒色土主体に褐色土少量混入。　６：暗褐色土：暗褐色土と褐色土の混土。
掘り方覆土
７：暗褐色土：暗褐色土とロームブロックの混土。　８：明褐色土：黒色土微量に混入。９：暗黒褐色土：ローム少量混入。

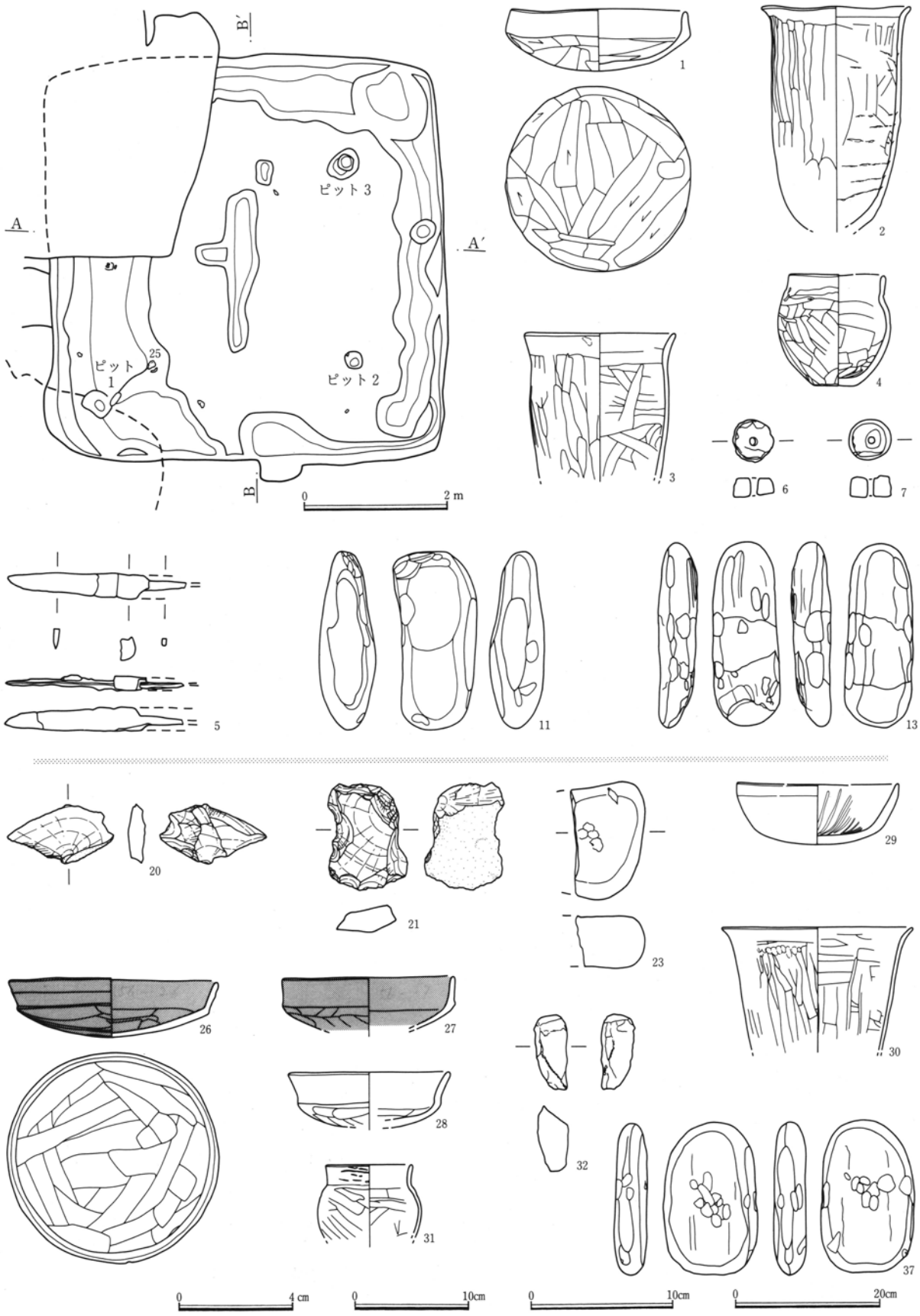
第122図　Ｈ－56号住居

Ｈ－56号住居（古墳時代後期．第122～124図．図版24～25・68～69・93）

概要　本住居はＢ区北東部の住居の集中する一角に所在するＢ区に於いては中型に属する竪穴住居跡で、Ｈ－55～58・90号の竪穴住居跡が切り合い関係にある５軒の住居群の１軒である。本住居は北東部にＨ－56号住居と接し、北西部にＨ－90号住居（Ｈ－58号住居）と接し、住居北東部は前者に切られて壊されているが、後者との新旧関係を特定することはできなかった。

本住居の出土遺物は比較的多くあったが、このうち本住居に伴うと判断されるものには、６世紀後半期の特徴を示す土師器甕（2,3）や７世紀前半期と判断される土師器の坏（1）や小型甕（4）があり、他に刀子（5）、石製模造品（6,7）、こも編み石（8～19）がある。

一方覆土中からは古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての土師器甕を中心に、縄文時代の石器・石製品（20,21）、７世紀前半頃の土師器の坏（28、26,27）や甑（30）・小型甕（31）が見られた他、転



第123図　Ｈ―56号住居掘り方及び出土遺物

第124図　Ｈ－56号住居出土遺物

用品を含むこも編み石（24,25,33～44）、火打ち石（32）、そしてカマドの構築材かと思われるスサの入った痕跡のある粘土痕（45,46）も見られた。

これらの遺物から本住居は西暦600年前後の所産と考えられ、７世紀前半代には埋没が始まり、奈良・平安時代までは住居の痕跡が窪地となって残されていたものと推察されるのである。

規模　長軸：573cm　短軸：551cm　深さ：66cm

掘り方　　ピット１　径：41×32cm　深さ：30cm

ピット２　径：25×24cm　深さ：39cm　　ピット３　径：48×37cm　深さ：22cm

床下土坑　径：107×104cm　深さ：10cm

構造　本住居は上述のように、その北東部が壊されているので全体的状況はつかめなかったが、そのプランは方形に近い隅丸方形の形態を呈する。

本住居は掘り方を有するが、この掘り方にはやや不連続であるが幅37～140cm、深さ６～16cmを測る浅い周溝状の掘り込みが（北壁東半を除き）廻っている。柱穴様のピットが見られる他、南東隅部には土坑様の掘り込みが見られる。また中央の掘り残し部分には幅46cm、長さ229cm、深さ17cm以下の東西に走行の溝状の掘り込み見られる。この掘り方を暗茶褐色土や明褐色土で埋め戻して床を造り出している。

床面に於いてはカマド・貯蔵穴・柱穴等の構造物は確認されなかった。このうち貯蔵穴についてはＨ－55号住居の掘り方中央に見られた径55×53cm、深さ58cmを測る柱穴様のピットがこれに該当する可能性を持つ。また柱穴については、掘り方に於いて見られたピットのうちピット２・３が位置的にその可能性が考えられる。また、カマドについてはＨ－55号住居に壊されている北東部に造られていた可能性が考慮される。

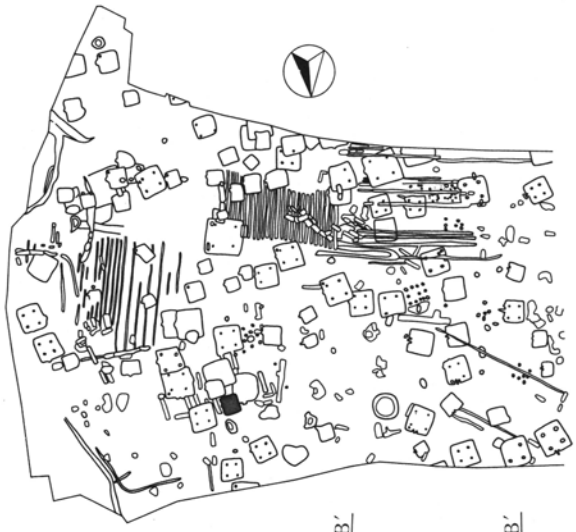
Ｈ－57号住居（古墳時代後期．第125～127図．図版25・69～70・93）

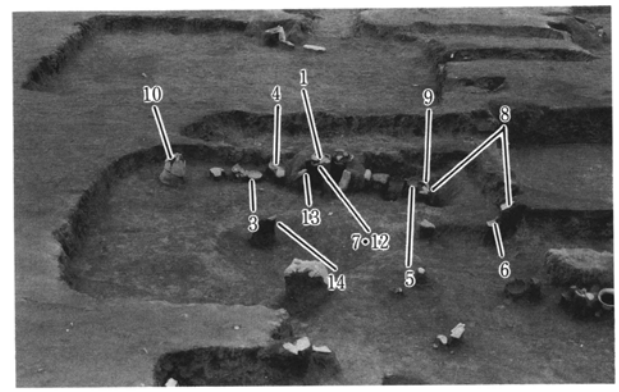
概要　本住居はＨ－56号住居同様、Ｂ区北東部のＨ－55号住居等切り合い関係にある５軒の竪穴住居の１軒で、小型の規模を持つものである。本住居は西にＨ－90（Ｈ－38）号住居と接し、これに切られる。

本住居は住居の規模に対して出土遺物は多かったが、このうち本住居に伴うと判断されたものの多くはカマド、カマド左側、貯蔵穴付近から出土しており、これらは６世紀後半から７世紀前半期の特徴を示す土師器の坏（5、6、13、4）や胴張甕（9、8）、甑（10）、小型甕（11）などが見られた。

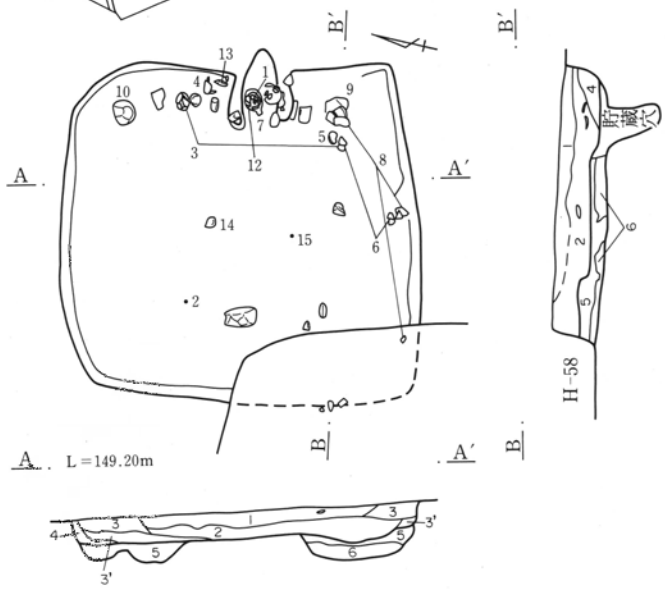
一方覆土中からは古墳時代後期から奈良・平安期の土師器甕を中心に、縄文土器片（12）や本住居に伴うのと同時期の土師器坏（15、13,14）の他、須恵器甕片（16）やこも編み石（17,18）も見られた。

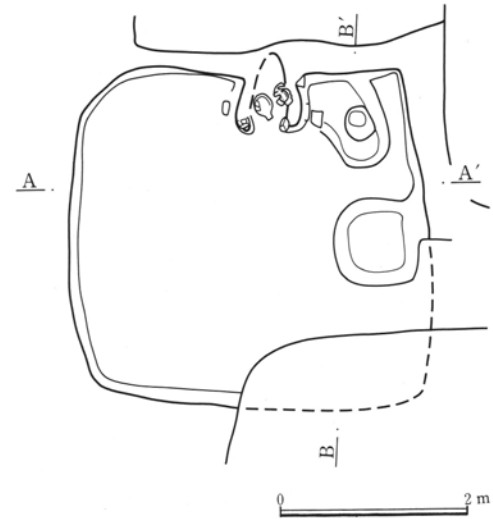
これらの出土遺物から、本住居の時期は概ね西暦600年前後の時期として捉らえられるものと判断される。また、覆土中の遺物から住居廃絶後、比較的早い段階から埋没が始まり、凡そ奈良・平安時代の頃までは窪地としてその痕跡を留めていたことが窺われる。





住居覆土
1：暗黒褐色土：褐色土ブロックと焼土を微量に含む。
2：暗黒褐色土：ロームブロック少量含む。　3：暗茶褐色土：白色土粒若干量含む。（3′：As-BPを含むくすんだ褐色土ブロック少量含む。）　4：暗茶褐色土：暗黒褐色土と褐色土の混土。
掘り方覆土
5：暗茶褐色土：褐色土中に黒色土微量に混入する。
6：明褐色土：黒色土が微量に混入する。



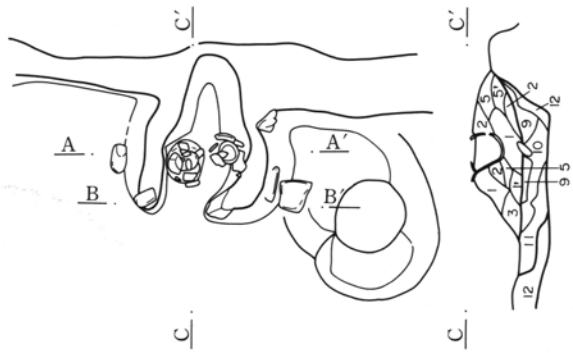


第125図　Ｈ―57号住居

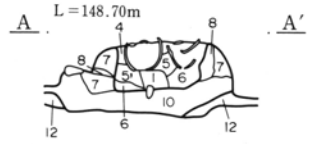
規模　長軸：387cm　短軸：349cm　深さ：37cm
カマド　幅：92cm　奥行き：88cm　　左袖　幅：34cm　長さ：61cm　高さ：25cm　　右袖　幅：35cm　長さ：60cm　高さ：25cm　　燃焼部　径：36×57cm　深さ：４cm　煙道　幅：34cm　長さ：41cm
貯蔵穴　周囲落ち込み　幅：36cm　長さ：52cm　深さ：23cm　　本体　径：34×32cm　深さ(落ち込み底面より)：57cm　（床面より)：81cm
土坑　径：94×94cm　深さ：10cm
床下土坑　径：134×130cm　深さ：25cm
構造　本住居は隅丸方形のプランを呈するものと思われる。

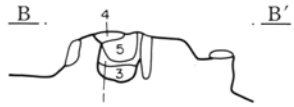
住居中央部に190×148cmの範囲で微高地状の掘り残しを有し、東・南・北壁際に幅18～67cm程を測るテラス状の掘り残しを設ける掘り方を持つ。住居中央部には不整円形のプランを呈する床下土坑を有している。この掘り方を明茶褐色土や明褐色土・褐色土・黒色土等で埋め戻して床面を造っている。

カマドは東カマドで、東壁中央やや南寄りに造っている。カマドは平底の掘り方を持ち、これを暗黒褐色土を中心とする土壌で埋め戻して燃焼面を造り出している。燃焼部手前の両脇には礫を立てて袖石とし、焼土ブロックを含む暗黒褐色土で固めて袖を

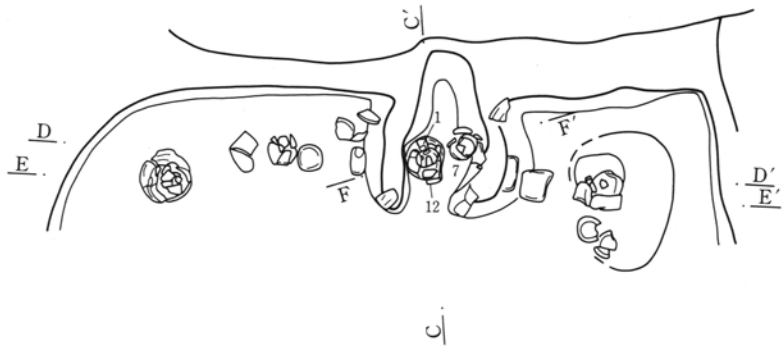


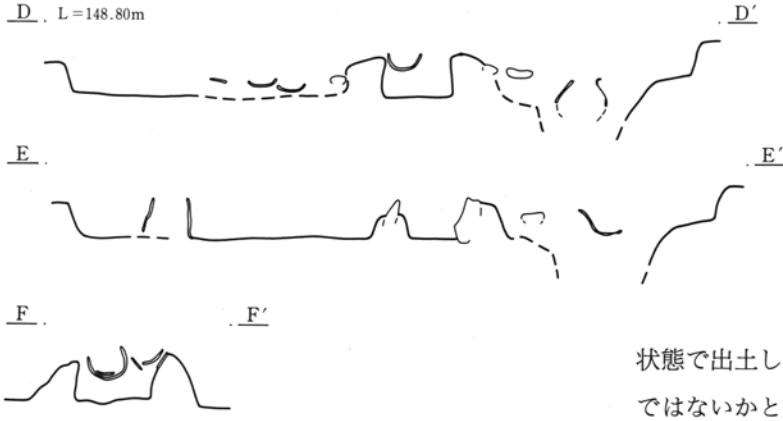
カマド覆土
１：黒色土：粒子粗く、焼土が微量に含まれる。（1′：焼土少量含む。）　２：暗黄褐色土：黒色土と淡黄褐色土の混土。　３：暗茶褐色土：焼土粒を微量に含む。　４：暗赤褐色土：焼土ブロック少量含む。　５：赤褐色土：焼土ブロック多量に含む。比較的堅く締まる。（5′：焼土ブロック相当量含む。粘土が微量に含まれる。）６：赤黒褐色土：焼土・炭化物少量含む。
袖構築材
７：暗黒褐色土：焼土ブロックを多量に含み、堅く締まる。　８：暗黒褐色土。
カマド掘り方覆土
９：暗黒褐色土：少量の焼土を含む。　10：暗黒褐色土：暗褐色土中に褐色土が少量混入する。　11：暗黒褐色土：暗黒褐色土と褐色土の混土。　12：暗黄褐色土。





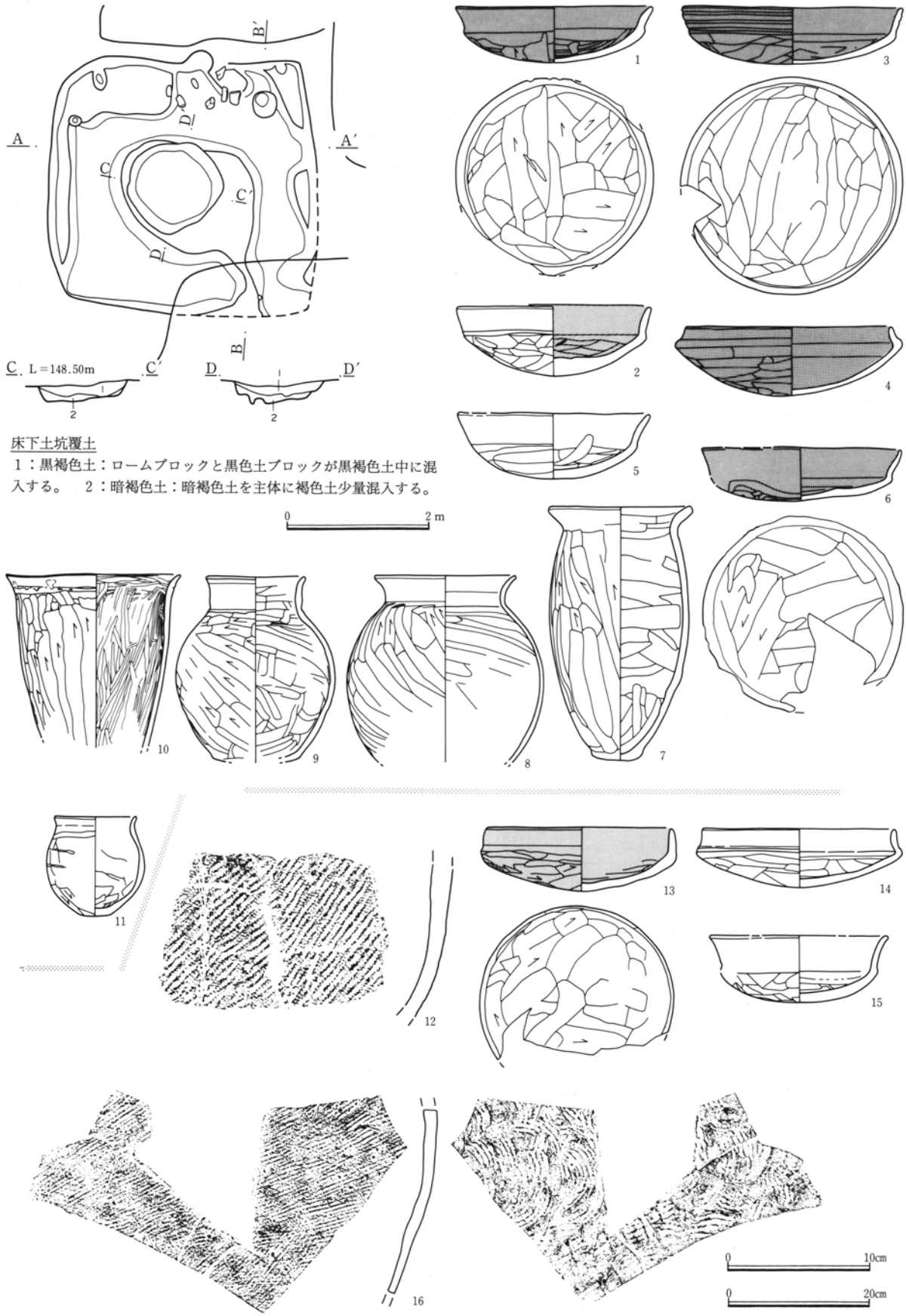
造り出している。袖石奥の燃焼部には土師器の長胴甕（7）と胴張甕（9）の２個の甕が横位に正位の状態で出土しており、このカマドが２つの土器を同時に掛けていたことを物語っている。左側の長胴甕の下からは立てられた状態の礫が出土していたが、これは支脚になるものと思われる。



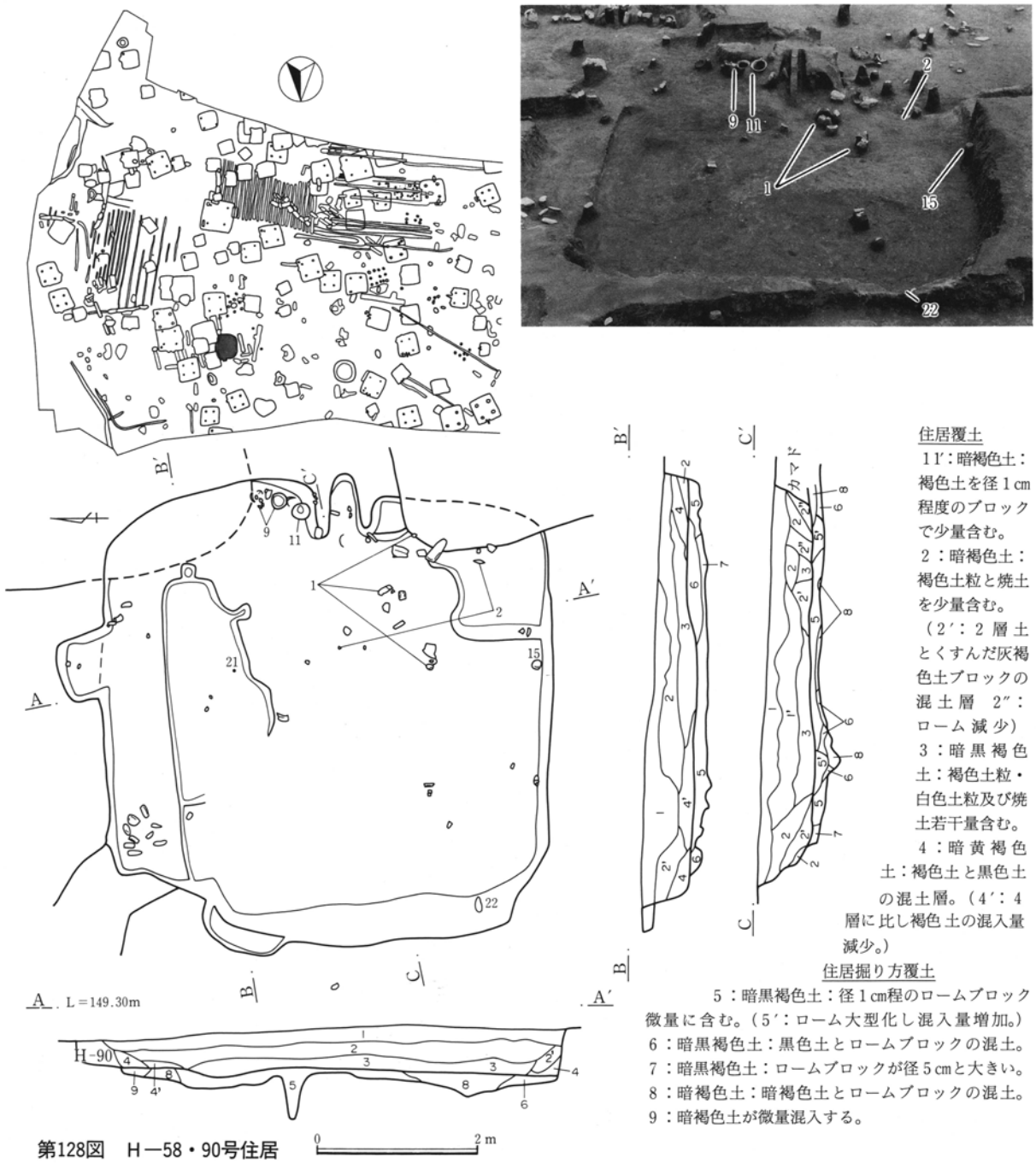


床面に於いては貯蔵穴が確認された。貯蔵穴はカマド右側の住居南東部に掘削されているが、この貯蔵穴は床面から10cm以上の深さで掘り下げられたテラスを周囲に伴っている。貯蔵穴本体は隅丸方形プランの柱穴状の形態を呈する小型のものであったが、掘削進度は比較的深かった。貯蔵穴に伴うテラスについては蓋などが設置されたのに伴うものではないかと思慮される。またこのテラスの奥側には胴張甕の上半部が（8）正位の状態で出土しており、これも貯蔵穴に準拠した施設ではないかと想定される。この他、床面では南部中央に方形の浅い掘り込みを確認している。また、柱穴は確認されなかった。

第126図　Ｈ―57号住居カマド



第127図　Ｈ―57号住居掘り方及び出土遺物



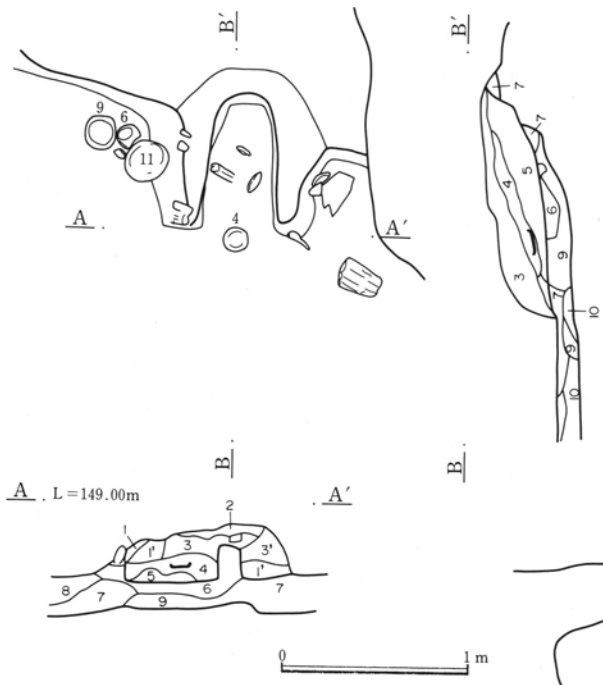
第128図　Ｈ－58・90号住居

Ｈ－58号住居（古墳時代後期．第128～130図．図版25～26・70～71・93）

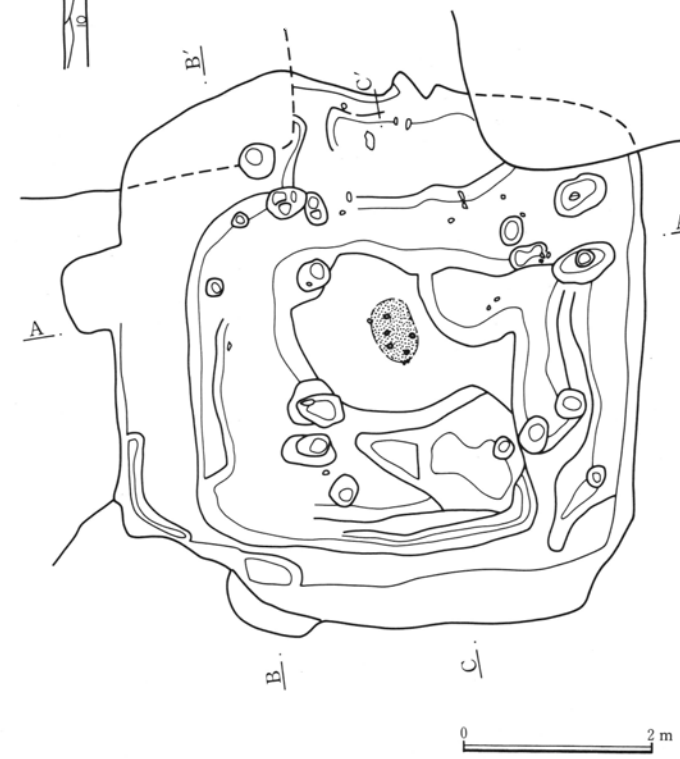
Ｈ－90号住居（奈良時代．第128～130図．図版25～26・96）

概要　Ｈ－55号住居等５軒が切り合う竪穴住居群を構成するＨ－58号住居及びＨ－90号住居は、Ｈ－90号住居の東・北壁寄りを除いてほぼ重なるように重複して、前者が後者を切っている。２軒の住居は南にＨ－56号住居、東にＨ－37号住居と接するが、前者との新旧関係は不明で、後者はこれを切っている。

Ｈ－58・Ｈ－90号住居は当初１軒の住居としていたが、北側に張り出す部分を確認し、これをＨ－90号住居として処理した。しかし筆者の判断ミス等から整理の最終段階に至って当初Ｈ－58号住居のカマドとしたものがＨ－90号住居のものであると認識するに至った。しかし乍ら作業工程上その分離を行う



カマド覆土
１：黒褐色土：微量の白色土粒を含む。（1′：焼土ブロックが微量混入する。）　２：黒色土：締まりに欠ける（攪乱か。）　３：暗赤褐色土：焼土ブロックと焼土粒を若干量含む。（3′：３層に比し堅く締まる。白色土粒を微量に含む。）　４：暗赤褐色土：焼土ブロックと炭化物を若干量含む。　５：赤褐色土：焼土ブロックを主体とし良く焼ける。
カマド掘り方覆土
６：暗褐色土：As-BP含みのロームブロックを若干量含む。　７：暗黒褐色土：褐色土ブロックを若干量含む。　８：暗黒褐色土：褐色土粒を少量含む。　９：暗黄褐色土：褐色土と黒色土の混土。　10：暗黒褐色土：黒色土中にロームが少量混入する。



第129図　Ｈ―58・90号住居カマド及び掘り方

余裕がないため、この２軒を一括して報告することとしたい。

２軒の住居の出土遺物のうちＨ－90号住居に伴うと判断されたものは認められなかったが、覆土中からは６世紀前半期の土師器甕（9）、６世紀後半期の土師器甑(11)、７世紀前半代頃の土師器坏（3）や須恵器坏（12、4）などが出土してきている。

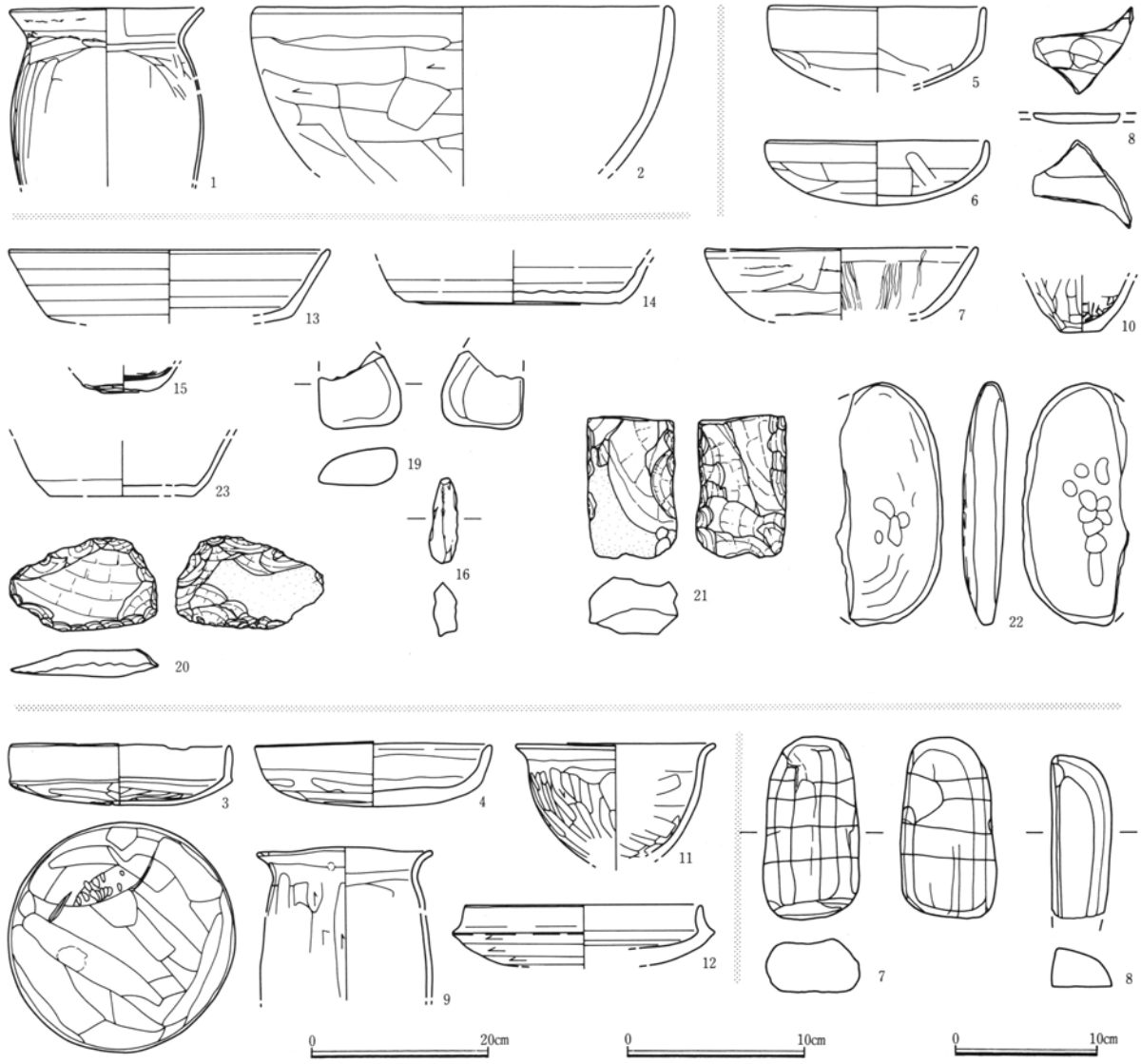
一方、Ｈ－58号住居に伴うと判断された遺物には８世紀前半期の土師器坏(1)の他、土師器の鉢(2)が見られ、住居北東コーナー付近の床面にはこも編み石(H90－１～８)の出土も見られた。また、覆土中からは古墳時代後期段階の土師器の坏（5,8）や甕（10）、８世紀代の土師器坏(6、7)と須恵器坏(13,14)の他、須恵器甕(15)、火打ち石（16)、こも編み石（17,18)。縄文時代の石器類（19、22)、口禿白磁片（23）などの出土が見られた。

以上の点からＨ－58号住居は概ね８世紀前半頃の所産と判断された。しかし、口禿白磁（23）が掘り方で見られるなど部分的に深く攪乱の入っていた様子も窺われた。一方、Ｈ－90号住居の時期は特定できなかったのであるが、少なくも上述の遺物（3,4,9,11,12)の時期以前の年代が与えられ、また、これらの遺物がカマド付近の壁際の所謂三角堆積の上面付近から出土するためＨ－58号住居に付随する可能性も考えられ、この場合は西暦600年前後の時期が与えられよう。

規模　〔Ｈ－58号住居〕　長軸：481cm±　短軸：450cm±　深さ：40cm

〔Ｈ－90号住居〕　長軸：504cm±　短軸：560cm以下　深さ：32cm

カマド　幅：95cm　奥行き：87cm　　左袖　幅：33cm　長さ：62cm　高さ：22cm　　右袖　幅：28cm



第130図　Ｈ―58・90号住居出土遺物

長さ：49cm　高さ：25cm　　燃焼部　径：35×68cm

構造　〔Ｈ－58号住居〕　Ｈ－58号住居のプランは壁面が崩れる傾向にあるため明瞭でないが、掘り方の形状から隅丸方形を呈するものと推定される。

掘り方は住居中央に69×45cmの範囲で粘土の分布が見られる凡そ180cm四方の掘り残しと、それを廻る幅十数cm～１m以上、深さ10cm以下の１～２条の不定型な掘り込みを持つ。床面はこの掘り方を黒色土・ローム等種々の土で埋め戻して造り出している。

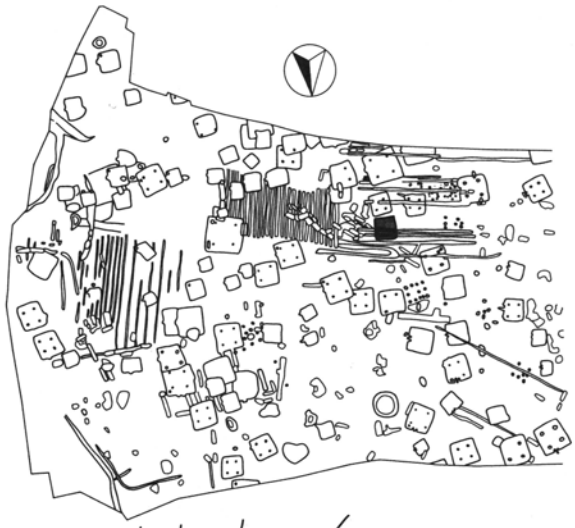
尚、カマド・貯蔵穴・柱穴等は確認されなかった。

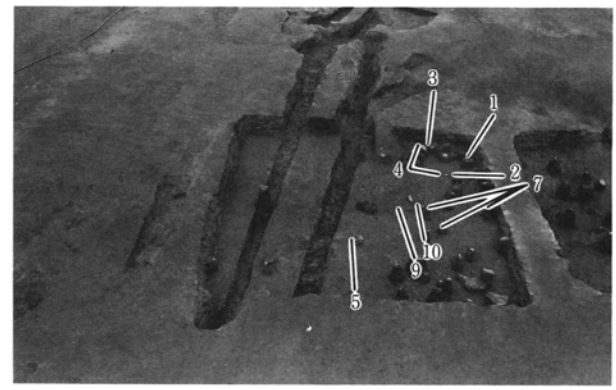
〔Ｈ－90号住居〕　Ｈ－90号住居は上述したように北壁際と東壁際の過半が確認できたに過ぎず、全体の構造は不明な点が多いが、そのプランは概ね方形を呈するものと思慮される。

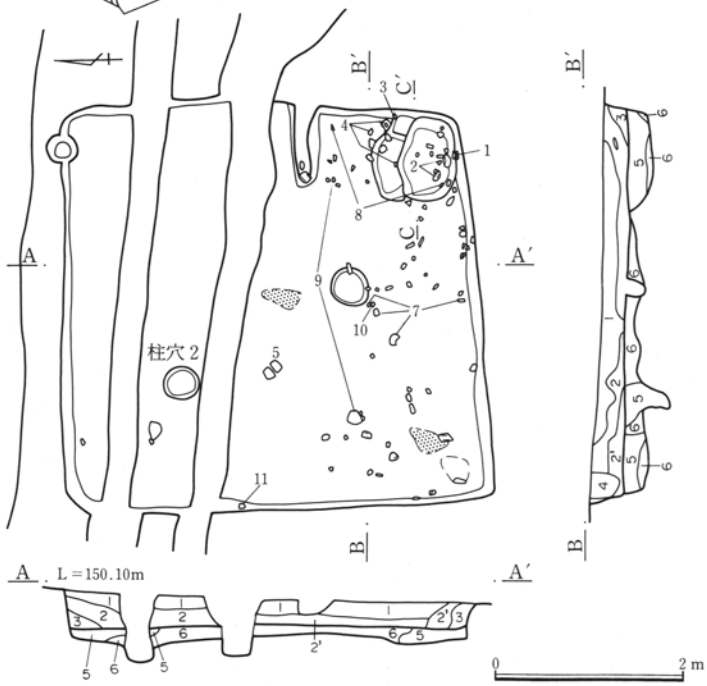
Ｈ－90号住居は掘り方を有するが、北西隅部に幅16cm、深さ数cmの周溝状の短い浅い掘り込みを有する以外特段の構造は見られなかった。床はこの掘り方を黒褐色土・黄褐色土等で埋め戻して造っている。

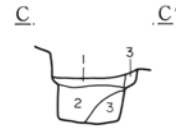
カマドは東カマドで浅い掘り方を有し、これを褐色土・黒色土等で埋め戻し、暗褐色土で燃焼面と袖を造っている。右袖には礫を立てた袖石を持ち、燃焼部中央には支脚と思われる礫が横位に20cm程隔たった位置に出土しているのが見られた。

尚、貯蔵穴・柱穴等の構造は確認できなかった。





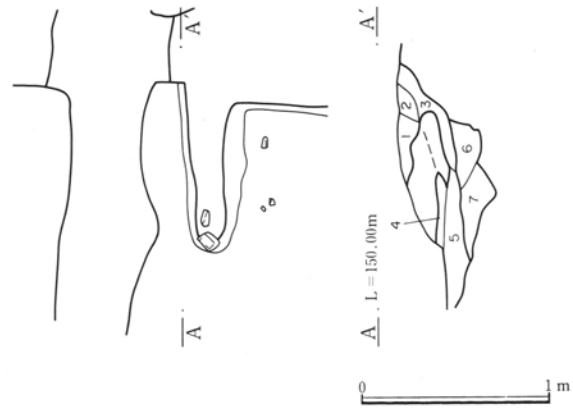




住居覆土
１：黒褐色土主体。　２：暗褐色土：黒色土とロームが部分的に集中してブロックで入る。（２′：黒色土含まない。）　３：暗褐色土主体。粘性弱い。　４：黒褐色土：黒色土を主体。
住居掘り方覆土
５：黒褐色土：暗褐色土中に黒色土が若干量混入する。６：暗黄褐色土：暗黄褐色土と褐色土の混土。

貯蔵穴覆土
１：暗褐色土：炭化物を少量含む。　２：暗褐色土：暗褐色土と暗黄褐色土の混土。　３：暗黒褐色土主体。

カマド覆土
１：暗褐色土主体。　２：暗赤褐色土：焼土ブロック若干量含む。　３：暗赤褐色土：焼土を主体。層上端部には灰が層を成して堆積する。　４：黒褐色土：黒色土中にロームブロックが少量混入。　５：暗赤褐色土：焼土のブロックを基本。非常に良く焼ける。
カマド掘り方覆土
６：黒色土主体。　７：褐色土主体。下部には焼土ブロックが少量乍ら明確な形で混入する。



第131図　Ｈ―59号住居及びカマド

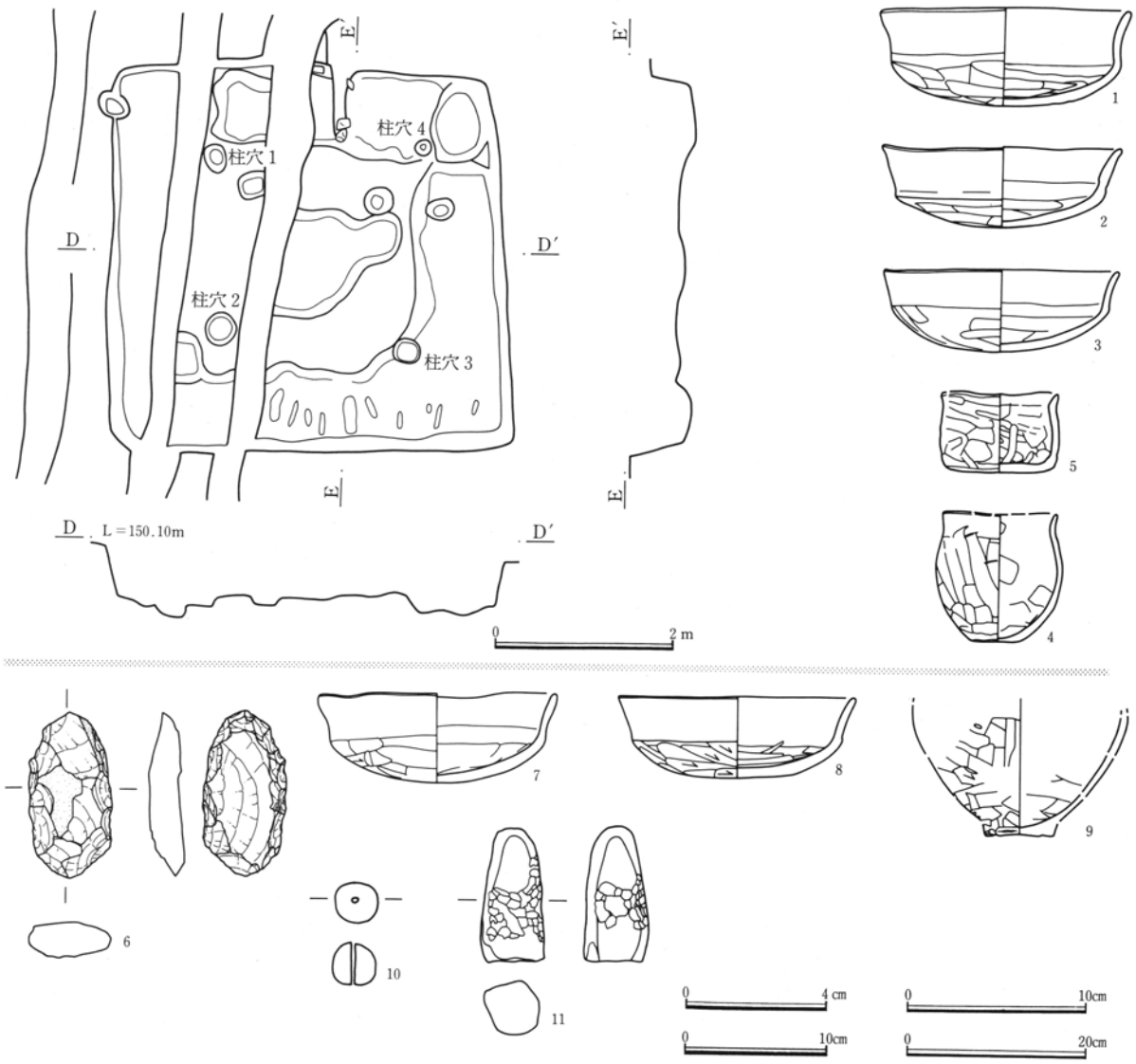
Ｈ－59号住居（古墳時代後期．第131～132図．図版26・71）

概要　本住居はＢ区南西に位置する中型の竪穴住居であり、北半を２本の現代の耕作溝で壊されている。

出土遺物のうち本住居に伴うものには６世紀中葉～７世紀前半期の特徴を示す土師器坏(1,2、3)。６世紀後半期等の土師器小型甕（4,5）がある。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕を中心に、６世紀後半の土師器の坏（7,8）や胴張甕（9）、そして用途不明の土製品（10）や打製石斧（6）、こも編み石（11）なども見られた。

以上の遺物の状況から、本住居は概ね西暦600年を



第132図　Ｈ―59号住居掘り方及び出土遺物

前後する時期のものと判断される。また本住居は廃絶後比較的早い段階で埋没が始まり、平安期頃までは窪地として痕跡を残していた可能性が窺われる。

規模　長軸：451cm　短軸：440cm　深さ：46cm

カマド　残存幅：58cm　残存奥行き：89cm　右袖幅：34cm　長さ：79cm　高さ：26cm　燃焼部　残存径：84×23cm　深さ：４cm

柱穴１　径：30×26cm　深さ(床面より)：49cm

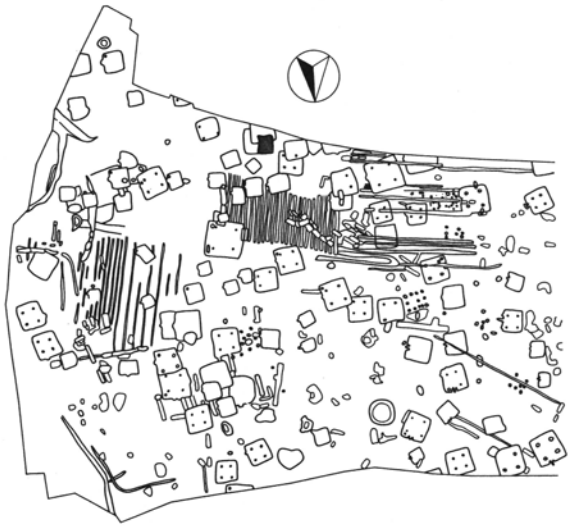
柱穴２　径：36×35cm　深さ：39cm　柱穴３　径：30×28cm　深さ(床面より)：39cm　柱穴４　径：18×17cm　深さ(床面より)：49cm

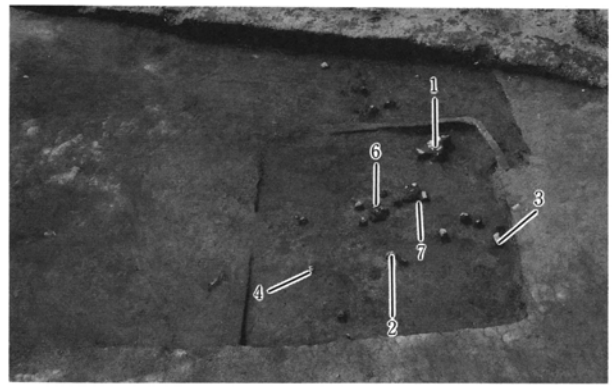
貯蔵穴　径：91×90cm　深さ：60cm

構造　本住居は概ね方形のプランを呈する。

本住居は掘り方を有するが、掘り方には幅110cm以下、深さ18cm程の周溝状の掘り込みが東・南・西壁下にかけて廻っている。この他多数のピットや、西壁下には鋤跡の可能性が考えられる東西走行の短い窪みが幾つか見られる。床面はこの掘り方を暗褐色土等で埋め戻して造っている。

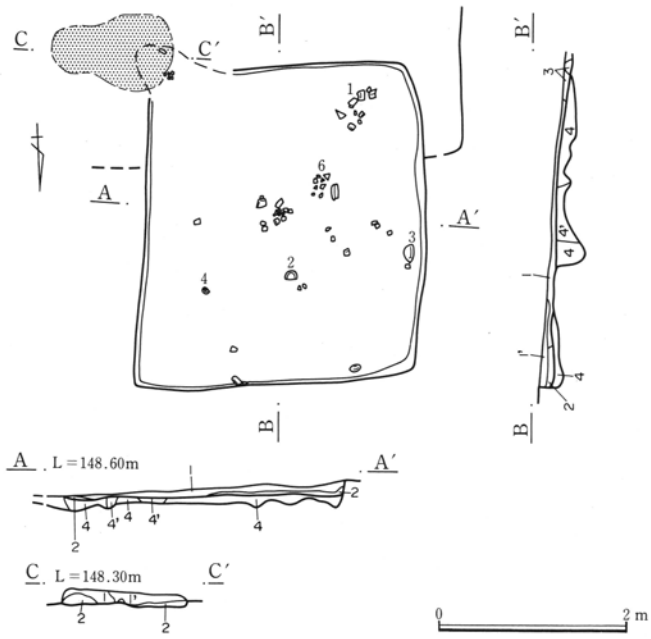
カマドは掘り方を有し、これを黒色土や褐色土で埋め戻して燃焼部を造っている。右袖の先端付近には礫を東西に２個並べた袖材を持つ。カマド掘り方の下位層に見られた焼土ブロックの状況からカマドの作り替えが想定される。

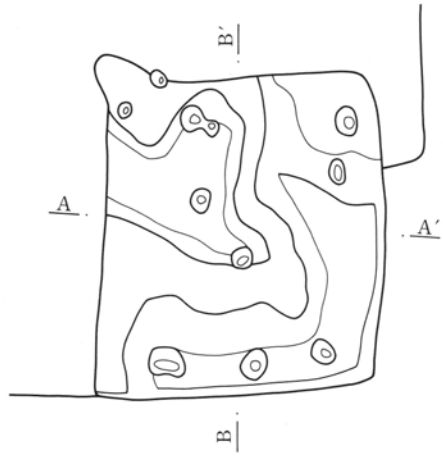




住居覆土
１：暗褐色土：殆ど夾雑物含まず。（１′：若干のAs-Aを含む。）　２：暗黄褐色土：黒色土と褐色土の混土。　３：暗褐色土：暗褐色土と褐色土の混土。　４：暗黒褐色土：褐色土ブロック（径１cm）少量混入する。（４′：暗黄褐色土：黄褐色土と黒色土の混土。）

焼土面
１：暗黒褐色土：黒色土と褐色土の混土。（１′：焼土が微量混入する。）　２：褐色土：黒色土が少量混入する。





第133図　Ｈ－60号住居

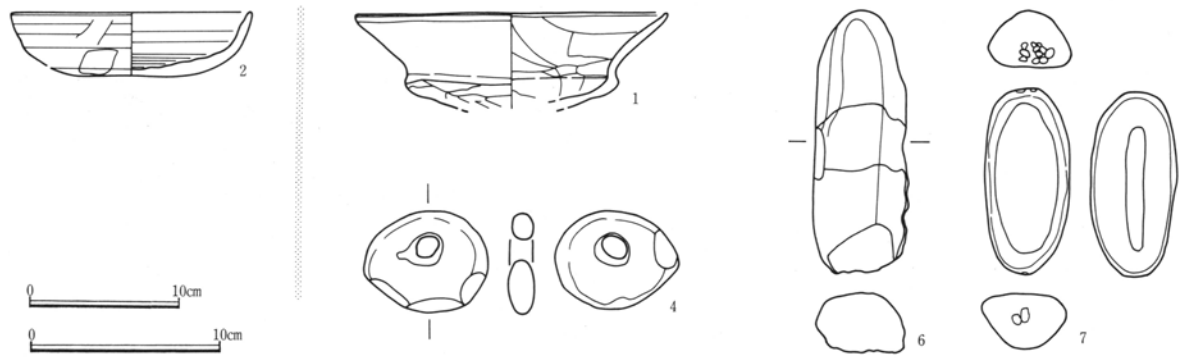
貯蔵穴はカマド右側に在って隅丸方形のプランを呈し、床から30cm程の深さの北半部と更に30cm程下がる南半部とに分けられるが、主要部分は径88×62cmを測る南半部であると判断される。また、柱穴は床面では北西の１基（柱穴３）のみの確認に留まったが、掘り方のピットの中に該当するもの（柱穴１・３・４）を特定することができた。尚、柱穴４は貯蔵穴北半部に位置している。

Ｈ－60号住居（奈良時代．第133～134図．図版27・71・93）

概要　本住居はＢ区南東部の調査区南端近くの緩斜面上に位置する小型の竪穴住居跡である。本住居はＨ－61・Ｈ－62号住居と重複するが、本住居はこの２軒を切っている。

本住居の遺存状況は不良であり、壁面はかろうじて確認することができたが、南東隅部に位置していたと判断されるカマドはほぼ滅失したと言って良い状況であった。

本住居に伴うと判断された遺物には、７世紀後半期の特徴を持つ須恵器坏（2）があり、他にこも編み



第134図　Ｈ－60号住居出土遺物

石（3）が見られた。

一方覆土中からは、こも編み石（5,6）や垂飾（4）、磨石（7）などが見られた。また、６世紀後半所産と考えられる土師器高坏（1）が床面付近から出土したが、切り合い関係にあるＨ－61号住居との兼ね合いから本住居には伴わないものと判断した。

尚、本遺跡の時期については、本住居とＨ－61号住居出土遺物との関係から凡そ西暦700年を前後する時期の所産と考えたい。

規模　長軸：335cm　短軸：296cm　深さ：26cm
カマド　残存幅：凡そ60cm　残存奥行き：凡そ60cm

構造　本住居は方形のプランを呈し、掘り方を有する。掘り方は調査期間との関係からＨ－61・Ｈ－62号住居と一括して掘削したため、その分離が的確には行えなかったので把握が不充分ではあるが、掘り方には北壁から西壁にかけての壁際に幅77～100cm、深さ10cm程の周溝状の掘り込みが見られた・その北壁前の堀底には径24～38cm、深さ８～10cmのピットが３基、75～95cmの間隔で東西に並ぶ。このような構造を持つ掘り方を暗黒褐色土等で生め戻して床面を造り出している。

カマドは滅失していたが、東南コーナー部分に想定され、この部分に132×80cmの焼土面を確認している。

また、床面に於いても掘り方に於いても柱穴・貯蔵穴等を確認することはできなかった。

Ｈ－61号住居（奈良時代．第135図．図版27・72）

概要　本住居はＢ区南東部の緩斜面上、調査区の南端近くに位置する中規模の竪穴住居跡である。本住居はＨ－60・Ｈ－62号住居と重複しているが、Ｈ－60号住居には切られ、Ｈ－62号住居は切っている。

本住居の遺存状況は不良であり、住居南東部は床面も滅失してしまって掘り方でそのプランを確認できたに過ぎない。

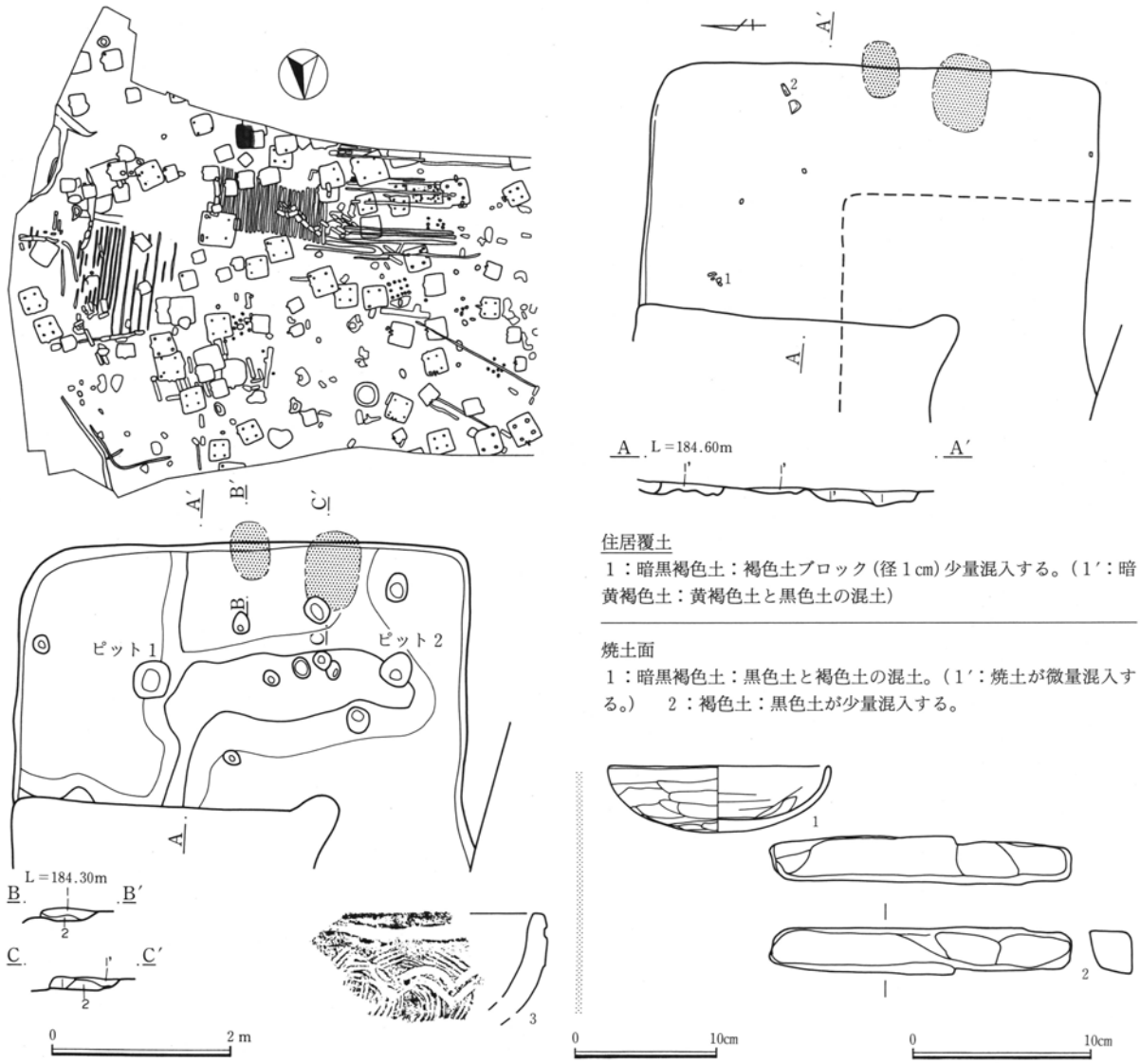
出土遺物は少なく、このうち本住居に伴う遺物には８世紀前半期の特徴を有する土師器坏（1）、こも編み石（2）が見られるに過ぎない。

また覆土中からは、土師器甕等、古墳時代後期から奈良時代の遺物が若干見られたが、中には縄文土器片（3）なども含まれていた。

このように、本住居の出土遺物は少なく、その時期を断定することはできないが、土師器坏（1）と切り合い関係にあるＨ－60号住居の出土遺物との関係から、本住居は凡そ西暦700年前後の時期の所産として把握されるものと想定されるのである。

規模　長軸：579cm未満　短軸：506cm　深さ：３cm
第１焼土面　径：67×45cm　　第２焼土面　径：64×89cm
掘り方　　ピット１　径：42×40cm　深さ：44cm
ピット２　径：38×33cm　深さ：53cm

構造　本住居は上述のようにＨ－60・Ｈ－62号住居と切り合い関係にあり、特に北壁がＨ－60号住居と重なり合い、南壁が西側で路線外に出るため西壁の



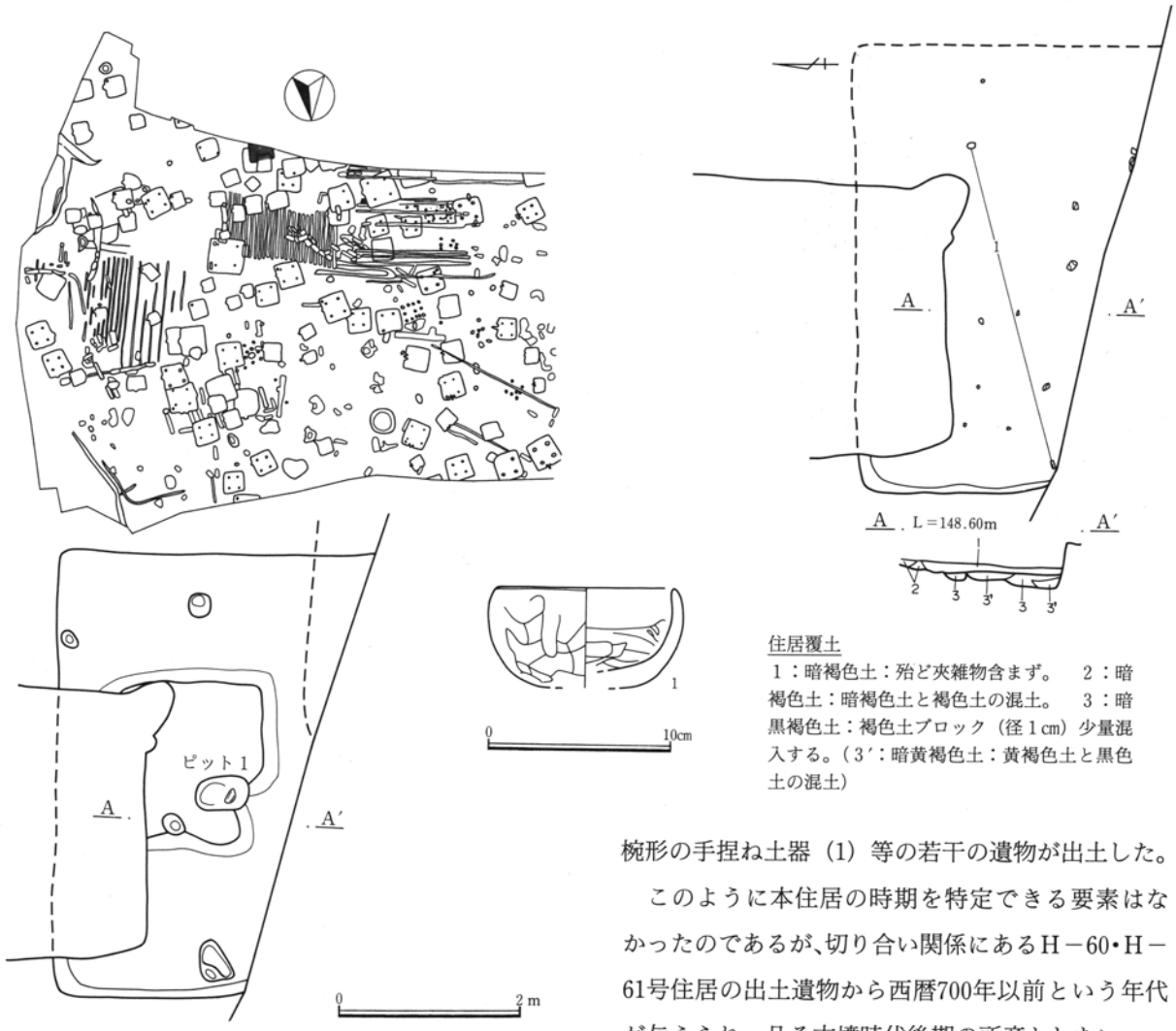
第135図　Ｈ－61号住居及び出土遺物

位置を特定することができなかった。従ってその全体の形状は不明であるが、本住居は隅丸方形または方形のプランを呈するものと推定される。

本住居は掘り方を有するが、東部のやや南寄りの位置に南北182～282cm、東西193cm以下の東半部が低くなる掘り残し部を設け、その南・西・北側が５～13cm程の深さに掘り込まれている。この他、幾つかのピットが見られた。そしてこのような構造を持つ掘り方を黒色土と褐色土で埋め戻して床面を造り出している。

カマドは滅失していたが、東壁を跨ぐように焼土面が確認されたので東カマドであったものと想定される。この焼土面は東壁の中央及びやや南寄りに位置し、何れも上述の掘り方の掘り残し部に位置しており、カマドの燃焼面に拘わるものの痕跡と推定される。２つの焼土面は20cm隔たって遺存しておりカマドの作り替えと想定されるが、この距離はＤ区のＨ－134号住居の同一壁面の２つのカマドの距離との比較に於いてやや近過ぎるものの、同時併存していたことを否定できる距離でもない。

本住居の床面に於いては、貯蔵穴・柱穴は確認されなかった。尚、柱穴については掘り方に見られたピット１・２及びＨ－162号住居掘り方のピット１に位置的にその可能性を求めることができよう。



第136図　Ｈ－62号住居及び出土遺物

Ｈ－62号住居（古墳時代後期．第136図．図版27・72）

概要　本住居はＢ区南東部の調査区際位置する竪穴住居跡で、Ｈ－60・Ｈ－61号住居と重複関係にあるが、本住居は双方の住居に切られている。

遺存状況は良くなく、特に東部は床面すら失われ、また、南部は路線外に出てしまっている。

本住居の出土遺物は少なく、本住居に伴うと推定される遺物は確認されなかった。また覆土中からは椀形の手捏ね土器（1）等の若干の遺物が出土した。

このように本住居の時期を特定できる要素はなかったのであるが、切り合い関係にあるＨ－60・Ｈ－61号住居の出土遺物から西暦700年以前という年代が与えられ、凡そ古墳時代後期の所産としたい。

規模　想定長：486cm　残存幅：348cm　深さ：23cm

掘り方　ピット１　径：59×38cm　深さ：51cm

構造　本住居は概ね方形のプランを呈するようで、中央やや北寄りに197×179cm程を測る掘り残しを有する掘り方を持つ。掘り方には他にピット様の掘り込みが幾つか見られる。ピットもその一つで南北２つのピットが若干重なったと思われるものである。このうち南側のものは礫が入っており、上述のようにＨ－61号住居の柱穴である可能性を有する。

尚、カマド・貯蔵穴・柱穴等は確認されなかった。

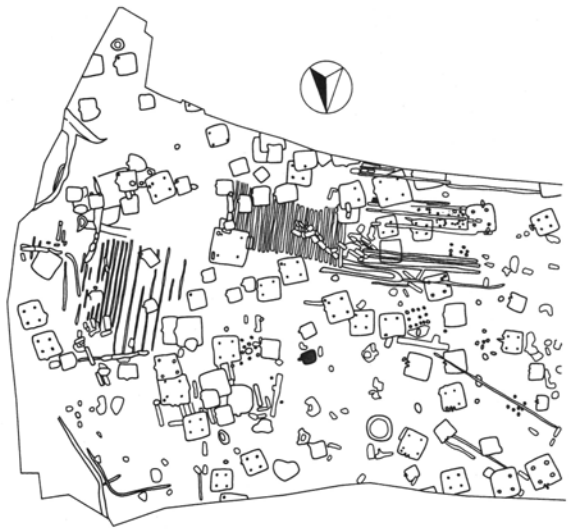
Ｈ－63号住居（古墳時代後期か．第137～138図．図版27・72・93）

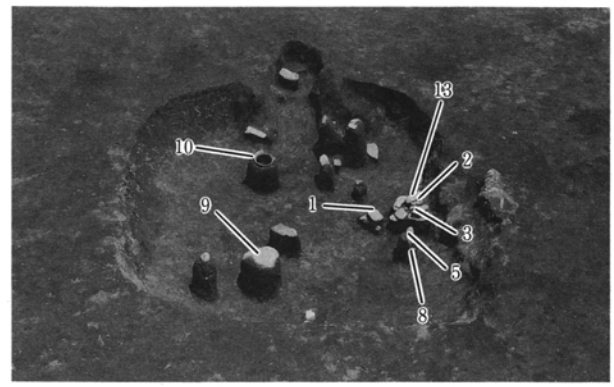
概要　本住居はＢ区中央部の平坦部に位置する小型の竪穴住居跡である。

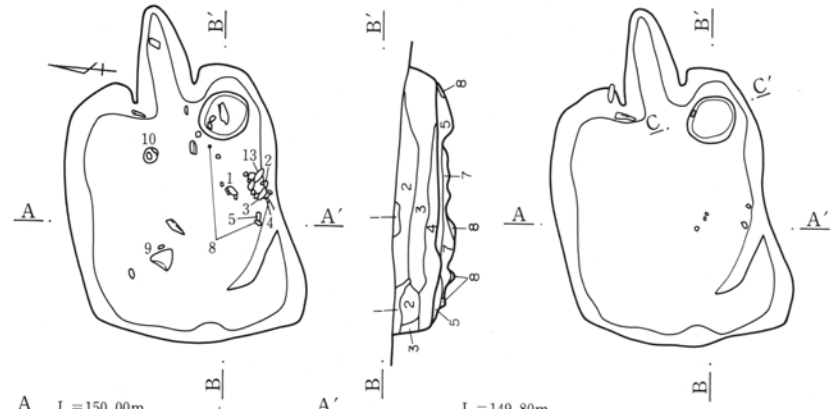
単独で遺存し、切り合い関係等は無い。

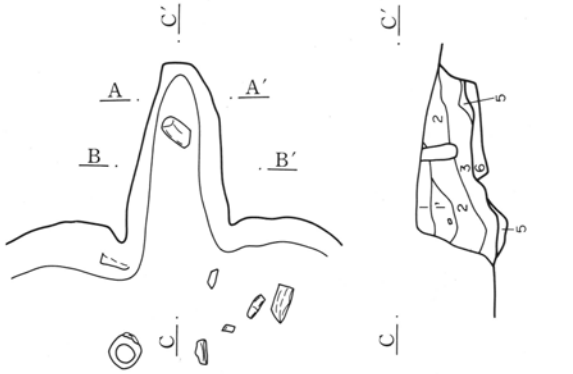
出土遺物のうち本住居に伴うものに時期を示せるものはなく、こも編み石（1～5）が見られた。

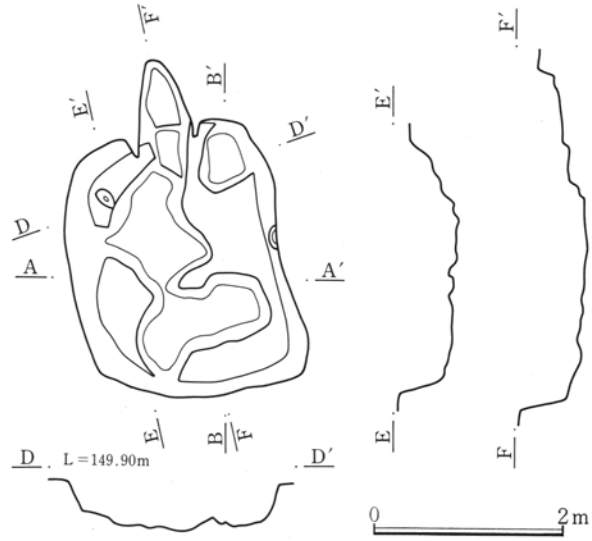
一方、覆土中からは古墳時代後期から奈良・平安











0　1m

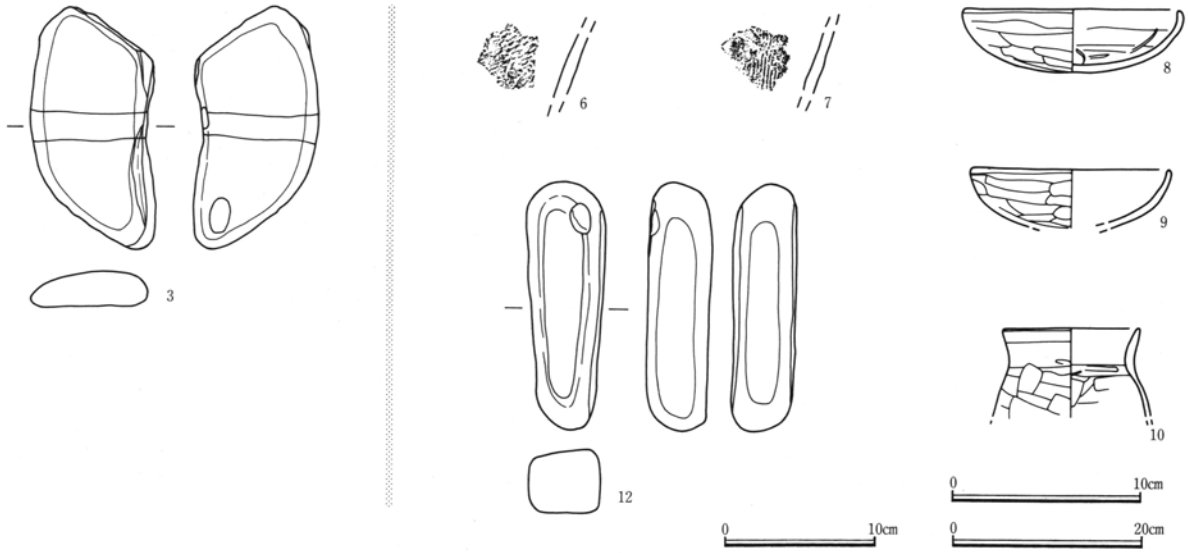
0　2m

攪乱
１：褐色土：As-Aをやや多く含む。
住居覆土
２：褐色土：やや黄色味を帯びた褐色土小ブロックやや多く含む。　３：暗褐色土主体。　４：褐色土主体。締まり良い。
貼り床
５：暗黄褐色土：ローム粒やや多く含む。締まり良い。
住居掘り方覆土
６：暗褐色土主体。締まりやや悪。　７：暗褐色土：褐色土とロームブッロクをつき固めた層。　８：暗黄褐色土：汚れたローム粒主体。やや締まり悪。

貯蔵穴覆土
１：暗赤褐色土：焼土粒やや多く含む。　２：暗褐色土主体。

カマド覆土
１：暗褐色土主体。（１′：炭化物・焼土粒増す。）　２：暗赤褐色土：焼土粒多く含む。　３：暗赤褐色土：炭化物粒２層より多し。４：灰褐色土：汚れた白色粘土主体。　５：暗黄褐色ローム主体。
カマド掘り方覆土
６：暗黄褐色土：軟らかく淡い色調のロームブロック主体。

第137図　Ｈ－63号住居



第138図　Ｈ－63号住居出土遺物

期頃の土師器甕などが出土し、中に、縄文早期の土器片（6～7）や磨石（11～13）、西暦700年を前後する時期の土師器坏(9、8)、９世紀前半期の土師器甕（10）の他、火打ち石（14）も見られた。

以上のように、本住居の時期を特定できる遺物は見られなかったが、覆土中の遺物は住居の埋没は少なくも西暦700年前後の時期には始まっていたことを示しており、カマドの存在と併せて本住居は概ね古墳時代後期の所産と判断されるのである。

規模　長軸：287cm　短軸：228cm　深さ：35cm
カマド　幅：78cm　奥行き：107cm　左袖　上幅：8cm　下幅：57cm　長さ：29cm　高さ：38cm
右袖　上幅：５cm　下幅：29cm　長さ：18cm　高さ：38cm　燃焼部　径：39×23cm　深さ：１cm
煙道　幅：48cm　長さ：82cm
貯蔵穴　径：28×25cm　深さ：14cm

構造　本住居は隅丸方形様のプランを呈するが、その形態はやや不整形である。中央に向かって緩やかに落ち込んで行く擂鉢様の形態を呈する掘り方を有し、これを褐色土やローム等の土で埋め戻して床を造り出している。

カマドは東カマドで東壁中央付近に造られ、住居規模に対して大きい。カマドは浅い掘り方を有し、これをローム等の土で埋め戻して燃焼部と煙道を造り出している。燃焼部は平坦で壁面ラインのほぼ外側に在り、煙道は緩傾斜を呈する。燃焼部の両側には短い袖を有する。

貯蔵穴はカマド右側手前に掘られているが、円形に近いプランを呈し、掘り込みは浅い。尚、柱穴は検出されなかった。

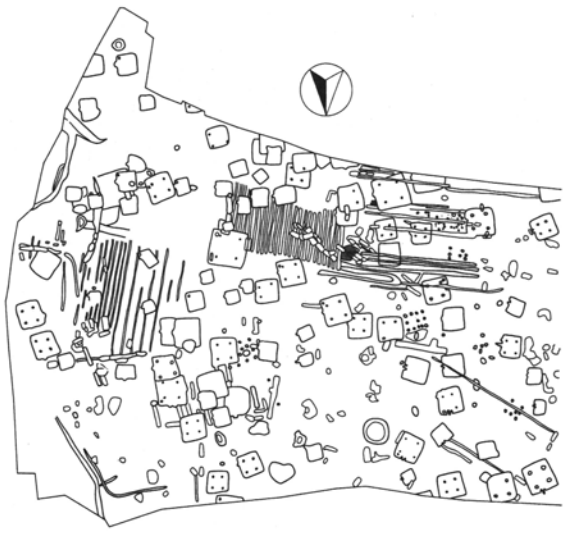
Ｈ－64号住居（古墳時代後期～平安時代．第139図．図版27・72）

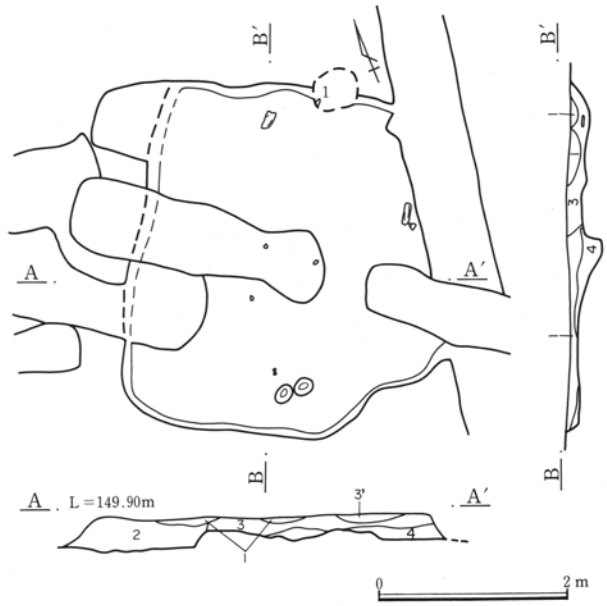
概要　本住居はＢ区中南部に位置するＢ区に於いては中～小型に属する竪穴住居跡である。

本住居の周囲は耕作溝・土坑が多く在り、これらにより本住居は切られて南壁の過半は滅失し、床面等もあまり明瞭に識別することはできなかった。

ところで、本住居の出土遺物はかなり少なく、本住居に伴うと判断された遺物には僅かにこも編み石１点（1）があるに過ぎなかった。一方、覆土中からは土師器甕などと共に、８世紀代の所産かと思われる須恵器坏（2）の出土が見られた。

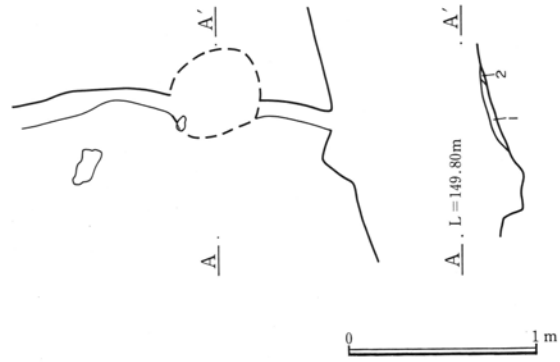
このように、出土遺物は少なく本住居の時期を特定することはできなかった。尤も本住居はカマドを伴っているため古墳時代後期以降、平安期頃までの所産でということはできよう。

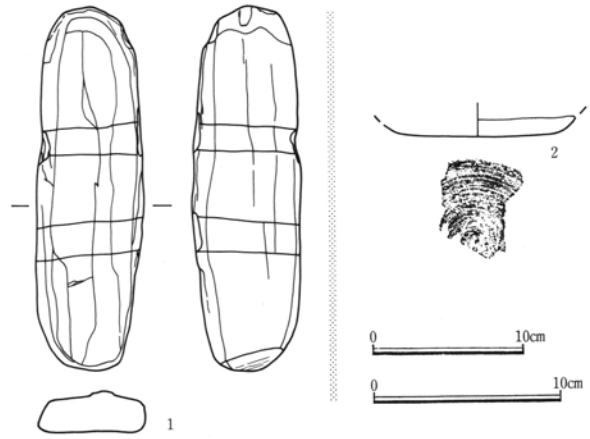




耕作に伴う攪乱
１：黒色土：As-Aを少量含む。　２：暗褐色土：ローム多量に混入。
住居覆土
３：暗褐色土：褐色土若干量混入する。（３′：３層に比し褐色土の混入が減少）　４：黒褐色土：褐色土ブロックが黒色土に少量混入。（掘り方の可能性を持つ）

カマド覆土
１：暗赤褐色土：白色土・焼土若干量混入。　２：暗黄褐色土





第139図　Ｈ－64号住居及び出土遺物

規模　長軸：372cm　短軸：354cm以上　深さ：18cm
カマド　燃焼部　径：48×42cm

構造　上述のように本住居は攪乱等による破壊が進行するため全体の状況はつまびらかでないが、本住居のプランは隅丸方形を基本とし、西南部には張り出しが設けられていたものと想定される。

また、判然とはしないが、本住居は掘り方を持っていたと推定され、住居覆土－４層はその埋土で床面を形成していた層である可能性を持つ。

カマドは東カマドで、ほとんど滅失していたが、浅い掘り方を埋め戻して燃焼部を作るようである。

貯蔵穴・柱穴は確認されなかった。また、西部に浅い小ピットが認められたが、本住居に伴うものかどうかは特定できなかった。

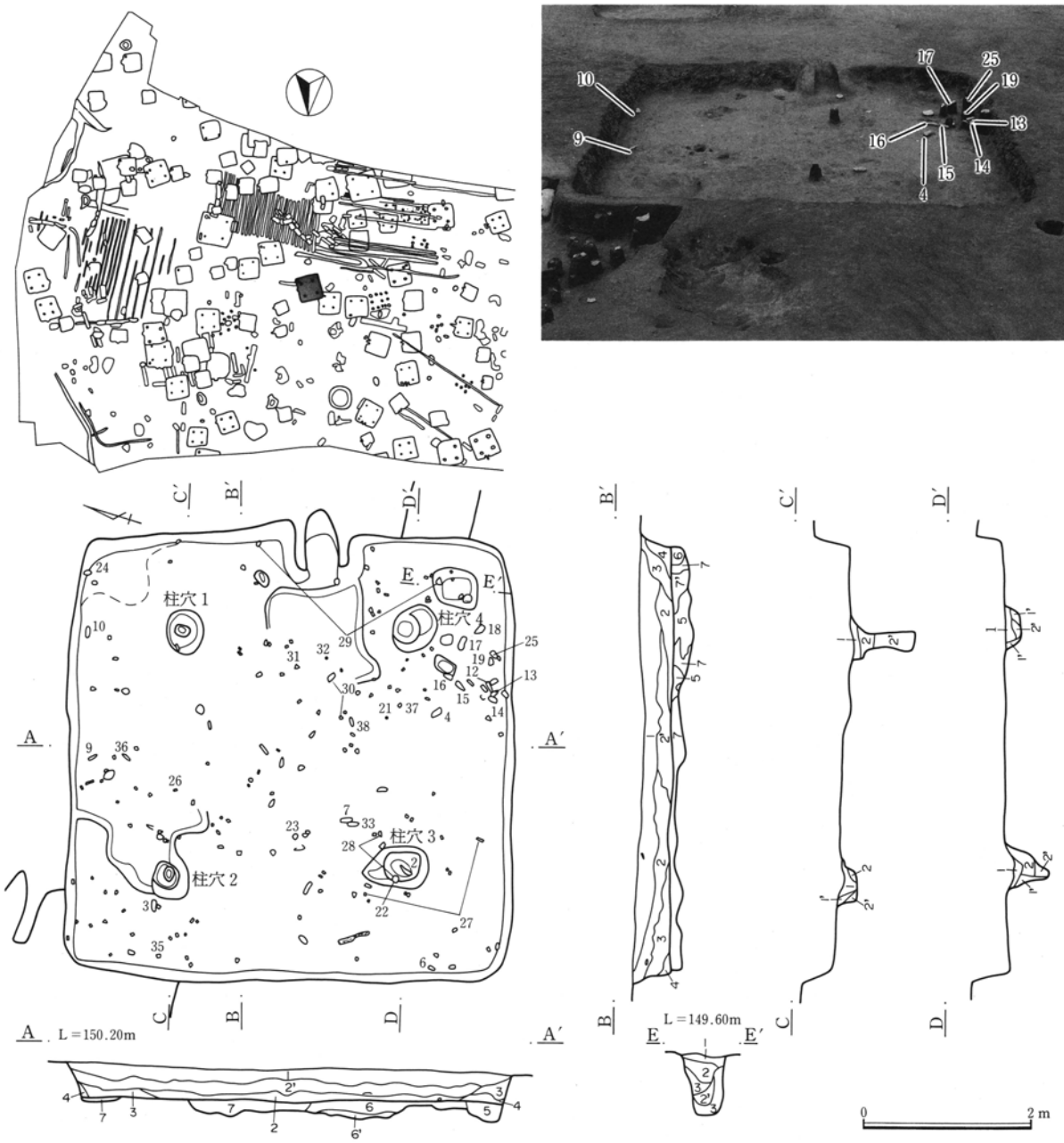
Ｈ－65号住居（古墳時代後期．第140～142図．図版27～28・72・93～94）

概要　本住居はＢ区のほぼ中央の平坦部に位置するＢ区に於いては大型に属する竪穴住居跡である。

遺存状況は良好で、本住居は北西隅部に於いてＨ－66号住居と重複関係にあり、これを切っている。

出土遺物のうち本住居に伴うものには６世紀後半期の土師器坏（1）があり、土師器甕（2）や、南壁際を中心に多くのこも編み石（3～20）が出土した。

一方覆土中からは古墳時代後期の土師器甕を中心に、縄文土器片(21,22)、磨石(23,24,38)、敲石(25)、



住居覆土
１：暗褐色土：白色土粒を比較的多量に含む。　２：暗褐色土主体。（２′：微量の焼土粒入る。）　３：暗褐色土：粒子粗く褐色土粒少量含む。　４：暗黄褐色土：くすんだ褐色土と暗褐色土の混土。
住居掘り方覆土
５：暗黄褐色土：くすんだ褐色土とロームブッロクと黒色土の混土。６：暗黄褐色土：くすんだ褐色土を主体とし、灰白色粘土ブロックと黒色土少量混入。（６′：灰白色粘土ブロック相当量含む。）
７：暗茶褐色土：黒色土少量混入。（７′：ロームブッロク混入。）

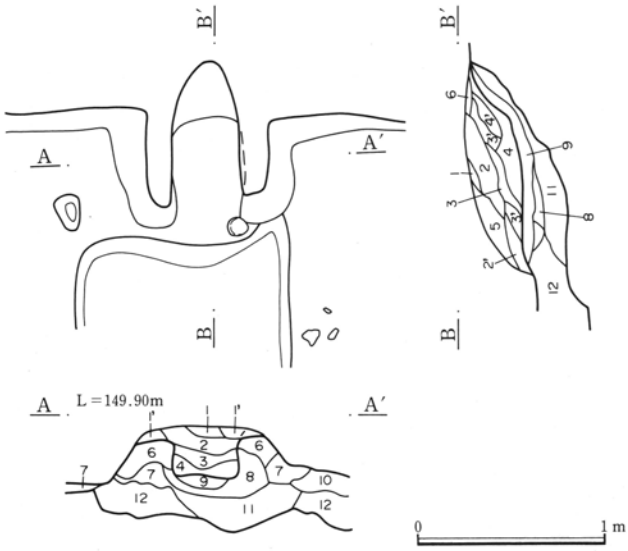
柱穴覆土
１：暗黒褐色土：暗黒褐色土中に褐色土ブロック少量含まれる。（１′：褐色土ブロック小粒となり混入量増す。）　２：暗茶褐色土：暗茶褐色土と褐色土の混土。（２′：暗茶褐色土中に褐色土混入。）

貯蔵穴覆土
１：黒色土　２：黒褐色土：褐色土少量混入。（２′：褐色土微量に混入。）　３：暗褐色土：黒色土少量混入。

第140図　Ｈ－65号住居

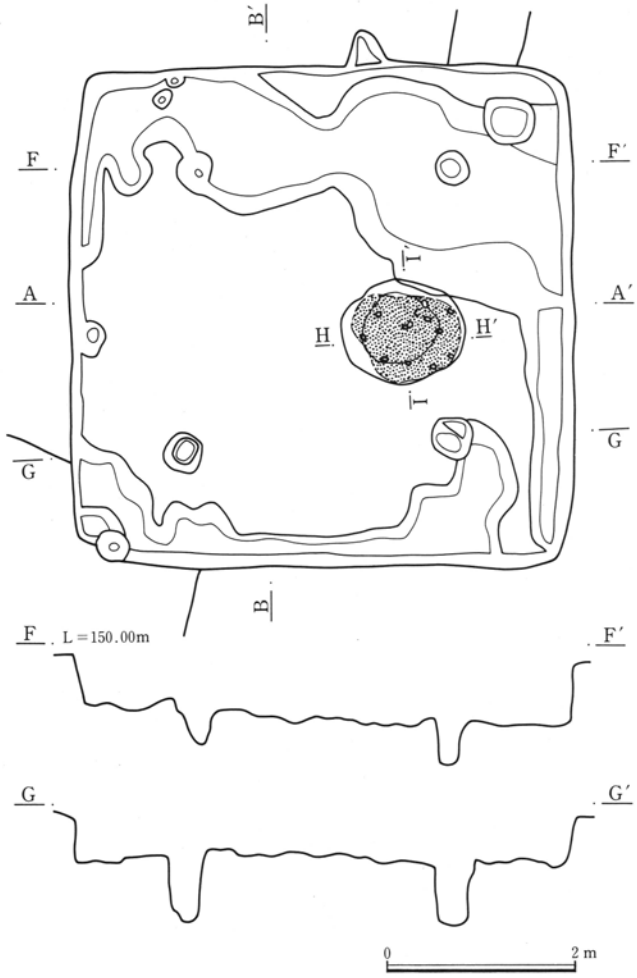
フレーク（37）といった縄文時代の遺物、或いは弥生土器片（26）も見られ、その他西暦600年を前後する時期の土師器の坏（28、27）・小型胴張甕（29）・（30）や須恵器蓋（31）、そして臼玉（32）やこも編み石（33～36）も見られた。

以上のように時期を特定できる遺物は少なかった

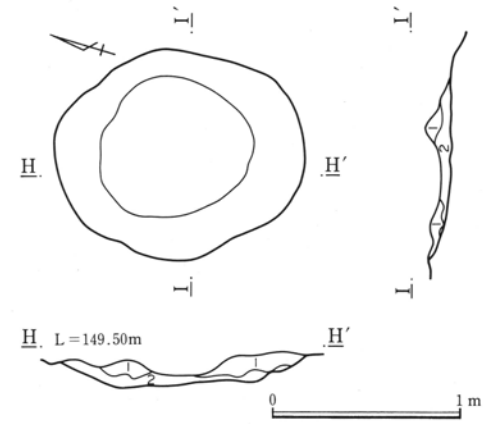


カマド覆土
１：灰暗褐色土：微量の焼土・粘土粒混入。（1′：粘土微量に含む）　２：灰暗赤褐色土：比較的多量の焼土含む。（2′：粒子緻密。ローム微量に含む）　３：灰白色土：多量の灰を含む。（3′：焼土微量に含む。）　４：赤褐色土：焼土ブロック主体。（4′：焼土ブロックと灰白色粘土の混土）　５：褐色土：焼土少量含む。
袖構築材
６：灰白色粘質土主体。強い粘質土。右袖上部は左袖ほど顕著な形で粘質土は入ってこないが、粘質土の混入は十分に観察できる。　７：暗褐色土：粒子緻密。所々に白色粘質土混入。　８：赤褐色土：焼土ブロック。
カマド掘り方覆土
９：赤黄褐色土：黄褐色土中に焼土少量混入。　10：暗褐色土：焼土極く微量に混入。　11：暗黒褐色土：暗黒褐色土と淡暗茶褐色土の混土。　12：暗黄茶褐色土：黒色土微量混入。

床下粘土坑覆土
１：黄褐色土：灰白色粘質土を微量に含む。　２：黄褐色土：灰白色粘質土ブロックを若干量含む。



第141図　Ｈ－65号住居カマド及び掘り方



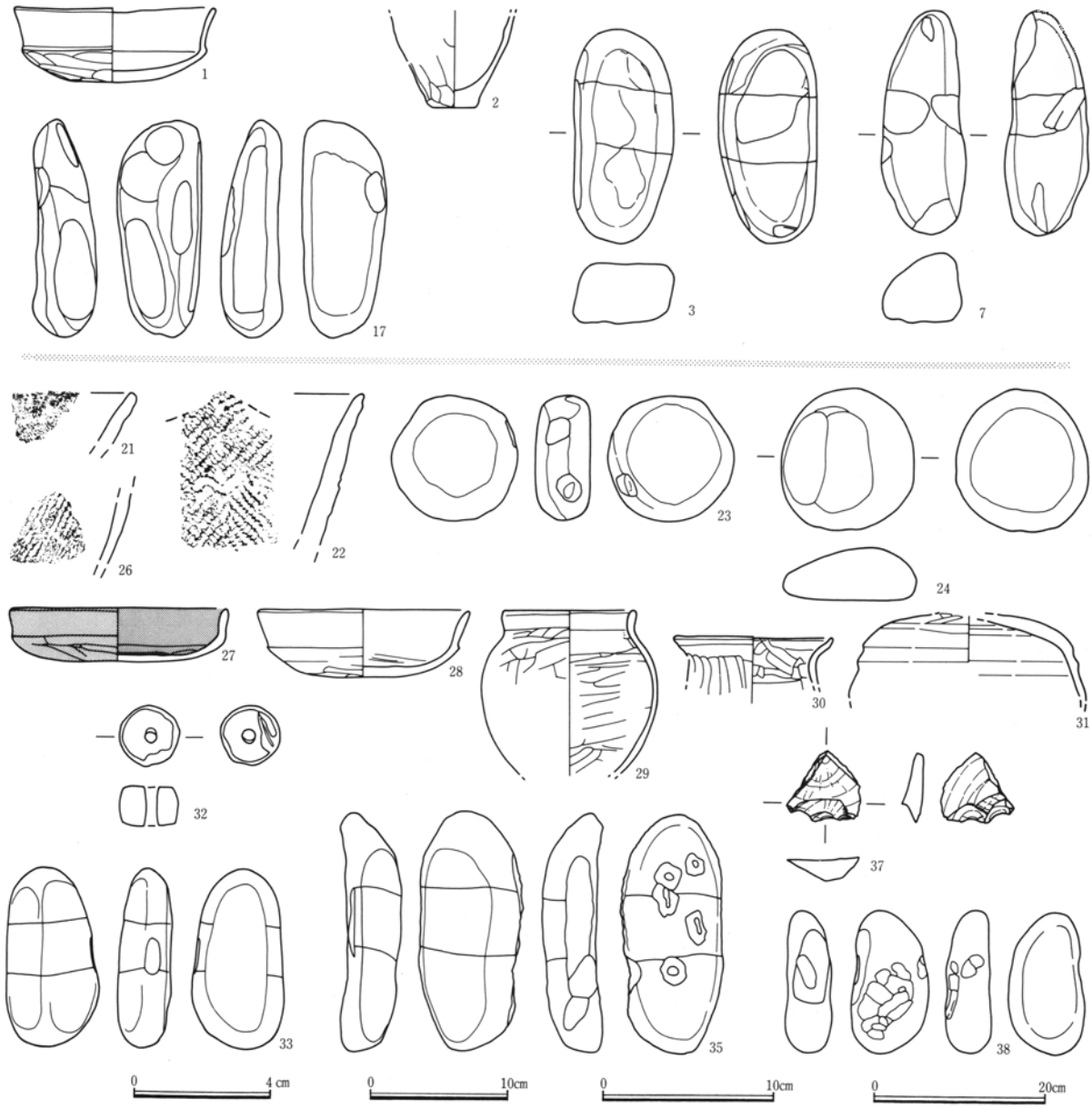
が、切り合い関係にあるＨ－66号住居の出土遺物の状況も鑑みて本住居は西暦600年前後の所産として把握したい。また、覆土中の遺物から本住居は住居廃絶後比較的早い時期に埋没が始まり、奈良・平安期頃までは窪地としてその痕跡を留めていたことが窺われる。

規模　長軸：544cm　短軸：533cm　深さ：46cm

カマド　幅：97cm　奥行き：96cm　左袖　幅：33cm　長さ：63cm　高さ：26cm　右袖　幅：28cm　長さ：54cm　高さ：27cm　燃焼部　径：38×57cm　深さ：3 cm　煙道　幅：36cm　長さ：29cm

柱穴１　径：52×45cm　深さ：45cm　柱穴２　径：43×約50cm　深さ：83cm　柱穴３　径：80×51cm　深さ：75cm　柱穴４　径：60×46cm　深さ：74cm

貯蔵穴　径：54×45cm　深さ：72cm



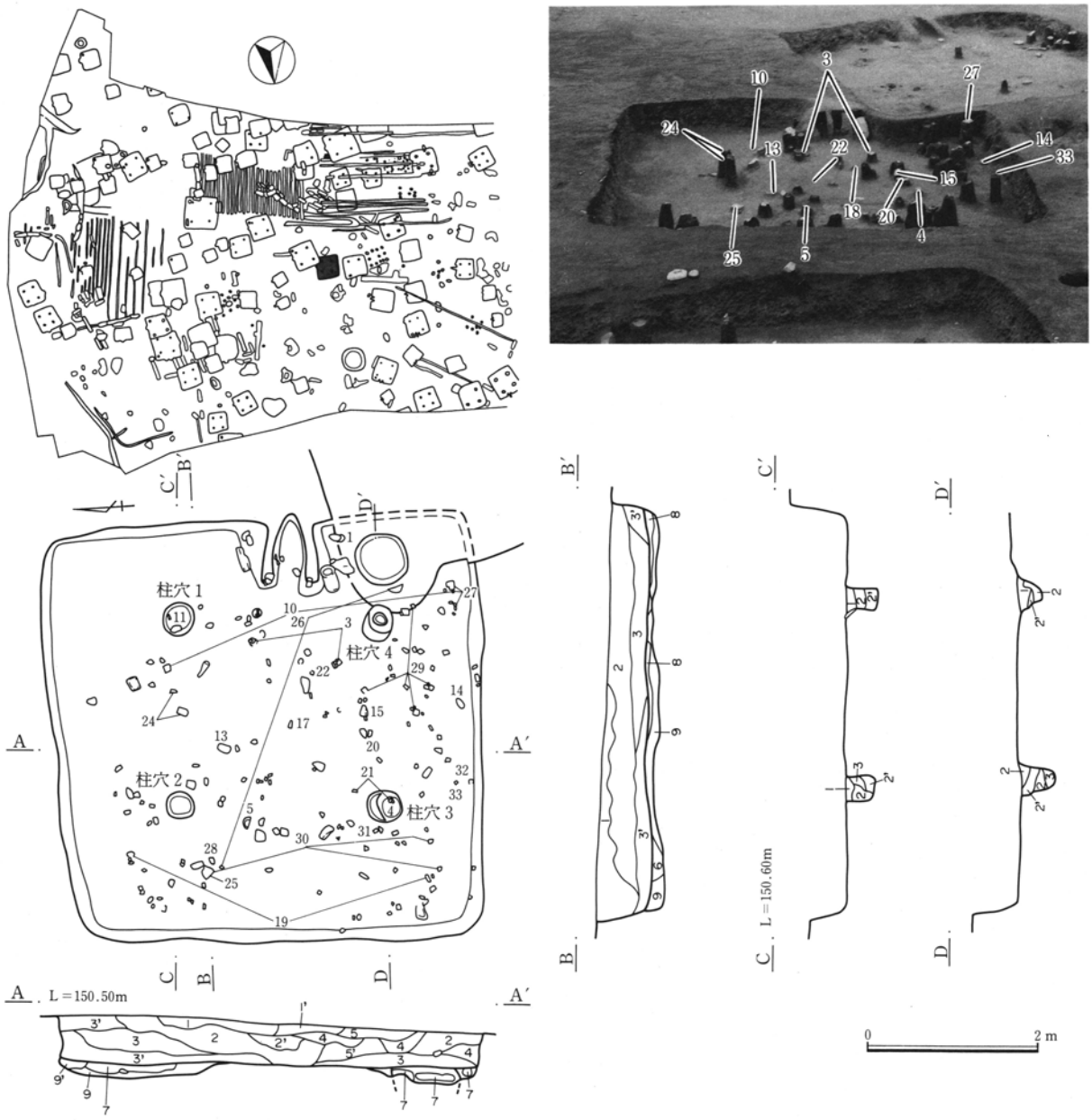
第142図　Ｈ―65号住居出土遺物

床下粘土坑　径：131×110cm　深さ：16cm

構造　本住居は方形のプランを有する。南・西壁際に幅30cm程、深さ８cm以下の浅い周溝状の掘り込みと、東部にも深さ10cm内外の幅広の掘り込みを有する掘り方を持つ。掘り方の中南部には灰白色粘土を少量含む黄褐色土が貼り付いた床下粘土坑が見られ、この上面には土師器甕底部等の土器が見られた。

カマドは東カマドで掘り方を有し、これを黒褐色土やローム等掘り出した土で埋め戻して燃焼部を造る。その両側に袖を持つが、袖に袖材等は使用されず、先づその位置に暗褐色粘性土で低い土盛りをし、その上・外側に灰白色粘土を盛って仕上げている。この２段構造については灰白色質土の不足による場合と、暗褐色粘性土と灰白色粘土の性質の違いによる使い分けといったことが想定される。

床面に於いては主柱穴４基と貯蔵穴が見られた。この内柱穴は断面及び平面観察から、柱材は丸木材で径15～20cm程であったと想定され、貯蔵穴は隅丸方形プランのしっかりした掘り方である。尚、床面はカマド前と柱穴３の付近で多少窪んでいる。



住居覆土
１：暗褐色土：白色土粒・褐色土粒少量含む。（１′：更に多量の褐色土含む。）　２：暗褐色土：褐色土粒・くすんだ褐色土ブロック多量に含む。（２′：夾雑物ほとんど含まず。）　３：暗茶褐色土：粒子緻密な暗茶褐色土中に褐色土微量に混入。（３′：褐色土の混入減少）　４：黒褐色土：褐色土粒少量含む。　５：暗茶褐色土：暗茶褐色土主体に明褐色土若干量混入。（５′：明褐色土がブロック化して明確な形で混入）
住居掘り方覆土
６：黒色土：淡褐色ロームブロック若干量混入。　７：暗黄褐色土：淡黄褐色土ブロックと暗褐色土の混土。　８：暗黒褐色土：ローム少量混入。　９：暗黄褐色土：暗黄褐色土中に淡黄褐色土ブロック微量に入る。（９′：淡黄褐色土ブロック殆ど見られない）

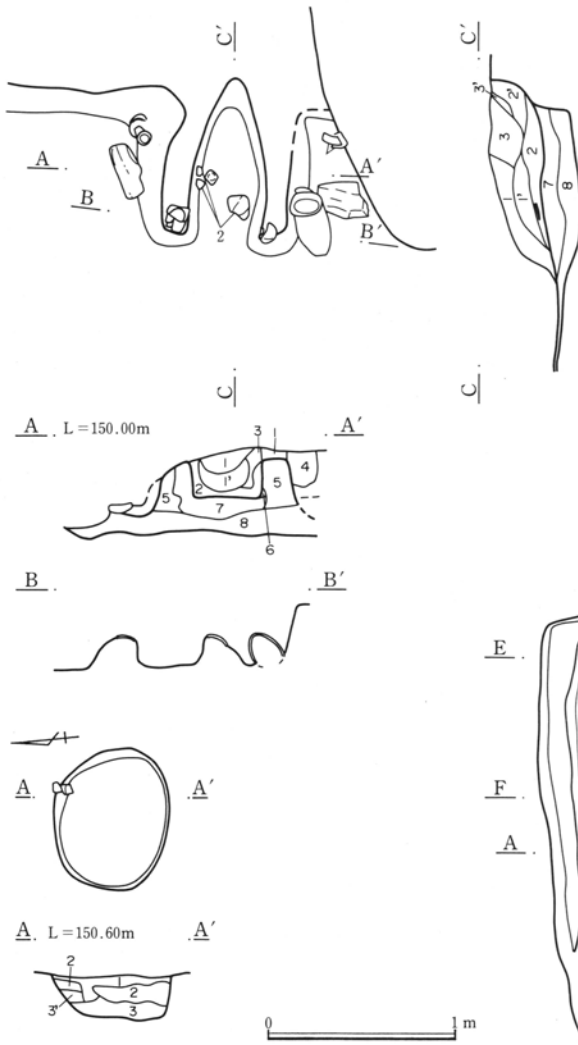
柱穴覆土
１：暗褐色土：黒色土少量含む。　２：暗褐色土：褐色土ブロック少量含む。（２′：夾雑物見られず。）　３：暗黄褐色土：夾雑物見られず。

第143図　Ｈ－66号住居

Ｈ－66号住居（古墳時代後期．第143～145図．図版28・72～74・94）

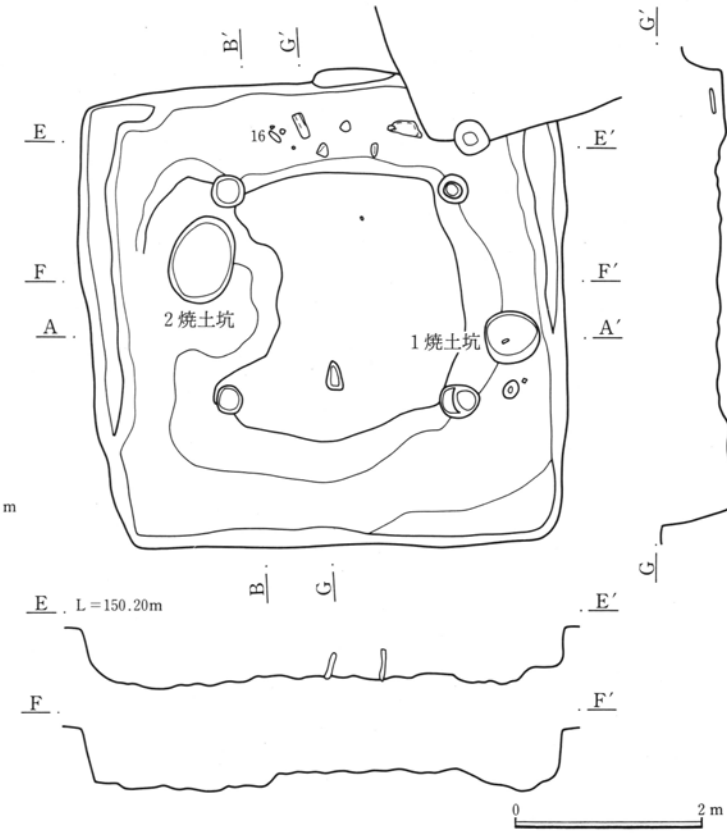
概要　本住居はＢ区中央部に位置する竪穴住居跡で、南東隅部でＨ－65号住居と接し、これに切られる。

出土遺物のうち本住居に伴う可能性を持つものには６世紀前半期の特徴を持つ土師器坏（2,3）がある一方、西暦600年前後の時期の土器群（1、4,5/6/7、11）も見られ、他に石製模造品（12）などの遺物も見ら



カマド覆土
１：暗褐色土：焼土粒微量。（1′：１層に比し焼土粒多量。）　２：赤暗褐色土：焼土ブロック多量。焼けただれ堅く締まる。（2′：赤褐色土：焼土減少。）　３：赤暗褐色土：焼土ブロック若干含む。（3′：赤褐色土：焼土ブロック少量。）　４：暗褐色土：ローム微量。
袖構築材
５：黄褐色土：均質的な黄褐色土（ローム）の純層。粘土の使用は見られない。　６：赤褐色土：黄褐色土と焼土の混土。
カマド掘り方覆土
７：暗赤褐色土：焼土ブロックと暗赤褐色土粒の混土。　８：黒褐色土：黒色土と褐色土の混土。

床下第１焼土土坑覆土
１：暗褐色土：粒子均質。若干砂質。焼土粒・黒色土微量。２：暗茶褐色土：暗茶褐色土と暗黄褐色土の混土。　３：暗褐色土：焼土ブロックを比較的多量に含む。床下第１焼土土坑の範囲はの面で確認。（3′：焼土の混入微量）



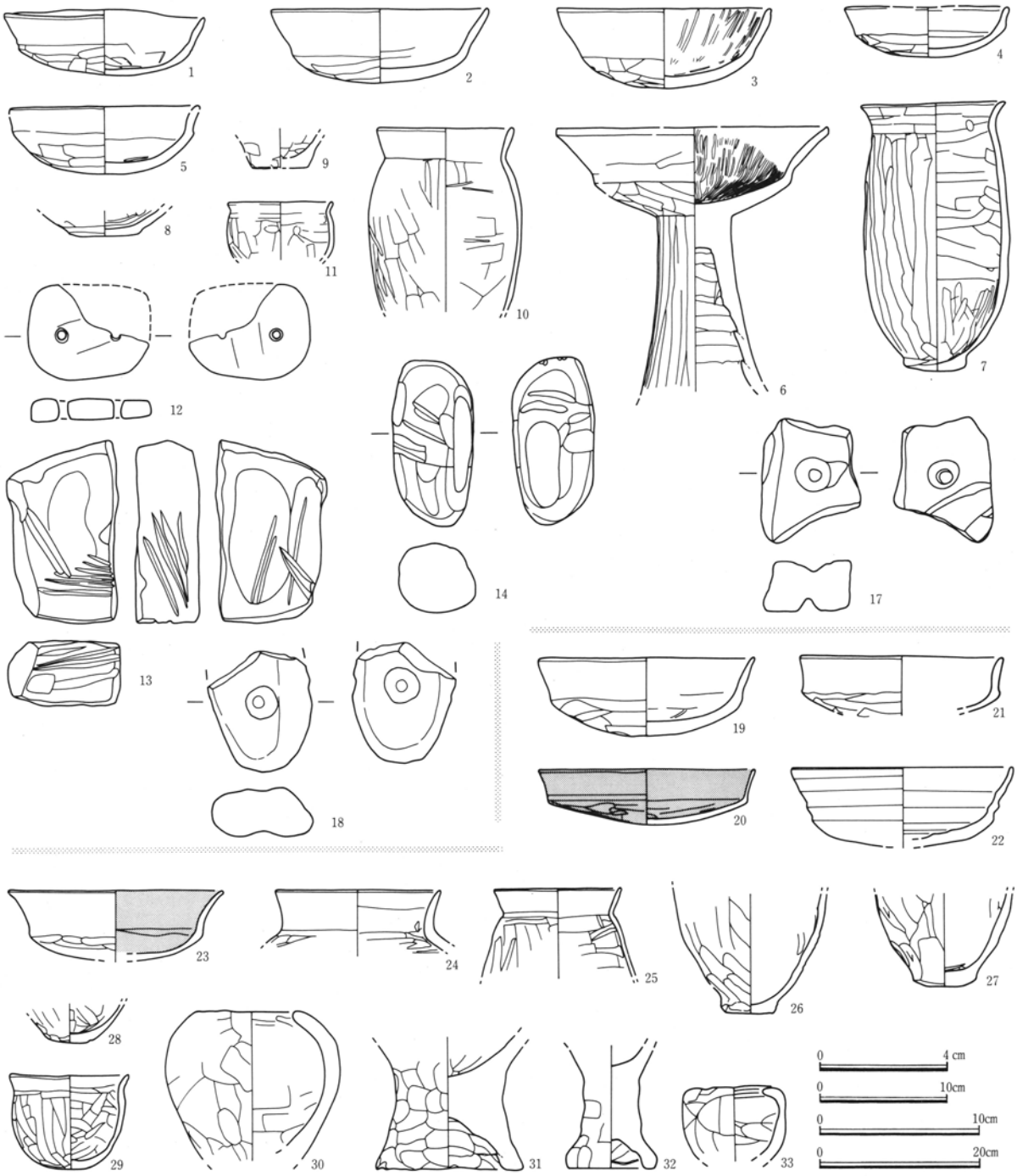
第144図　Ｈ―66号住居カマド及び掘り方

れた。

一方、覆土中からは６世紀前・中葉頃の土器群（23-19/32）や、西暦600年を前後する時期の土器群（21-20/24～27・29/22）が出土する他、異形の脚付甕（30・31）なども見られた。

上述のように本住居に伴う可能性を持つ遺物には、６世紀前半期のもと、西暦600年前後の時期の一群とがあるが、カマドの右袖に立て掛けられた土師器甕等から本住居は西暦600年前後の所産と判断し、６世紀前半期のものは伝世品と想定される。また覆土中の遺物から、平安期頃までは窪地として痕跡を留めていたものと推定される。

規模　長軸：518cm　短軸：492cm　深さ：70cm
カマド　幅：100cm　奥行き：91cm　　左袖　幅：49cm　長さ：69cm　高さ：32cm　　右袖　幅：27cm　長さ：76cm　高さ：34cm　　燃焼部　径：31×71cm
柱穴１　径：37×36cm　深さ：33cm　　柱穴２　径：32×31cm　深さ：34cm　　柱穴３　径：42×39cm　深さ：39cm　　柱穴４　径：41×34cm　深さ：37cm
貯蔵穴　径：61×61cm　深さ：22cm
床下第１焼土坑　径：58×36cm　深さ：13cm　　床下第２焼土坑　径：92×67cm　深さ：16cm

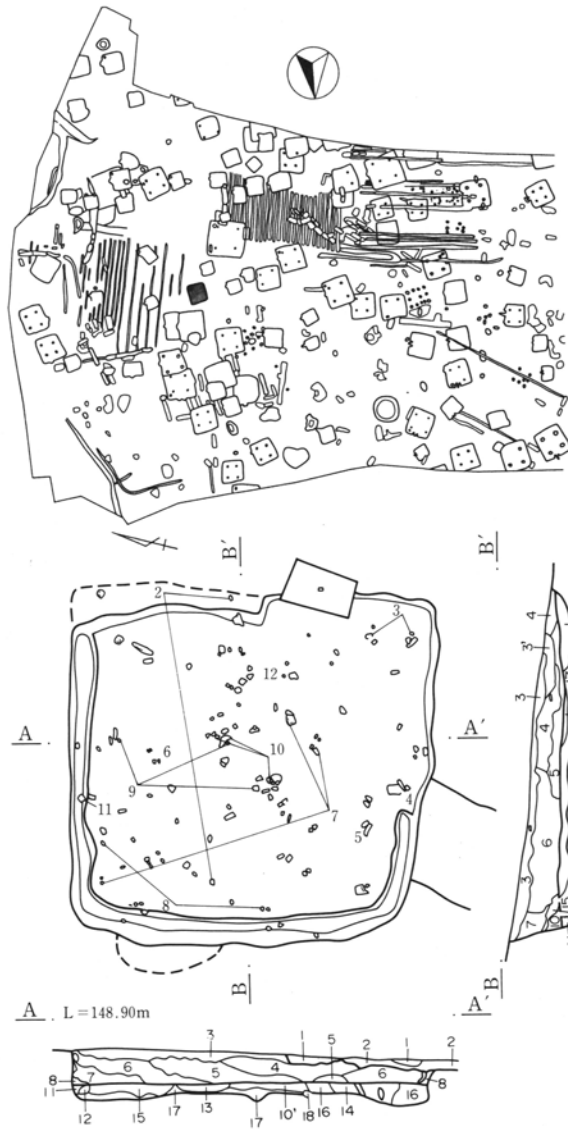


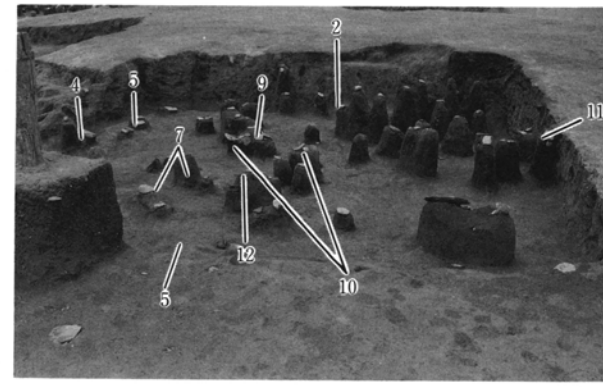
第145図　Ｈ―66号住居出土遺物

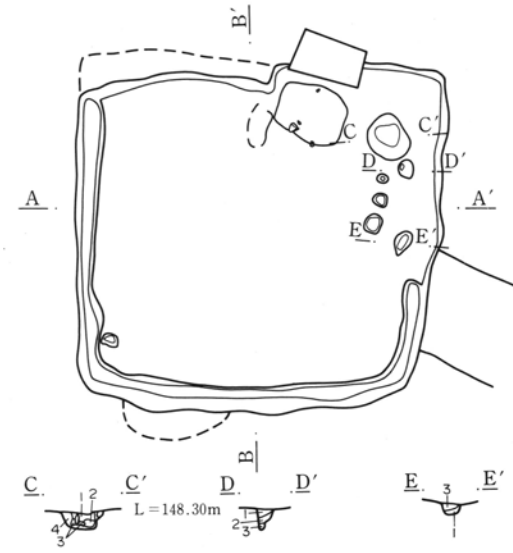
構造　本住居は方形プランを呈し、幅90cm内外、深さ15cm以下の周溝状の掘り込みを持つ掘り方を有する。掘り方には南北にそれぞれ一カ所の焼土の多く入った焼土坑を有し、何らかの燃焼行為が行われたようであるが、用途は不明である。こうした掘り方を暗黄褐色土等で埋め戻して床を造っている。

カマドは東カマドで、掘り方を黒褐色土等で埋め戻して燃焼面を造っている。燃焼部の両脇には土師器甕（8,9）を逆位に置いて袖材とし、黄褐色土等で固めて袖を造り上げている。

床面に於いては柱穴４基と貯蔵穴１基を確認した。前者は平面的には小型で、断面及び平面観察から径20cm程の柱材の存在が想定される。後者はカマド右側に在って、浅い掘り方を示す。







耕作土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）
１：現耕作土に似る。As-A多し。　２：灰褐色土：漸移層上層土主体。As-A純層を挟む。近世の削平か。　３：茶褐色土：漸移層土ブロック層。As-A多く含む。（３′：As-A少ない）
住居覆土
４：褐色土：漸移層上層土ブロック層。　５：暗茶褐色土：漸移層土とローム層土のブロック層。　６：暗褐色土：漸移層上層土のブロック層。ローム粒混入。　７：黒褐色土：黒色土と漸移層上層土のブロック層。　８：暗褐色土：漸移層上層土ブロックにロームブロック混入。　９：黄褐色土：ロームブロックに若干の漸移層土混入。　10：明黄褐色土：ロームブロック層。　11：８層土に同じか。
貼り床
10′：明黄褐色土：ロームブロック層。良く締まる。
住居掘り方覆土
13：明褐色土：ロームブロック層。本層下部に灰色シルトが面的に堆積する。　14：明褐色土：ロームブロックに漸移層土混入。　15：明褐色土：ロームと漸移層土・黒色土ブロックの混土。　16：暗褐色土：漸移層上層土ブロックに黒色土とロームの細かいブロック混入。　17：明黄褐色土：ロームブロックに若干の漸移層土部分的に混入。　18：暗灰色シルト。

貯蔵穴覆土
１：茶褐色土：ローム漸移層上層土ブロックに焼土・ローム粒含み、全体に弱い焼土化認められる。　２：茶褐色土：弱い焼土化見られるローム漸移層上層土ブロック層。　３：明褐色土：淡黄色ロームとローム漸移層土ブロック。　４：明褐色土：黄色・淡黄色ロームとローム漸移層下層土ブロックの混土。

ピット覆土
１：黒褐色土：黒色土とローム漸移層土ブロックの混土にロームブロック混入。　２：明褐色土：ローム漸移層下層土ブロックに黒色土ブロック若干混入。　３：明茶褐色土：ローム漸移層土の細かいブロックにローム粒混入。

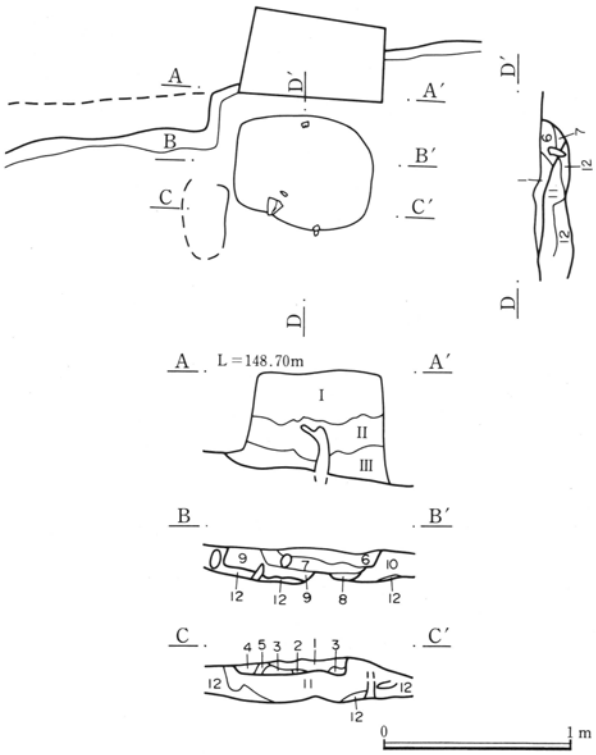
0　2 m

第146図　Ｈ－75号住居

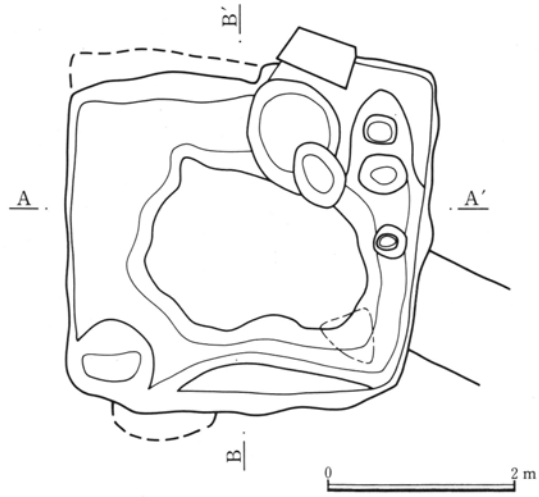
Ｈ－75号住居（奈良時代．第146～148図．図版28・74・94）

概要　本住居はＢ区中東部に位置する、Ｂ区に於いては中規模のものに属する竪穴住居跡である。

本住居の遺存状況は西壁側では比較的良好であったが、本住居付近には後述する近世削平面に連なると判断される傾斜面が在って、東壁はその過半が失われるなど東壁側の遺存状況は不良であった。加え



センター杭部分堆積土
Ⅰ：淡茶褐色土：現耕作土。 Ⅱ：暗褐色土：ローム漸移層上層土。
Ⅲ：明褐色土：ローム漸移層下層土。
カマド覆土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）
１：暗赤褐色土：焼土化見る漸移層上層土にカーボン粒等混入。
２：明褐色土：焼土化見る漸移層土とローム粒の混土。青灰色シルト粒・灰混入。　３：暗褐色土：灰と漸移層土の混土。弱く焼土化し焼土等混入。　４：暗褐色土：弱い焼土化見られる漸移層上層土に黒色土等混入。５：明褐色土：漸移層土と暗色ロームブロックの混土。　６：暗黄褐色土：漸移層下層土ブロックの混土。　７：淡赤茶褐色土：漸移層土ブロック層。全体に焼土化見られ焼土粒混入。８：茶褐色土：漸移層土主体。弱い焼土化見られ締まり欠。　９：暗黄褐色土：６層に似るが、部分的に焼土化し、焼土粒含む。
カマド掘り方覆土



第147図　Ｈ―75号住居カマド及び掘り方

て東壁のカマド付近には関越自動車道上越線（上信越自動車道）のセンター杭（STA.99＋80）が打設されており、これを残すために掘り残した土柱については可能な限り削り込んでいったものの、結果として遺構全体を調査することはできなかった。

さて、本住居の出土遺物はさして多くなかったのであるが、このうち本住居に伴う可能性を持つ遺物には８世紀前半期の特徴を示す土師器坏（1）や８世紀代の土師器甕（2,3）が見られた一方で、７世紀中葉の所産かと思われる土師器坏（4）が出土し、この他、こも編み石（5）の出土も見られた。

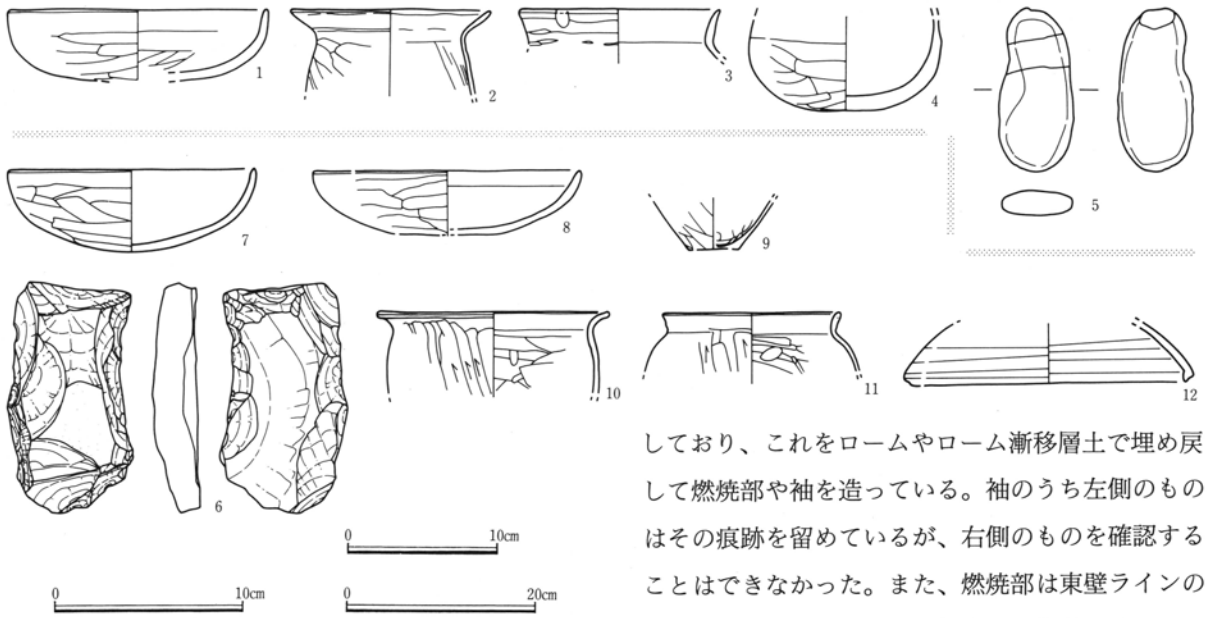
一方、覆土中からは不定形石器など（6）縄文時代の遺物の出土も見られたが、奈良・平安時代の土師器甕を中心とした遺物が出土しており、この中には西暦700年前後の時期のものと思われる土師器の坏（7,8）や甕（10）・胴張甕（11）、９世紀前半頃の所産と思われる土師器や須恵器の蓋（9,12）の他、砥石（13）なども見られた。

以上のように、本住居に伴う可能性を持つ遺物には７世紀中葉から８世紀代（前半期を含む）の所産と思われるものが見られたため、本住居は凡そ西暦800年を前後する時期の所産ということができよう。しかし、カマド右側で貯蔵穴の奥側に当たる位置からの出土遺物（1,3）が８世紀代のものであることから、本住居の時期としては８世紀前葉という時期を与えたいと思う。また覆土中の遺物の状況から、本住居は少なくも９世紀前半頃までは窪地としてその痕跡を留めていたことが想定される。

規模　長軸：392cm　短軸：371cm　深さ：53cm
カマド　幅：114cm以上　奥行き：残存78cm　左袖　幅：24cm　長さ：推定88cm　高さ：5cm　燃焼部　径：73×80cm　深さ：５cm
貯蔵穴　径：48×40cm　深さ：20cm
周溝　幅：30cm　深さ：10cm

構造　本住居は概ね隅丸方形のプランを呈する。

本住居は掘り方を有するが、掘り方には幅35～86cm、深さ14cm以下の周溝状の掘り込みが廻るのが見



第148図　Ｈ－75号住居出土遺物

られ、西壁下には幅30cm以下のテラス状の掘り残しも見られた。また、カマド前に径126以上×98cm、深さ９cmを測るものや、これを切る径73×51cm、深さ14cmのもの、南壁際の周溝状の掘り込み部分に東西に並ぶ径50×43cm、深さ31cmのものと、径37×35cm、深さ37cmのもの、また北西コーナーの径77×64cm以上、深さ11cmのものなど、幾つかの土坑或いはピット状の掘り込みが見られた。この他、南西コーナー付近には凡そ58×54cmを測る粘土の分布が三角形の範囲で見ることができた。床面はこうした構造を持つ掘り方は黒色土・ローム・ローム漸移層土等の種々の土壌で埋め戻されており、その上にロームブロックを締めた貼り床を施している。

カマドは東壁中央やや南寄りに造られる。削平が著しく前述のようにセンター杭とも絡んでおり、確認・調査が難しかった。カマドは丸底の掘り方を有しており、これをロームやローム漸移層土で埋め戻して燃焼部や袖を造っている。袖のうち左側のものはその痕跡を留めているが、右側のものを確認することはできなかった。また、燃焼部は東壁ラインの内側に設けられてるがその規模は全体的に大きい。燃焼部の中央付近には東西走行の盛り上がりが見られたが、これが袖状の構造を示すものかどうかは判断できなかった。

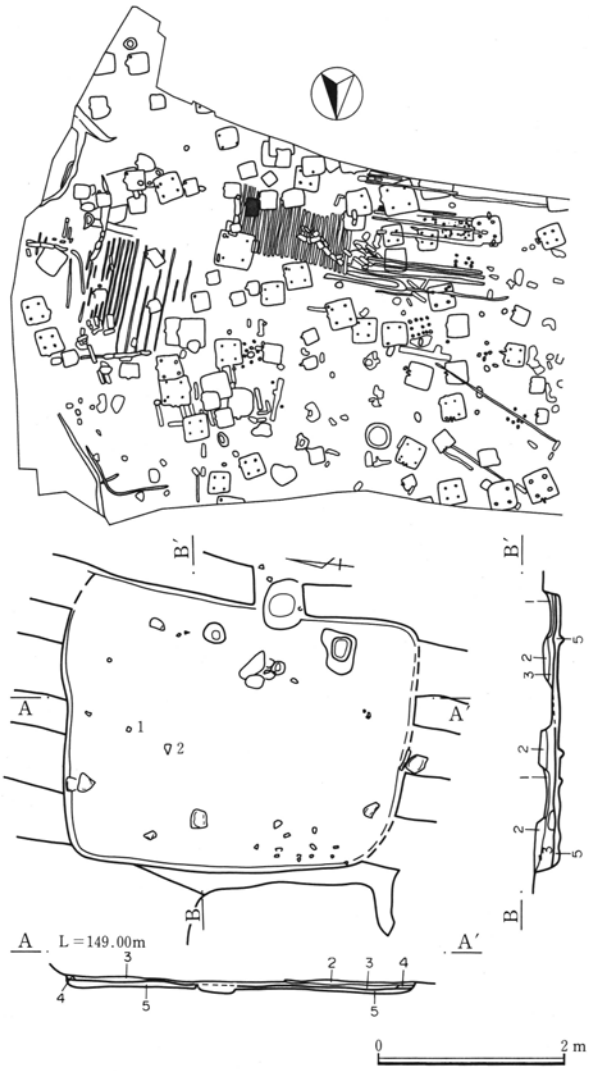
床面に於いては幾つかのピット等を見ることができたが、このうち貯蔵穴はピット様の形態を呈し、カマド右側に確認することができた。この貯蔵穴は掘り込みが比較的浅く、特段の構造は有していなかった。一方、柱穴は床面に於いても掘り方面に於いても確認されなかったが、貯蔵穴の西側には南側の壁面から張り出すようにコの字状に並ぶ、南東側から径20×15cm、深さ15cm、径13×11cm、深さ９cm、径16×14cm、深さ７cm、径20×18cm、深さ２cm、径27×18cm、深さ15cmをそれぞれ測る５基の小ピットが検出された。これらは位置的に見て、入り口等の構造に拘わるものであろうと考えている。この他、床面に於いては北壁から西壁、南壁西部にかけて廻るしっかりした周溝を見ることができた。

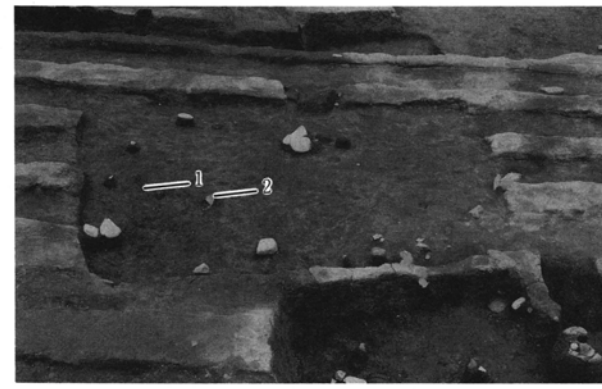
Ｈ－76号住居（古墳時代後期～平安時代．第149～150図．図版29・74）

概要　本住居はＢ区中央部南東寄りに位置し、後述のAs-A下畠の下部に遺存していたＢ区に於ける小型のものに属する竪穴住居跡である。西側にＨ－77号住居と10数cmの位置に近接だけで他の竪穴住居との切り合い関係は認められなかった。

遺構の残存状況は良好ではなく、更に床面への影響はあまり見られなかったものの As-A 畠のサクが３～４本入って遺構を壊している。

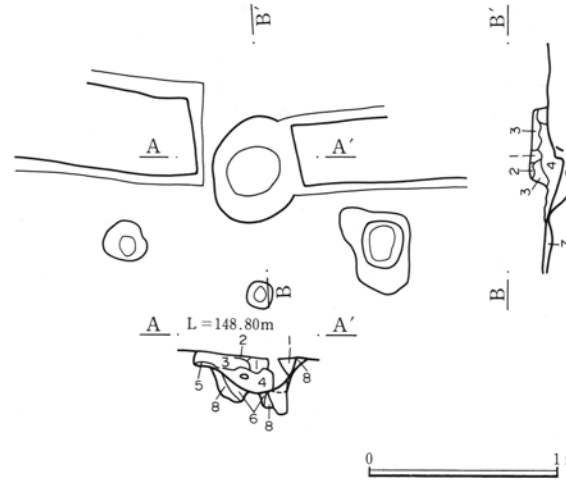
本住居からの出土遺物は少く、本住居に伴う（可能性を持つ）遺物には凹石からの転用品であるこも





住居覆土
１：暗褐色土主体。固くやや良く締まる。　２：褐色土：白色粒を僅かに含む。大変固く良く締まる。　３：褐色土：ローム粒等僅かに含む。やや固く良く締まる。　４：暗黄褐色土：ローム粒主体。やや固く良く締まる。
住居掘り方（貼り床）
５：暗黄褐色土：色調暗いローム主体。褐色土等僅か含む。固く良く締まる。

建設機材通過点下に当たりカマド覆土と断定できない層
１：暗褐色土主体。固く、やや締まり悪い。　２：褐色土締まる。固くやや良く締まる。　３：褐色土主体。大変固くよく締まる。
カマド覆土
４：暗赤褐色土：炭化物・焼土等僅かに含む。　５：褐色土：汚れたローム粒固めたもの主体。大変固くよく締まる。袖の可能性あり。
カマド掘り方覆土
６：暗茶褐色土：焼土・炭化物粒をやや多く散在させ、やや固く、やや締まり良い。７：暗褐色土：暗褐色土とロームブロックを固くしっかり固めた層。　８：黄褐色土：色調明るいローム粒層。やや軟らかく、ややよく締まる。



第149図　Ｈ―76号住居及びカマド

編み石（1）があるのみであった。

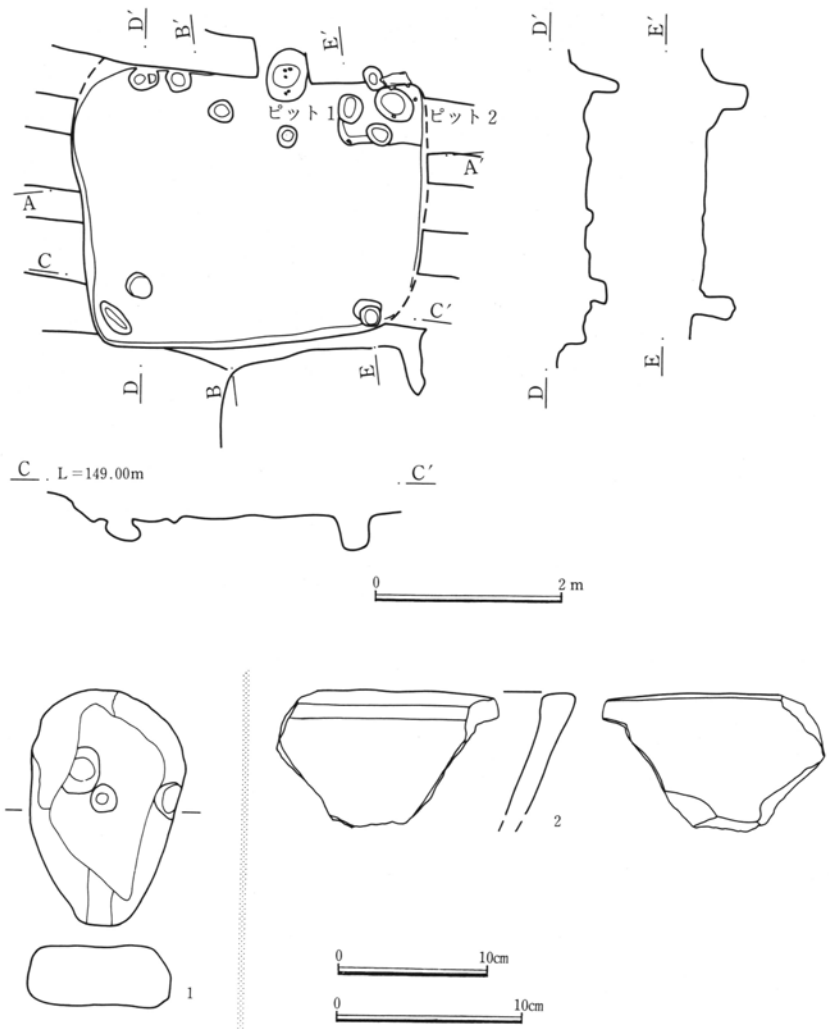
一方覆土中からは古墳時代後期の土師器甕を中心に見られたが、この中には縄文土器片（2）やカマド構築材と思われる資料（3）も見られた。

本住居はカマドを伴うことから古墳時代後期～平安時代の範疇に入るのではあるが、以上のように本住居の時期を示し得る遺物は出土せず、更に本住居の時期を示唆するような遺物も確認できなかったので、本住居の時期を特定することはできなかった。

規模　長軸：383cm　短軸：298cm　深さ：27cm
カマド　燃焼部　径：43×56cm　深さ：９cm
ピット１　径：35×22cm(掘り方面径：30×26cm)　深さ：42cm　　ピット２　径：46×34cm　深さ：17cm

構造　本住居は横長の隅丸方形のプランを呈する。

本住居は掘り方を有し、掘り方の南東隅には東西64cm、南北90cm、深さ11cmの隅丸方形の掘り込みを持ち、また東壁沿いを中心に径21～46cm、深さ11～42cmを測り、柱穴様の形態の小型ピット10基程が見ら



第150図　Ｈ－76号住居掘り方及び出土遺物

れた。こうした構造を持つ掘り方をローム等で埋め戻して貼り床状の床面を造り出している。

カマドの遺存状況は悪く、この位置を機械が走行したこともあって燃焼部を確認できたに過ぎなかった。カマドは横長の隅丸方形様のプランの土坑様の掘り方を有し、これを焦土や炭化物を含む暗褐色土やローム等の土壌で埋め戻して浅い土坑様の燃焼部を造り出している。

本住居の床面に於いては小型のピットが見られたが、掘り方に見られたものを含めこれらのピットが本住居に伴う物であるかどうかは特定できなかった。また、位置的に見て主柱穴に比定されるものは特定されなかったが、ピット１及び掘り方に見られたピット２は貯蔵穴の可能性を有するものと思われる。

Ｈ－77号住居（奈良時代．第151～153図．図版29・74～75・94）

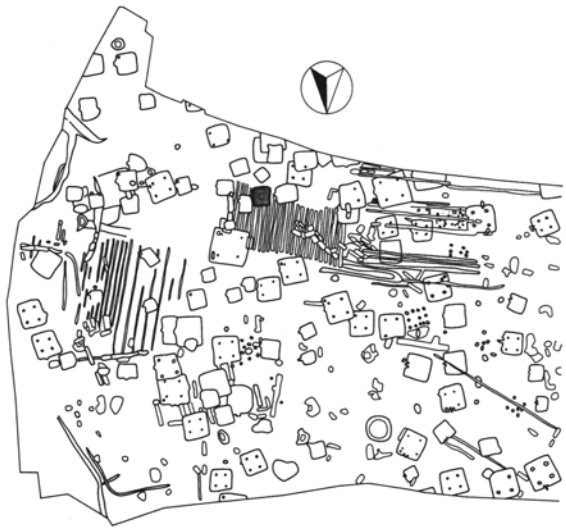
概要　本住居はＢ区中央部南東寄りに単独で遺存していたＢ区に於いては小～中型の規模を持つ竪穴住居跡であり、極めて近接するＨ－76号住居と同様、後述の As-A 下畠の下部に発見されたものである。

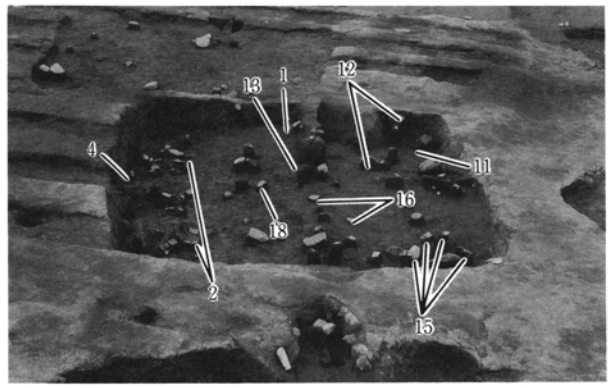
本住居も As-A 畠のサクによる撹乱を受け、カマドの先端を欠失するが、全体的には撹乱の範囲は上位のみに留まり、全体的に遺存状況は良好であった。

出土遺物は比較的多かったが、このうち本住居に伴う可能性を持つと判断されたものには８世紀後半期の特徴を示す須恵器坏（1）があり、他に分散して出土するため本住居に伴わない可能性もある７世紀代の可能性を残す土師器胴張甕（2）、そして、こも編み石（3～5）が見られた。

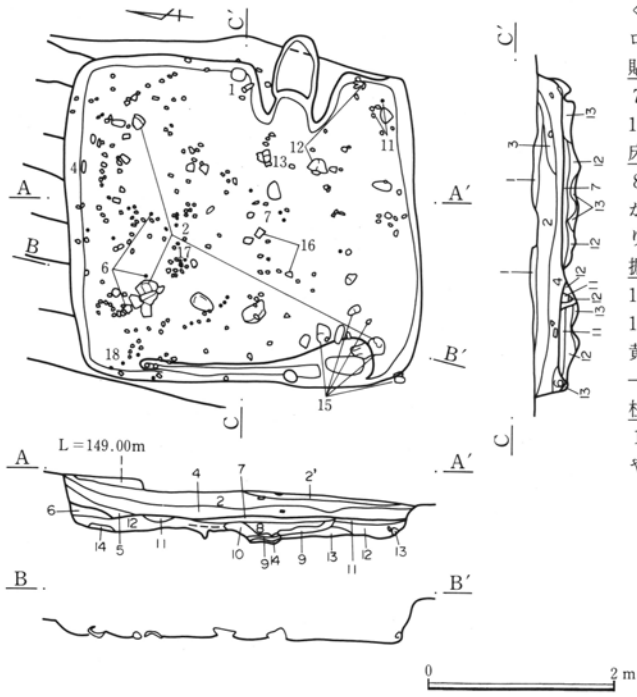
一方、覆土中からは縄文時代中期の土器片や古墳時代後期の土師器甕を中心に平安期頃までの遺物が出土しているが、この中には五領ケ台式期の縄文土器片（6）や縄文時代の石器・石製品（7～10）、７世紀代の土師器の坏(11)や甕(12)、須恵器長頸壷(15)、８世紀後半期の須恵器坏（14）が見られた他、土師器甑（13）や須恵器甕（16）、こも編み石（17）・砥石（18）などが見られた。

以上のように本住居に伴う遺物は僅かであったが、本住居の時期としてはカマド脇から出土した須恵器坏（1）の時期を与えたいと思う。また、覆土中の遺物は本住居が平安期頃まで窪地としてその痕跡を残していたものと推察される。

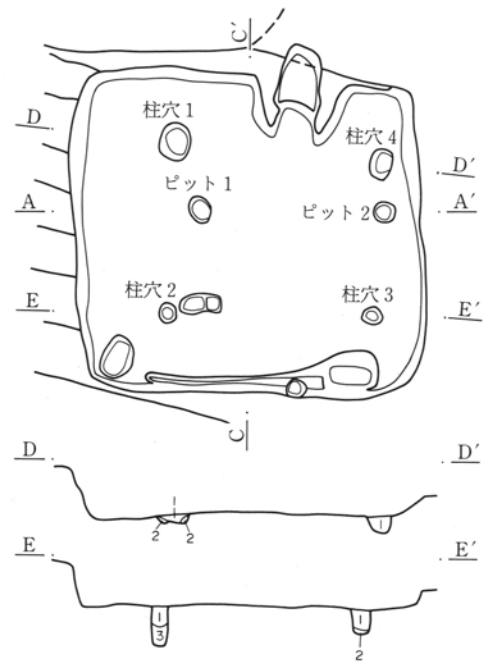




住居覆土
1：褐色土主体。大変しっかり締まる。　2：褐色土：ロームやや多く含む。よく締まる。（2′：1層と2層の中間の層）　3：灰褐色土：白色粒多量に含む。締まり大変良い。　4：暗褐色土主体。よく締まる。　5：黒褐色土主体。よく締まる。　6：暗黄褐色土：ローム多量に含む。ややよく締まる。
貼り床
7：暗灰褐色土：褐色土主体にロームやや多く、しっかり締まる。
11：褐色土：褐色土・ローム・黒褐色土の混土。しっかり固まる。
床下粘土坑覆土
8：暗灰褐色土：7層と似るがローム・灰白色粘質土多く大変しっかり締まる。　9：灰白色土：青灰色粘質土やや多く、大変しっかり締まる。　10：暗黄褐色土：13層と同質。やや締まり悪い。
掘り方
12：褐色土：褐色土・ローム・黒褐色土の混土。やや良く締まる。
13：黄褐色土：やや明るいローム粒層。やや締まり悪い。　14：暗黄褐色土：非常に細かい。やや締まり悪い。

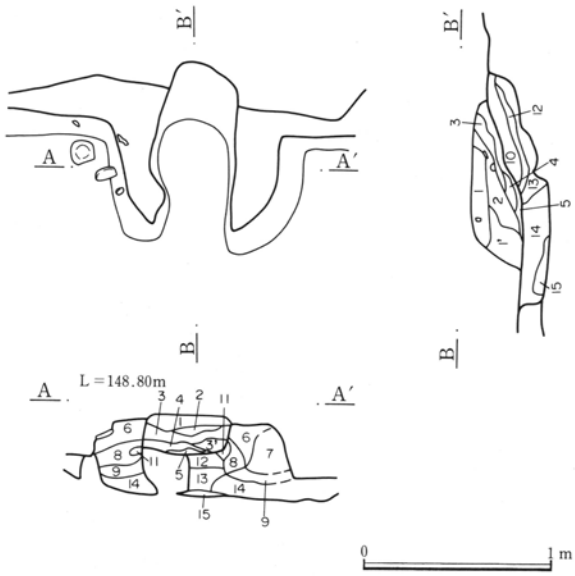


柱穴・ピット覆土
1：黒褐色土：ロームやや多く含む。　2：暗黄褐色土：ローム。やや締まり悪い。　3：黄褐色土：ローム主体。やや締まり悪い。

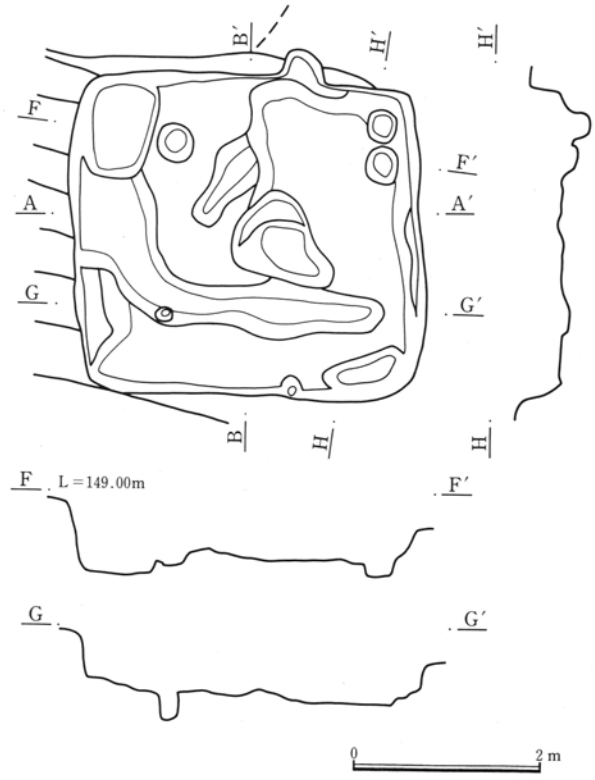


規模　長軸：373cm　短軸：329cm　深さ：48cm
カマド　幅：98cm　奥行き：82cm以上　左袖　幅：29cm　長さ：60cm　高さ：23cm　右袖　幅：34cm　長さ：78cm　高さ：17cm　燃焼部　径：42×32cm　煙道　幅：47cm　長さ：41cm以上
柱穴1　径：38×34cm　深さ：20cm　柱穴2　径：22×18cm　深さ：47cm　柱穴3　径：20×18cm　深さ：27cm　柱穴4　径：32×25cm　深さ：28cm
ピット1　径：26×24cm　深さ：13cm　ピット2　径：24×22cm　深さ：18cm
周溝　幅：15cm　深さ：9cm

第151図　H―77号住居



カマド覆土
１：暗褐色土：白色粒・ローム粒多量に含む。（1′：１層に比しローム減少）　２：灰褐色土：薄黄色粘質土主体。　３：褐色土：白色粒・薄黄色粘質土多く含む。（3′：ロームブロック僅かに含む）　４：褐色土：薄黄色粘質土多量に含む。　５：赤褐色土：粘質土掛かる焼土粒主体。
袖構築材
６：灰褐色土／７：暗褐色土：やや灰色帯びた粘質土主体。　８：青灰色粘質土：灰色掛かった粘質土主体。　９：暗褐色土主体。
カマド掘り方覆土
10：暗赤褐色土主体。　11：赤褐色土：８層土とよく似た粘質土層。　12：暗赤褐色土：ロームブロックやや多く含む。　13：褐色土：ローム粒多量に含む。　14：褐色土：ローム多量に含む。　15：黄褐色土：やや明るいローム粒主体。



第152図　Ｈ―77号住居カマド及び掘り方

床下粘土坑：118×92cm　深さ：30cm

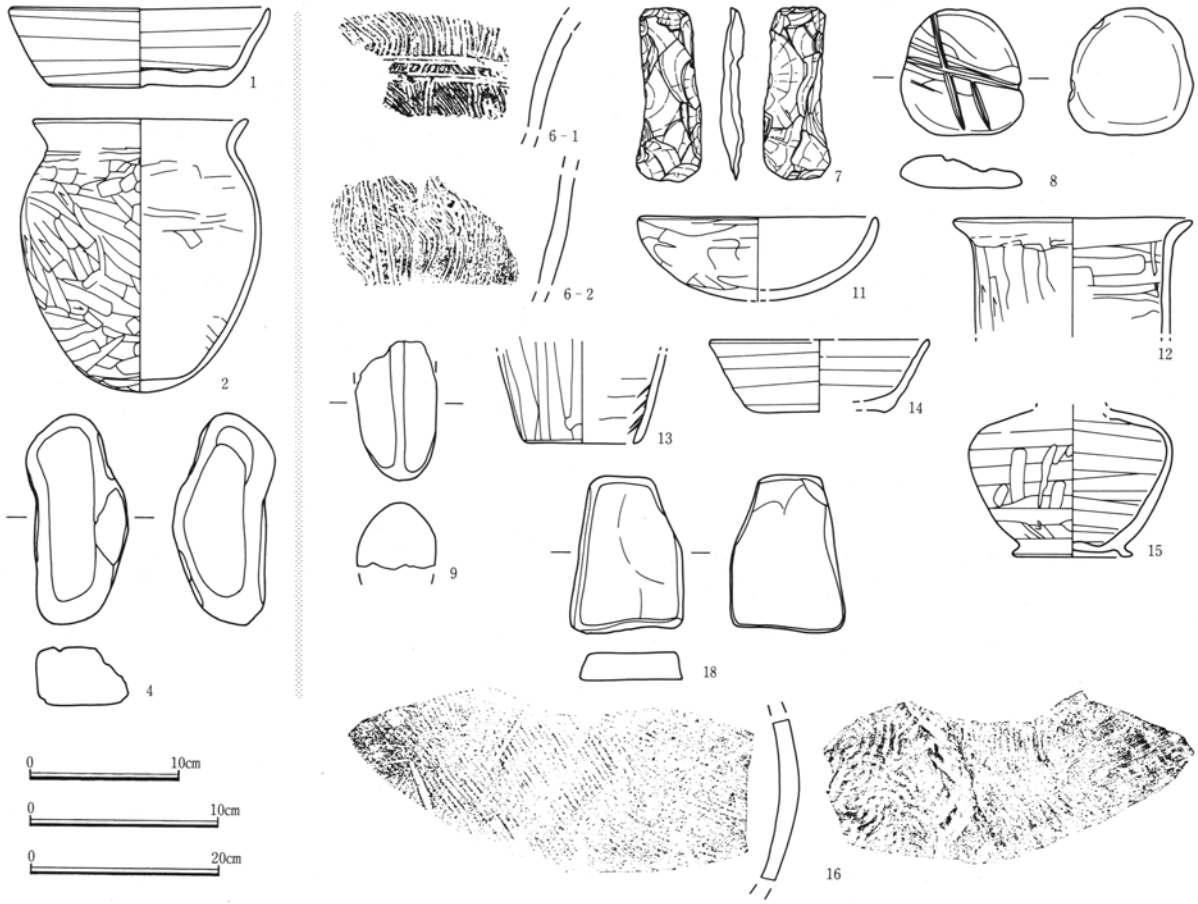
床下土坑：102×70cm　深さ：28cm

構造　本住居はやや隅丸の方形プランを呈する。

本住居は掘り方を有している。掘り方には全体的な規則性は特に認められなかったものの、幾つかの土坑・ピット様の掘り込みが見られた。このうち中央部には不定型な浅い床下粘土坑が見られたが、この床下粘土坑はロームの上に青灰色粘質土を含む灰白色土が乗り、その上に灰白色粘質土の多く入る暗灰褐色土が充填する状態で発見された。また住居北東コーナーには隅丸方形の土坑が掘られていたが、性格等を特定することはできなかった。こうした構造を持つ掘り方を黒褐色土・褐色土・ローム等で埋め戻し、さらに褐色土・ローム等の土を締めて貼り床を造っている。

カマドは掘り方を有し、これを褐色土やロームを使って埋め戻し、手前側に燃焼部、奥側に煙道部を造り出している。燃焼部は東壁ラインのかなり内側に設けられている。袖は燃焼部及び煙道部の両側に設けられるが、左右両袖共に袖材は用いられず、暗褐色土の上に青灰色粘質土を乗せ、更に暗褐色土・褐色土を乗せて造り上げている。

床面に於いては幾つかの柱穴・ピット様の掘り込みが確認されたが、このうち位置的にはやや南東に傾いているが主柱穴と判断されるものに柱穴１～４がある。このうち西側のものは径が狭過ぎるため、掘り方ではなく柱痕の形態をしめすものではないかと思われる。また、住居中央に南北に並ぶピット１・２も本住居に伴う可能性が考慮される。この他、南北端部を除く西壁際にのみ周溝が認められた。尚、貯蔵穴は認められなかったのであるが、掘り方南東隅部に於いて認められた、径35×31cm、深さ17cmのピット様の掘り込みにその可能性を求めることができよう。



第153図　Ｈ－77号住居出土遺物

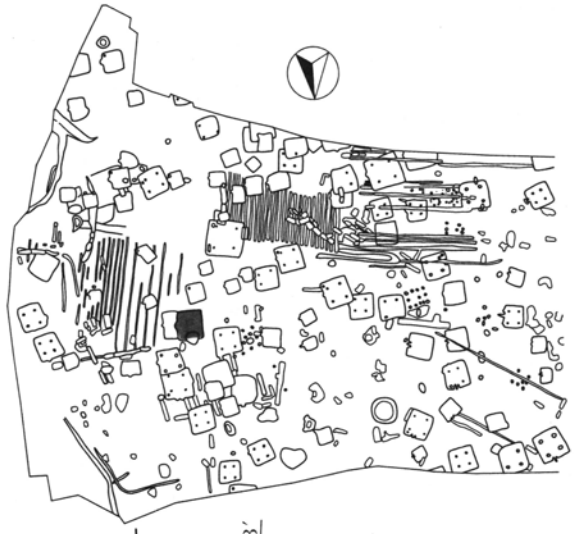
Ｈ－78・79号住居（古墳時代後期．第154～157図．図版29～30・75・94）

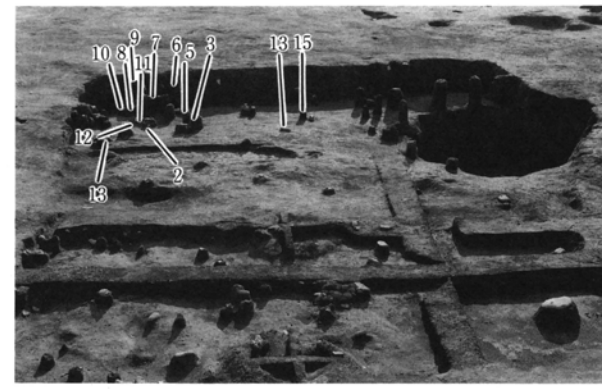
概要　Ｈ－78・79号住居はＢ区中東部に位置する竪穴住居跡である。この２軒は東のＨ－80号住居と切り合い関係にあるが、Ｈ－78・79号住居とＨ－80号住居の南北壁面が非常に良く重なっていたこともあって、且つ調査期間との兼ね合いから一括して掘削することとなったため、Ｈ－78・79号住居とＨ－80号住居の境界を面的に特定することはできず、僅かにセクションの観察からＨ－78・79号住居がＨ－80号住居を切ることを確認した。また北に切り合い関係にある３号土坑には切られてることも確認した。

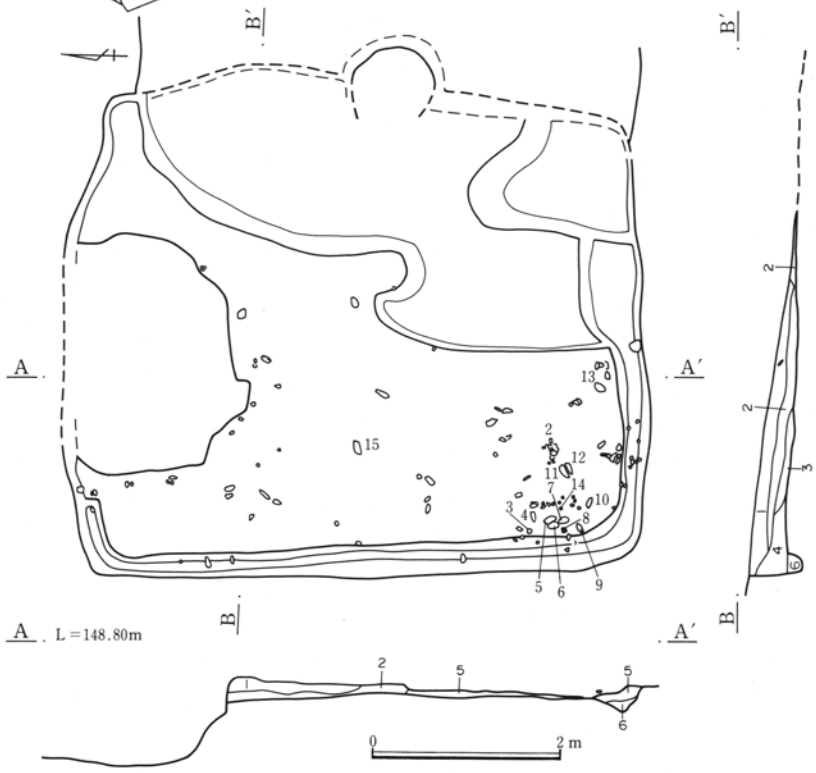
Ｈ－78号住居と79号住居は後者に前者が重なっており、床面に段差を持つことから識別された。調査時点では前者と後者の間に間層を挟むことから別住居として処理しているが、南・西を共有する可能性を持つこと、柱穴を共有するらしいことから一種の拡張に伴うものであると思われる。従って、以下Ｈ－78・79号住居は一括して報告したいと思う。尚、便宜上拡張前の住居をＨ－78号住居、拡張後のものをＨ－79号住居として表記することとする。

Ｈ－78号住居とＨ－79号住居は床面によって明確に分離されるが、双方とも出土遺物は多くなかった。このうちＨ－78号住居に伴うと判断された遺物には７世紀前葉から中葉にかけて特徴を示す土師器の坏(1)や台付甕(2)があり、この他こも編み石(3～14)が見られ、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕を中心に若干の出土遺物が見られ、こも編み石（15）なども見られた。

一方、Ｈ－79号住居に伴う遺物には６世紀後半から７世紀前葉にかけての時期の特徴を示す土師器の台付甕（1）や坏（3）があり、この他に支脚（2）も見られた。また、Ｈ－78号住居とＨ－79号住居の間層、及びＨ－79号住居の掘り方からは古墳時代後期







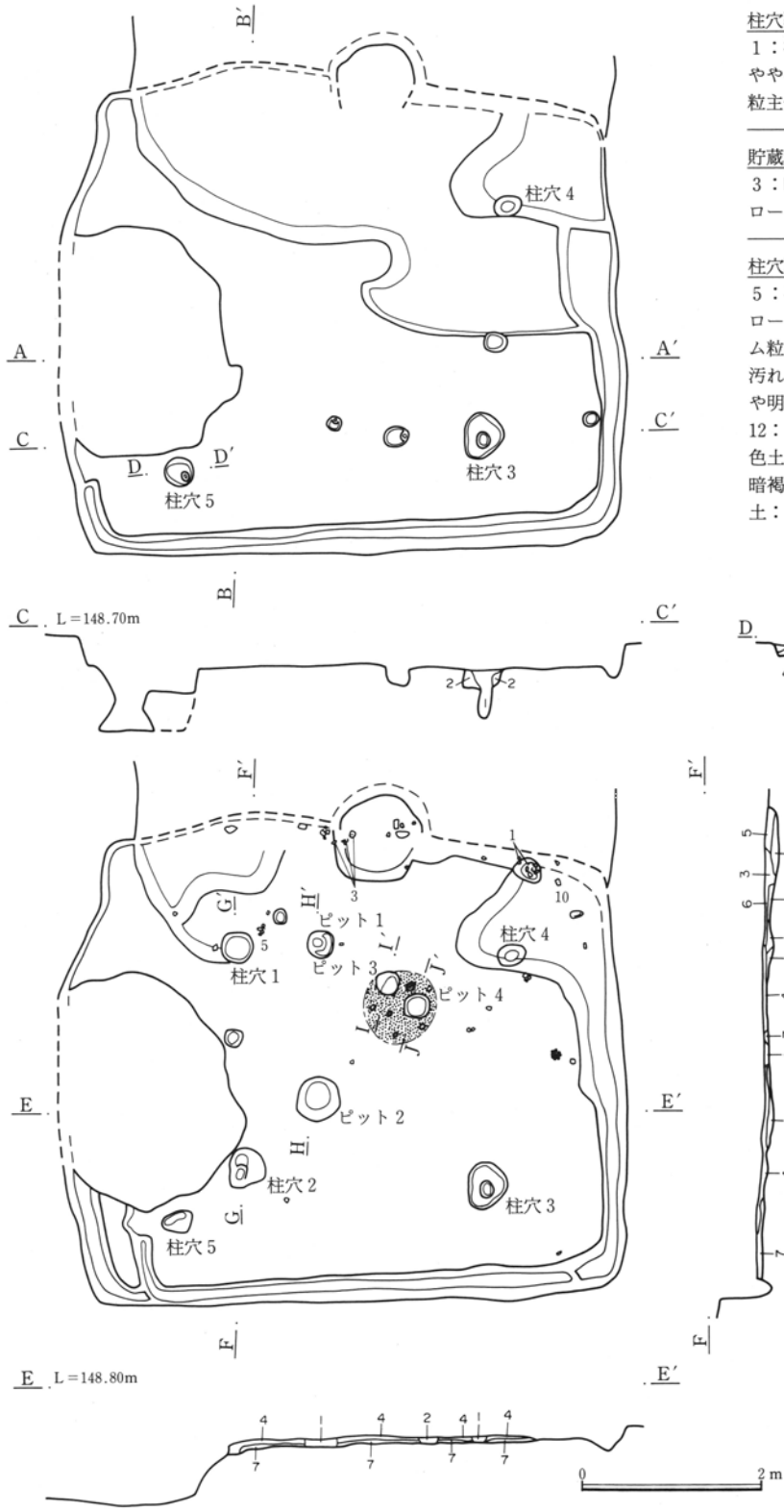
第154図　Ｈ―78・79号住居

Ｈ―78号住居覆土
１：暗褐色土：ローム粒僅か、白色粒子・炭化物粒を極く僅かに含む。　２：暗褐色土：１層に比しローム粒の粒径大きく、やや多く含む。炭化物粒極く僅かに含む。　３：暗褐色土：ローム粒僅かに含み、炭化物粒と黒色土小ブロックを極く僅かに含む。　４：暗褐色土：ローム粒僅かに含み、軟らかいロームブロックを極く僅かに含む。　５：暗黄褐色土：汚れたローム粒多量に含み、軟らかいローム僅かに含む。　６：褐色土：褐色土粒を軟らかく集合させたものを主体とし、ローム粒・小ブロックを・黒色土ブロックをやや多く混入する。

規模　［Ｈ－78号住居］　長軸：600cm　短軸：538cm　深さ：51cm
柱穴３　径：50×44cm　深さ：54cm　柱穴４　径：30×24cm　深さ：19cm
柱穴５　径：32×32cm　深さ：23cm
周溝　幅：26cm　深さ：18cm
［Ｈ－79号住居］　長軸：544cm　短軸：538cm　深さ：60cm
柱穴１　径：35×35cm　深さ：27cm　柱穴２　径：44×41cm　深さ：49cm　　ピット１　径：30×29cm　深さ：51cm　　ピット２　径：50×49cm　深さ：14cm　　ピット３　径：27×27cm　深さ：25cm
ピット４　径：29×28cm　深さ：28cm
周溝　幅：25cm　深さ：18cm

の所産のものを中心とする遺物の出土を見た。

以上のような出土遺物の所見から、Ｈ－78号住居は７世紀前半の所産、Ｈ－79号住居は西暦600年を前後する時期の特徴を示すがＨ－80号住居との関係からやはり７世紀前半期の所産としたい。従って、Ｈ－78号住居への造り替えの時期は７世紀前半の中に収まるものと判断される。また、Ｈ－78号住居の覆土中の出土遺物の所見から凡そ平安期頃までは、Ｈ－78号住居の痕跡が残されていたことが窺われる。



柱穴覆土（左側断面図）
１：褐色土：ローム粒と軟質のローム小ブロックやや多く含む。　２：暗黄褐色土：汚れたローム粒主体。褐色土等混入。

貯蔵穴覆土
３：暗褐色土主体。　４：黄褐色土：As-YP含むローム粒の集合体。

柱穴覆土（下側断面図）
５：褐色土主体。　６：暗黄褐色土：褐色土粒とローム粒の混土。　７：暗黄褐色土：汚れたローム粒の集合体。　８：褐色土主体。　９：褐色土：汚れたローム粒の集合体。　10：暗黄褐色土：やや明るいローム粒の集合体。　11：褐色土主体。　12：黄褐色土：やや明るいローム粒層。　13：褐色土主体。　14：灰白色粘質土ブロック。　15：暗褐色土主体。　16：褐色土主体。　17：黄褐色土：ローム粒の集合体。

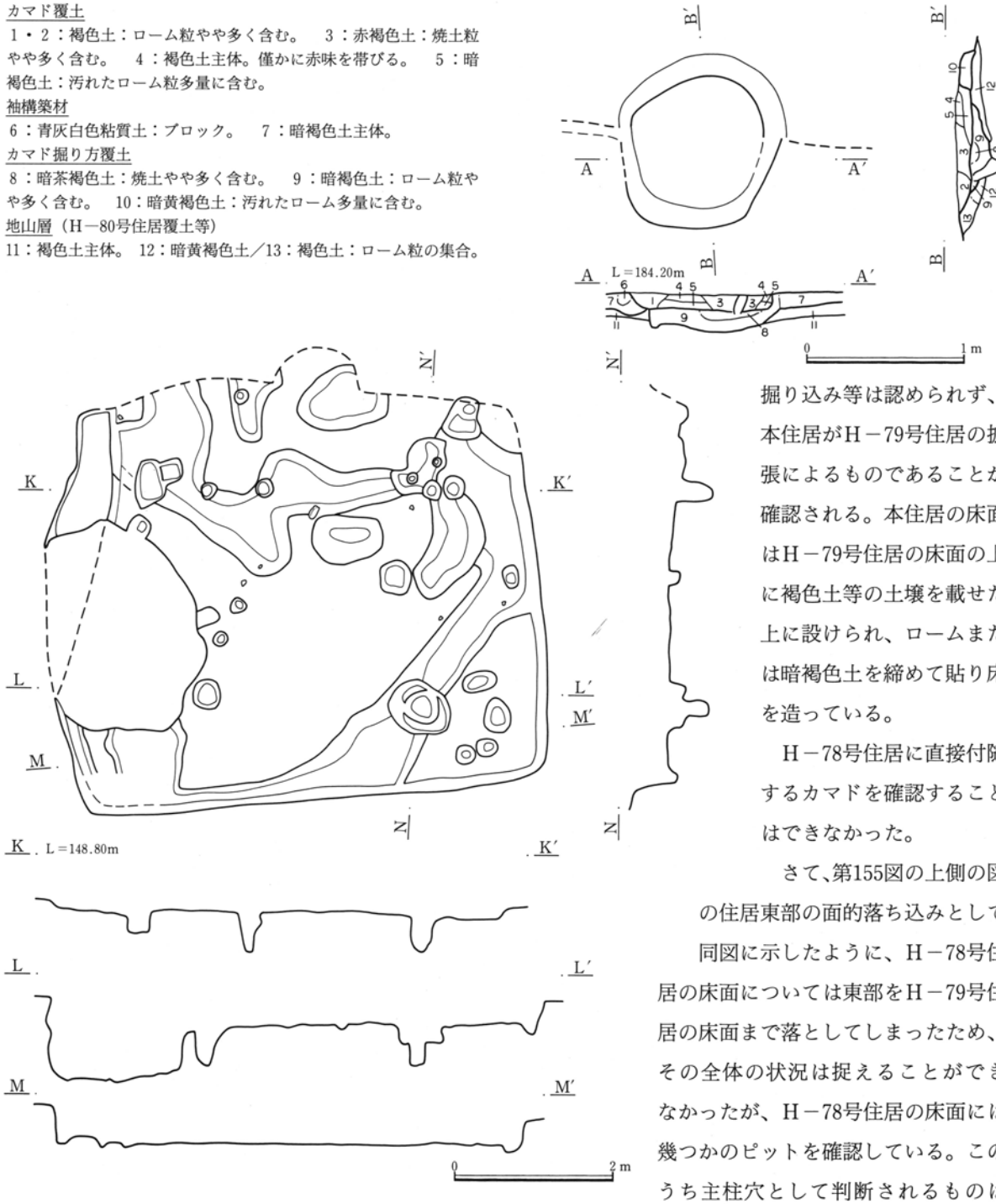
H―78号住居貼り床
４：暗黄褐色土：ロームブロック主体。褐色土ブロック僅かに含む。大変固く、よく締まる。５：暗褐色土：ローム粒僅かに含む。ややよく締まる。　６：暗褐色土：ローム極く僅かに含む。よく締まる。

H―78号住居・H―79号住居床面間層
７：褐色土：ローム僅かに含む。良く締まる。　９：暗褐色土：５層土に似るがやや締まり弱い。　10：暗褐色土：６層土に似るが、やや黒味あり。　11：褐色土：粘性強く、しっかりしたロームブロックを僅かに含む。大変良く締まる。

H―78号住居等のピット覆土か
１：暗褐色土：粒径の大きいローム粒が散在する。　２：褐色土：ローム粒を多量に含む。　３：褐色土主体。やや締まり悪い。

第155図　H―78・79号住居遺構

カマド覆土
1・2：褐色土：ローム粒やや多く含む。　3：赤褐色土：焼土粒やや多く含む。　4：褐色土主体。僅かに赤味を帯びる。　5：暗褐色土：汚れたローム粒多量に含む。
袖構築材
6：青灰白色粘質土：ブロック。　7：暗褐色土主体。
カマド掘り方覆土
8：暗茶褐色土：焼土やや多く含む。　9：暗褐色土：ローム粒やや多く含む。　10：暗黄褐色土：汚れたローム多量に含む。
地山層（H―80号住居覆土等）
11：褐色土主体。　12：暗黄褐色土／13：褐色土：ローム粒の集合。



第156図　H―78・79号住居掘り方

床下土坑　径：91×64cm　深さ：18cm

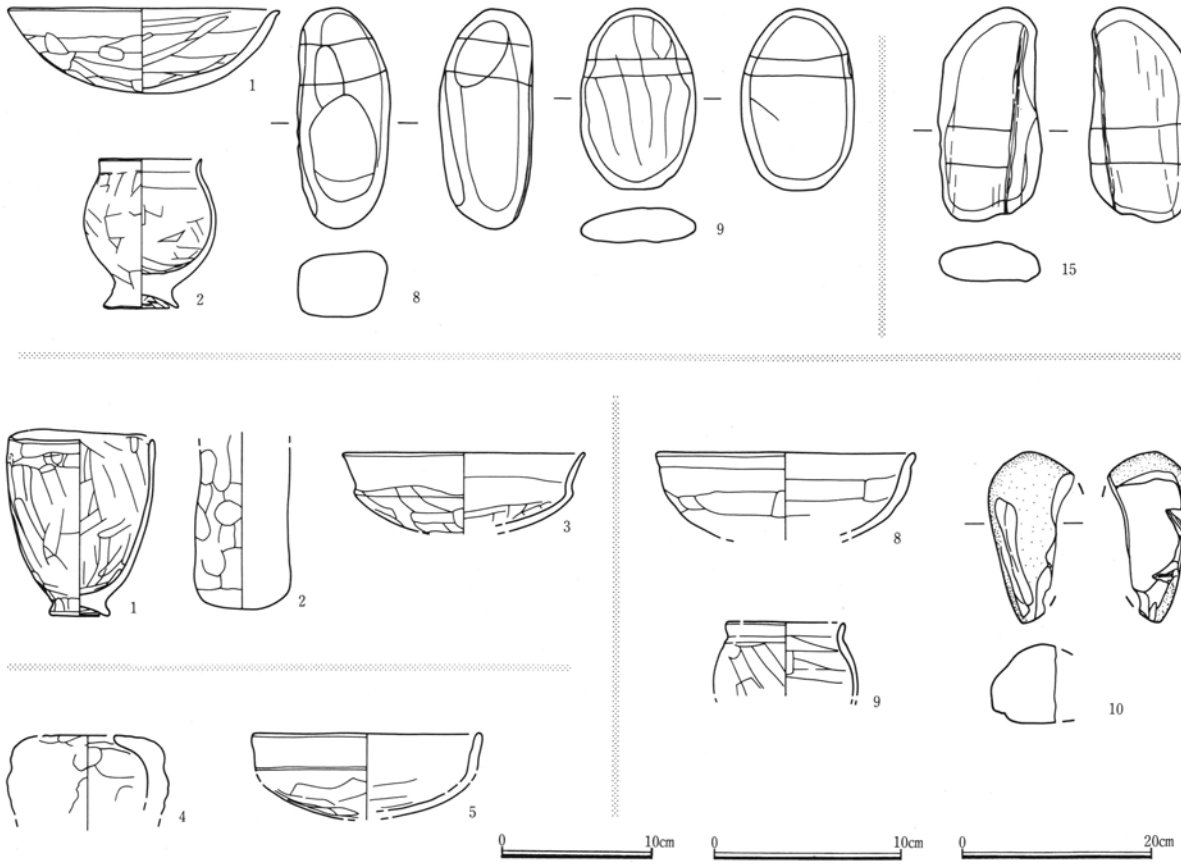
［H－78･79号住居］　カマド　残存幅：150cm　残存奥行き：98cm

構造　［H－78号住居］　H－78号住居は凡そ方形に近い隅丸方形のプランを呈するものと判断される。

掘り方に相当するH－79号住居の床面上に特段の掘り込み等は認められず、本住居がH－79号住居の拡張によるものであることが確認される。本住居の床面はH－79号住居の床面の上に褐色土等の土壌を載せた上に設けられ、ロームまたは暗褐色土を締めて貼り床を造っている。

H－78号住居に直接付随するカマドを確認することはできなかった。

さて、第155図の上側の図の住居東部の面的落ち込みとして同図に示したように、H－78号住居の床面については東部をH－79号住居の床面まで落としてしまったため、その全体の状況は捉えることができなかったが、H－78号住居の床面には幾つかのピットを確認している。このうち主柱穴として判断されるものは柱穴３・４・５であるが、北東側のものは確認できなかった。主柱穴のうち柱穴３は掘り足りなかったものとも思われるもが、その形状から柱材は径16cm程の丸木材であったものと推定される。尚、貯蔵穴は確認できなかった。また、南壁から西・北際には周溝を確認した。この周溝は南壁東寄りでは不明瞭になるようである。



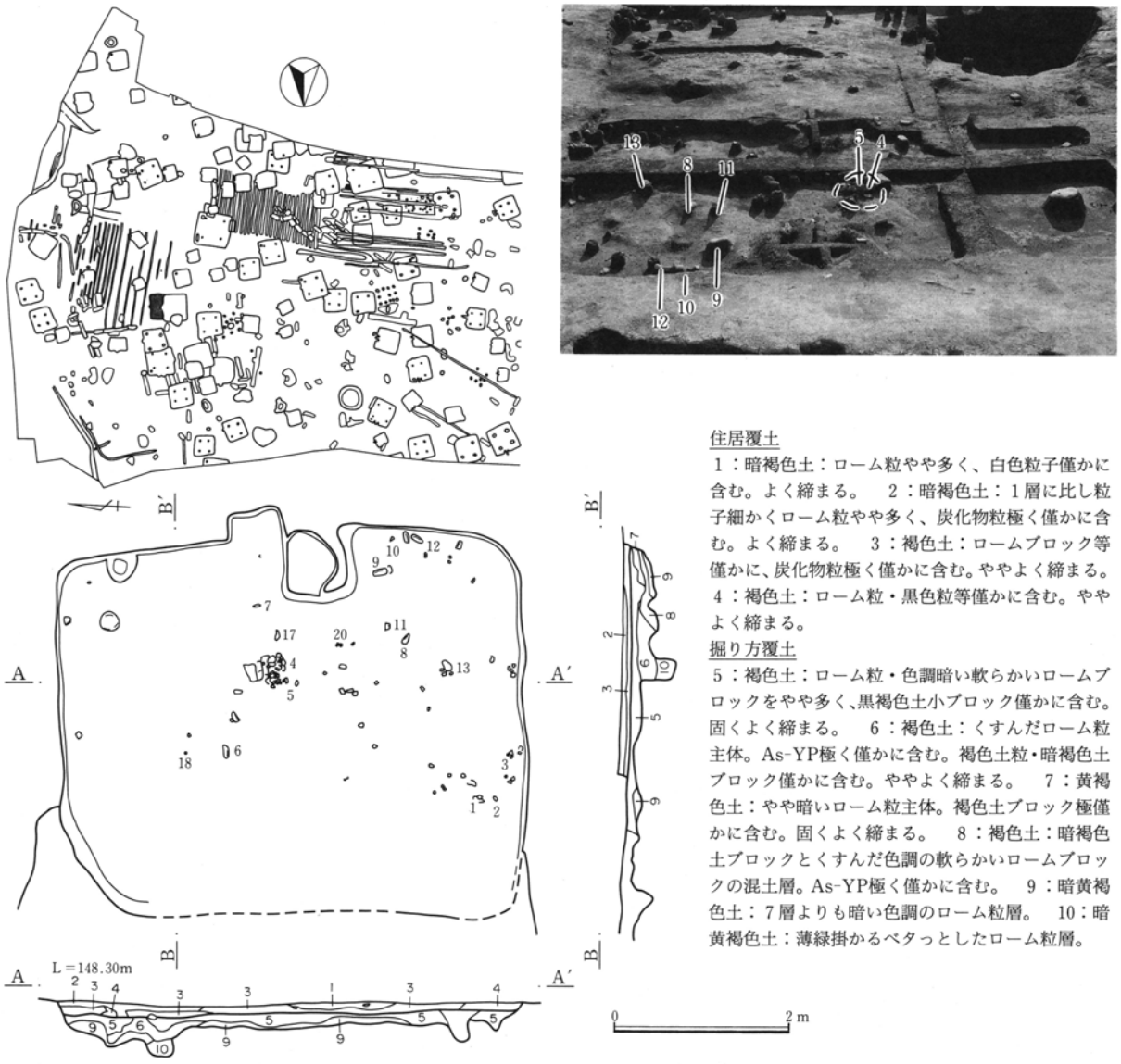
第157図　Ｈ―78・79号住居出土遺物

［Ｈ－79号住居］　Ｈ－79号住居のプランはＨ－78号住居と同様、方形に近い隅丸方形を呈しており、南壁と西壁をＨ－78号住居と共用するが、北壁はＨ－78号住居より五十数cm程内側に設けられている。

Ｈ－79号住居は掘り方を有する。掘り方の掘り込みについては全体としての規則性は認められなかったが、幾つかの土坑或いはピット様の掘り込みが見られた。このうち住居東部中央のカマド手前側には横長の隅丸方形様の床下土坑が見られたが、この土坑の上位床面には径81×80cmの範囲で粘土の分布が見られ床下粘土坑である可能性を示し、或いはＨ－78号住居に伴う可能性も考慮される。Ｈ－79号住居は埋め戻され、その上に貼り床を施していたようであるが記録化に失敗したため、土壌等の性質を報告することはできない。

カマドは東カマドで、東壁中央付近に設けられている。遺存状況が不良であったこともあり、平面的にはほとんどその形態を把握することはできなかった。カマドは掘り方を有しており、暗褐色土やローム等の土壌で埋め戻して燃焼部を造り出している。この燃焼部は東壁のラインをまたぐような位置に設定されている。袖の形状を特定することはできなかったが、袖は褐色土の上に青灰色粘質土を乗せるような構造で造られるようである。

床面は北東及び南東部で検出しづらかったが、幾つかのピットを確認することができた。このうち主柱穴と判断されたのは柱穴１～４であるが、柱穴３と４はＨ－78号住居と共用されており、住居拡張に伴って掘り直されているものと思われる。この他のピットの性格は不明であるが、何れにせよＨ－78・Ｈ－79号住居に伴なうものである。一方、貯蔵穴はＨ－78号住居と同様確認することはできなかったが、南壁から西壁、北東コーナーにかけての壁際には周溝を確認することができた。しかし乍ら、Ｈ－78号住居と同様に、周溝の南東部は不明瞭になってしまっている。



住居覆土
１：暗褐色土：ローム粒やや多く、白色粒子僅かに含む。よく締まる。　２：暗褐色土：１層に比し粒子細かくローム粒やや多く、炭化物粒極く僅かに含む。よく締まる。　３：褐色土：ロームブロック等僅かに、炭化物粒極く僅かに含む。ややよく締まる。　４：褐色土：ローム粒・黒色粒等僅かに含む。ややよく締まる。
掘り方覆土
５：褐色土：ローム粒・色調暗い軟らかいロームブロックをやや多く、黒褐色土小ブロック僅かに含む。固くよく締まる。　６：褐色土：くすんだローム粒主体。As-YP極く僅かに含む。褐色土粒・暗褐色土ブロック僅かに含む。ややよく締まる。　７：黄褐色土：やや暗いローム粒主体。褐色土ブロック極僅かに含む。固くよく締まる。　８：褐色土：暗褐色土ブロックとくすんだ色調の軟らかいロームブロックの混土層。As-YP極く僅かに含む。　９：暗黄褐色土：７層よりも暗い色調のローム粒層。　10：暗黄褐色土：薄緑掛かるベタっとしたローム粒層。

第158図　Ｈ－80号住居

Ｈ－80号住居（古墳時代後期．第158～160図．図版30・75～76・94～95）

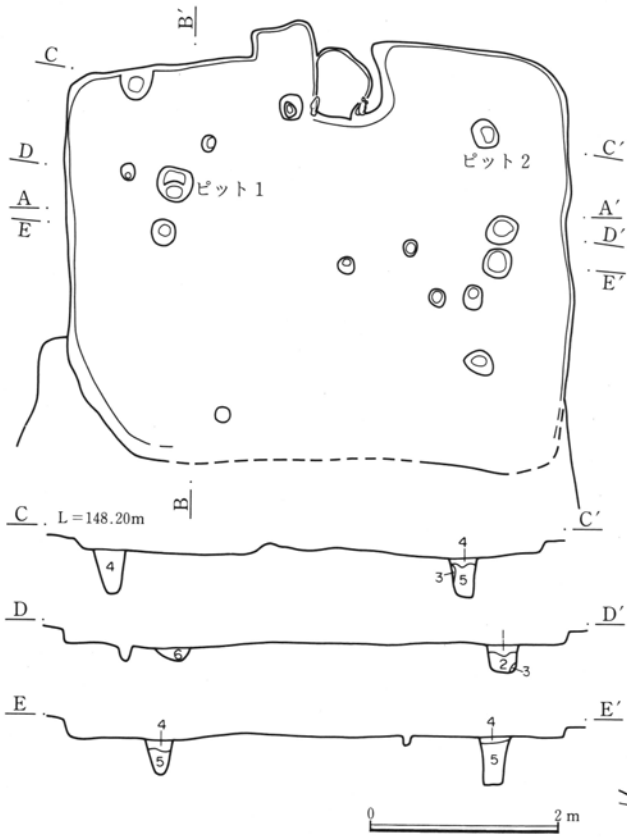
概要　Ｈ－80号住居はＢ区中東部に在る、Ｂ区に於いては中規模のものに属する竪穴住居跡である。

本住居は西にＨ－78・79号住居と切り合い関係にあったが、上述のようにＨ－78・79号住居と重なるように遺存していたため調査当初段階では新旧関係を特定できなかったが、Ｈ－78・79号住居との一括の掘削に伴うセクションの観察によって本住居がＨ－78・79号住居に切らることを確認した。

本住居の出土遺物は多くなかったが、このうち本住居に伴うと判断されるものには西暦600年前後から７世紀中葉にかけての時期の特徴を示す土師器の坏（1、2,3）や同張甕（5）が見られた他、手捏ね土器（4）やこも編み石（5～13）が出土している。

一方、覆土中からは土師器甕片を中心に６世紀後半期の土師器の坏（16）や同張甕（14）、７世紀前半期の特徴を示す土師器坏（15）が見られた他、須恵器高坏（17）や土錘（18）、砥石（19）もあり、戦国末期の模鋳銭の可能性を持つ祥符元寶（20）の混入も見られた。

以上のような出土遺物の所見から、本住居は７世紀前半の所産として判断され、住居廃絶後早い段階から埋没が始まる。またはＨ－78・79号住居の建築



柱穴・ピット覆土

１：暗褐色土主体。よく締まる粘性強いブロック部分あり。　２：暗褐色土：ローム粒等僅かに含む。　３：暗黄褐色土：明るいローム粒層。　４：褐色土：ローム粒多く含む。　５：褐色土：炭化物粒やや多く含む。　６：褐色土：ローム粒と褐色土粒の混土。

カマド覆土

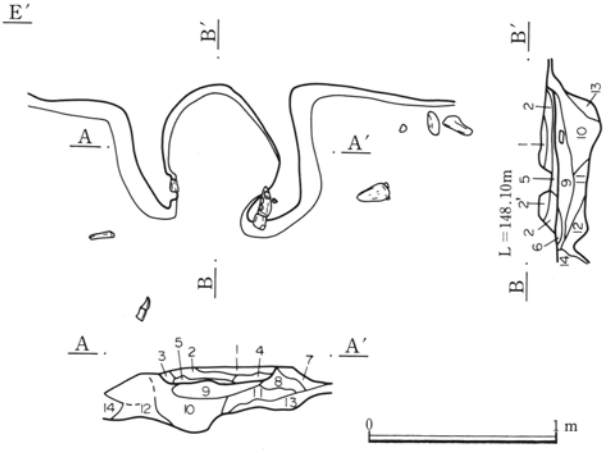
１：褐色土主体。よく締まる。　２：褐色土：ローム粒・炭化物粒・焼土粒を僅かに含む。よく締まる。(2′：白色粒僅かに含み、色調明るい)　３：暗褐色土：炭化物粒やや多く含む。ややよく締まる。　４：暗黄褐色土主体。大変よく締まる。　５：赤褐色土：焼土粒多量に含み、明橙色帯びる。よく締まる。

袖構築材

７：褐色土：ローム粒やや多く含む。ややよく締まる。　８：暗黄褐色土：汚れた色調のローム粒主体。褐色土粒やや多く混入。ややよく締まる。

カマド掘り方

６：褐色土主体。よく締まる。　９：赤褐色土：全体に赤味の強い焼土粒層。焼土ブロックやや多く含む。よく締まる。　10：黒味の強い暗褐色土主体。よく締まる。　11：褐色土：10層に似るが褐色土粒・色調薄いローム粒やや多く含む。ややよく締まる。　12：暗黄褐色土：色調薄いローム粒主体。ややよく締まる。　13：暗黄褐色土：くすんだ色調のローム粒層。ややよく締まる。　14：褐色土主体。ややよく締まる。



第159図　Ｈ―80号住居及びカマド

に伴って埋められたことが推定されるのである。

規模　長軸：534cm　短軸：464cm　深さ：17cm

カマド　幅：118cm　奥行き：76cm　　左袖　幅：30cm　長さ：60cm　高さ：12cm　　右袖　幅：25cm　長さ：76cm　高さ：9cm　　燃焼部　径：58×77cm

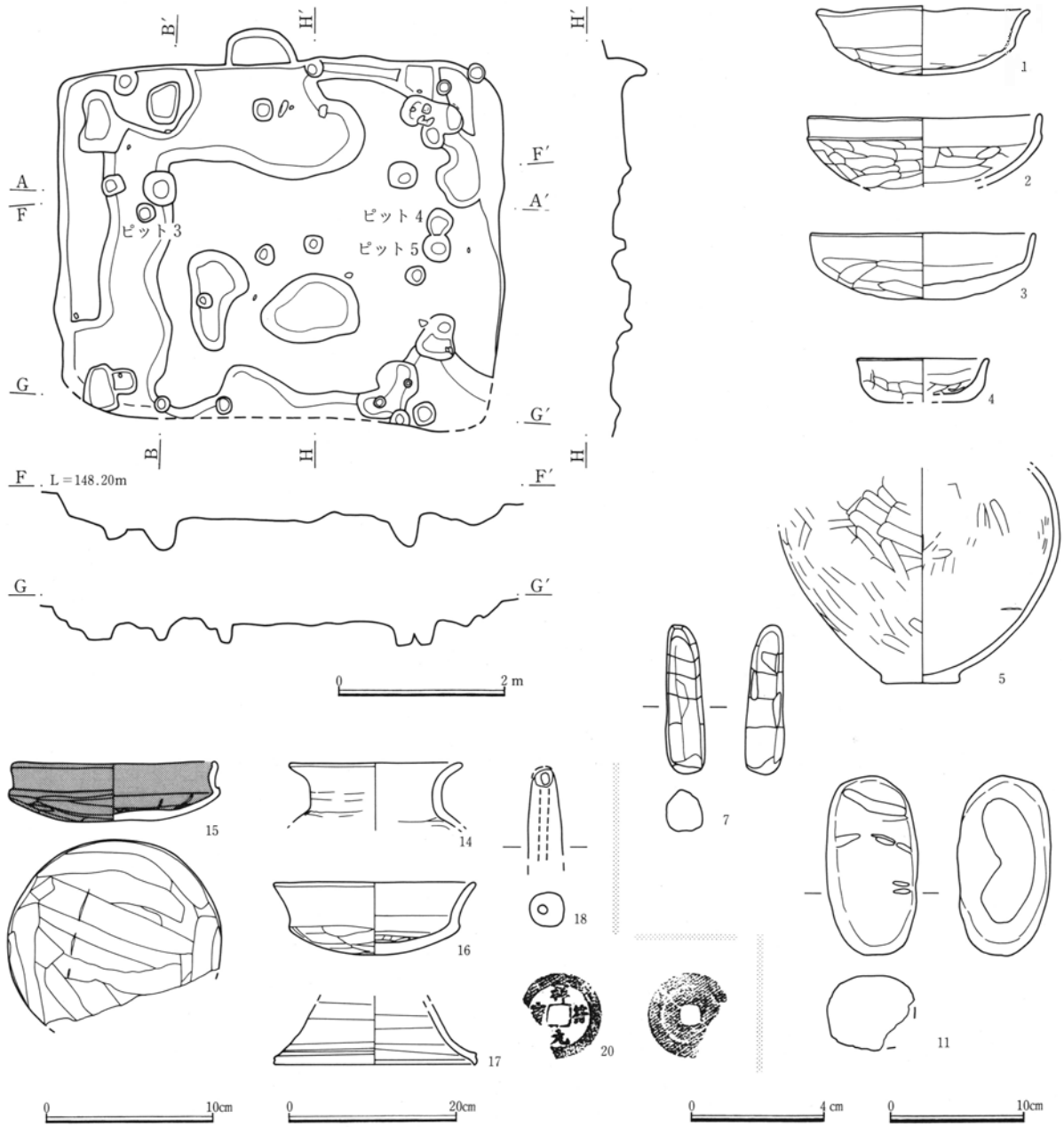
床面　ピット１　径：37×36cm　深さ：39cm　　ピット２　径：32×27cm　深さ：43cm

掘り方　　ピット３　径：42×40cm　深さ：38cm　ピット４　径：35×33cm　深さ：40cm　　ピット５　径：40×推定32cm　深さ：43cm

構造　本住居は隅丸プランを呈する。

本住居は東から北・西側にかけての壁際に幅34～78cm程のテラス状の掘り残しを設け、その内側に幅70～88cm、深さ12cm程の多少蛇行する周溝状の掘り込みを有し、カマド手前も掘り込まれる掘り方を持っている。掘り方にはこの他に幾つかのピットや土坑様の掘り込みを有し、これらは径25cm以下で深さ15cm程度のものを中心とするもの、径35cm程で深さ20～45cm程のもの、そして径数十cmを測る土坑様の掘り込みを有するものに大きく分けられるが、本住居に伴なうものであるか否かを特定できなかった。そして、床面はこうした構造を持つ掘り方を褐色土やローム等の土壌で埋め戻して造られているが、特に貼り床等の構造は設けられていない。

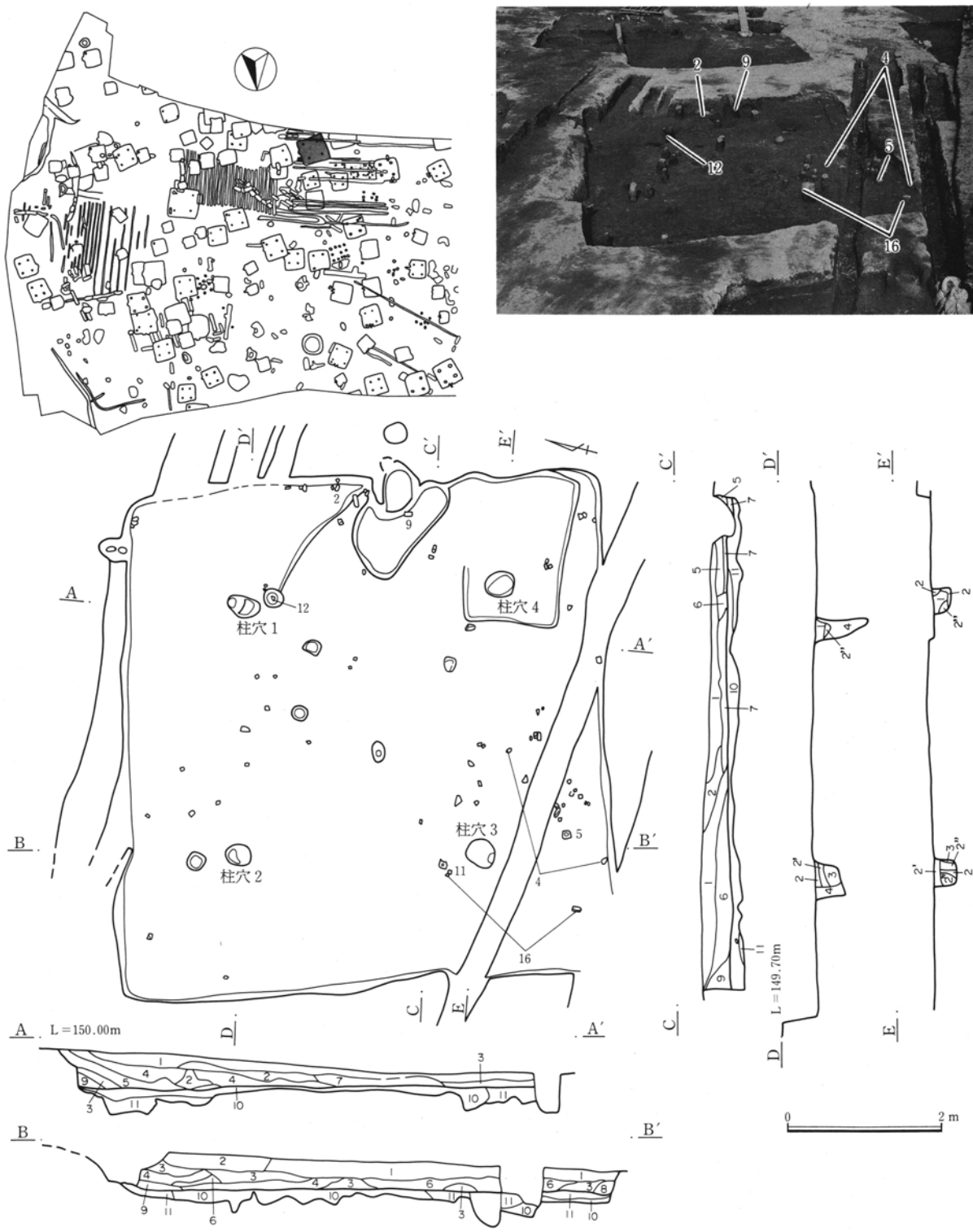
カマドは東カマドである。このカマドは掘り方を有しており、これを褐色土やローム等の土壌で埋め戻して燃焼部を造り出している。燃焼部は東壁ラインの内側に設定され、円形に近いプランを有しているが、手前側の床面から奥側に向かって徐々に上がって行っている。燃焼部の奥壁は立ち上がっており、煙道は燃焼部と段差を以て設けられるものと推定される。袖は燃焼部を丸く囲むように設けられて



第160図　Ｈ―80号住居掘り方及び出土遺物

いるが、左右両袖共に手前先端寄りの燃焼部に面する位置に袖材として礫を立て、褐色土とロームを主体とする土を用いて袖を造り上げている。

床面に於いても掘り片面で見られたのと同様、幾つかのピットが見られたが、これらは径20cm以下で深さ26cm以下のものと、径30cm前後で深さ53cm以下のものの２種類に大別されるが、位置的に北東４半部中央のピット１と南東部のピット２が柱穴である可能性を持つ以外は、本住居との関連を特定若しくは想定できるものは認められなかった。また、貯蔵穴や周溝等の構造物を検出することはできなかった。尚、掘り方面で見られたピットのうちピット３とピット４は位置的に主柱穴の可能性を持ち、ピット５は貯蔵穴の可能性を持つものと思われる。このうちピット３は床面で見られたピット１から中心で10cm程西に寄った位置に設けられることから、本住居は建て替えがあり、掘り方面に見られたものは旧い段階のものであろうと推察されるのである。



住居覆土

１：暗褐色土：白色土粒・黄褐色土粒を多量に含む。　２：暗黄褐色土：褐色土ブロック多量に混入。　３：暗黒褐色土：褐色土ブロック若干量混入。　４：黒色土：黒色土に褐色土の入る混土。　５：暗茶褐色土：少量の黒色土と白色土粒と、微量の焼土含む。　６：暗黄褐色土：褐色土ブロック若干量混入。　７：暗茶褐色土：９層土に淡褐色土粒が若干量含まれる。　８：暗茶褐色土：暗茶褐色土と褐色土の混土。　９：暗茶褐色土：夾雑物殆ど見られない。

掘り方覆土

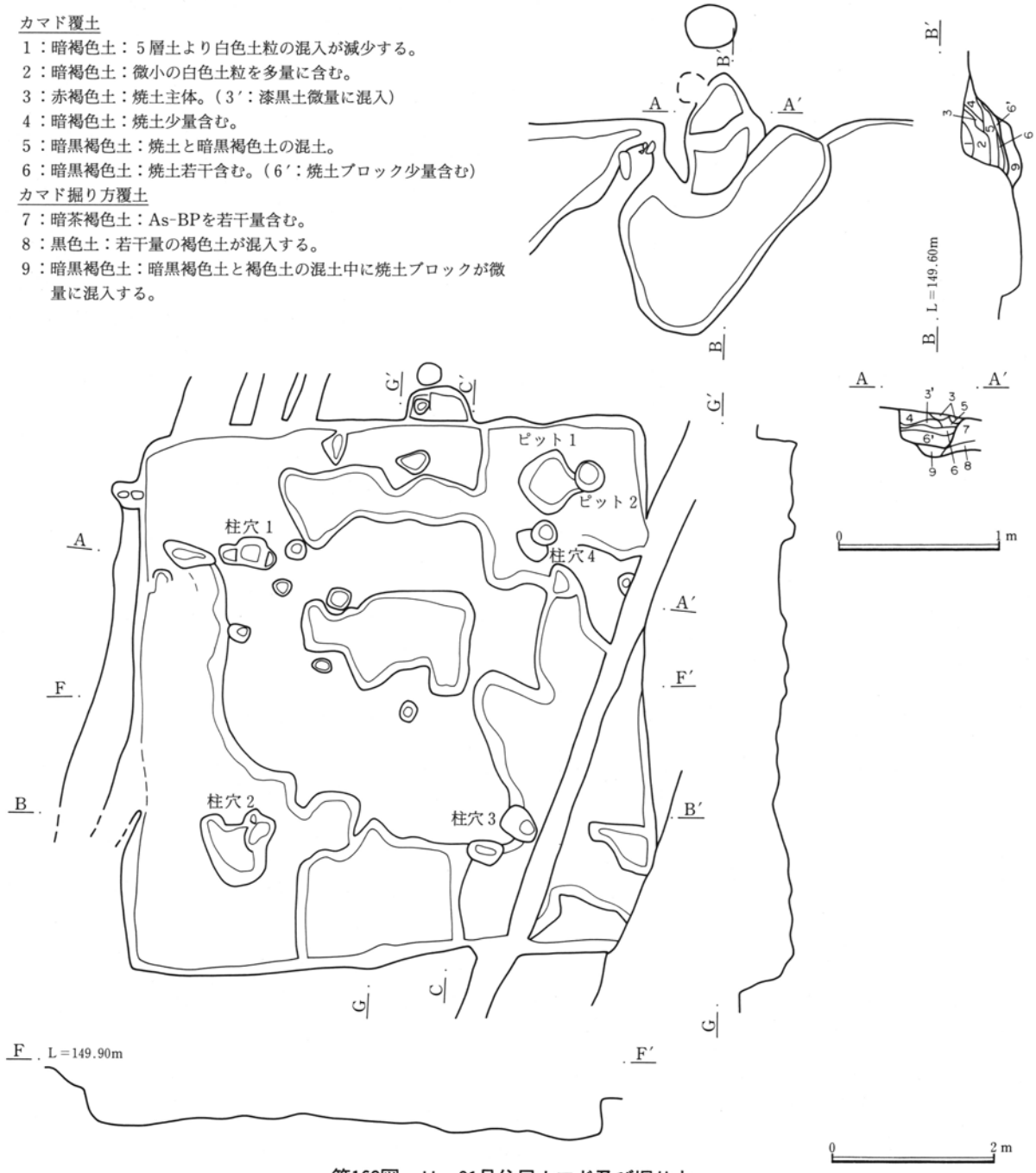
10：暗黄褐色土：微量の黒色土混入。　11：暗褐色土：暗褐色土と黒色土の混土。

柱穴覆土

１：黒色土。　２：黒褐色土：黒色土と褐色土の混土。（２′：褐色土主体。微量の黒色土含む。　２″：黒色土主体。）　３：褐色土。　４：暗褐色土：住居の11層に同じ。

第161図　Ｈ－81号住居

カマド覆土
1：暗褐色土：５層土より白色土粒の混入が減少する。
2：暗褐色土：微小の白色土粒を多量に含む。
3：赤褐色土：焼土主体。（3′：漆黒土微量に混入）
4：暗褐色土：焼土少量含む。
5：暗黒褐色土：焼土と暗黒褐色土の混土。
6：暗黒褐色土：焼土若干含む。（6′：焼土ブロック少量含む）
カマド掘り方覆土
7：暗茶褐色土：As-BPを若干量含む。
8：黒色土：若干量の褐色土が混入する。
9：暗黒褐色土：暗黒褐色土と褐色土の混土中に焼土ブロックが微量に混入する。

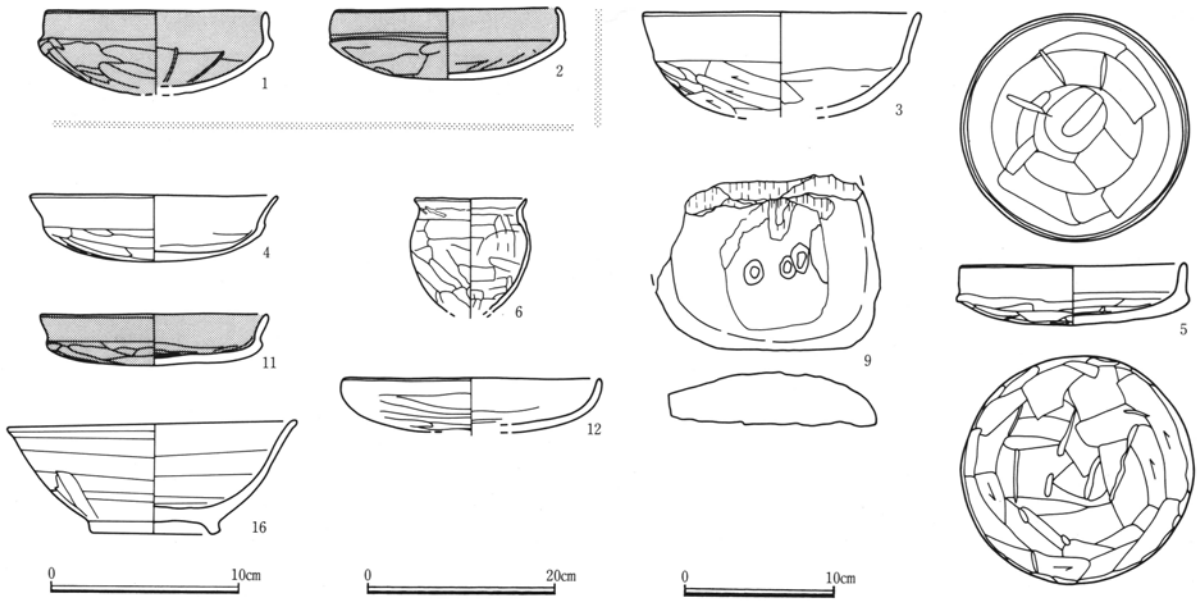


第162図　Ｈ―81号住居カマド及び掘り方

Ｈ－81号住居（古墳時代後期．第161～163図．図版30～31・76・95）

概要　本住居はＢ区中南部の平坦面、調査区の南端際に位置する、Ｂ区に於いては大規模のものに属する竪穴住居跡である。本住居には他の住居との切り合い関係は見られなかったのであるが、凡そ東に隣接するＨ－43号住居と西に隣接するＨ－18号住居は本住居の主軸方向に連なっており、またその軸方向も周囲の住居と異なって本住居に近く時期的にも近いものであるので、同じ土地使用の制約或いは規制下に造られた住居ではないかと推測される。

さて、本住居の確認された遺構の深度は一定の深さにあったものの、本住居付近には東西走行の現代の耕作溝（サク）が入っており、本住居もその北部と南部の一角が耕作溝によって壊されている。更にカマド手前部分や南東隅部には方形プランの土坑様



第163図　Ｈ―81号住居出土遺物

の撹乱が入って床面が若干削られているなど遺存状況は決して良好とは言い難い状態にあった。また、（面積的には小さいものではあったが）南西隅部は路線外に出ていて調査する事ができなかった。

本住居の出土遺物はさして多くなかったのであるが、このうち本住居に伴うと判断された遺物は僅かに７世紀中葉期の特徴を示す土師器坏２点（1,2）を見たのみであった。

一方覆土中からは、土師器坏や土師器甕片を中心にした遺物の出土を見ている。このうち土師器坏には６世紀前半期のと思われるもの（3）、７世紀前半期と思われるもの(4,5,11)、８世紀後半の所産と考えられるもの（12）などがあった。また９世紀前半期の所産のものらしい土師器小型甕（6）も見られた他、こも編み石（7,8,13～15）も出土している。そして、凹石（9)、磨石（10）など縄文時代の遺物の出土も見ているのである。

以上のように本住居に伴う遺物は少なかったので断定はできないのであるが、土師器坏（1,2）の時期である７世紀中葉を本住居の時期として当てたいと思う。また、覆土中の遺物から本住居は平安期頃まで窪地としてその痕跡を留め、遺物の投棄等が行われていたのではないかと思慮されるのである。

規模　長軸：672cm　短軸：630cm　深さ：57cm

カマド　幅：134cm　奥行き：162cm　　左袖　幅：26cm　長さ：44cm以上　高さ：27cm　　右袖　幅：29cm　長さ：25cm以上　高さ：26cm　　燃焼部　幅：37cm　長さ：54cm以上

柱穴１　径：42×28cm　深さ：75cm　　柱穴２　径：34×29cm　深さ：93cm　　柱穴３　径：39×34cm　深さ：64cm　　柱穴４　径：38×34cm　深さ：83cm　掘り方所在ピット　ピット１　径：70×66cm　深さ：13cm　ピット２　径：38×37cm　深さ：57cm

構造　本住居は方形のプランを呈するようである。

本住居は掘り方を有し、あまりきれいな形状ではなかったが、カマド前と北東隅部を除き幅100～120cm、深さ13cm以下の周溝状の浅い掘り込みを廻して中央を台地状に掘り残す形状を示している。掘り方には他にピット様の掘り込みが多く見られたが、中央の台地状の掘り残し部分には径210×122cm、深さ８cmの不整形なプランの土坑状の掘り込みが見られた。また西壁下の周溝状の掘り込み部分の底面には更に方形のプランで長さ204cm、幅130cm、深さ10cmを測る規模の掘り込みが掘削されていた。床面はこうした構造を持つ掘り方を暗黄褐色土・暗褐色土・黒色土等の土で埋め戻して造っているが、特に貼床

等の構造は施されていない。

カマドは手前側に土坑による撹乱がやや深く入って燃焼部及び左右袖を壊していることもあって、その遺存状況は決して良好ではなかった。こうした中で次の様な若干の所見を得ることができた。即ちカマドは東カマドで、東壁の中央、若干南寄りの位置に設置されていること。このカマドは掘り方を有しており、これを褐色土や黒色土等の土で埋め戻して燃焼面を造り出していること。袖は燃焼部の左右に設けられていることなどである。

床面に於いては幾つかのピットを確認することができたが、このうち主柱穴は柱穴１～４であり、他のピットは本住居に伴うか否か特定できなかった。この４基の柱穴はかなりしっかりした掘り方を有しており、断面観察から柱材の太さは径30cm程になるものと思われる。尚、貯蔵穴は床面に於いても掘り方に於いても特定することができず、周溝等の構造物も発見されなかった。

Ｈ－82号住居（古墳時代後期～平安時代．第164図．図版31・76）

概要　本住居はＢ区東部中央付近の後述の近世削平面に連なって形成されている平坦面に位置する、小型の竪穴住居跡である。

本住居は他の住居との切り合い関係は無く単独で遺存していたが、付近は良く削平されて、本住居も東壁北部と南東隅部の壁は滅失し、かろうじて床面が残されている程度の状態であった。更に南北走行の現代のサクが入って本住居を壊し、かまどの煙道部先端にも径27×20cm、深さ19cmを測る小ピットによって壊されていた。

このような遺構の遺存状況もあってか、出土遺物は極めて少なく、縄文土器片１点、土師器坏片２点、土師器甕片３点、須恵器甕片３点の僅か９点の土器片が出土しているに過ぎなかった。これらは何れも本住居には伴わないと判断されるもので、このうち第164図にこのうちの１点である８世紀前半の所産と考えられる土師器坏を図示することとした。

以上のように本住居に伴う遺物は確認されなかったため、本住居の時期を特定することはできなかったのであるが、カマドを伴うことから少なくも古墳時代後期から平安期の所産と言うことはできよう。尚、覆土中の遺物も少なく且つ遺構の削平・撹乱が進行しているので判断が難しいのではあるが、カマド部分から８世紀前半期のものと判断される土師器坏（1）が出土していることから、本住居は８世紀以降の所産である可能性があるのではないかと思われるのである。

規模　長軸：推定328cm　短軸：推定273cm　深さ：５cm

カマド　幅：88cm　奥行き：115cm　　左袖　幅：20cm　長さ：60cm　高さ：７cm　　右袖　幅：18cm　長さ：47cm　高さ：６cm　　燃焼部　径：40×32cm

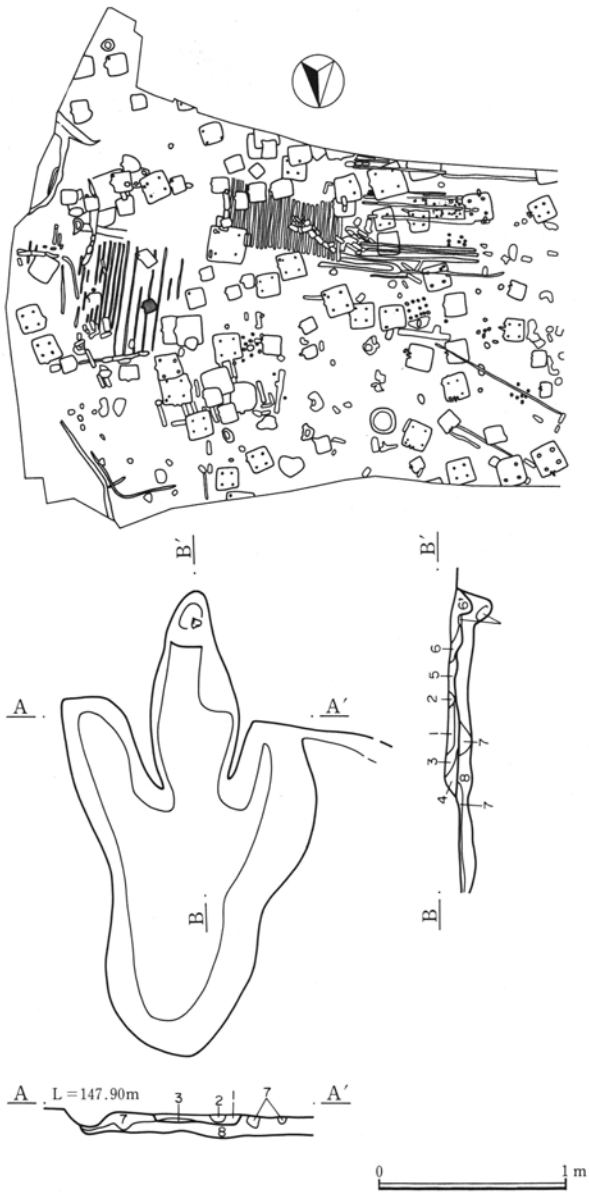
煙道　幅：40cm　長さ：36cm以上

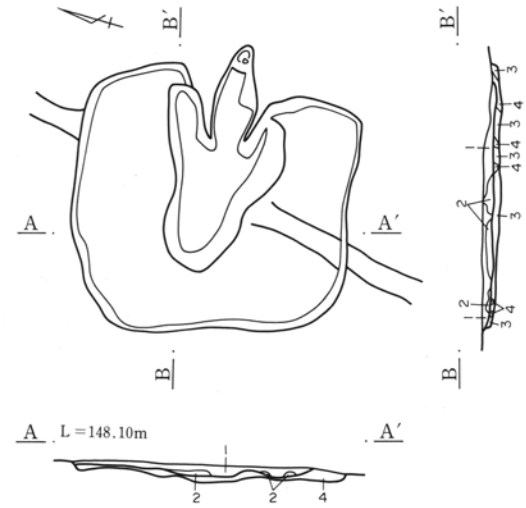
構造　繰り返しになるが本住居は削平或いは撹乱により構造全体を明らかにすることはできなかった。

本住居はやや北側に膨らむ隅丸方形のプランを呈しているが、東壁ラインは北半と南半で段差を持ち、後者がやや内側に入っている。

本住居は掘り方を有する。掘り方は東・南・北壁から伸びる掘り残し部を伴うが、全体としてはっきりした規格性等は認められなかった。また径22cm以下、深さ14～48cmを測る小ピットも見られたが、本住居に伴うか否かを特定することはできなかった。床面はこうした掘り方を暗黄褐色土や暗黒褐色土で埋め戻して造られているが、特に貼り床等の構造は施されていない。

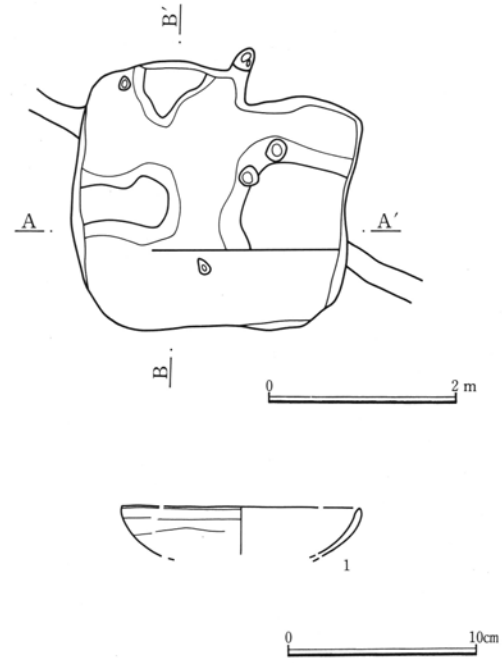
カマドは東カマドで東壁中央付近に造られている。カマド周囲は幅138cm、長さ180cmの範囲で２～７cmの深さに落ち込んでいたが、これは撹乱のためと考えられ、カマド構造に伴うものではないと思われる。さて、カマドは掘り方を有しており、これを暗黄褐色土や暗黒褐色土で埋め戻して燃焼面を造り出している。燃焼部は東壁ラインの内側に設けられて逆台形のプランを呈している。燃焼部の左右には袖





住居覆土
１：暗茶褐色土：暗黒褐色土中に褐色土・ロームブロック多量に入。
２：暗茶褐色土：暗黒褐色土と褐色土の混土。
住居掘り方覆土
３：暗黄褐色土：黒色土若干混入。　４：暗黒褐色土：淡褐色土ブロック少量含む。

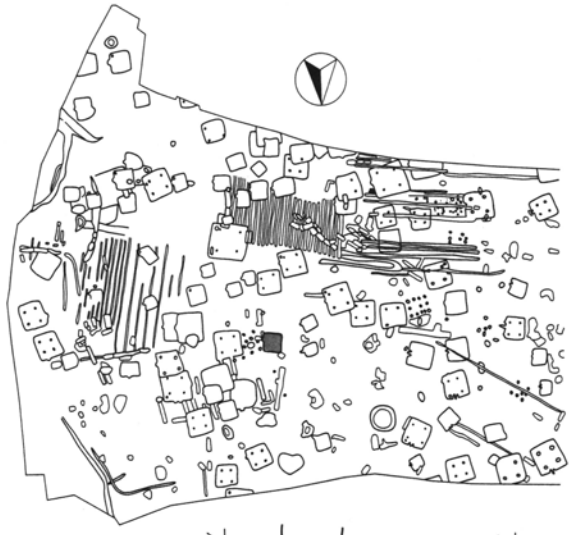
カマド覆土
１：暗赤褐色土粘質土：粒子の細かい灰含みの灰白色土ブロックと焼土ブロックを若干量含む。　２：黒色土：As-Aを含むサラサラした土（根の痕跡）　３：黒色土：焼土ブロック極く微量に含まれる。４：暗黒褐色土：くすんだ褐色土が微量に含まれる。　５：褐色土。６：褐色土：黒色土と褐色土の混土。（６′：黒色土の中に褐色土ブロックが微量混入する。）
カマド掘り方覆土
７：暗黒褐色土：焼土粒・白色土粒微量に混入。　８：暗黄褐色土。

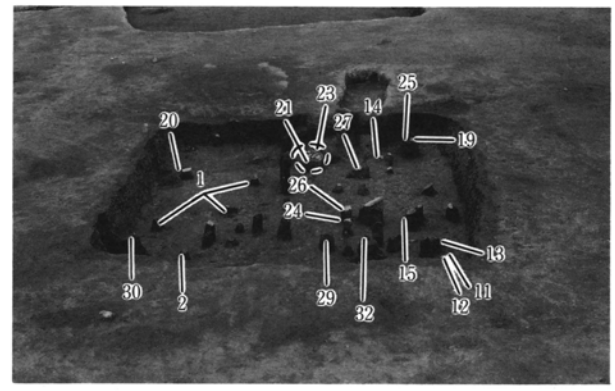


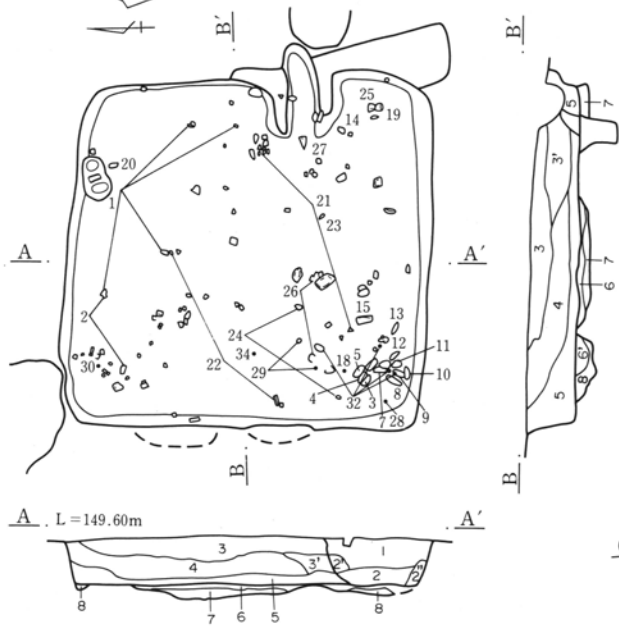
第164図　Ｈ―82号住居及び出土遺物

が設けられているものの、基底部が確認されたに過ぎなかったのでその構造ははっきりはしないが、袖材は使用していないようであり、暗黒褐色土で袖の基底部を造り出している。また、煙道部が燃焼面から段差を持たずに緩やかに昇りながら続いている。

床面はサクや、住居中央及び中東部を占める上述のカマド周辺の窪地等によって削られる部分も少なくなく、充分な観察は行い得なかったのであるが、床面に於いては柱穴・貯蔵穴・周溝等の構造物を一切確認することはできなかった。また、掘り方面に於いてもこれらを示唆するような掘り込み当を認めることは出来なかった。

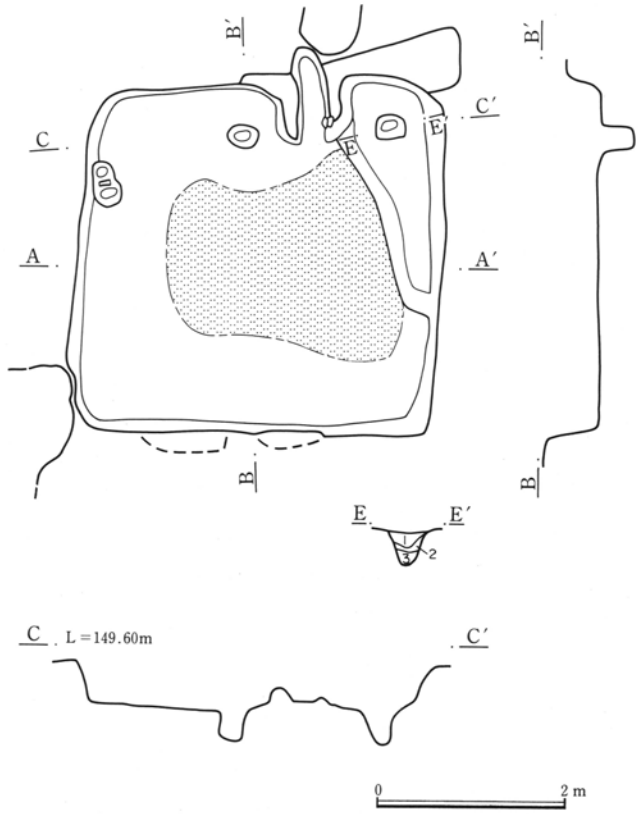






攪乱
1：褐色土主体。　2・2′・2″：暗褐色土主体。
住居覆土
3：褐色土：ロームやや多い。(3′：ロームやや少ない。)　4：暗褐色土：ロームやや多い。5：褐色土主体。
貼り床
6：暗黄褐色土：汚れたローム・明るいローム・褐色土やや多く含む。固くしっかり締まる。(6′：やや締まり弱い)
掘り方覆土
7：暗黄褐色土：ローム主体。褐色土僅かに含む。ややよく締まる。
8：黄褐色土：7層よりも明るいローム主体。やや締まり悪い。

貯蔵穴覆土
1：灰褐色土主体。　2：灰褐色土：ローム多量に含む。　3：灰褐色土：ロームやや多く含む。



第165図　Ｈ－83号住居

Ｈ－83号住居（古墳時代後期．第165～167図．図版31・76～77・95）

概要　本住居はＢ区中央部の平坦面に位置するＢ区に於いては小型若しくは中型に属する竪穴住居跡である。

他の住居との切り合い関係は無いが、幾つかの土坑等によって切られている。しかし乍ら遺存状況は比較的良好であった。

住居規模に比して出土遺物は比較的多く、その内本住居に伴うと判断されるものには何れも６世紀後半期の特徴を示す土師器甕（1,2）があり、この他にこも編み石（4～15）南西コー

ナー付近を中心にまとまって出土してきている。

一方覆土中からは古墳時代後期～奈良・平安時代にかけての時期の土師器甕片を中心とした遺物の出土が見られ、この中には縄文土器片（16,17）や敲石（18）・磨石（19）、打製石斧（20）といった縄文時代の遺物や６世紀前半から７世紀中葉にかけての土師器坏（23、24、21,22、28,29）や土師器高坏（32）、小型甕（25）があり、また９世紀後半かとも思われる土師器小型甕（31）も見られた。この他、土師器の台付甕（26）や脚付甕（33）、手捏ね土器（27）、こも編み石（34）や締金具らしい鉄製品（35）の出土も見られた。

以上のように本住居に伴う、時期を示し得るような出土遺物は少なかったのであるが、概ねその時期である６世紀後半を本住居の時期としたい。また覆土中の遺物の状況から本住居は廃絶後早い段階（７世紀前半期）には埋没が始まって窪地となっており、少なくも平安期頃まではその状況が継続していたことが窺われるのである。

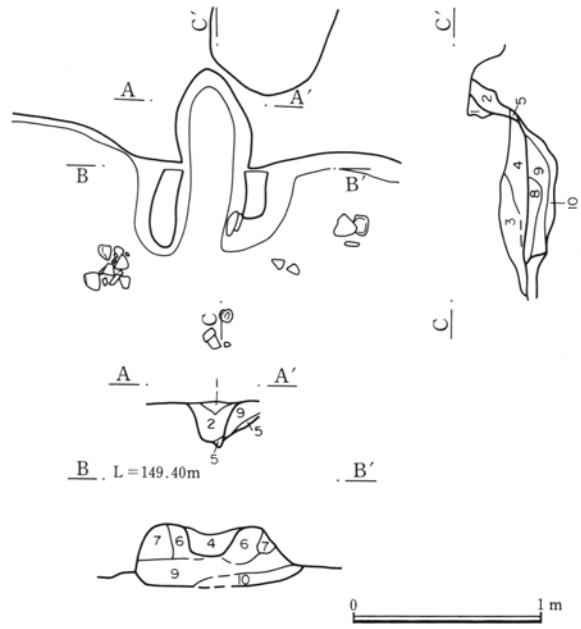
規模　長軸：390cm　短軸：383cm　深さ：56cm

カマド　幅：85cm　奥行き：97cm　　左袖　幅：28cm　長さ：49cm　高さ：17cm　　右袖　幅：34cm　長さ：45cm　高さ：18cm　　燃焼部　径：21×88cm　深さ：０cm　　カマド掘り方　径：61×88cm　深さ：８cm

貯蔵穴　径：33×27cm　深さ：37cm

構造　本住居は、南西及び北西コーナーがやや直角に近い形状を示すが、全体としては隅丸方形のプランを呈している。

本住居は掘り方を有しているが、長軸が1.5m程、深さ10cm程を測る大型の土坑様の掘り込みが、掘り方の東壁寄りに１カ所、中央部に２カ所、西南コーナー付近１カ所見られる。この他にも幾つかのピット或いは土坑様の掘り込みが見られたが、本住居に伴なうものかどうかは特定できなかった。こうした構造を持つ掘り方をロームを主体とする土で埋め戻し、その上に異なる色調を有するロームと褐色土を締め固めた貼り床を施して床面としている。

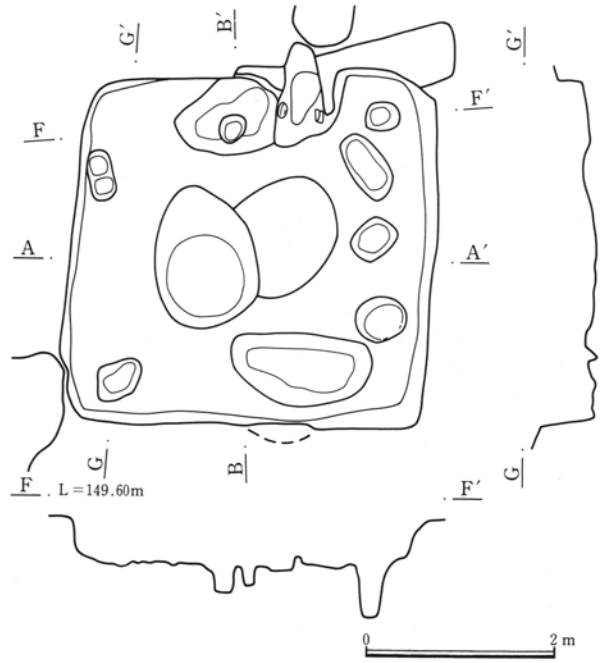


カマド覆土

1：暗黄褐色土主体。ローム・焼土粒極く僅かに含む。よく締まる。　2：暗褐色土：僅かに赤味帯び、ローム・焼土粒僅かに含む。よく締まる。　3：暗黄褐色土：汚れたローム粒主体。焼土僅かに含む。よく締まる。　4：暗赤褐色土：汚れたローム粒と焼土粒を２：１の比率で軽く混ぜた土。やや締まり悪い。　5：黄褐色粘質土：やや灰色掛かる。極く僅かの焼土粒混入。よく締まる。

カマド掘り方覆土

6：赤褐色土：焼土粒・ブロック主体。ローム・黒色土ブロック極く僅かに含む。やや締まり悪い。　7：暗赤褐色土：黒褐色土粒の中に焼土粒・ブロックを多量に含む。やや締まり悪い。　8：薄い黄褐色土：色調薄い細かいローム粒を主体とする。締まりやや良い。　9：暗褐色土：黒味強い。黒褐色土を主体とし、ローム粒やや多く含む。　10：暗褐色土：黒味強い。黒褐色土主体としローム粒・軟らかいローム粒を多量に含む。締まりやや良い。



第166図　Ｈ―83号住居カマド及び掘り方